

るが、不明瞭、12～14は土師器椀で、内面に黒色処理を施す。15は土師器皿、16・17・21は須恵器甕、18は灰釉陶器壺、19・20は土師器甕、22～24は石製品で、22は金床石、23は磨石、24は砥石、25は平瓦、26～28は鉄釘である。

土層 カマド:1、暗褐色土中に若干粘土粒混じる 2、焼土 3、焼土・灰 4、暗褐色土・ロームブロック 5、暗褐色土中に若干ロームブロック混じる 6、粘土

SI-150 (Fig.219、PL.55・121・168・184)附章参照

遺構 SI-150はGW09に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は9.1m²。カマドは北壁中央に位置する。支柱穴・周溝は不明である。

出土遺物 1～7は土師器杯で、1は体部外面に墨書文字が正位で横書きされる。「莊一」であろうか。8・9は土師器皿、10は灰釉陶器椀である。

SI-151 (Fig.220～222、PL.56・121・169・183・191・215・232)附章参照

遺構 SI-151はGW30に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は15.9m²。カマドは北壁中央に位置する。支柱穴は規則的に配されているとみられる。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1～5は土師器杯で、1は底部内外面に線刻「×」が認められる。2は底部内外面に線刻が認められ、内面は「×」、外面は「×」とみられるが、交差していない。3は体部外面に墨書が認められるが判読できない。6は土師器大型杯もしくは椀、7は土師器椀で内面に黒色処理を施す。8は土師器皿、9は土師器甕、10は灰釉陶器小壺、11は灰釉陶器椀、12は行基造りの丸瓦、13～15は鉄製品で、13は鎌、14は棒状不明品。15は不明品で、鑿のように棒状を呈するが、薄い造りで、端部は片方が刃部を持ち、もう一方は扁平な輪を描いて折り返されている。

SI-152 a (Fig.223・224、PL.56・122・169)・b (Fig.223～226、PL.56・122・169・184・215)・c (Fig.223・227、PL.56・122・169・184)・d (Fig.223・227、PL.56・122・169・184・232)

遺構 SI-152aはGX22に位置する。北側でSI-152b・SI-152cと重複する。平面形は3.60m×4.25mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(15.0)m²、遺構確認面から床面までは0.37mを測る。主軸方位は不明。カマドは認められない。貯蔵穴とみられるPitが南西部隅に位置する。支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は17cm、P2は25cmを測る。周溝は北側壁で途切れるが、遺構重複範囲を除いて回っている。

出土遺物 1・2は土師器杯、3は土師器甕、4は須恵器蓋、5は須恵器杯、6は須恵器甕である。

遺構 SI-152bはGX22に位置する。南側でSI-152aと、東側でSI-152cと重複する。平面形は3.11m×(2.98)mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(8.9)m²、遺構確認面から床面までは0.33mを測る。主軸方位はN-5.0°-W。カマドは認められない。貯蔵穴とみられるPitが南西部隅と北西部隅に認められるが、どちらかの判断はできない。支柱穴は認められない。Pitの深さは、不明。周溝は重複範囲を除いて回っている。

出土遺物 1は土師器高台付杯で、底部外面に墨書が認められるが、判読できない。2～7は土師器杯、8は土師器皿、9は須恵器杯、10は土師器甕、11は須恵器甕、12は行基造りの丸瓦である。

遺構 SI-152cはGX22に位置する。西側でSI-152bと、南側でSI-152dと重複する。平面形は3.39m

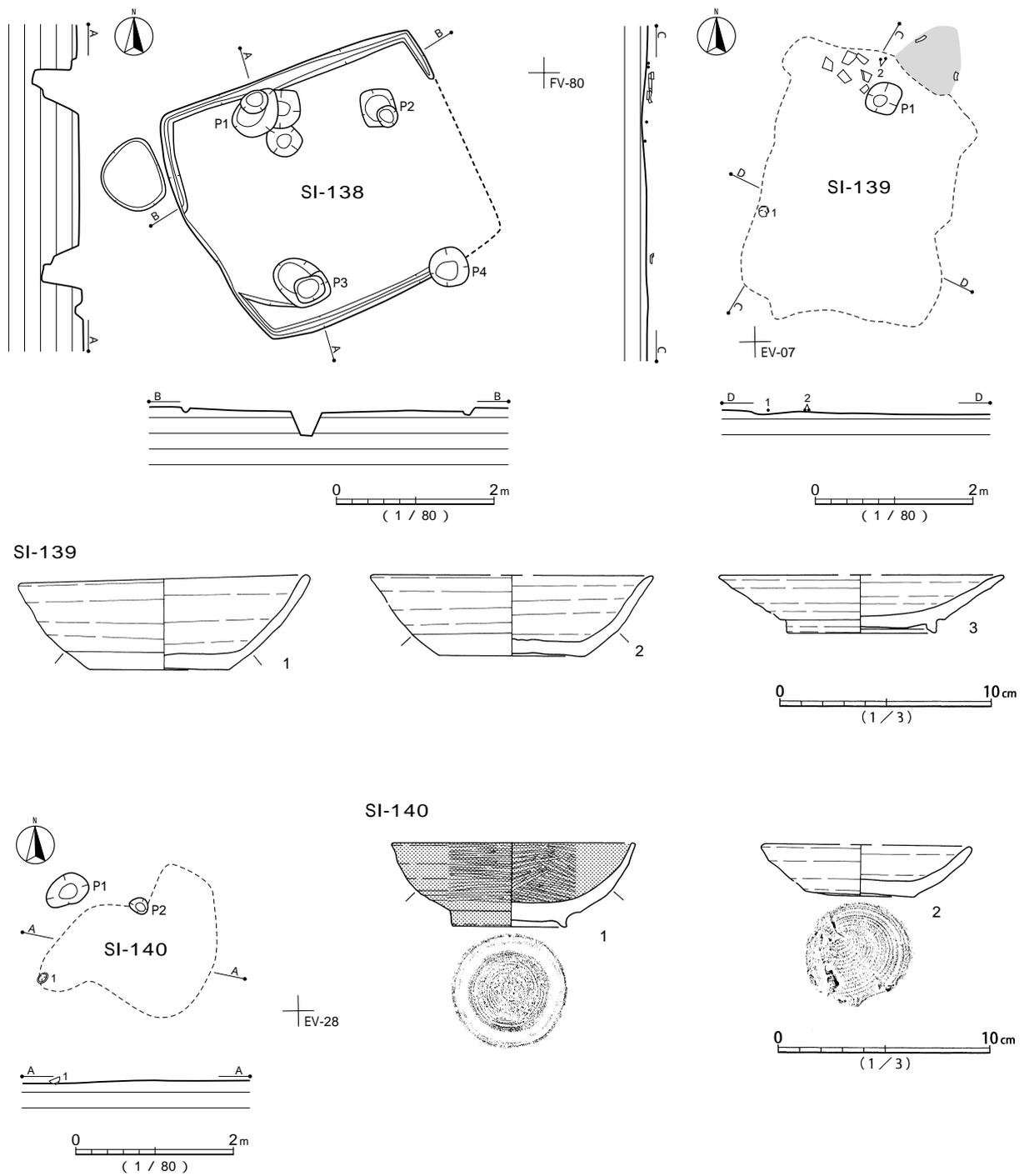


Fig.206 SI-138 ~ 140遺構・出土遺物実測図

×3.25mの方形を呈する。遺構確認面における面積は10.8m²、遺構確認面から床面までは0.43mを測る。主軸方位はN-30.0°-W。カマドは北壁やや北西隅に寄って位置する。煙道部は幅36cm、長さ58cmを測り、先端に向けて水平に伸びる。燃烧部は壁ラインより内側に位置し、掘り込みは無いが、極めて浅いとみられる。燃烧部内に瓦が認められるが、元位置ではないとみられる。貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は38cmを測る。周溝はカマド直下を除いて全周する。

出土遺物 1は土師器皿で、底部から体部の外面に墨書「畔院」が縦書きで認められる。2~5は土師器杯で、2は体部外面に墨書が認められるが、判読できない。6は土師器椀で内面に黒色処理を施す。7は須恵器甕、8は土師器甕、9は須恵器壺、10は灰釉陶器皿である。

土層 カマド:1、暗褐色土中に若干焼土・ロームブロック混じる 2、粘土中に暗褐色土・若干焼土含む 3、粘土

遺構 SI-152dはGX22に位置する。北側でSI-152cと重複する。平面形は3.18m×3.11mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.2)m²、遺構確認面から床面までは0.35mを測る。主軸方位は不明。カマド・貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は19cm、P2は不明である。周溝は伴わない。

出土遺物 1・3・4は土師器皿で、1は体部外面に墨書が逆さに認められるが、判読できない。3は片口状を呈する。2は土師器杯、5は須恵器甕、6・7は灰釉陶器平瓶、8は灰釉陶器の瓶類、9は須恵器甕の転用硯、10・11は鉄製品で、10は刀子、11は釘である。

SI-153 a(Fig.228、PL.122・169)・b(Fig.228、PL.57・122・123・169・232)附章参照

遺構 SI-153aはGX41に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。西側でSI-153bと重複する。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は8.3m²。カマドは北壁中央に位置する。支柱穴は認められない。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1・2は土師器皿である。

遺構 SI-153bはGX41に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。東側でSI-153aと重複する。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は9.9m²。カマド・支柱穴・周溝は認められない。

出土遺物 1・2は土師器杯、3・4は土師器甕、5・6は鉄製品で、5は曲刃鎌、6は釘である。

SI-154 (Fig.229、PL.57・123・169)附章参照

遺構 SI-154はGX73に位置する。遺構図はカマド図(Fig.620 PL.57・123・169)以外無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は9.7m²。カマドは北東壁に位置する。煙道部は幅120cm、長さ160cmを測り、先端に向けて水平に伸び、先端部でPit状の掘り込みを伴う。燃烧部は図化されていないが、壁ラインに一部かかって内側に位置し、掘り込みを伴うとみられる。燃烧部内に磚が認められ、出土位置から支脚として使われた可能性がある。支柱穴・周溝は認められない。

出土遺物 1は土師器杯、2は土師器皿、3・4は土師器台付甕、5~10は須恵器杯で、5・10は永田・不入編年期、6~9は永田・不入編年期、11は須恵器甕である。

SI-155 (Fig.230・231、PL.57・123・169・232)

遺構 SI-155はGX43に位置する。遺構の重複は無い。平面形は3.52m×3.64mの方形を呈する。遺構

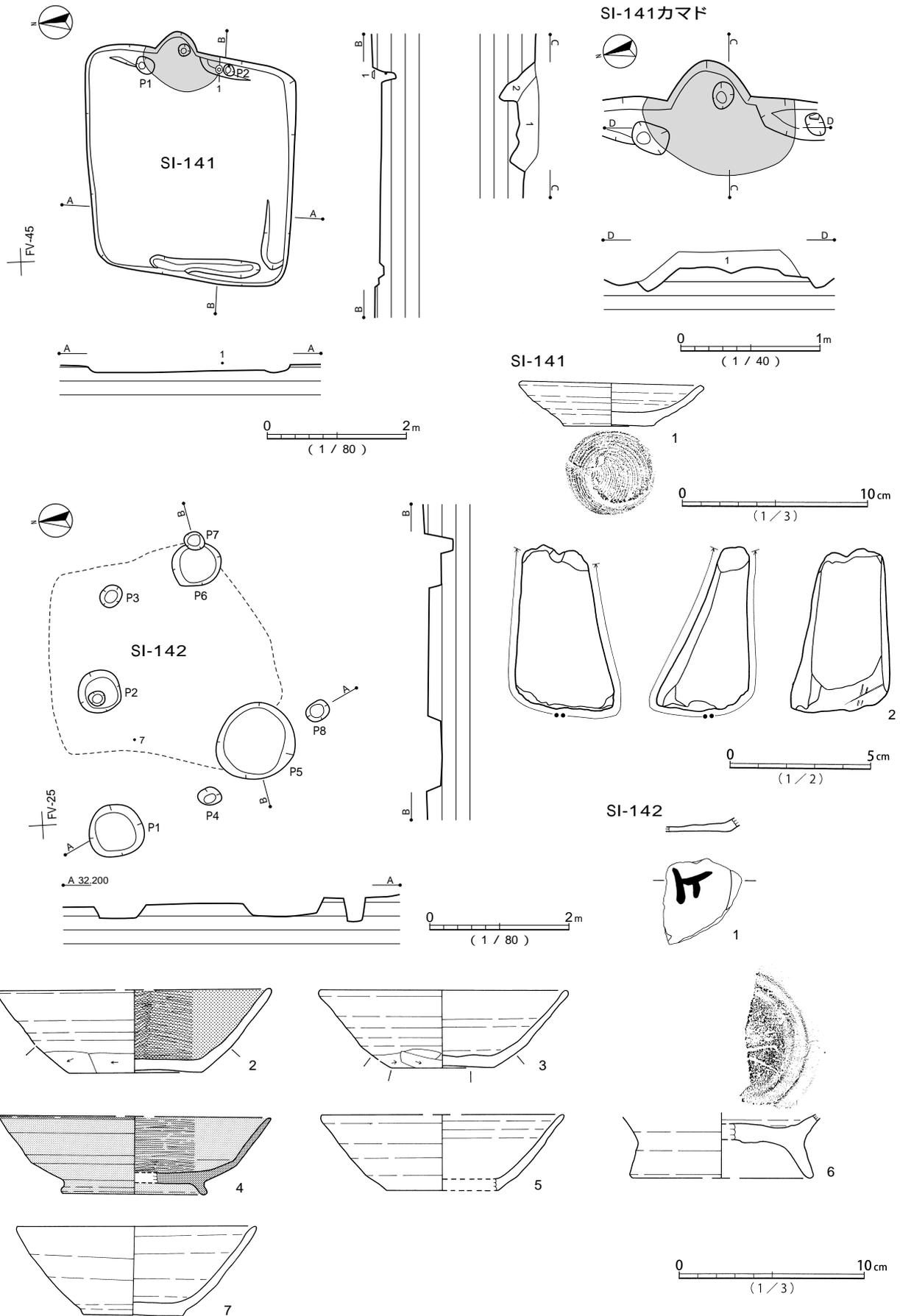
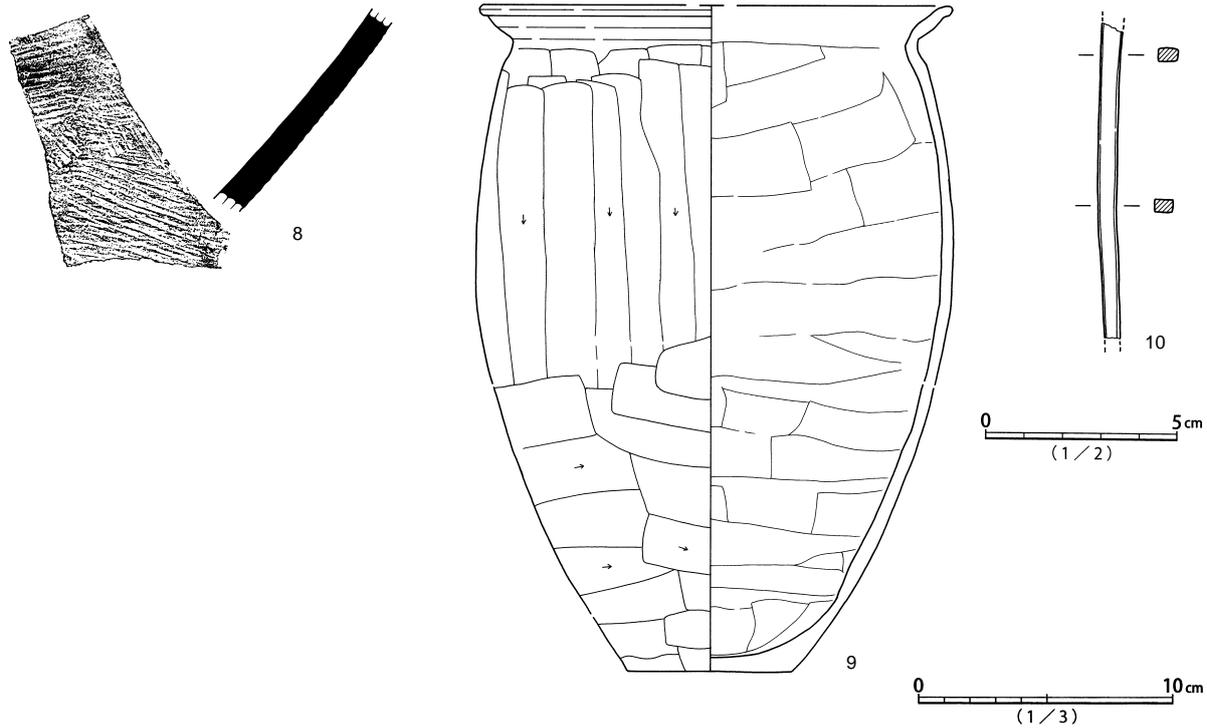


Fig.207 SI-141・142遺構・出土遺物実測図



SI-143

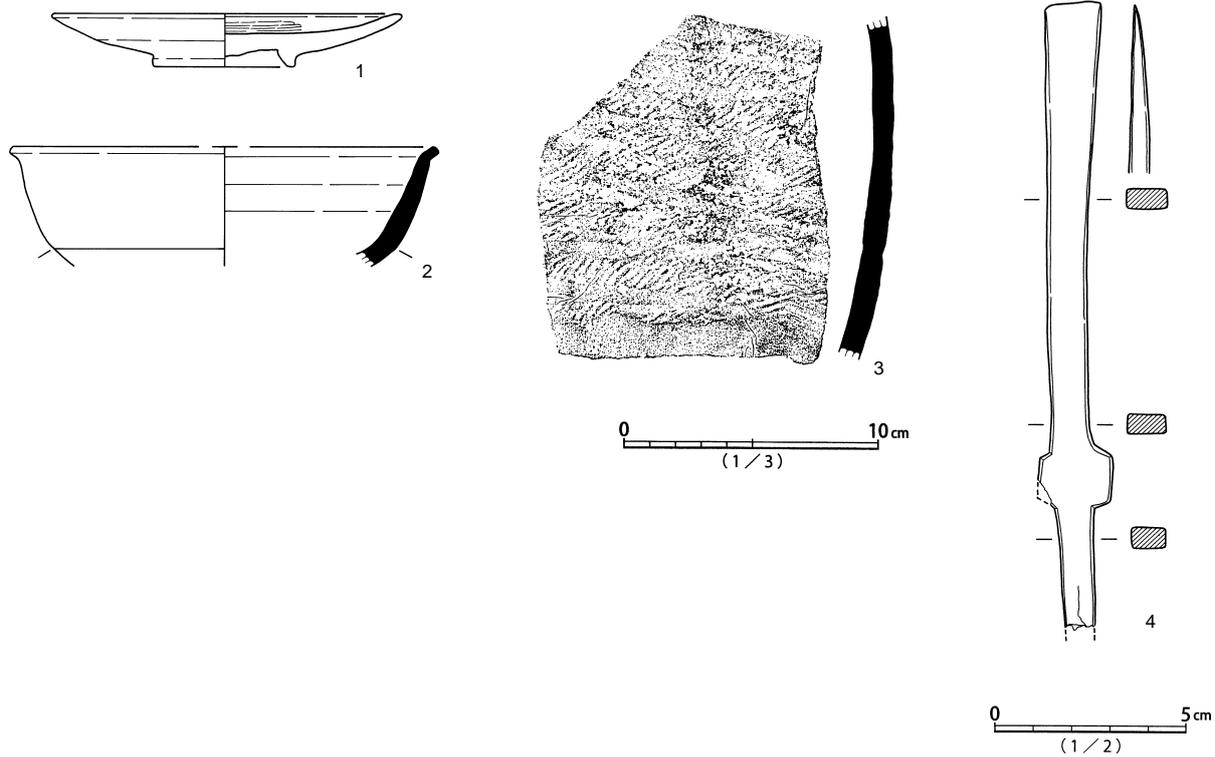


Fig.208 SI-142・143出土遺物実測図

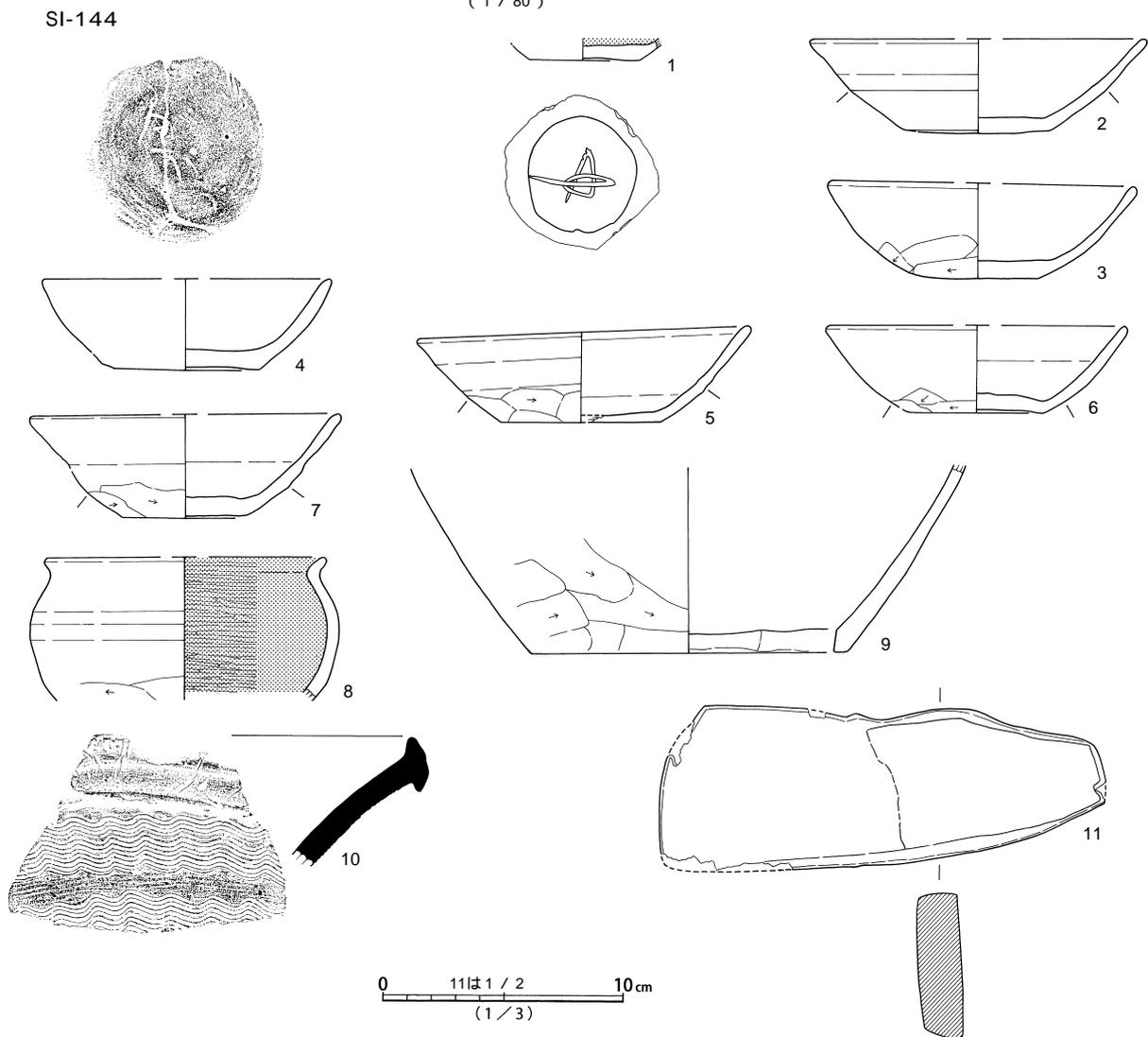
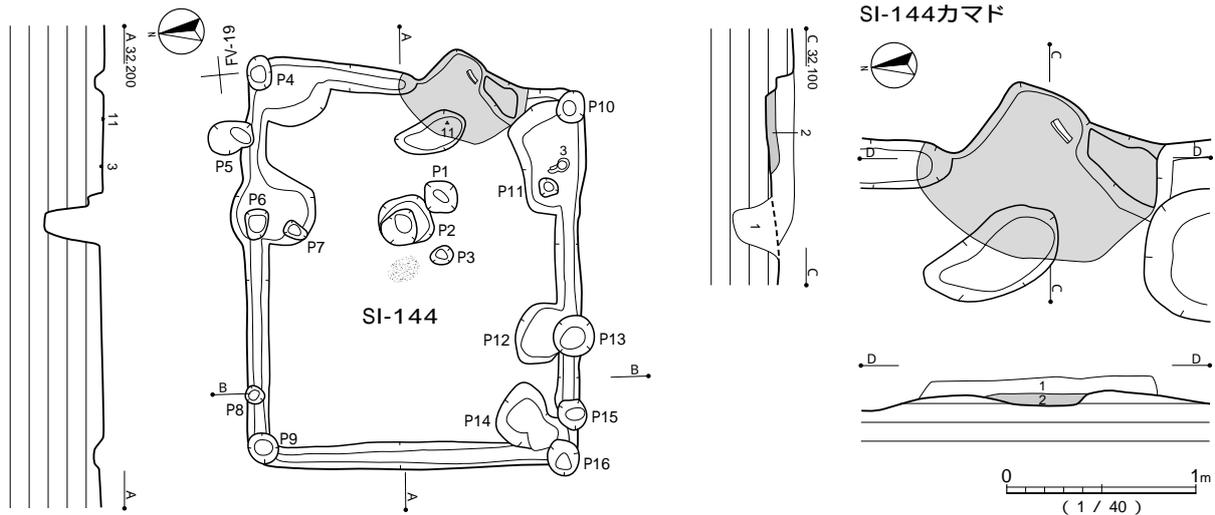


Fig.209 SI-144遺構・出土遺物実測図

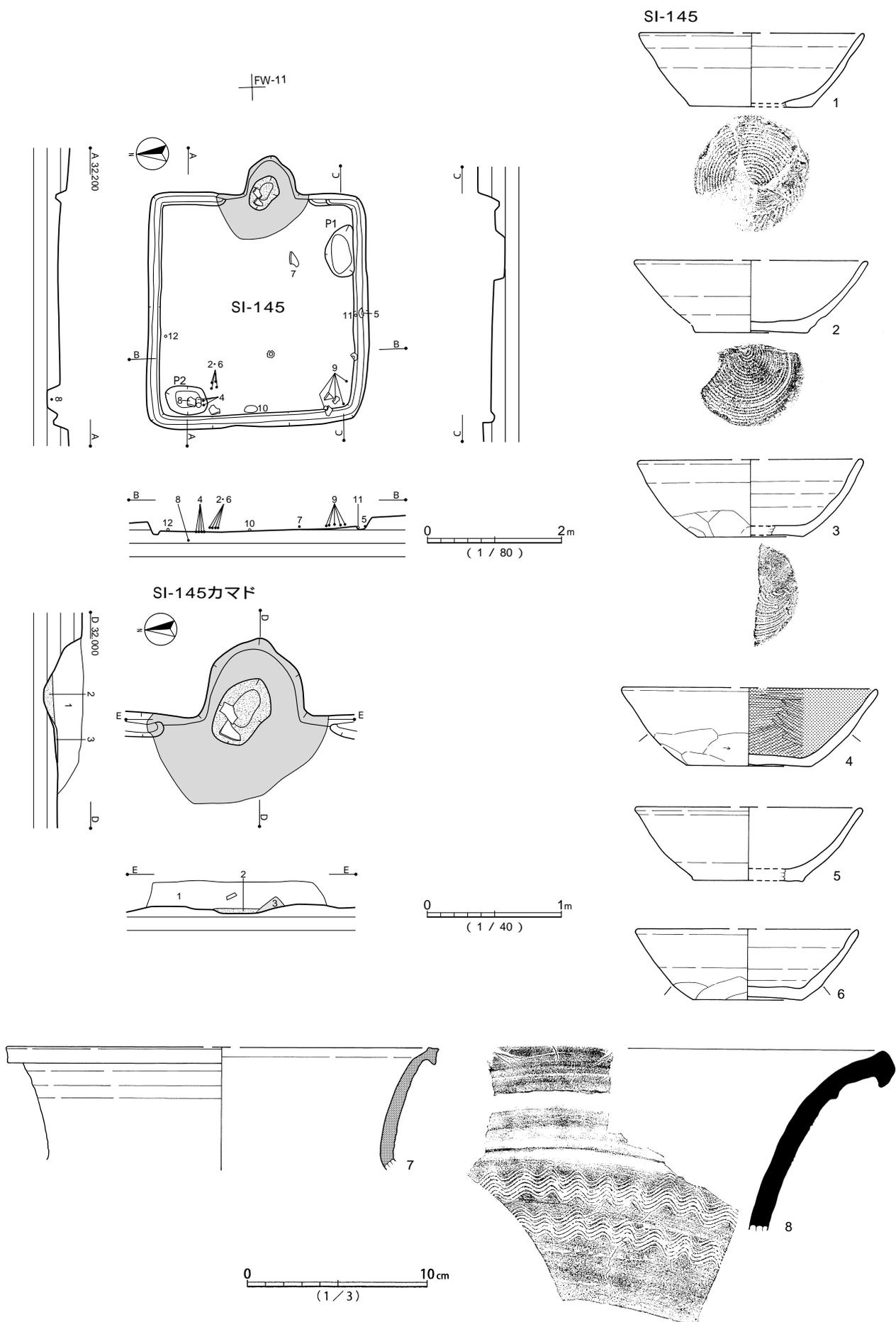


Fig.210 SI-145遺構・出土遺物実測図

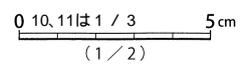
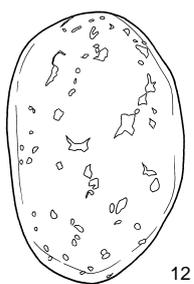
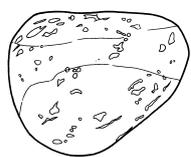
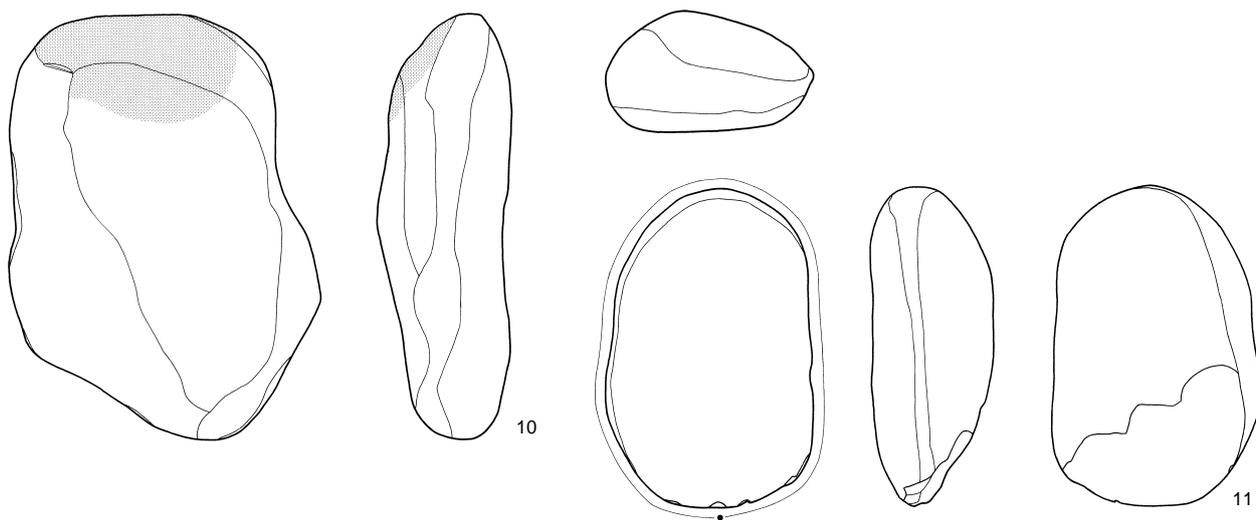
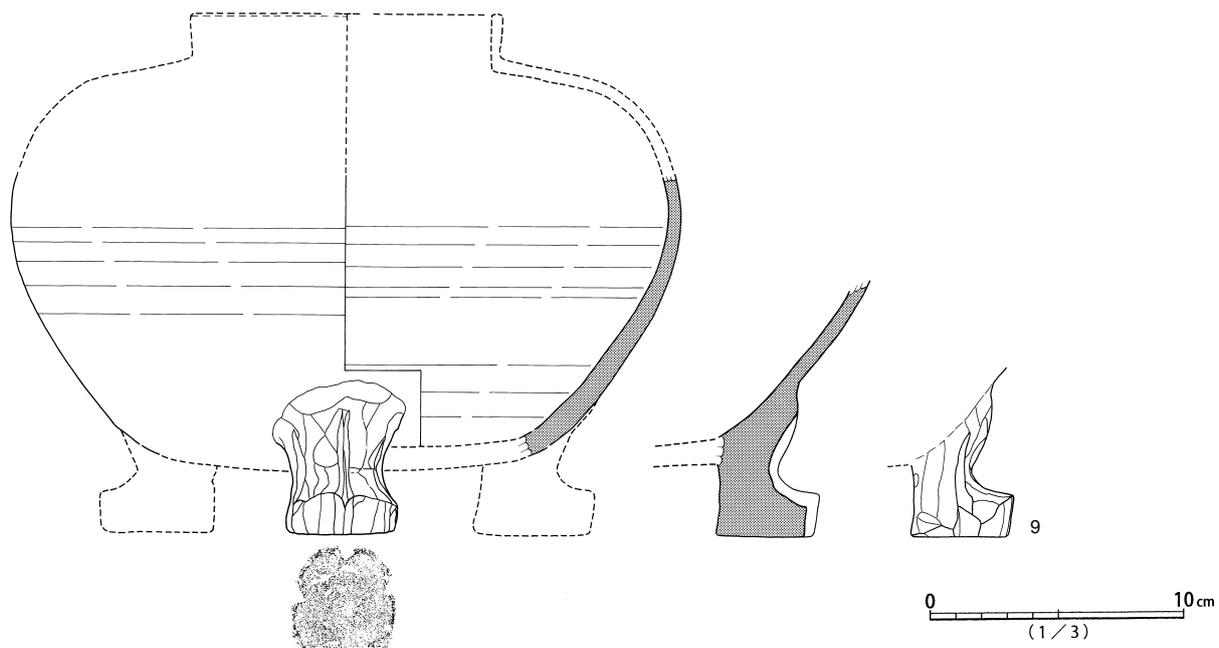


Fig.211 SI-145出土遺物実測図

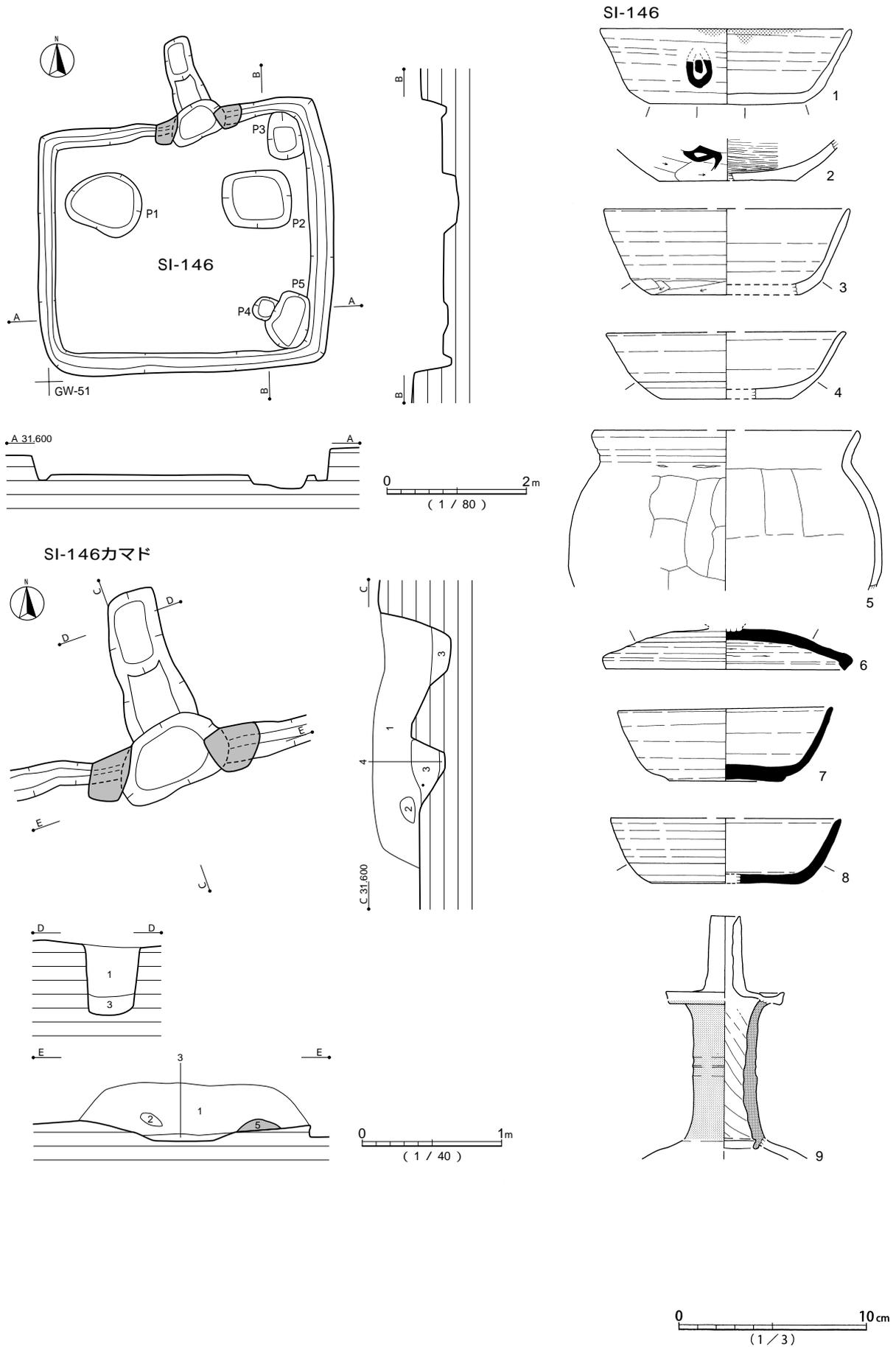


Fig.212 SI-146遺構・出土遺物実測図

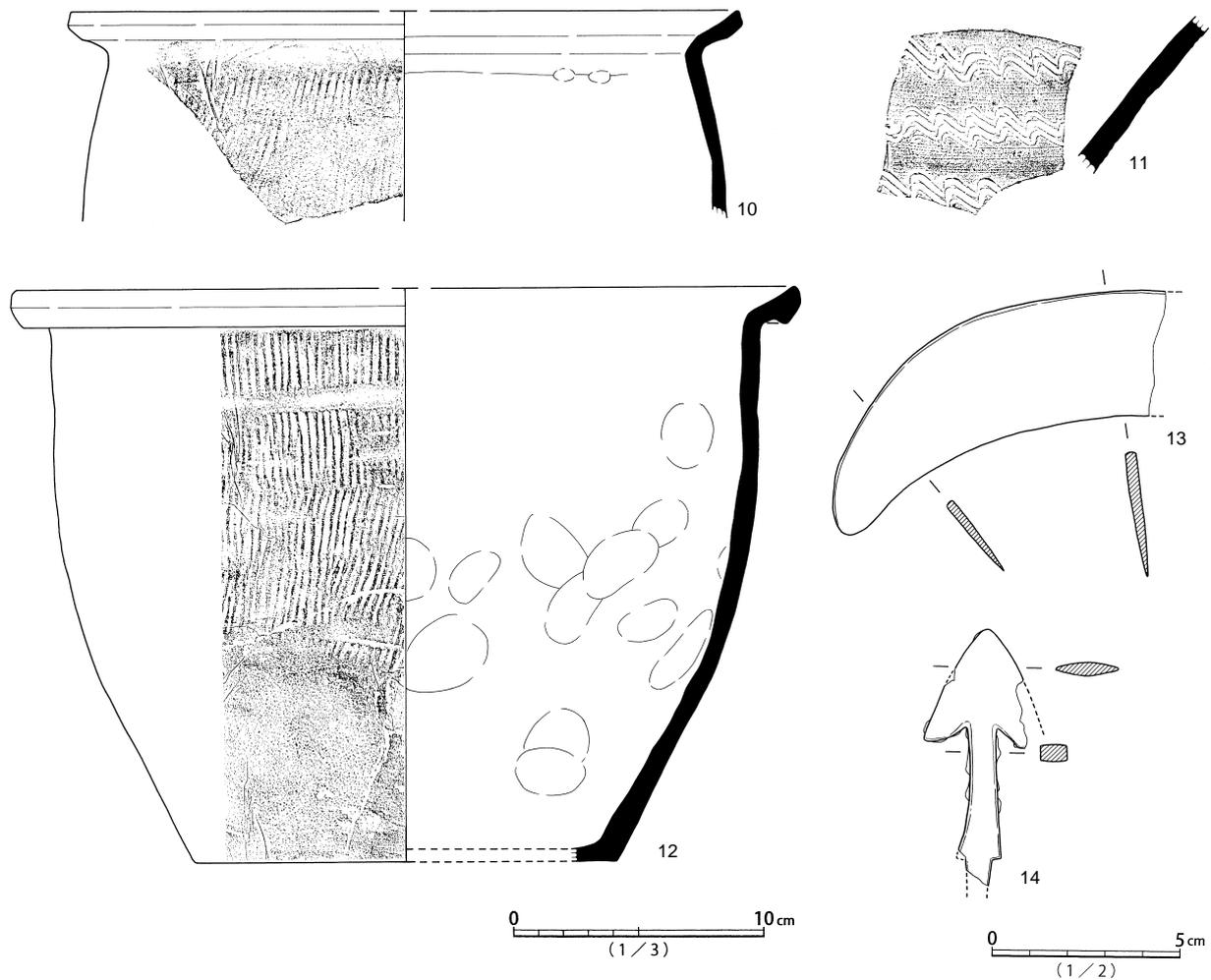


Fig.213 SI-146出土遺物実測図

確認面における面積は不明、遺構確認面から床面までは40cm～54cmを測る。主軸方位はN-21.0°-W。カマドは北西壁に位置し、煙道部は幅52cm、長さ148cmを測り、先端に向けて下方に傾斜する。周溝はカマド直下から東隅にかけての範囲を除いて回っている。その他の施設は認められない。

出土遺物 1～4は土師器杯、5～9は土師器甕、10は須恵器甕の転用硯、11～15は鉄釘である。

土層 カマド:1、暗褐色土中に若干焼土粒・ローム粒混じる 2、粘土中に焼土・暗褐色土混じる 3、焼土 4、ロームブロック・暗褐色土 5、粘土 6、暗褐色土・焼土・炭化物

SI-156 (Fig.232、PL.58・123・124・169・170・226・232)附章参照

遺構 SI-156はGX03に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は3.35m×3.10mの方形を呈する。遺構確認面から床面までは0.39mを測る。カマドは北壁中央に位置する。主柱穴は不規則な位置に配されているとみられる。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1～8は土師器杯、9は土師器皿、10は土師器甕、11は須恵器壺、12は須恵器甕、13は灰釉陶器椀、14は灰釉陶器皿、15は越州青磁椀で -1類、16は灰釉陶器大型椀、17は緑泥片岩片、18は鉄製刀子である。

SI-157 (Fig.232・233、PL.58・124・170・232)附章参照

遺構 SI-157はFW19に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は6.8m²。カマドは北壁中央に位置する。支柱穴は不規則な位置に配されているとみられる。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1～4は土師器杯、5～7は須恵器甕で、7は転用硯、8・9は鉄釘である。

SI-158 (Fig.233、PL.58・124・170・215)附章参照

遺構 SI-158はFX16に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は6.2m²。カマドは北壁中央に位置する。支柱穴は不規則な位置に配されているとみられる。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1～3は土師器杯、4は土師器甕、5は平瓦である。

SI-159 a (Fig.234～237、PL.58・59・124・125・170・184・191・215・232)・b (Fig.234・235・238～241、PL.58・59・125・170・184・191・216・226・232)

遺構 SI-159aはGV64に位置する。南西側でSI-159bと重複し、東側でSI-160bに近接する。平面形は3.40m×3.54mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(12.4)m²、遺構確認面から床面までは20cm～29cmを測る。主軸方位はN-6.0°-E。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅78cm、長さ176cmを測り、先端に向けて下方に傾斜する。燃烧部は図化されていないが、壁ラインよりも内側に位置するとみられる。掘り込みを伴い、内壁には瓦を立てた状態で設置している。また、奥壁付近でも瓦が出土しており、壁材として使われた可能性がある。貯蔵穴とみられるPitが北東隅に認められる。支柱穴は認められない。周溝はカマドのある北壁と遺構重複範囲で認められない。

出土遺物 1～11・13～19は土師器杯で、1は体部外面に線刻「万」が正位で認められ、11は体部外面に墨書「春カ」が正位で認められ、内面に黒色処理が施されている。13は底部内面に墨書「南」が認められる。15・19は内面に黒色処理を施している。12は灰釉陶器皿で、底部外面に墨書「大カ屋カ」が縦書きで認められる。20は土師器足高高台付杯、21・22は土師器小形甕、23は土師器甕、24は土師器甌で、底面は円形に抜けており、体部下位に2対で穿たれた孔に棒状のものを差し込んで、別作りの底の支えにしたとみられる。25・26は須恵器甕、27は灰釉陶器皿の転用硯、28・29は原始灰釉壺、30は平瓦、31～37は鉄製品で、31は曲刃鎌で、柄に固定するための折り返し、通常とは逆になっている。32～34は刀子、35は鍵、36は不明製品で、端部が環状を呈する。37は板状不明品で鋳造品とみられる。

土層 カマド:1、焼土中に粘土若干含む 2、ロームブロック・暗褐色土 3、粘土 4、暗褐色土 5、若干炭素粒含む

遺構 SI-159bはGV64に位置する。北東側でSI-159aと重複する。平面形は4.80m×3.86mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(17.8)m²、遺構確認面から床面までは20cmを測る。主軸方位はN-9.4°-E。カマドは北壁中央に位置し、明確な煙道は認められないが、幅78cm、長さ30cm程壁を外側に掘り広げている。燃烧部は図化されていないが、壁ラインに一部かかって位置するものとみられる。掘り込みを伴い、焚口・奥壁には瓦を立てて設置している。貯蔵穴とみられるPitは北西隅にみとめられる。支柱穴は竪穴からやや東に偏って規則的に位置する。周溝はカマド直下と重複範囲以外

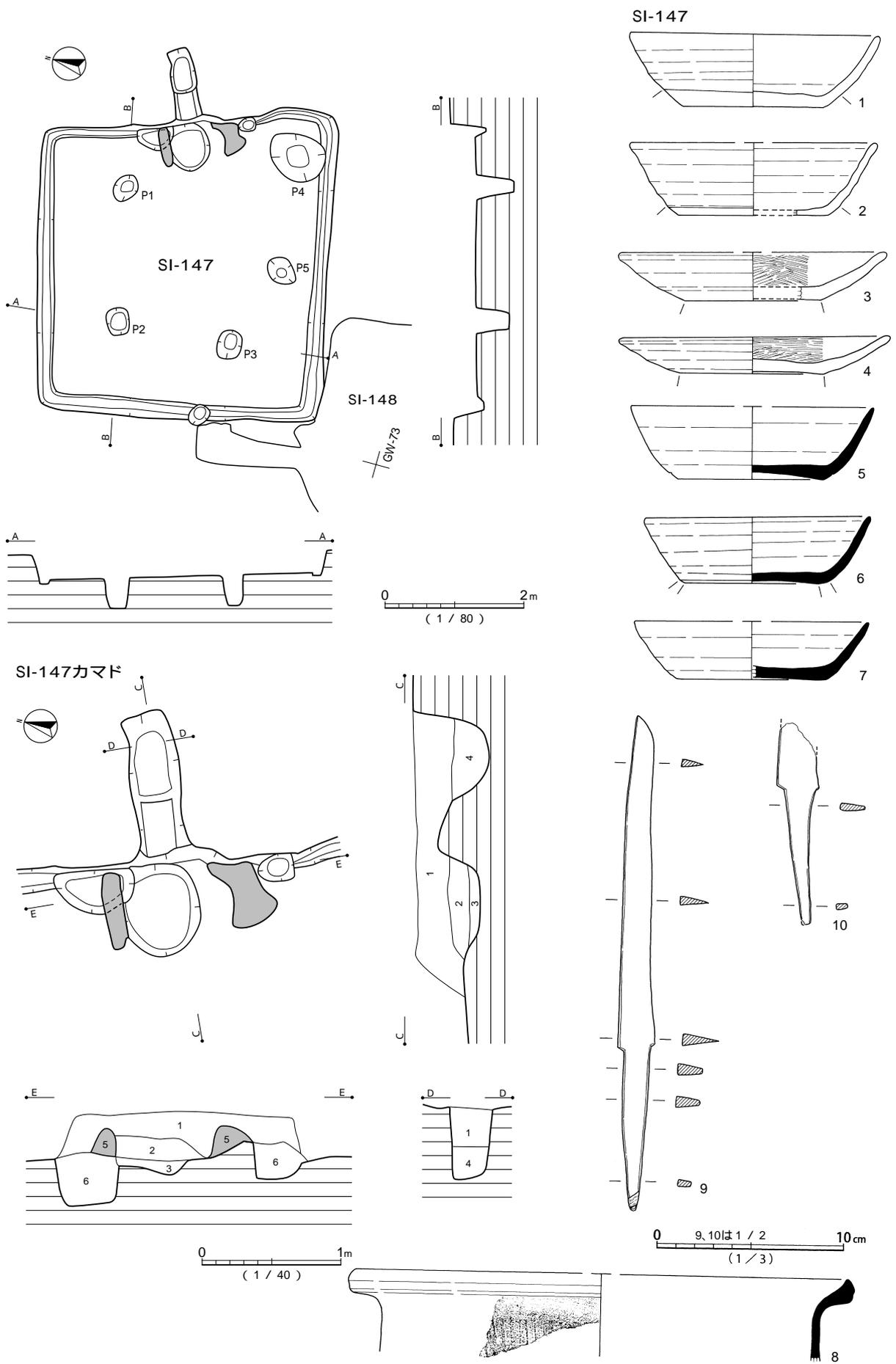


Fig.214 SI-147遺構・出土遺物実測図

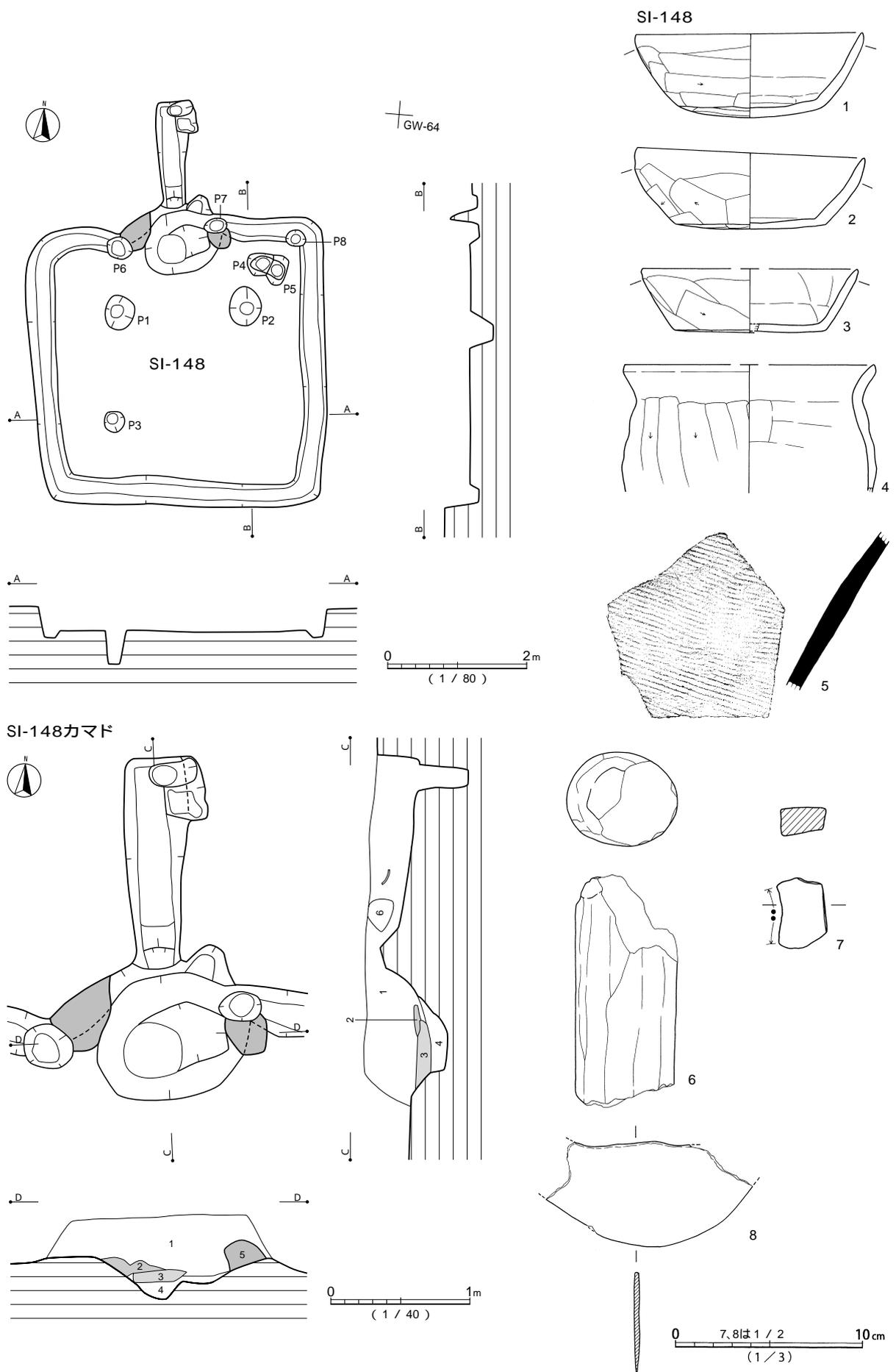


Fig.215 SI-148遺構・出土遺物実測図

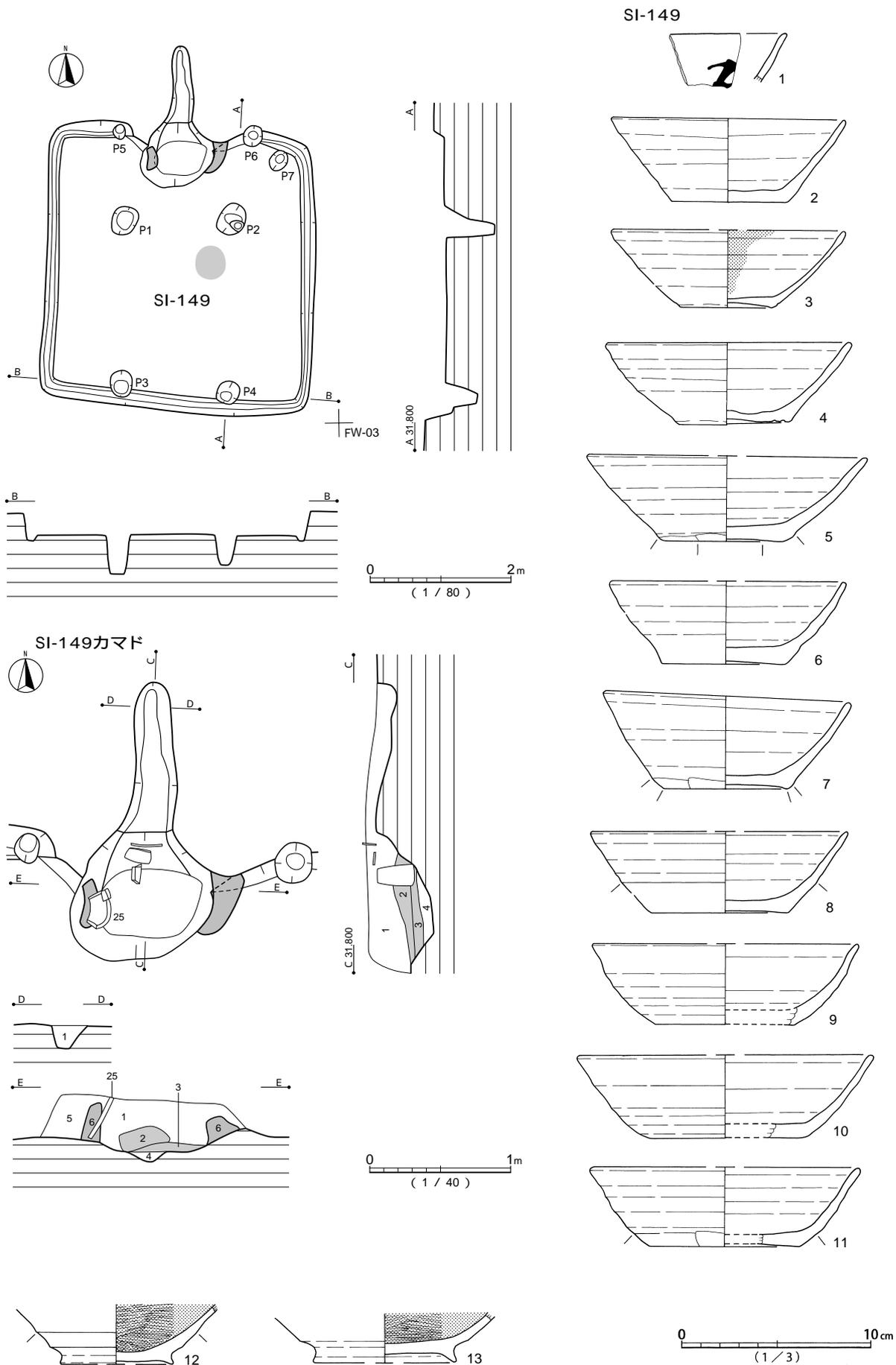


Fig.216 SI-149遺構・出土遺物実測図

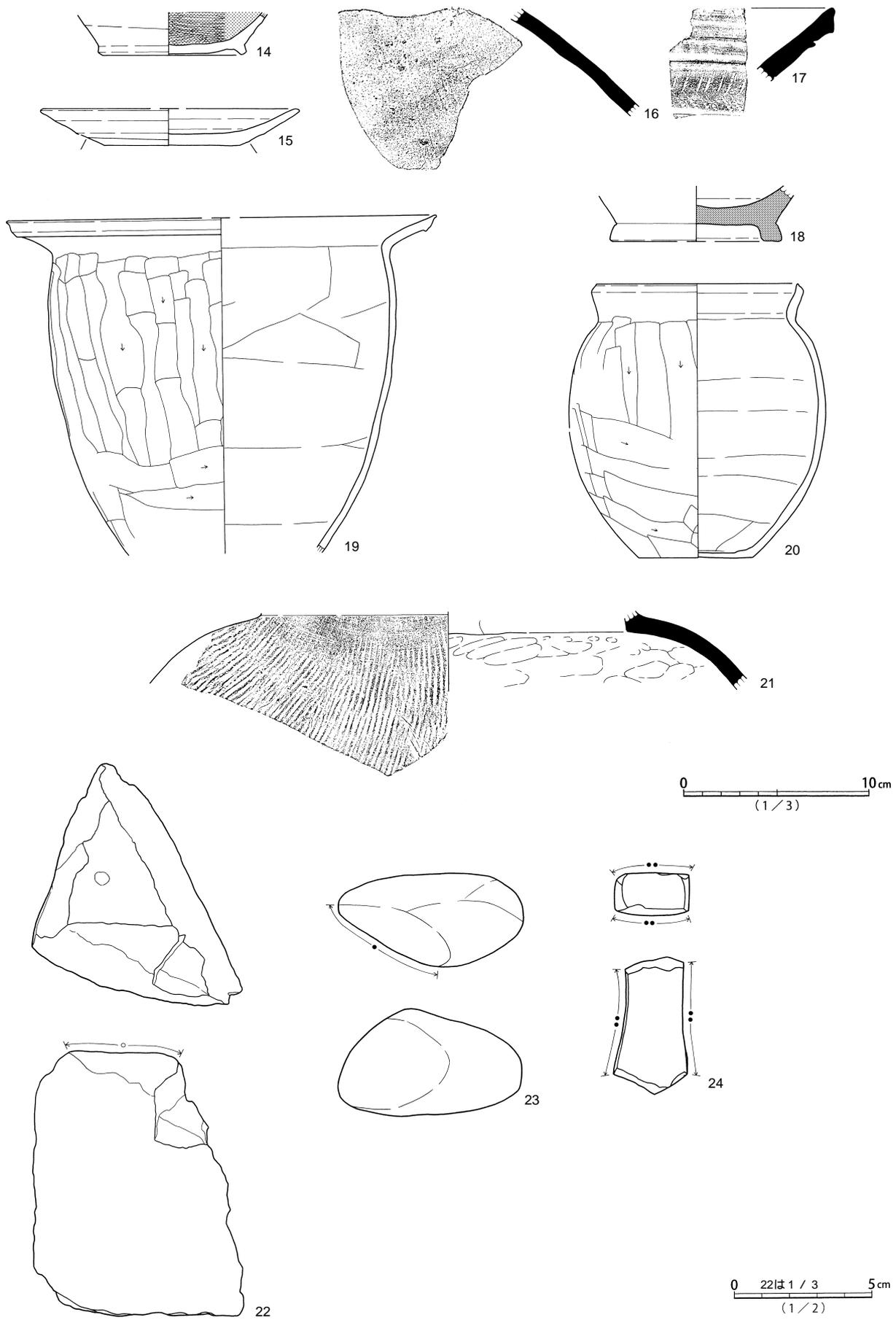


Fig.217 SI-149出土遺物実測図

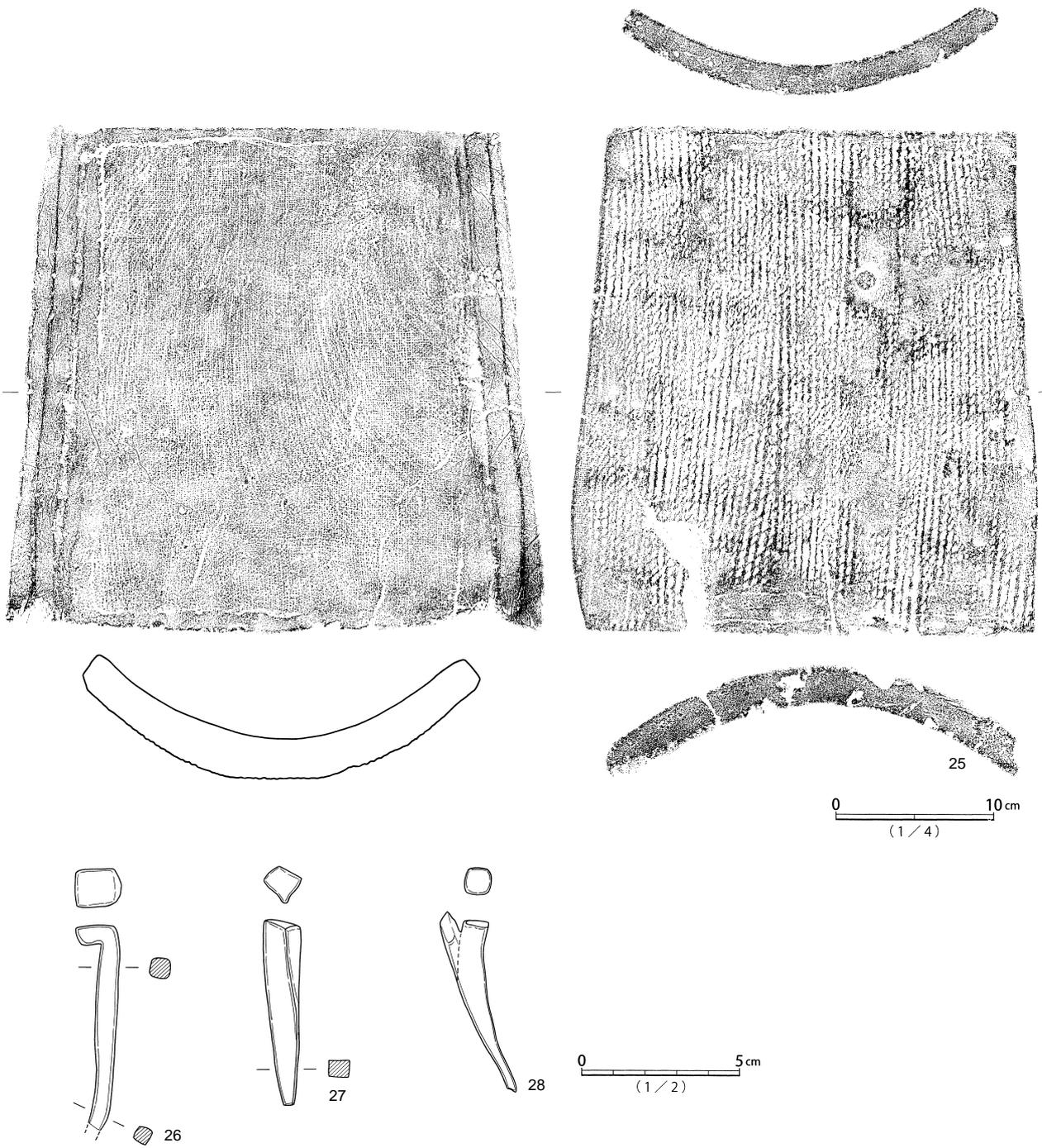


Fig.218 SI-149出土遺物実測図

SI-150

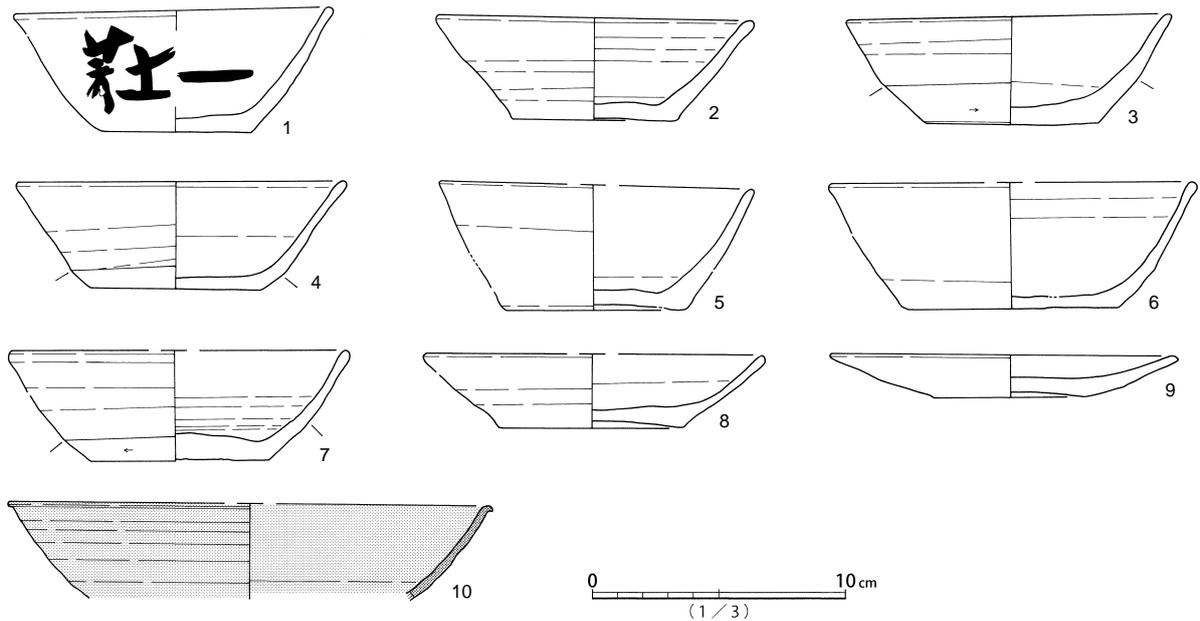


Fig.219 SI-150出土遺物実測図

は全周する。

出土遺物 1・2・4～8は土師器杯、3は土師器皿で体部外面に墨書「二」が正位に、底部内面に線刻「二」が認められる。9は土師器大形杯、10は土師器甕、11は須恵器甕、12は灰釉陶器碗の転用硯、13は灰釉陶器皿、14は平瓦、15は軒平瓦、16は金床石、17・18は鉄製品で、17は刀子、18は紡錘車である。

土層 カマド:1、焼土 2、粘土 3、焼土(特に多く含む) 4、黒褐色土

SI-160 a (Fig.242 ~ 246、PL.60・125・170・184・215・217・237)・b (Fig.242・243・246、PL.60・125・126・184・191)

遺構 SI-160a はGV66に位置する。北西側でSI-160b と重複する。新旧関係については、現場所見が無く、図面上のみの判断となるが、SI-160a のカマド断面図から、本遺構が新しいと判断した。平面形は3.42m × 2.85m の方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.3)m²、遺構確認面から床面までは46cm ~ 48cmを測る。主軸方位はN-1.0°-E。カマドは北壁に位置するが、西側の構造はSI-160bとの重複範囲で不明である。煙道部は幅(40)cm、長さ54cmを測り、先端に向けて上方に傾斜する。燃烧部に近い範囲で、天井部に平瓦と丸瓦を重ねて設置している。燃烧部は図化されていないが、壁ラインにかかって位置するとみられる。僅かな掘り込みを伴い、奥壁には平瓦を据えている。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝はカマドのある北壁と、南壁の一部、重複範囲以外に回る。

出土遺物 1～8は土師器杯で、1は底部外面に墨書「院カ」が認められる。9は土師器大形杯、10は土師器皿、11・12は須恵器甕、13は灰釉陶器長頸壺、14・15は平瓦、16は行基造りの丸瓦であり、他に鉄塊系遺物が出土している。

土層 カマド:1、暗褐色土中に若干ロームブロック・焼土・粘土粒混じる 2、暗褐色土

遺構 SI-160bはGV66に位置する。南東側でSI-160aと重複する。新旧関係については、現場所見が無く、図面上のみの判断となるが、SI-160aのカマド断面図から、本遺構が古いと判断した。平面形

SI-151

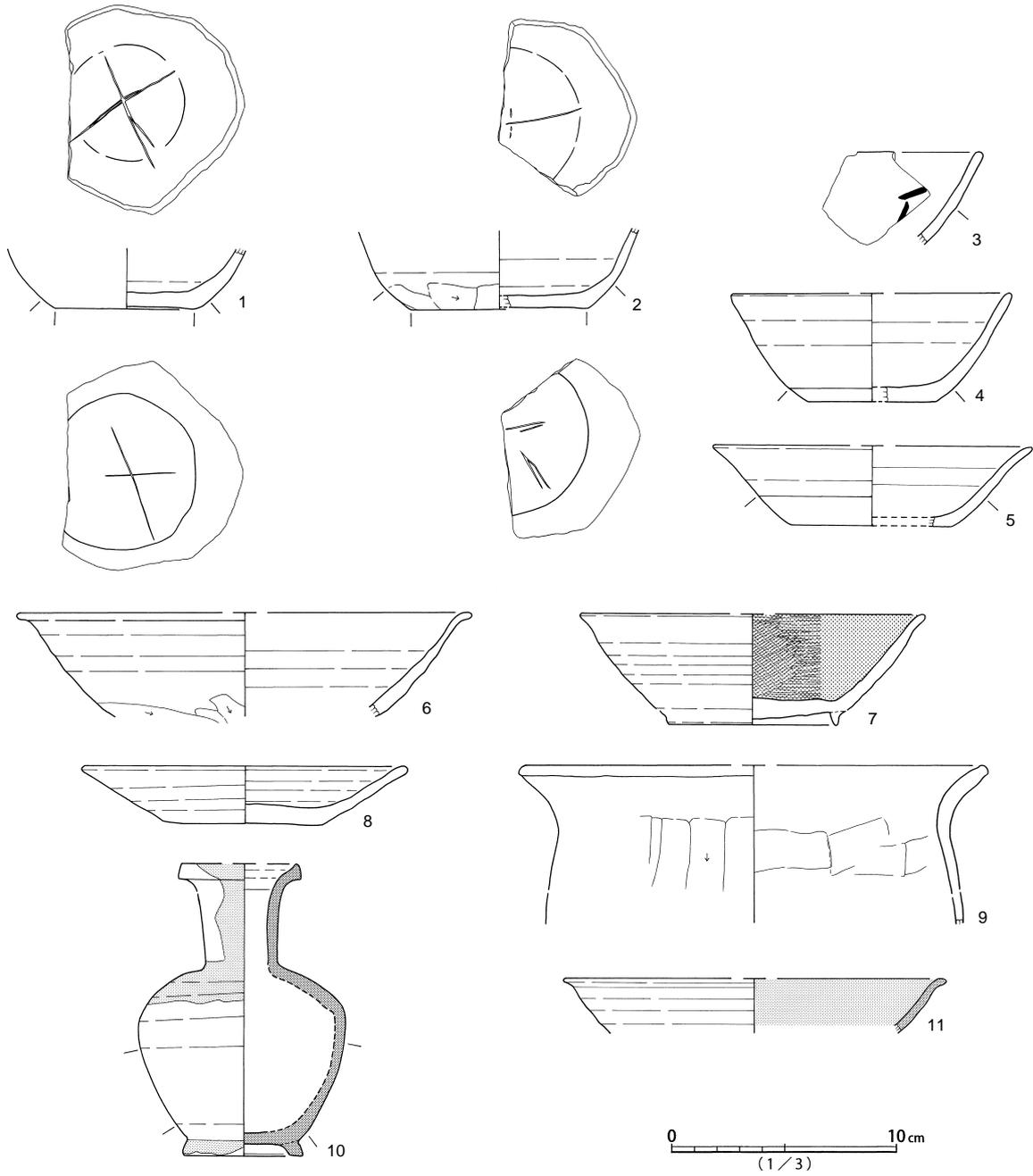


Fig.220 SI-151出土遺物実測図

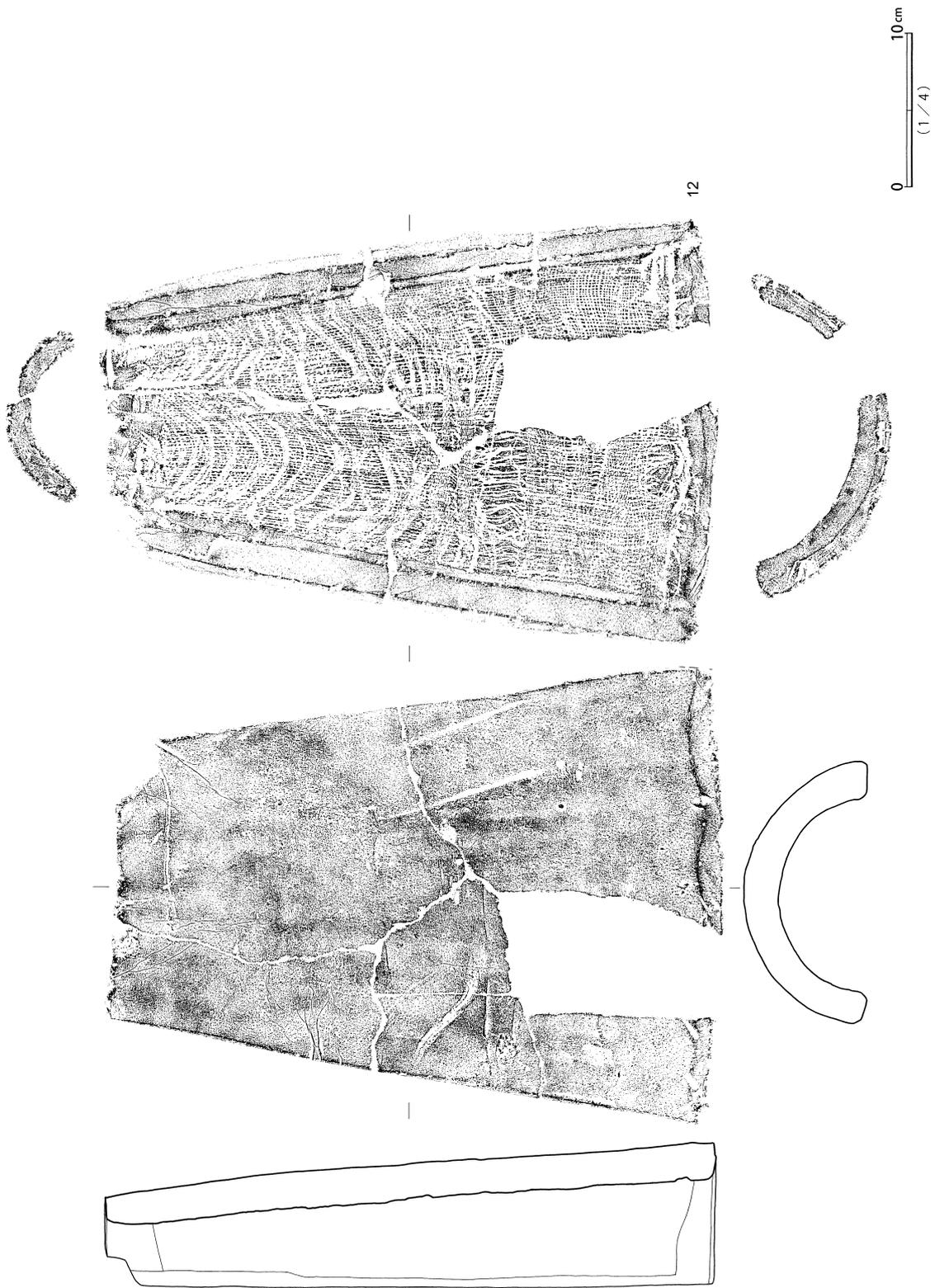


Fig.221 SI-151出土遺物実測図

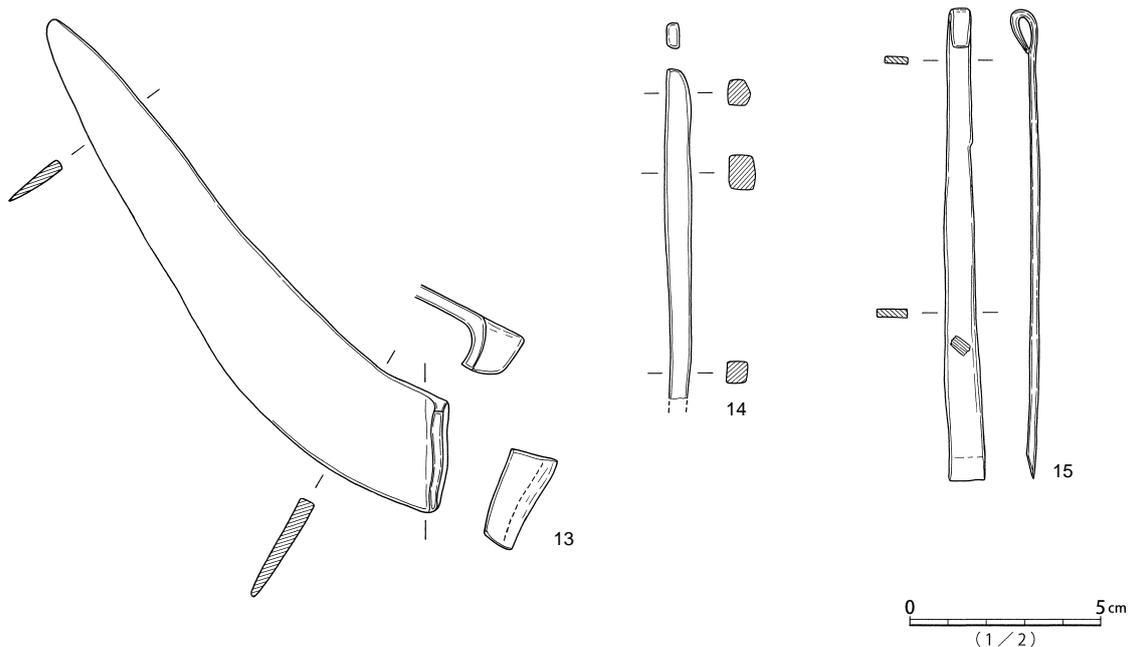


Fig.222 SI-151出土遺物実測図

は3.36m × 2.96mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.3)m²、遺構確認面から床面までは46cm ~ 48cmを測る。主軸方位はN-5.7°-E。カマドは北壁のやや北東隅によって位置する。煙道部は幅78cm、長さ76cmを測り、先端に向けて上方に傾斜する。先端部のPitは別遺構とみられる。燃烧部は図化されていないが、壁ラインに一部かかって位置するものとみられる。周溝はカマド直下から東側と遺構重複範囲以外回っている。カマド図と竪穴図とではレベルが0.3mほど誤差が生じているが、そのまま掲載している。

出土遺物 1~5は土師器杯で、1は体部外面に逆さ方向で2箇所墨書が認められるが判読できない。2は体部外面下位に「ヘラガキ ×」が認められ、3は体部外面に線刻が認められるが判読できない。

土層 カマド:1、暗褐色土中にローム粒・粘土粒少量混じる 2、焼土 3、暗褐色土

SI-161 (Fig.247 ~ 250、PL.1・60・126・170・171・184・232)

遺構 SI-161はGV24に位置する。東側でSB-3と、南側でSB-4と重複する。新旧関係については遺構平面図が無いので、エレベーション図と写真より平面図を起こしている。平面形は5.20m × 4.88mの方形を呈する。遺構確認面における面積は25.8m²、遺構確認面から床面までは21cm ~ 26cmを測る。主軸方位はN-84.0°-E。カマドは北壁のやや北西隅寄り(北カマド)と、西壁のやや北西隅寄り(西カマド)に位置する。構築材の遺存状況から、北カマドが新しい。北カマドの煙道部は中央でPitにより破壊されているが、幅28cm、長さ116cmを測り、先端に向けて下方に傾斜する。燃烧部は図化されていないが、壁ラインより内側に位置するとみられ、掘り込みを伴う。袖付け根部付近にPitを伴う。西カマドは詳細不明だが、煙道部は幅38cm、長さ68cmを測り、燃烧部は壁ラインより内側に位置するとみられる。袖付け根部付近にPitを伴う。貯蔵穴とみられるPitがカマド東側に認められるが、帰属するかは不確定。支柱穴は竪穴に対しやや東側にずれて規則的に配置されている。Pitの深さは不明である。周溝は全周する。

出土遺物 1・3は土師器杯で、1は体部外面に2箇所、底部外面に1箇所、墨書で記号が認められ、内面

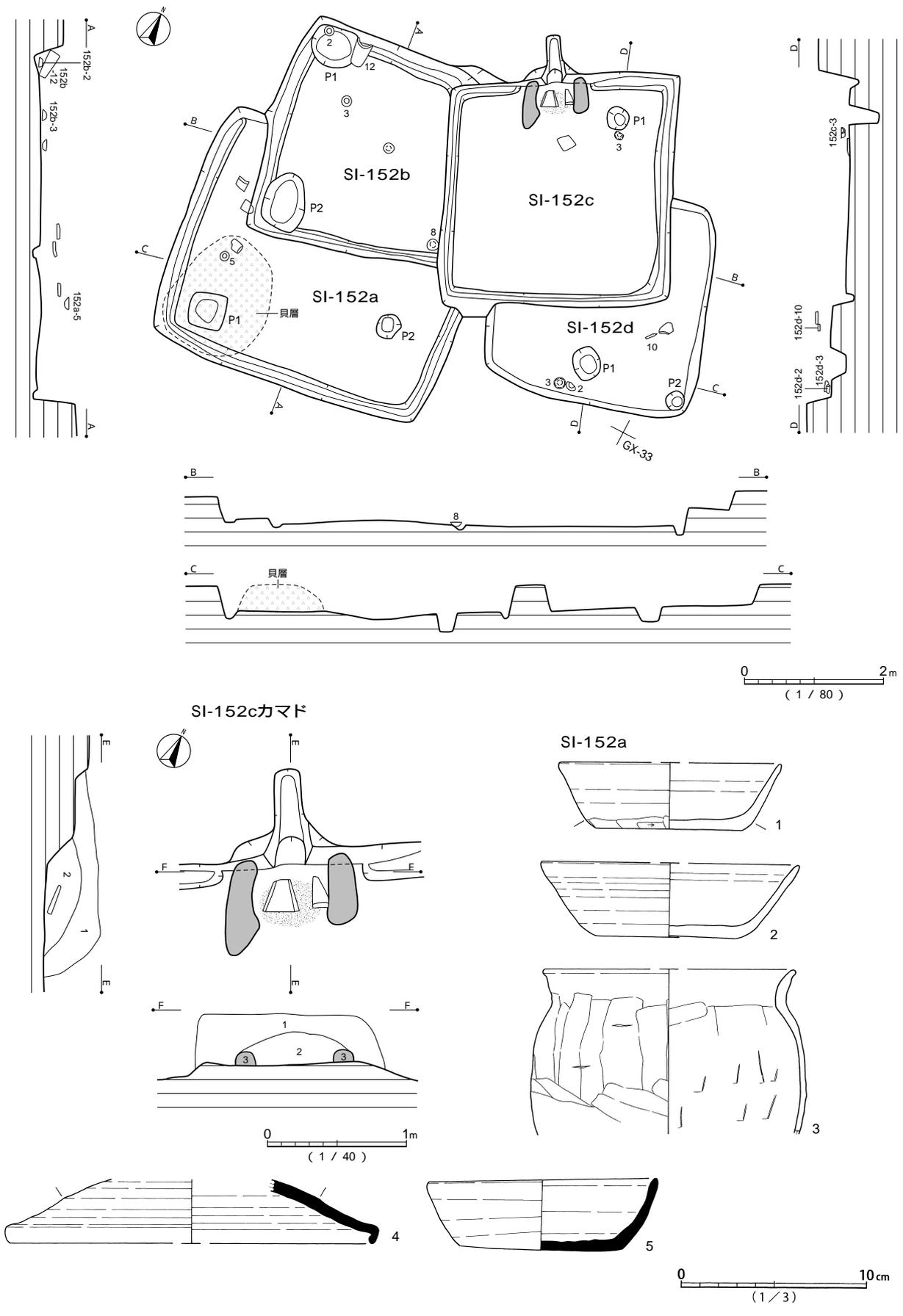
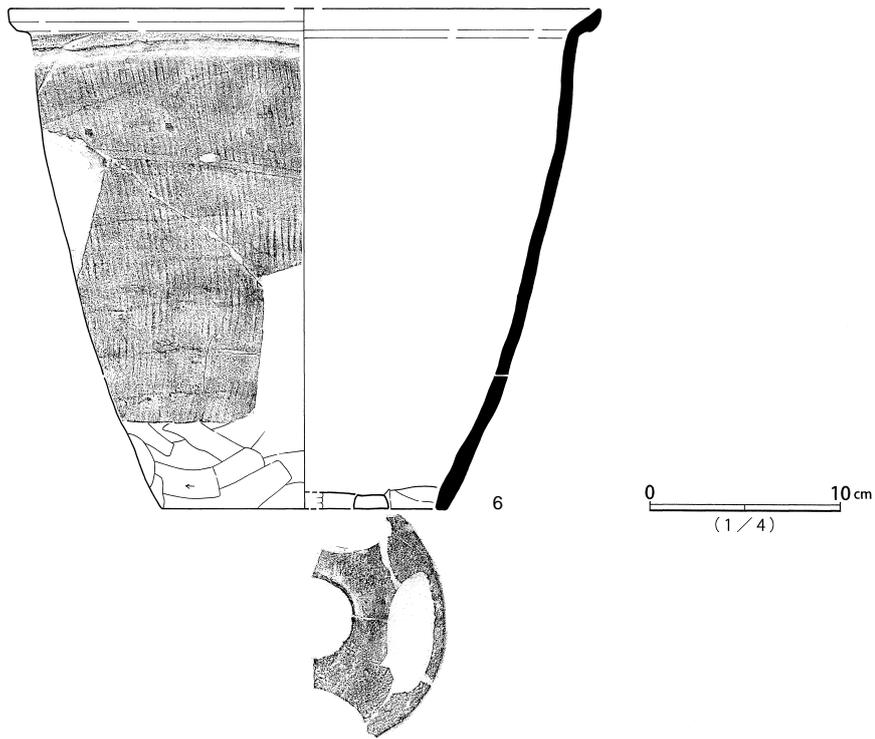


Fig.223 SI-152遺構・出土遺物実測図



SI-152b

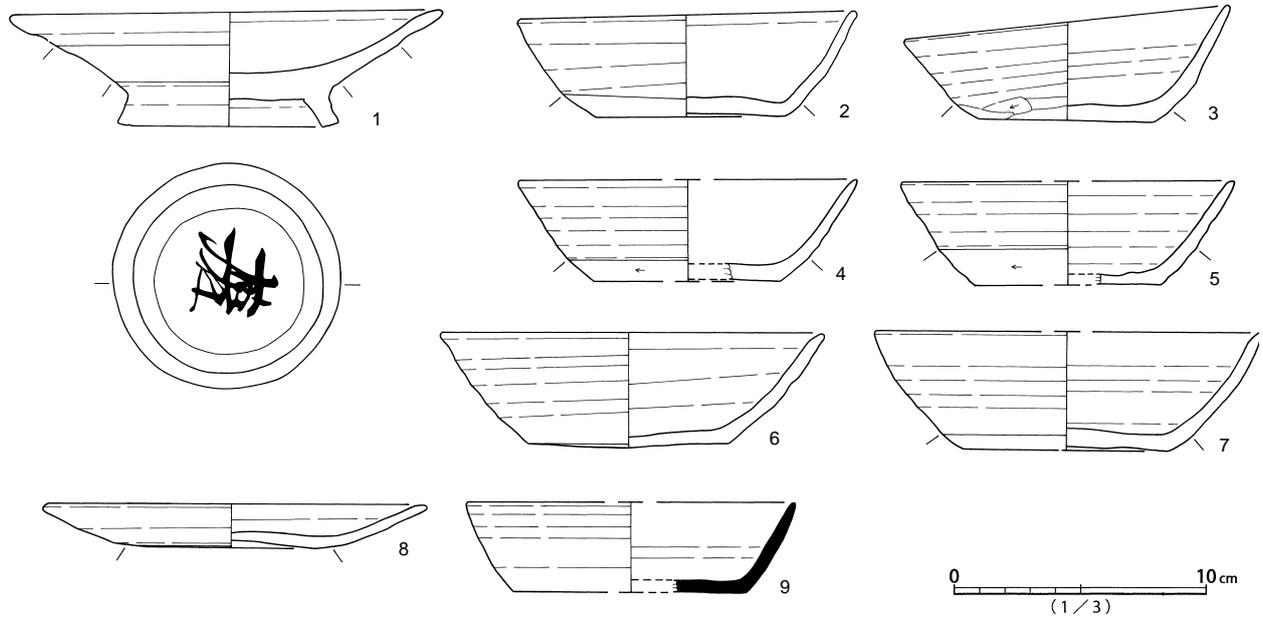


Fig.224 SI-152出土遺物実測図

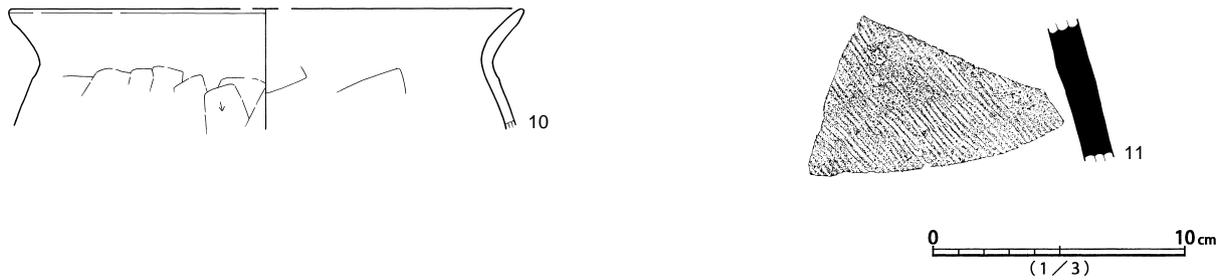


Fig.225 SI-152出土遺物実測図

に黒色処理を施す。3は内面に黒色処理を施す。2・4は須恵器杯、5・6は須恵器甕、7は須恵器盤か、8は灰釉陶器壺、9～12は鉄製品で、9は刀子、10・11は釘、12は鍵、13は銅製鈴、14は灰釉陶器浄瓶である。

土層 カマド:1、暗褐色土中に焼土粒・粘土粒含む 2、ピット後の掘り込み 3、粘土 4、焼土・スス(やわらかい) 5、暗褐色土中に焼土・スス含む 6、黒褐色土 7、暗褐色土・ローム粒 8、焼土 9、灰
SI-162 (Fig.251・252、PL.60・126・171・191・217・226・232) 附章参照

遺構 SI-162はGU72に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は9.3m²。カマドは北壁中央に位置するとみられる。カマド図面はあるが、カマドではないとの所見あり。支柱穴・周溝は不明。

出土遺物 1～6は土師器杯、7・9・10は土師器皿、8は土師器高台付皿で、内面に黒色処理を施す。11は土師器小形鉢、12～15は土師器甕で、15は底部外面にヘラガキ「V」状の記号が認められる。16・17は須恵器甕、18・19は灰釉陶器壺、20・21は軒平瓦、22は砥石、23・24は鉄製刀子である。

SI-163 (Fig.253、PL.61・126・171・191) 附章参照

遺構 SI-163はGU75に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は(6.9)m²。カマドは西壁中央に位置するとみられる。支柱穴は不明。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1～3は土師器杯で、1は体部外面に線刻「田」が認められる。4は灰釉陶器椀、5は灰釉陶器高台付皿の転用碗である。

SI-164 (Fig.253、PL.61・126) 附章参照

遺構 SI-164はGU94に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は5.9m²。カマドは東壁やや東南隅に寄って位置するとみられる。支柱穴は不明。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1・2は土師器杯である。

SI-165 (Fig.254、PL.127・171・232)

遺構 SI-165はFU04に位置する。西側でSB-6と重複する。平面形は4.37m × 3.45mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(14.5)m²、遺構確認面から床面までは0.20mを測る。主軸方位はN-1.8°-W。カマド・貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの帰属は不明確で、深さは、P1は34cmを測る。周溝は伴わない。

出土遺物 1～4は土師器杯で、1は内面に黒色処理を施し、床直上からの出土、5・6は土師器小皿、7は土師器高台付小皿、8は足高高台付杯、9～13は土師器椀、14は緑釉陶器椀、15・16は鉄製品で、15

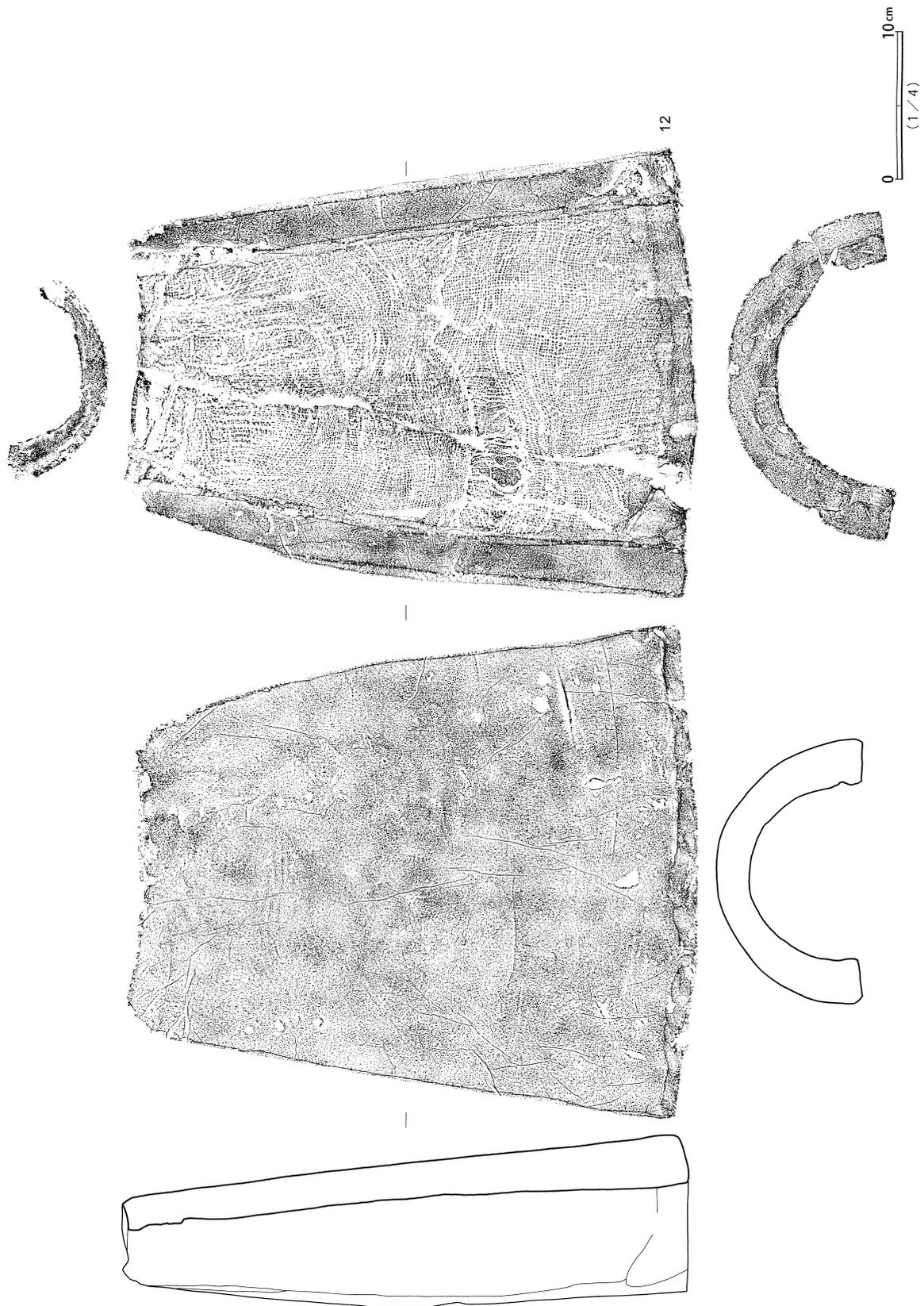
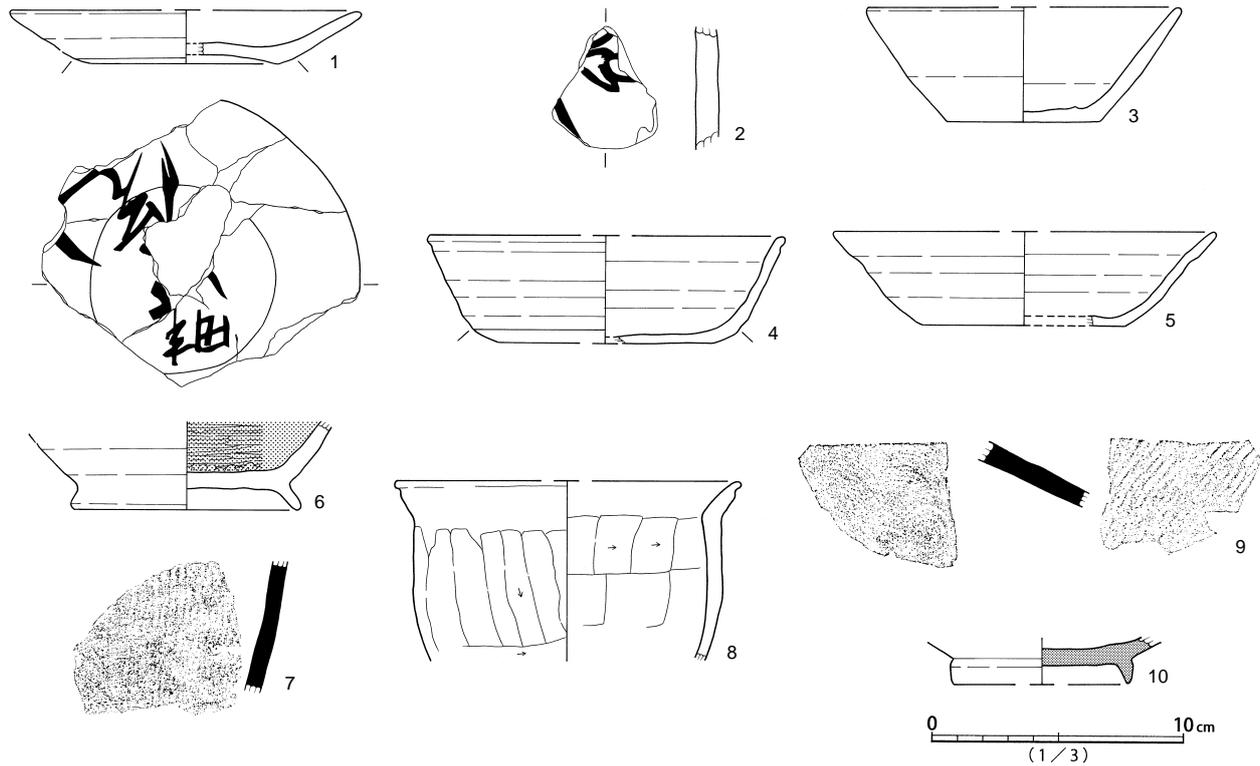


Fig.226 SI-152出土遺物実測図

SI-152c



SI-152d

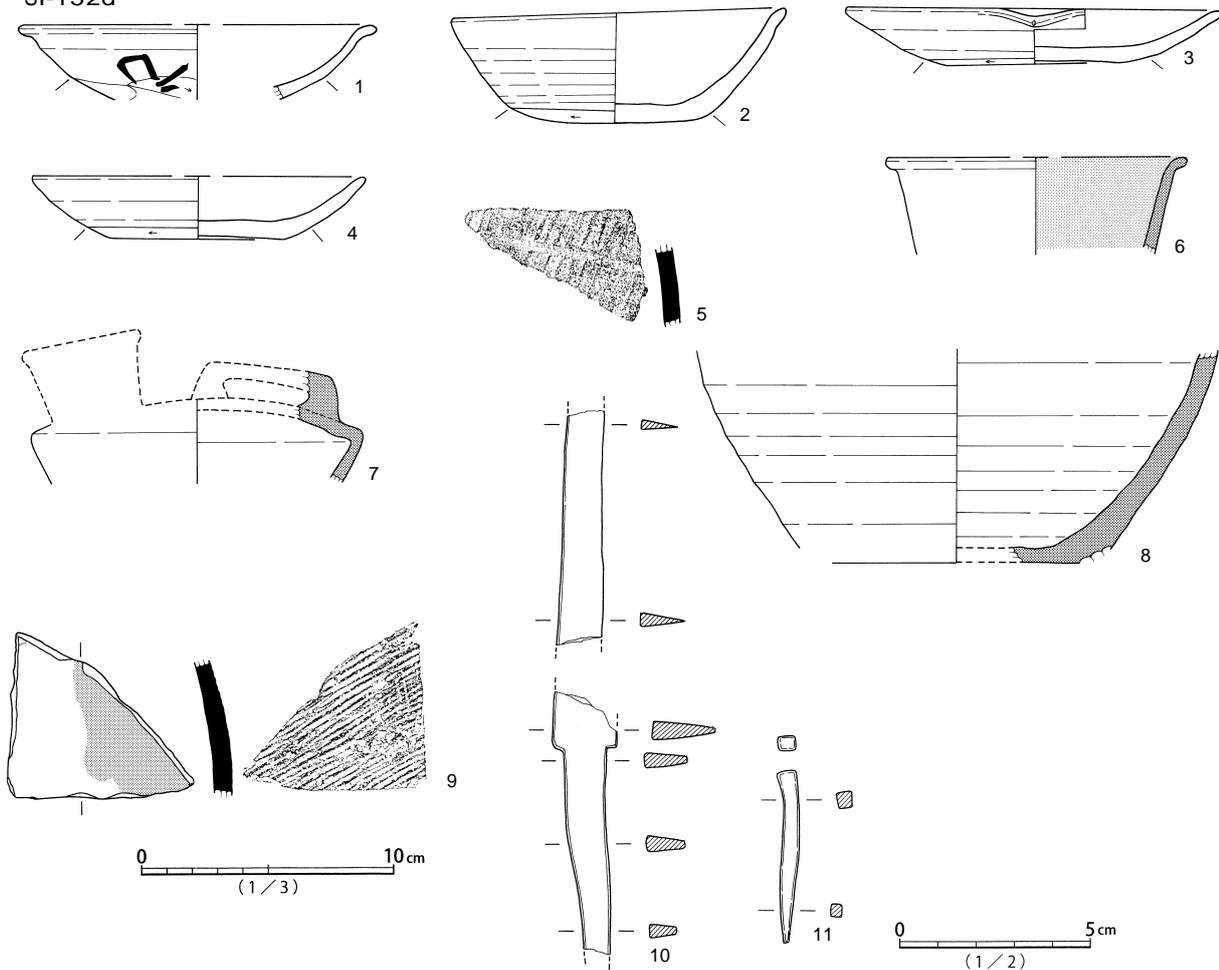


Fig.227 SI-152出土遺物実測図

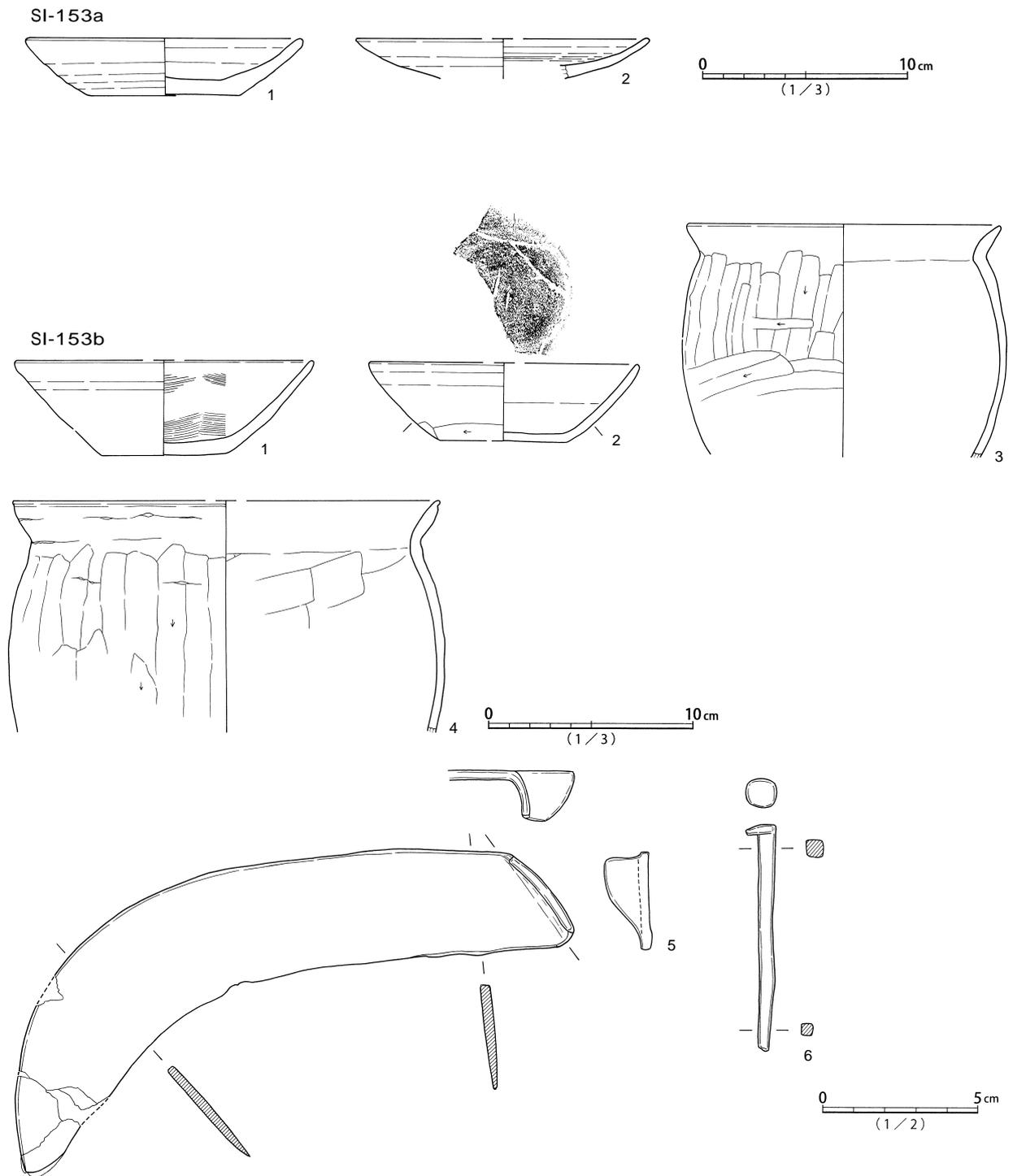


Fig.228 SI-153出土遺物実測図

SI-154

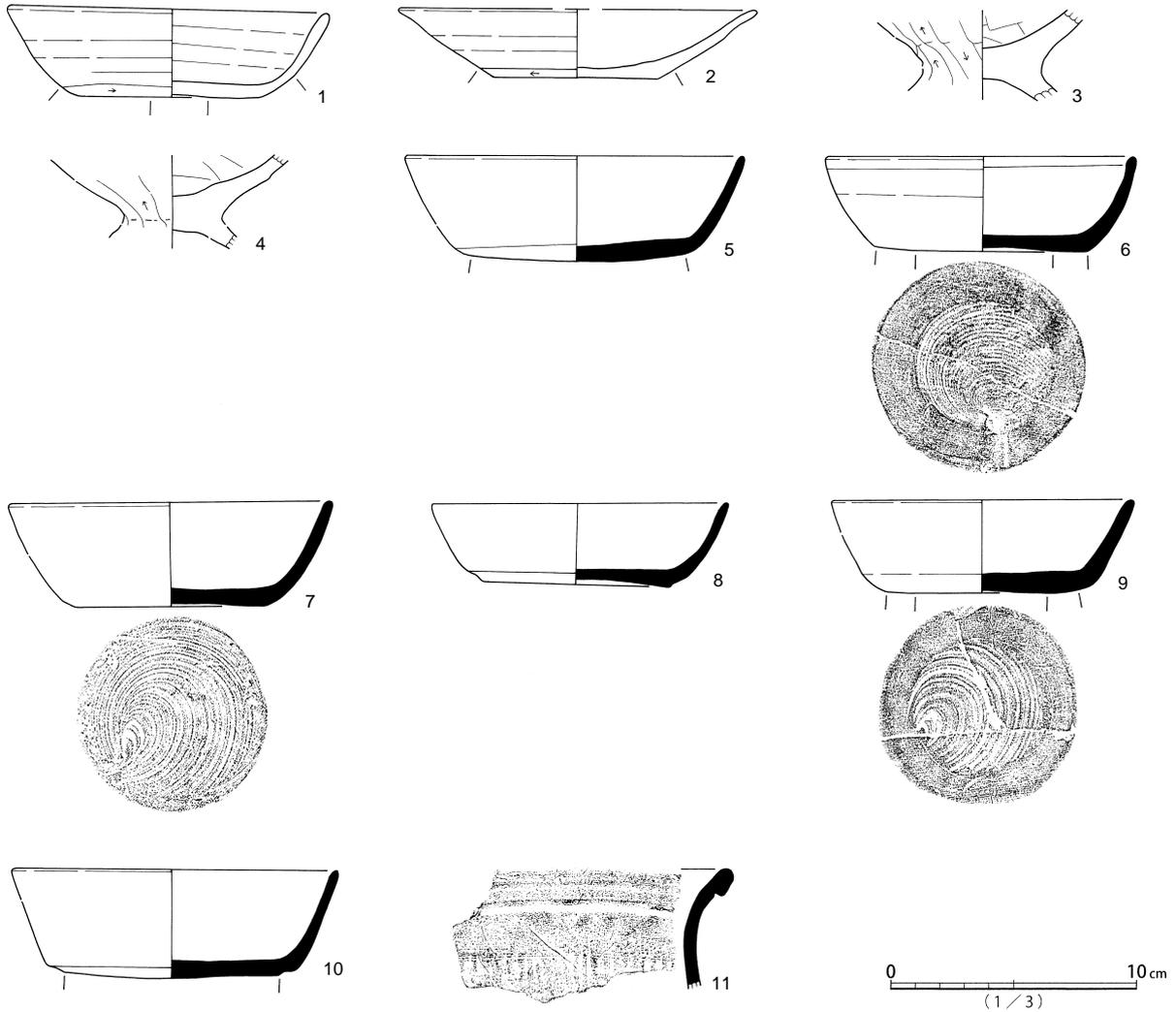


Fig.229 SI-154出土遺物実測図

は刀子形利器、16は穂摘鎌もしくは鎌であり、共に床直上からの出土である。

SI-166 a(Fig.255・256、PL.61・127・171・188・218)・b(Fig.255 ~ 257、PL.61・127・171・184・185・226・232・237)

遺構 SI-166aはFU08に位置する。南側でSI-166bと、北東側でSK-164と重複する。SI-166bとの新旧関係は、遺構の切り合いから本遺構が古い。平面形は(4.25)m x(3.85)mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(16.1)m²、遺構確認面から床面までは0.19mを測る。主軸方位はN-12.5 °-E。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅38cm、長さ136cmを測り、先端に向けて下方に傾斜する。燃烧部は壁ラインよりも内側に位置し、掘り込みを伴う。焚口には平瓦を立てた状態で据えている。袖付け根部にPitを伴う。また、カマド焚口より竪穴中央寄りに別の燃烧部があり、これは配置状況から焚口付近のPitに伴って、前段階のカマドである可能性がある。このことは、本遺構が南北にやや長い平面プランを持っていることも合わせて、竪穴建物の拡張を示唆する。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝はカマドのある北壁では認められない。

出土遺物 1は土師器蓋、2・3は土師器杯、4は土師器大形杯、5は灰釉陶器皿、6は須恵器甑、7は平瓦

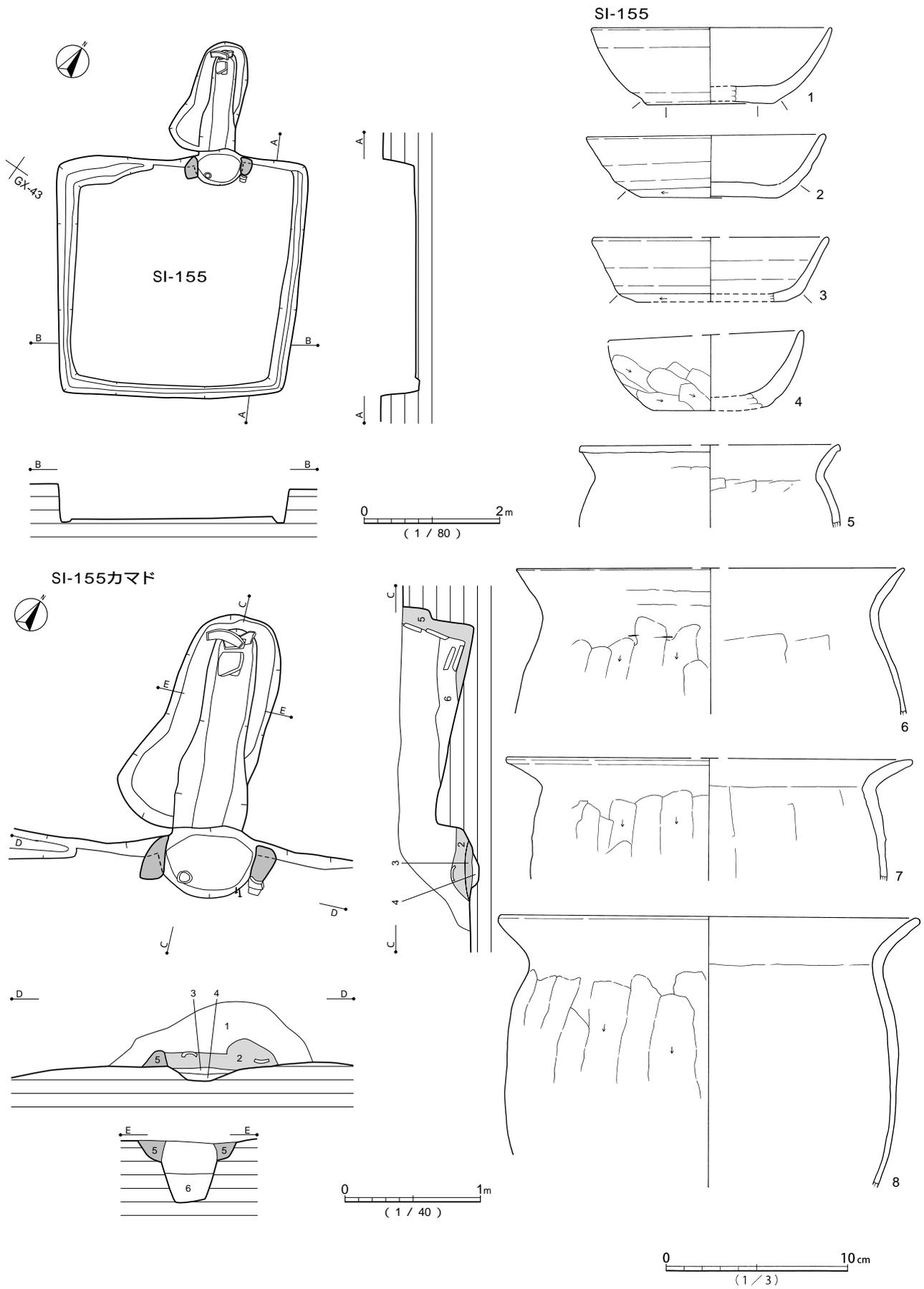


Fig.230 SI-155遺構・出土遺物実測図

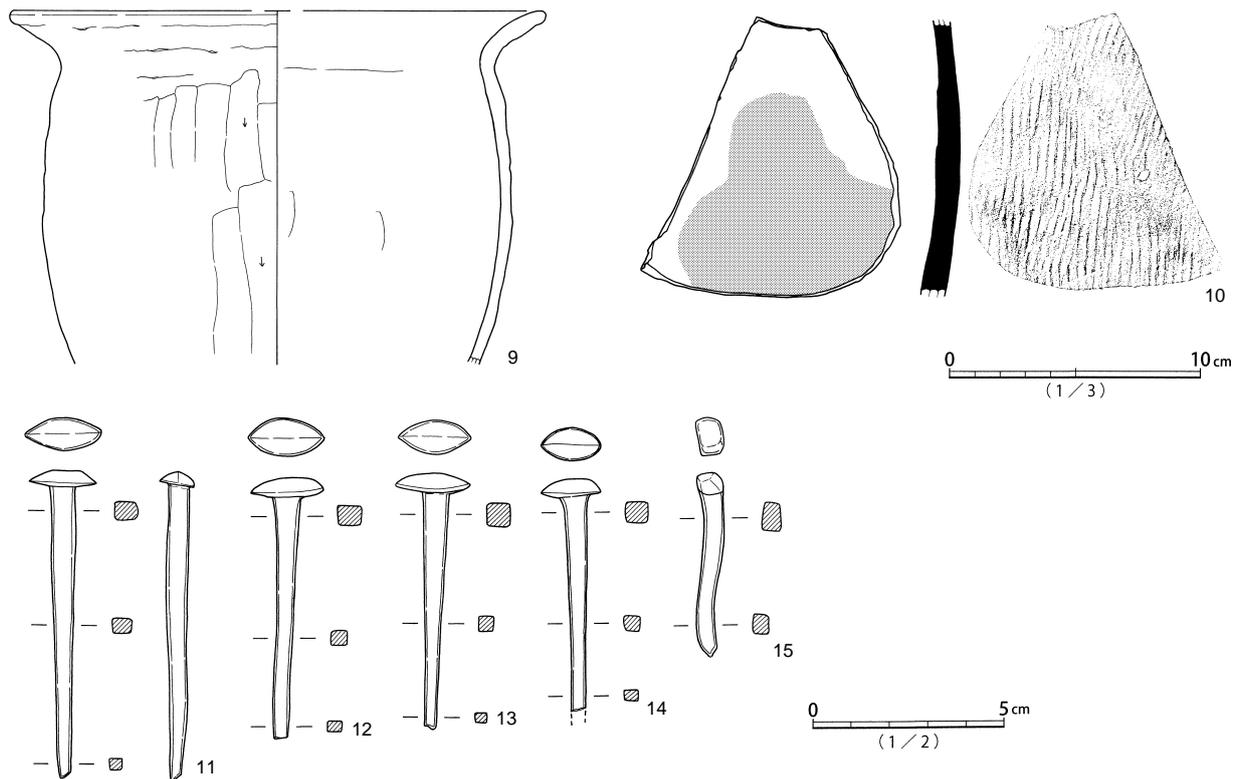


Fig.231 SI-155出土遺物実測図

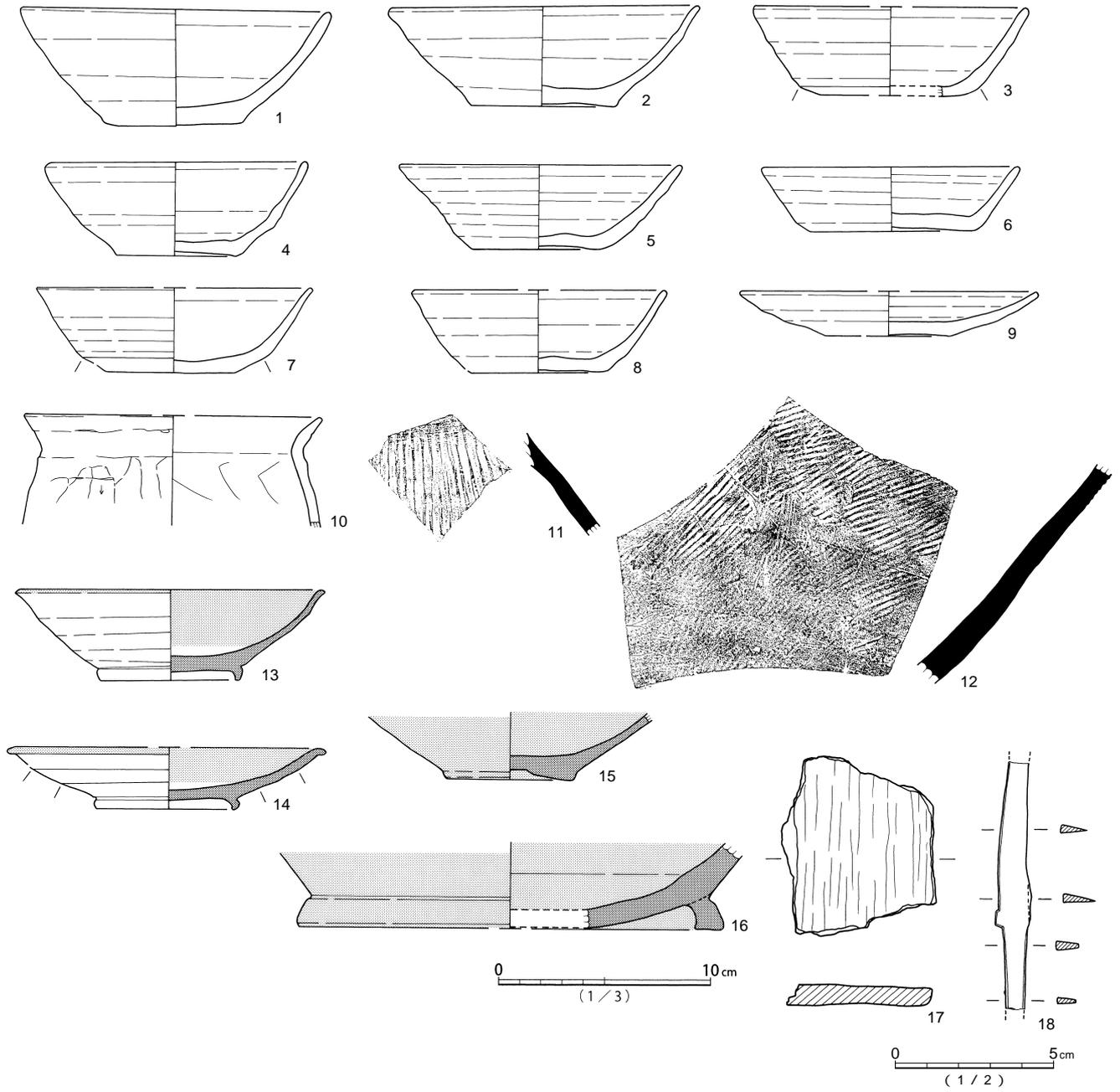
である。

土層 カマド:1、黒褐色土(古い時代の煙道)中にローム粒多く混じる 2、黒褐色土中に粘土粒・焼土粒少し混じる 3、黒褐色土(黒色が強い)中にローム、粘土粒多く混じる 4、炭・灰中に粘土少し混じる 5、黒褐色土中に焼土多く混じる 6、灰の層 7、黒褐色土中に灰・焼土多く混じる 8、黒褐色土中に粘土多く混じる 9、ローム(張床) 10、焼けたローム 11、粘土 12、黒褐色土中に粘土粒多く・ローム粒少し混じる 13、黒褐色土中に粘土粒・焼土粒多く混じる 14、黒褐色土中に炭多く混じる 15、黒色土中にローム粒・粘土粒少し混じる 16、黒色土中にローム粒少し混じる

遺構 SI-166bはFU08に位置する。北側でSI-166a・SK-164と重複する。SI-166aとの新旧関係は、遺構の切り合いから本遺構が新しい。平面形は3.60m×3.76mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(13.4)m²、遺構確認面から床面までは18cm~21cmを測る。主軸方位はN-2.5°-E。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅36cm、長さ152cmを測り、先端に向けて上方に傾斜する。天井部には平瓦を設置している。先端部のPitは先行するSI-166aに帰属するものである。燃焼部は図化されていないが、壁ラインにかかって位置するとみられ、奥壁は壁を不整半円形に掘り広げている。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は北東隅の遺構重複範囲で不明確だが、カマド直下以外は回っているとみられる。

出土遺物 1は土師器皿で、墨書が2箇所、体部外面に「閔カ」が横位で、底部外面に「今カ」が認められる。2~4は土師器杯で、2は底部外面に墨書「小川」が認められる。5は土師器高台付小皿、6・7はカワラケ小皿、8は土師器甕、9は土師器高台付鉢、10は土師器羽釜、11・12は須恵器甕で、11は転用碗、13は灰釉陶器碗、14は灰釉陶器皿、15は灰釉陶器小壺、16は浮石、17は鉄製不明品で鑄造とみられ

SI-156



SI-157

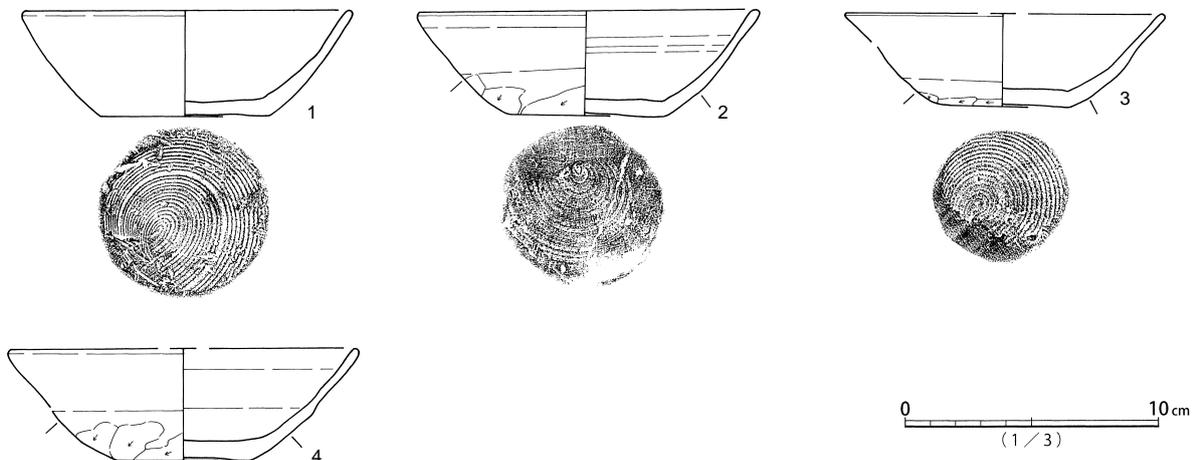
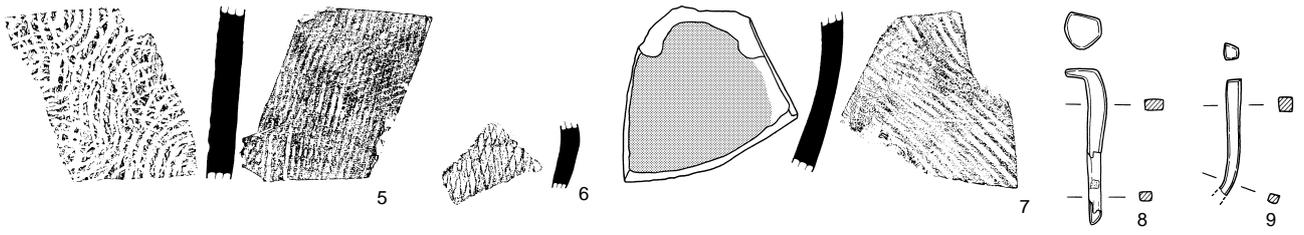
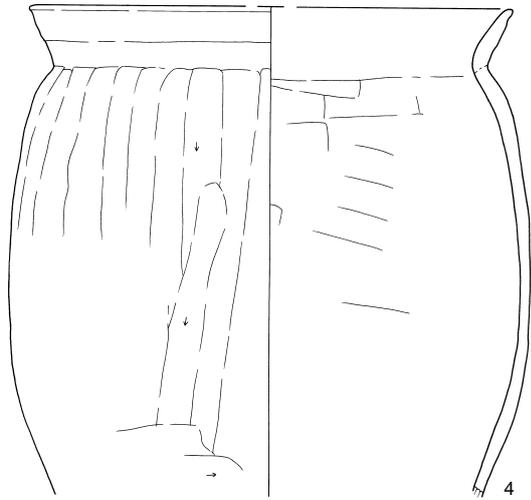
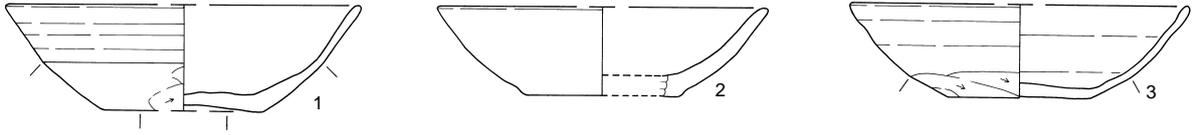


Fig.232 SI-156・157出土遺物実測図

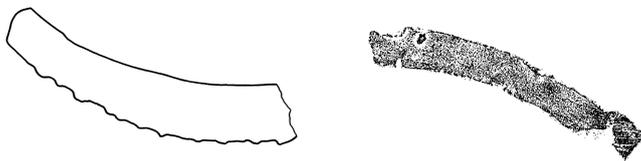
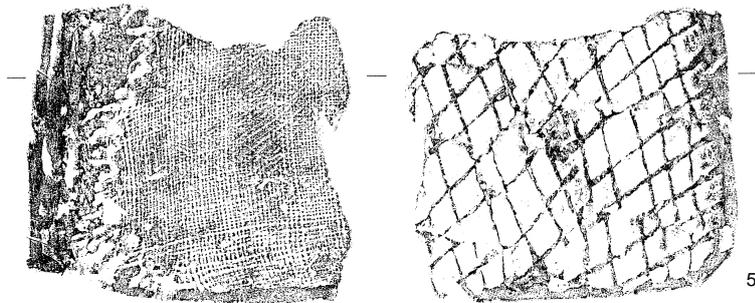


0 8, 9は 1 / 2 10cm
(1 / 3)

SI-158

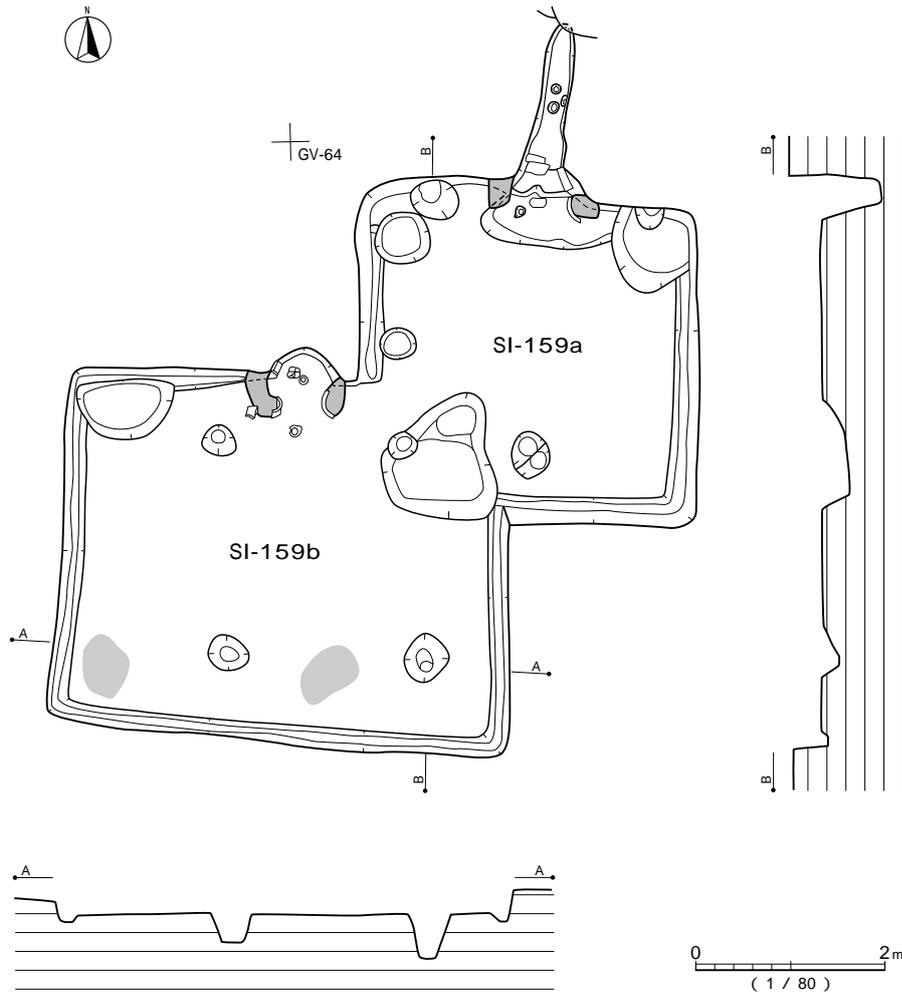


0 10cm
(1 / 3)



0 10cm
(1 / 4)

Fig.233 SI-157・158出土遺物実測図



SI-159a

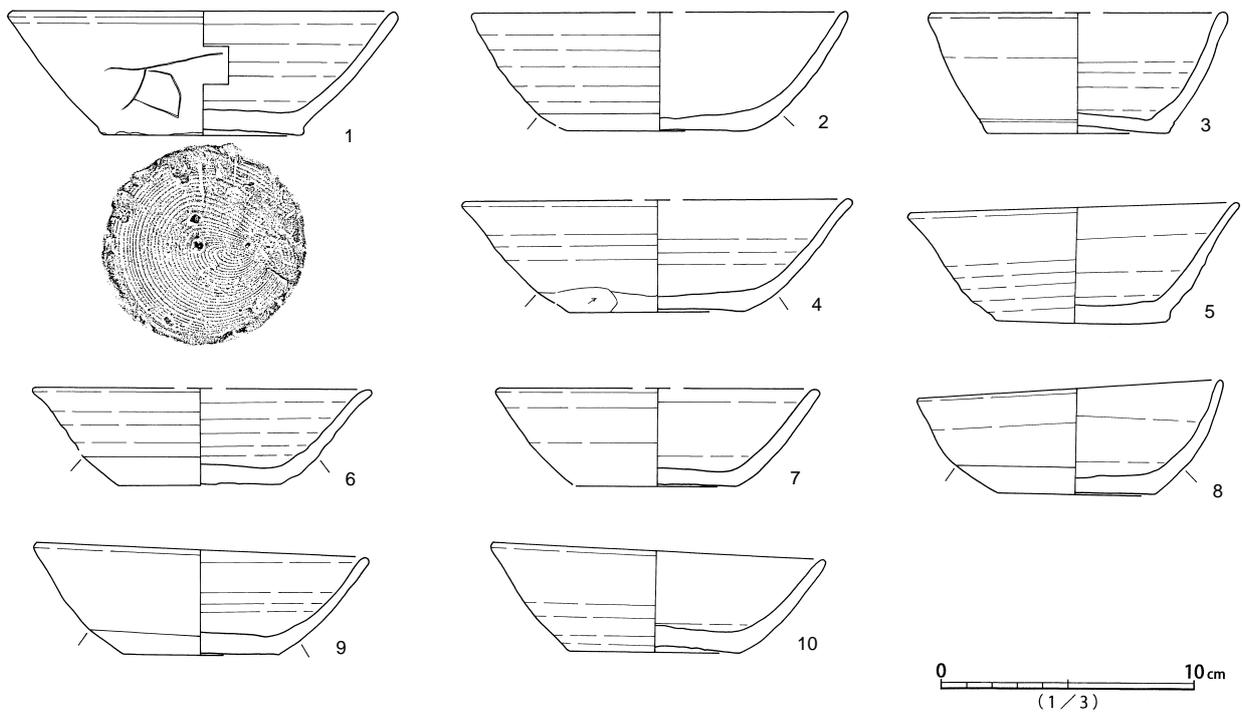


Fig.234 SI-159遺構・出土遺物実測図

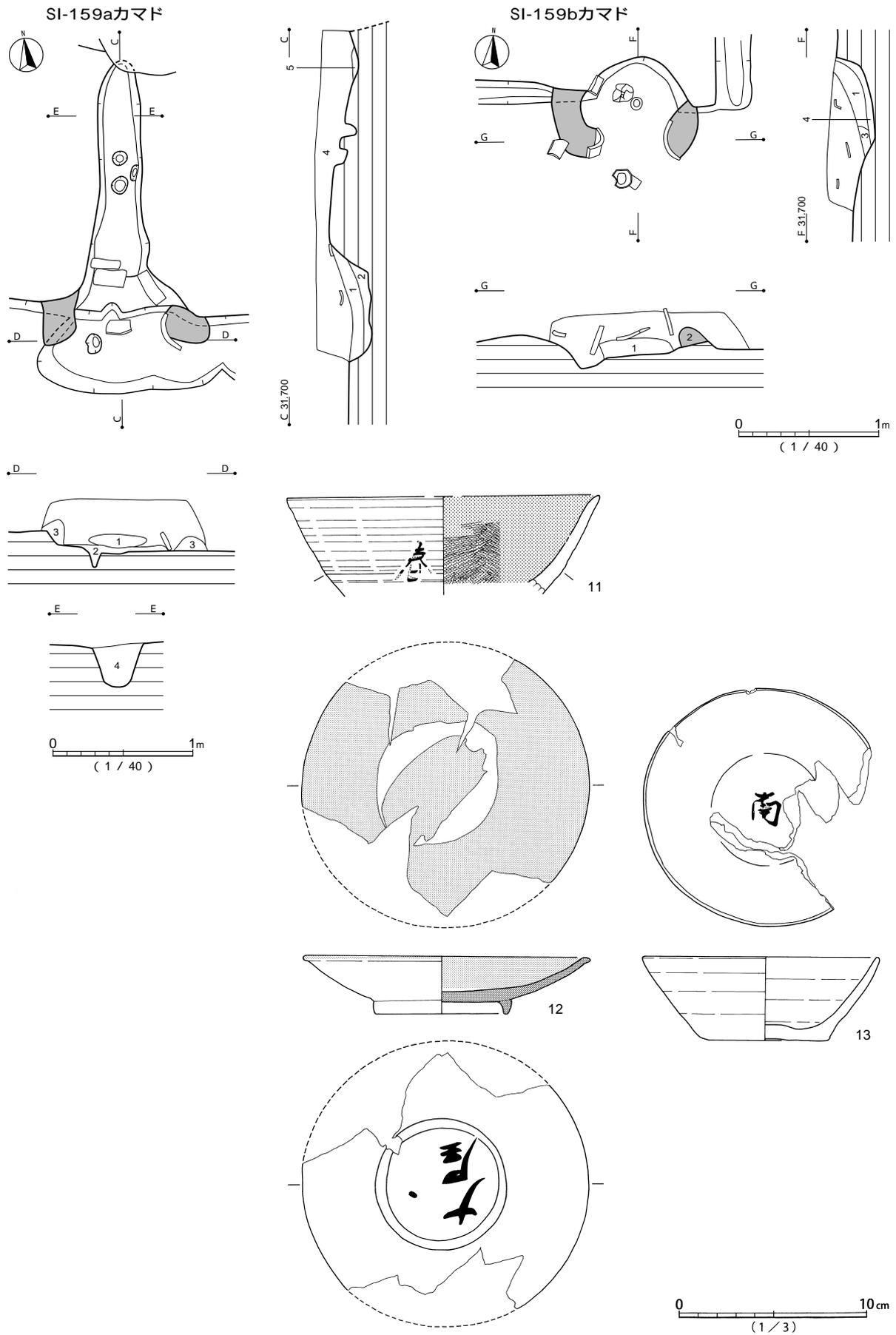


Fig.235 SI-159遺構・出土遺物実測図

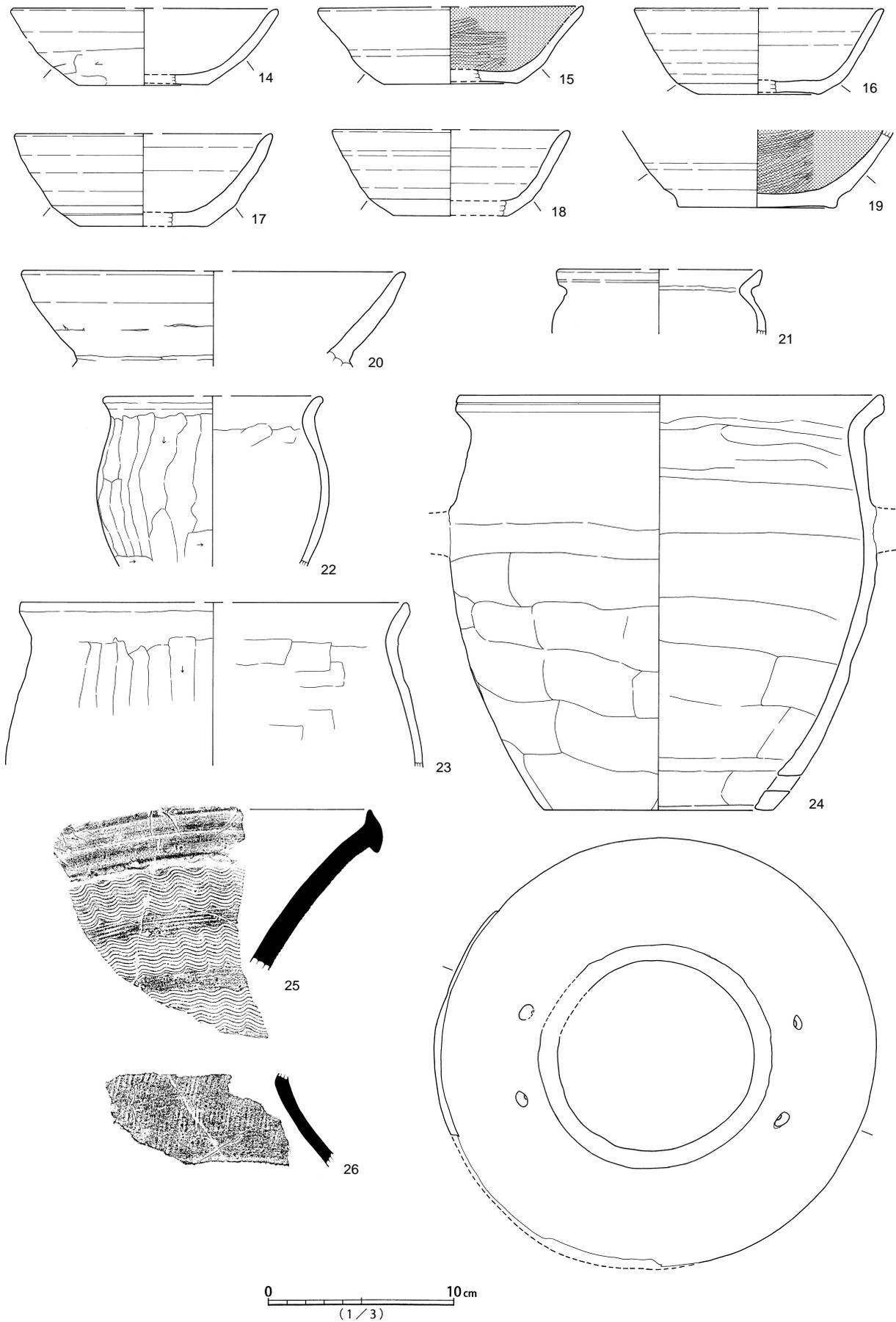


Fig.236 SI-159出土遺物実測図

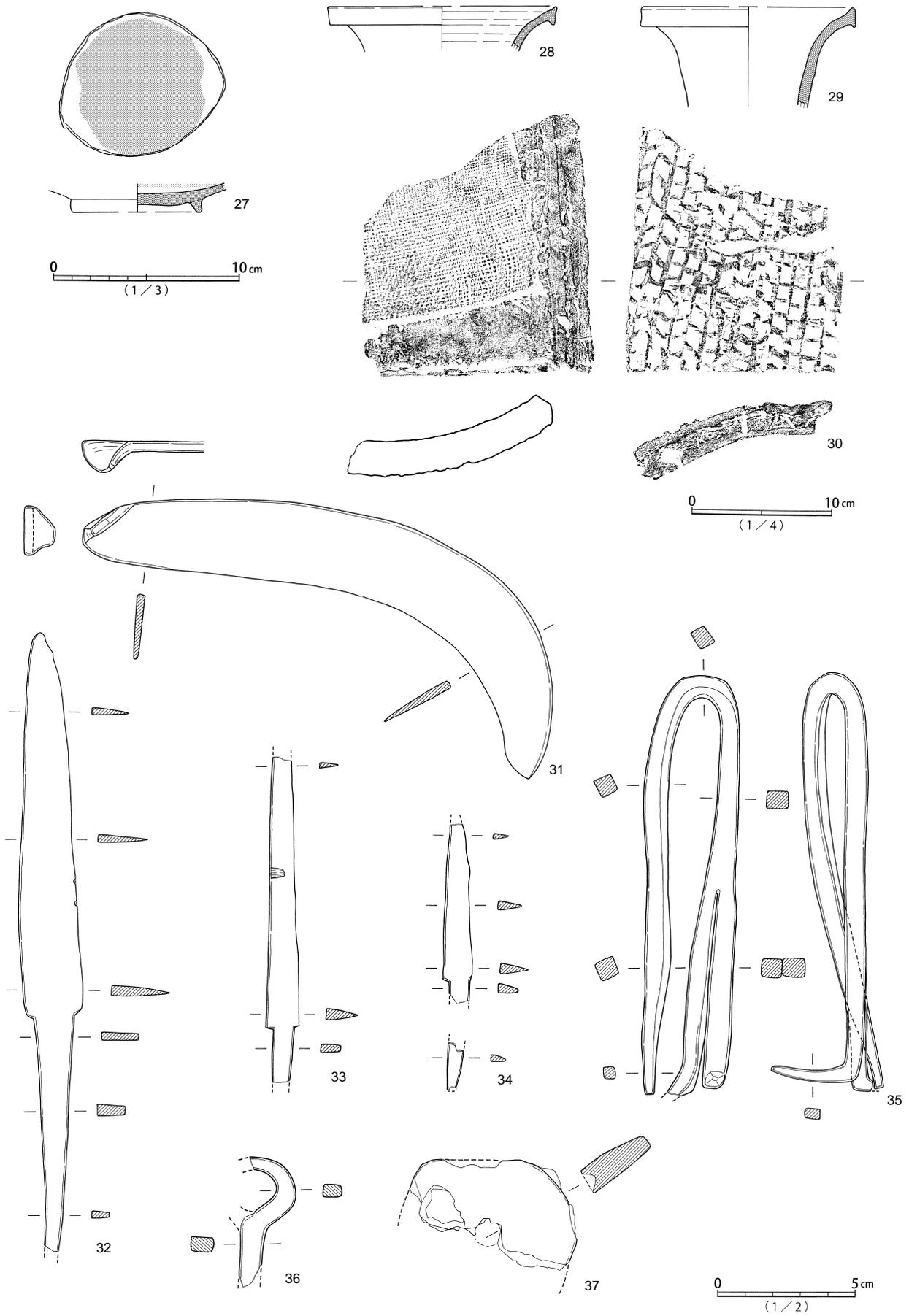


Fig.237 SI-159出土遺物実測図

SI-159b

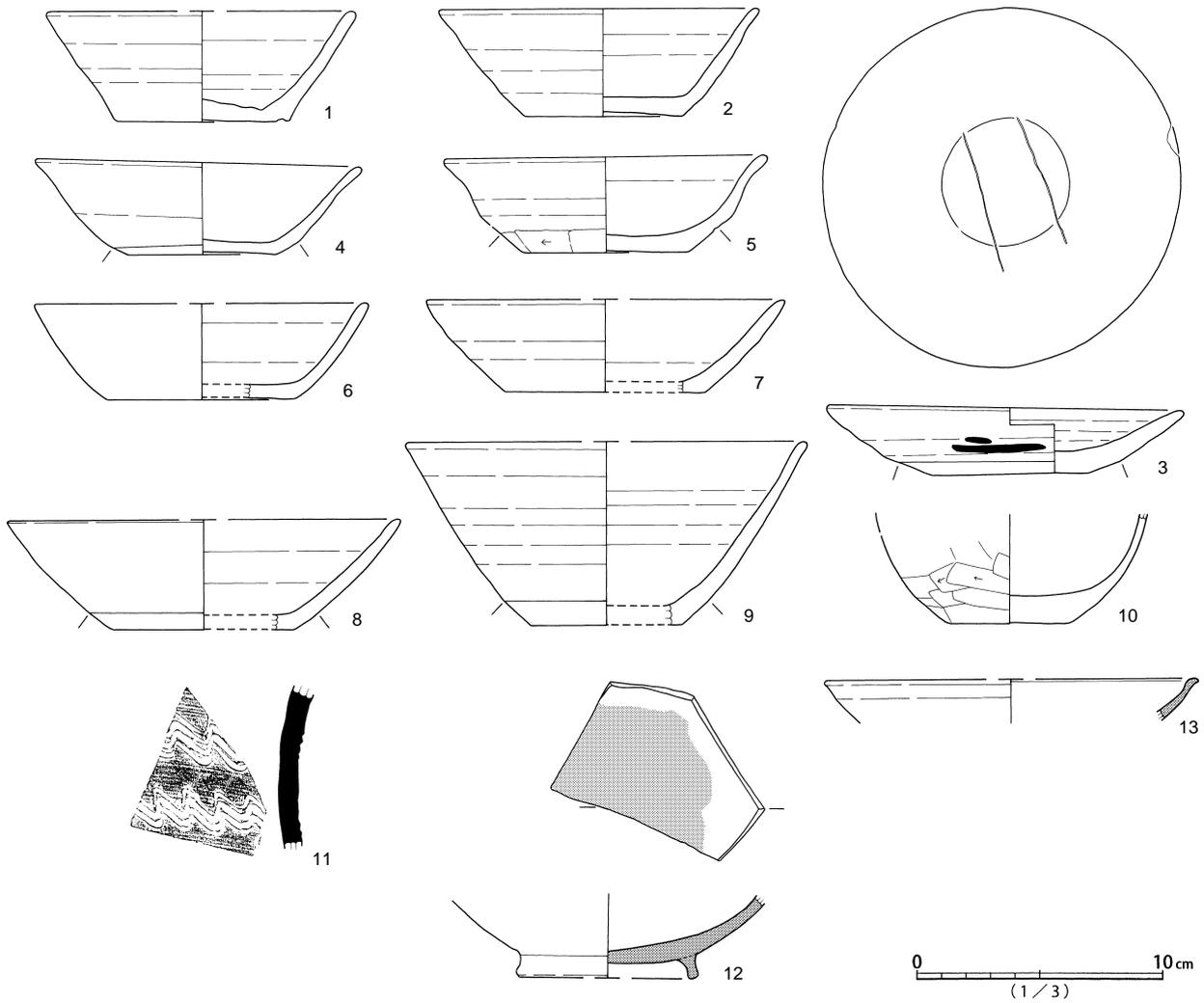


Fig.238 SI-159出土遺物実測図

る。

土層 カマド:1、黒褐色土中にやや細粒・粘土粒混じる 2、黒褐色土中に粘土粒多く・焼土粒混じる 3、黒褐色土で下層に粘土ブロックをやや多く含む 4、黒褐色土(黒色が強い)中にロームブロック混じる 5、粘土 6、焼土中に黒褐色土多く混じる 7、黒色が強い黒褐色土中に焼土少し混じる 8、黒褐色土(ローム粒少し混じる) 9、黒褐色土(粘土粒多く混じる、焼土少し混じる) 黒色土(ローム粒混じる) 10、粘土、黒褐色土 11、黒褐色土(粘土粒、焼土粒混じる) 12、ロームブロック、黒褐色土混じる 13、粘土混多し黒褐色土 14、黒褐色土(粘土多く混じる) 15、黒色土(灰、焼土混じる) 16、粘土粒(大粒)多く混じる黒褐色土 17、焼土やや混じる 18、焼土少し混じる

SI-167 (Fig.258、PL.61・127・128・172・185・188・218)

遺構 SI-167はFU16に位置する。遺構の重複は無い。平面形は2.43m x 2.51mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(5.9)m²、遺構確認面から床面までは0.30mを測る。主軸方位はN-1.0°-E。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は平面図では不明確だが、幅86cm、長さ50cmを測るとみられ、先端に向けて上方に傾斜する。燃焼部は図化されていないが、壁ラインにかかって位置するとみられ、



Fig.239 SI-159出土遺物実測図

半円形に壁を掘り広げている。奥壁には瓦が据えられているが、現場所見では元位置ではないが、壁に沿って設置されていた可能性を記している。貯蔵穴・支柱穴は認められない。

周溝はカマドのある北壁以外は回っているとみられる。その他の施設として、北西隅に棚状の掘り込みが認められる。

出土遺物 1~5・7・8は土師器杯で、1は体部外面に墨書「 」が認められる。2は底部内面に墨書「門カ」が認められる。6は土師器椀で、内面にやや不整であるが、4つに配置された同心円を基調とした暗文が、ヘラミガキ後に施されている。9は土師器皿、10は土師器甕、11は凸面縄目の平瓦で、陰刻印の「周」が押印されている。

土層 カマド:1、黒褐色土中に焼土粒少し混じる 2a、山砂粘土 2b、黒褐色土中に粘土多く混じる 3、黒褐色土中に焼土粒多く含む 4、黒色土中に炭化物・黒褐色土含む 5、焼土粒・灰・黒褐色土 6、粘土 7、粘土

SI-168 a(Fig.259、PL.62・128・172・185)・b(Fig.259・260、PL.62・128・172)

遺構 SI-168aはFU24に位置する。南東側でSI-168bと、他にSK-123~125と重複する。平面形は北東隅が外側に張り出し、不整形を示すが、それ以外の部分では2.43m x 4.43mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(13.7)m²、遺構確認面から床面までは0.09mを測る。主軸方位は不明。カマド・貯

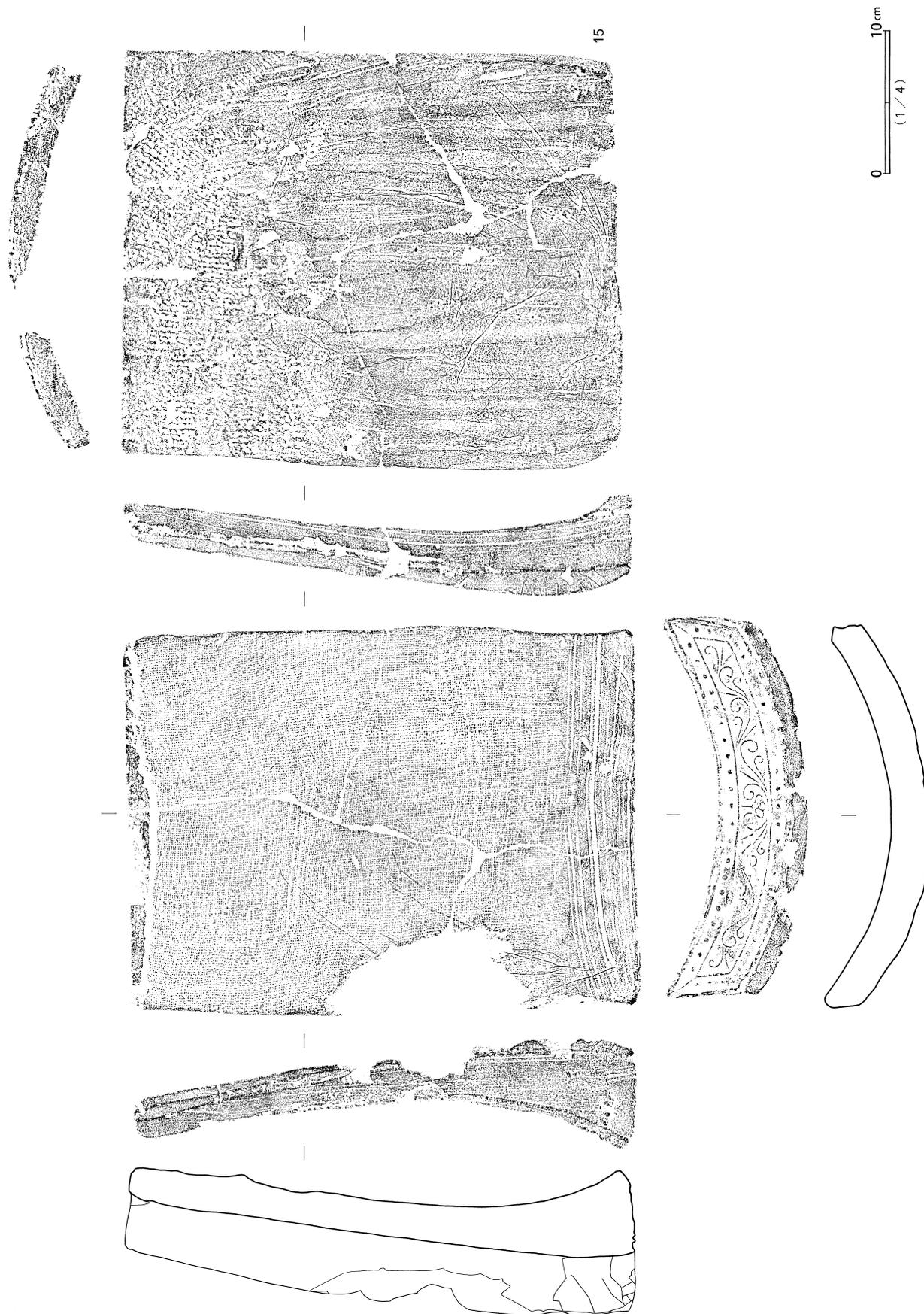


Fig.240 SI-159出土遺物実測図

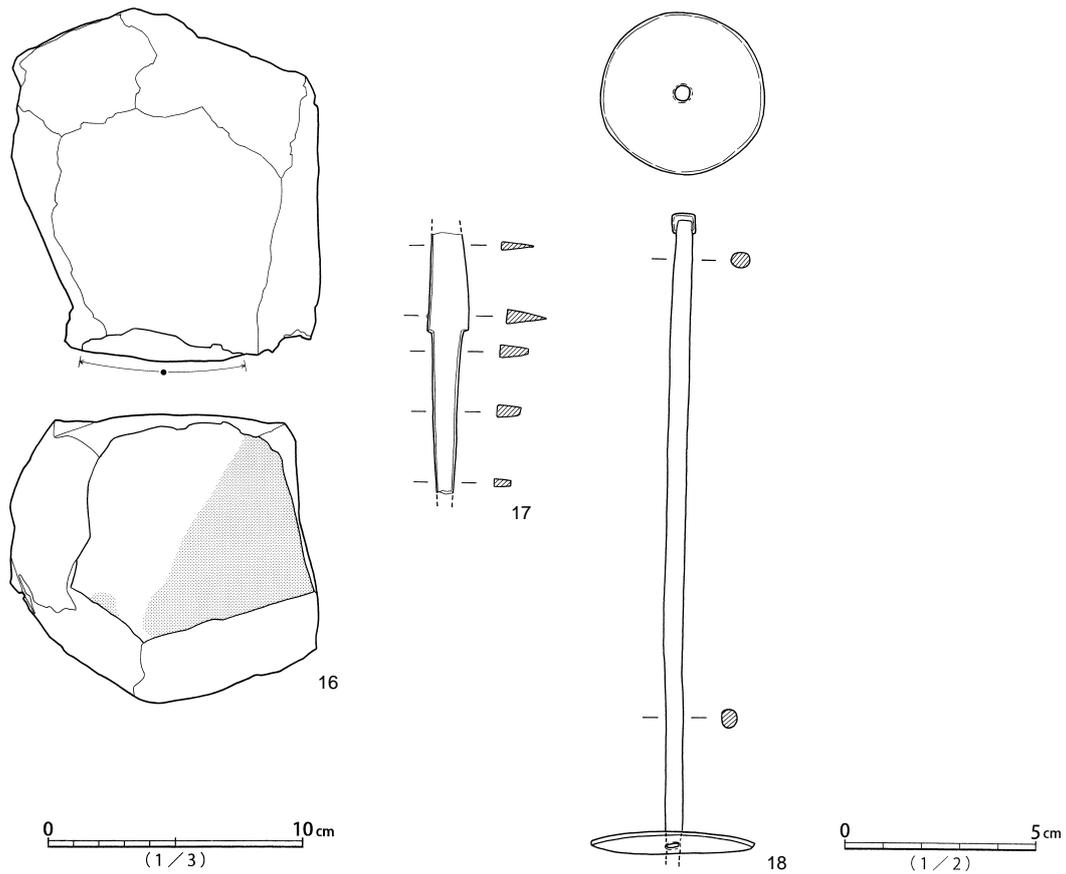


Fig.241 SI-159出土遺物実測図

蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1・4～6は土師器杯で、1は底部外面に墨書が認められるが、判読不明である。2は土師器椀、3は足高高台付杯で、床直上からの出土、7は土師器鉢である。

遺構 SI-168bはFU24に位置する。北西側でSI-168aと重複する。平面形は2.99m × 2.93mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(6.5)m²、遺構確認面から床面までは0.08mを測る。主軸方位はN-2.8°-E。カマドは南東隅に位置するが、詳細は不明。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1は土師器杯で、床直上からの出土、2は土師器椀で内面に黒色処理を施し、3～6は土師器小杯、7は土師器甕、8・9は須恵器甕である。

SI-169 α (Fig.261・262、PL.62・128・172)・β (Fig.261・262、PL.62・128・218)・γ (Fig.261・263、PL.62・128・172)

遺構 SI-169aはFU45に位置する。北東側でSI-169bと重複する。カマド煙道部が攪乱をうけている。平面形は2.84m × 2.95mの方形を呈する。遺構確認面における面積は8.1m²、遺構確認面から床面までは0.33mを測る。主軸方位はN-18.0°-E。カマドは北東壁中央に位置する。煙道部は幅96cm、長さ160cmを測り、先端に向けて上方に傾斜し、先端部でPit状の掘り込みを伴う。燃烧部は図化されていないが、壁ラインより内側に位置するものとみられる。燃烧部と煙道部の間に半円形に壁を掘り広げている部位が認められる。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。

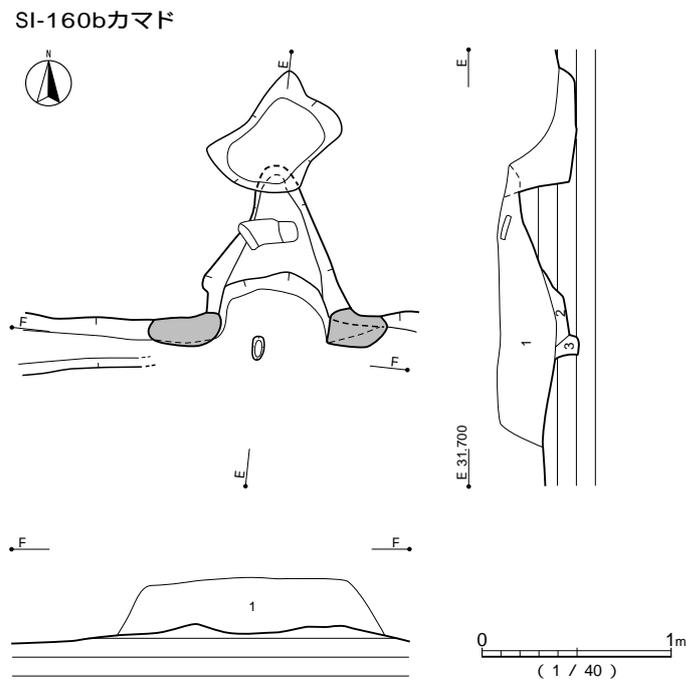
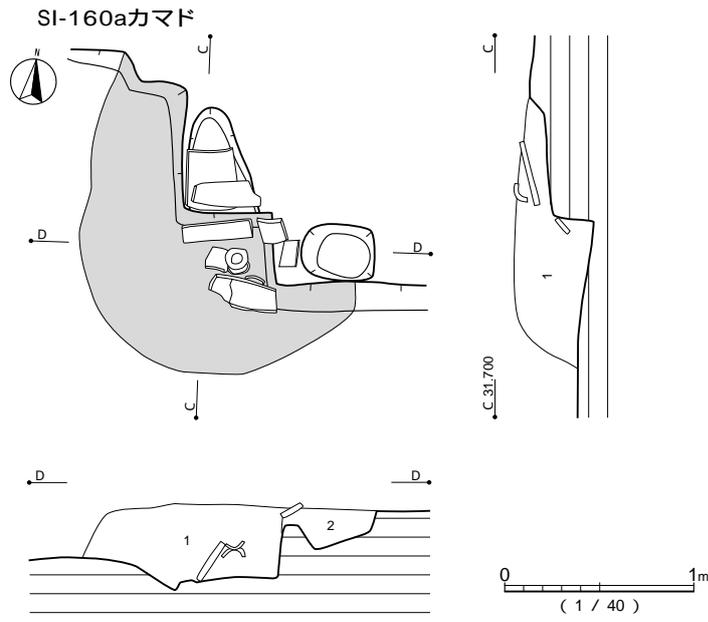


Fig.243 SI-160遺構実測図

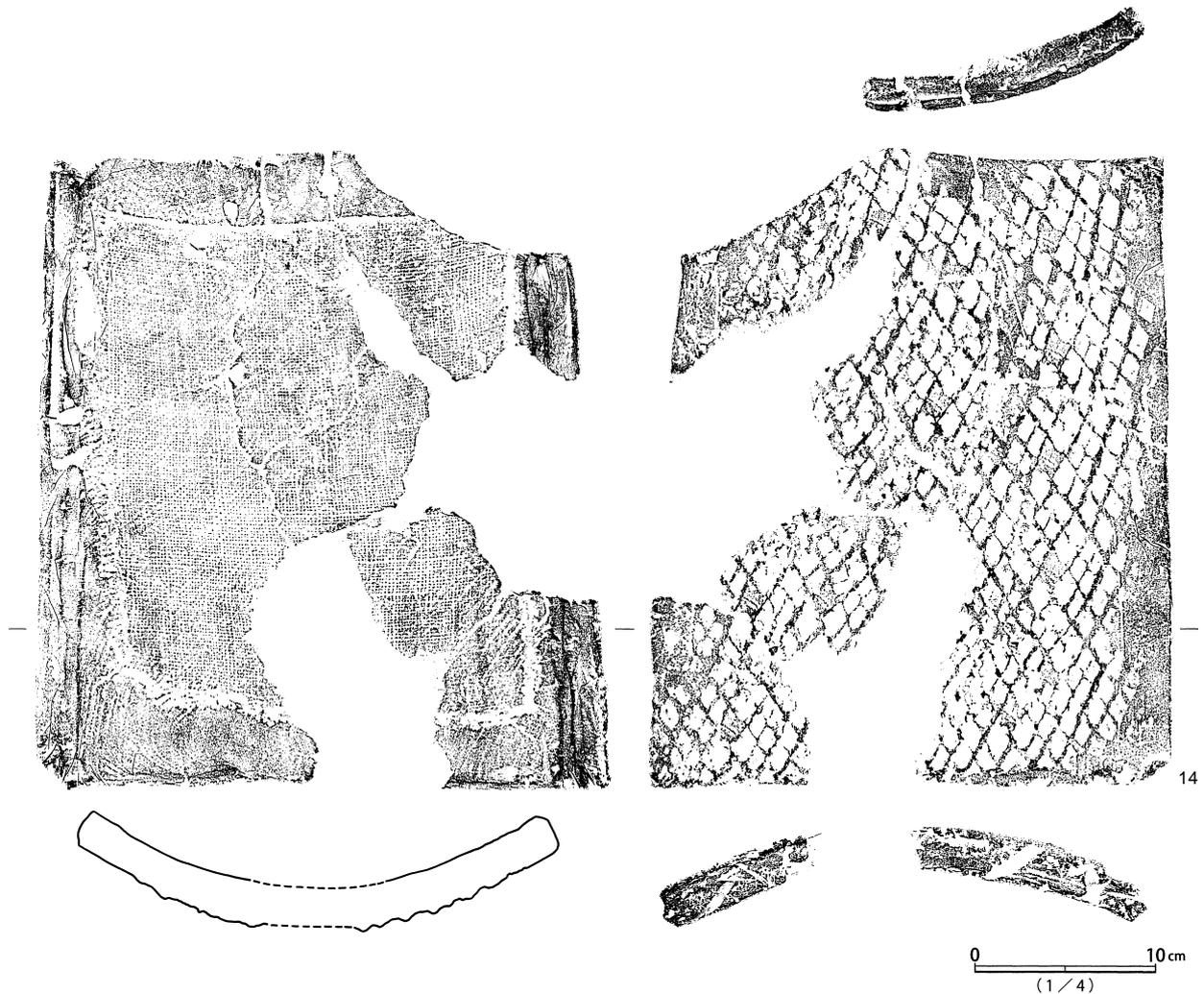


Fig.244 SI-160出土遺物実測図

出土遺物 1は土師器甕、2は須恵器甕である。

土層 カマド:1、黒褐色土中にローム粒少し混じる 2、粘土+ローム粒、ローム粒が少し混じる黒褐色土を同程度含む 3、黒褐色土をローム粒と同程度もしくは多く含み粘土多く混じる 4a、粘土 4b、粘土、黒褐色土を同程度含む 5、粘土+ローム粒、ローム粒が少し混じる黒褐色土を同程度含む 6、焼土、灰粘土粒多く混じる、粘土、黒褐色土を同程度含む 7、黒褐色土ローム粒大多く混じる、焼土少し混じる 8、粘土多く混じる黒褐色土堅い、黄褐色土黒色土少し混じる 9、粘土 10、黒褐色土中に黄褐色土多く混じる 11a 粘土 11b、黄褐色土 12a、粘土 12b、黒褐色土中に粘土多く混じる 13、黒褐色土中にローム粒大・粘土ブロック混じる 14、ローム粒土 15、黒色土

遺構 SI-169bはFU45に位置する。南西側でSI-169aと、北側でSI-169cと重複する。SI-169cとは切り合い状況から、本遺構が新しい。平面形は2.45m×2.85mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(6.7)m²、遺構確認面から床面までは0.20mを測る。主軸方位はN-2.5°-E。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は認められない。燃烧部は図化されていないが、壁ラインの内側に位置するものとみられ、掘り込みを伴う。貯蔵穴・主柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1~4は土師器杯、5は土師器大形杯で、内面黒色処理を施す。6は灰釉陶器椀、7は軒平瓦

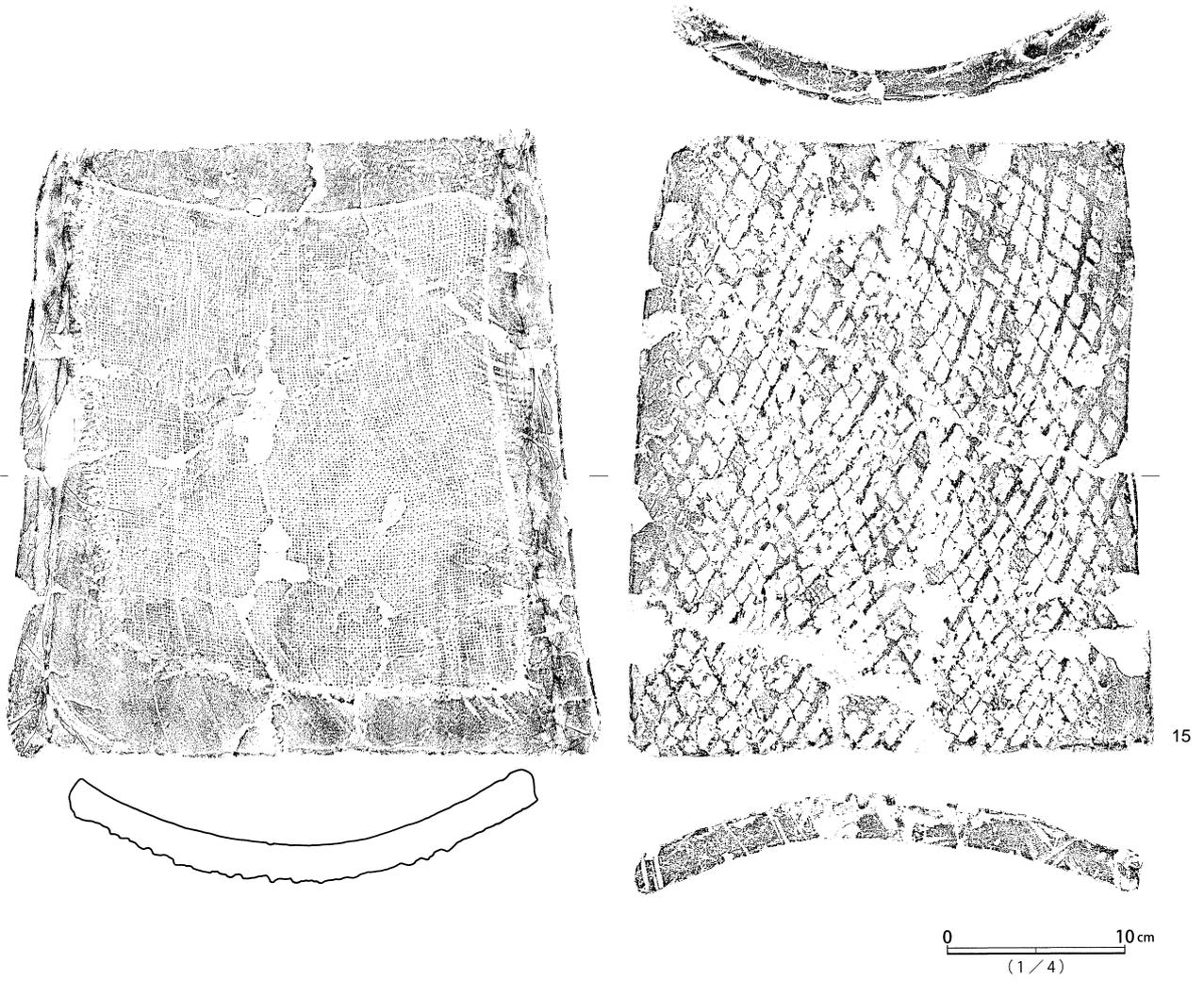
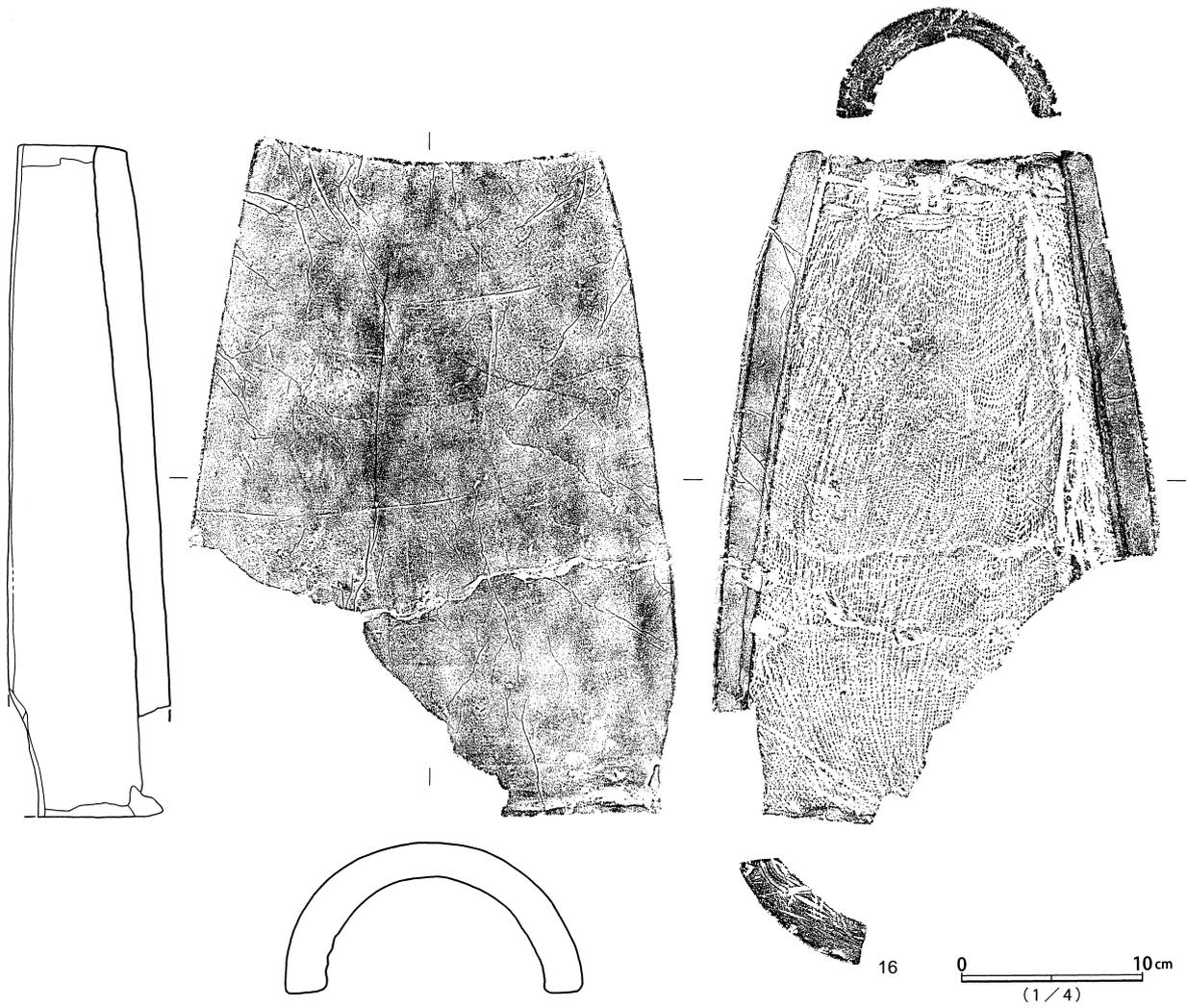


Fig.245 SI-160出土遺物実測図



SI-160b

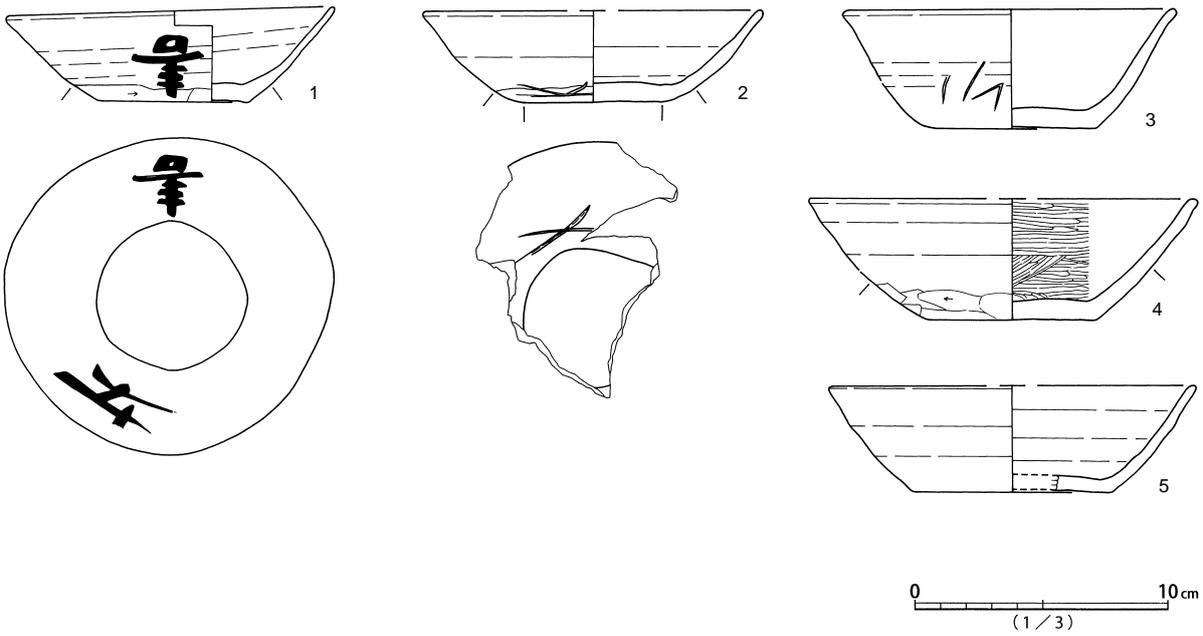


Fig.246 SI-160出土遺物実測図

である。

遺構 SI-169cはFU45に位置する。南側でSI-169bと、東側でSD-5aと重複する。SI-169bとの新旧関係は、切り合い状況から本遺構が古い。平面形は2.75m x(3.17)mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.5)m²、遺構確認面から床面までは0.13mを測る。主軸方位は不明。カマド・貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1は土師器足高高台付杯、2~4は土師器小杯で、2は底部に焼成後の穿孔が認められる。5は須恵器甕である。

SI-170 (Fig.263、PL.129・172)附章参照

遺構 SI-170は位置が不明である。遺構図が無く、概略図の観察となるため詳細は不明である。資料からは本遺構がSI-189である可能性が高いが、遺物はここで掲載する。遺構の重複は無い。

平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は14.9m²。カマドは北壁中央に位置する。支柱穴は不規則な位置に配されているとみられる。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1は土師器杯、2は須恵器甕である。

SI-171 a(Fig.264・265、PL.63・129・172・185)・b(Fig.264~267、PL.63・129・172・218・232)

遺構 SI-171aはFU52に位置する。南側でSI-171bと重複する。平面形は4.15m x 3.75mの方形を呈する。遺構確認面における面積は14.8m²、遺構確認面から床面までは0.54mを測る。主軸方位はN-19.5°-E。カマドは北壁に位置し、ほぼ同位置での造り替えが認められる。現場所見から煙道部は、東側(東カマド)が新しく、西側(西カマド)が古い。東カマドの煙道部は幅24cm、長さ116cmを測り、先端に向けて下方に傾斜する。燃焼部は壁ライン上にかかって位置し、掘り込みを伴う。カマド付け根部にPit8・9を伴う。西カマドの煙道部は長さ122cmを測り、先端に向けて下方に傾斜するとみられる。燃焼部は壁ライン上にかかって位置するとみられ、掘り込み及びPit6・7を伴う。貯蔵穴は認められない。支柱穴は規則的に配置されている。Pitの深さは、P1は不明、P2は63cm、P3は不明、P4は69cm、P5は不明、P6は32cmを測る。周溝はカマド以外は回っている。

出土遺物 1~7は土師器杯で、1は底部内外面に墨書が認められるが、一部である可能性があり、判読できない。4は体部外面に墨書が認められるが、一部である可能性があり、判読できない。8は土師器椀、9~13は土師器甕で、12は口縁部が片口を呈する。14は須恵器杯、15は須恵器甕、16は灰釉陶器椀、17は緑釉陶器皿である。

土層 カマド:1、黒褐色土粘土粒、焼土粒混じる黒色が強い、ローム粒 2、黒褐色土中に粘土粒・焼土粒やや多く混じる 3、粘土中に山砂を含む 4、焼土中に灰層含む 5、炭化物 6、粘土 7、粘土中に焼土・炭化物混じる 8、ロームブロック、粘土上面に焼けた面が少しある、黒褐色土焼土少し混じる 9、焼土粒・黒褐色土 10、粘土 11、焼土・粘土粒 12、焼土粒黒褐色土、粘土多く混じる 13、粘土 14、黒褐色土 15、黒褐色土中に焼土・粘土ブロック混じる 16、粘土中に黒色土少し混じる 17、黒褐色土中にローム粒・粘土粒混じる 18、粘土粒中に灰混じる 19、黄褐色土 20、焼土中に炭・ローム粒混じる 21、焼土、粘土焼け? 22、黒褐色土中に粘土粒多く・焼土粒少し混じる 23、黒褐色土 24、ロームブロック主体で粘土混じる 25、黄褐色土中に粘土粒・黒褐色土混じる 26、黒褐色土 27、ロームブロック・黒褐色土 28、やや黄色の粘土

遺構 SI-171bはFU52に位置する。側でSI-171aと重複する。SI-171aとの新旧関係は、かまど断面図

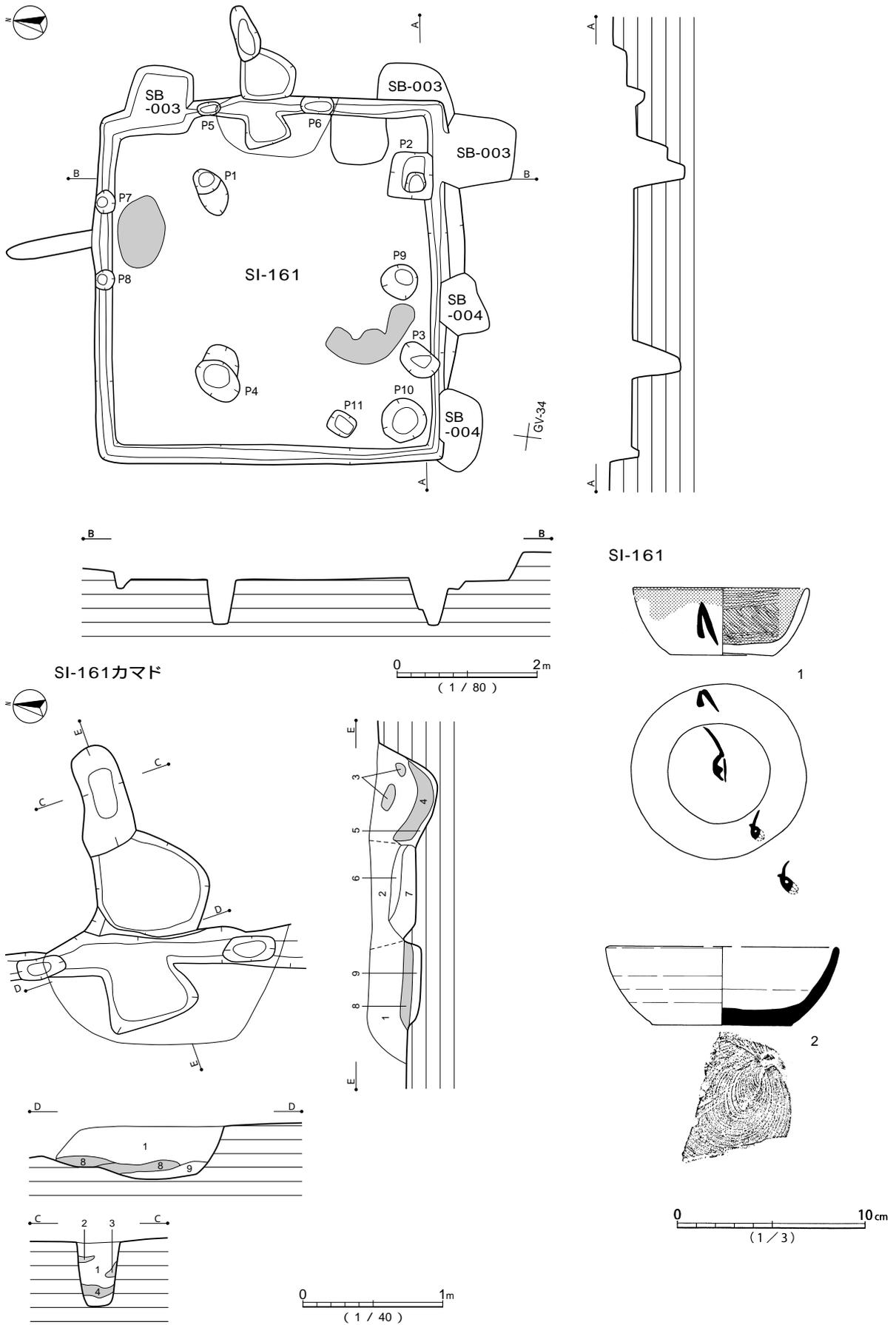


Fig.247 SI-161遺構・出土遺物実測図

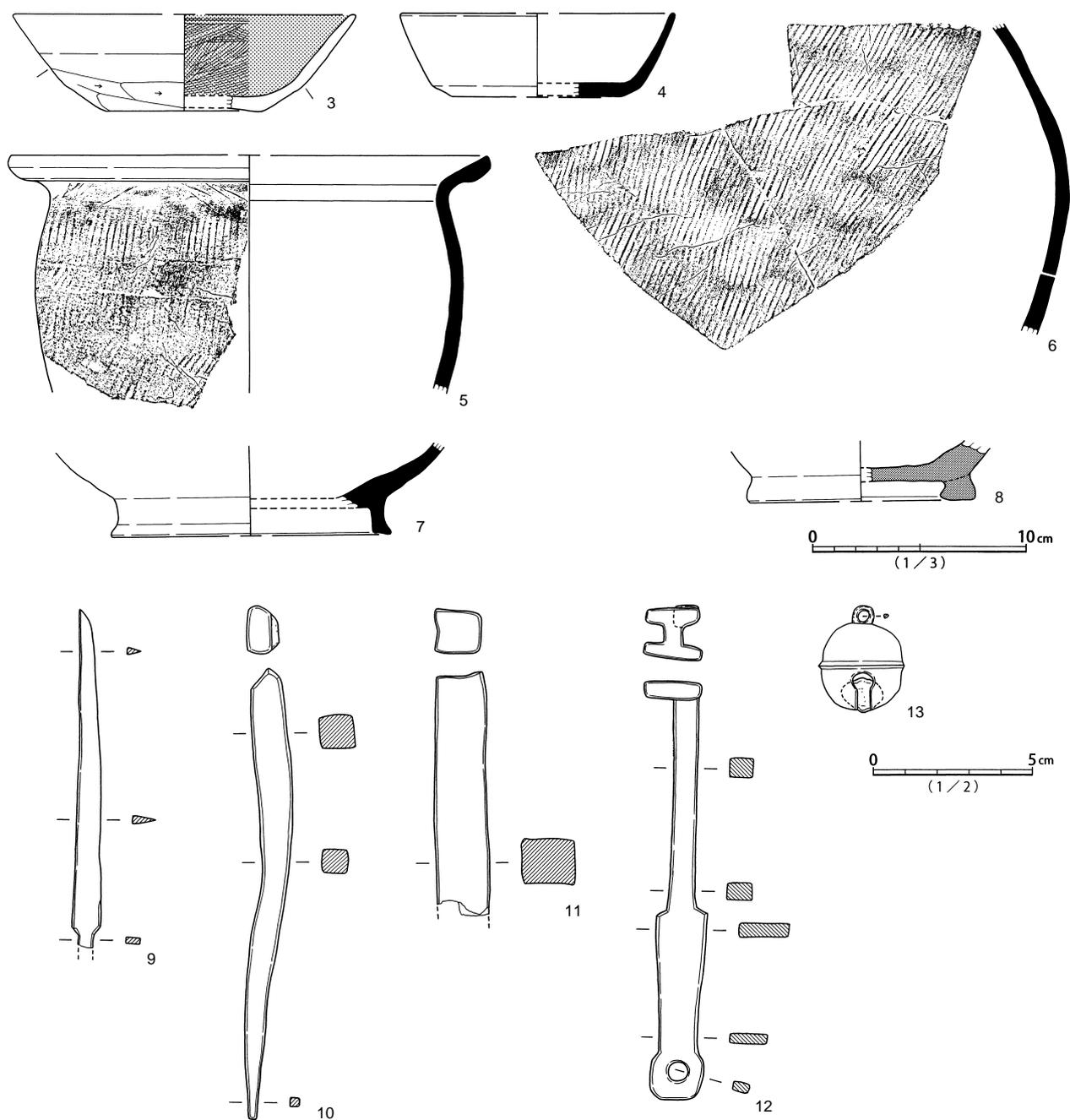


Fig.248 SI-161出土遺物実測図

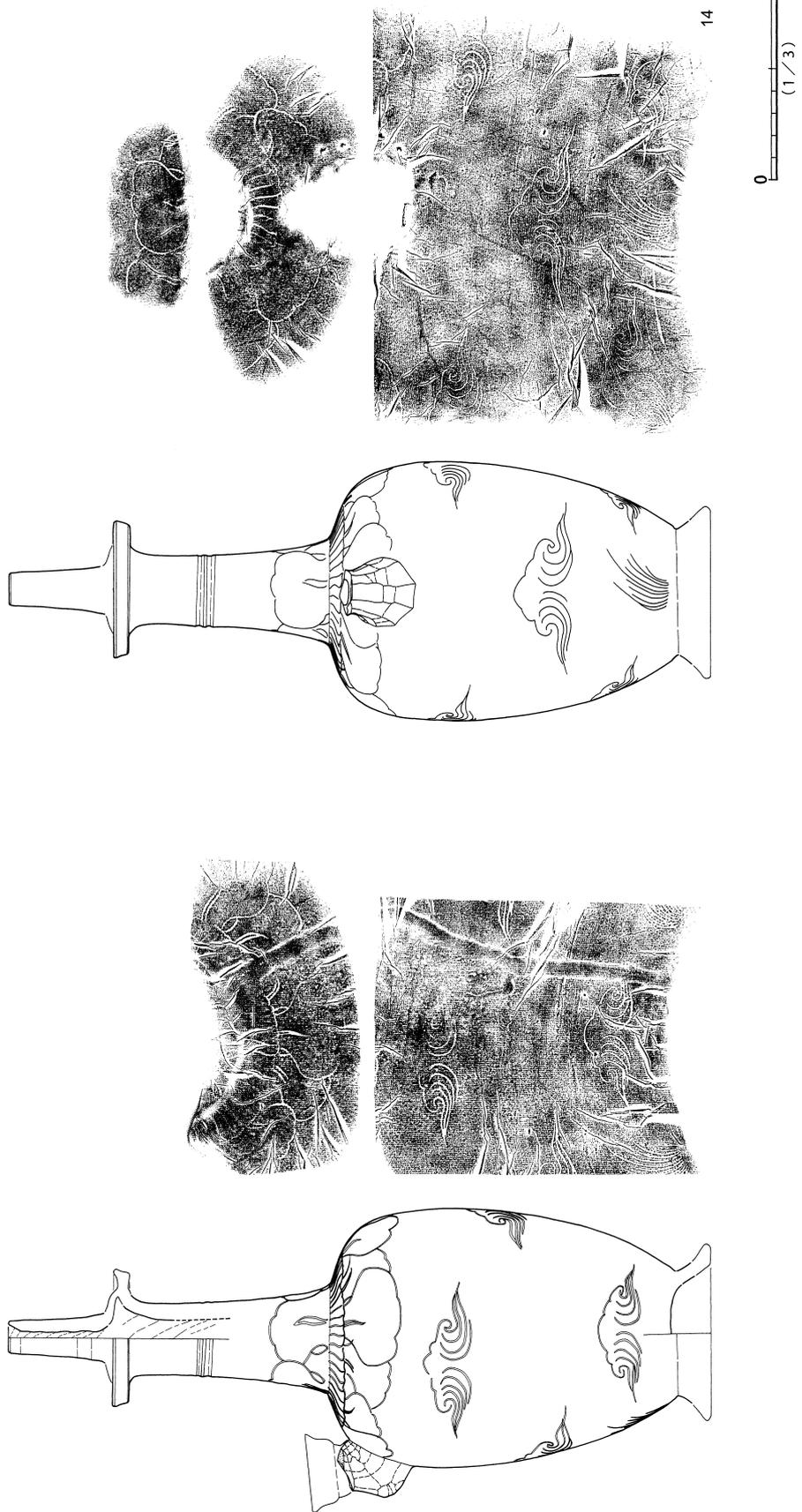


Fig.249 SI-161出土遺物実測図

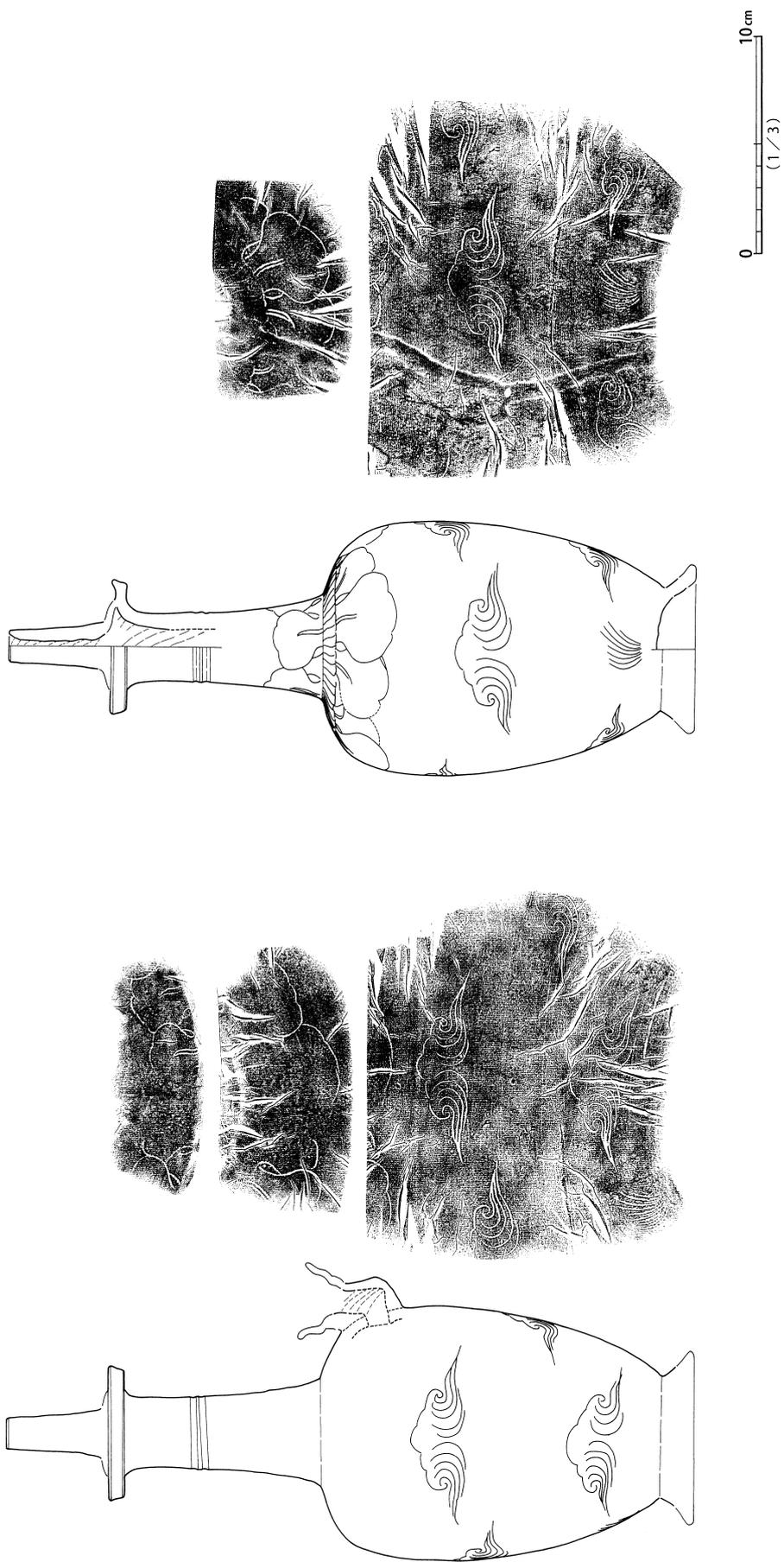


Fig.250 SI-161出土遺物実測図

SI-162

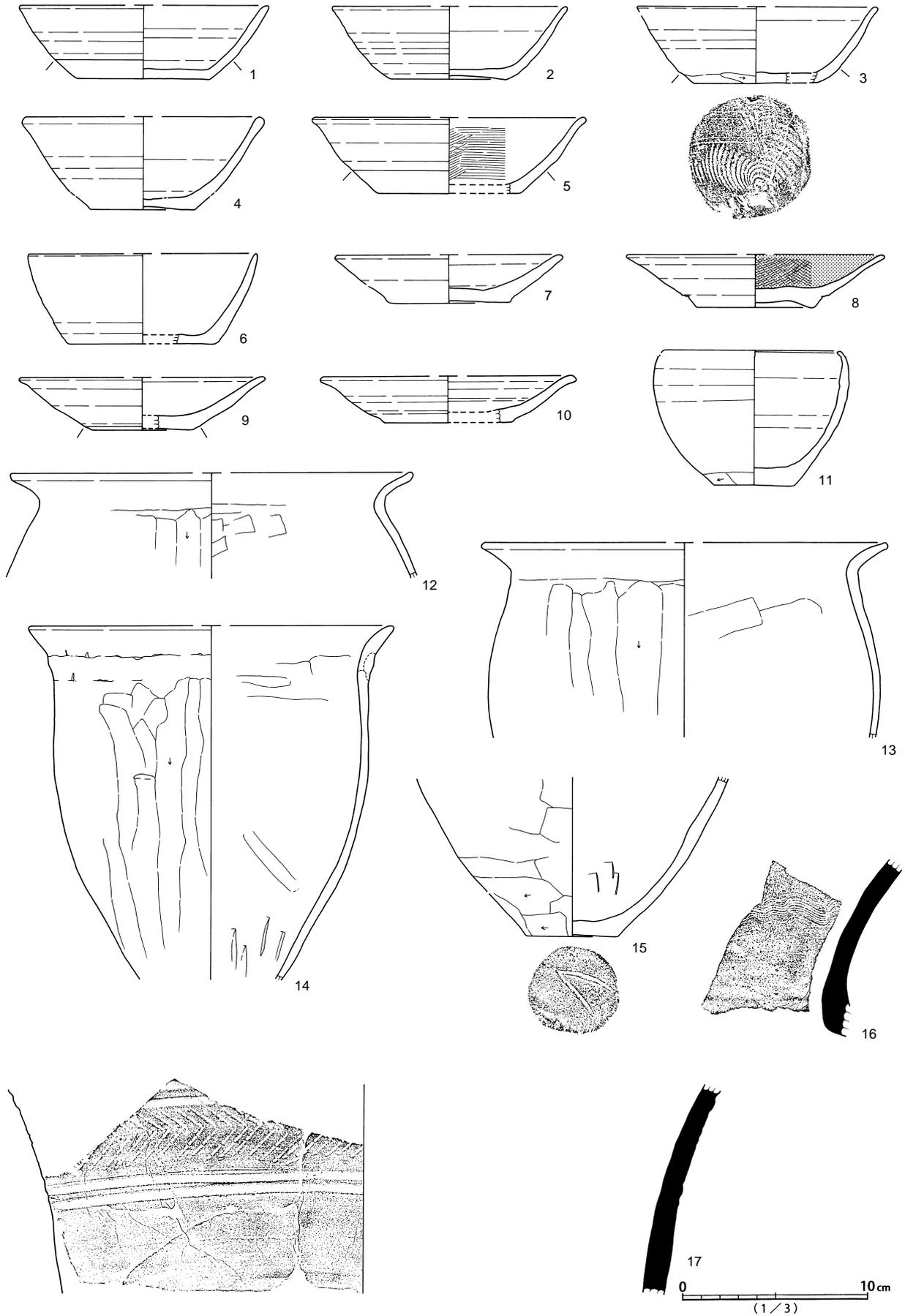


Fig.251 SI-162出土遺物実測図

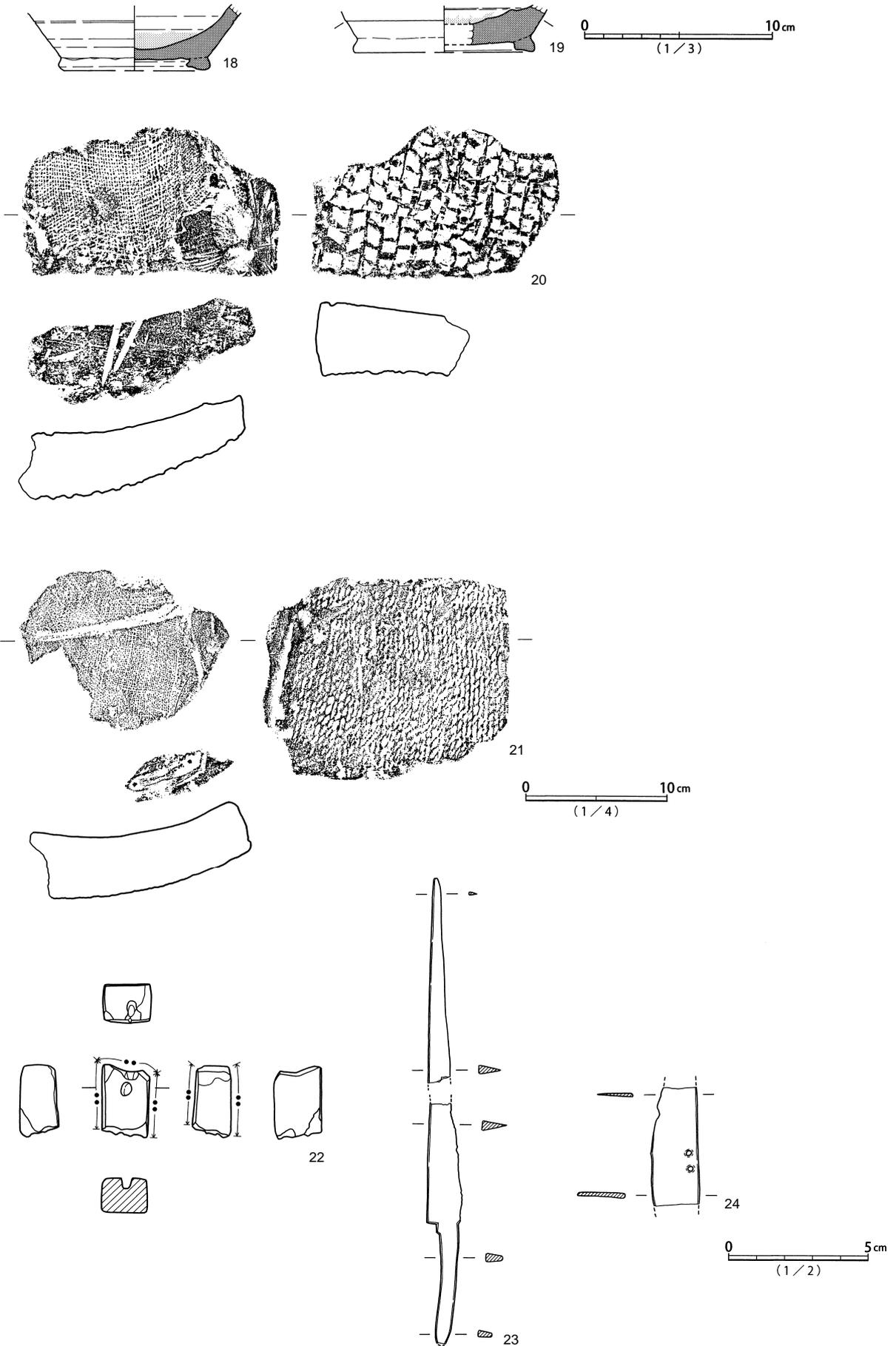
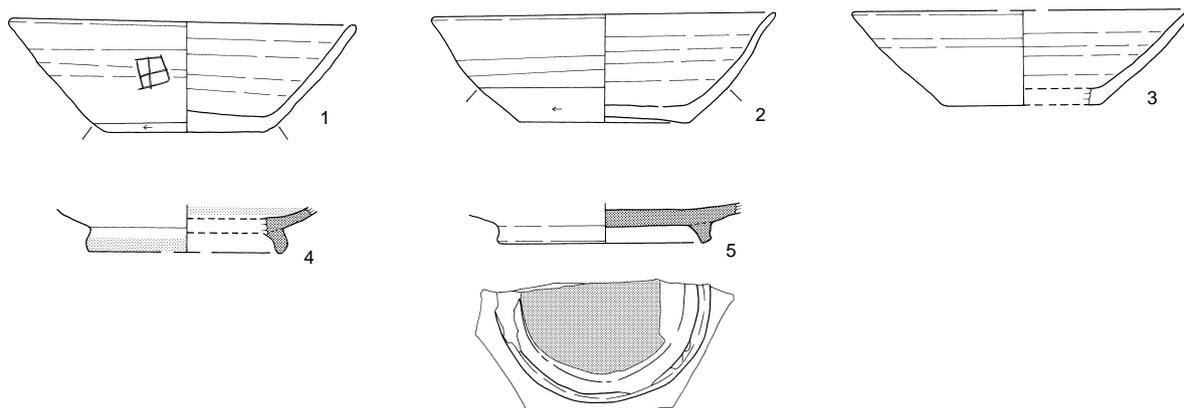


Fig.252 SI-162出土遺物実測図

SI-163



SI-164

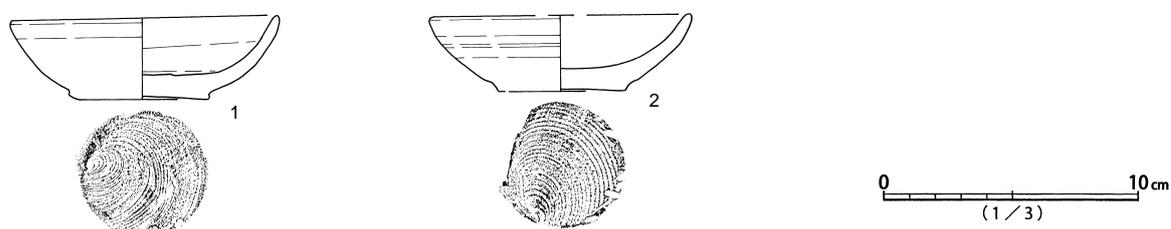


Fig.253 SI-163・164出土遺物実測図

から、本遺構が新しい。平面形は3.82m×3.81mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(13.8) m²、遺構確認面から床面までは0.40mを測る。主軸方位はN-79.5°-E。カマドは北東壁のやや東隅に寄って位置し、煙道部は長さ120cmを測り、先端に向けて下方に傾斜し、先端でPit状の掘り込みを伴う。燃焼部は図化されていないが、壁ラインより内側に位置するとみられ、掘り込みを殆ど伴わない。貯蔵穴・主柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は55cm、P2は39cm、P3は35cmを測る。周溝はカマド直下及び遺構重複範囲以外で回っている。

出土遺物 1~5は土師器杯、6は土師器椀、7~9は土師器甕、10・11は須恵器甕で10は転用硯、12は行基造りの丸瓦、13・14は鉄製刀子である。

土層 カマド:1、粘土黒褐色土混じる 2、黒褐色土焼土粒、粘土粒、ローム粒多く混じる、粘土やや多く混じる 3、黒褐色土灰、焼土粒少し混じる 4、焼土粒、灰、黒褐色土 5、焼土粒を黒褐色土より多く含む 6、炭化物を含む黒色土を焼土と同程度もしくは多く含む 7、黄褐色土 8、炭化物を含む黒色土をローム粒大と同程度もしくは多く含む 9、粘土 10、灰 11、粘土 12、焼土粒 13、粘土 14、焼土粒、粘土粒灰少し混じる 15、黒褐色土ローム粒混じる 16、黄褐色土風化したローム 17、黒褐色土と粘土粒を同程度含む 18、黒褐色土ローム粒、粘土粒混じる 19、黒褐色土、ローム粒焼土、粘土粒混じる 20、ローム粒黒褐色土混じる 21、黒褐色土灰、焼土粒多く混じる 22、黒褐色土ローム粒多く混じる 23、ローム粘土の誤りか

SI-172 a(Fig.268・269、PL.63・64・129・232)・b(Fig.268・269、PL.63・64・129・130・172・226・232)・c(Fig.268・270、PL.63・64・130・172・232)

遺構 SI-172aはFV51に位置する。南側でSI-172bと重複する。平面形は2.67m×2.60mの方形を呈す

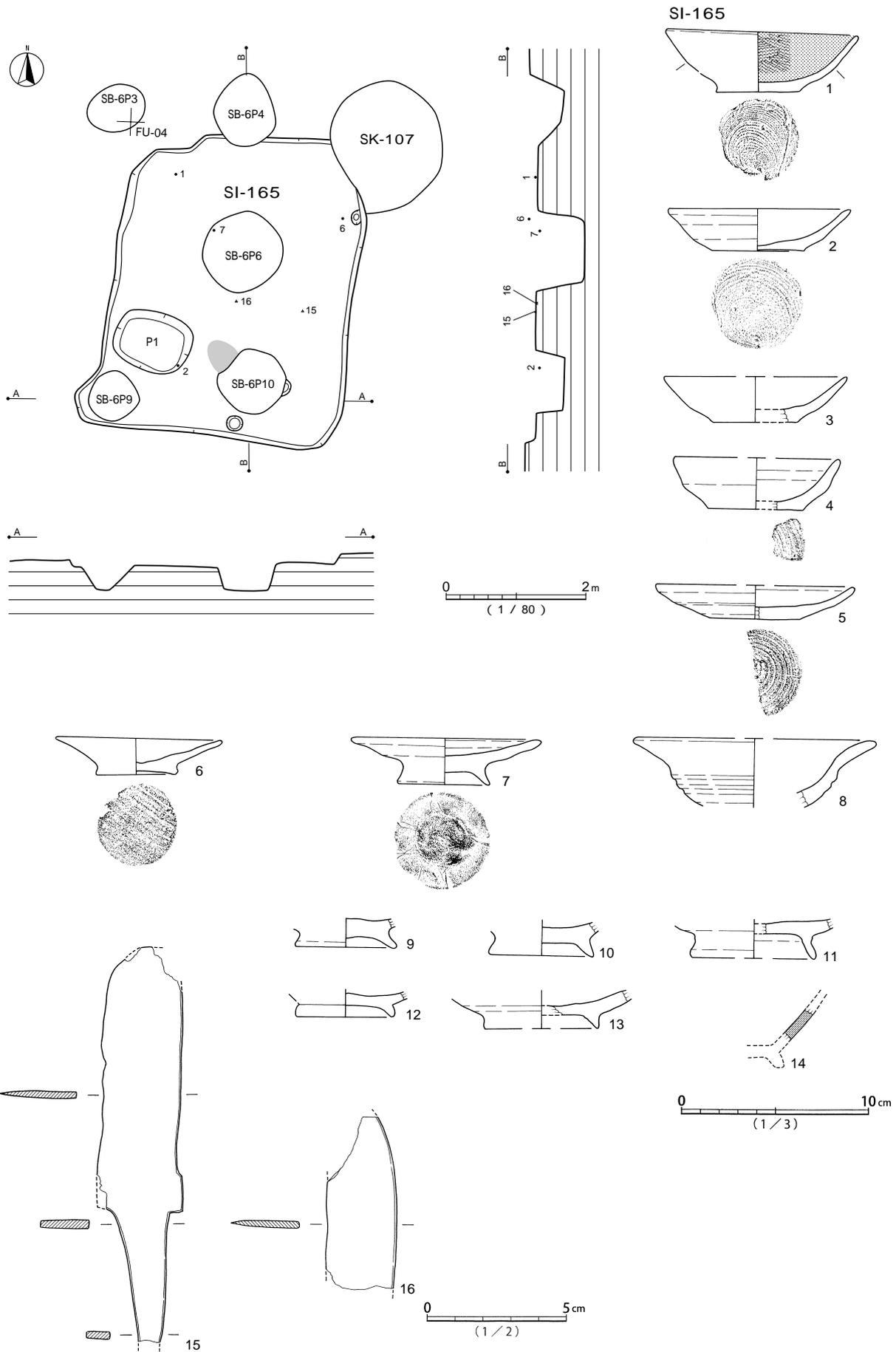


Fig.254 SI-165遺構・出土遺物実測図

る。遺構確認面における面積は6.9m²、遺構確認面から床面までは0.09mを測る。主軸方位はN-14.0°-E。カマドは北壁の北西隅に寄って位置する。粘土範囲のみの図化であるため、詳細は不明。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝はカマド直下以外全周するとみられる。

出土遺物 1・2は土師器杯、3は土師器椀で、内面にヘラミガキ後、十字を中心に円弧を4単位配した暗文が認められ、黒色処理を施している。4は鉄鏃である。

遺構 SI-172bはFV51に位置する。北側でSI-172aと、南側でSI-172cと重複する。平面形は3.08m×3.23mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.6)m²、遺構確認面から床面までは0.13mを測る。主軸方位はN-13.0°-E。カマドは北壁の北東隅によって位置する。煙道部は明瞭には認められない。燃烧部は壁ラインの内側に位置し、殆ど掘り込みを伴わない。奥壁は壁を半楕円形に掘り広げている。元位置ではないとみられるが、瓦が燃烧部上方から出土している。台付甕の脚部の転用か。貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は29cm、P2は10cm、P3は14cmを測る。周溝はカマド直下及び攪乱範囲以外回っている。

出土遺物 1・2は土師器杯、3・4は足高高台付杯、5は土師器椀、6は土師器甕、7は石棒で、敲石に転用、8は石皿、9は鉄製刀子である。

土層 カマド:1、黒褐色土中にローム細粒・粘土粒多く混じる 2、黒褐色土中にローム細粒・焼土粒混じり部分的に粘土混じる 2、黒褐色土中にローム細粒・焼土粒混じり部分的に粘土混じる、焼土、粘土粒多く含む 3、粘土 4、黄褐色土汚れて黒色 5a、粘土 5b、黒褐色土中に粘土多く・焼土粒少し混じる 6、粘土 7、黒色土・黄褐色土 8、焼土粒・黒褐色土

遺構 SI-172cはFV51に位置する。北側でSI-172bと重複する。平面形は3.85m×3.73mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(14.0)m²、遺構確認面から床面までは0.28mを測る。主軸方位はN-13.5°-E。カマドは北壁に位置するとみられるが、壁の内側に入りすぎており、粘土範囲はカマドをかき出したものである可能性が高い。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は重複・攪乱範囲以外回っている。

出土遺物 1~3・5は土師器杯、4は土師器椀で、内面に黒色処理を施す。6は須恵器甕、7は鉄釘である。

土層 カマド:1、焼土粒 2、粘土 3、黒色土中に粘土やや多く混じる

SI-173 (Fig.271、PL.64・130・172・226)

遺構 SI-173はFU69に位置する。北側でSK-148・149と重複する。平面形は3.27m×2.97mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.2)m²、遺構確認面から床面までは0.11mを測る。主軸方位はN-14.0°-E。床面の硬化は弱い。カマドは認められない。構築材の散布も確認されていない。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1・2は土師器杯、3は土師器小杯、4は足高高台付杯、5は白磁椀 類、6は白磁皿 類、7は磨石である。

SI-174 (Fig.272、PL.64・65・130・172・185・237)

遺構 SI-174はEU08に位置する。遺構の重複は無い。平面形は2.84m×2.72mの方形を呈する。遺構確認面における面積は7.3m²、遺構確認面から床面までは0.16mを測る。主軸方位はN-13.0°-E。床面は硬化している。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅24cm、長さ20cmを測り、先端に向けて下

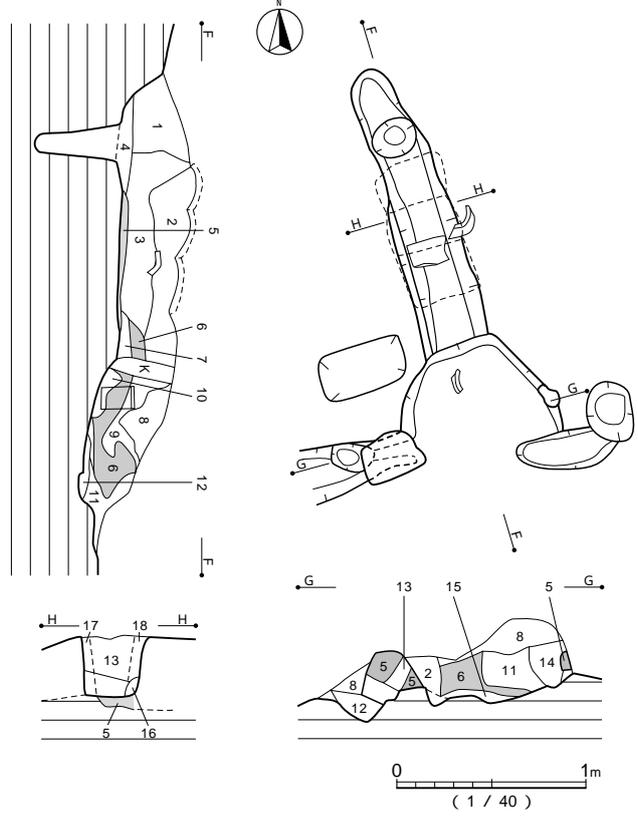
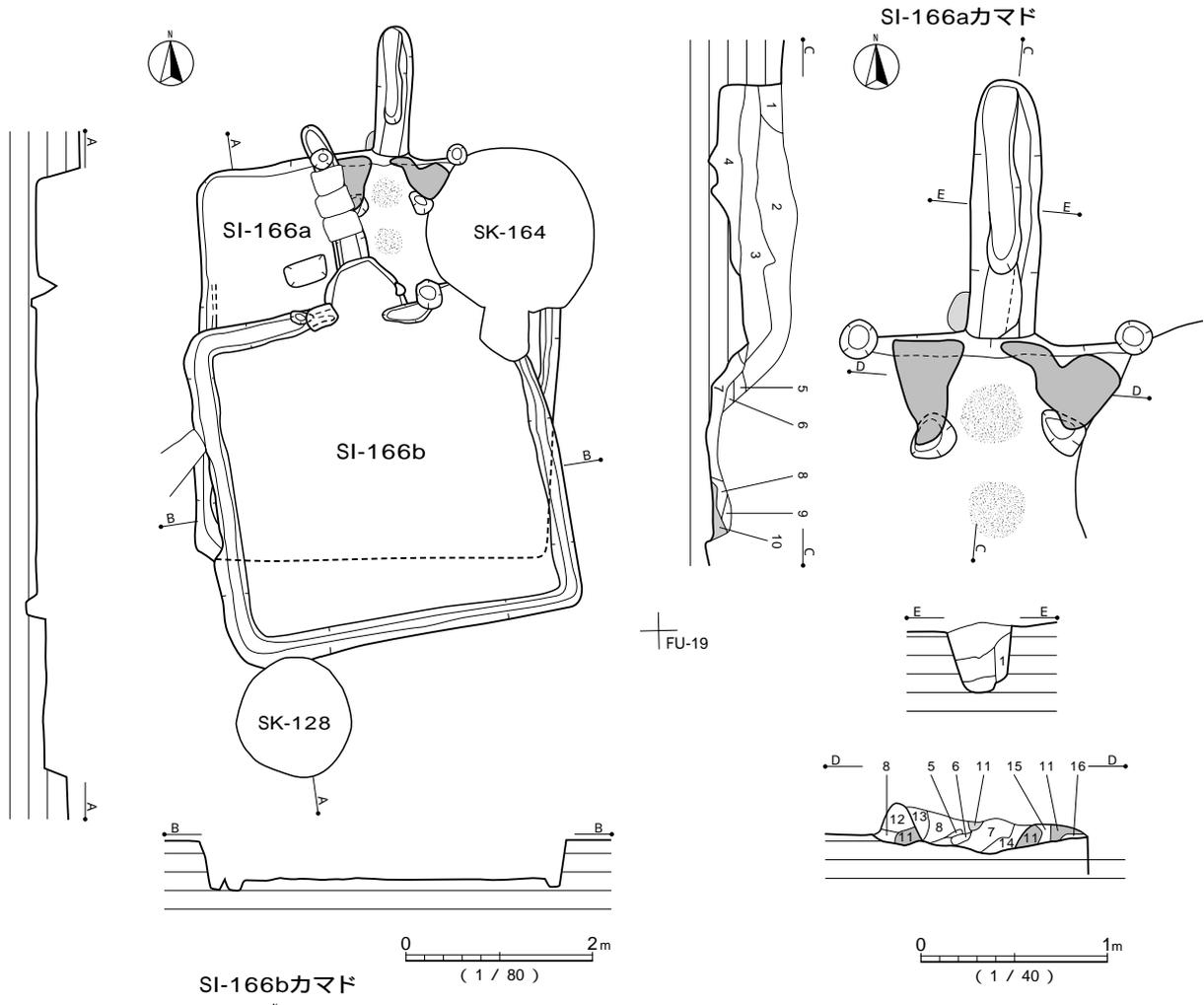


Fig.255 SI-166遺構実測図

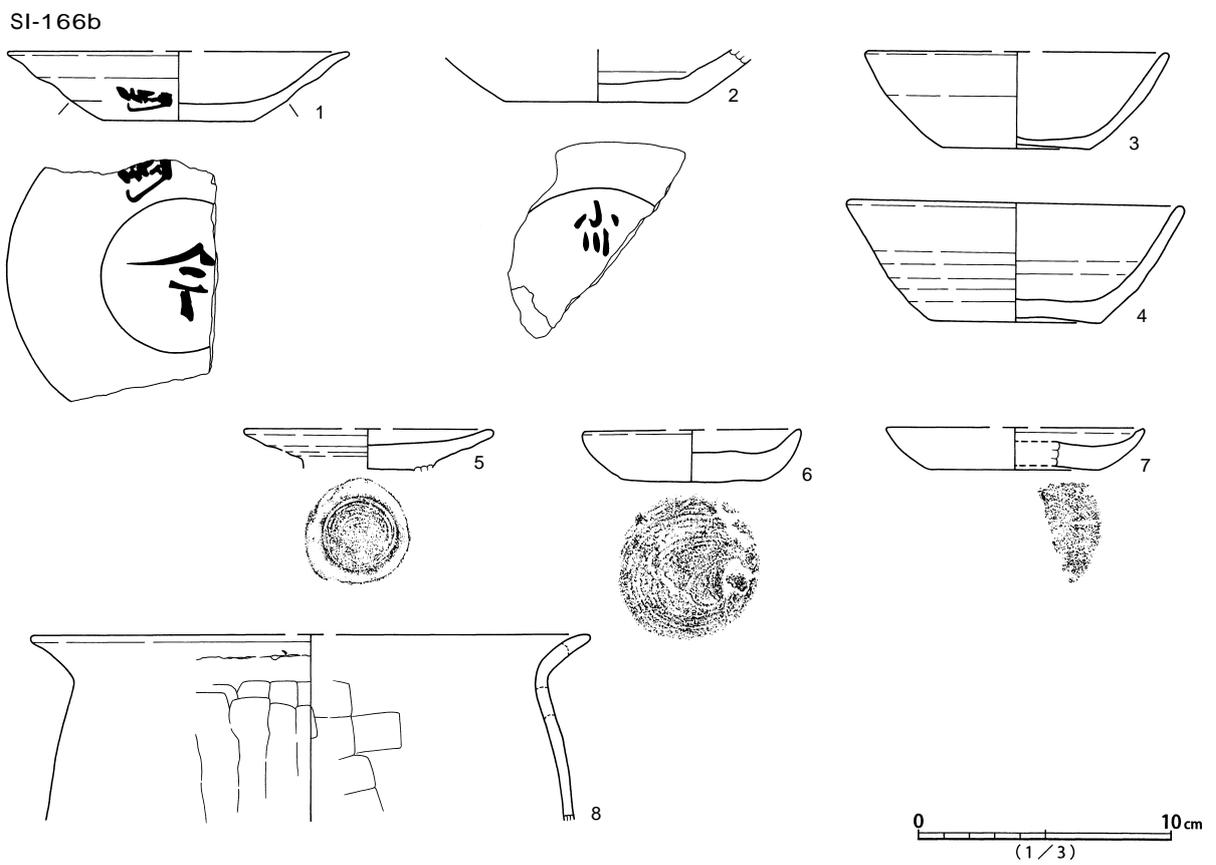
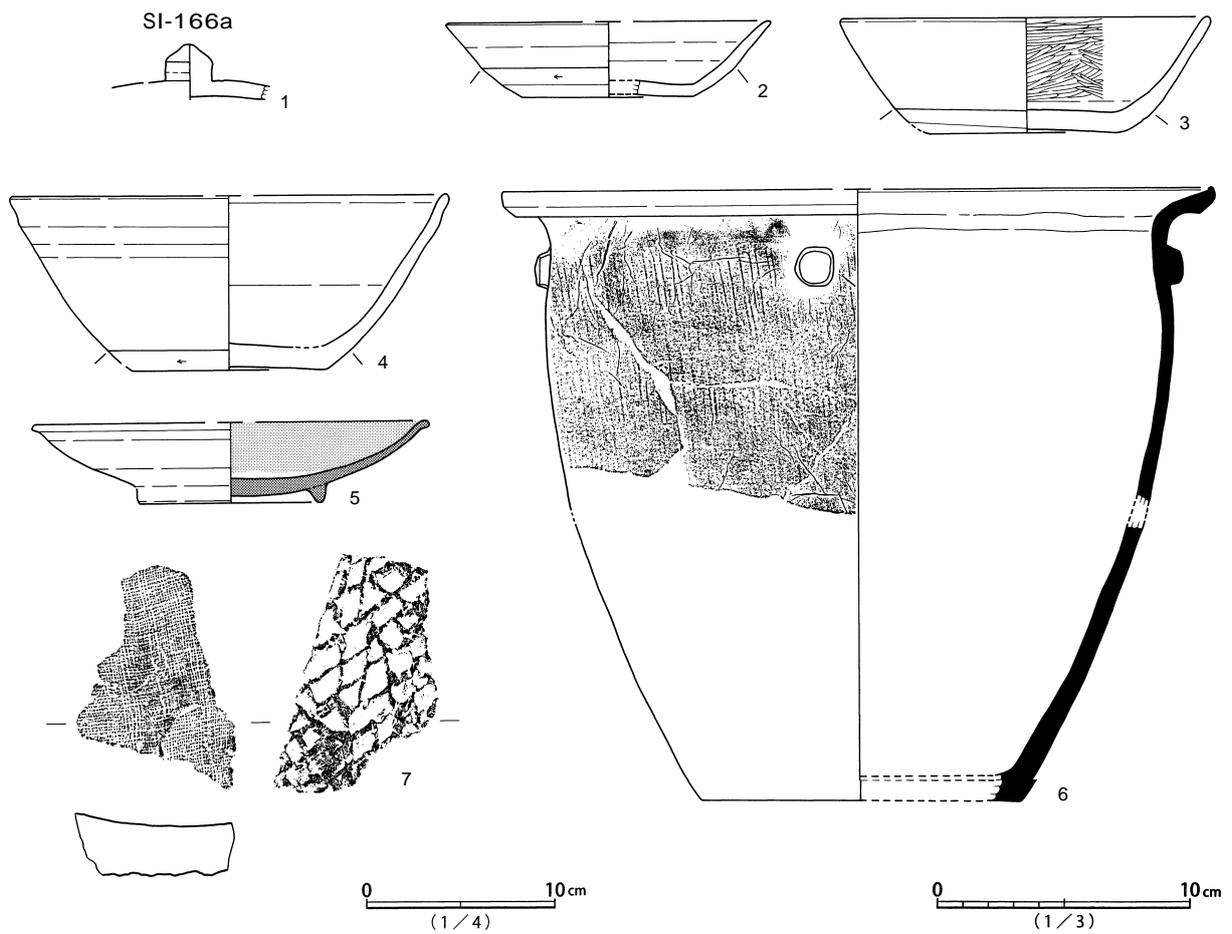


Fig.256 SI-166出土遺物実測図

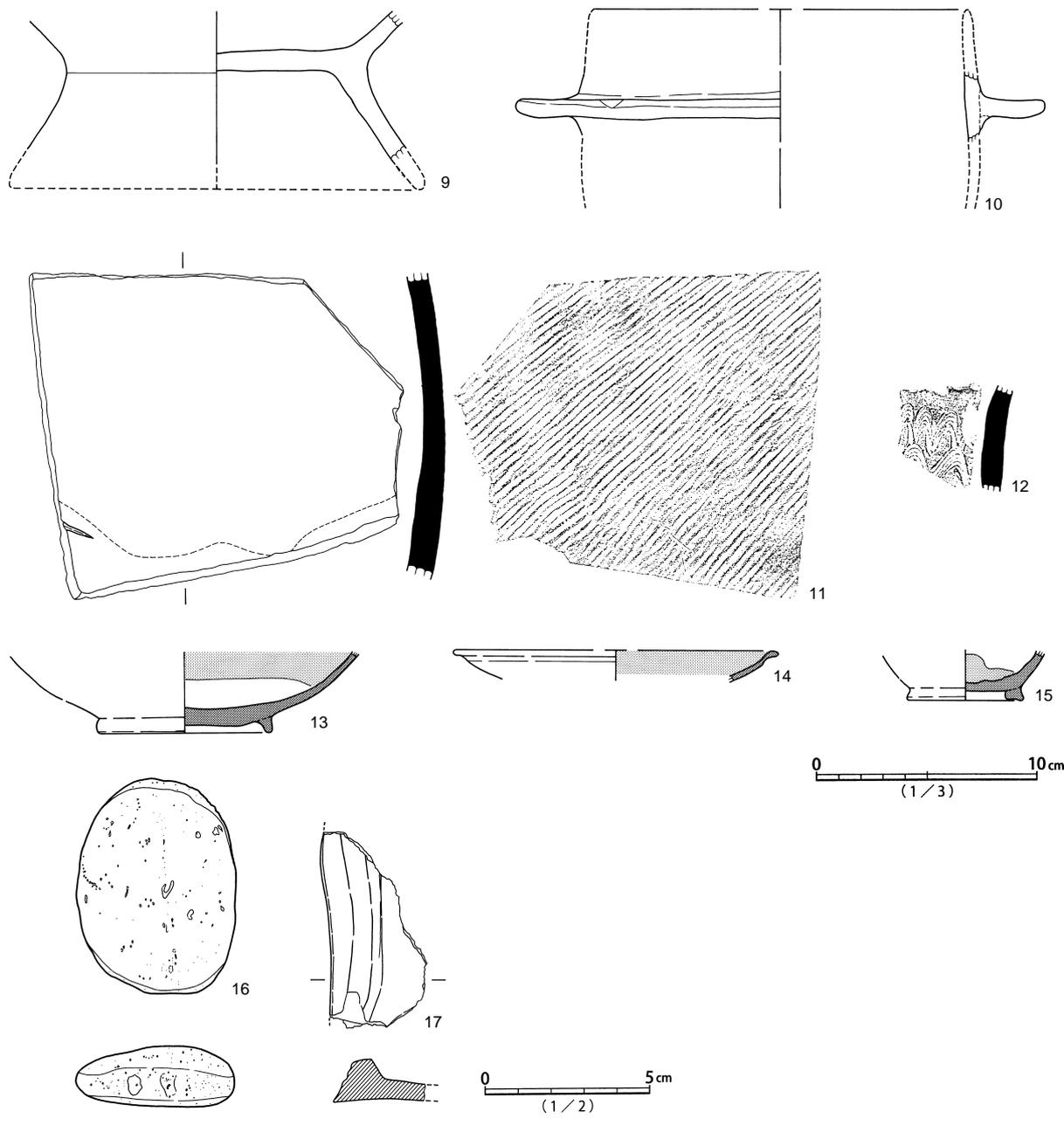


Fig.257 SI-166出土遺物実測図

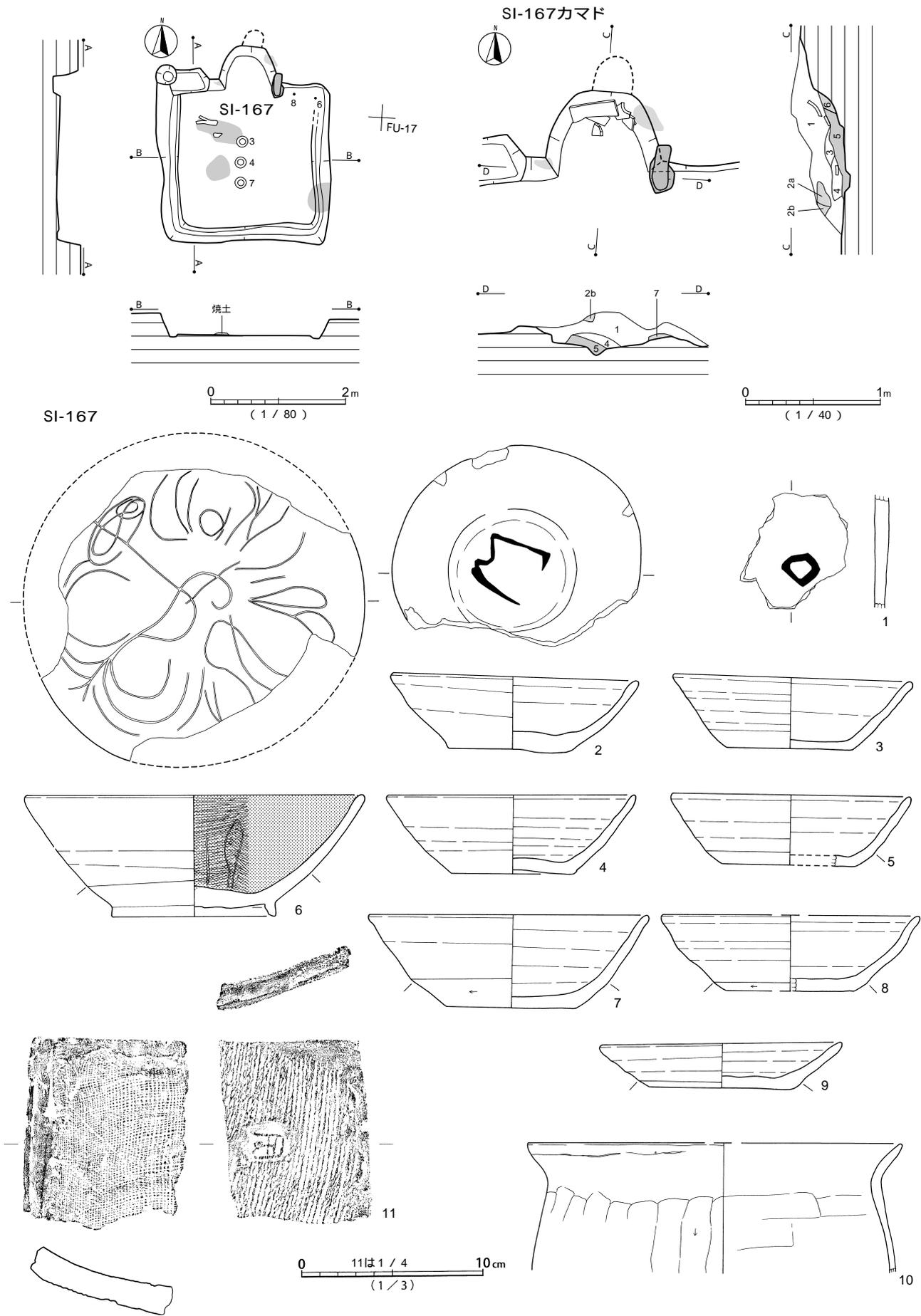


Fig.258 SI-167遺構・出土遺物実測図

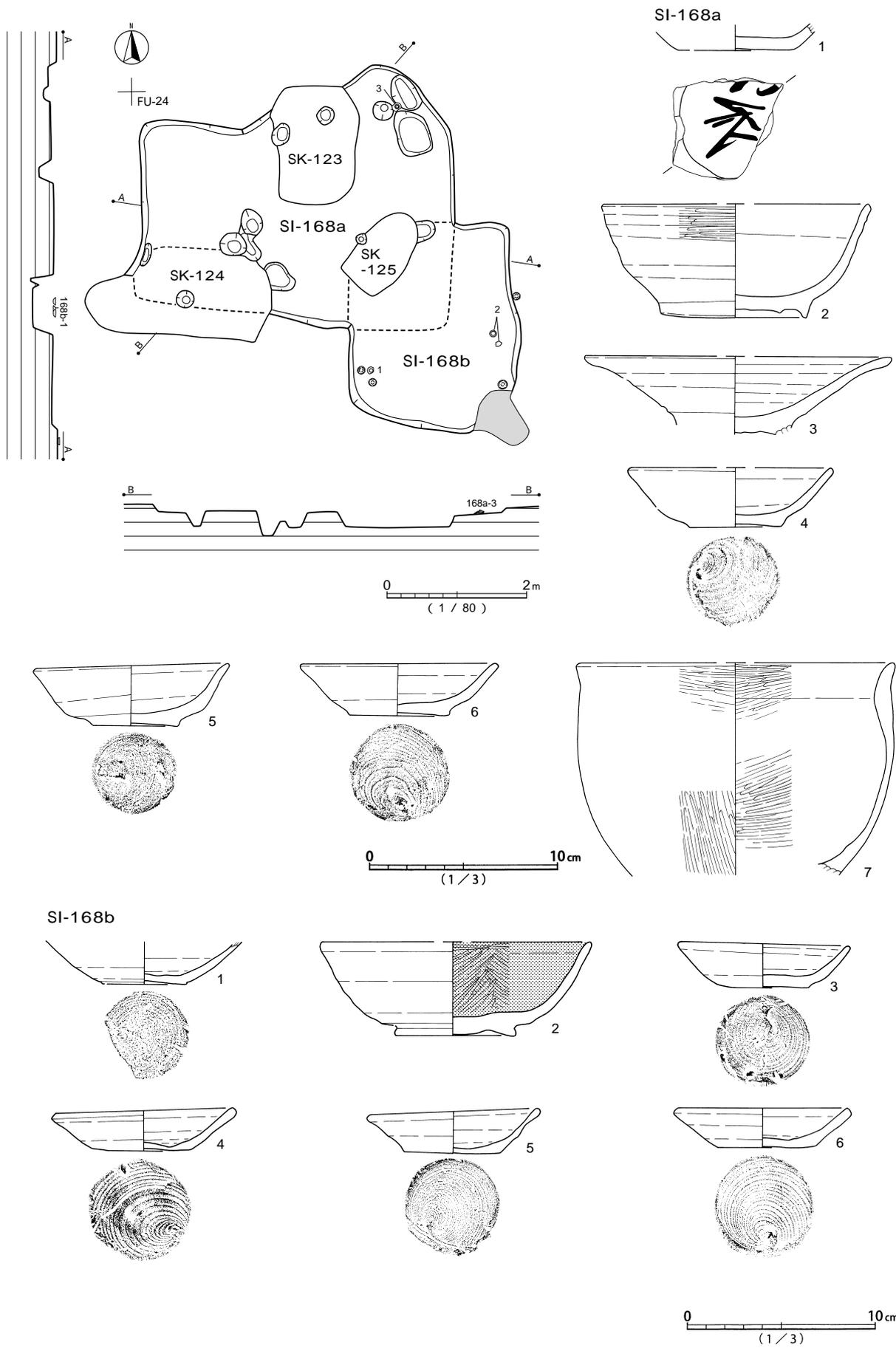


Fig.259 SI-168遺構・出土遺物実測図

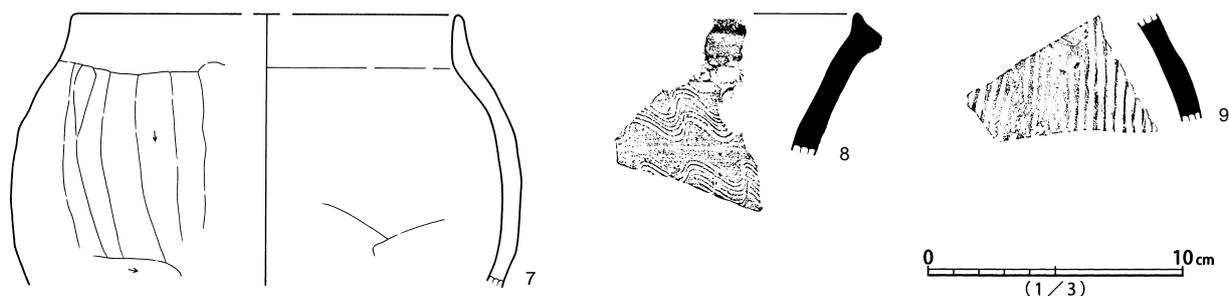


Fig.260 SI-168出土遺物実測図

方に傾斜する。燃烧部は壁ライン上に一部かかって位置する。カマド内から鉄滓が出土している。貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は不明、P2は29cmを測る。周溝はカマドのある北壁以外に回っている。

出土遺物 1~3は土師器杯で、3は底部内面に墨書「南」が認められる。4は足高高台付杯、5は土師器甕である。この他に鉄滓(小形椀形滓4、流状滓3、鉄滓3)が出土している。

土層 カマド:1、黒色土中に焼土多く・粘土少し混じる 2、粘土 3、焼土ローム焼ける 4、焼土・粘土・黒褐色土 5、黒褐色土中にローム粒少し混じる

SI-175 a(Fig.273~277、PL.65・130・131・172・185・191・193・195・219・232)・b(Fig.273・277、PL.65・131)

遺構 SI-175aはFU96に位置する。南側でSI-175bと重複する。平面形は3.74m×3.79mの方形を呈する。遺構確認面における面積は13.7m²、遺構確認面から床面までは0.36mを測る。主軸方位はN-17.0°-E。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅36cm、長さ104cmを測り、先端に向けて下方に傾斜し、先端部にPit状の掘り込みを伴う。この先端部には壁面に甕とみられる土器が据えられている。燃烧部は壁ラインの内側に位置し、掘り込みを伴う。貯蔵穴とみられるPitが南西隅に位置する。支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は不明、P2は28cmを測る。周溝は南壁の南東隅付近で途切れるが、ほぼ全周する。また、一部二重になる範囲が認められることから、カマド前の燃烧部も含めて、建物の拡張に伴う建替えの可能性はある。

出土遺物 1・3~19・21は土師器杯で、1は底部外面に墨書「七」が認められ、21は底部内面に円弧の連続したヘラガキが認められる。2・20は土師器椀で共に内面に黒色処理を施し、2は底部外面に墨書「卍」様の記号が認められる。22・23は土師器甕で、24は須恵器椀の転用硯、25は土師器鉢で、内面に4単位の円弧状と螺旋状の暗文が認められ、黒色処理を施している。26土師器皿、27~29は須恵器甕で、29は転用硯、30は灰釉陶器椀、31は灰釉陶器小壺、32は灰釉陶器壺、33は土師器杯の転用で、紡錘車の紡輪とみられる。34は玉縁の丸瓦、35~37は鉄製品で、35・36は釘、37は不明品である。

土層 カマド:1、黒褐色土中に粘土粒・ローム粒少し混じる 2、粘土 3、黒褐色土中に粘土ブロック・焼土ブロック多く混じる 4、焼土 5、炭化物黒色 6、灰褐色土中に焼土・灰混じる 7、汚れた焼土 8、焼土 9、炭化物 10、灰 11、焼土 12、黒褐色土中に焼土粒大粒多く含む 13、焼土粒 14、黒褐色土中に粘土粒・焼土粒混じる 15、焼土・暗褐色土 16、粘土張ったもの 17、黒褐色土中に焼土多く混じる 18、黒色が強い黒色土中に焼土混じる 19、黒色土中に粘土混じる 20、粘土・暗褐色土 21a、粘土 21b、黒褐色土中にローム粒・粘土粒混じる 22、焼土やや汚れる

SI-175a 東窪み (Fig.273・277、PL.65・131・226)

出土遺物 1は土師器杯、2は磨石である。

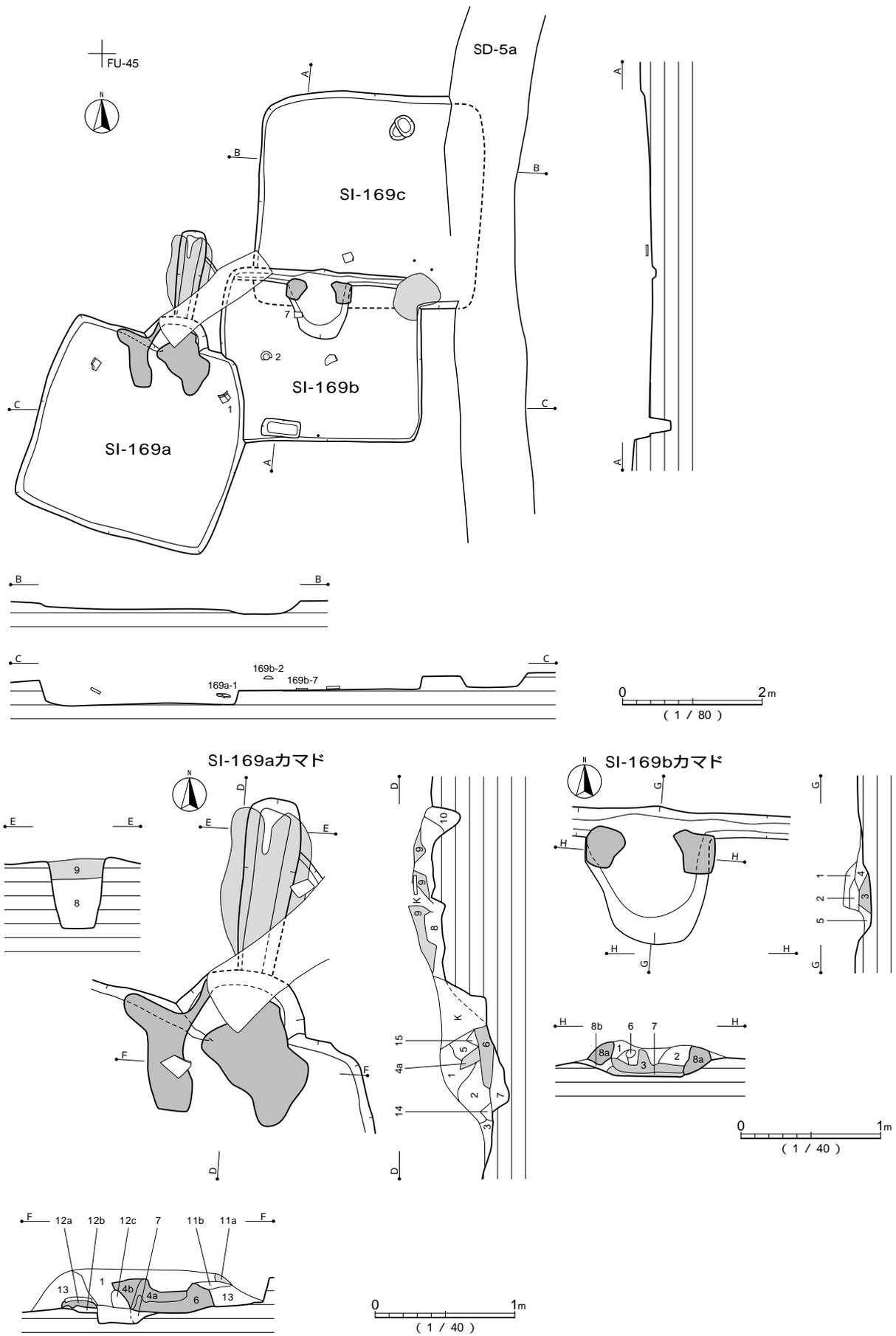
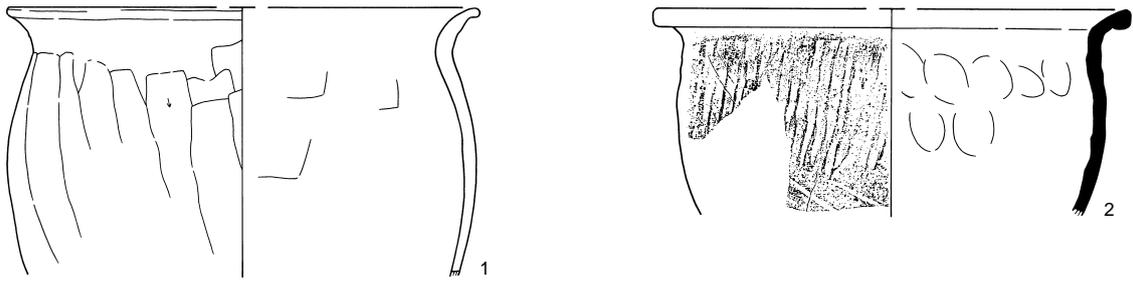
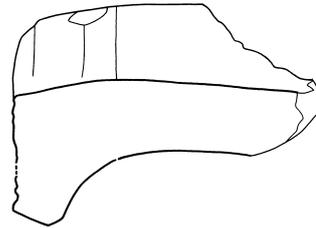
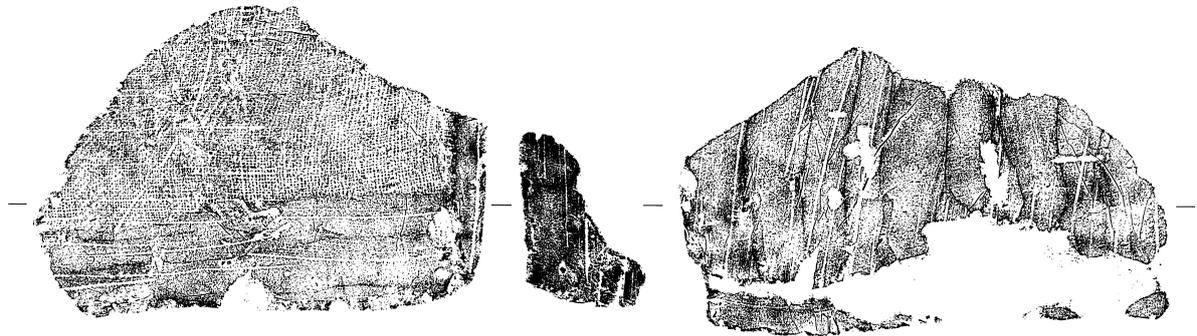
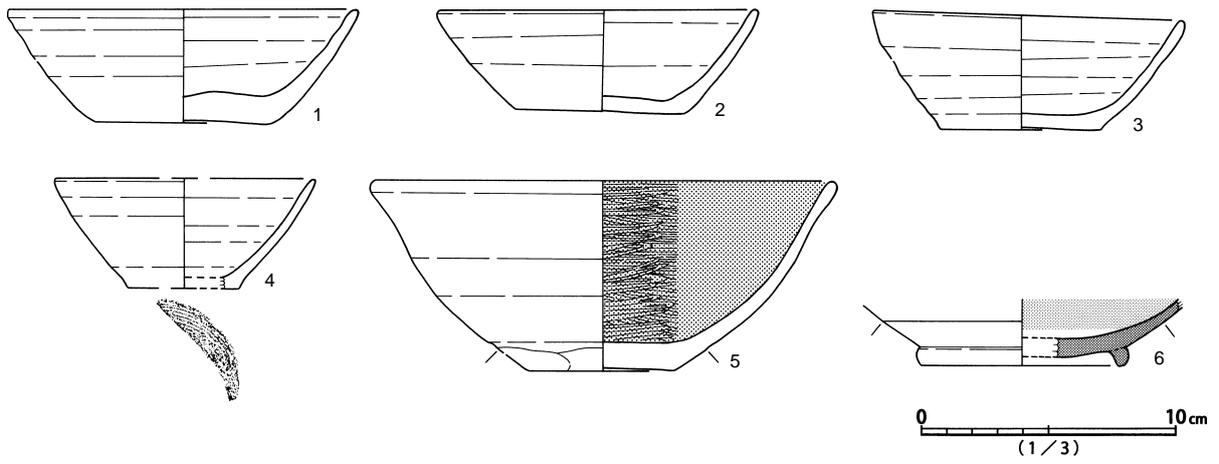


Fig.261 SI-169遺構実測図

SI-169a



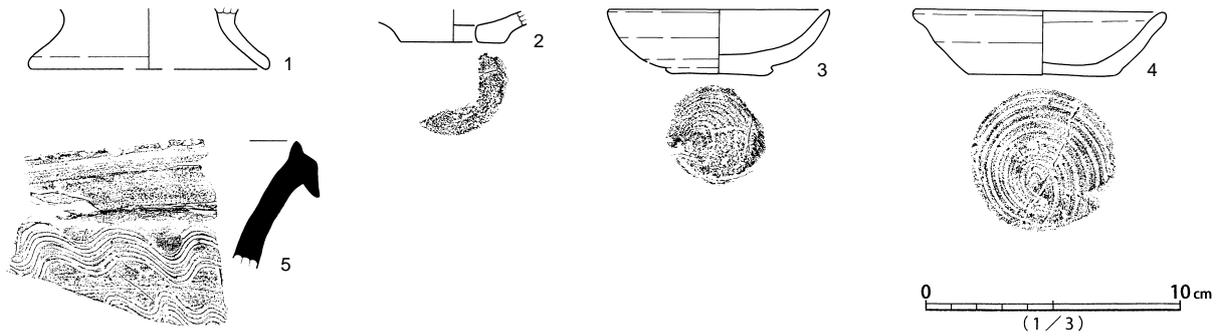
SI-169b



0 10cm
(1/4)

Fig.262 SI-169出土遺物実測図

SI-169c



SI-170

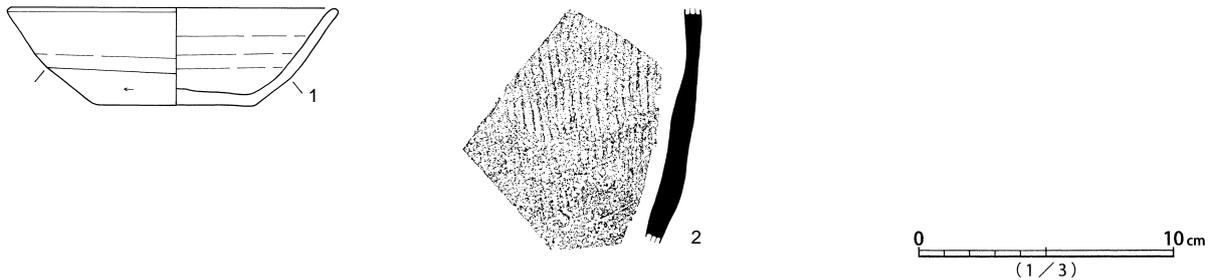


Fig.263 SI-169・170出土遺物実測図

遺構 SI-175bはFU96に位置する。北側でSI-175aと重複する。平面形は一辺2.87mの方形を呈する。遺構確認面から床面までは0.21mを測る。主軸方位は不明。カマド・貯蔵穴・支柱穴は遺構の重複により認められない。周溝は遺存範囲で回っている。

出土遺物 1は土師器杯である。

SI-176 (Fig.278、 PL.65・131・173・233)

遺構 SI-176はEU26に位置する。北西側でSI-175と近接する。遺構中央部で攪乱を受けている。平面形は3.59m × 3.30mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(11.4)m²、遺構確認面から床面までは0.30mを測る。主軸方位はN-25.5°-E。カマドは北壁のやや北西隅に寄って位置する。煙道部は幅18cm、長さ94cmを測り、先端に向けて下方に傾斜する。燃烧部は壁ラインより内側に位置するとみられる。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝はカマド周辺以外は回っている。

出土遺物 1～7は土師器杯、8は土師器椀、9は土師器甕、10・11は須恵器甕、12・13は鉄製品で、12は捻りを加えた棒状不明品、13は釘で混入品とみられる。

土層 カマド:1、黒褐色土中にローム粒・焼土少し混じる 2a、粘土 2b、黒褐色土中に焼土少し混じる

SI-177 (Fig.279・280、 PL.66・131・132・173・185・191・233・237)

遺構 SI-177はEU37に位置する。遺構の重複は無い。平面形は3.39m × 3.78mの方形を呈する。遺構確認面における面積は12.3m²、遺構確認面から床面までは0.34mを測る。主軸方位はN-20.5°-E。カマドは北壁の北東隅寄りに位置する。煙道部は幅30cm、長さ76cmを測り、先端に向けて下方に傾斜する。燃烧部は遺存しない。貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は34cm、P2は38cm、P3は27cm、P4は36cm、P5は15cmを測る。周溝は不明瞭ではあるが、南西隅以外は回っている。

出土遺物 1~10は土師器杯で、1は底部内外面に線刻で「×」が認められる。2は体部外面に墨書「×」が認められ、3は底部内面に線刻「×」が認められる。11・12は土師器小皿、13は土師器甕、14は須恵器甕、15は灰釉陶器椀、16・17は灰釉陶器壺、18・19は鉄製品で、18は棒状不明品、19は刀子である。

土層 カマド:1、黒褐色土中に粘土粒多く混じる下層との間に焼土の薄い層あり 2、黒褐色土中にローム細粒・粘土粒混じる上層より焼土やや多く混じる 3、黒褐色土黒色が強い下層に粘土、上層に粘土ブロック多く含む 4、黒褐色土中にローム粒多く混じる 5、黒褐色土中にローム粒多く・焼土粒きわめて少し混じる 6、黒褐色土中に粘土粒・ローム粒少し混じる 7、黒褐色土中にローム粒・粘土粒・焼土粒混じる 8、黄褐色土

SI-178 a(Fig.281、PL.66・132・173・233)・b(Fig.281・282、PL.66・132・173・191・195)

遺構 SI-178aはEV72に位置する。南側でSI-178bと、他にSK-119~121土坑と重複する。平面形は2.84m x (2.83)mの方形を呈する。遺構確認面から床面までは0.22mを測る。主軸方位はN-27.0°-E。カマドは東隅に位置する。明確な煙道部は認められない。燃烧部は壁ラインに一部かかって位置し、掘り込みを伴う。瓦が出土しているが、出土位置から共伴するか不明確である。貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は24cm、P2は33cm、P3は45cmを測る。周溝はカマド直下及び遺構重複範囲以外回っている。

出土遺物 1~3は土師器小皿、4は鉄製曲鎌とみられる。

土層 カマド:1、暗褐色土中に焼土やや多く混じる 2、暗褐色土中に焼土・粘土粒混じる 3、ロームブロック混じる 4、黒暗褐色土中に焼土少し混じる 5、ロームブロック、ローム粒土埋め戻したもの? 6、暗褐色土・黄褐色土 7a、粘土 7b、黒暗褐色土中に粘土粒少し混じる

遺構 SI-178bはEV72に位置する。北側でSI-178aと重複する。平面形は5.73m x 2.82mの長方形を呈する。遺構確認面における面積は14.8m²、遺構確認面から床面までは0.73mを測る。主軸方位はN-100°-E。東壁にカマドとみられる施設が認められる。床面より高く位置し、竪穴に近い部位で仕切り状の細い溝が認められる。煙道状の部分は幅168cm、長さ208cmを測り、先端に向けて上方に傾斜し、先端部でPit状の掘り込みを伴う。燃烧部は認められない。構築材とみられる粘土が側壁に沿って分布する。また、側壁に沿ってPitが2箇所対になって位置する。貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は13cm、P2は14cm、P3は11cm、P4は4cm、P5は9cm、P6は32cm、P7は23cm、P8は20cmを測る。周溝はカマド状の施設がある東壁以外で回っている。

出土遺物 1・3・8は土師器椀で、1は底部にヘラガキが認められるが、判読不明、内面に黒色処理を施し、8は底部内面と外面に貫通していない孔が互い違いに認められ、紡錘車の紡輪部に転用のために加工を加えた、未成品とみられる。2は土師器小皿、4は灰釉陶器壺、5は灰釉陶器椀、6・7は須恵器甕である。

土層 カマド:1、粘土

SI-179 a(Fig.283、PL.66・132・173)・b(Fig.283、PL.67・173)

遺構 SI-179aはFU94に位置する。北東側でSI-179bと、他にSK-112と重複する。南東部で攪乱を受ける。平面形は2.92m x 4.26mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(11.8)m²、遺構確認面から床面までは6cmを測る。主軸方位はN-88.5°-E。カマドは東壁中央に位置する。明確な煙道部は認められない。燃烧部は壁ライン上にかかって位置するとみられ、掘り込みは伴わない。奥壁は幅64

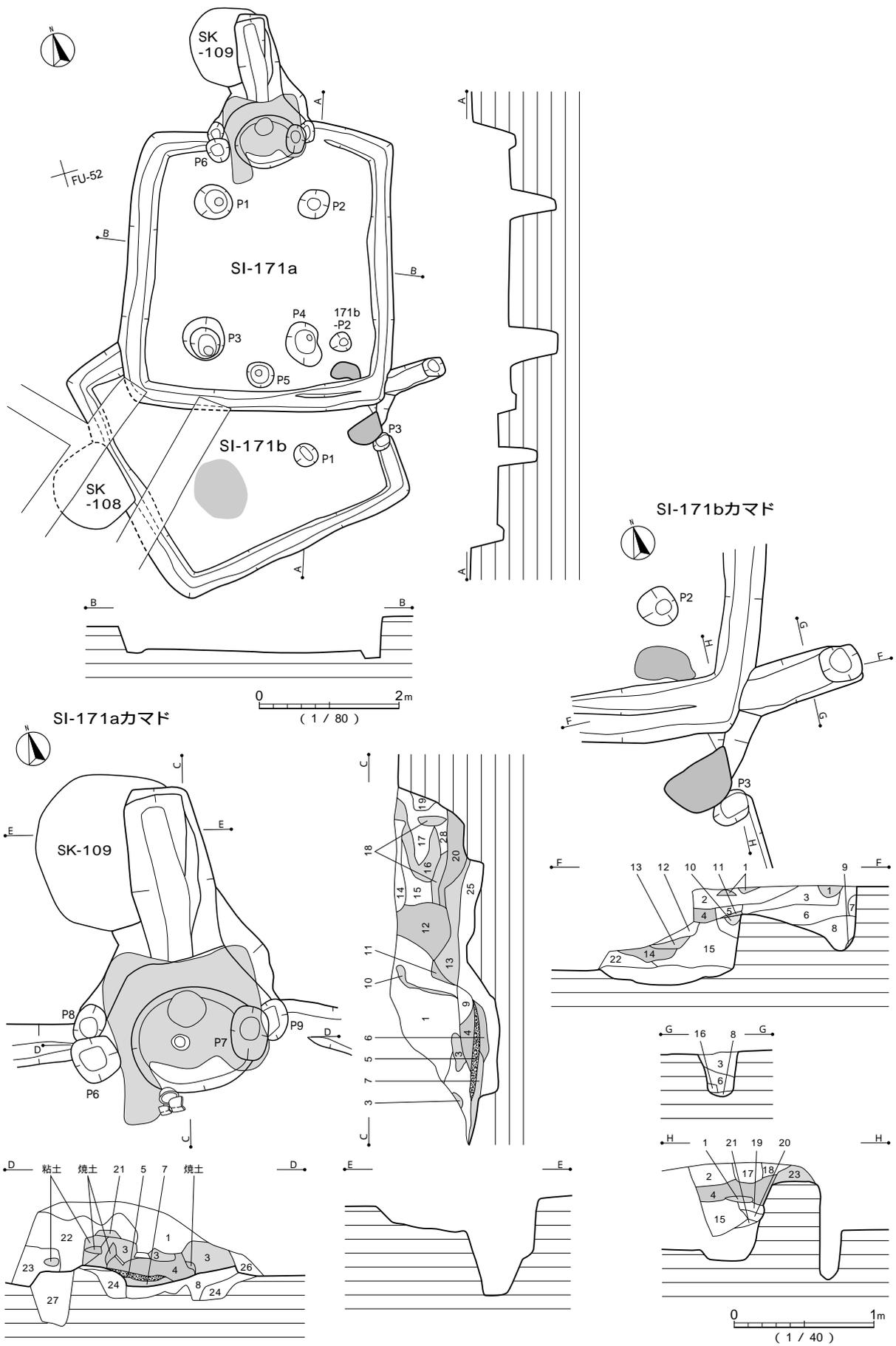


Fig.264 SI-171遺構実測図

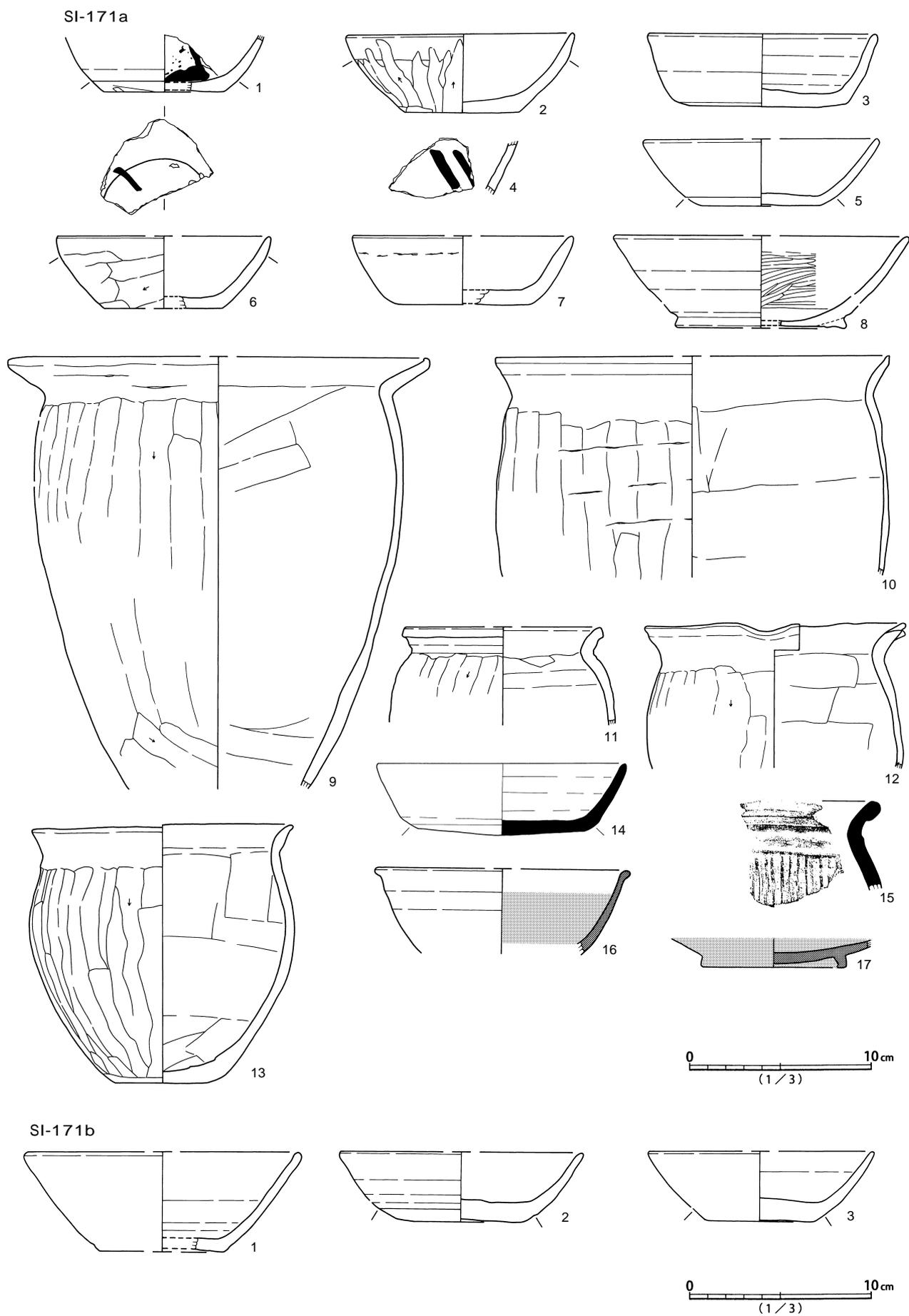


Fig.265 SI-171出土遺物実測図

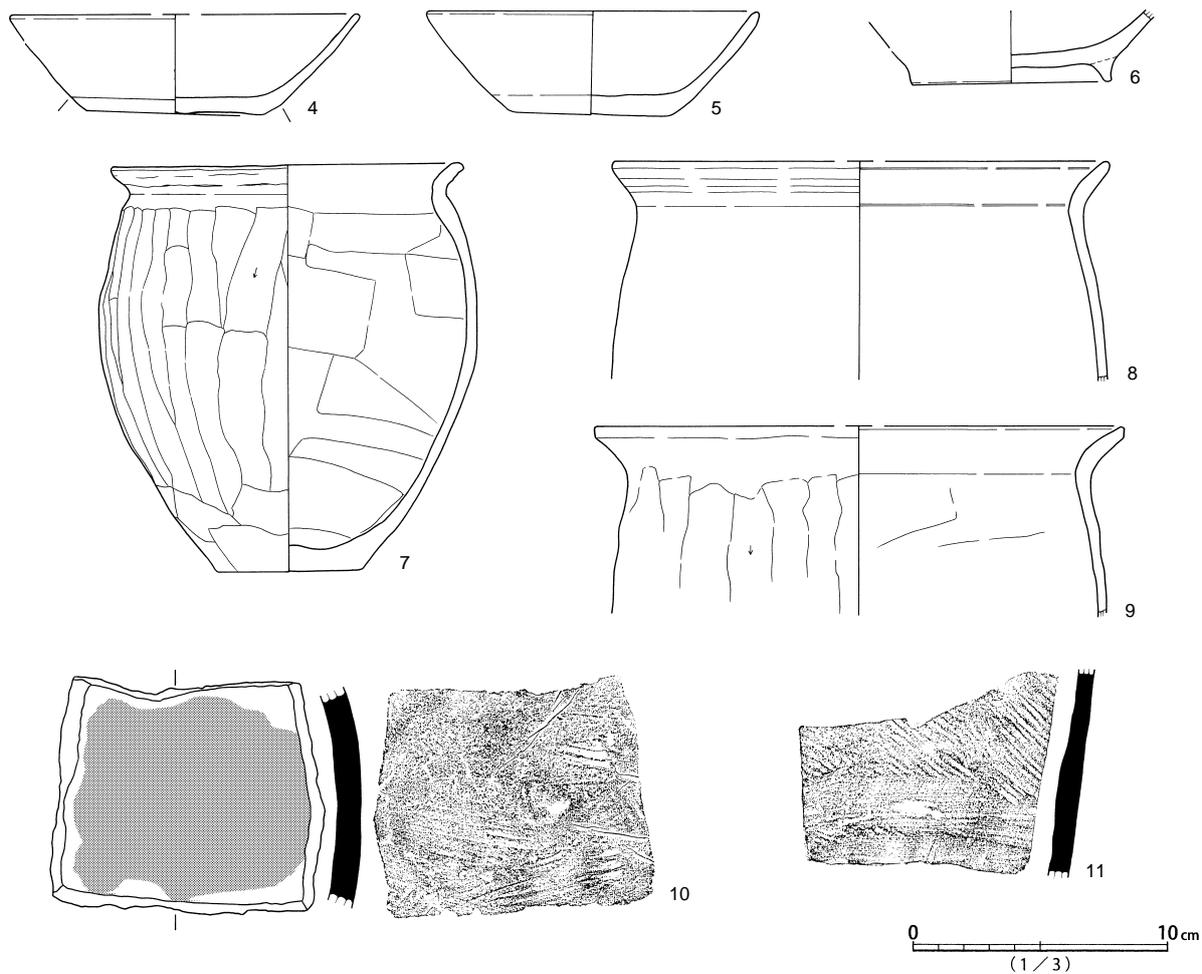


Fig.266 SI-171出土遺物実測図

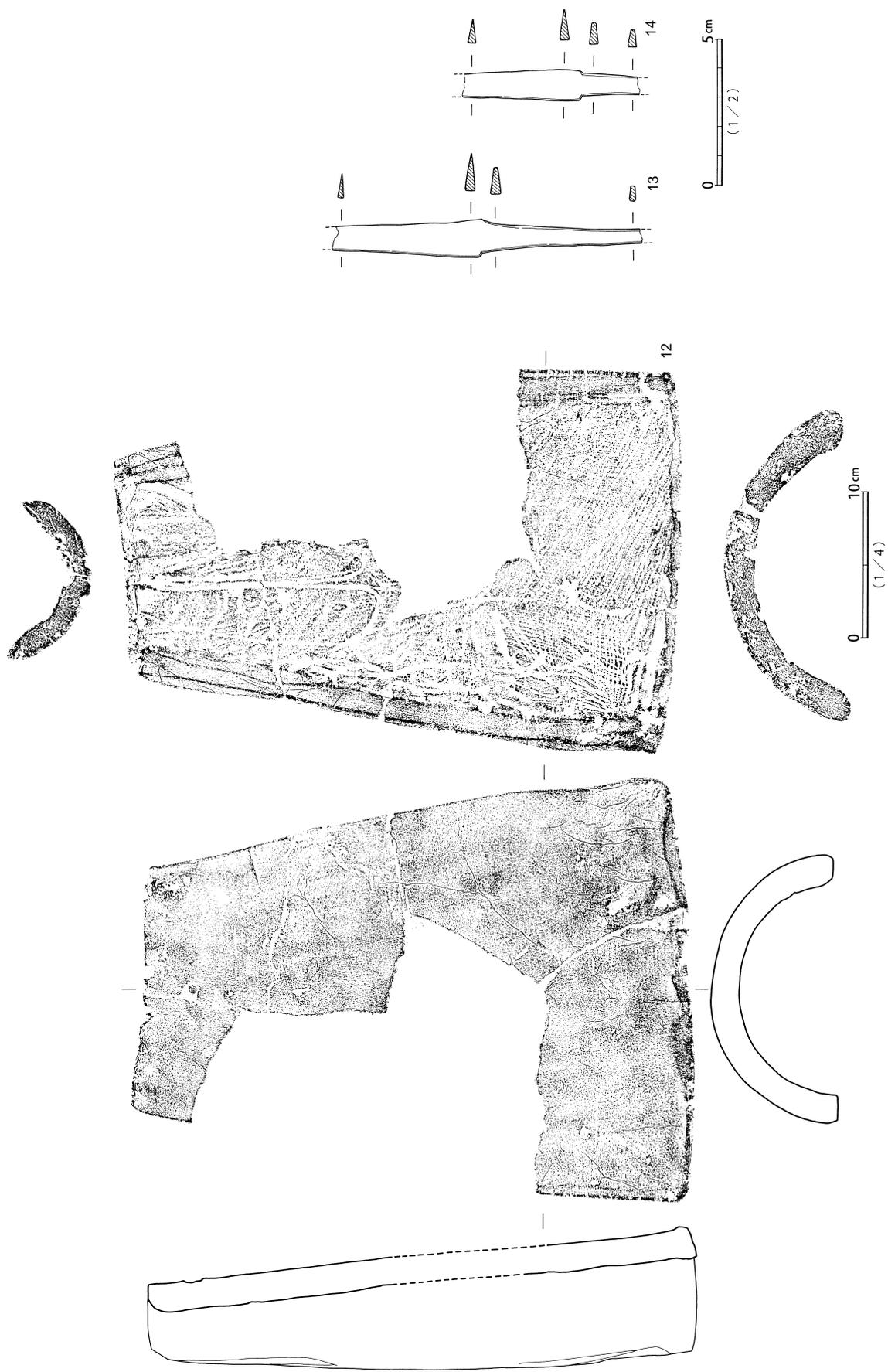


Fig.267 SI-171出土遺物実測図

cm、長さ41cmの不整形に壁を掘り広げている。貯蔵穴・主柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1～3は土師器杯で、2は内面に黒色処理を施している。4・5は土師器甕である。

土層 カマド:1、黒褐色土中に焼土粒混じる 2、黒褐色土中に焼土混じる 3、焼土ブロック・黒褐色土 4、黒褐色土中に焼土粒少し混じる 5a、粘土 5b、黒褐色土中にローム粒・焼土粒少し混じる 6、黒褐色土中にローム粒混じる 7、黒色が強い黒褐色土中に焼土・粘土多く混じる

遺構 SI-179bはFU94に位置する。南西側でSI-179aと、他にSK-113と重複する。平面形は(3.10)m×3.32mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(10.0)m²、遺構確認面から床面までは0.06mを測る。主軸方位はN-92.0°-E。カマドは東壁の北東隅寄りに位置する。明確な煙道部は認められない。燃焼部は壁ライン上にかかって位置するとみられる。奥壁は僅かに半楕円形に壁を掘り広げている。貯蔵穴・主柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1は土師器甕である。

土層 カマド:1、黒色が強い黒褐色土中に焼土粒混じる 2、黒褐色土中に焼土多く混じる 3、黄褐色土 4、黒褐色土 5、粘土 6、黒色が強い黒褐色土中に焼土粒少し混じる 7、黒褐色土中に黄褐色土少し混じる

SI-180 (Fig.284・285、PL.67・132・133・173)

遺構 SI-180はEU24に位置する。南側でSI-181に近接する。平面形は2.99m×3.97mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(11.9)m²、遺構確認面から床面までは0.45mを測る。主軸方位はN-2.0°-E。カマドは北壁中央(北カマド)と、西壁の南西隅寄り(西カマド)に位置し、現場所見から西カマドが古い。北カマドの帰属する竪穴の床は、西カマドの帰属する竪穴の床の上方に張り床されており、建替えがあったとみられる。北カマドの煙道部は、幅30cm、長さ100cmを測り、先端に向けて上下しながら上方に抜けている。燃焼部は壁ラインの内側に位置するとみられ、掘り込みを伴う。西カマドの煙道部は、攪乱を受けるが、幅52cm、長さ98cmを測り、先端に向けて上方に傾斜している。煙道には粘土と共に被熱した瓦が出土しており、天井か壁材として使われた可能性がある。燃焼部は壁ラインの内側に位置するとみられる。貯蔵穴・主柱穴は認められない。周溝はカマド直下も含め全周する。

出土遺物 1は土師器蓋のつまみ、2～15は土師器杯で、4・5は内面に黒色処理を施す。16～18は土師器皿、19・20は土師器甕、21は須恵器杯、22・23は須恵器甕である。

土層 西カマド:1、暗褐色土中にローム粒混じる 2、黒褐色土中に焼土粒やや多く・粘土少し混じる 3、粘土 4、焼土中に粘土やや多く混じる 5、黒褐色土中に焼土きわめて多く・黒色土少し混じり粘土もブロック状に混じる 6、黒色土で下層焼土 7、黒褐色土中に細かいローム粒多く混じる 8、黒褐色土中にローム粒大混じる 北カマド:1、黒褐色土中に焼土粒少し・粘土粒多く含む 2、粘土・焼土 3、黒褐色土中に焼土粒やや多く混じる 4、黒色土 5、黒暗褐色土中に焼土細粒・ローム粒少し混じる 6、焼土 7、黄褐色土中にローム含む 8、粘土・焼けた粘土 9、焼土粒中に粘土・黒褐色土少し混じる 10、黒褐色土中にローム粒混じる 11、黒暗褐色土中にローム粒やや多く含む 12、黒褐色土中にローム粒混じる 13、焼土中に黒褐色土混じる 14、粘土・黒褐色土 15、粘土・焼土中に黒褐色土混じる 16a、粘土 16b、黒褐色土中に粘土やや多く混じる 16c、黒褐色土中に粘土多く混じる 17、粘土 18、黒褐色土中に粘土やや多く混じる 19、ローム 20、黄褐色土やや黒色 21、張り床上黒色土、

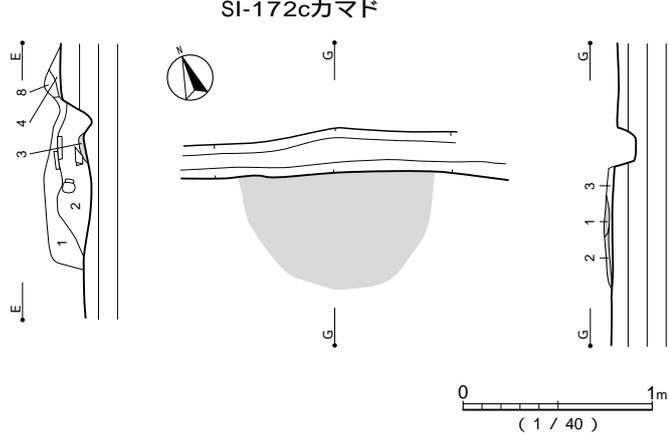
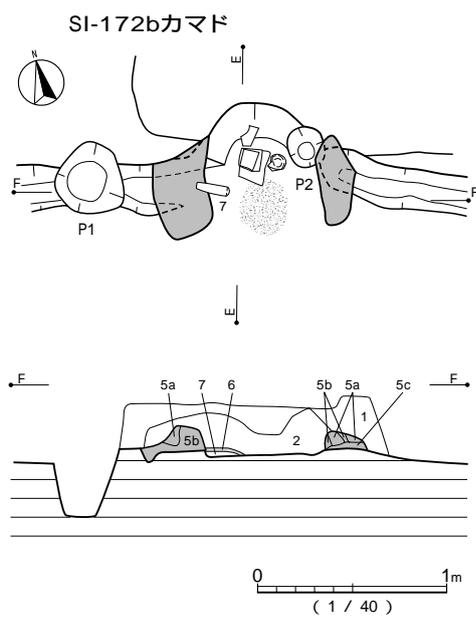
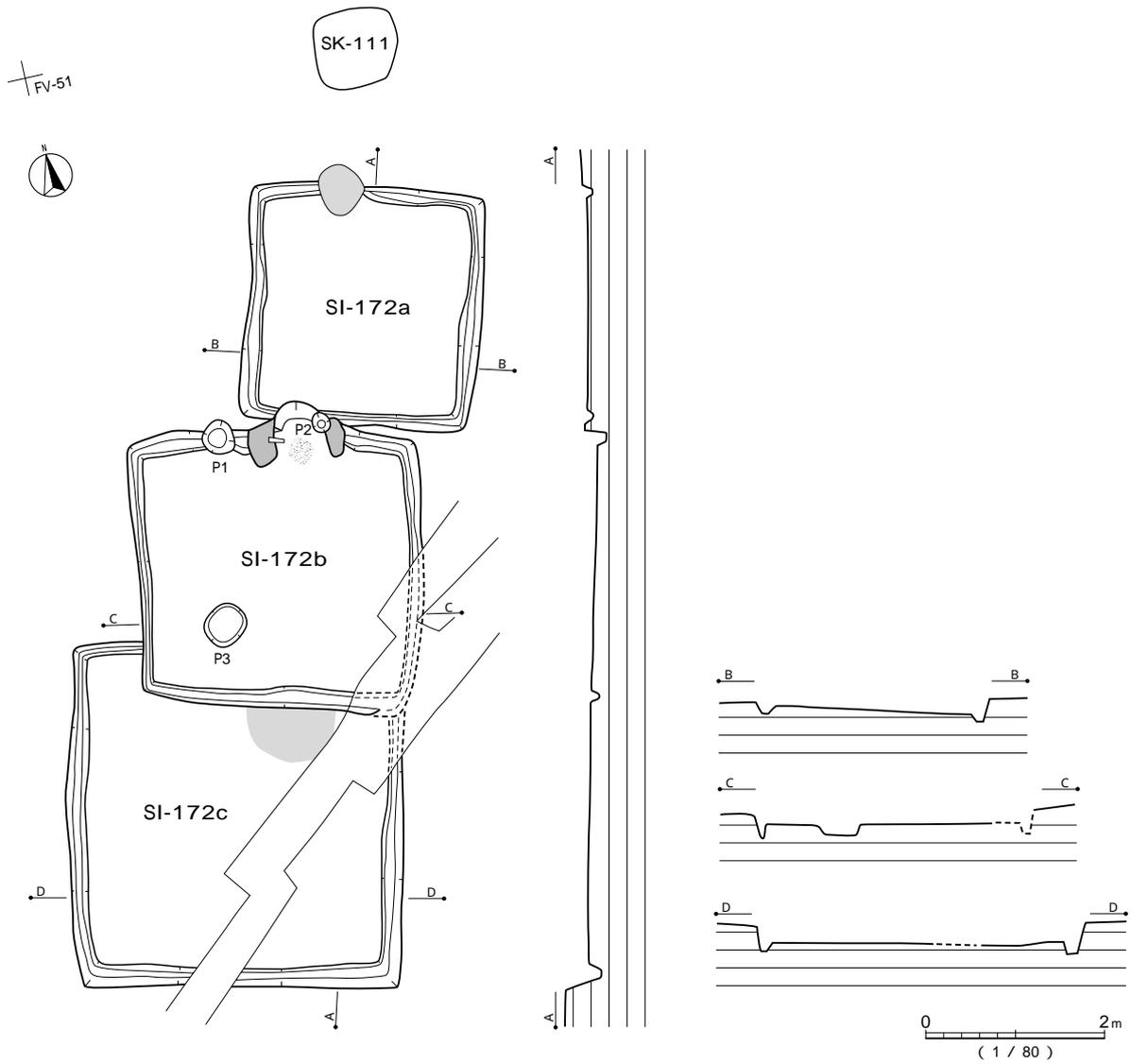
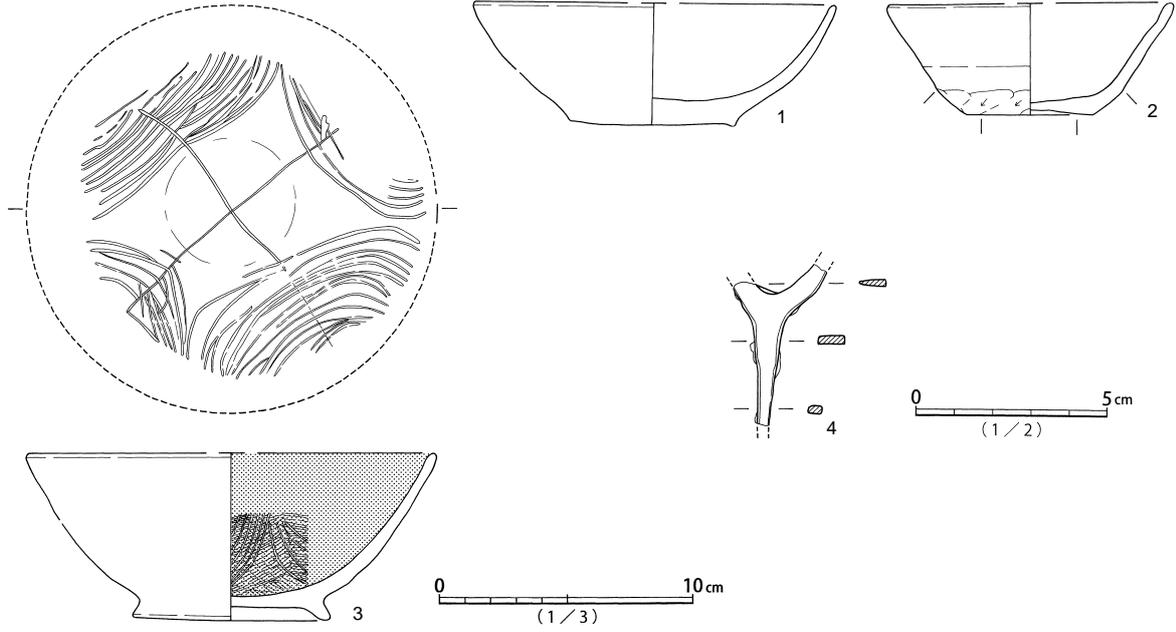


Fig.268 SI-172遺構実測図

SI-172a



SI-172b

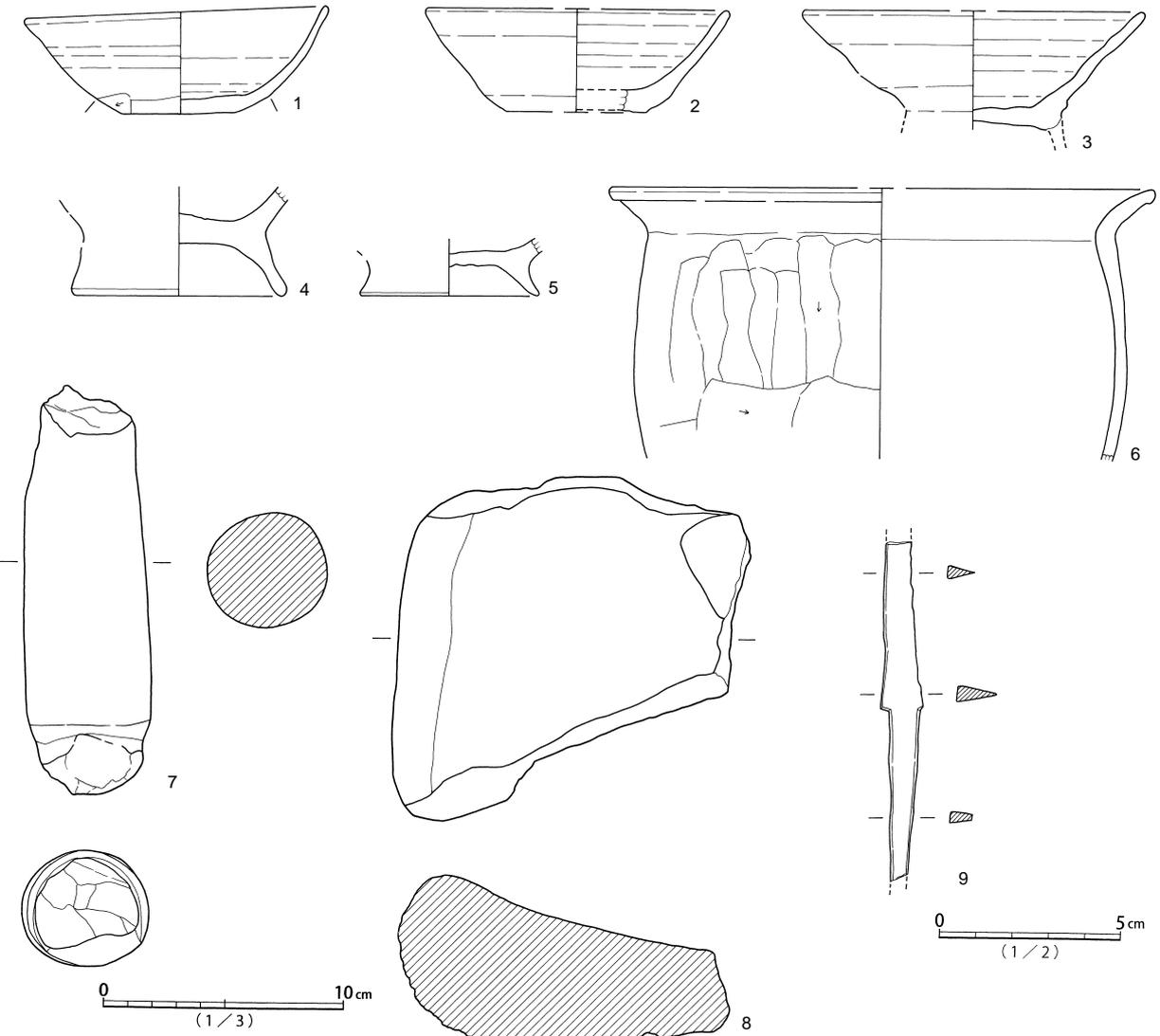


Fig.269 SI-172出土遺物実測図

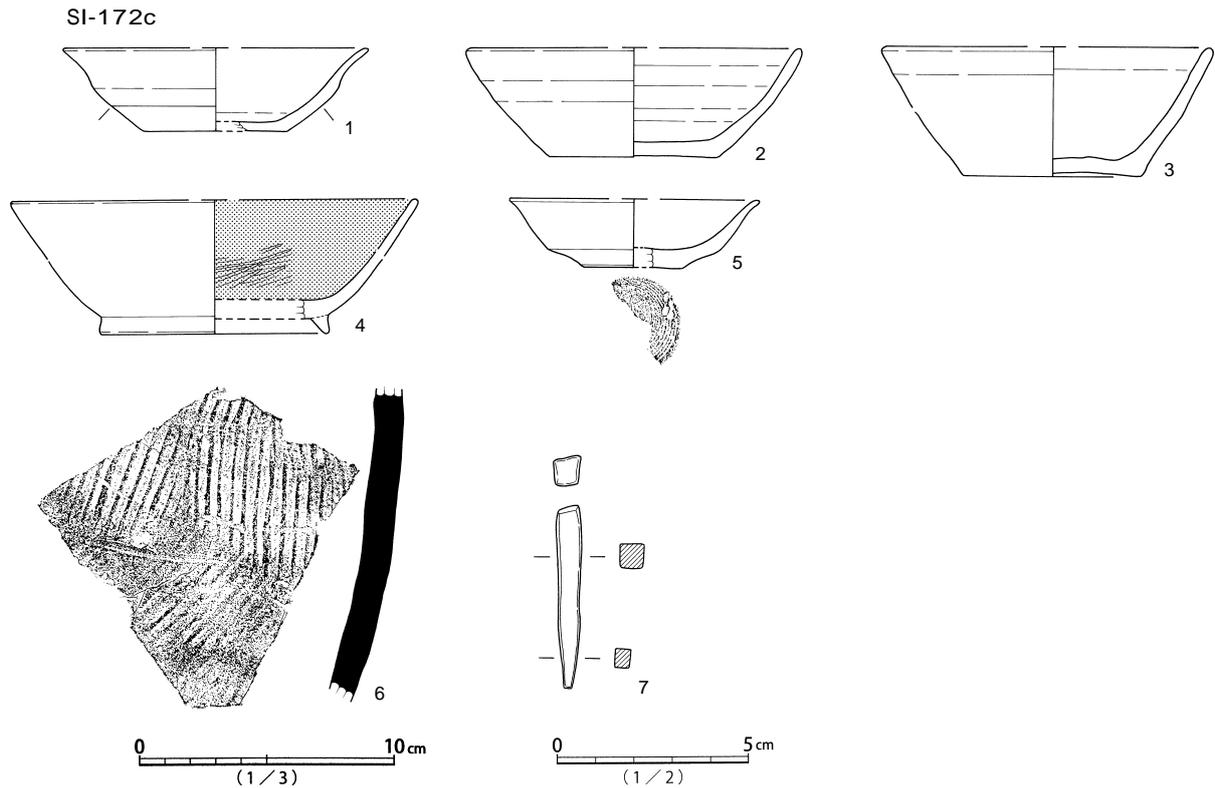


Fig.270 SI-172出土遺物実測図

ロームブロック少し混じる 22、張り床ロームブロック、黒褐色土 23、張り床

SI-181 (Fig.284・286、PL.67・133・173・191・226)

遺構 SI-181はEU24に位置する。北側でSI-180に近接し、南側でSK-114と重複する。平面形は2.71m×2.71mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(7.2)m²、遺構確認面から床面までは0.11mを測る。主軸方位はN-88.5°-E。カマドは東壁の南東隅に寄って位置する。明確な煙道部は認められない。燃烧部は壁ライン上に一部かかって位置するとみられ、掘り込みを伴う。奥壁は不整形に壁を掘り広げている。貯蔵穴・主柱穴は認められない。周溝はカマド直下以外で全周する。

出土遺物 1~4は土師器杯で、4は底部内面に線刻が認められるが、一部であるため判読できない。5は土師器小皿、6は須恵器甕、7は土師器甕、8は須恵甕、9は磨石である。

土層 カマド:1、黒褐色土中に焼土粒・粘土粒少し混じる 2、黒色土中・炭化物 3、黄黒褐色土 4、焼土粒中に黒褐色土少し混じる 5、暗褐色土やや黄色 6、黄黒褐色土中に粘土粒・焼土粒・ローム粒少し混じる 7、粘土 8、暗褐色土やや黄色

SI-182 (Fig.287~289、PL.67・68・133・173・218・226・233)

遺構 SI-182はET50に位置する。遺構の重複は無い。平面形は3.29m×3.53mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(11.8)m²、遺構確認面から床面までは0.47mを測る。主軸方位はN-19.0°-E。カマドは北壁の北東隅寄りに位置し、極めて遺存状態は良好である。煙道部は幅44cm、長さ148cmを測り、先端に向けて緩やかに下方へ傾斜する。煙道側壁から奥壁にかけてテラス状の段が全周し、この段を基底として、破片の瓦を重ねて壁面から天井部を構成している。また、煙道底部・奥壁・テラス状の段には粘土が充填されている。燃烧部は壁ラインの内側に位置し、掘り込みを伴う。袖付け根部

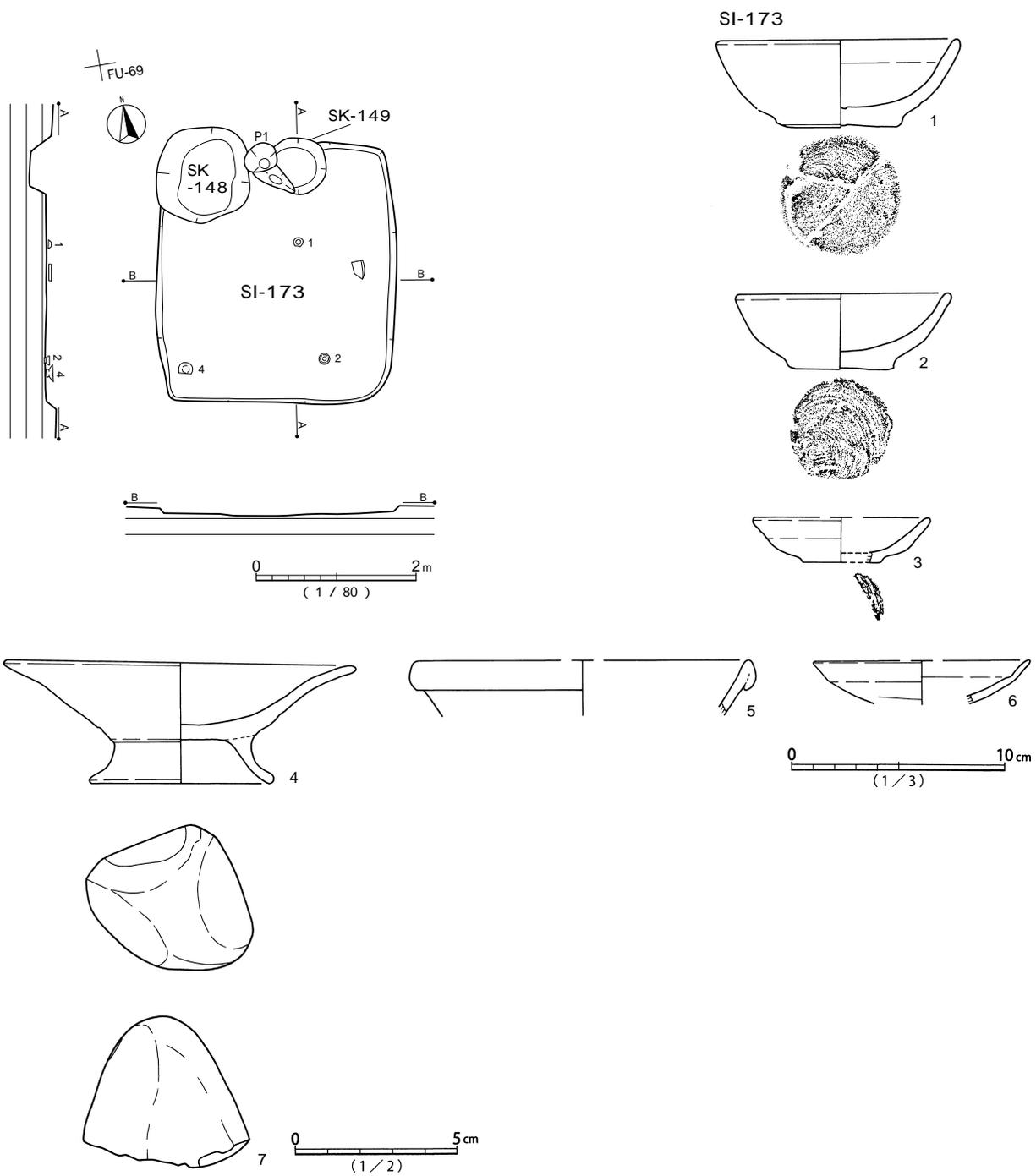


Fig.271 SI-173遺構・出土遺物実測図

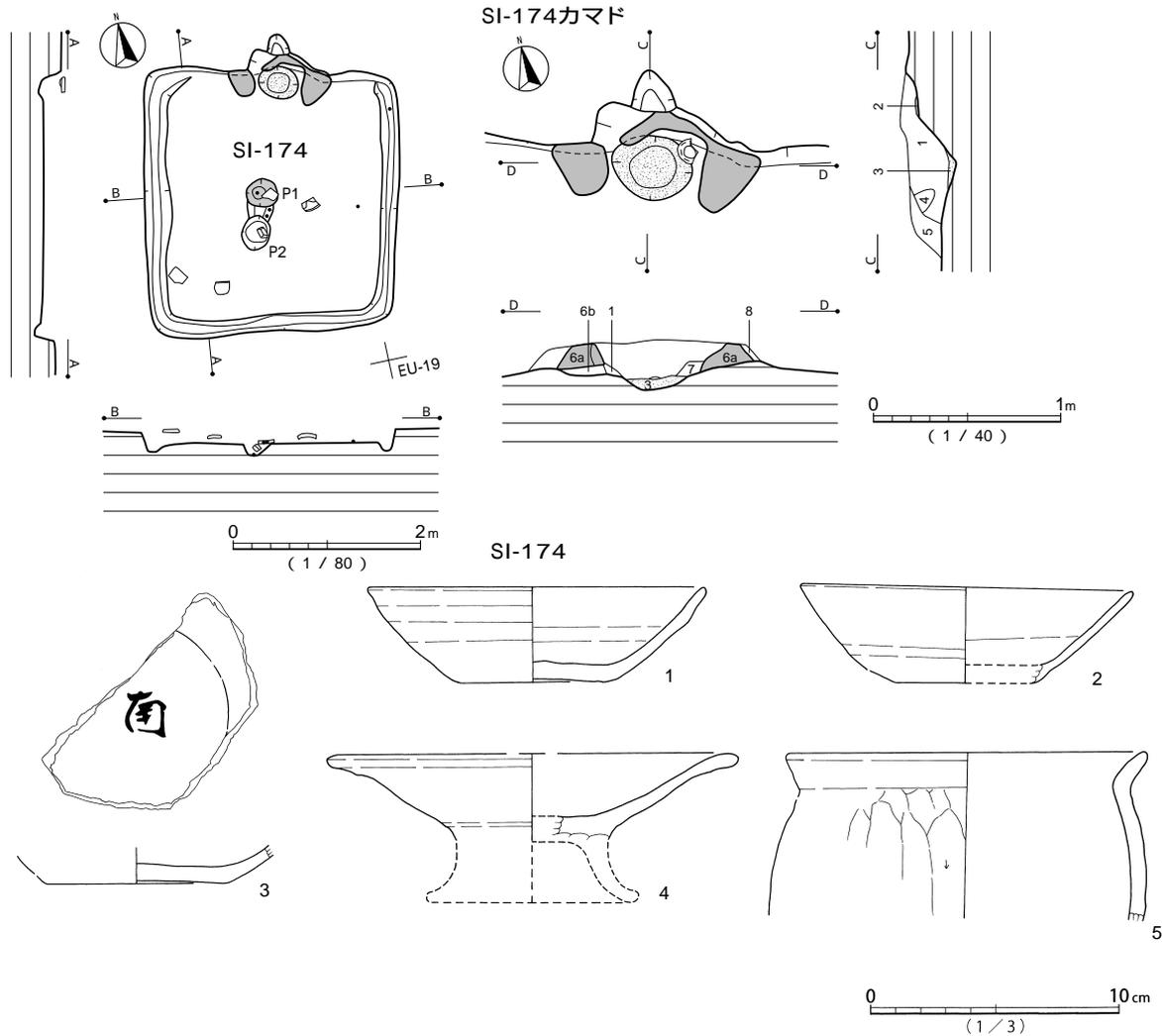


Fig.272 SI-174遺構・出土遺物実測図

外側に Pit が位置するが片側のみに伴う。貯蔵穴は北東隅に位置する。主柱穴は認められない。Pit の深さは、P1は9cm、P2は15cm、P3・P4は不明、P5は19cmを測る。

周溝はカマド直下から貯蔵穴にかけて以外は回っている。

出土遺物 1~5は土師器杯で、1は内面に黒色処理を施す。6は須恵器蓋、7は須恵器杯、8・9は須恵器甕、10は平瓦、11は破片資料で、金床石の可能性もある。12は鉄製刀子である。

土層 カマド:1、黒褐色土中に粘土粒・ローム粒少し・焼土粒混じる 2、黒褐色土中にローム粒・焼土粒混じる 3、焼土粒、粘土粒 4、粘土 5、粘土粒・暗褐色土中にローム粒少し混じる 6、黒色土 炭化 焼土粒、粘土粒混じる 7、粘土 8、焼土粒 9、焼けたローム 10、粘土ブロック多く含む、粘土混じる黒褐色土多く含む 11、粘土ブロック、粘土混じる黒褐色土多く含む 12、焼土・灰・黒色土 13、粘土きわめて少ない 14、粘土 15、粘土・黒褐色土 16、黒色土でやや褐色土 17a、黄褐色土中にローム含む 17b、黒褐色土中にローム粒多く混じる 18a、黒色土中に粘土少し混じる 18b、粘土ブロック 18c、粘土中に黒色土少し混じり面焼け 18d、黒色土でやや褐色土混じる 18e、黒色土中に粘土粒混じる 18f、黄暗褐色土 18g、粘土・黒褐色土中に焼土混じる 18h、焼けた粘土

SI-183 (Fig.290~292, PL.68・133・173・219・237)

遺構 SI-183はEU44に位置する。東側でSI-184と、北側でSK-117と重複する。現場所見によるとSI-184より本遺構が古い。また、西側でSD-5と一部重複するが、新旧関係は不明。SK-117より本遺構が新しい。平面形は3.72m×3.74mの方形を呈する。遺構確認面における面積は14.1m²、遺構確認面から床面までは0.15mを測る。主軸方位はN-70.0°-W。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅86cm、長さ76cmを測り、先端に向けて窪みを経て上方に傾斜する。燃焼部は明確ではないが、壁ライン上にかかって位置するとみられ、中央部に丸瓦が立った状態で設置されており、支脚かカマドの部材の可能性がある。奥壁は半円形に壁を掘り込んでいる。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝はカマド直下以外回っている。

出土遺物 1～5は土師器杯で、5は内面に黒色処理を施す。6は土師器小皿で、7はカワラケ、8は柱状高台の杯、9は足高高台付杯、10は土師器甕、11は平瓦で床直上からの出土、12は鉄釘とみられる。

土層 カマド:1、黒褐色土中にローム粒・焼土・焼土粒・粘土粒少し混じる 2、粘土 3a、粘土 3b、黒褐色土中に粘土混じる 3c、黒褐色土中に焼土多く混じる 4、黒暗褐色土中にロームブロック・粘土粒多く混じる・暗褐色土中に粘土粒混じる 5、粘土・焼土・黒褐色土 6、黒色土 7、暗褐色土中に、粘土多く混じる 8a、粘土 8b、暗褐色土中に粘土多く混じる 8c、黄褐色土

SI-184 (Fig.290・293、PL.133・134・173・233)

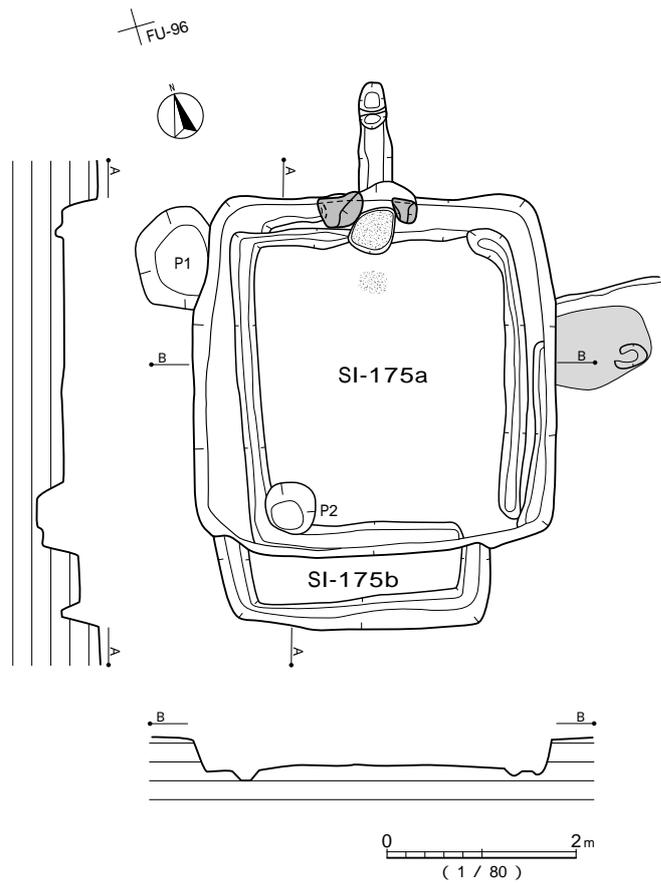
遺構 SI-184はEU44に位置する。西側でSI-183と重複する。現場所見によるとSI-183より本遺構が新しい。平面形は(3.12)m×(3.59)mの方形を呈すると見られるが、北側のプランは不明瞭であるため、遺物の分布を参考に遺構範囲を復元している。遺構確認面における面積は(10.7)m²、遺構確認面から床面までは0.06mを測る。主軸方位はN-17.0°-E。床は張り床が一部残る。カマドは東壁に位置するが、明確な煙道部は認められない。燃焼部も明らかではない。下位に円形のPitが位置するが、覆土に焼土・粘土を多く含み、人為的に埋められており、本遺構直前の遺構である可能性もあるが、現場所見を優先し、同一遺構として報告する。貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は45cm、P2は35cmを測る。周溝は伴わない。

出土遺物 1は土師器杯、2・4・15は足高高台付杯で、4は底部内面に葉脈痕が認められる。3・5～7は土師器椀で、全て内面に黒色処理を施し、6は口縁部外面にも認められる。8～14は土師器小皿で、9はカマド内出土、16は灰釉陶器平瓶、17は鉄製刀子、18・19は鉄鏃で、同一個体の可能性がある。

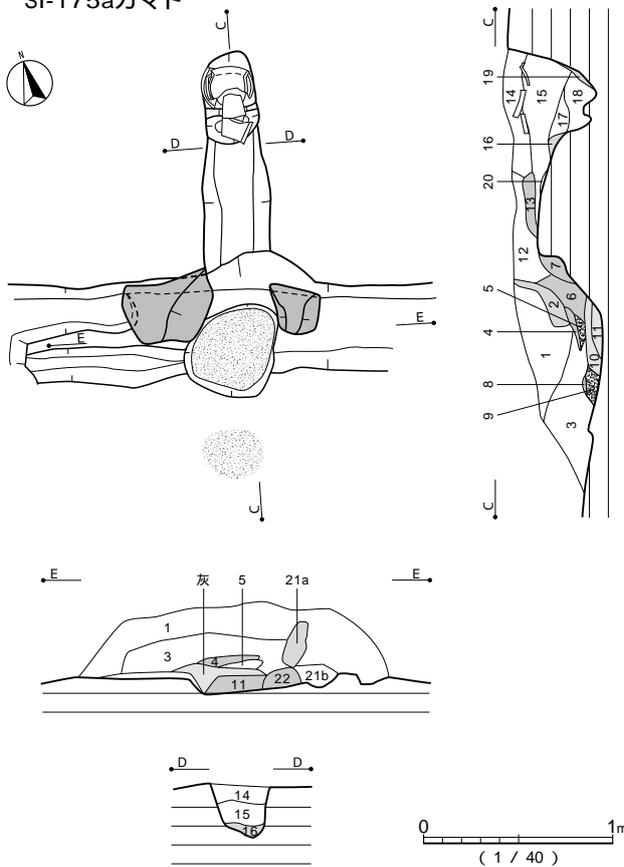
土層 カマド:1、黒褐色土中にローム粒大粒均一に多く混じる、焼土、粘土を全く含まない 2、黒色土・黒褐色土中に粘土粒・焼土粒少し混じる 3、粘土 4、黒暗褐色土中に粘土粒・焼土粒少し混じる 5、黒褐色土中にローム粒少し・焼土混じる 6、黒褐色土中に焼土多く混じる 7、黒色土 8、黒暗褐色土中に焼土ブロック混じる 9、粘土 10、黒色が強い黒褐色土中にローム粒少し混じる

SI-185 (Fig.294～297、PL.68・69・134・173・220・233・237)

遺構 SI-185はEU66に位置する。西側でSK-118と重複する。平面形は3.38m×3.36mの方形を呈するが、北東隅で大きく攪乱を受ける。遺構確認面における面積は(10.8)m²、遺構確認面から床面までは0.26mを測る。主軸方位はN-14.2°-E。床面の硬化は弱い。カマドは東壁中央に位置する。煙道部は幅22cm、長さ54cmを測り、先端に向けて水平に伸び、先端部でPit状の掘りこみを伴う。燃焼部は壁ライン上にかかって位置し、掘り込みを伴わない。奥壁は壁ラインを不整形に掘り広げ、煙道部との境界付近に瓦を立てた状態で設置している。貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は27



SI-175aカマド



SI-175a東窪み

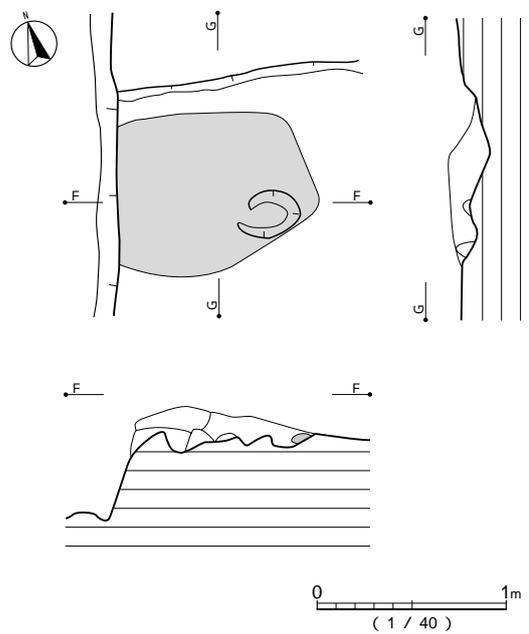
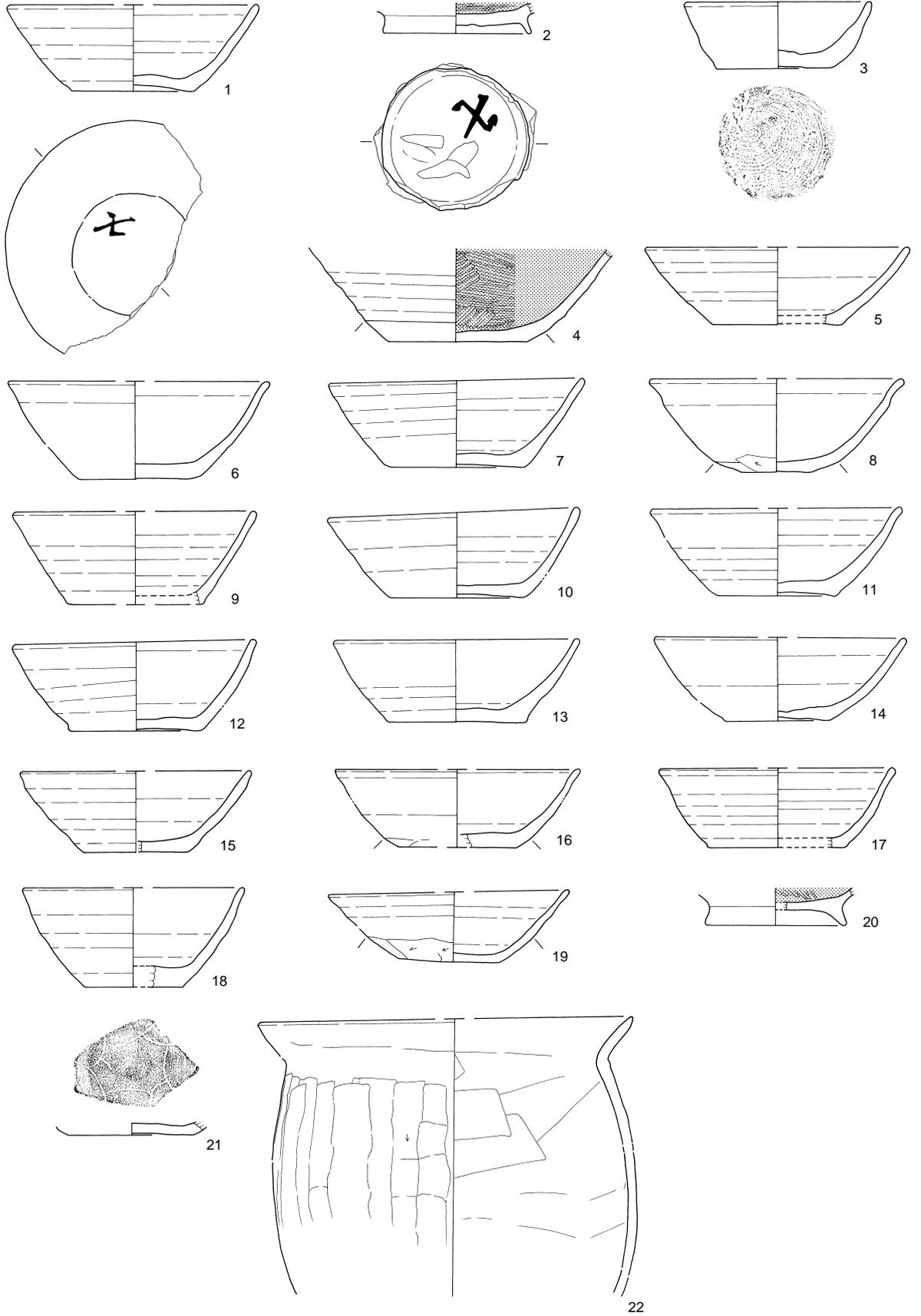


Fig.273 SI-175遺構実測図

SI-175a



0 10 cm
(1/3)

Fig.274 SI-175出土遺物実測図

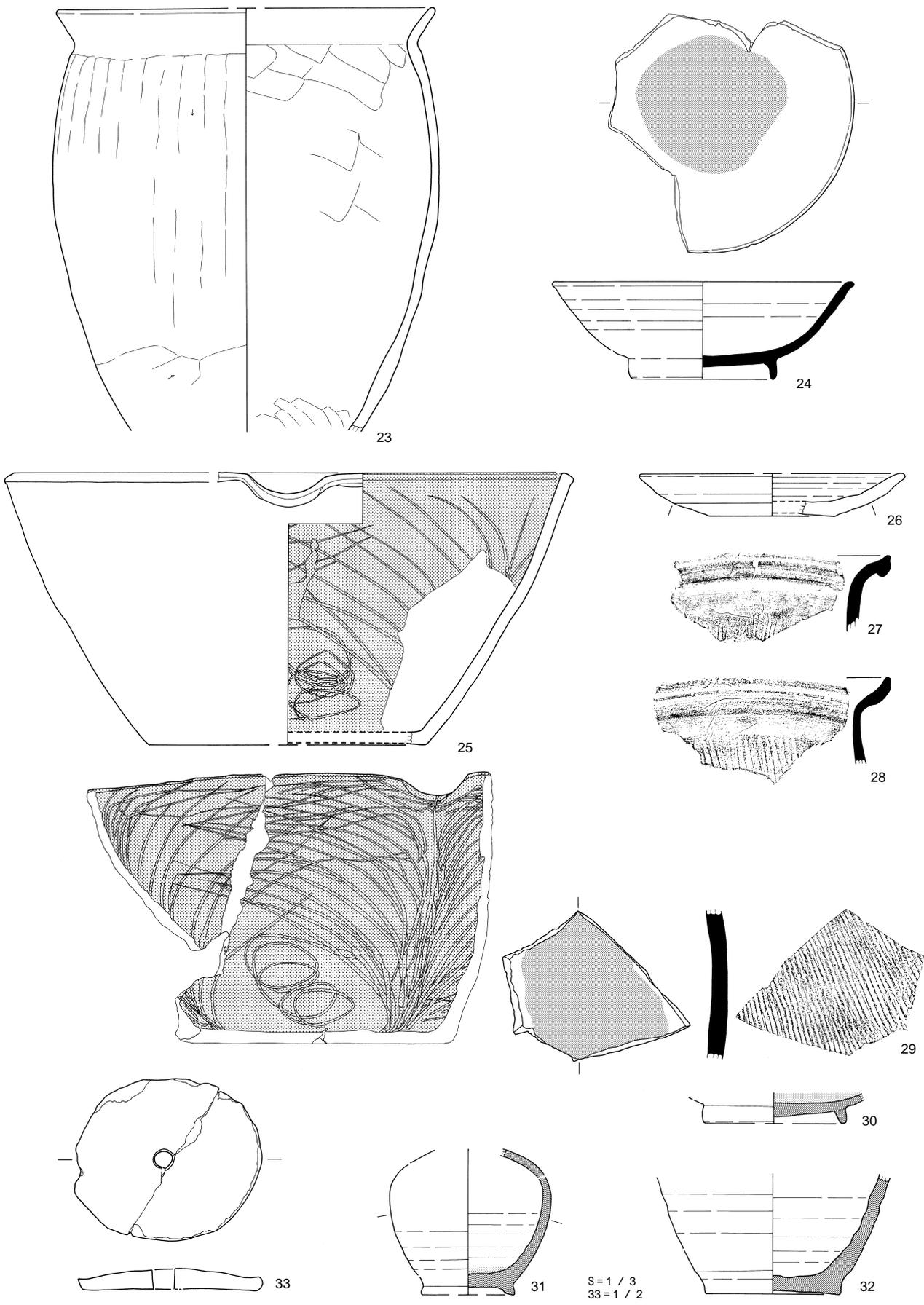
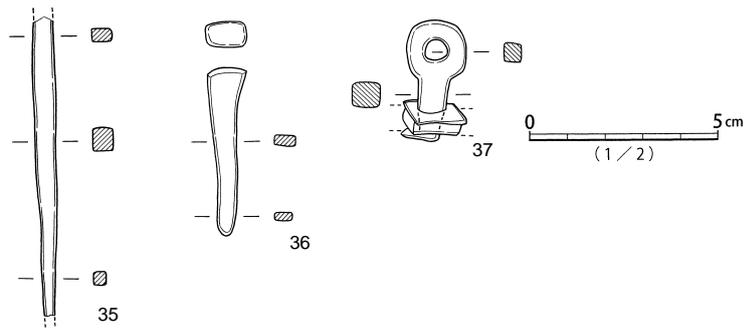


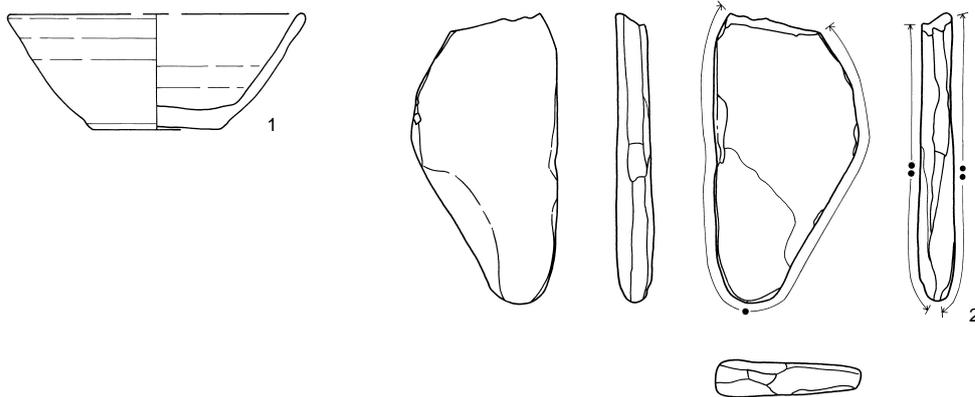
Fig.275 SI-175出土遺物実測図



Fig.276 SI-175出土遺物実測図



SI-175a 東窪み



SI-175b

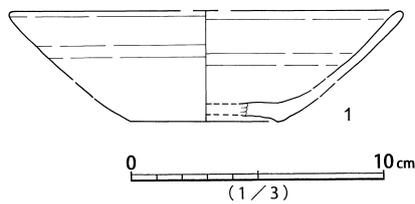


Fig.277 SI-175出土遺物実測図

cmを測るが、現場所見により本遺構に伴うかは不明。周溝はカマドのある東壁及び南東隅付近以外で回っている。

出土遺物 1～6は土師器杯、7は土師器椀で内面に黒色処理を施す。8は土師器皿、9・10は土師器小皿、11・12は須恵器甕、13は平瓦、14は玉縁の丸瓦、15～20は鉄製品で、15は刀子、16は不明棒状製品、17～20は不明板状製品である。他に小形椀形滓1点が出土している。

土層 カマド:1、黒褐色土中にローム細粒・焼土粒少し混じる 2、ローム粒 3、暗褐色土中に粘土粒・焼土粒混じる 4、黒褐色土中に焼土粒・粘土粒やや多く混じる 5、焼土中に暗褐色土混じる 6、暗褐色土・黄褐色土中に粘土粒混じる 7、焼土・暗褐色土 8、暗褐色土中に焼土混じる 9、黒褐色土中に黄褐色土少し混じる 10a、黒褐色土中に粘土粒混じる 10b、粘土中に黒褐色土混じる 10c、黒褐色土中にローム粒少し・粘土粒やや多く混じる 11a、黒褐色土中にローム粒少し混じる 11b、黒褐色土中

にロームブロック多く混じる

SI-186 (Fig.297、 PL.69)

遺構 SI-186はFU28に位置する。SK-135～137と重複する。平面形は4.10m×2.48mの不整形を呈する。遺構確認面における面積は(9.7)m²、遺構確認面から床面までは0.11mを測る。主軸方位は不明。床面とみられる硬化範囲が南側に広がる。カマド・貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は20cm、P2は24cm、P3は33cm、P4は32cm、P5は33cm、P6は25cm、P7は33cm、P8は33cm、P9は37cm、P10は37cm、P11は30cm、P12は25cm、P13は23cm、P14は30cmを測る。周溝は伴わない。

出土遺物 出土遺物は無い。

SI-187 a(Fig.298～300、 PL.69・134・135・173・185・220)・b(Fig.298・301、 PL.69・135・185)

遺構 SI-187aはEV63に位置する。北西側でSI-187bと重複する。新旧関係は、カマド断面図から本遺構が古い。平面形は3.71m×3.51mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(12.2)m²、遺構確認面から床面までは0.23mを測る。主軸方位はN-22.5°-E。床面は張り床で良好に遺存する。カマドは北東壁に位置する。煙道部は幅44cm、長さ152cmを測り、先端に向けて緩やかに下方へ傾斜する。燃烧部は壁ラインより内側に位置し、掘り込みを伴う。袖の焚口寄りにPitを伴う。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝はカマドのある北東壁以外で回っている。

出土遺物 1～8は土師器杯で、7は内面に黒色処理を施す。9は土師器椀で内面に黒色処理を施す。10～13は土師器甕、14・15は須恵器甕で、16は灰釉陶器壺で底部外面に朱墨による墨書「竹富」が認められる。17は行基の丸瓦である。

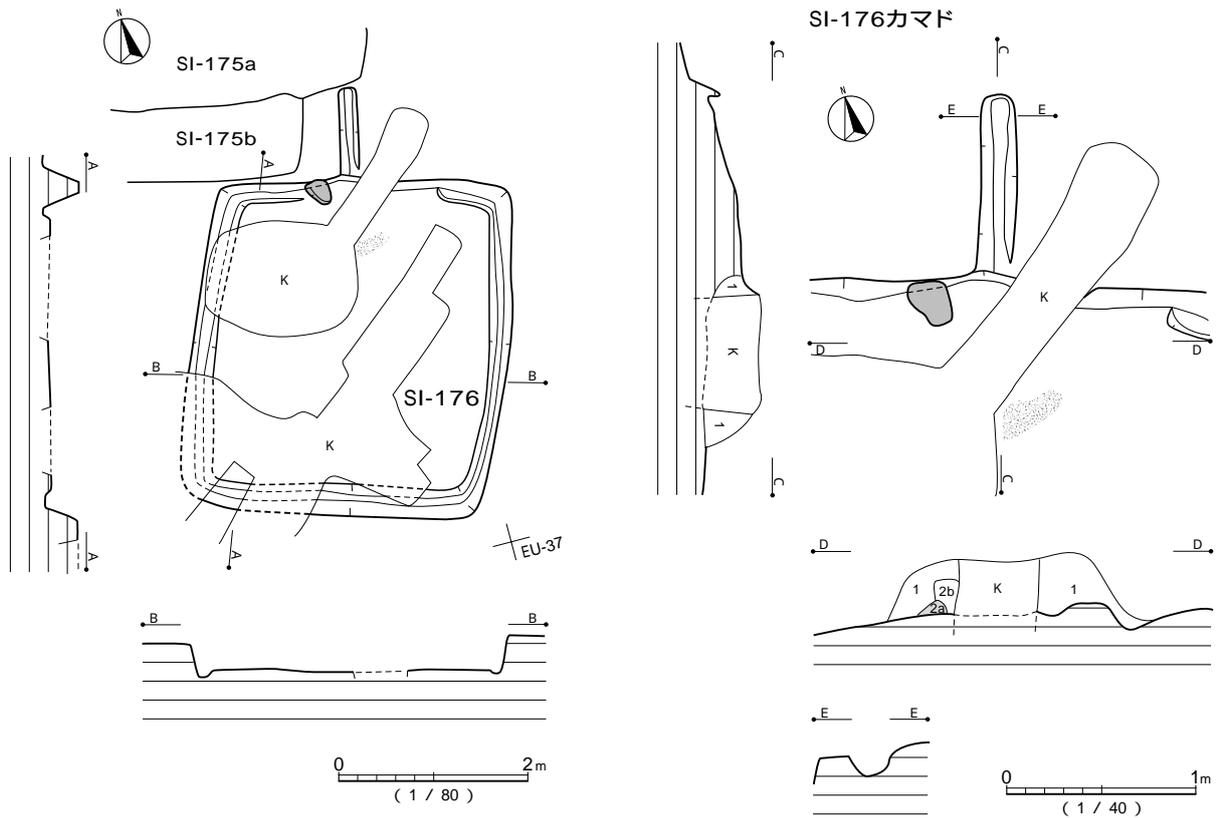
土層 カマド:1、黒色が強い暗褐色土中に焼土混じる 2、暗褐色土中に粘土粒・焼土粒混じる 3、焼土粒・粘土粒 4、黒褐色土 5、焼土粒・黄暗褐色土 6、暗褐色土中に焼土粒少し混じる・黒暗褐色土中に焼土粒少し混じる 7、焼土・暗褐色土 8a、暗褐色土中に粘土粒やや多く・焼土粒・ローム粒少し混じる 8b、暗褐色土中に粘土粒混じる 8c、粘土粒・暗褐色土 8d、粘土 9、ローム主体で張り床、ローム 10a、焼土粒中に暗褐色土少し混じる 10b、粘土 11、黒暗褐色土中に粘土粒多く・焼土混じる

遺構 SI-187bはEV63に位置する。南東側でSI-187aと重複する。新旧関係は、SI-187aのカマド断面図から本遺構が新しい。また、南側でSK-156と重複する。平面形は3.18m×3.25mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.9)m²、遺構確認面から床面までは0.14mを測る。主軸方位はN-23.0°-E。カマド・貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は北西壁に無く、北東壁で回っているが、他は不明。

出土遺物 1～4は土師器杯で、1は体部外面に墨書「櫻カ井」が正位に横書きで認められる。

SI-188 (Fig.302、 PL.69・70・135・173)

遺構 SI-188はEV94に位置する。遺構の重複は無い。平面形は4.04m×4.65mの方形を呈する。遺構確認面における面積は18.5m²、遺構確認面から床面までは0.32mを測る。主軸方位はN-15.0°-E。床面は中央部で硬化しており、壁寄りでは張り床が観察されている。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅32cm、長さ132cmを測り、先端に向けて下方に傾斜し、先端部でPit状の掘り込みを伴う。燃烧部は壁ラインの内側に位置し、掘り込みを伴い、瓦小片がカマド上部から出土している。袖付け根部にPitを伴う。貯蔵穴は認められない。支柱穴は規則的に配置されている。Pitの深さは、P1は



SI-176

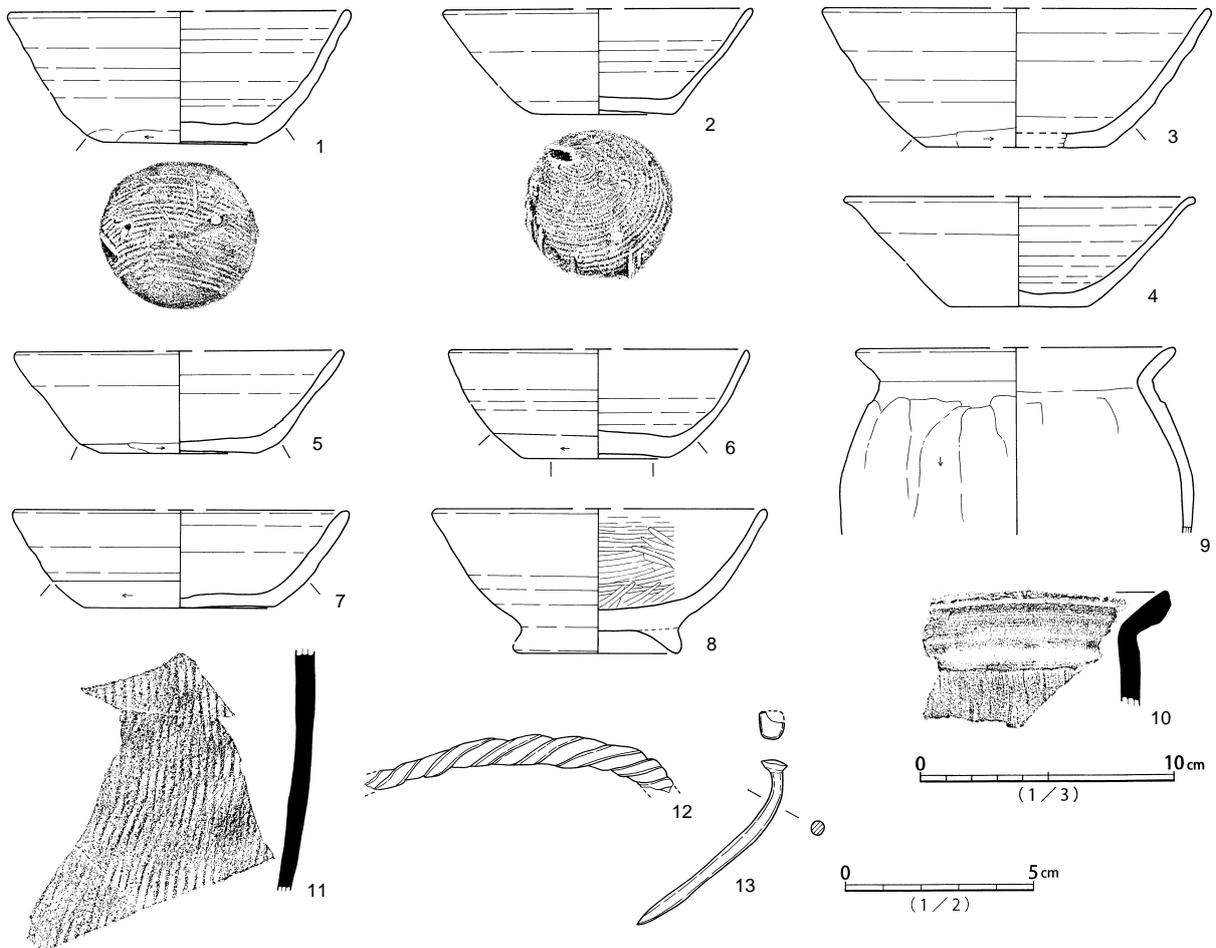
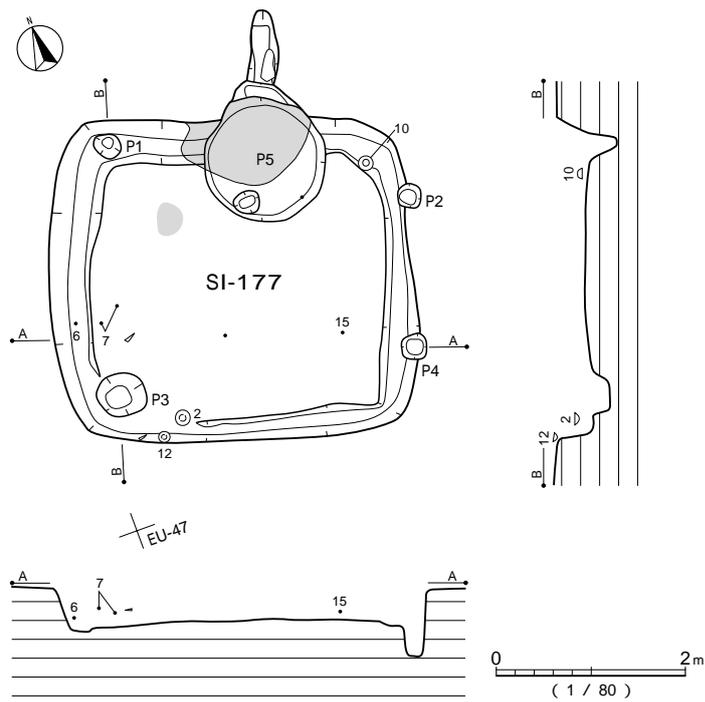
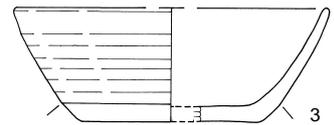
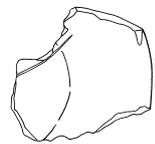
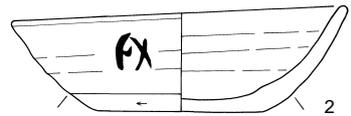
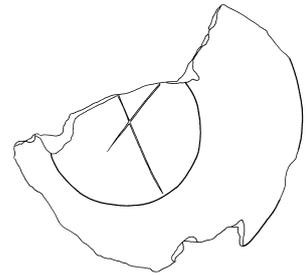
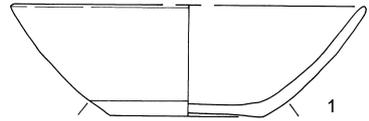
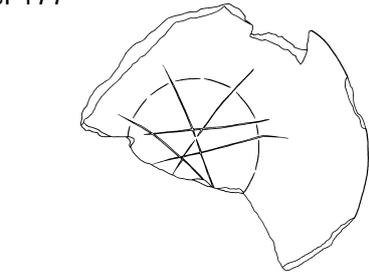


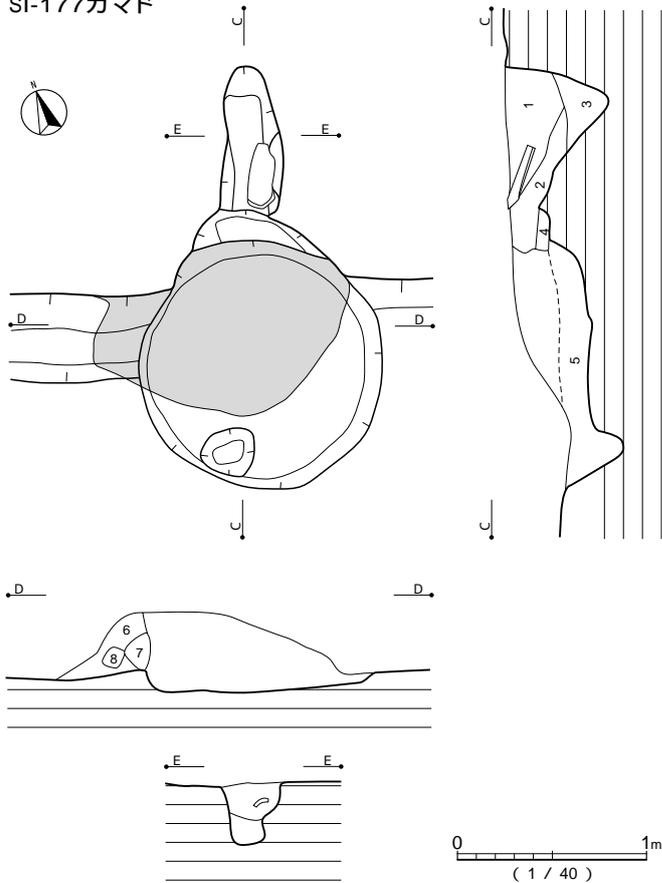
Fig.278 SI-176遺構・出土遺物実測図



SI-177



SI-177カマド



0 10cm
(1/3)

Fig.279 SI-177遺構・出土遺物実測図

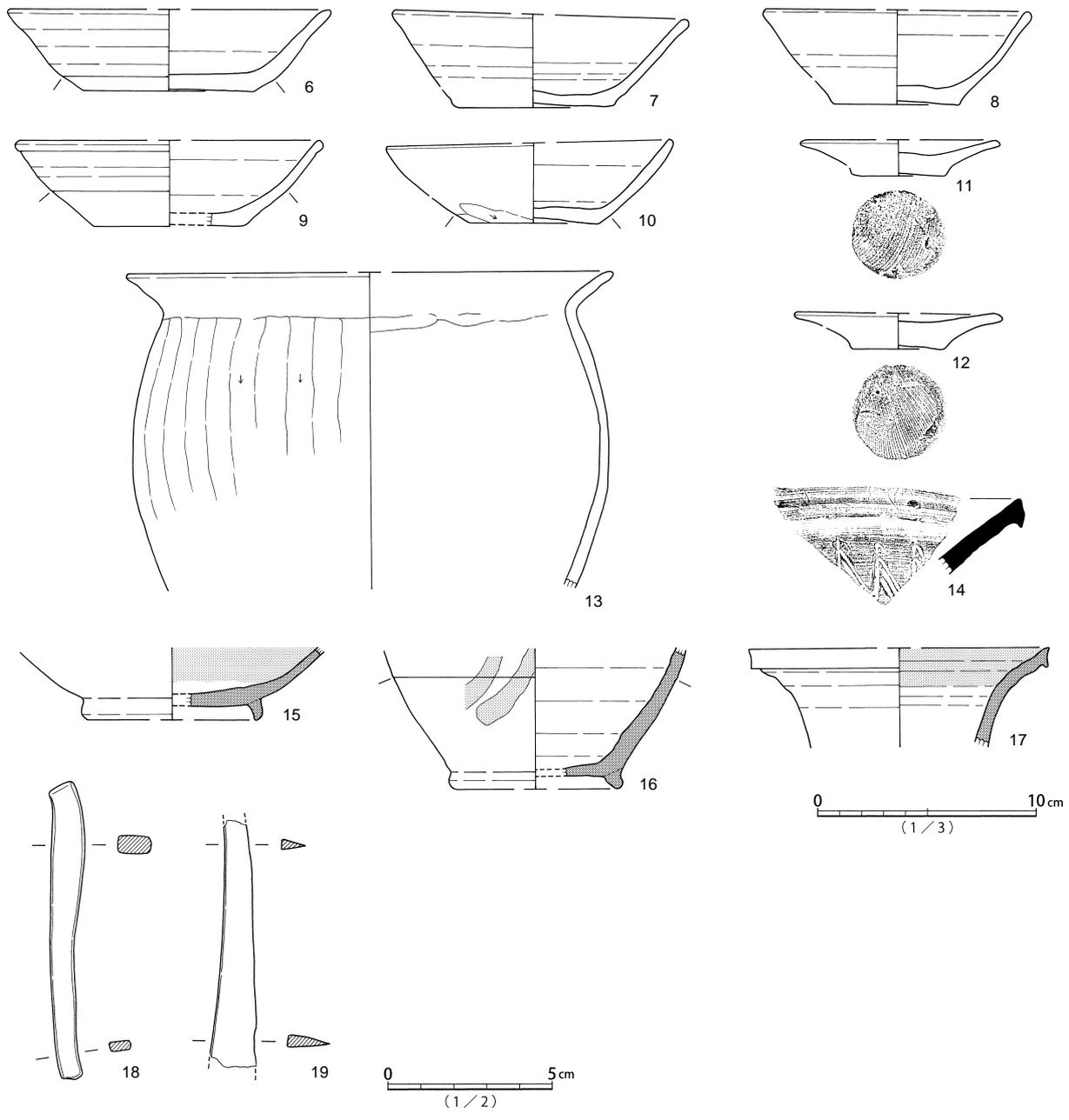


Fig.280 SI-177出土遺物実測図

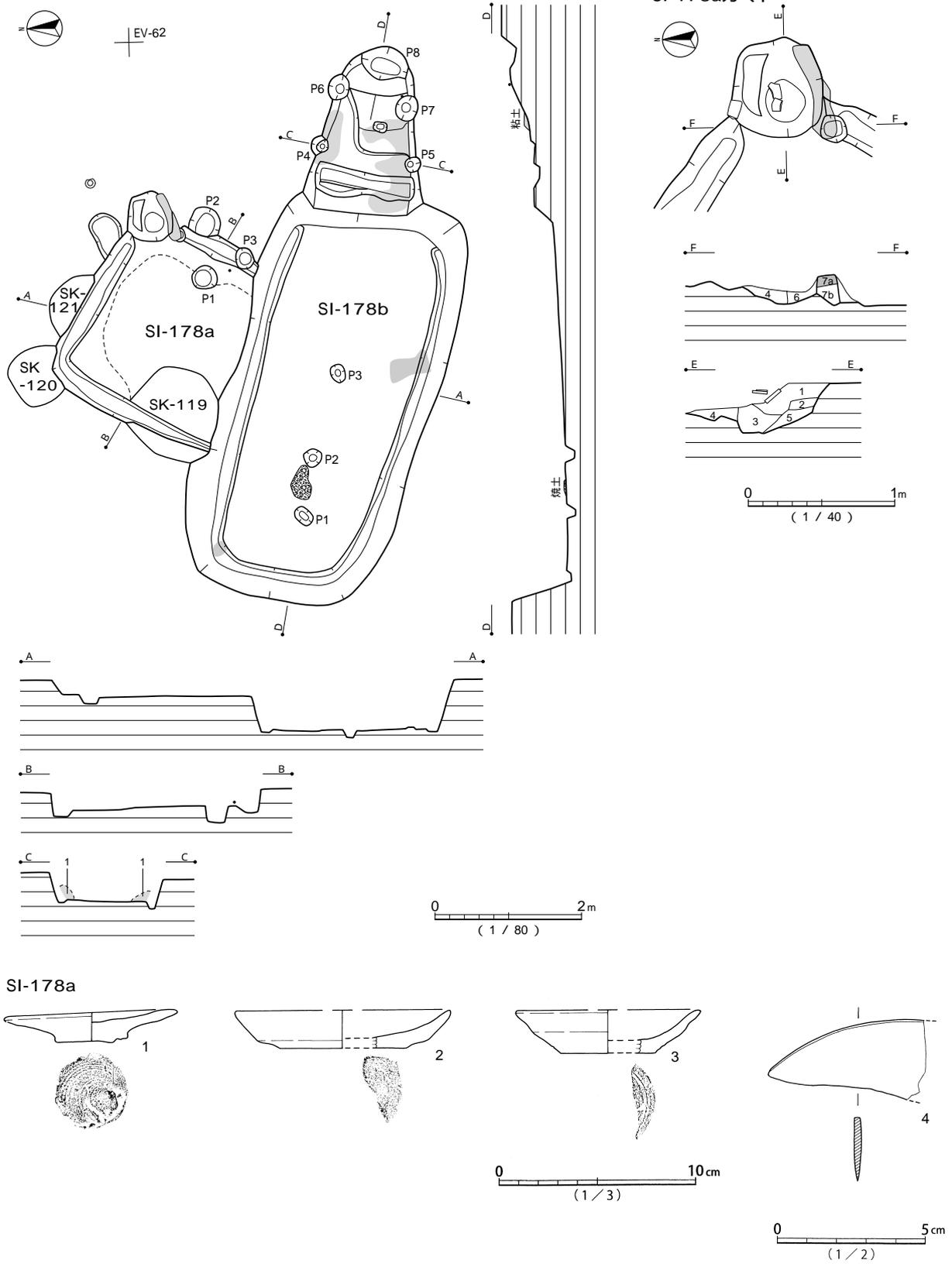


Fig.281 SI-178遺構・出土遺物実測図

SI-178b

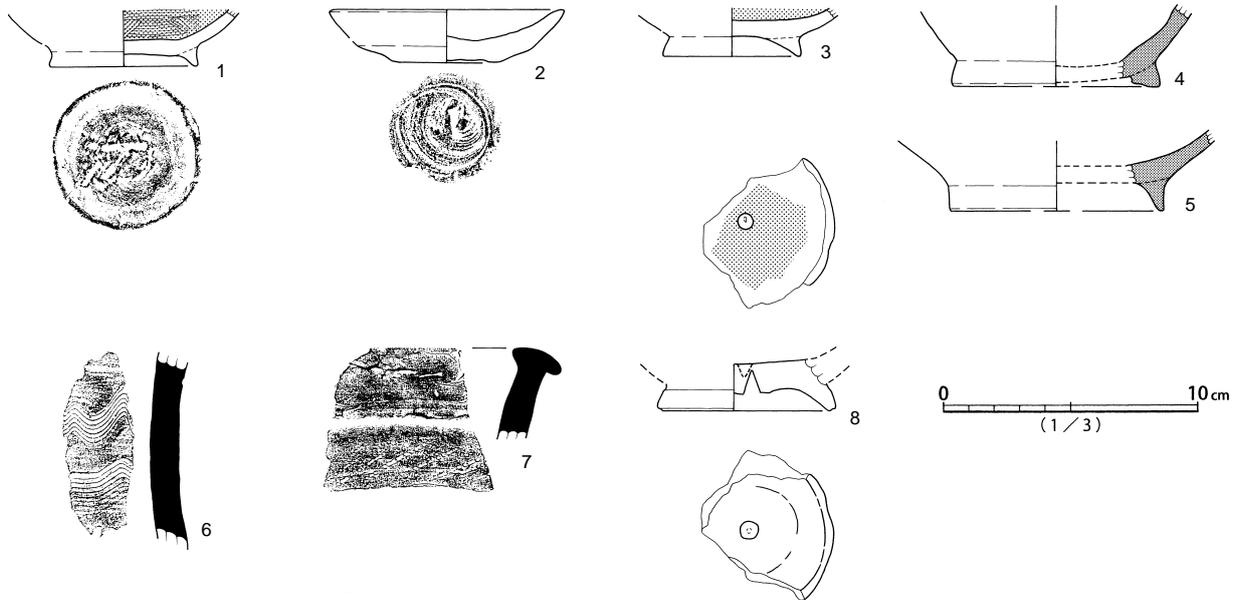


Fig.282 SI-178出土遺物実測図

43cm、P2は48cm、P3は51cm、P4は43cmを測る。周溝はカマド直下以外全周する。

出土遺物 1~3は土師器杯、4は土師器甕、5・6は須恵器杯、7は灰釉陶器碗の転用碗である。

土層 カマド:1、焼土中に炭素粒混じる 2、暗褐色土、暗褐色土と炭素粒、暗褐色土粘土混じる、暗褐色土と炭素粒若干含む 3、焼土火床、焼土 4、焼けたローム 5、灰 6、ロームブロック・暗褐色土 7、粘土

SI-189 a(Fig.303・304、PL.70・135・136・173・195・233・238)・b(Fig.305、PL.136・173・233・238)・c(Fig.306、PL.70・136・173・188・192・219・238)

遺構 SI-189aはGV91に位置する。北側でSI-189bと重複する。平面形は3.80m × 8.90mの長方形を呈する。遺構確認面における面積は(30.0)m²、遺構確認面から床面までは17cmを測る。主軸方位はN-106°-E。床面は遺構北側と南側中央で良好に遺存する。カマド・貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1・4・5は土師器碗で、1・4は内面に黒色処理を施す。2はカワラケ、3は土師器小皿、6は足高高台付杯、7は灰釉陶器碗、8は灰釉陶器手付壺の把手、9は灰釉陶器壺、10は土師器杯を転用した紡錘車の紡輪部とみられる。11~13は鉄製品で、11は鉄鏝か12・13は釘である。他に小型碗形滓1点が出土している。

遺構 SI-189bはGV91に位置する。北側でSI-189cと、南側でSI-189aと重複する。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は(4.5)m²、遺構確認面から床面までは22cmを測る。主軸方位は不明。床面は不明瞭。カマド・貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。積極的に竪穴建物と判断する根拠に乏しく、土坑状の遺構である可能性がある。

出土遺物 1は土師器杯、2は伊勢鍋、3~5は鉄製品で、3は板状不明品で鑄造とみられ、4は鉄鏝、5は釘である。

遺構 SI-189cはGV71に位置する。南側でSI-189bと重複する。平面形は4.10m × 4.10mの方形を呈す

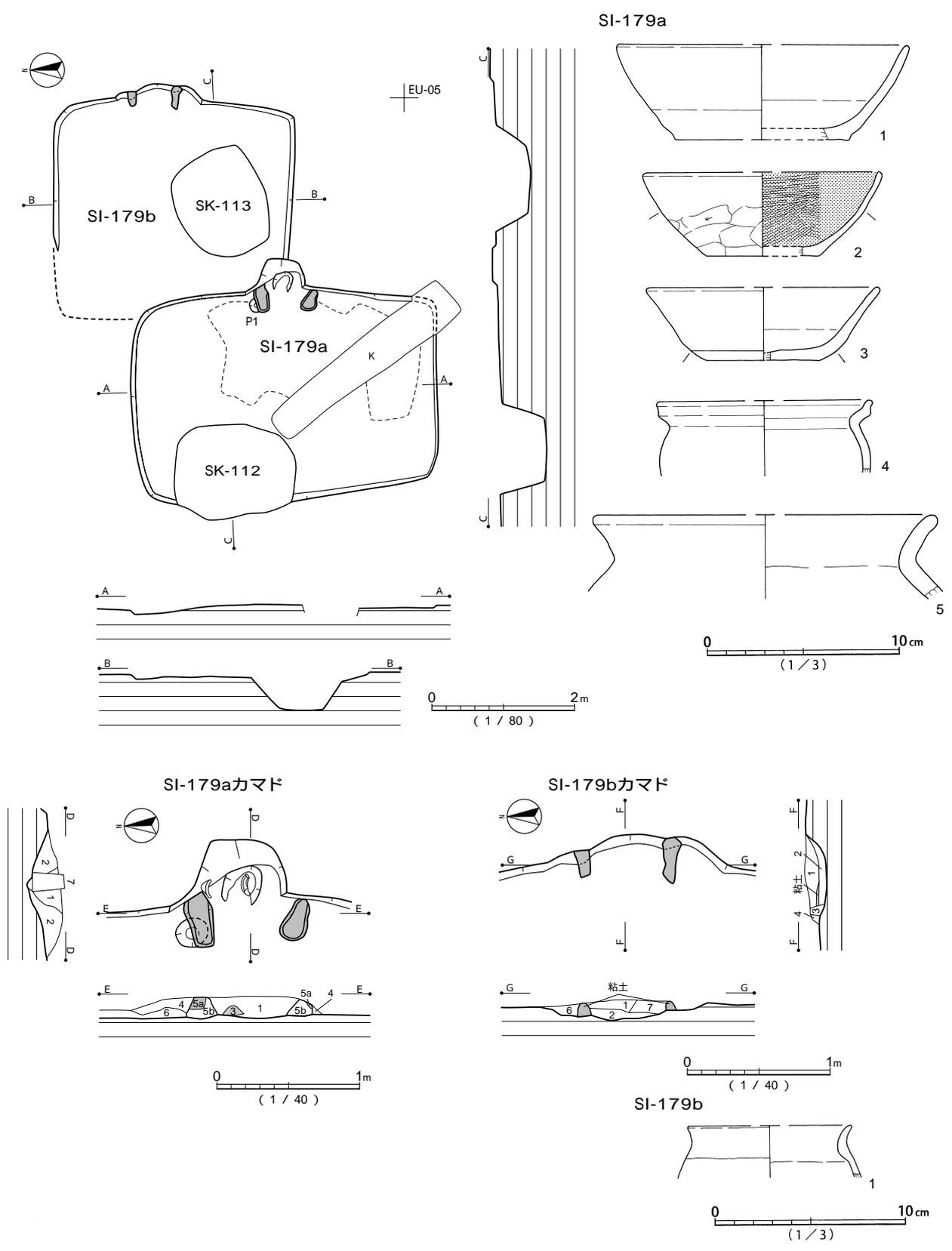


Fig.283 SI-179遺構・出土遺物実測図

る。遺構確認面における面積は(14.5) m^2 、遺構確認面から床面までは14cmを測る。主軸方位は不明。床面は遺構中央部に硬化面が認められる。カマドは北壁中央に位置する。明確な煙道部は認められない。燃烧部は壁ライン上にかかって位置し、掘り込みを伴う。奥壁は壁を半円形に掘り広げており、瓦が立てた状態で出土している。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。遺構東側・南西側で焼土範囲が認められる。

出土遺物 1・4は土師器杯で、1は底部内外面に線刻が認められ、内面は「×」、外面は「二」である。2・3は土師器甕、5は灰釉陶器椀、6は凸面縄目の平瓦で、陰刻印の「周」が押印されている。

土層 カマド:1、焼土多く混じる 2、暗褐色土中に粘土粒・焼土粒少し混じる 3、ソフトローム 4、黄褐色土中に粘土粒少し混じる 5、黒褐色土・黄褐色土 6、黒褐色土・黄褐色土中に焼土粒少し混じる 7、黒褐色土中に焼土粒・粘土を含む 8、黄褐色土(やや汚れている) 9、黒褐色土中に粘土を含む(壁に沿わせて粘土張る) 10、黒褐色土中にローム細粒・焼土粒混じる

SI-190 (Fig.307、PL.70・71・136・173)

遺構 SI-190はFW69に位置する。平面形は4.24m × 1.82mの不整形を呈する。遺構確認面における面積は6.9 m^2 、遺構確認面から床面までは10cmを測る。主軸方位は不明。床面は明確な硬化面が認められない。粘土が散布する範囲は認められるがカマドは不明確。貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は20cm、P2は22cm、P3は31cm、P4は16cm、P5は17cm、P6は9cm、P7は26cm、P8は33cm、P9は21cm、P10は20cm、P11は3cm、P12は3.5cm、P13は8cm、P14は11cm、P15～P30は不明である。周溝は伴わない。積極的に竪穴建物と判断する根拠に乏しく、土坑状の遺構である可能性がある。

出土遺物 1・2は土師器杯、3は土師器椀で内面に黒色処理を施す。4は土師器椀、5～7は土師器小皿、8は土師器甕、9は灰釉陶器平瓶で、床面直上からの出土である。

SI-191 (Fig.308、PL.71・136・185・219)

遺構 SI-191はIW47に位置する。遺構の重複は無い。平面形は4.10m × 3.47mの方形を呈する。遺構確認面における面積は14.1 m^2 、遺構確認面から床面までは7cmを測る。主軸方位はN-3.1°-E。床面は表土掘削時に僅かに削られている。カマドは北壁中央に位置する。明確な煙道は認められない。燃烧部は図化されていないため不明だが、壁ラインより内側に位置するとみられ、掘り込みは伴わない。貯蔵穴は認められない。支柱穴は南側が壁に接した位置であるが、規則的に配置されている。Pitの深さは、P1は54cm、P2は59cm、P3は30cm、P4は36.5cmを測る。周溝はカマド直下は不明だが、それ以外では回っている。

出土遺物 1～5は土師器杯で、1は体部外面に墨書文字が正位で認められるが、判読できない。6は土師器皿、7は土師器甕、8は凸面斜格子の平瓦である。

土層 カマド:1、暗褐色土中に焼土粒・ローム粒混じる

SI-192 (Fig.309、PL.71・136・137・173・174)

遺構 SI-192はIW70に位置する。遺構の重複は無い。平面形は2.67m × 2.50mの方形を呈する。遺構確認面における面積は6.1 m^2 、遺構確認面から床面までは13cmを測る。主軸方位はN-75.5°-E。床面はソフトローム上に造られており、硬化範囲は認められない。カマドは東壁やや南東隅に寄って位置するが詳細は不明。明確な煙道は認められない。燃烧部は壁ラインより内側に位置するとみられる。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。

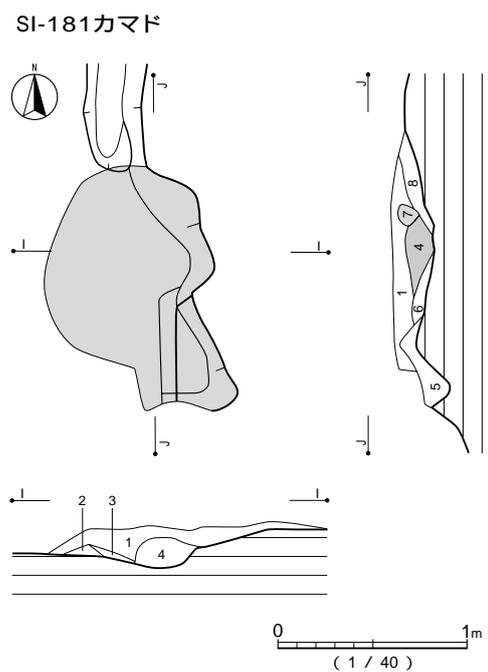
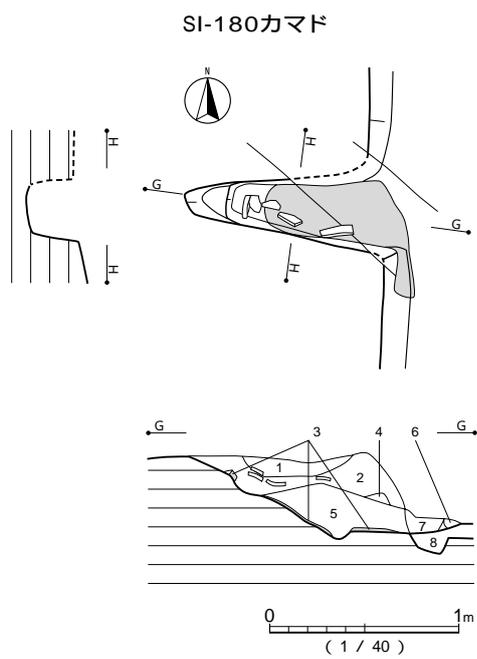
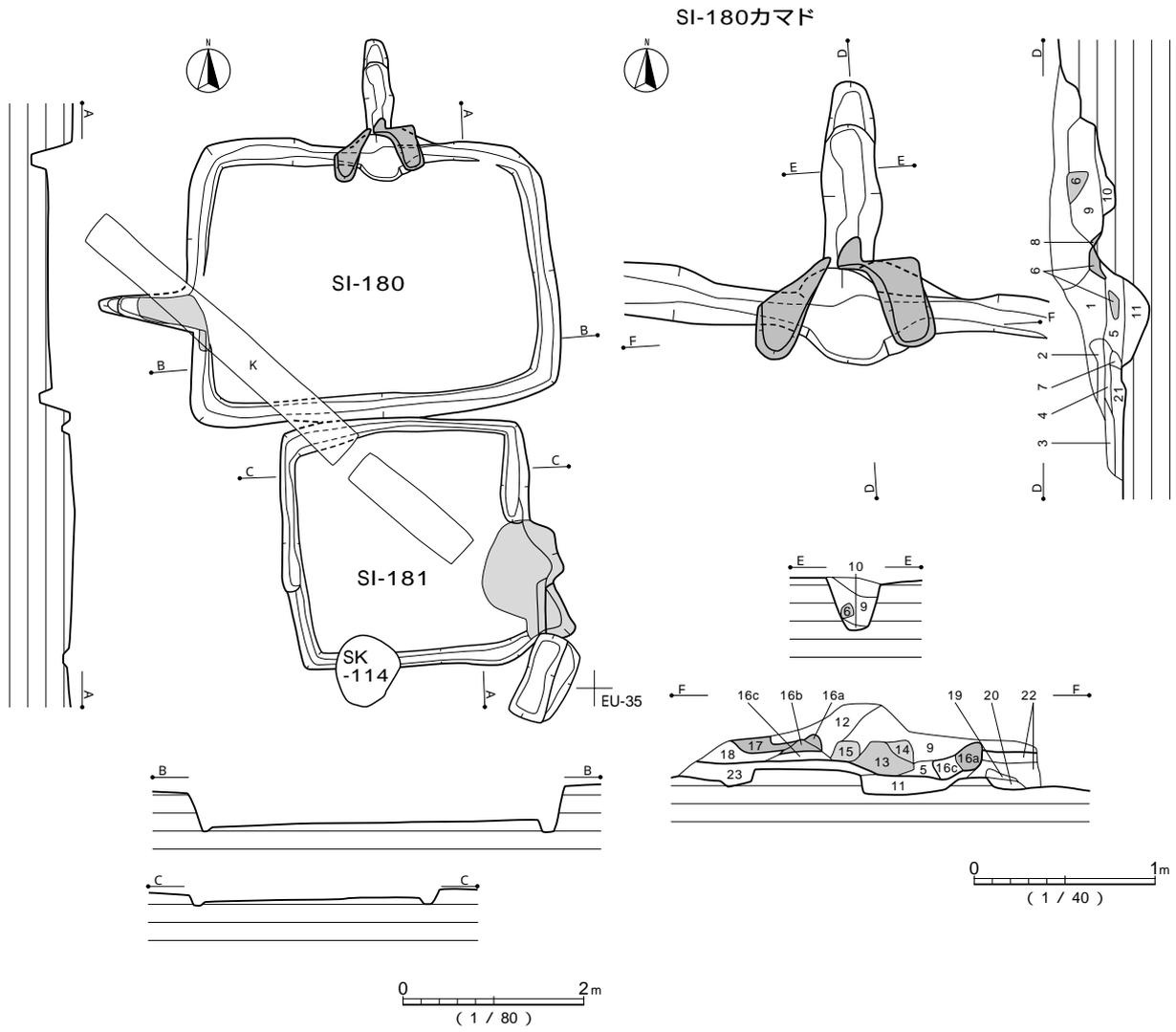


Fig.284 SI-180・181遺構実測図

SI-180

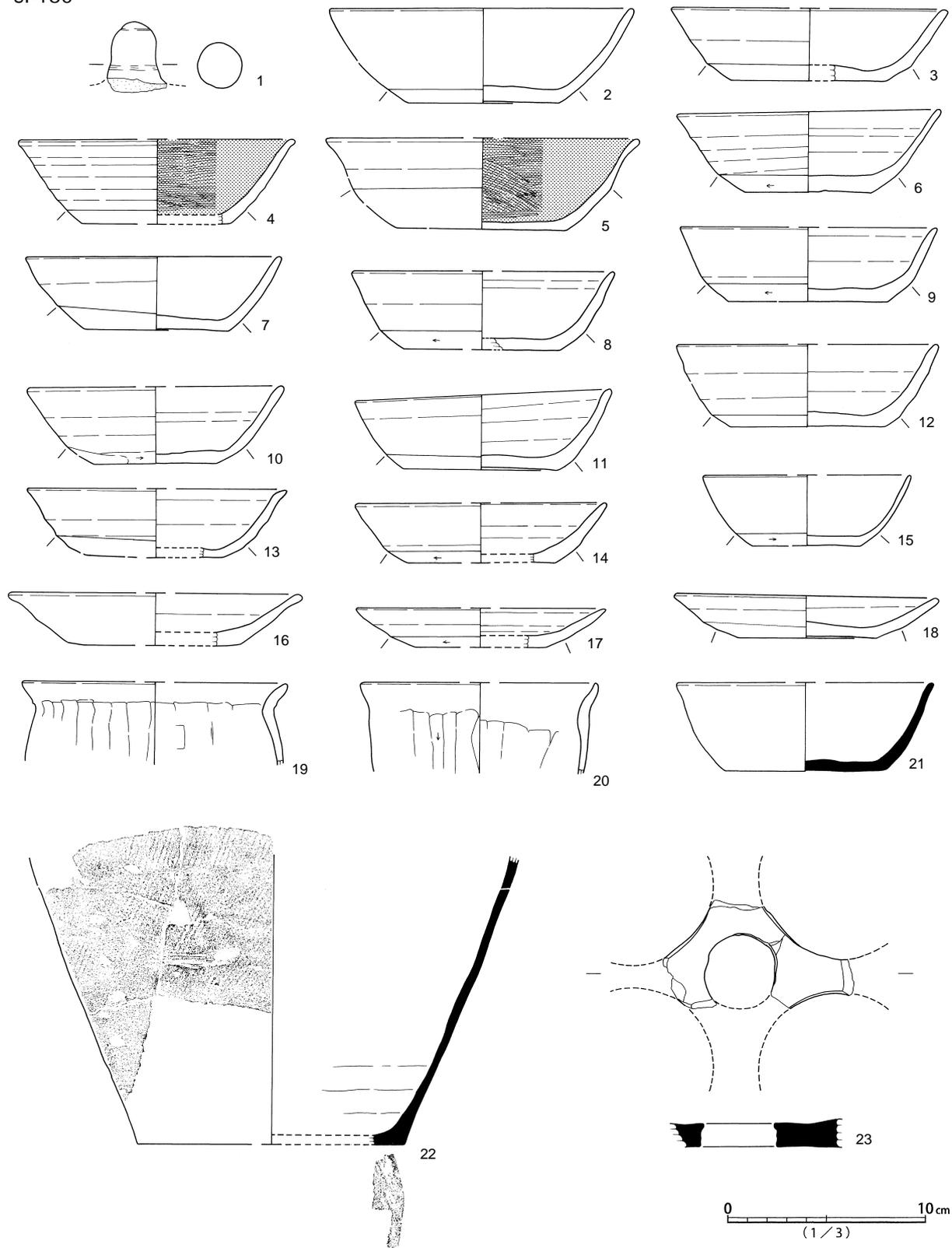


Fig.285 SI-180出土遺物実測図

SI-181

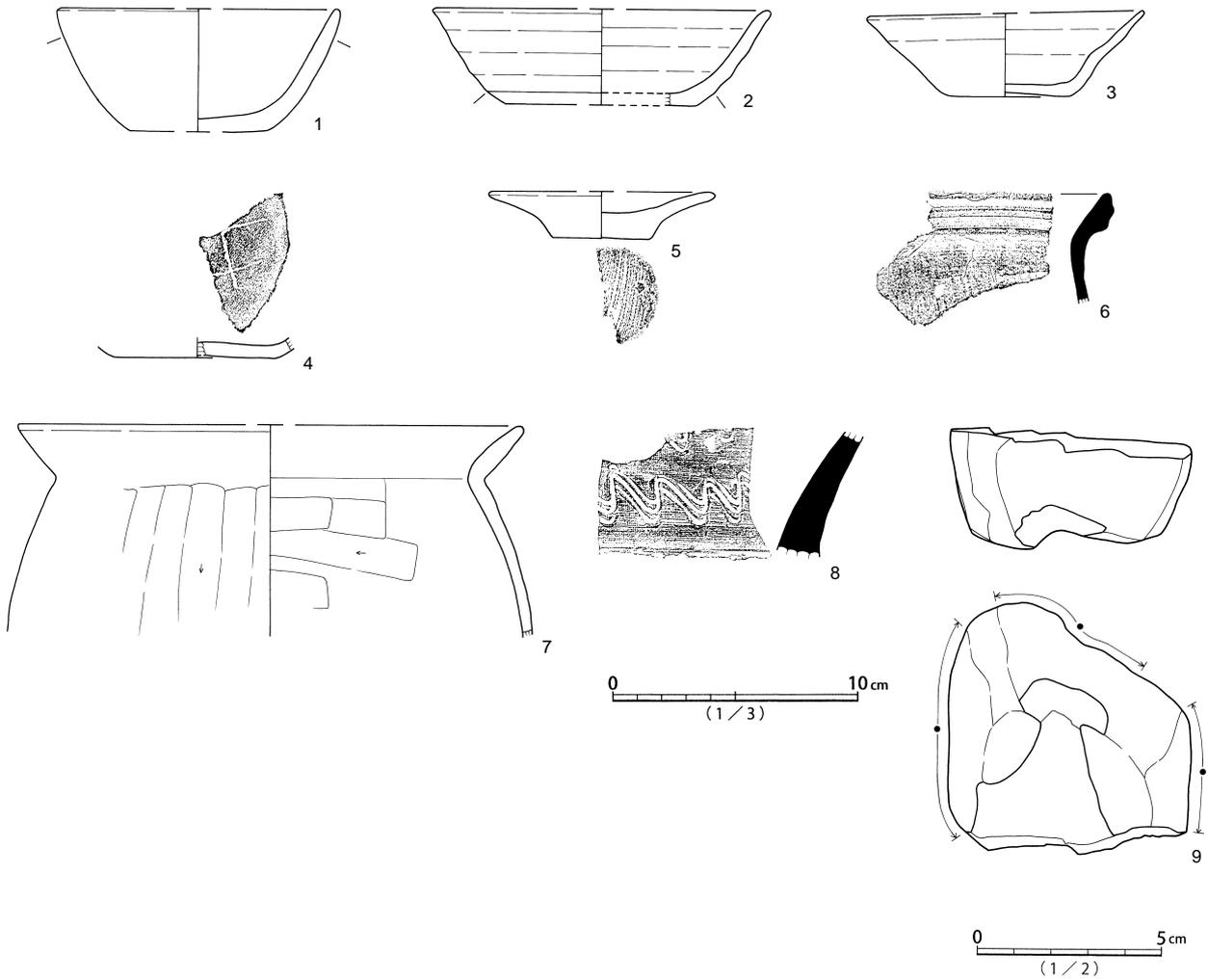


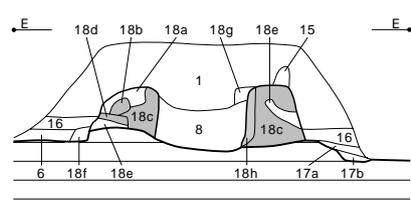
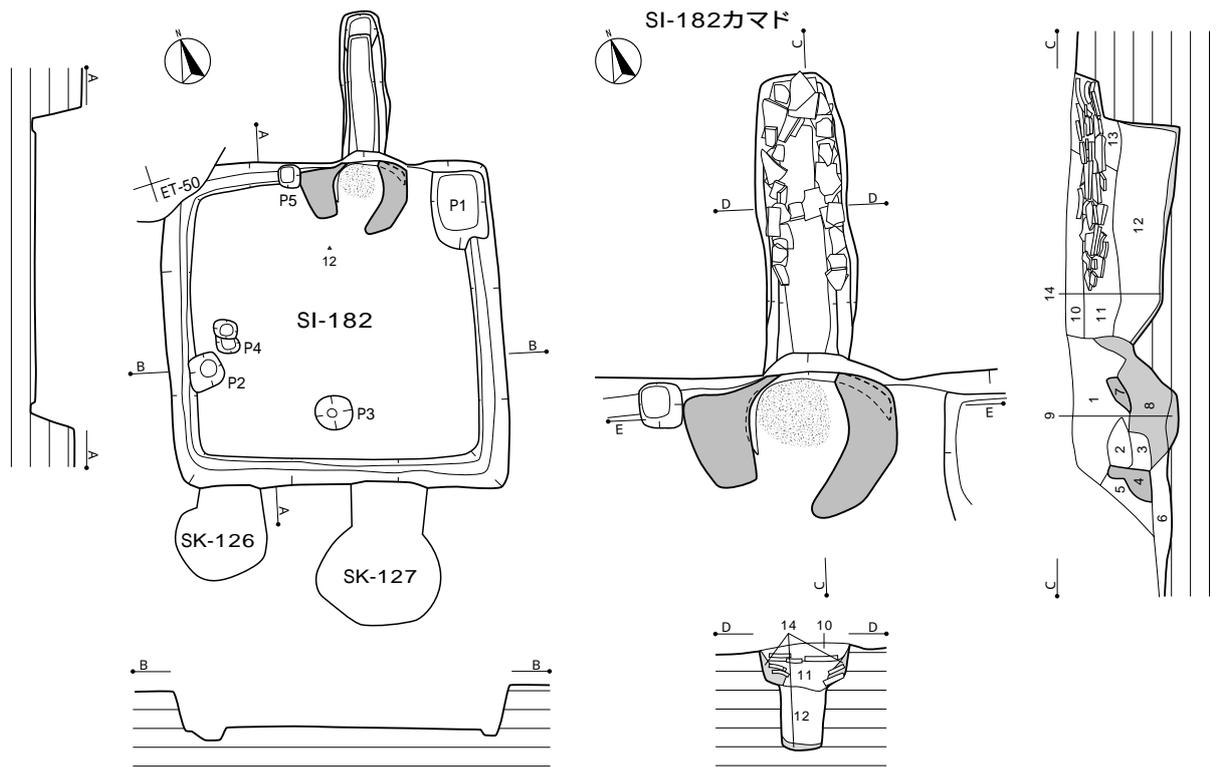
Fig.286 SI-181出土遺物実測図

出土遺物 1は土師器杯で内面に黒色処理を施す。2は土師器甕、3・4は須恵器甕、5は灰釉陶器碗である。

SI-193 (Fig.310・311、PL.71・72・137・174・221)

遺構 SI-193はIX91に位置する。遺構の重複は無い。平面形は2.66m×2.44mの方形を呈する。遺構確認面における面積は6.1㎡、遺構確認面から床面までは24cmを測る。主軸方位はN-16.0°-E。床面はハードローム上に造られ、硬化している。カマドは東壁中央に位置する。明確な煙道は認められない。燃烧部は壁ライン上に一部かかって位置するとみられ、掘り込みを伴う。燃烧部奥壁は僅かに竖穴の壁を掘り広げられて造られている。また、内壁として、瓦を立てた状態で設置している。貯蔵穴は認められない。支柱穴は竖穴内には認められないが、竖穴対角線上の4箇所にPitが位置する。本遺構に帰属するか否かは、現場所見では不明としている。周溝はカマド直下は不明だが、カマドのある東壁の南東隅にかけて以外は回っている。

出土遺物 1~4は土師器杯で、4は内面に黒色処理を施す。5は土師器碗で内面に黒色処理を施す。6~8は土師器甕、9は須恵器甕、10は凸面斜格子の平瓦である。



SI-182

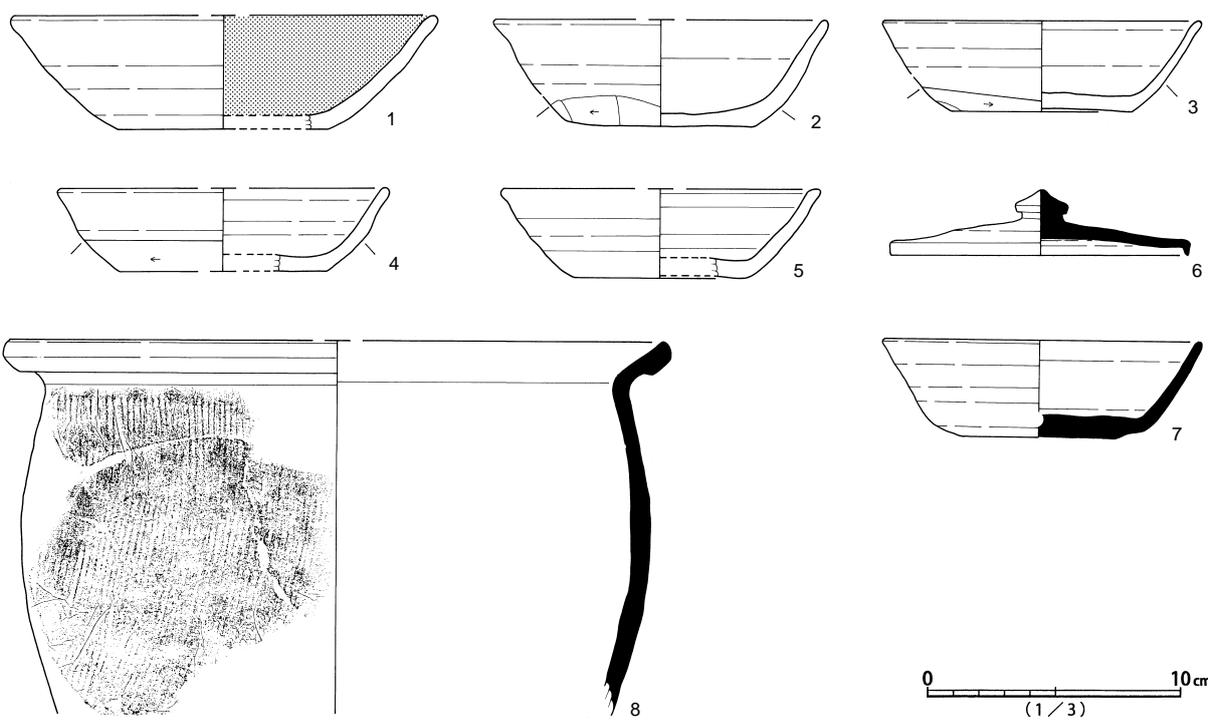


Fig.287 SI-182遺構・出土遺物実測図

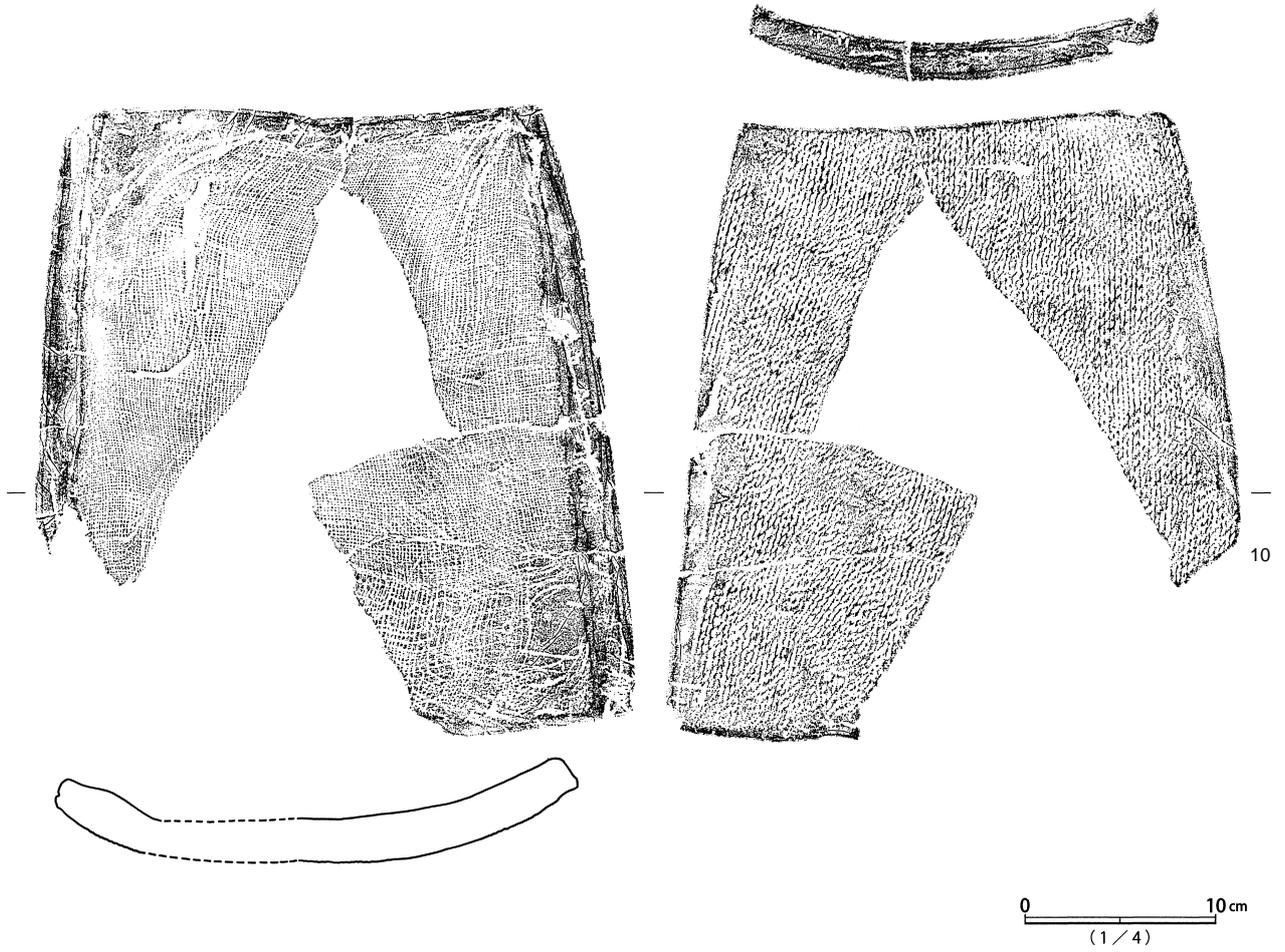
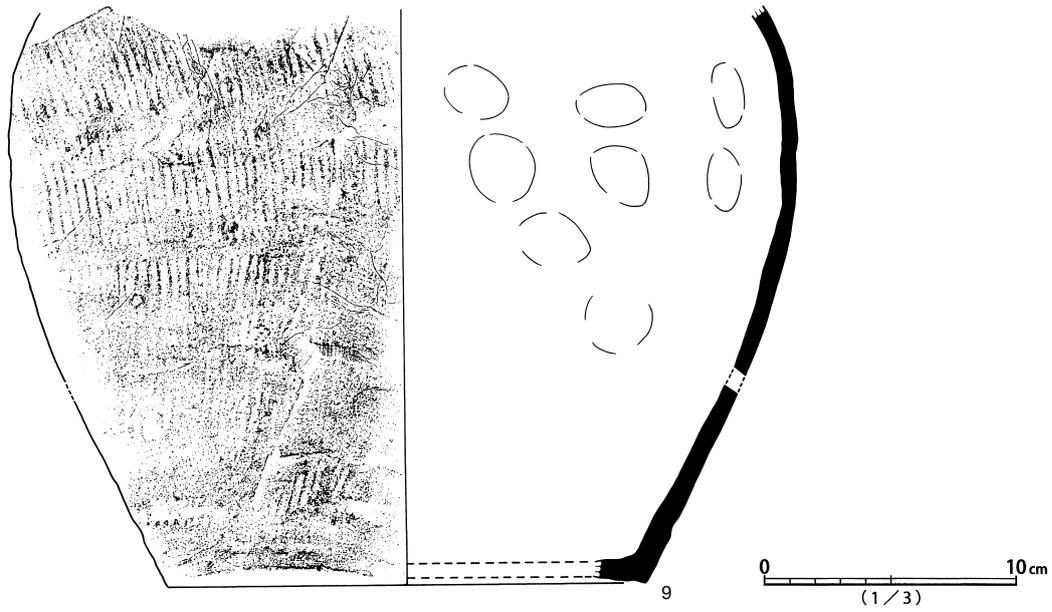


Fig.288 SI-182出土遺物実測図

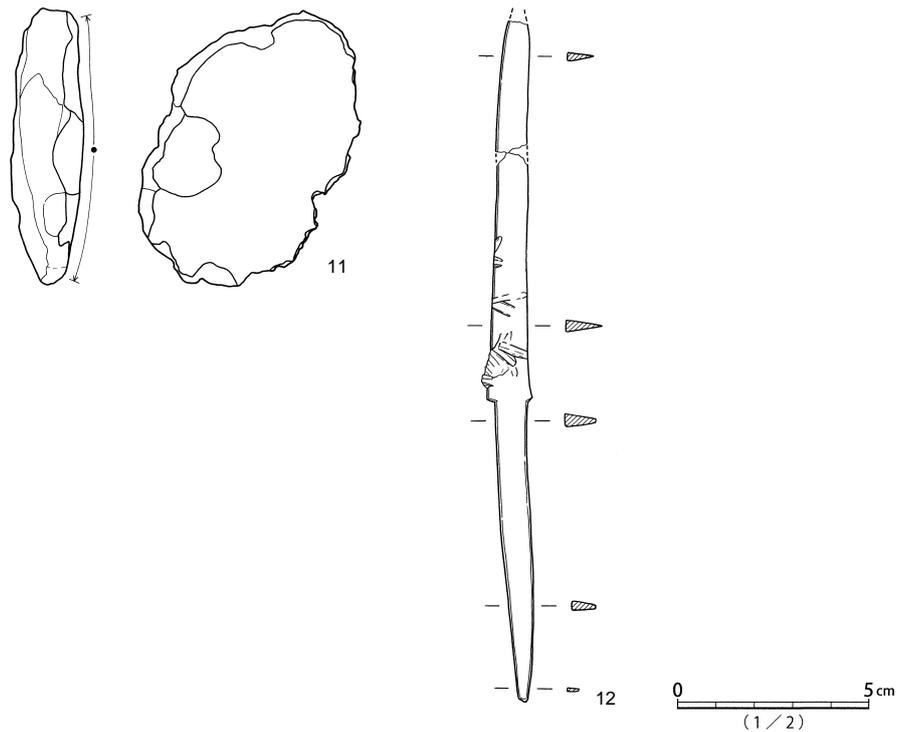


Fig.289 SI-182出土遺物実測図

土層 カマド:1、暗褐色土中に焼土粒を多量に含む 2、暗褐色土

SI-194 (Fig.312、PL.137)附章参照

遺構 SI-194はIX99に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構は南北方向に伸びる溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は9.6㎡。カマドは北西壁中央に位置する。主柱穴は認められない。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1は須恵器杯、2は須恵器甕である。

SI-195 (Fig.312、PL.72・137・174・233)附章参照

遺構 SI-195はHW20に位置する。遺構図はカマド図以外は無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.6)㎡。カマドは北東壁東隅に寄って位置する。明確な煙道部は認められず、燃烧部は壁ラインより内側に位置し、掘り込みを伴う。主柱穴は認められない。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1~4は土師器杯、5は土師器甕、6・7は須恵器甕、8は原始灰釉壺、9・10は鉄製品で、9は刀子、10は不明鉄製品である。

SI-196 α(Fig.313、PL.72・137・174)・β(Fig.313~316、PL.72・137・138・174・185・220・226・233)・γ(Fig.313・316~318、PL.72・138・139・174・192・233)

遺構 SI-196aはIW75に位置する。北東側でSI-196bと重複する。新旧関係は、平面図から本遺構が古い。平面形は2.86m×3.08mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.6)㎡、遺構確認面から床面までは20cm~27cmを測る。主軸方位は不明。カマド・貯蔵穴・主柱穴は認められない。周溝は伴わない。

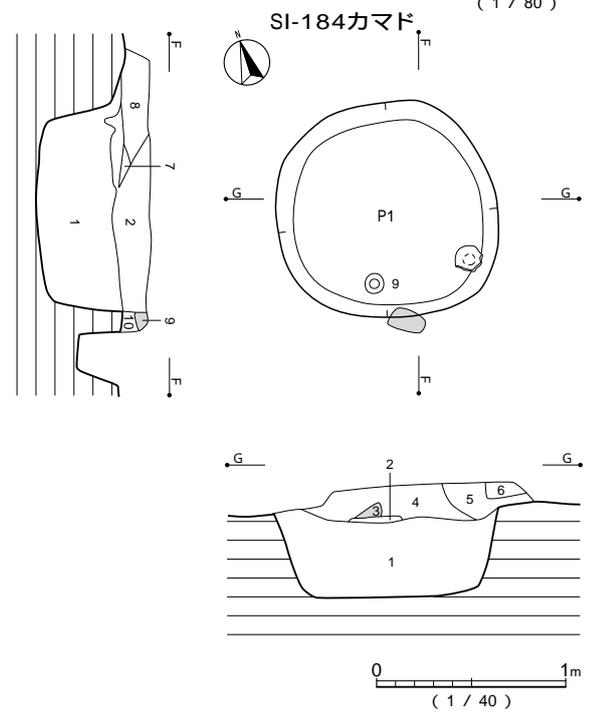
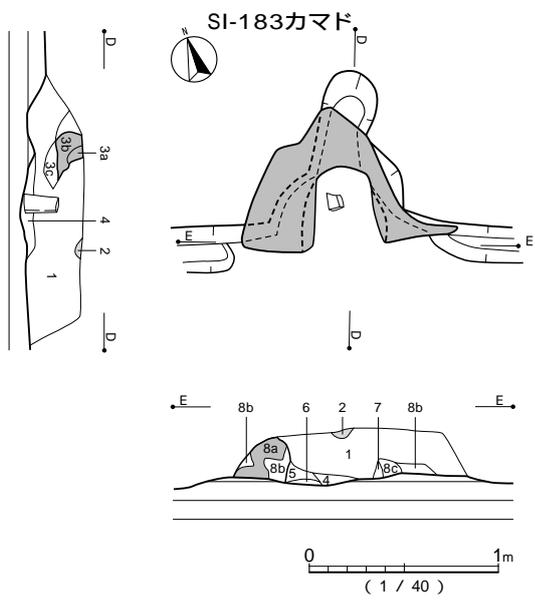
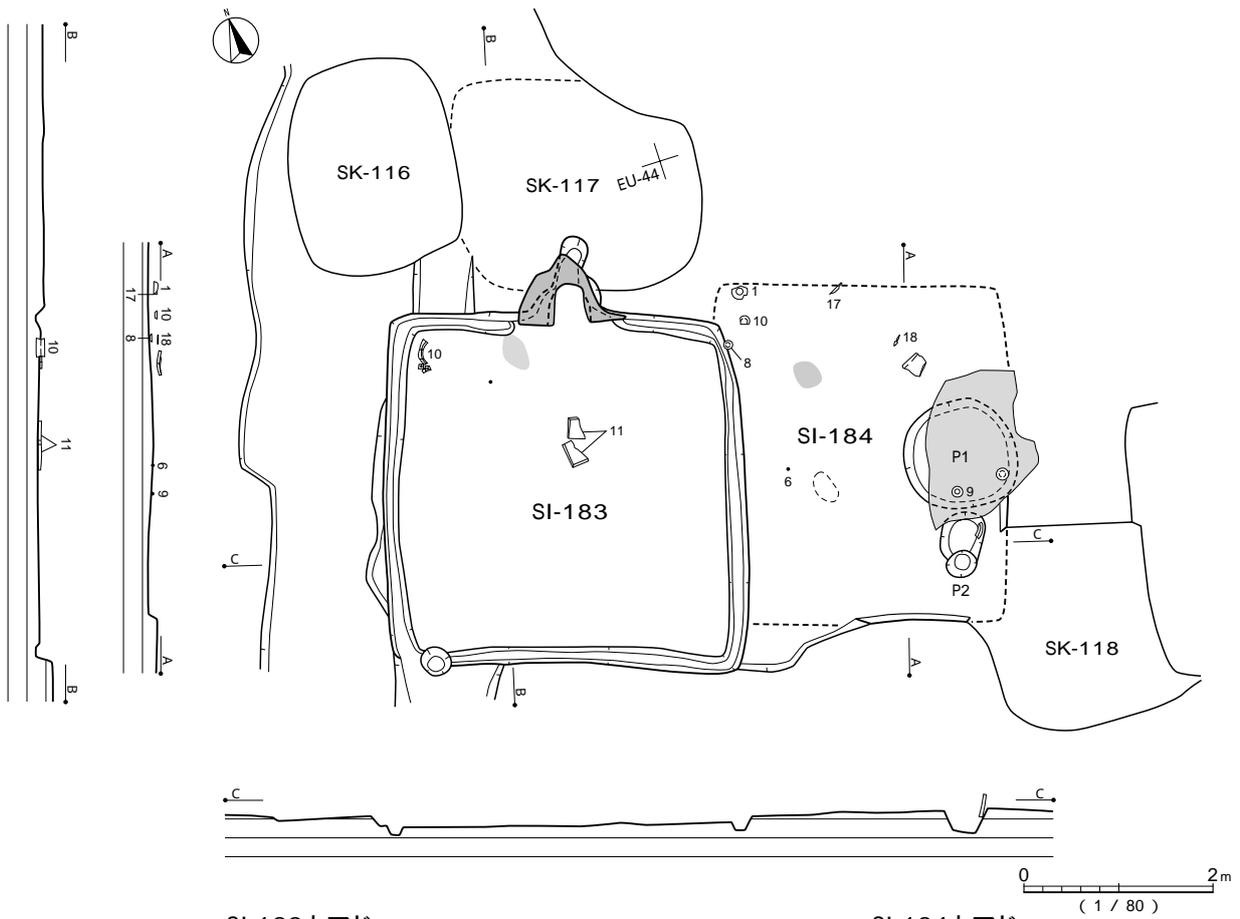


Fig.290 SI-183・184遺構実測図

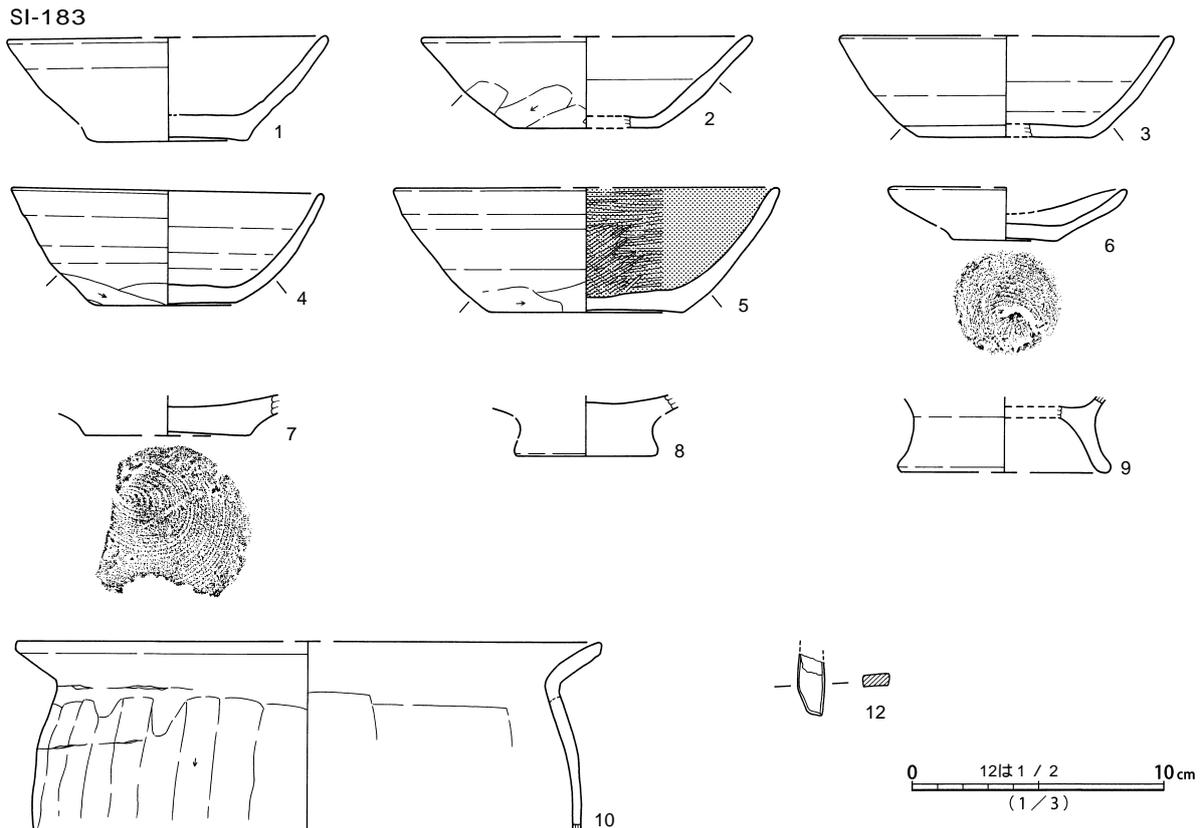


Fig.291 SI-183出土遺物実測図

出土遺物 1～3は土師器杯、4は土師器小皿、5は須恵器甕、6は灰釉陶器壺である。

遺構 SI-196bはIW75に位置する。南西側でSI-196aと、北東側でSI-196cと重複する。新旧関係は、平面図からSI-196aに対して新しいが、SI-196cに対しては遺構の観察からは新旧関係は不明である。平面形は3.50m×3.36mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(11.7)m²、遺構確認面から床面までは38cmを測る。主軸方位はN-2.0°-W。カマドは北西壁やや北隅寄りに位置する。煙道部は幅32cm、長さ54cmを測り、先端に向けて上方に傾斜する。燃烧部は壁ライン上にかかって位置し、奥壁は竪穴壁を半楕円形に掘り広げている。内壁として、平瓦を立てた状態で設置している。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝はカマド周辺と遺構重複範囲以外に回っている。

出土遺物 1・3～14は土師器杯で、1は底部外面に墨書「□井」が認められ、7・10は内面に黒色処理を施す。2・15～18は土師器皿で、2は体部下位外面に墨書「□富カ」が認められる。19～22は土師器甕、23は灰釉陶器椀、24は原始灰釉瓶類、25は須恵器甕、26・27は凸面斜格子の平瓦、28は砥石、29は鉄製刀子である。

土層 カマド:1、暗褐色土中に焼土・粘土含む 2、焼土

遺構 SI-196cはIW75に位置する。南西側でSI-196bと重複する。新旧関係は遺構図からは判断できない。平面形は3.86m×3.52mの方形を呈する。遺構確認面における面積は12.9m²、遺構確認面から床面までは30cmを測る。主軸方位はN-14.5°-E。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅56cm、長さ190cmを測り、先端に向けて緩やかに下方へ傾斜する。覆土上層には平瓦が認められ、天井部を構成していた可能性がある。燃烧部は壁ラインの内側に位置するとみられ、掘り込みを伴う。貯蔵穴・

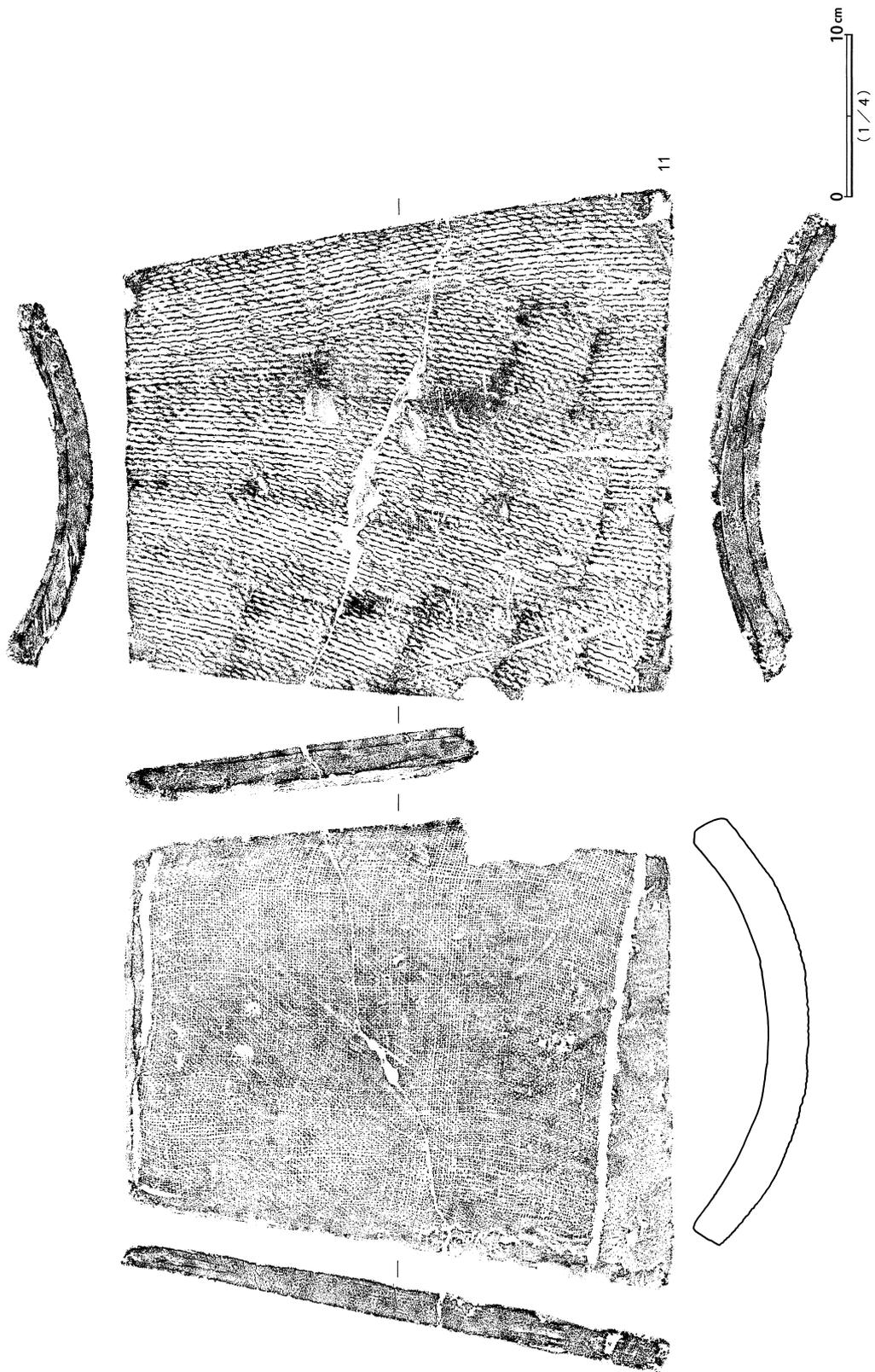


Fig.292 SI-183出土遺物実測図

SI-184

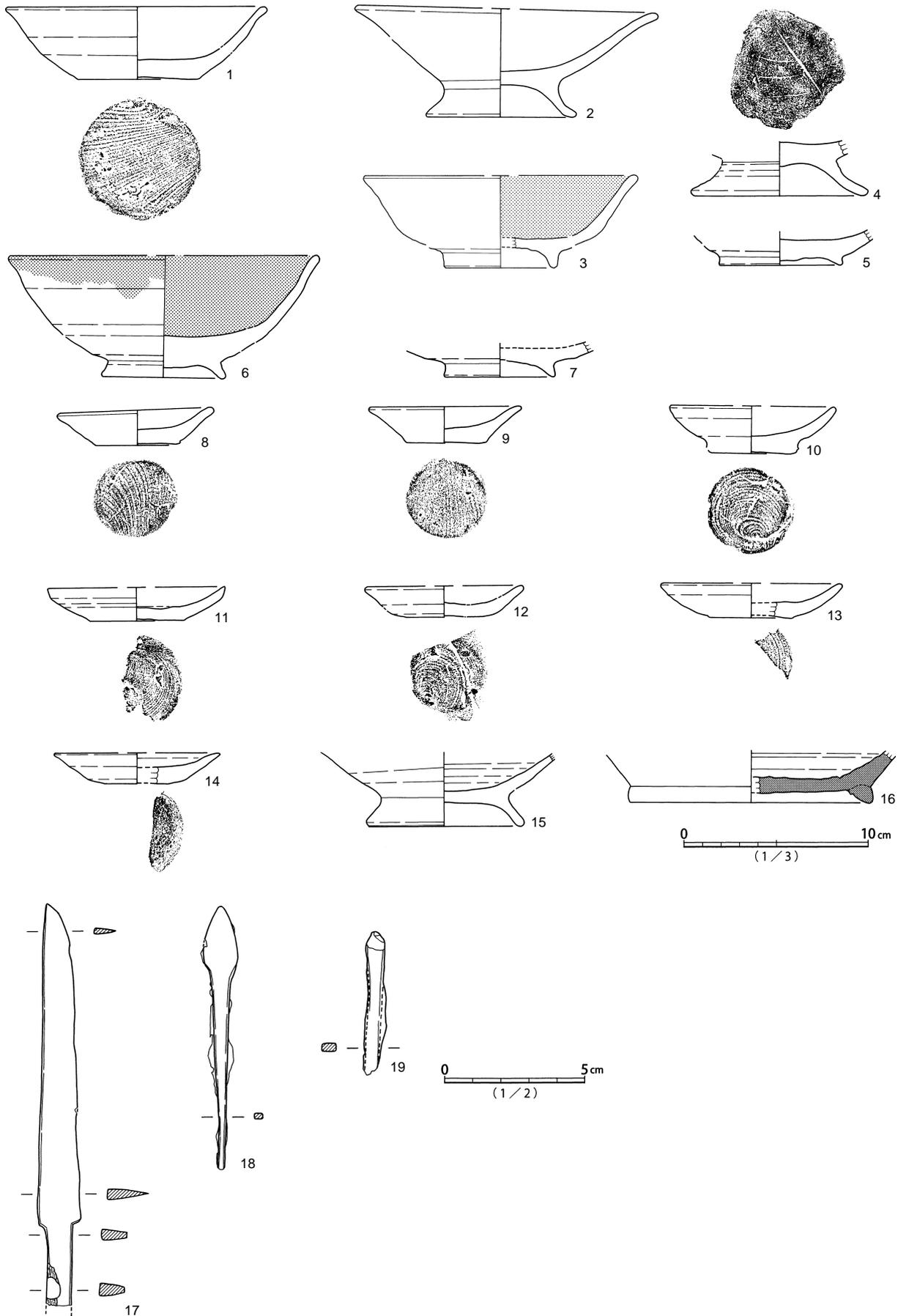


Fig.293 SI-184出土遺物実測図

主柱穴は認められない。周溝はカマド直下以外全周する。

出土遺物 1・9～12は土師器椀で、1は底部内面に線刻が認められるが、判読できない。9・12は内面に黒色処理を施す。2～8は土師器杯で、2は底部内面にヘラガキ「万カ」が認められる。13～16は土師器甕、17・18は須恵器甕で、18は転用硯、19は須恵器甗、20は灰釉陶器椀、21は灰釉陶器壺、22～26は鉄製品で、22は刀子形利器で、23は棒状不明品、24は鑿、25は釘、26は鋸状製品である。

土層 カマド:1、暗褐色土中に焼土・灰含む 2、焼土 3、灰 4、スサ入り粘土

SI-197 (Fig.319、PL.72・139・174・185・186・226) 附章参照

遺構 SI-197はHW06に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は15.7m²。カマドは北壁やや北東隅よりに位置する。主柱穴は認められない。周溝は伴わないとみられる。

出土遺物 1～8は土師器杯で、1は底部外面に墨書「講院」が、2は体部外面に墨書「四院」が横位に縦書きで認められる。8は内面に黒色処理が施されている。9は土師器甕、10は灰釉陶器長頸壺、11は磨石である。

SI-198 (Fig.319、PL.72・139) 附章参照

遺構 SI-198はHW15に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は8.6m²。カマドは北壁中央に位置する。主柱穴は認められない。周溝は伴わないとみられる。

出土遺物 1は土師器杯である。

SI-199・b (Fig.320、PL.73・139・174・238) 附章参照

遺構 SI-199はHW88に位置する。遺構図はカマド図以外無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。北西側でSI-199bと重複し、新旧関係は本遺構が新しいとみられる。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は9.0m²。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅32cm、長さ160cmを測り、先端に向けて下方に傾斜し、先端部でPit状の掘り込みを伴う。燃烧部は壁ラインの内側か一部かかって位置するとみられ、僅かに掘り込みを伴う。また、奥壁近くに瓦が立てた状態で設置されている。主柱穴は認められない。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回っている。

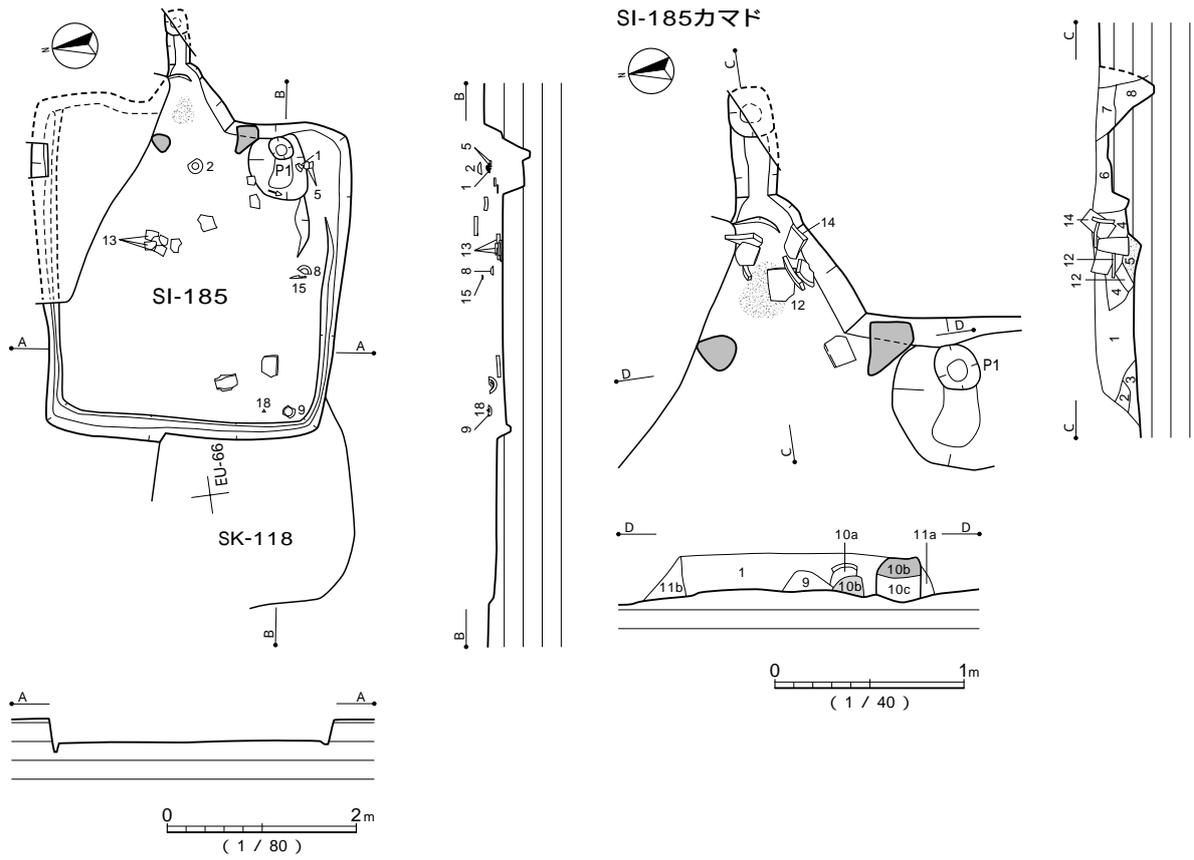
遺構 SI-199bはHW88に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。南東側でSI-199と重複し、新旧関係は本遺構が古いとみられる。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は(6.8)m²。カマドは北東壁中央に位置する。明確な煙道部は認められない。燃烧部は壁ライン上に一部かかって位置するとみられ、僅かに掘り込みを伴い、奥壁は僅かに竪穴の壁を不整形に掘り広げている。また、奥壁に極めて近い位置に瓦が立てた状態で設置されており、内壁材として使用されたとみられる。主柱穴は認められない。周溝は伴わないとみられる。

出土遺物 遺物はSI-199・bを区別できないため、一括して掲載する。

1～6は土師器杯、7は土師器椀、8は土師器皿、9・10土師器甕、11は灰釉陶器壺、12は須恵器甕である。他に、製鉄に関連するとみられる炉壁1点が出土している。

SI-200 (Fig.320、PL.73・139・233)

遺構 SI-200はHW90に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。カマドは北壁中央に位置する。明確な煙道部は認められない。燃



SI-185

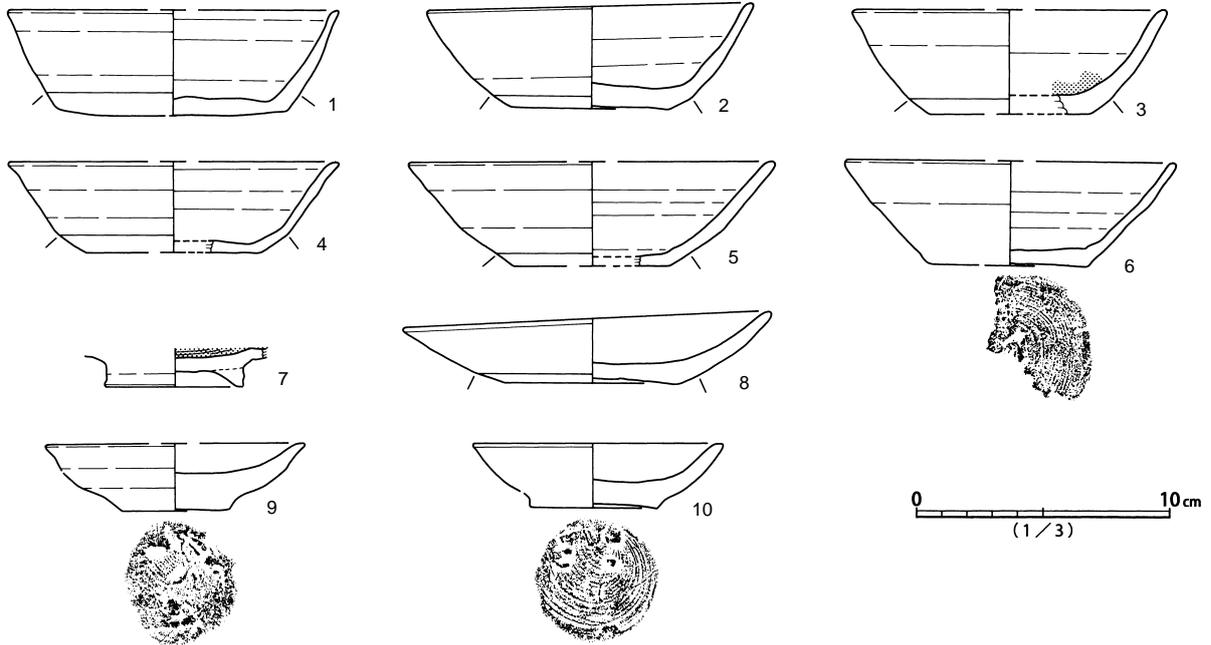


Fig.294 SI-185遺構・出土遺物実測図

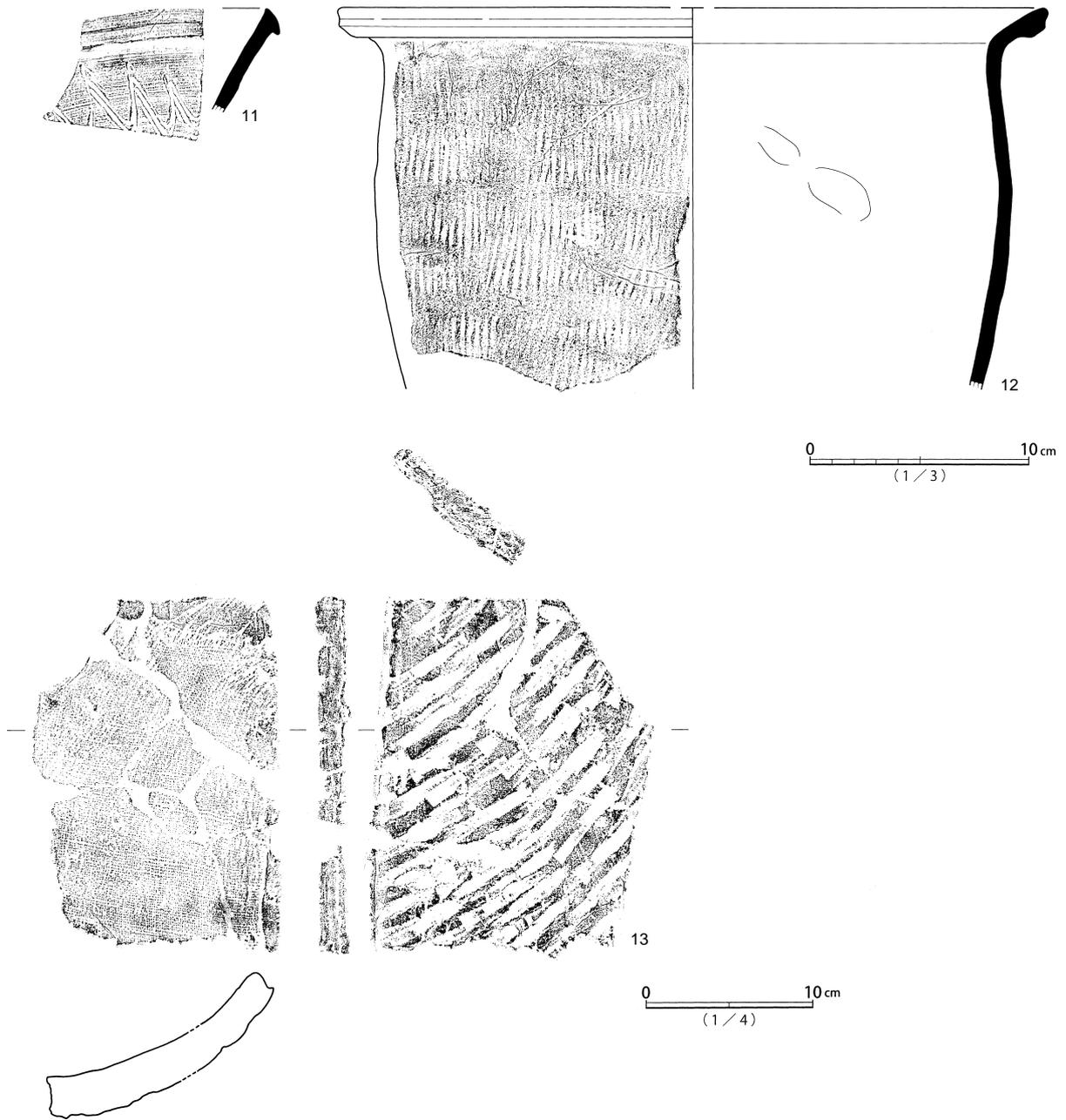


Fig.295 SI-185出土遺物実測図



Fig.296 SI-185出土遺物実測図

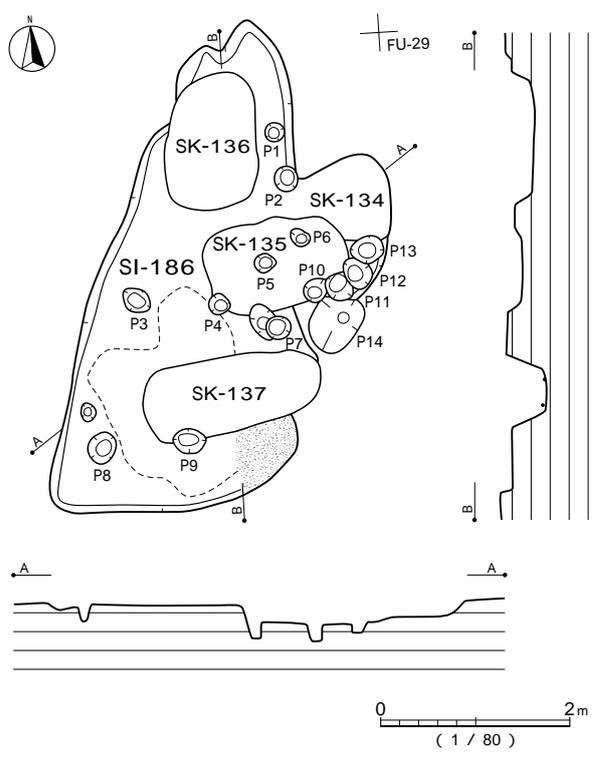
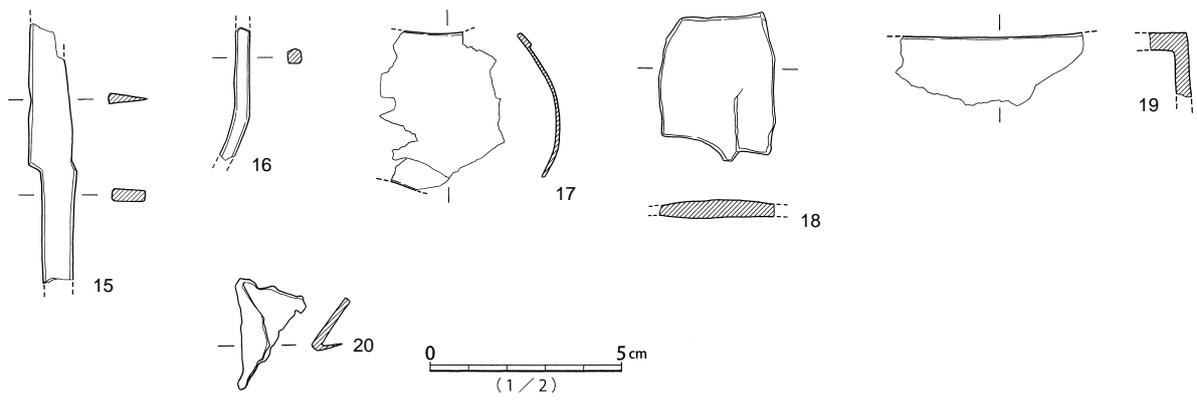


Fig.297 SI-185・186遺構・出土遺物実測図

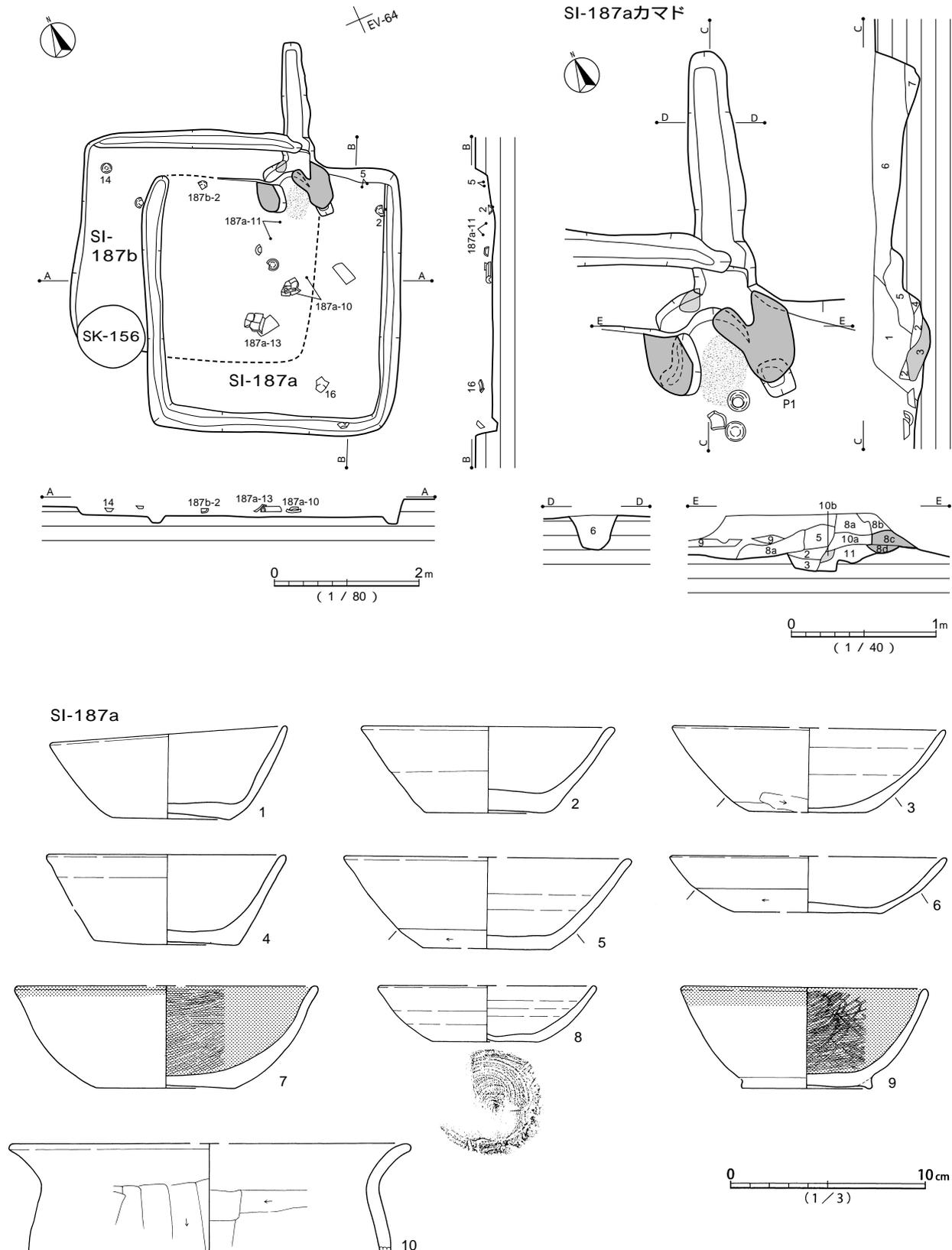
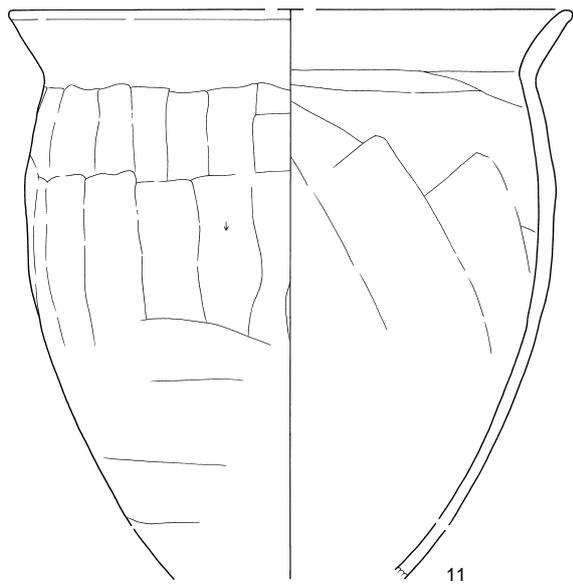
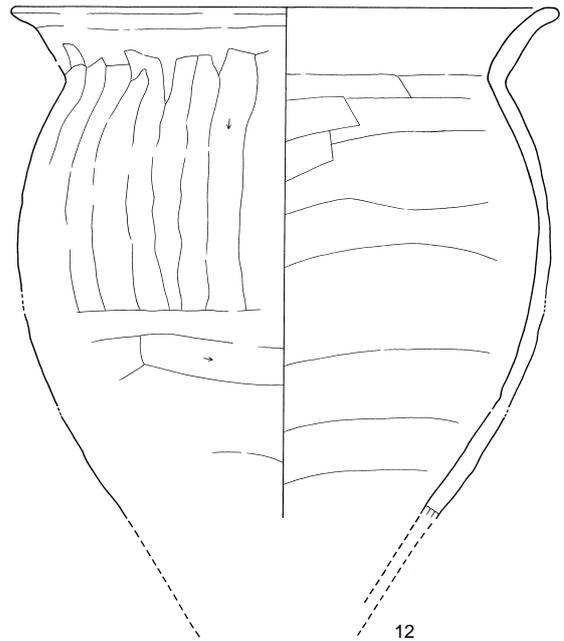


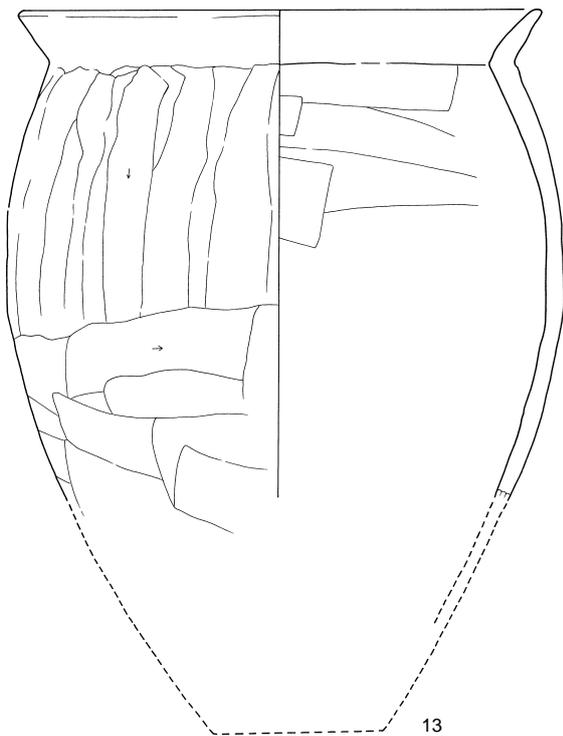
Fig.298 SI-187遺構・出土遺物実測図



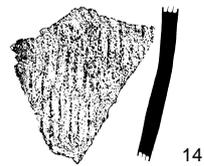
11



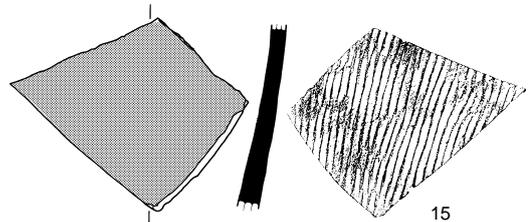
12



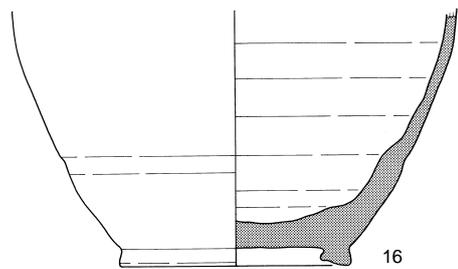
13



14



15



16

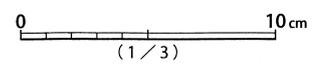


Fig.299 SI-187出土遺物実測図

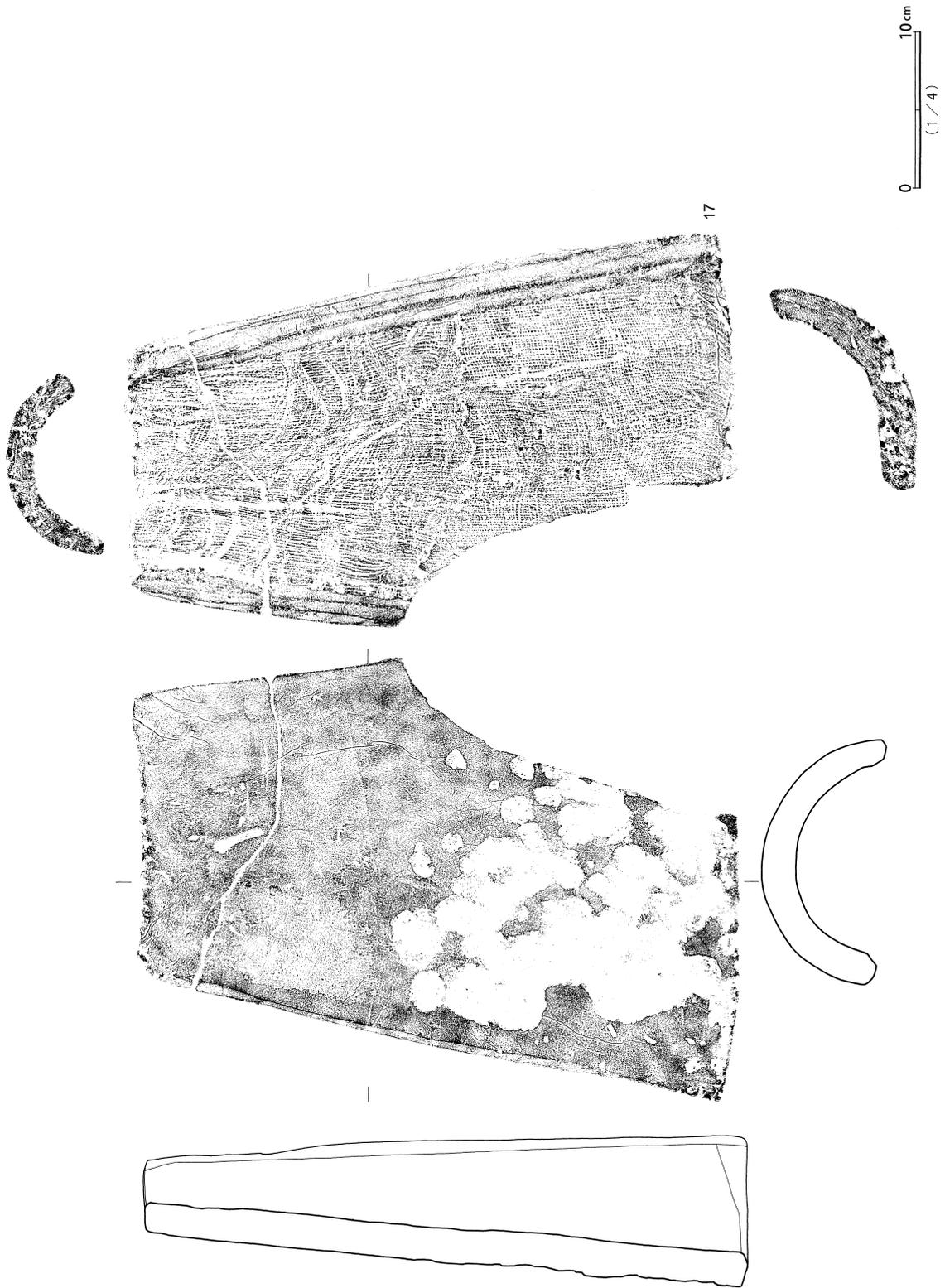


Fig.300 SI-187出土遺物実測図

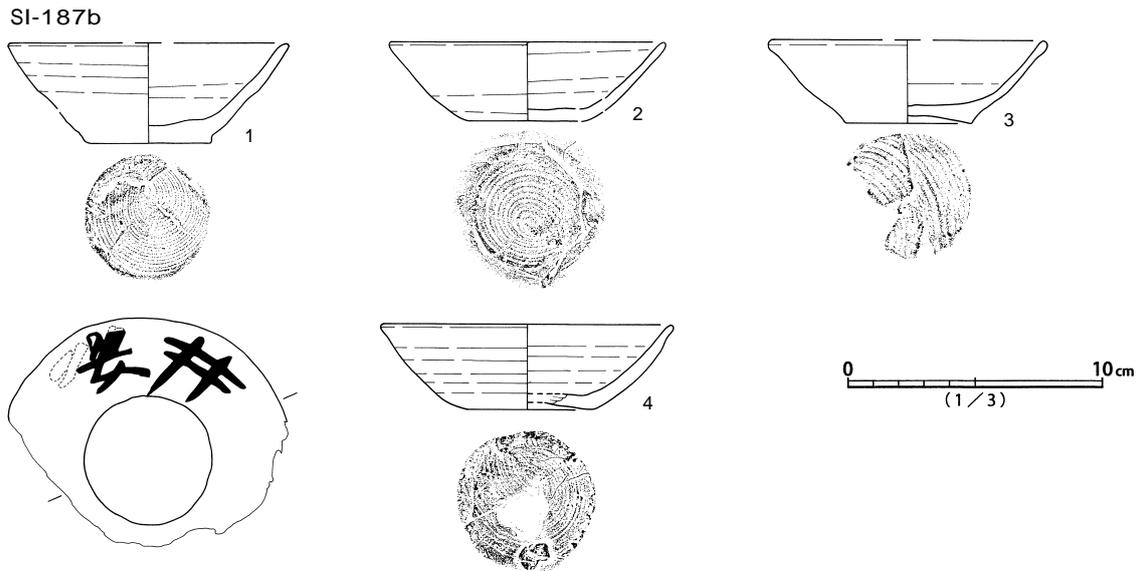


Fig.301 SI-187出土遺物実測図

焼部は壁ライン上に一部かかって位置するとみられ、僅かに掘り込みを伴い、奥壁は僅かに竪穴の壁を半楕円形に掘り広げている。また、袖付け根部付近に瓦が立てた状態で設置されており、内壁材として使用されたとみられる。支柱穴は認められない。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回っている。

出土遺物 1は土師器杯、2は鉄製刀子である。

SI-201 (Fig.321・322、PL.73・139・140・174・186・220・226・233)附章参照

遺構 SI-201はHX82に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における10.9m²。カマドは北壁中央に位置する。支柱穴は認められない。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1～16は土師器杯で、1は体部外面に墨書が認められるが、一部であり、判読できない。2は体部外面に墨書「可」が認められ、3は体部外面に墨書「厩カ」が認められるが、部分であるため不確定である。4は底部外面に墨書「湿津 田」が認められ、これまでに、残画から「湿津寺カ田」と判読されている。15は体部外面に黒色処理を施している。17・18は土師器大形杯、19は土師器皿、20～23は土師器甕、24・25は須恵器甕、26は凸面斜格子の平瓦、27は温石、28～32は鉄製品で、28は刀子、29～32は釘である。

SI-202 a(Fig.323、PL.73・140・175・192・195)・b(Fig.323、PL.73・140・175・226)附章参照

遺構 SI-202aはIW72に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため詳細は不明。北側でSI-202bと重複するが新旧関係は不明。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は(10.4)m²。カマドは認められないが、支脚が出土していることから、北壁に位置していたものとみられる。支柱穴は認められない。周溝は伴わないとみられる。

出土遺物 1は土師器皿で、底部内面に線刻「一」が認められる。2～6は土師器杯、7は土師器甕で、内面に黒色処理を施す。8は須恵器甕、9は支脚である。

遺構 SI-202bはIW72に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。南側で

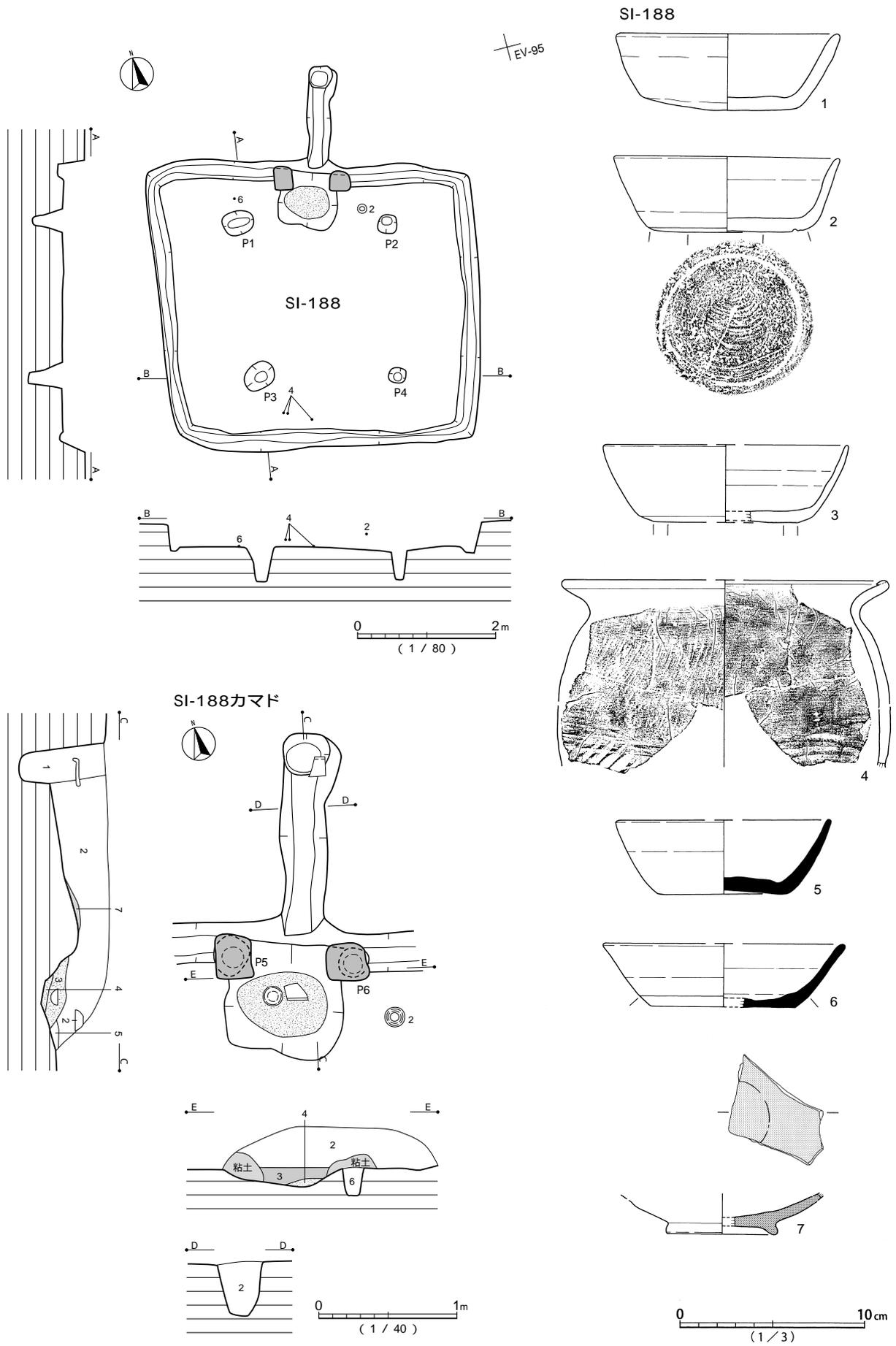


Fig.302 SI-188遺構・出土遺物実測図

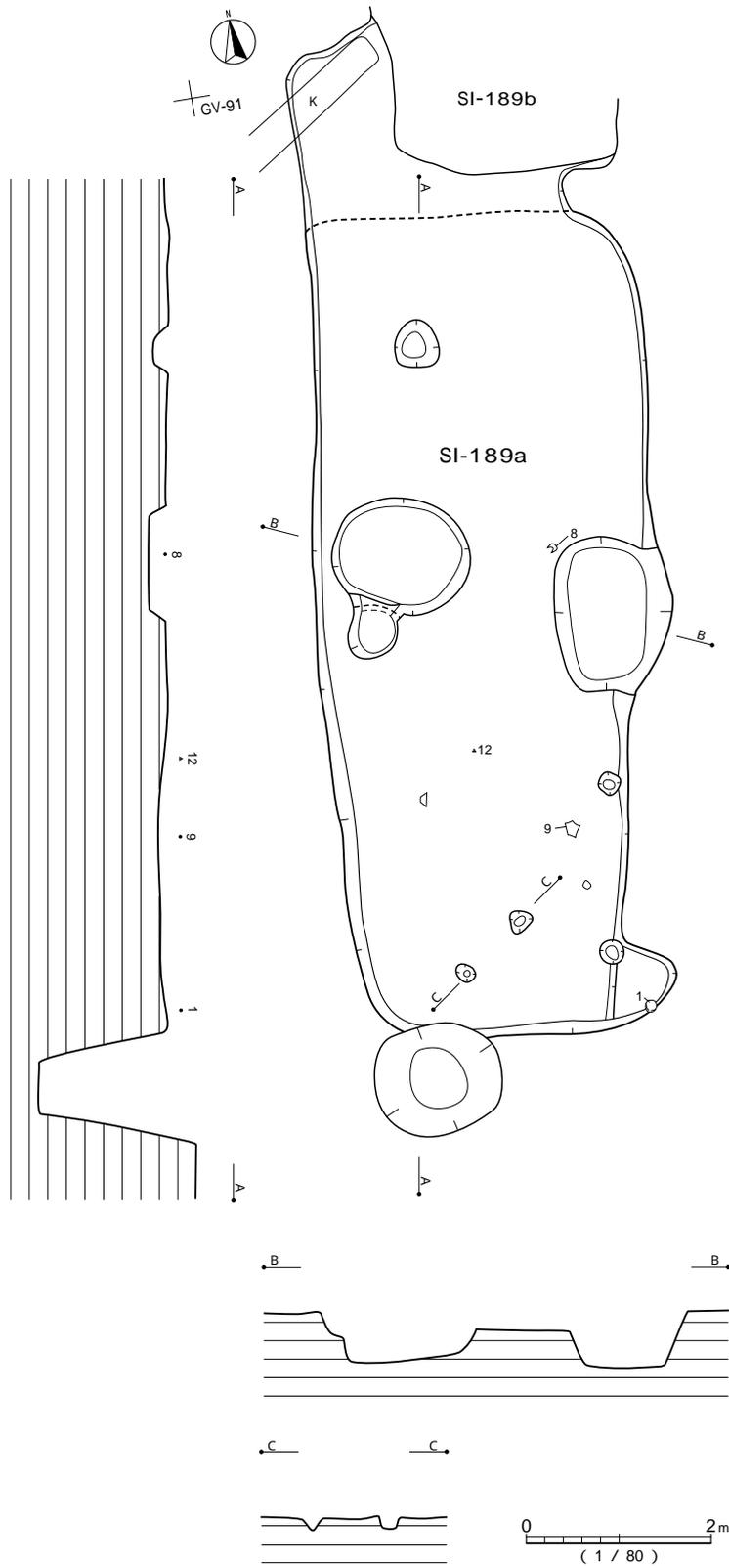


Fig.303 SI-189遺構実測図

SI-189a

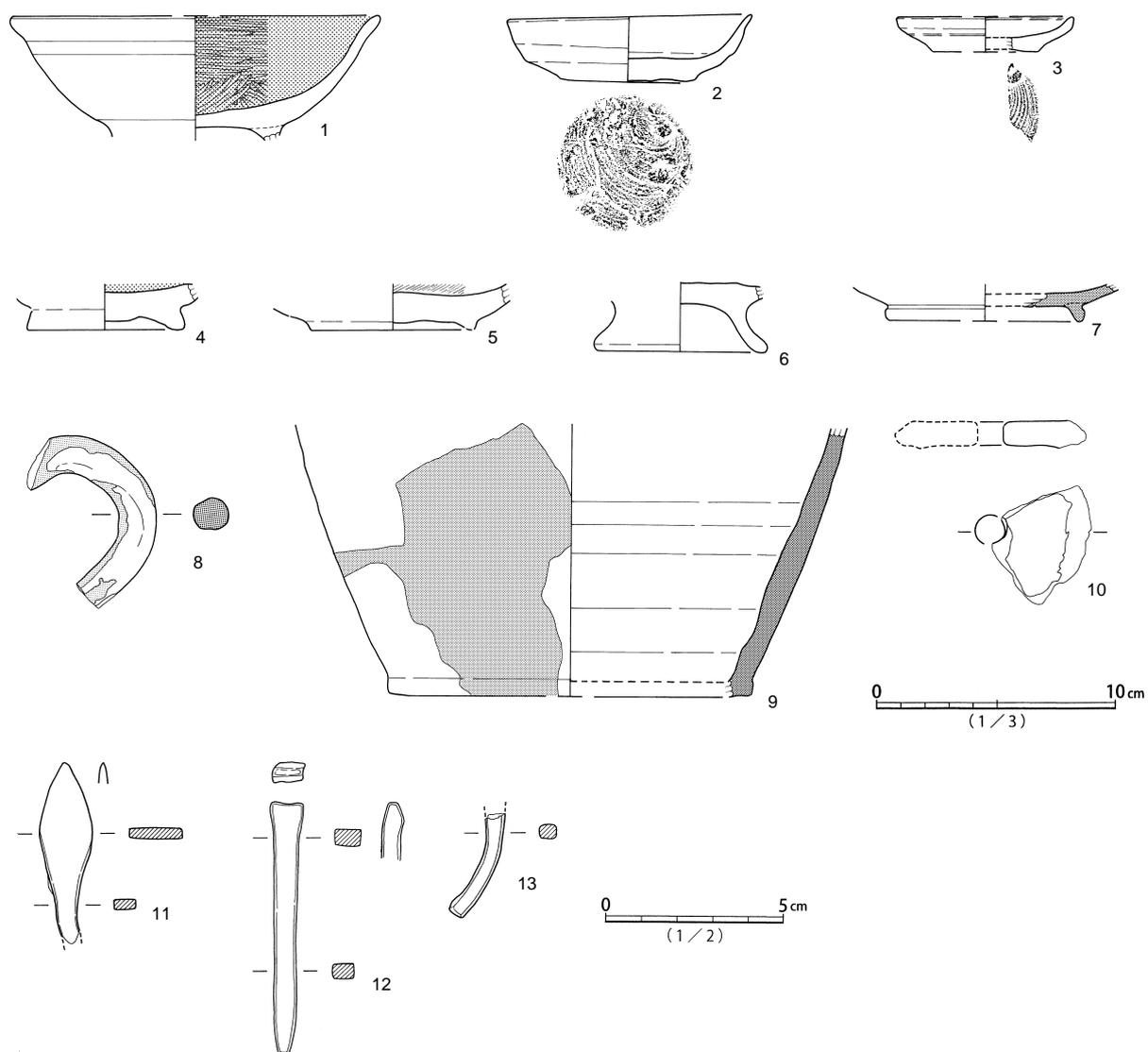


Fig.304 SI-189出土遺物実測図

SI-202aと重複するが、新旧関係は不明。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は(7.2) m²。カマド・支柱穴は認められない。周溝は伴わないとみられる。

出土遺物 1・2は土師器杯、3は土師器椀、4は土師器甕、5は凹石である。

SI-203 (Fig.324、PL.74・140・175・233)

遺構 SI-203はHW02に位置する。遺構の重複は無い。検出面で既に壁が失われており、本来の平面プランは不明である。床面と見られる硬化範囲は3.2m×3.1mを測る。カマド・貯蔵穴・支柱穴は認められない。Pitの深さは、P1は22cmを測る。周溝は伴わない。

出土遺物 1は足高高台付杯、2は土師器杯、3・4は土師器椀で、3は内面に黒色処理を施す。5・6は土師器小皿、7は須恵器甕、8~10は鉄製品で、8は曲刃鎌とみられ、9は刀子、10棒状不明品である。

SI-204 (Fig.325、PL.74・141・175・186・221・233)附章参照

遺構 SI-204はHW13に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重

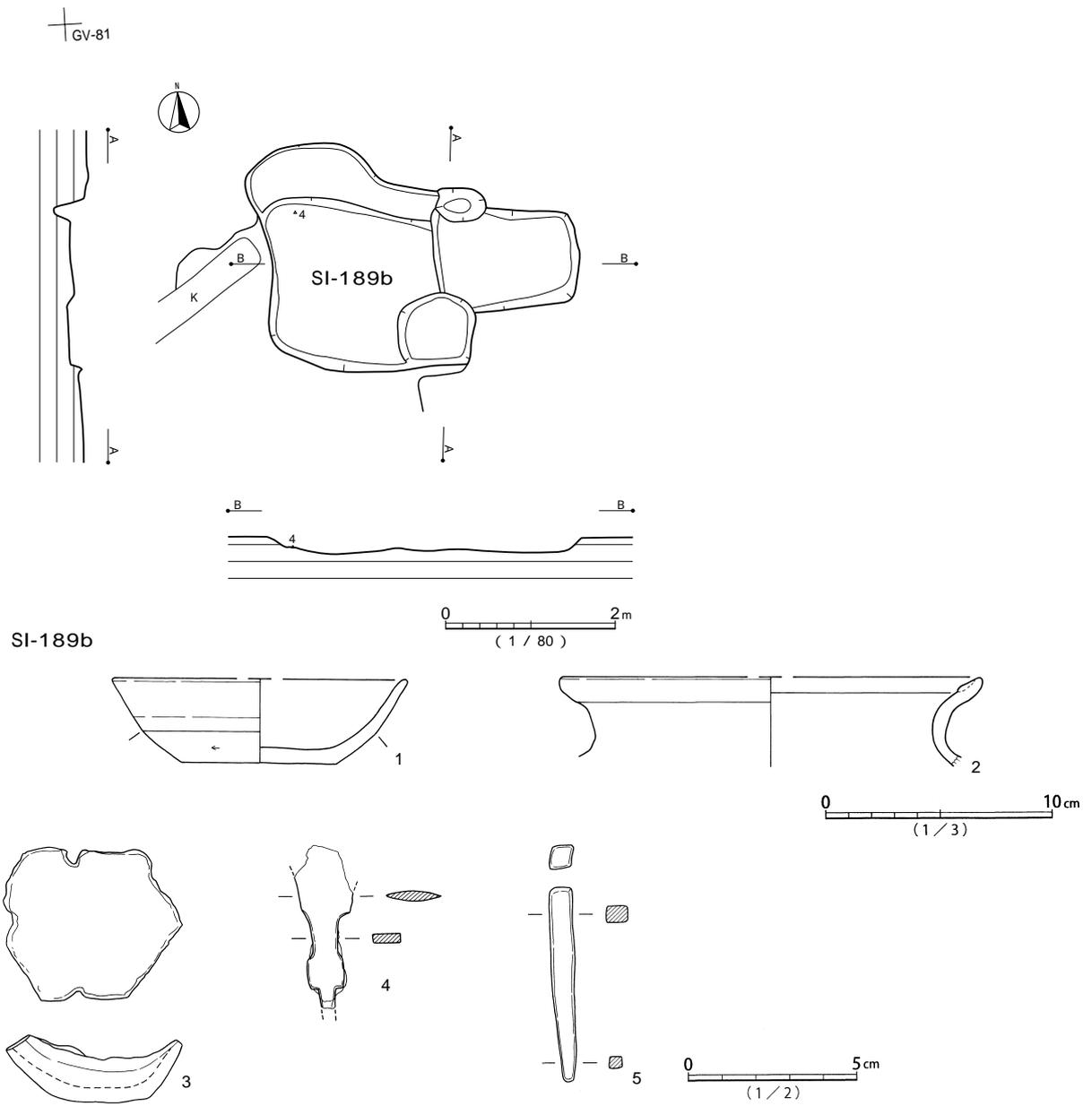


Fig.305 SI-189遺構・出土遺物実測図

複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は11.1m²。カマドは東壁やや南東隅によって位置する。明確な煙道は認められない。燃烧部は壁ラインの内側か一部かかって位置するとみられ、奥壁は竪穴の壁を不整形に掘り広げて造っている。支柱穴・貯蔵穴は認められない。周溝はカマド直下以外回っている。

出土遺物 1～3は土師器杯で、1は口縁部内面に記号とみられる墨書が認められる。4・5は須恵器甕、6は灰釉陶器手付瓶の把手、7は行基の丸瓦、8は鉄釘である。

SI-205 (Fig.326、PL.74・141・175)附章参照

遺構 SI-205は HW23に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は9.5m²。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅112cm、長さ42cmを測り、先端に向けて上方に傾斜する。燃烧部は不明確だが、壁ラインの内側か、一部かかって位置するとみられる。支柱穴は認められない。周溝はカマド直下以外回っている。

出土遺物 1～3は土師器杯、4は土師器甕、5は須恵器甕である。

SI-206 (Fig.326、PL.74・141・220・233)附章参照

遺構 SI-206は HW11に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は(18.8)m²。カマド・支柱穴は認められない。周溝は全周する。

出土遺物 1は土師器杯で、内面に黒色処理を施す。2～4は土師器小形椀で、全て内面に黒色処理を施す。5は凸面縄目の平瓦で、凹面に正位で線刻「本カ□」が認められる。6～8は鉄製品で、6は曲刃鎌、7は紡錘車の紡輪部、8は刀子である。

SI-207 a(Fig.327、PL.74・75・141・175・186)・b(Fig.328、PL.141・186)

遺構 SI-207aは HV50の SM-1盛土下に位置する。平面形は3.32m × 3.76mの方形を呈する。遺構確認面における面積は11.8m²、遺構確認面から床面までは38cmを測る。主軸方位は N-85°-E。カマドは北東壁の東隅寄りに位置する。煙道部は幅24cm、長さ118cmを測り、先端に向けて緩やかに上方へ傾斜する。燃烧部は壁ラインの内側に位置し、掘り込みを伴う。内壁・奥壁には平瓦を立てた状態で設置している。貯蔵穴は北隅の Pit1であろうか。支柱穴は認められない。P1～P4の深さは不明。周溝はカマド周辺から東隅にかけて以外は回っている。

出土遺物 1は土師器皿で、底部外面に墨書「厨上」が認められる。2は土師器高台付皿で、底部外面に墨書「上」が認められる。3・4は土師器杯、5は土師器甕、6は須恵器甕である。

土層 カマド:1、暗褐色土中にやや焼土混じり上層にロームブロック含む 2、薄い焼土 3、粘土

遺構 SI-207bは HV50に位置するとみられる。該当する遺構図面が無いため詳細は不明である。遺物の注記に基づき、本遺構番号として扱う。

出土遺物 1は土師器杯で、底部外面に墨書「金光」が認められる。2は土師器皿、3・4は土師器甕である。

SI-208 a(Fig.329・330、PL.75・141・175・186・192)・b(Fig.329・330、PL.75・142・175)

遺構 SI-208aは HV14に位置する。南東側で SI-208bと重複するが新旧関係は不明。平面形は一辺3.30mの方形を呈する。カマドを境に両側の壁が同じライン上に無く、北側が外側に突き出した形状を呈

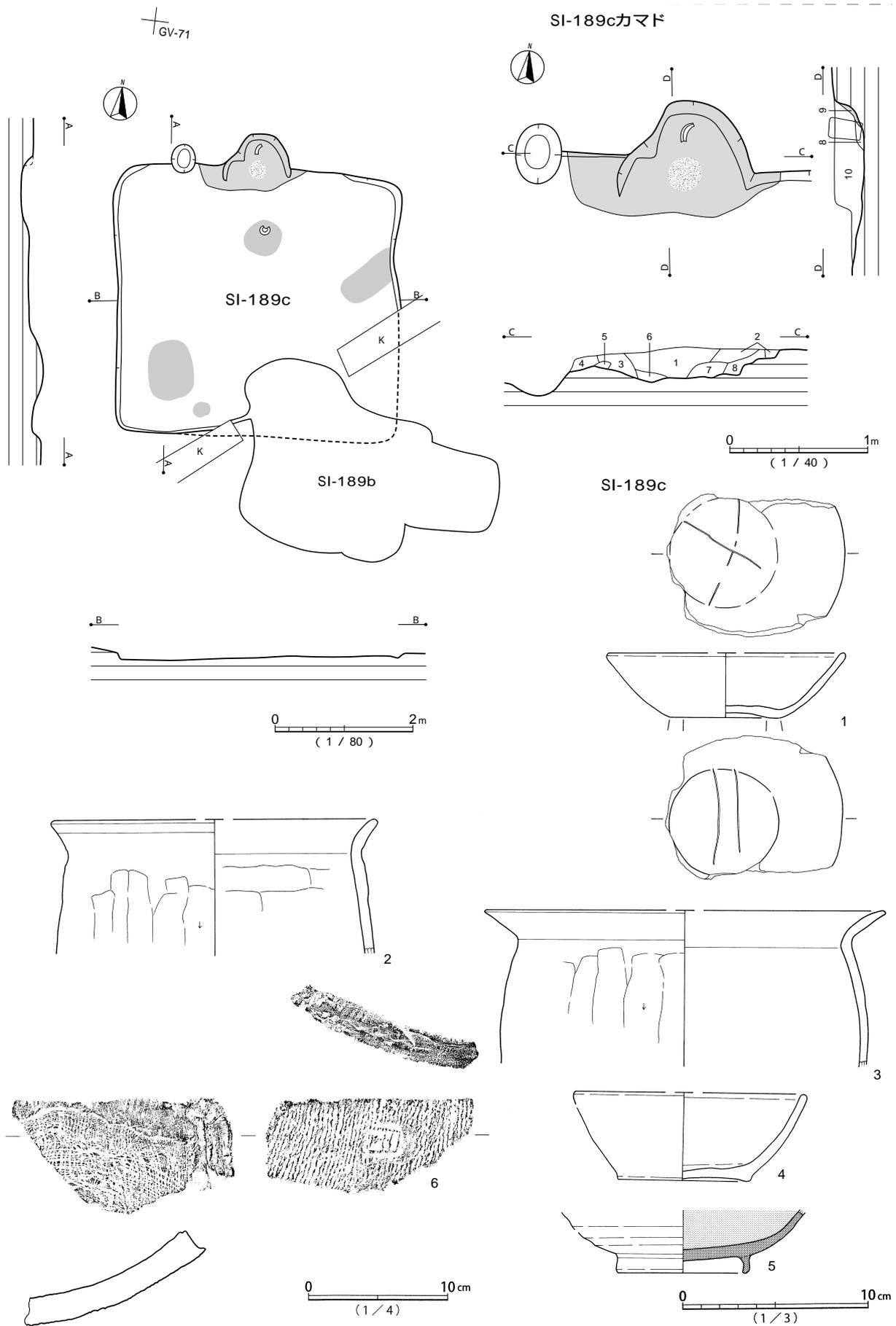


Fig.306 SI-189遺構・出土遺物実測図

する。遺構確認面における面積は(10.1)m²、遺構確認面から床面までは23cmを測る。主軸方位はN-15.0°-W。カマドは北西壁中央に位置する。幅58cm、長さ24cm。明確な煙道部は認められず、燃焼部は壁ラインよりも内側に位置するとみられる。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝はカマド直下から東側以外で回っている。

出土遺物 1・2は土師器杯、3は土師器甕、4は須恵器杯で、底部内面に線刻「x」が、体部外面に墨書「原」が認められる。5・6は須恵器甕、7は土製不明品である。

土層 カマド:1、暗褐色土中に焼土混じる 2、やや暗い褐色土 3、焼土 4、粘土 5、黒褐色土・粘土

遺構 SI-208bはHV14に位置する。北東側でSI-208aと重複する。新旧関係は不明。平面形は3.2m×3.4mの方形を呈する。遺構確認面における面積は10.5m²、遺構確認面から床面までは20cmを測る。主軸方位はN-2.5°-W。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅44cm、長さ130cmを測り、先端に向けて緩やかに下方へ傾斜する。燃焼部は壁ラインよりも内側に位置するとみられる。焚口付近にPitを伴う。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝はカマドの東側以外で回っている。

出土遺物 1・2は土師器杯、3は土師器皿、4は須恵器甕である。

土層 カマド:1、暗褐色土・焼土 2、黒褐色土 3、粘土 4、焼土 5、暗褐色土・ロームブロック

SI-209 (Fig.331、PL.75・142・175・186)

遺構 SI-209はHV22に位置する。遺構の重複は無い。平面形は3.92m×3.52mの方形を呈する。遺構確認面における面積は13.0m²、遺構確認面から床面までは47cmを測る。主軸方位はN-4.9°-W。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅50cm、長さ92cmを測り、先端に向けて下方に傾斜する。燃焼部は壁ラインよりも内側に位置し、掘り込みを伴う。貯蔵穴は竪穴北東隅に位置する。支柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1・2は土師器杯、3・4は土師器甕で、4は体部外面に墨書「長カ谷部郷四西里」が認められる。5・6は須恵器杯である。

土層 カマド:1、暗褐色土中に粘土・ローム粒・焼土粒含む 2、暗褐色土中に粘土粒・スス含む 3、薄い粘土 4、薄い焼土

SI-210 (Fig.332、PL.75・142・175)

遺構 SI-210はHU30に位置する。遺構図はカマド図(Fig.628)以外無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無いとみられる。平面形は方形を呈する。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅34cm、長さ1mを測り、先端に向けて下方に傾斜する。燃焼部は壁ラインよりも内側に位置するとみられ、僅かに掘り込みを伴う。袖付け根部に2対のPitが伴うため、本遺構は建替えが行われた可能性がある。支柱穴は認められない。周溝は伴わないとみられる。

出土遺物 1・2は土師器杯、3は土師器甕、4・6・7は須恵器杯、5は須恵器高台付杯、8は須恵器甕である。

SI-211 (Fig.332・333、PL.76・142・175・186・221・226) 附章参照

遺構 SI-211はHU37に位置する。遺構図がカマド図以外無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は長方形を呈する。遺構確認面における面積は6.2m²。カマドは北壁中央に位置する。明確な煙道は認められない。燃焼部は壁ラインの内側か一部かかって位置し、掘り込みは伴わない。カマド奥壁は竪穴壁を半隅丸方形に掘り広げて造っている。また袖付け根付近には

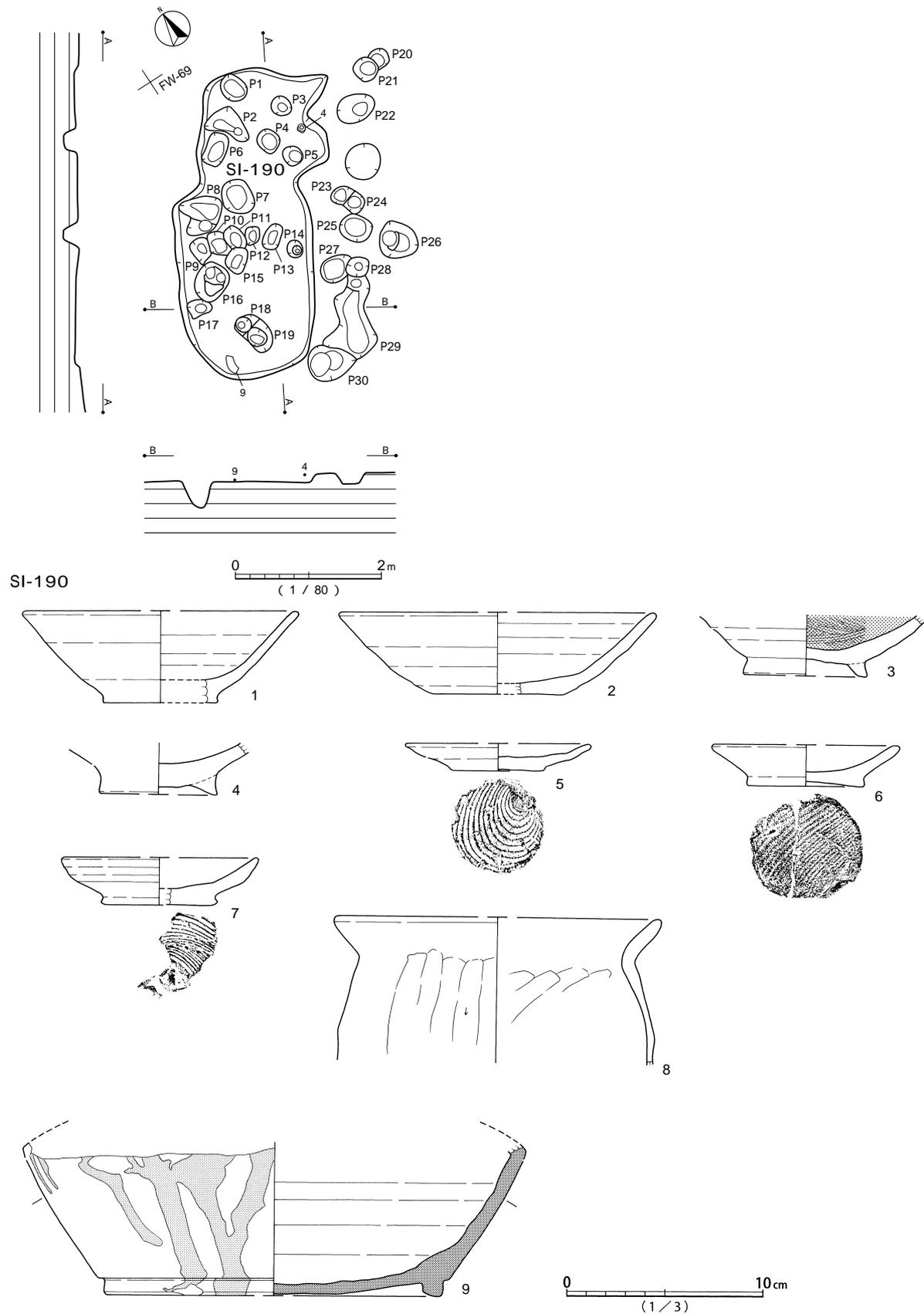


Fig.307 SI-190遺構・出土遺物実測図

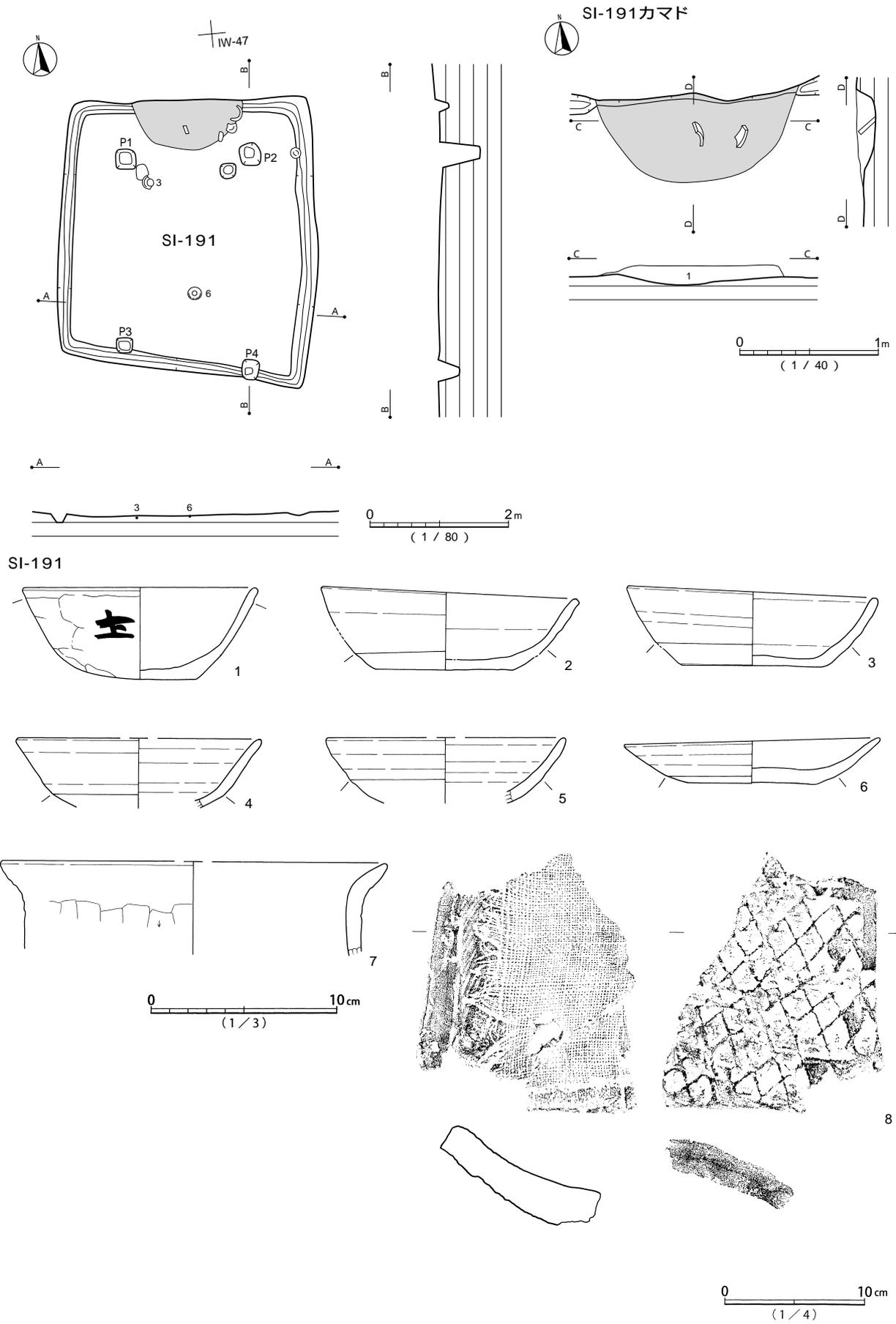


Fig.308 SI-191遺構・出土遺物実測図

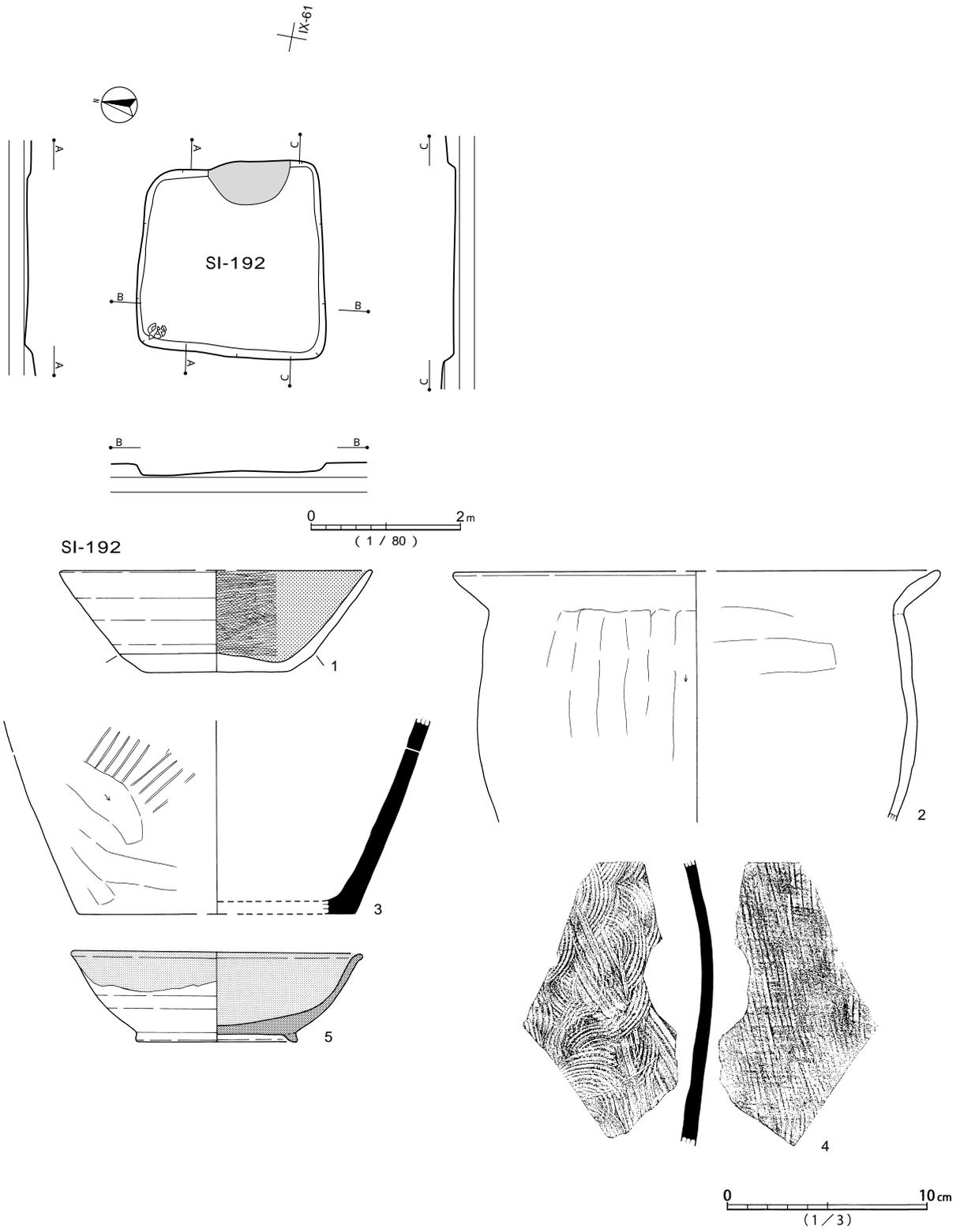


Fig.309 SI-192遺構・出土遺物実測図

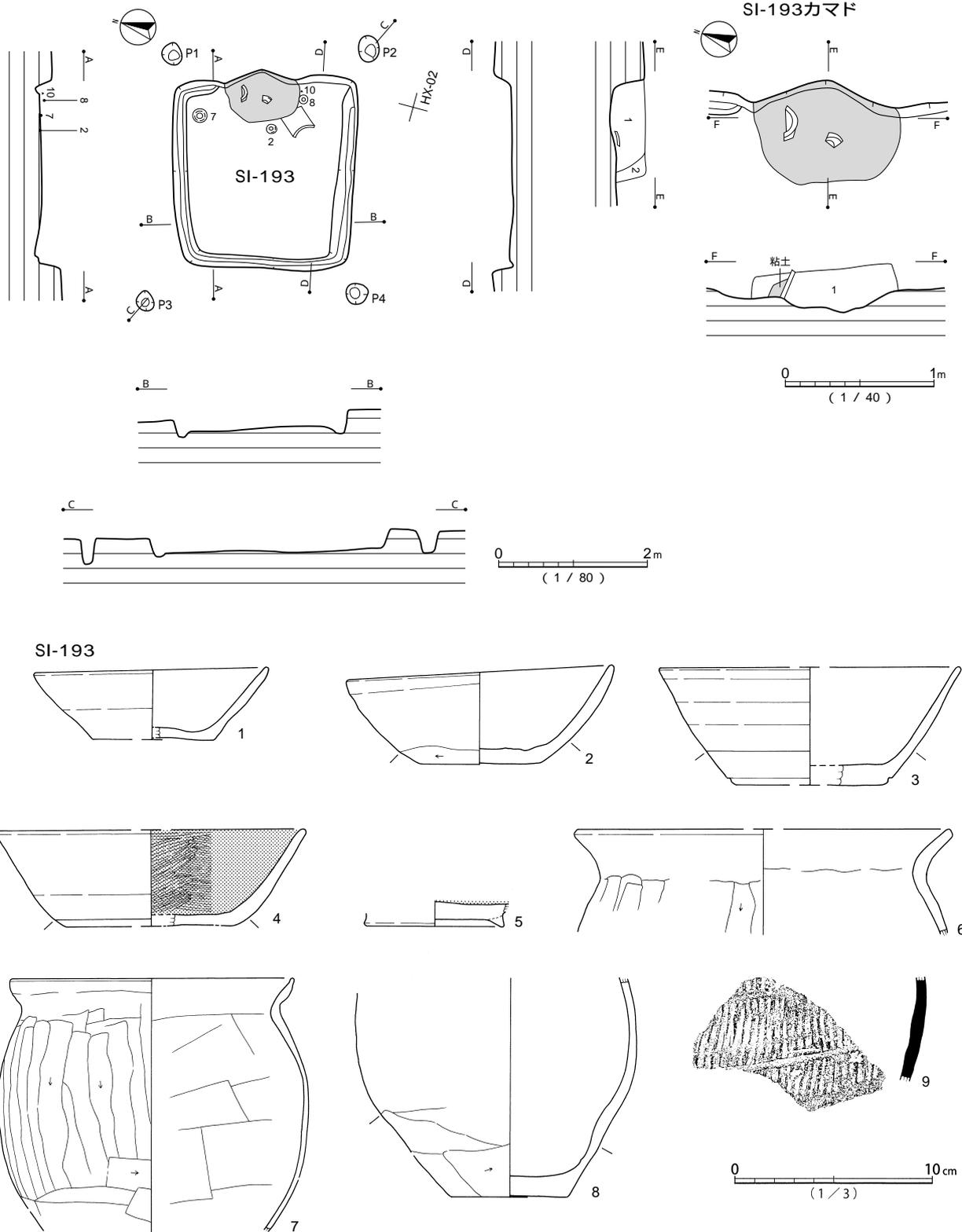


Fig.310 SI-193遺構・出土遺物実測図

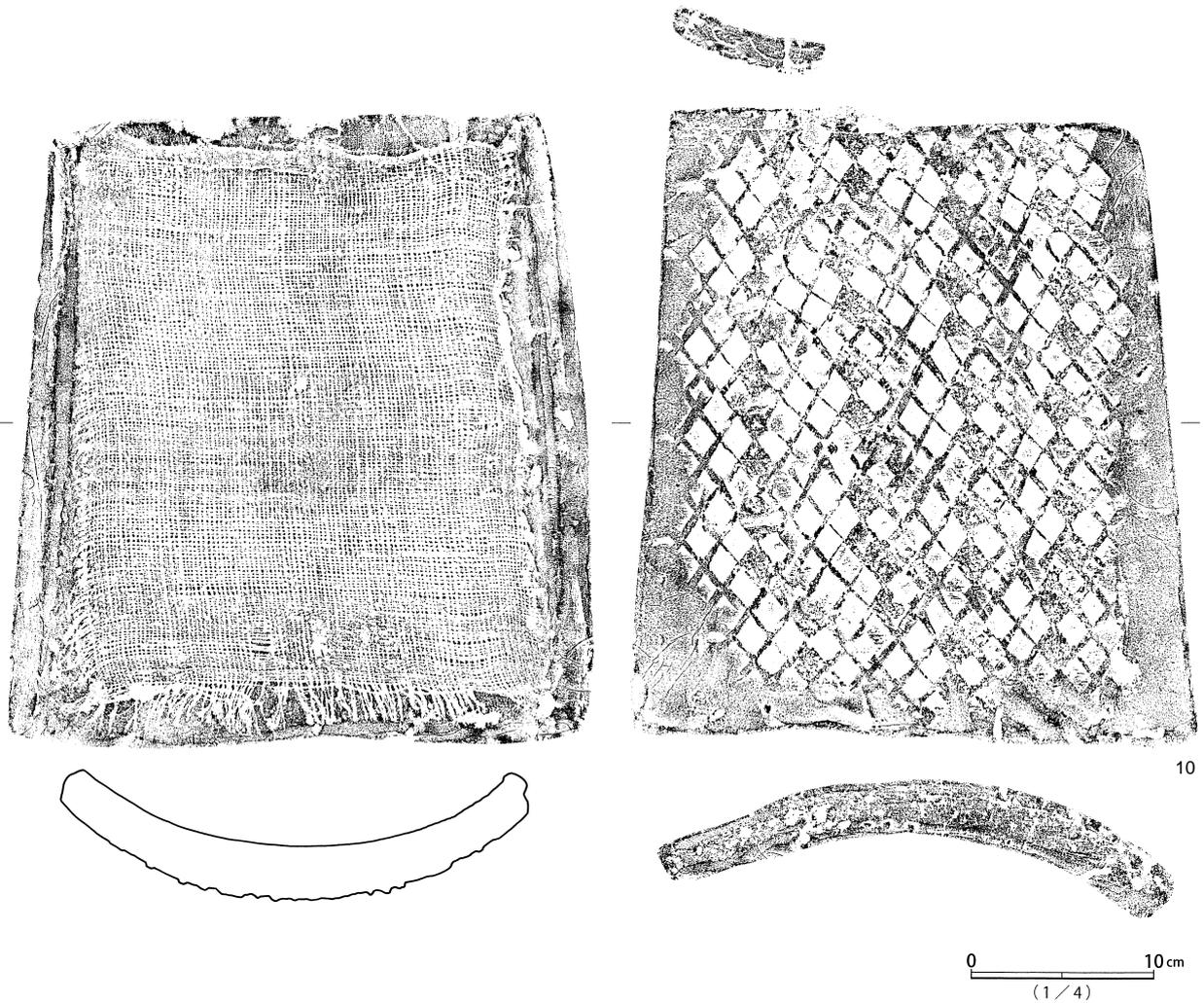


Fig.311 SI-193出土遺物実測図

平瓦が立てられた状態で設置されており、内壁として利用された可能性がある。主柱穴は認められない。周溝は伴わないとみられる。

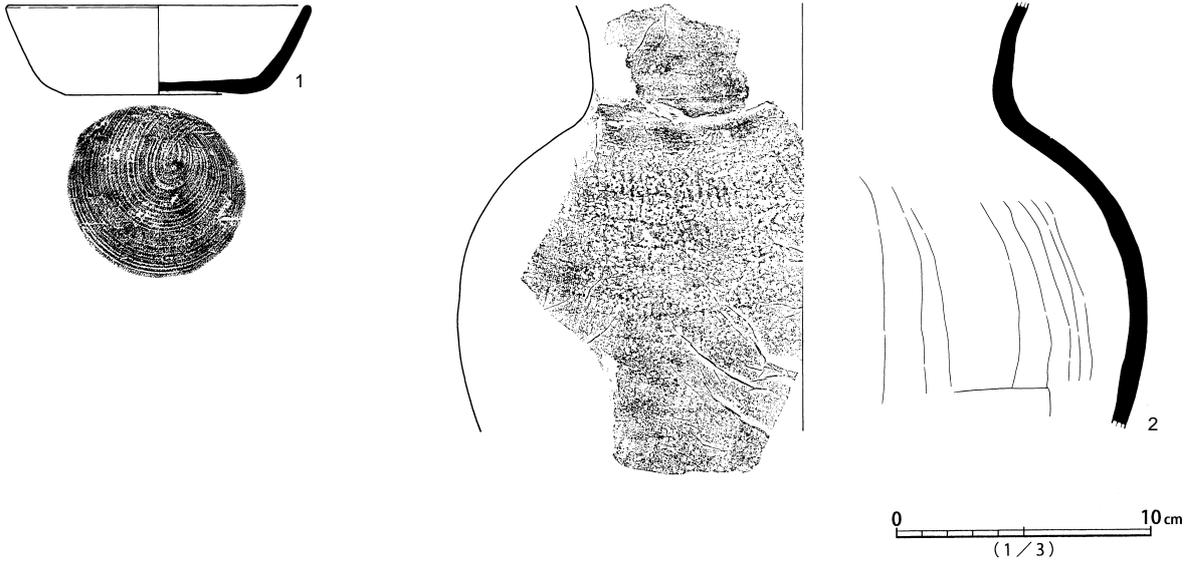
出土遺物 1～10は土師器杯で、1は体部外面に墨書「 \square 園 \square 」が横位で認められる。2は底部内面に墨書「正カ」が、3は体部外面に墨書「山」が正位で、4は体部外面に墨書「金カ \square 」が認められ、内面に黒色処理を施す。5は内面から口縁部外面に黒色処理を施す。11は足高高台付杯、12は須恵器杯、13・14は灰釉陶器高台付皿、15は軒平瓦、16は砥石、17は紡錘車の土製紡輪部である。

SI-212 a (Fig.333・334、PL.142・143・175・186・192・222・233) b (Fig.335、PL.143・192) 附章参照

遺構 SI-212aはHU35に位置する。遺構図がカマド図以外無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。南東側でSI-212bと重複するが、新旧関係は不明。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は(9.7)m²。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は幅132cmを測り、先端に向けて下方に傾斜する。燃烧部は壁ラインより内側に位置し、掘り込みを伴う。また、内壁に平瓦が立てた状態で設置されている。主柱穴は認められない。周溝はカマド直下が不明だが、それ以外は回る。

出土遺物 1～10は土師器杯で、1は体部外面に墨書が認められるが判読できない。また、内面に黒色処理を施す。4は底部内面にヘラガキが認められるが判読できない。9・10は共に内面に黒色処理を施

SI-194



SI-195

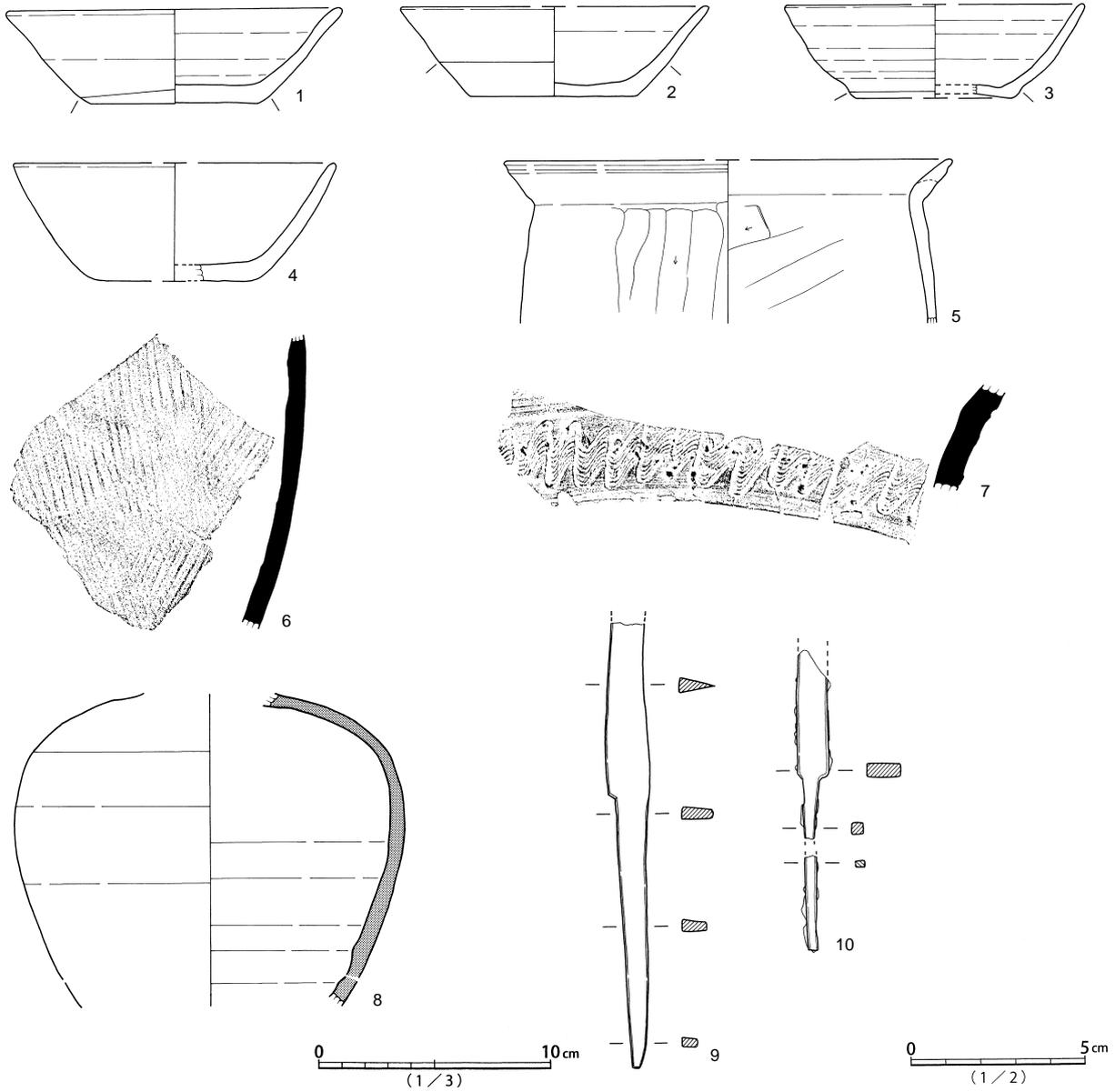


Fig.312 SI-194・195出土遺物実測図

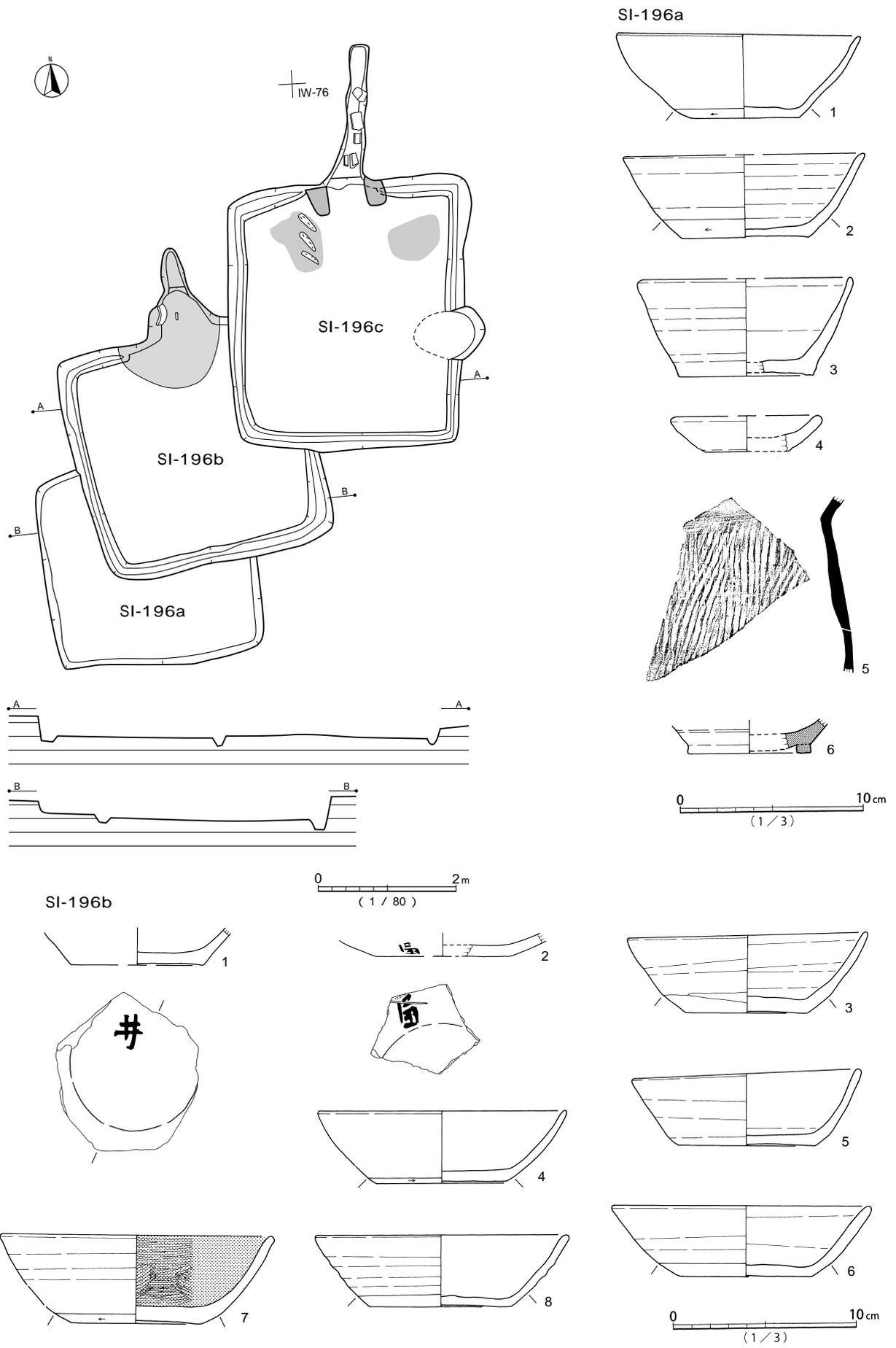


Fig.313 SI-196遺構・出土遺物実測図

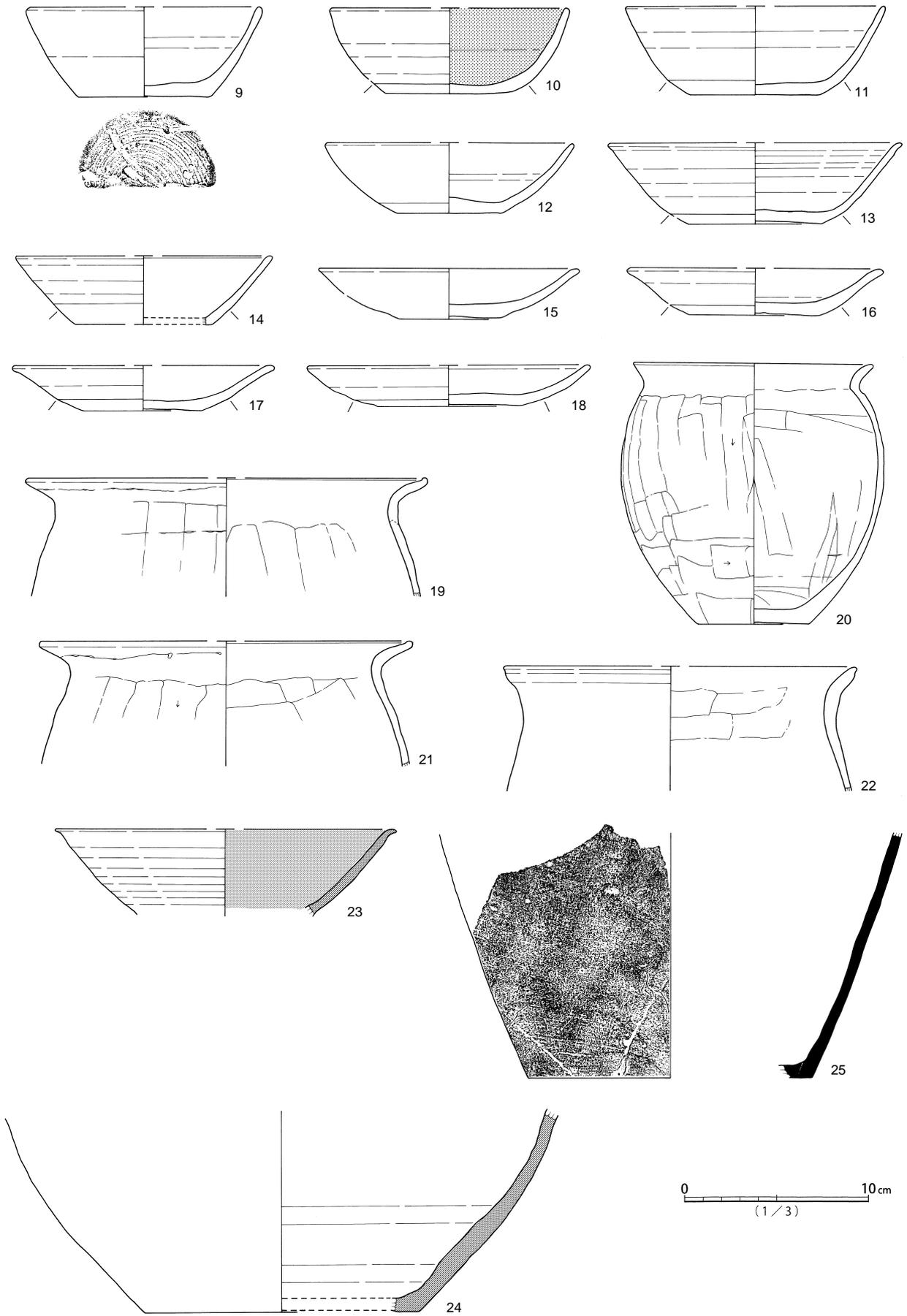


Fig.314 SI-196出土遺物実測図



Fig.315 SI-196出土遺物実測図

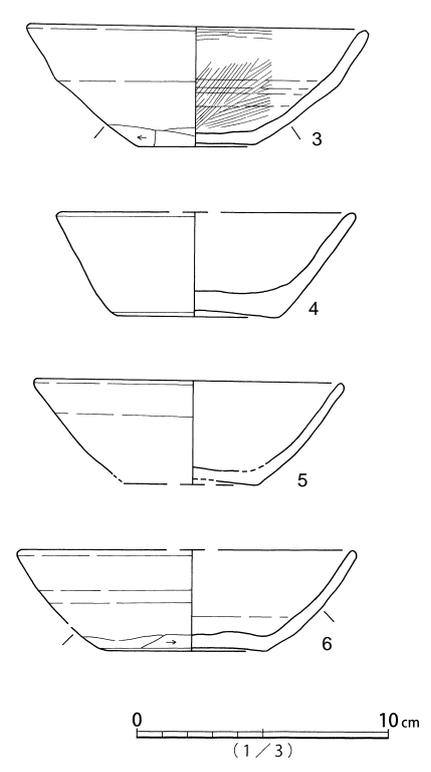
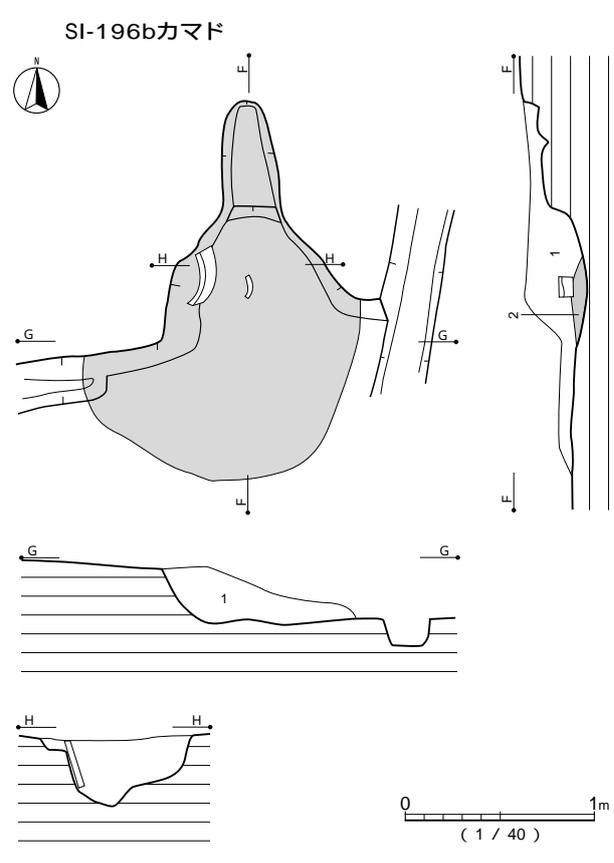
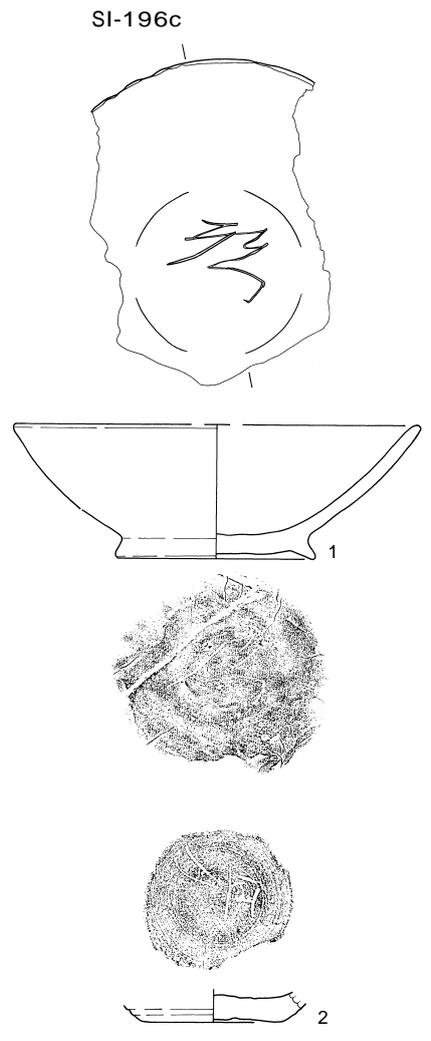
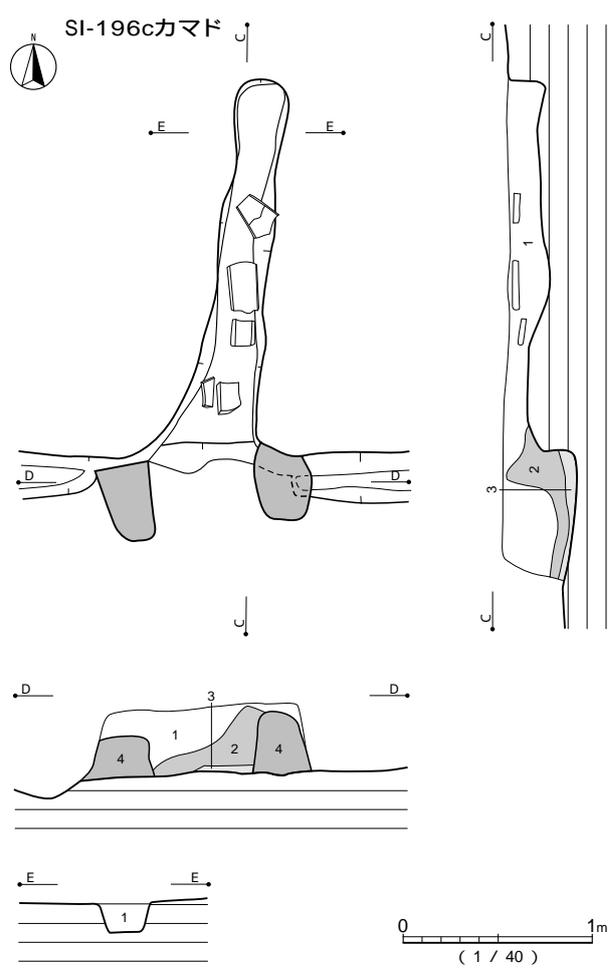


Fig.316 SI-196遺構・出土遺物実測図

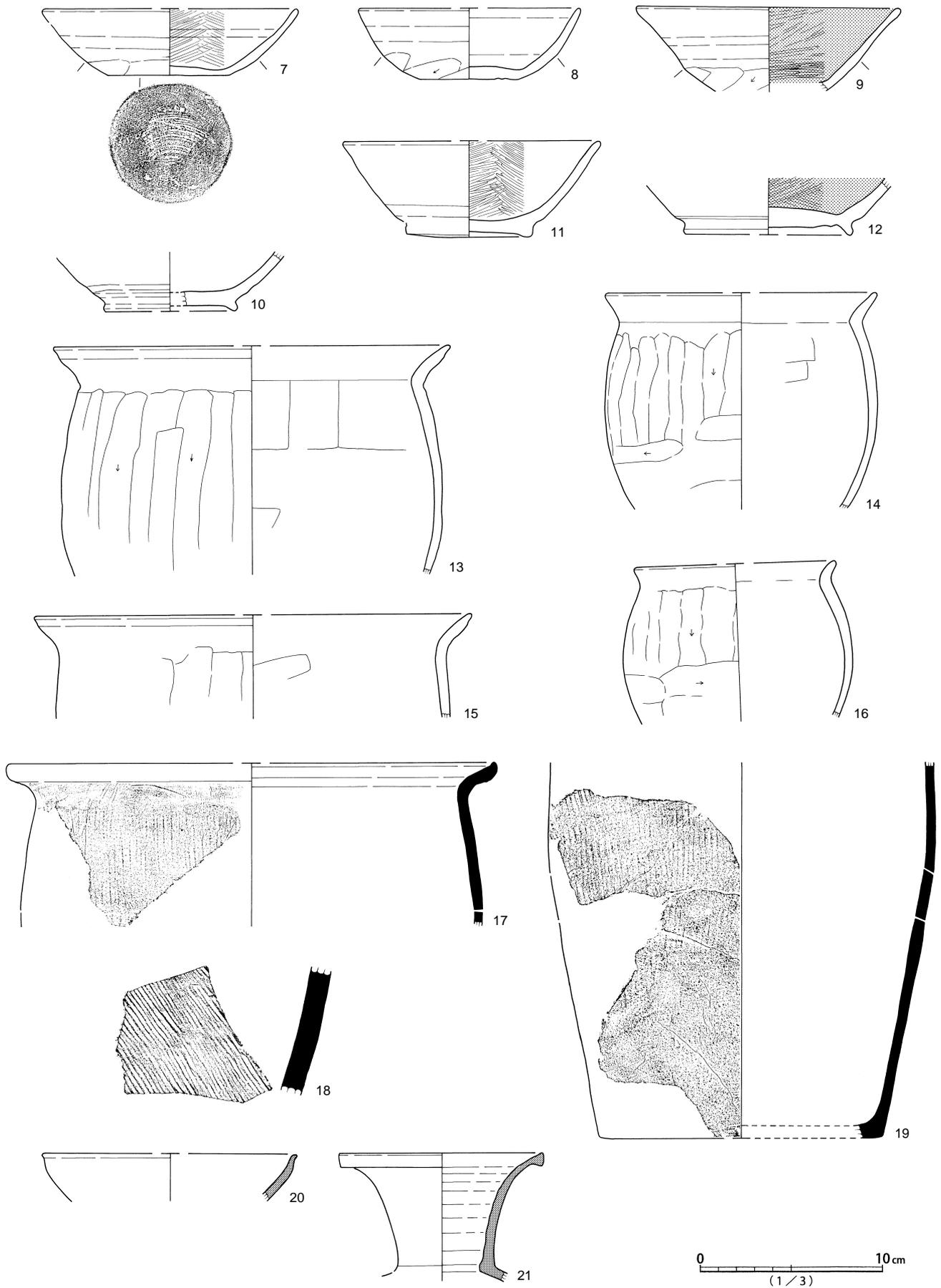


Fig.317 SI-196出土遺物実測図

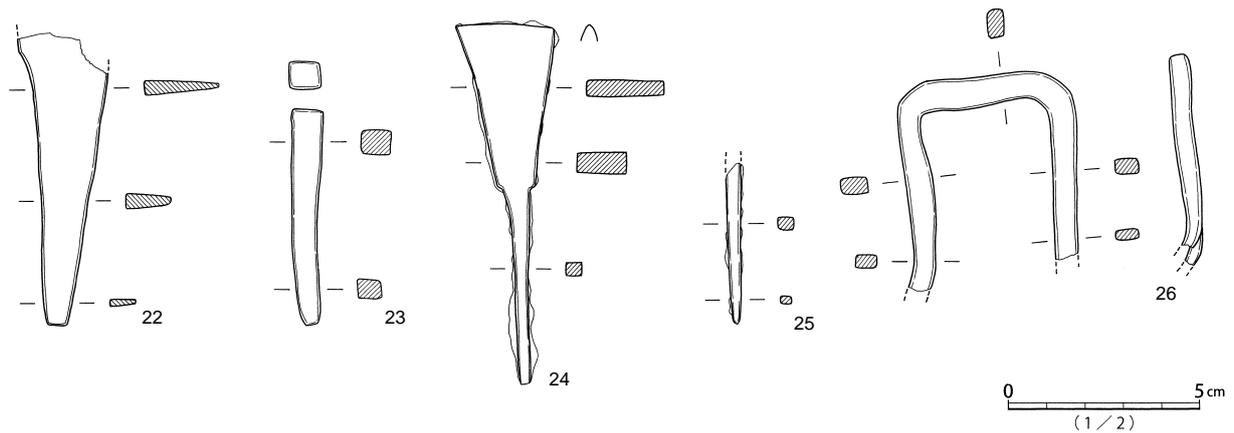


Fig.318 SI-196出土遺物実測図

す。11～13は土師器甕、14・15は須恵器杯、16・17は須恵器甕、18は凸面縄目の平瓦、19は鉄製刀子である。

遺構 SI-212bはHU35に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。北西側でSI-212aと重複するが、新旧関係は不明。平面形は方形を呈する。遺構確認面における面積は(7.2) m²。カマド・支柱穴は認められない。周溝は伴わない。

出土遺物 1は土師器杯で、底部内面に線刻が認められるが、擦痕状で判読できない。底部外面に線刻「x」が認められる。2は土師器甕である。

SI-213 (Fig.335、PL.76・175・187) 附章参照

遺構 SI-213はHU44に位置する。遺構図カマド図以外無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構の重複は無い。平面形は長方形を呈する。遺構確認面における面積は7.3m²。カマドは北壁の北東隅に寄って位置する。明確な煙道部は認められず、燃烧部は壁ライン上にかかって位置するとみられる。支柱穴は認められない。周溝は伴わないとみられる。

出土遺物 1は須恵器杯で、底部外面に墨書「用カ」が認められる。

SI-214 (PL.76) 附章参照

遺構 SI-214はGU78に位置する。平面形は2.96m × 3.04mの方形を呈する。遺構確認面における面積は8.9m²、遺構確認面から床面までは17cmを測る。主軸方位はN-1.5°-E。カマドは北壁に位置する。煙道部は幅65cm、長さ37cmを測る。周溝はみとめられない。

出土遺物 実測遺物は無い。

SI-215 附章参照

SI-216 (PL.76) 附章参照

SI-217 (PL.76・77) 附章参照

SI-218a・b (Fig.336・337、PL.77・143・175・176・226・233)

遺構 SI-218aはDU80に位置する。平面形は3.64m × 2.49mの方形を呈する。遺構確認面における面積は8.9m²、遺構確認面から床面までは0.53mを測る。主軸方位はN-47.5°-W。

遺構 SI-218bはDU80に位置する。平面形は3.31m × (2.40)mの方形を呈する。遺構確認面における面積は8.9m²、遺構確認面から床面までは0.42mを測る。主軸方位は不明。

出土遺物 1～6は大形カワラケ、7は柱状高台付土器、8・9はカワラケ小皿で、8は底部内面に貫通し

ていない孔が、9は穿孔が認められる。10・11は龍泉青磁椀、12は同安青磁椀、13は龍泉青磁皿、14・15は常滑片口鉢、16は磨石、17・18は鉄釘、19は板状鉄製品である。

SI-219 a(Fig.338、PL.77・143・176・233)・b(Fig.338、PL.77・143・176)

遺構 SI-219aはDU77に位置する。SI-219bと重複するが、新旧関係は不明。平面形は(3.95)m × 3.34 mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(12.3)m²、遺構確認面から床面までは0.36mを測る。主軸方位はN-20.9 °-E。

出土遺物 1～4はカワラケ、5は鉄製刀子、6は鉄釘である。

遺構 SI-219bはDU77に位置する。SI-219aと重複するが、新旧関係は不明。平面形は(3.52)m × (2.63)mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(8.6)m²、遺構確認面から床面までは0.36mを測る。主軸方位はN-72.3 °-W。

出土遺物 1は大形カワラケ、2～4はカワラケ小皿で、3は貫通していない孔が、5は土師器小形甕、6は須恵器甕の転用砥石である。

SI-220 (Fig.339、PL.77)

遺構 SI-220はCU07に位置する。平面形は2.87m × 2.42mの方形を呈する。遺構確認面における面積は6.1m²、遺構確認面から床面までは0.23mを測る。主軸方位はN-68.0 °-W。

出土遺物 実測遺物は無い。

SI-221 (Fig.339、PL.77)

遺構 SI-221はCU05に位置する。平面形は1.97m × 1.95mの方形を呈する。遺構確認面における面積は3.7m²、遺構確認面から床面までは0.29mを測る。主軸方位はN-38.0 °-E。

出土遺物 実測遺物は無い。

SI-222 (Fig.339、PL.78)

遺構 SI-222はCU04に位置する。平面形は2.55m × 2.22mの方形を呈する。遺構確認面における面積は5.2m²、遺構確認面から床面までは0.18mを測る。主軸方位はN-53.2 °-E。

出土遺物 実測遺物は無い。

SI-223 (Fig.340、PL.78・176・187・221)

遺構 SI-223はDU62に位置する。平面形は2.49m × 2.63mの方形を呈する。遺構確認面における面積は5.8m²、遺構確認面から床面までは0.24mを測る。主軸方位はN-3.0 °-E。

出土遺物 1は土師器杯で体部外面に判読不明の墨書、2は灰釉陶器壺でK90窯式、3は平瓦である。

SI-224 (Fig.341、PL.78・143)

遺構 SI-224はHV36に位置する。平面形は4.06m × 2.48mの長方形を呈する。遺構確認面における面積は9.4m²、遺構確認面から床面までは0.35mを測る。主軸方位はN-76.0 °-W。

出土遺物 1は土師器杯、2は足高高台付土器、3は土師器小皿である。

SI-225 (Fig.342、PL.78・143・176・233)

遺構 SI-225はDU59に位置する。平面形は3.75m × 2.95mの方形を呈する。遺構確認面における面積は10.0m²、遺構確認面から床面までは0.61mを測る。主軸方位はN-20.5 °-E。

出土遺物 1・2は土師器杯、3はカワラケ小皿、4・5は千葉産須恵器甕、6は龍泉窯青磁 -2a類、7は棒状鉄製品である。

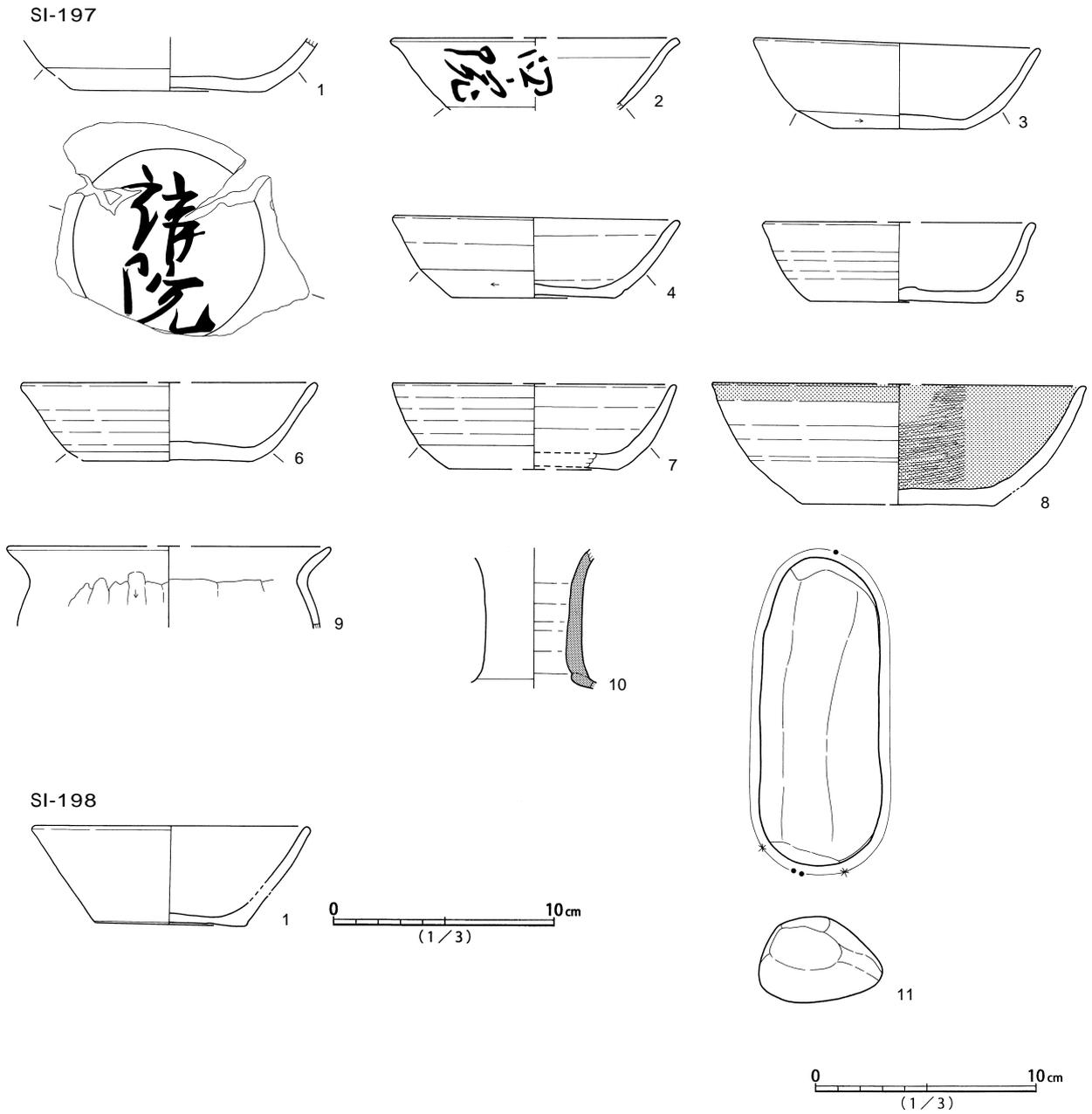
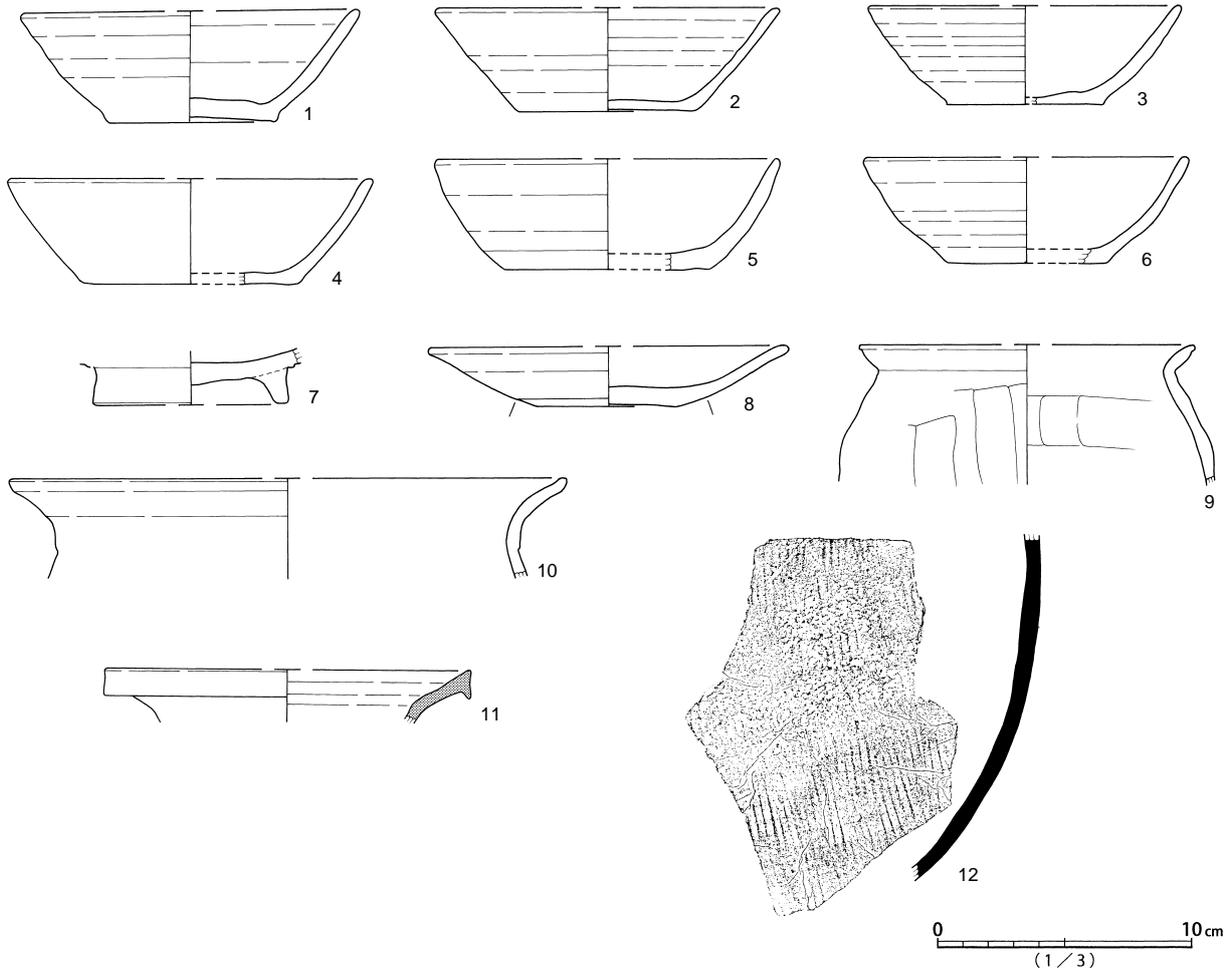


Fig.319 SI-197・198出土遺物実測図

SI-199



SI-200

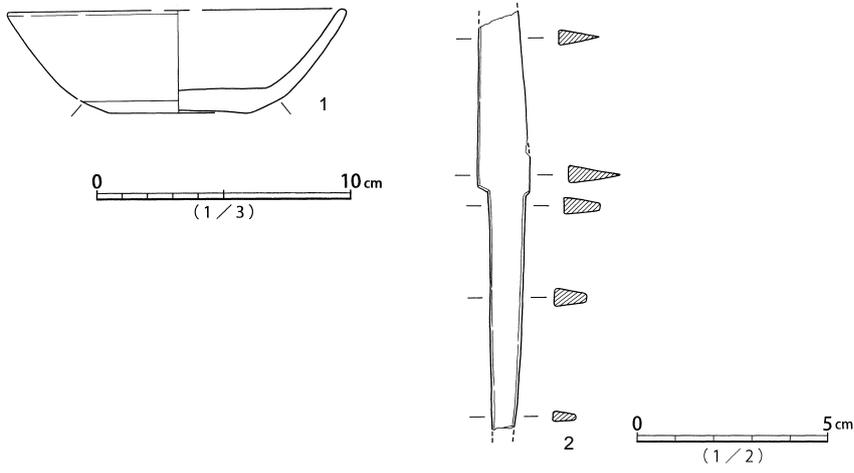


Fig.320 SI-199・200出土遺物実測図

SI-226 (Fig.342 附章参照

出土遺物 1は石製鋤錘車である。

SB-1 (Fig.343・344、PL.78・143・176・233・238)

遺構 SB-1はDW57に位置する。向きをほぼ同じくしてSI-063と重複する。現場所見はないが、遺物相では本遺構が新しい。平面形は桁行6間×梁行2間の側柱建物で、南北棟を示す。規模は9.12m×3.38m、面積は30.8㎡を測る。主軸方位はN-11.0°-E。柱穴の平面形状はP3・P11が方形を指向するがその他は不整形円形を呈する。一部に柱抜き取痕とみられる痕跡が認められる。

出土遺物 1・2は土師器杯で1はP16覆土上層からの出土、2は内面に黒色処理を施す。3は土師質の置きカマドか。4～6は鉄製品で、4は両端部が環状を呈する不明金具である。5・6は釘である。他に溶解した炉壁片が出土している。

SB-2a・b (Fig.345)

遺構 SB-2a・bはEV58に位置する。遺構図が無く、概略図の観察となるため、詳細は不明。遺構番号をa・bとするが、建替え棟の関連性を示す資料は認められない。

SB-2aは桁行2間×梁行2間の側柱建物で、南北棟とみられる。南東側でSB-2bに近接する。規模は4.52m×3.84m、面積は17.4㎡を測る。主軸方位はN-17.0°-E。柱穴の平面形は不整形方形及び不整形円形を呈する。柱抜き取り痕は認められない。

SB-2bは桁行4間×梁行2間の側柱建物で、東西棟である。東側でSI-136と重複するが、新旧関係は不明。規模は6.50m×3.78m、面積は24.6㎡を測る。主軸方位はN-73.5°-W。柱穴の平面形は不整形円形を呈する。柱抜き取り痕は認められない。

出土遺物 実測遺物は無い。

SB-3 (Fig.346、PL.78)

遺構 SB-3はGV28に位置する。平面形は桁行5間×梁行3間の側柱建物で、東西棟である。西側でSI-161と重複するが新旧関係は不明。規模は6.68m×5.20m、面積は41.51㎡を測る。主軸方位はN-88.0°-W。柱穴の平面形は方形を呈する。明瞭な柱抜き取り痕は認められない。範囲内にピットが規則的に並ぶことから、間仕切りの可能性がある。主軸方位がSB-4とはほぼ90°の関係にある。

出土遺物 実測遺物は無い。

SB-4 (Fig.347、PL.78・79)

遺構 SB-4はGV23に位置する。平面形は桁行3間×梁行3間の側柱建物、もしくは桁行3間×梁行2間の東面廂建物に復元可能である。南北棟とみられ、前者とすれば、規模は6.68m×5.20m、面積は39.57㎡を測る。主軸方位はN-4.0°-E。柱穴の平面形は不整形楕円形を呈する。柱抜き取り痕は認められない。主軸方位がSB-3とはほぼ90°の関係にある。

出土遺物 実測遺物は無い。

SB-5 (Fig.348、PL.79・80)

遺構 SB-5はGU42に位置する。平面形は桁行3間×梁行2間の側柱建物で、東西棟である。規模は6.68m×5.20m、面積は34.8㎡を測る。主軸方位はN-5.0°-E。柱穴の平面形は方形を呈する。明瞭な柱抜き取り痕は認められない。

出土遺物 実測遺物は無い。

SI-201

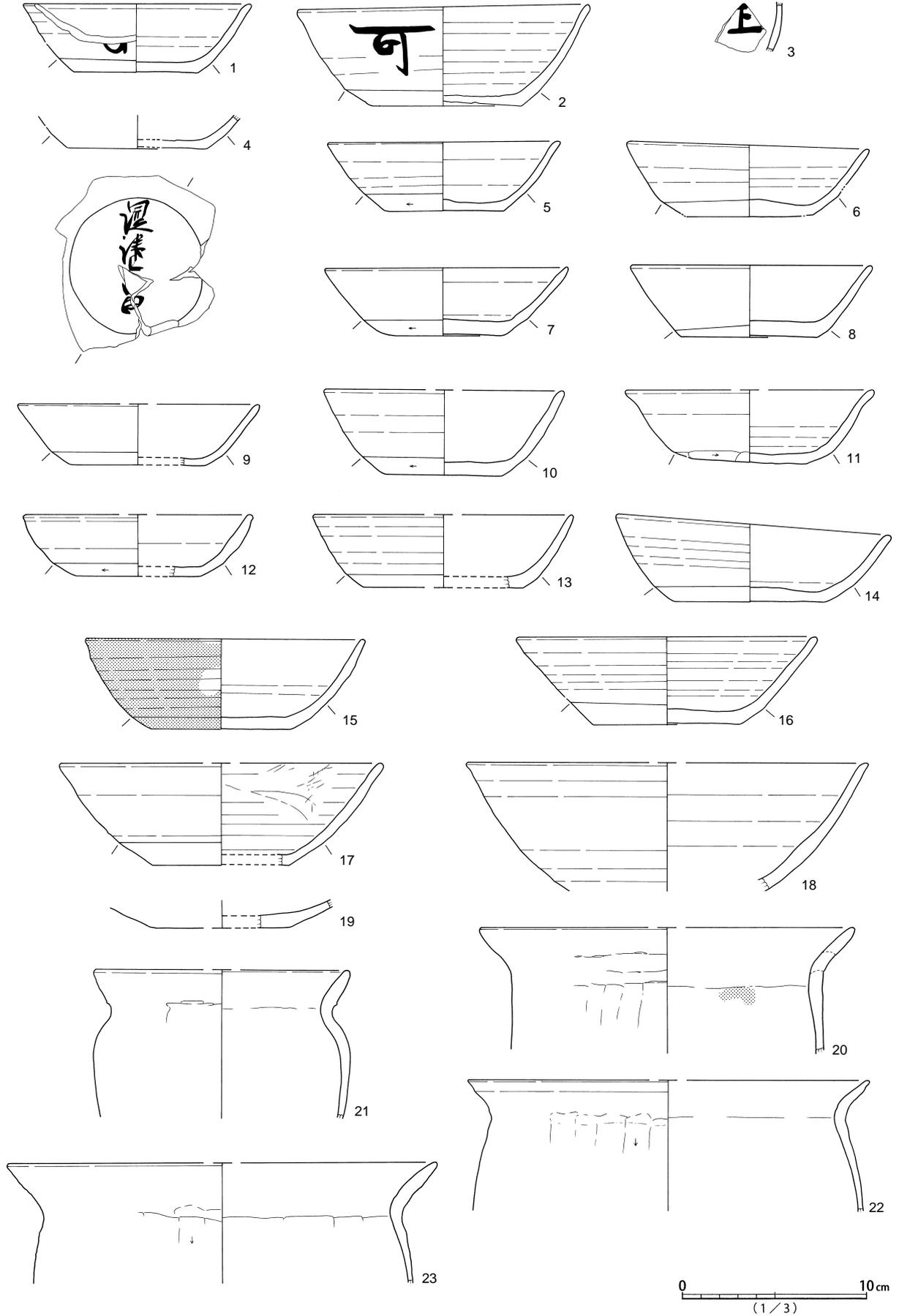


Fig.321 SI-201出土遺物実測図

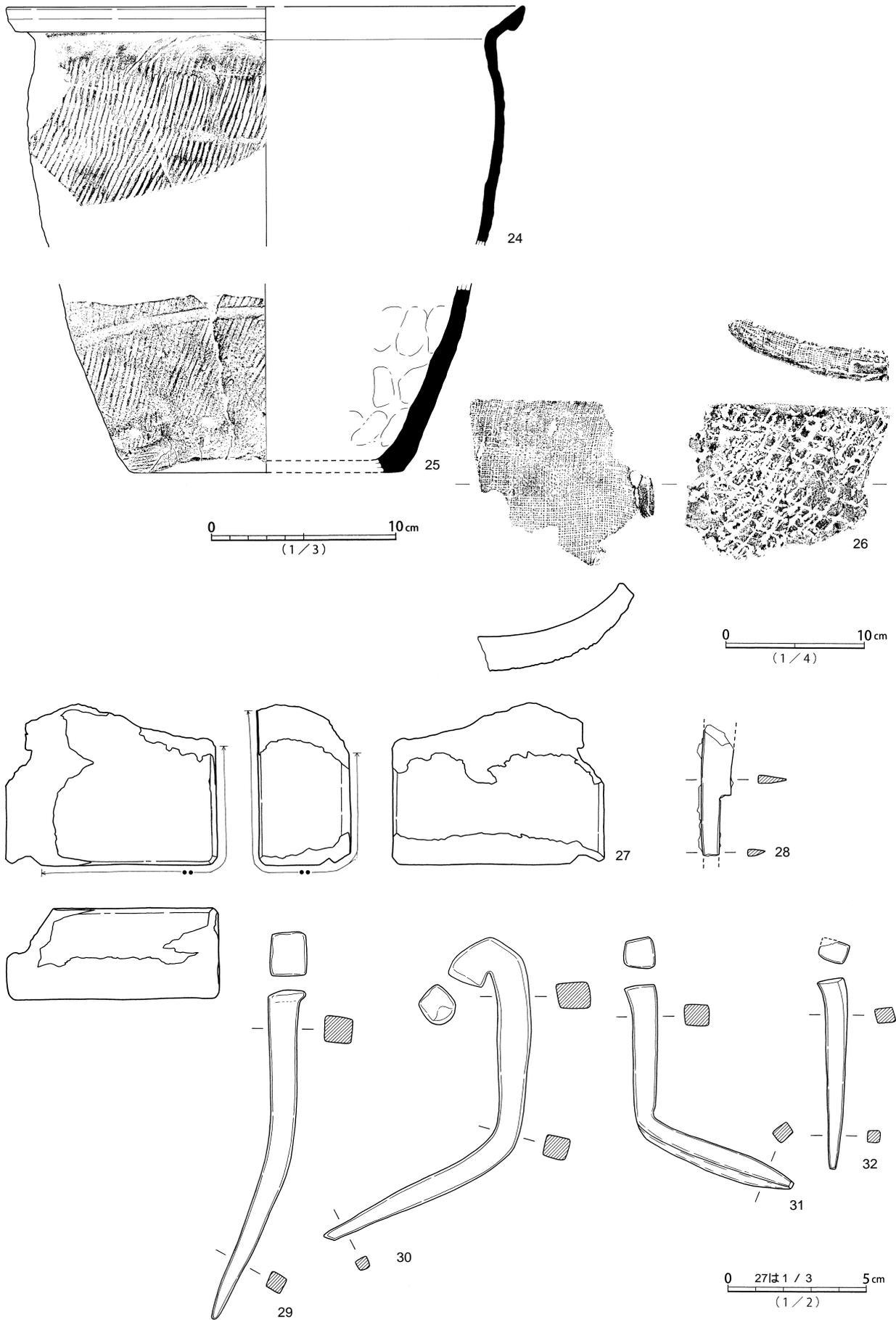
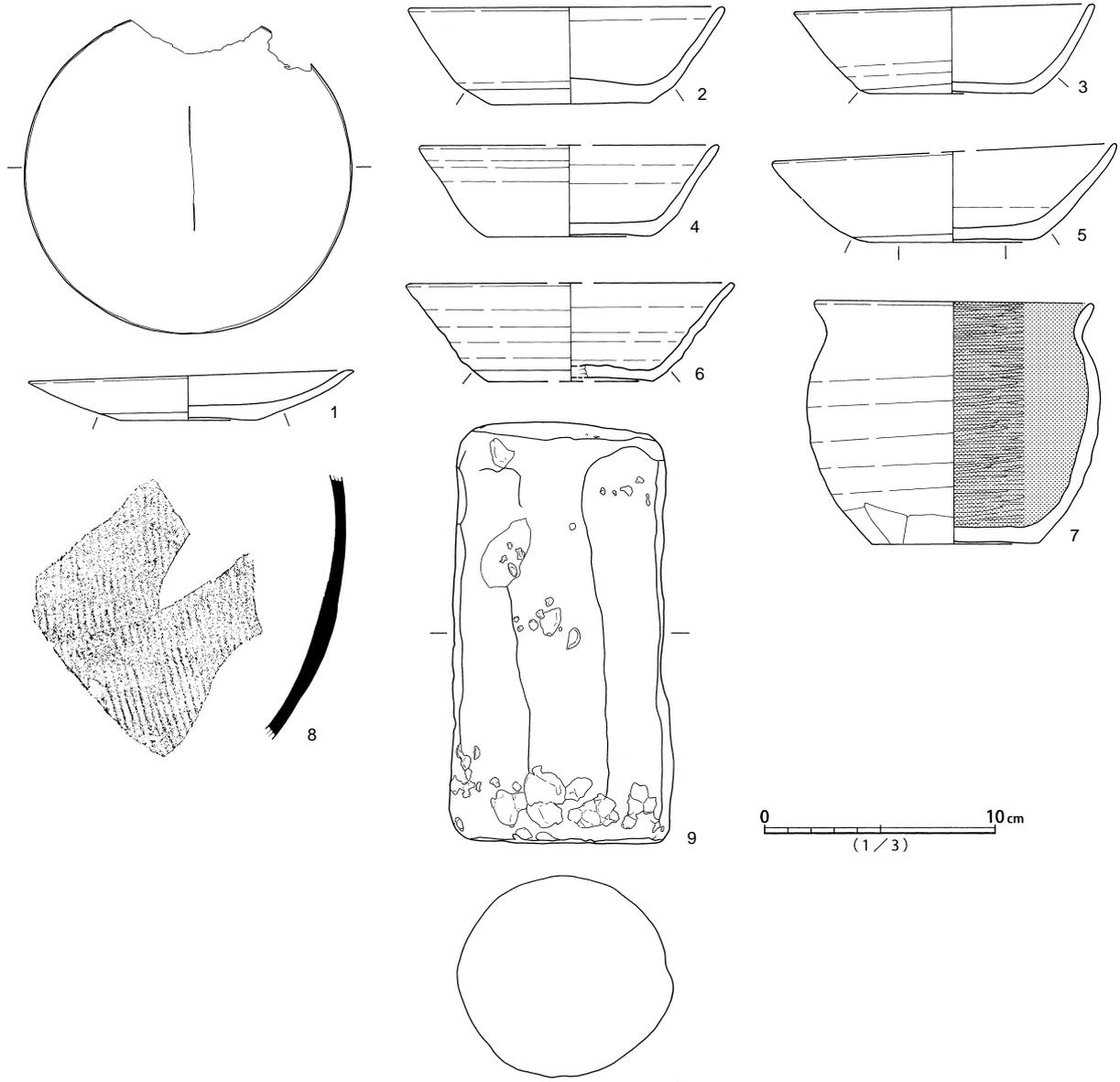


Fig.322 SI-201出土遺物実測図

SI-202a



SI-202b

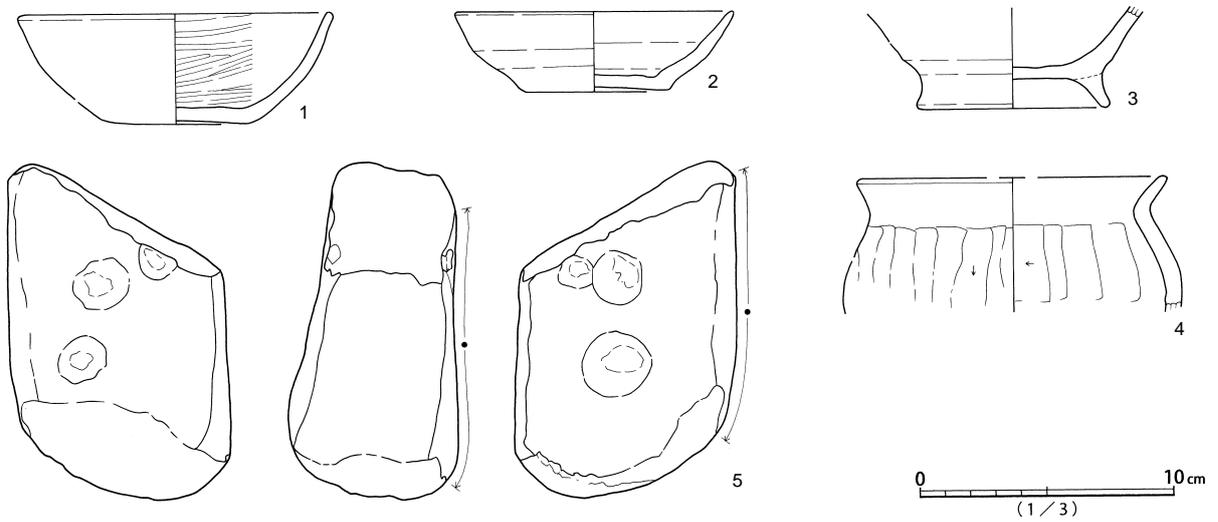


Fig.323 SI-202出土遺物実測図

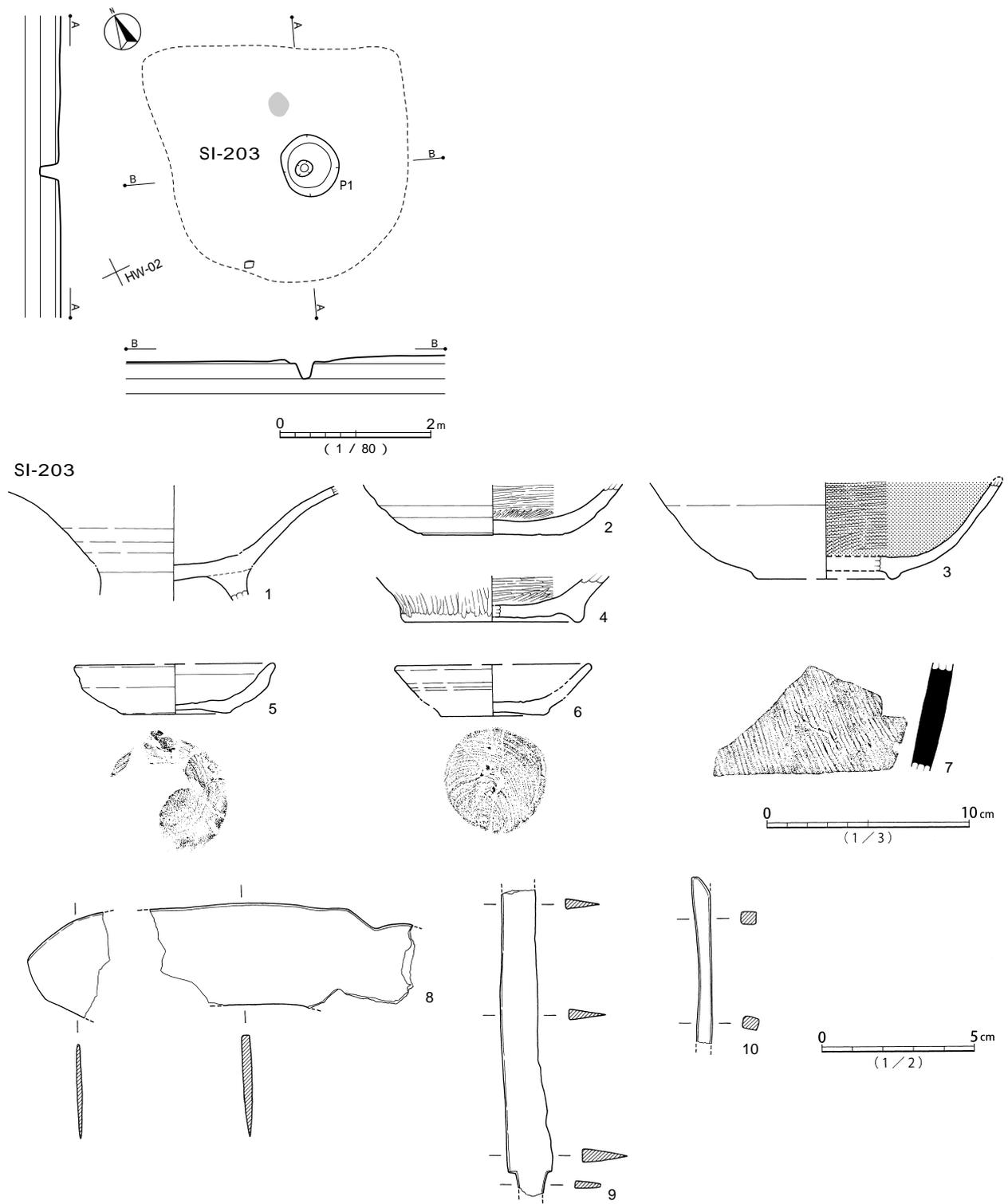


Fig.324 SI-203遺構・出土遺物実測図

SB-6 (Fig.349)

遺構 SB-6はFU04に位置する。平面形は桁行3間×梁行2間の側柱建物で、東西棟である。規模は5.70m×4.20m、面積は23.09m²を測る。主軸方位はN-87.5°-E。柱穴の平面形は不整楕円形を呈する。明瞭な柱抜き取り痕は認められない。

出土遺物 実測遺物は無い。

SK-001 a(Fig.350、PL.80・144・176)・b(Fig.350)

遺構 SK-001a・bはBY78に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形で、規模は(1.09)m×1.16m、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。調査時には遺構番号が1つであったが、a・bにわけて掲載している。実測遺物は1～3が土師器で、1・2は杯、3は甕である。SK-001bは出土遺物は無い。

SK-002 (Fig.350)

遺構 SK-002はBY76に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形で、規模は0.90m×0.84m、遺構確認面からの深さは0.25mを測る。実測遺物は無い。

SK-003 (Fig.350、PL.176)

遺構 SK-003はBY96に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形で、規模は0.92m×0.89m、遺構確認面からの深さは0.21mを測る。調査時には遺構番号が無いが、遺物を実測していることから整理作業時に番号を付与している。実測遺物は1・2は土師器杯である。

SK-004 (Fig.350)

遺構 SK-004はAY06に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形で、規模は0.60m×0.49m、遺構確認面からの深さは0.58mを測る。実測遺物は無い。

SK-005 (Fig.350)

遺構 SK-005はAY07に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形で、規模は0.87m×(0.82)m、遺構確認面からの深さは0.21mを測る。実測遺物は無い。

SK-006 (Fig.350、PL.233)

遺構 SK-006はAY07に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形で、規模は1.37m×1.46m、遺構確認面からの深さは0.48mを測る。実測遺物は1が板状鉄製品である。

SK-007 (Fig.350)

遺構 SK-007はBY96に位置する。SI-001の北側に近接する。平面形は不整円形で、規模は0.69m×0.50m、遺構確認面からの深さは0.31mを測る。実測遺物は無い。

SK-008 (Fig.350)

遺構 SK-008はBY84に位置する。SI-002と重複し、遺構図面からは本遺構が古い。平面形は不整円形で、規模は1.07m×1.03m、遺構確認面からの深さは0.48mを測る。実測遺物は無い。

SK-009a・b・c (Fig.350)

遺構 SK-009a・b・cはBX70に位置する。a・b・cの新旧関係は不明。平面形は不整円形で、009aの規模は2.14m×1.72m、遺構確認面からの深さは0.28m、009bの規模は(1.52)m×(1.22)m、遺構確認面からの深さは0.28m、009cの規模は1.29m×1.15m、遺構確認面からの深さは0.28mを測る。実測遺物は無い。

SK-010 (Fig.350)

SI-204

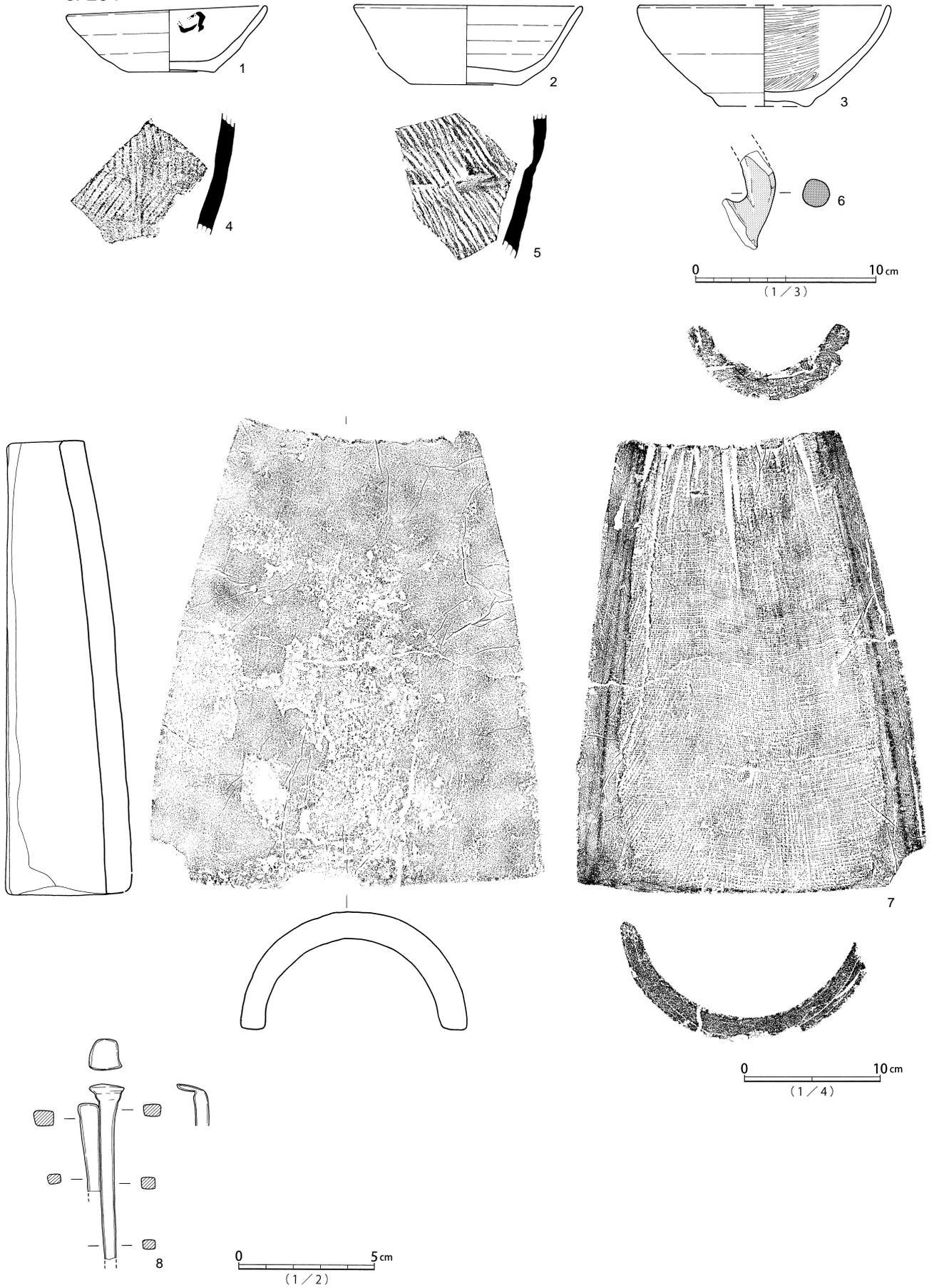


Fig.325 SI-204出土遺物実測図

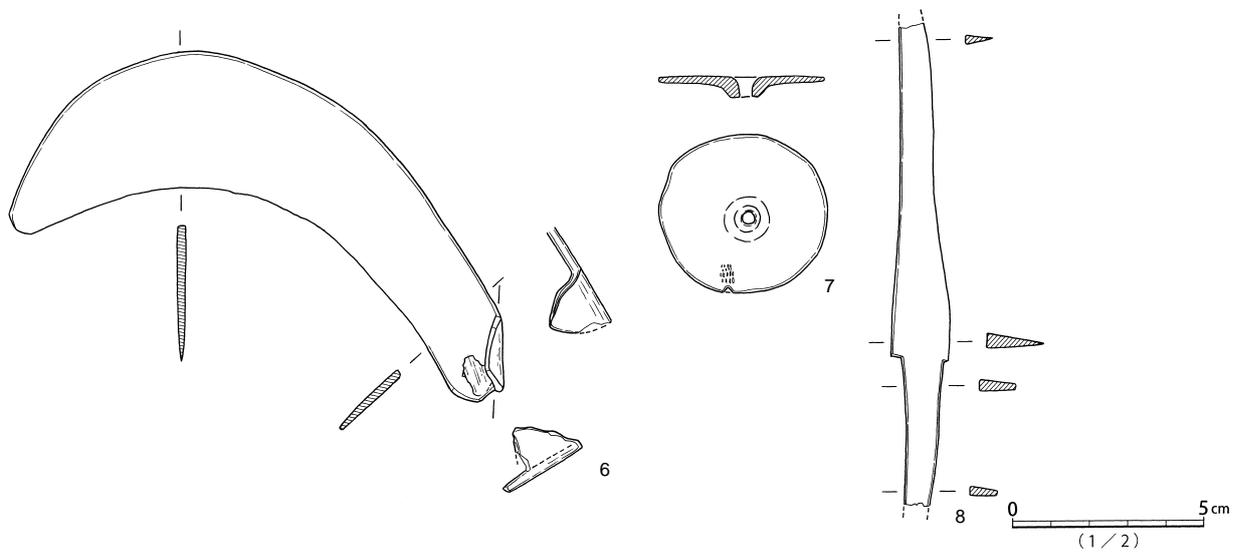
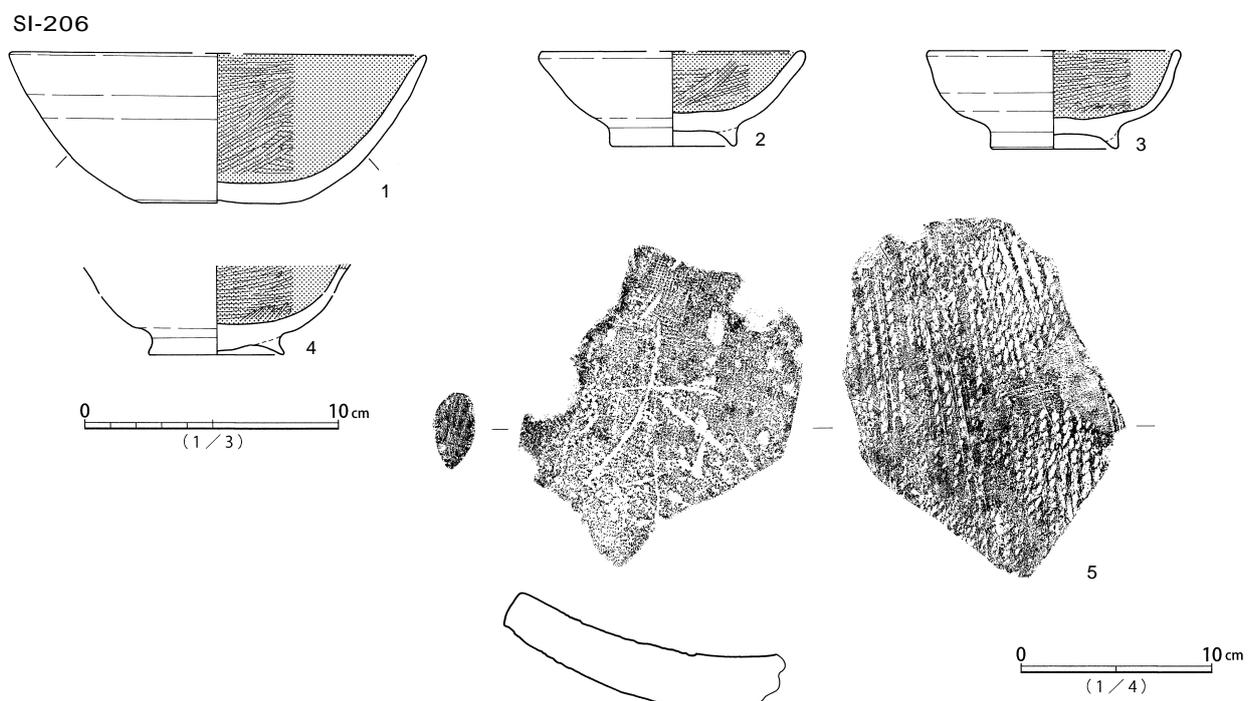
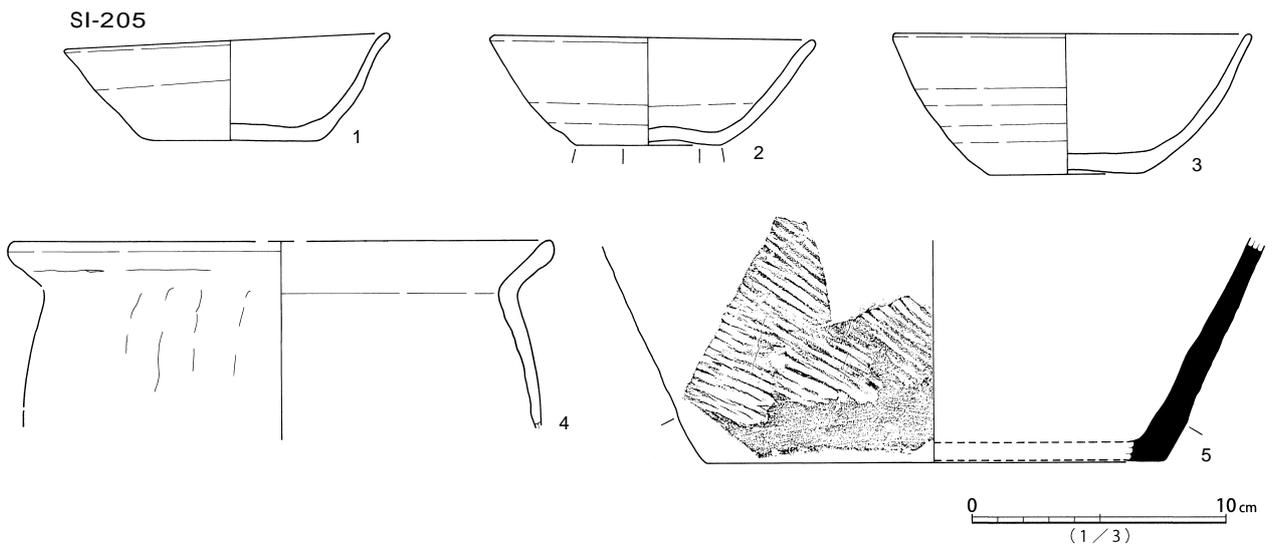


Fig.326 SI-205・206出土遺物実測図

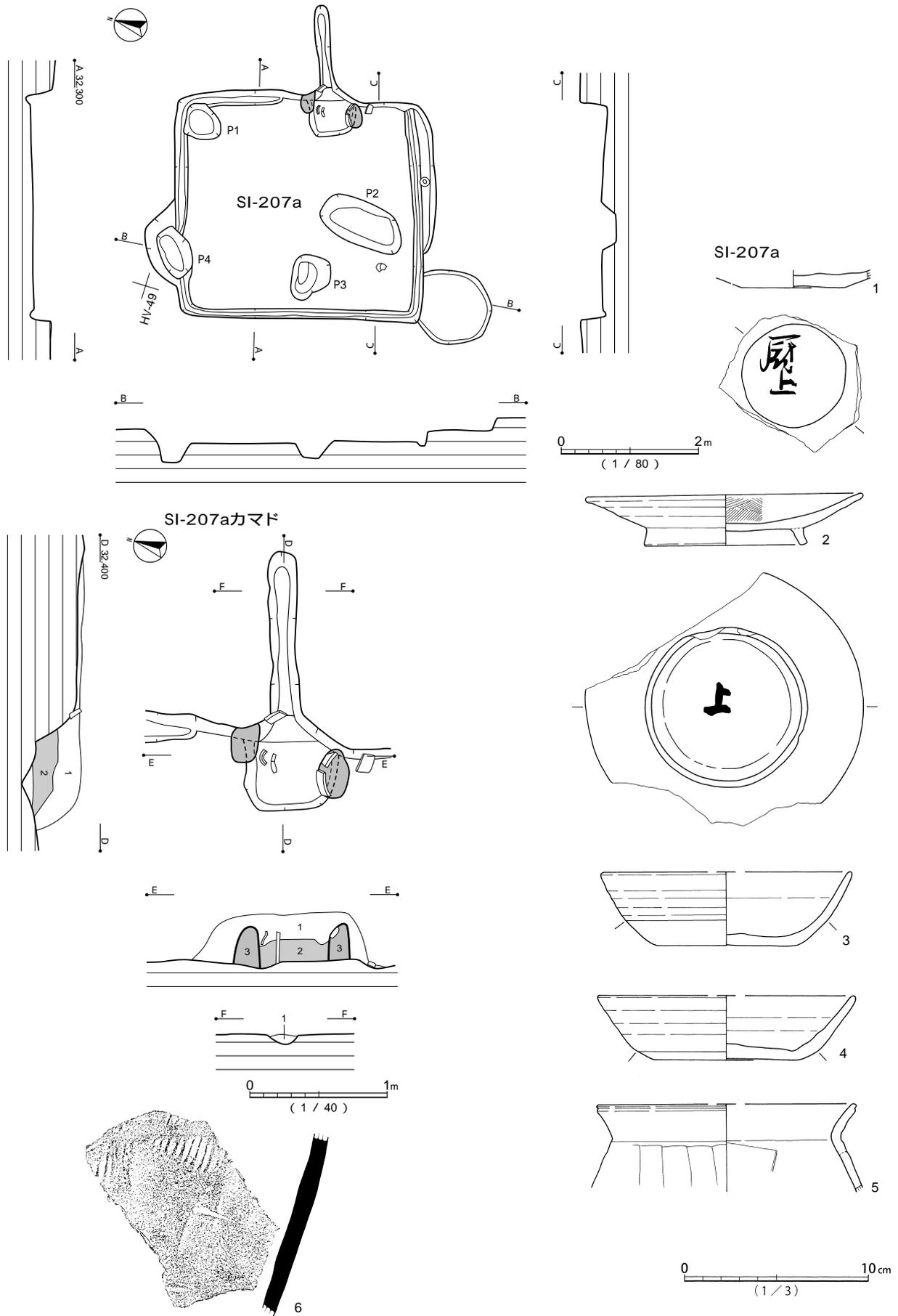


Fig.327 SI-207遺構・出土遺物実測図

SI-207b

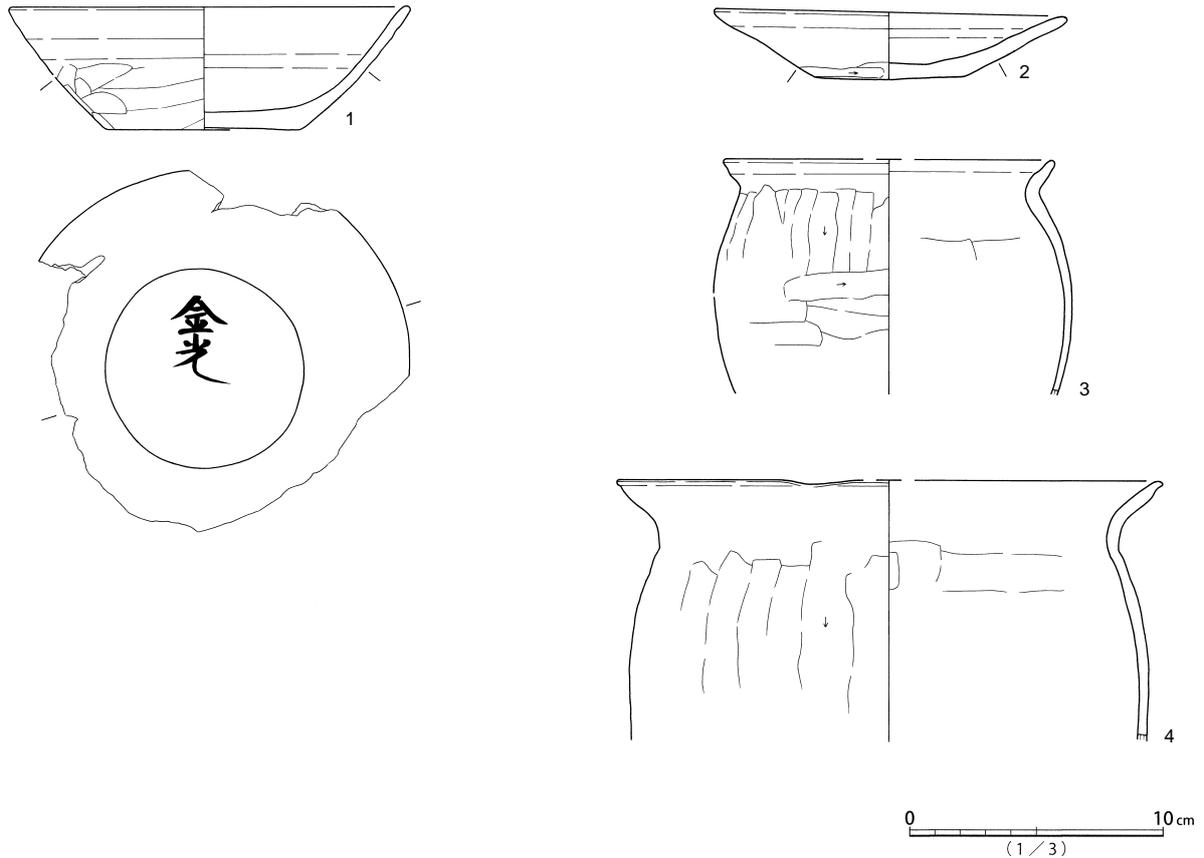


Fig.328 SI-207出土遺物実測図

遺構 SK-010はBX70に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円で、規模は1.22m × 1.05 m、遺構確認面からの深さは0.41mを測る。実測遺物は無い。

SK-011 (Fig.351・352、PL.144・176・234)

遺構 SK-011はBY33に位置する。他遺構との重複はない。SI-008の北側に位置する。平面形は不整形円で、規模は1.67m × 1.59m、遺構確認面からの深さは0.69mを測る。実測遺物は1~6が土師器で、1は杯、2・3は小皿、4は椀、5は小形甕、6は甕、7は鉄製刀子である。

SK-012 (Fig.351)

遺構 SK-012はBY52に位置する。SI-006・007と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円で、規模は1.10m × 0.95m、遺構確認面からの深さは0.50mを測る。実測遺物は無い。

SK-013 (Fig.351)

遺構 SK-013はBY52に位置する。SI-005と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円で、規模は1.12m × 0.91m、遺構確認面からの深さは0.31mを測る。実測遺物は無い。

SK-014 (Fig.351)

遺構 SK-014はBY53に位置する。SI-005・009と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円で、規模は1.09m × 0.95m、遺構確認面からの深さは0.53mを測る。実測遺物は無い。

SK-015 (Fig.351)

遺構 SK-015はBY53に位置する。SI-011と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円で、規模

は1.14m×1.12m、遺構確認面からの深さは0.38mを測る。実測遺物は無い。

SK-016 (Fig.351・352、PL.80・144・176)

遺構 SK-016はBY53に位置する。平面形が不整円形の土坑が3基重複した形状を呈する。他遺構との重複はない。規模は0.80m×0.80m、遺構確認面からの深さは0.38mを測る。実測遺物は1が土師器小皿である。

SK-017 (Fig.351、PL.80)

遺構 SK-017はBY53に位置する。SI-004と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は1.02m×0.72m、遺構確認面からの深さは0.47mを測る。実測遺物は、図面に覆土上層の貝が認められるが、実物が無く、詳細は不明である。

土層 1、褐色土中にローム粒混じる 2、キサゴ主体でパカガイやや多く、アカニシ含む貝層中に暗褐色土混じる 3、褐色土中にローム粒混じる 4、褐色土中にローム粒多く混じる 5、黒味強い褐色土中にローム粒混じる 6、黒褐色土主体でローム粒混じる 7、ロームブロック主体で褐色土混じる

SK-018 (Fig.353・354、PL.176・226)

遺構 SK-018はBY08に位置する。平面形はピットが幾つも連なった形状を呈し、規模は1.03m×0.72m、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。他遺構との重複はない。実測遺物は1～3は須恵器で、1・2は杯、3は甕、4は砥石、5は金床石である。

SK-019 (Fig.353)

遺構 SK-019はBY08に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形で、規模は1.17m×0.73m、遺構確認面からの深さは0.52mを測る。実測遺物は無い。

SK-020 (Fig.353・354、PL.144)

遺構 SK-020はBY08に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形で、規模は1.19m×0.69m、遺構確認面からの深さは0.44mを測る。実測遺物は1が土師器杯である。

SK-021 (Fig.353)

遺構 SK-021はBY08に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形で、規模は1.00m×0.82m、遺構確認面からの深さは0.19mを測る。実測遺物は無い。

SK-022 (Fig.353)

遺構 SK-022はBY08に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整楕円形を呈し、規模は1.78m×1.03m、遺構確認面からの深さは0.57mを測る。実測遺物は無い。

SK-023 (Fig.353・354、PL.9・144)

遺構 SK-023はBY57に位置する。SI-013と重複するが新旧関係は不明。平面形は円形を呈し、規模は1.14m×1.13m、遺構確認面からの深さは0.54mを測る。実測遺物は1～4が土師器で、1は杯、2・4は高台付小皿、3は小皿である。

SK-024 (Fig.353・354、PL.80・144・192)

遺構 SK-024はBY59に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不正方形を呈し、規模は2.46m×1.73m、遺構確認面からの深さは0.39mを測る。遺構の周辺と遺構中にピットが集中するが、本遺構との関係は不明。実測遺物は1がカワラケ、2は灰釉陶器瓶類で底部外面に線刻が認められる。

SK-025 (Fig.353)

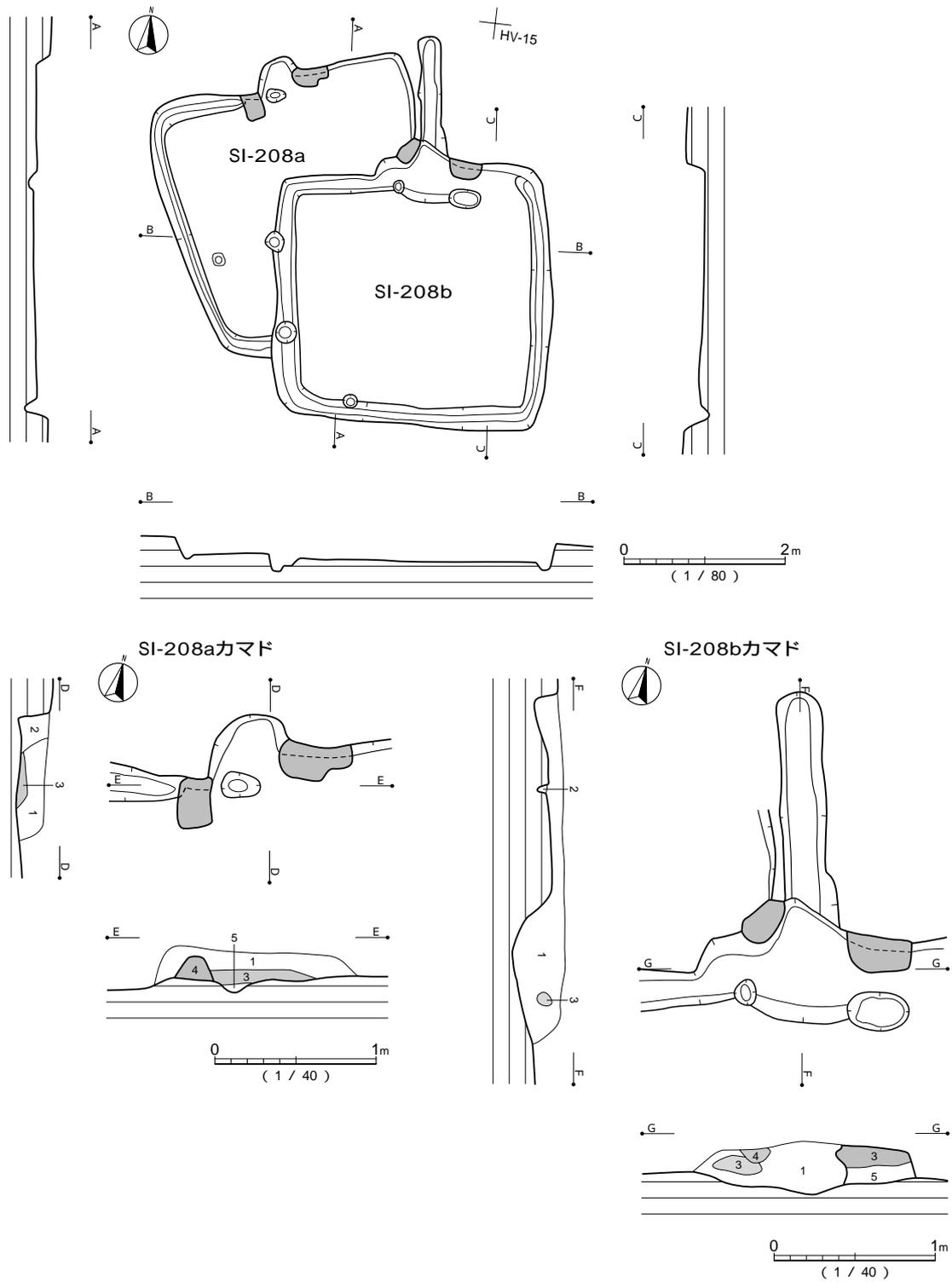


Fig.329 SI-208遺構実測図

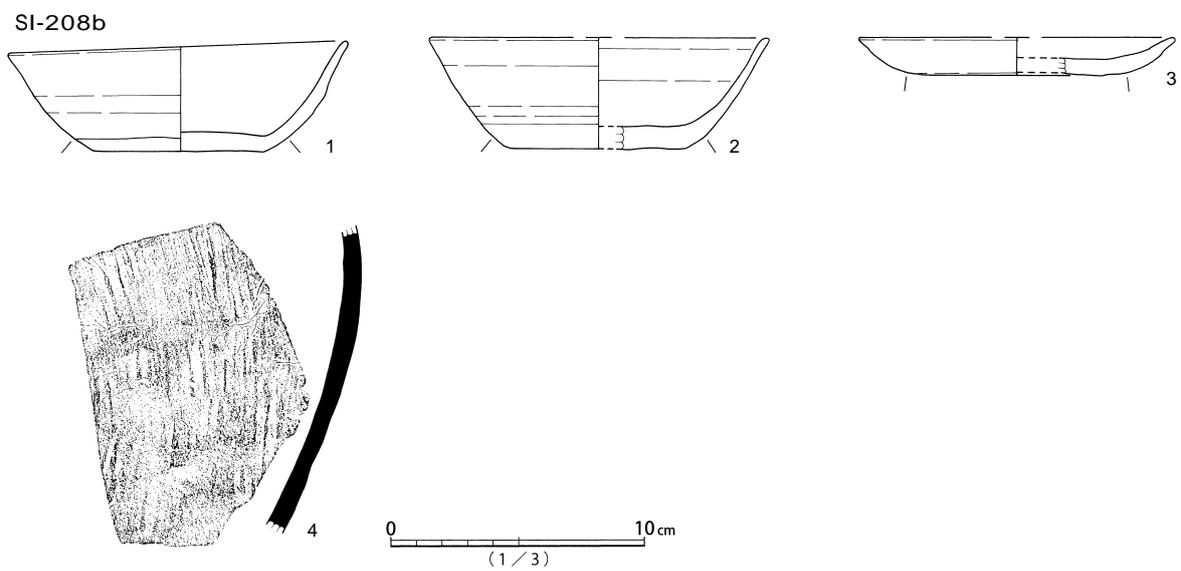
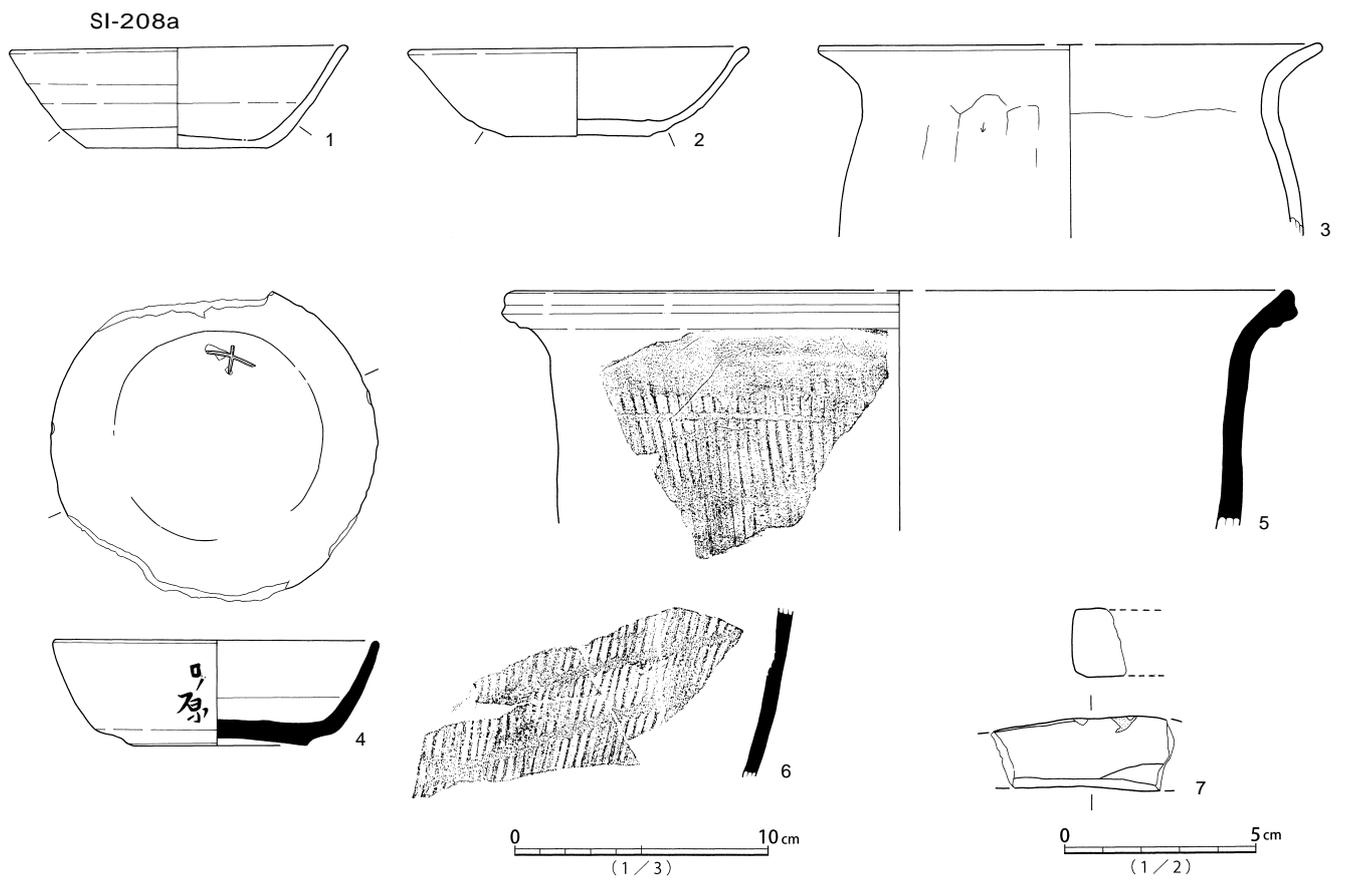


Fig.330 SI-208出土遺物実測図

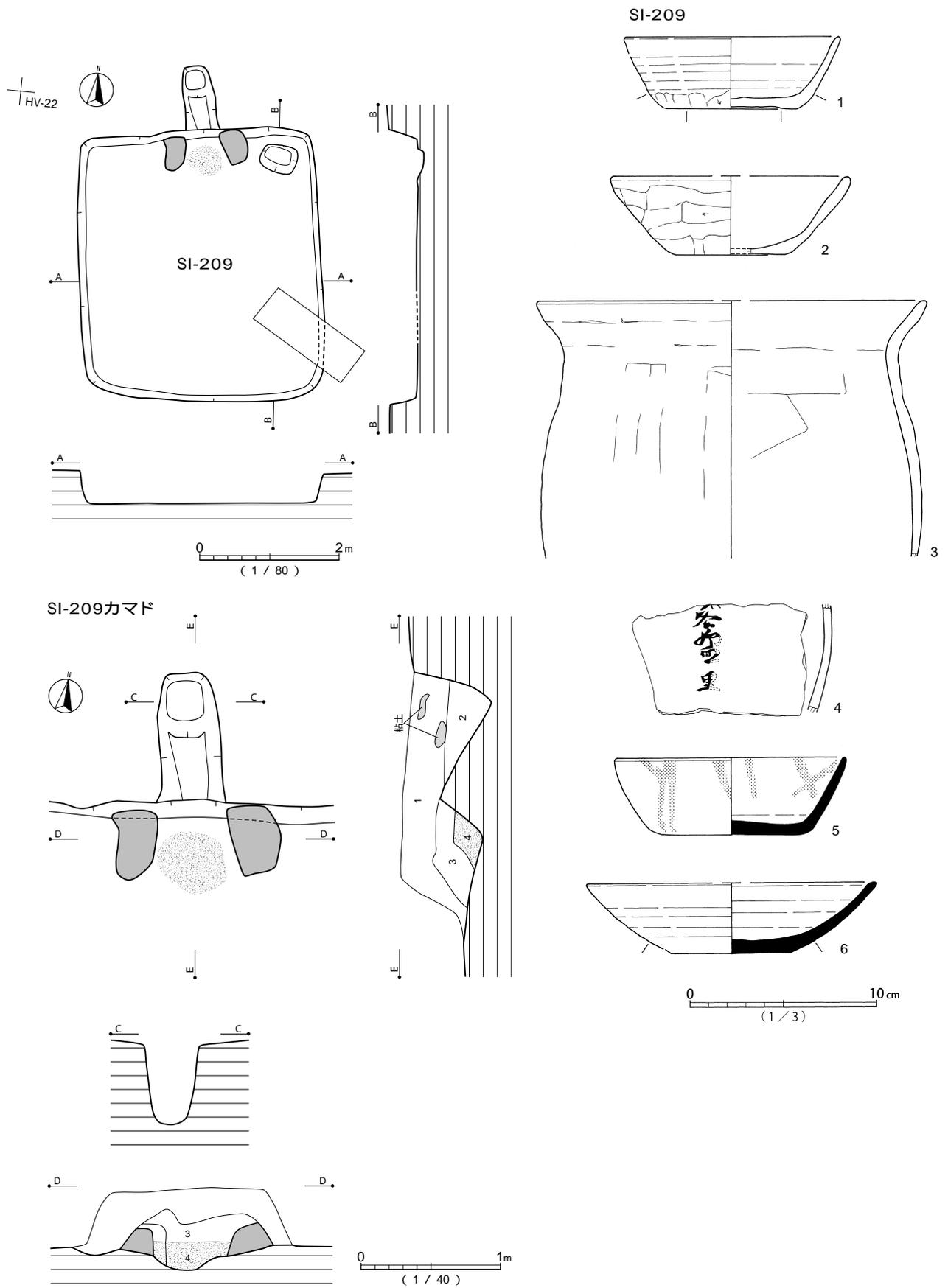
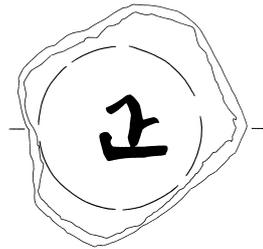
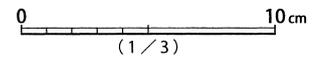
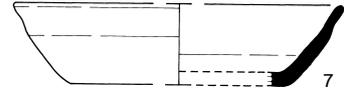
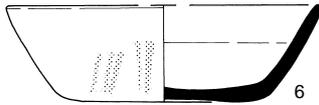
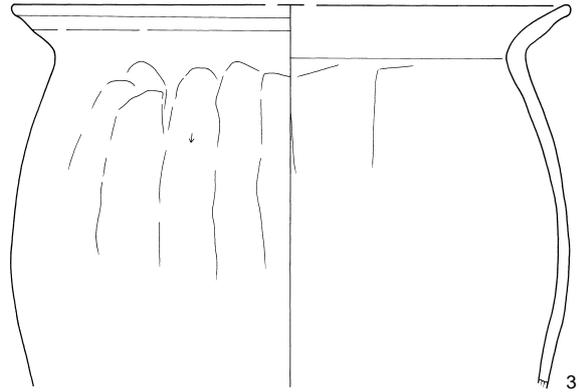
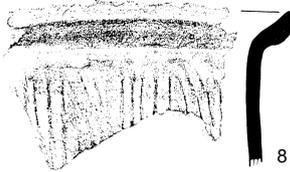
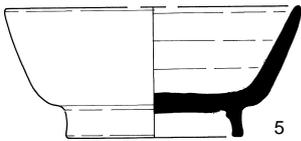
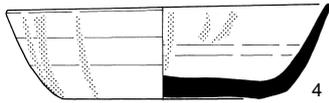
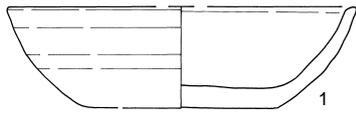


Fig.331 SI-209遺構・出土遺物実測図

SI-210



SI-211

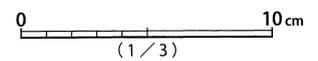
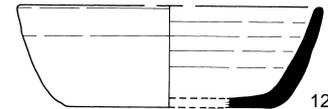
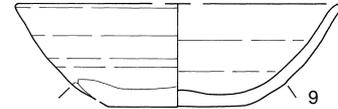
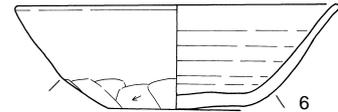
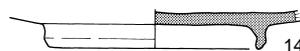
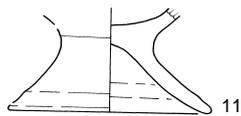
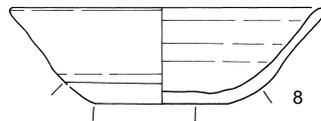
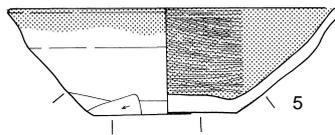
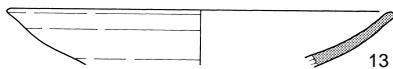
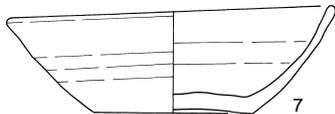
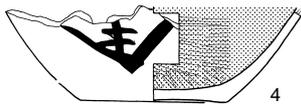


Fig.332 SI-210・211出土遺物実測図

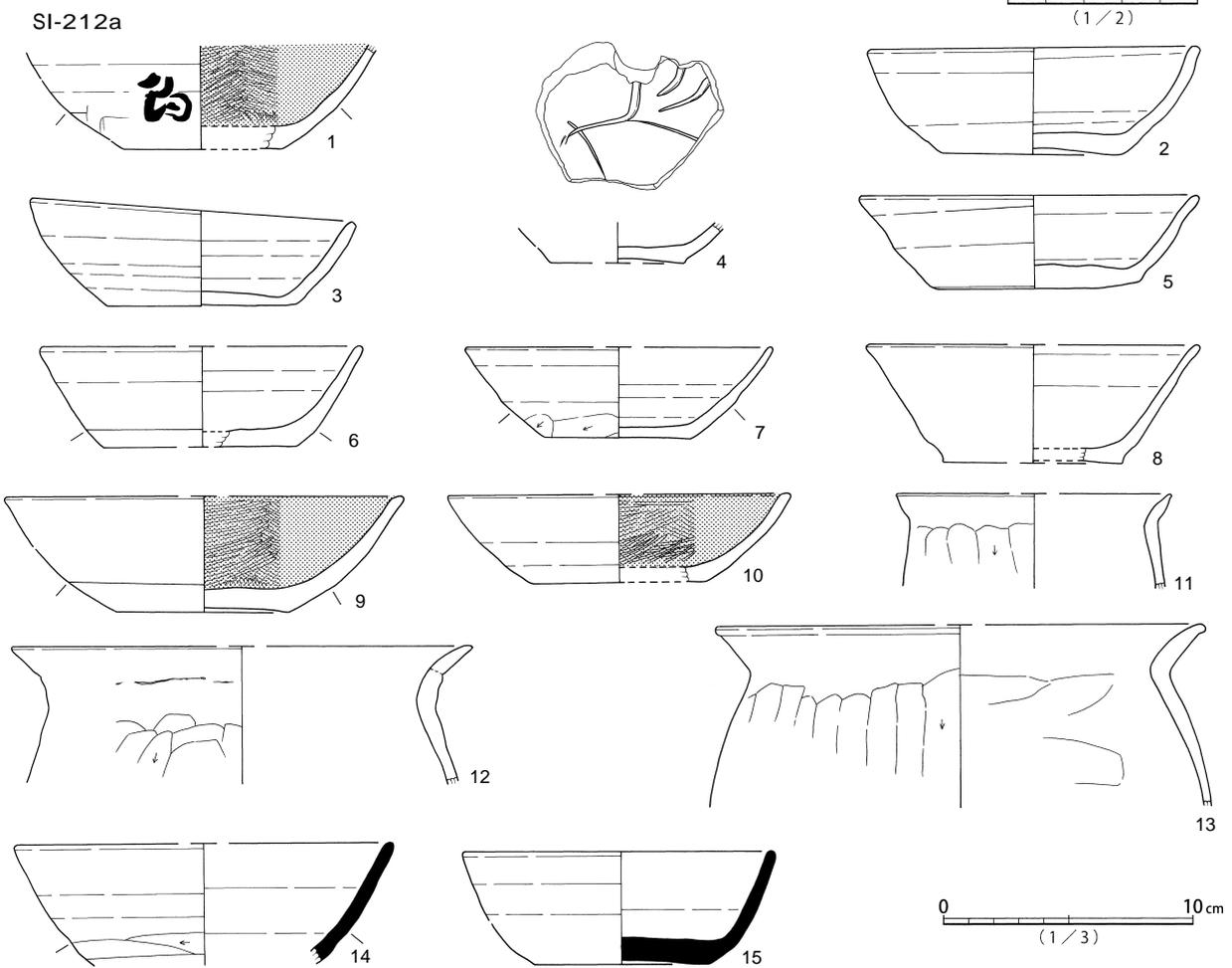
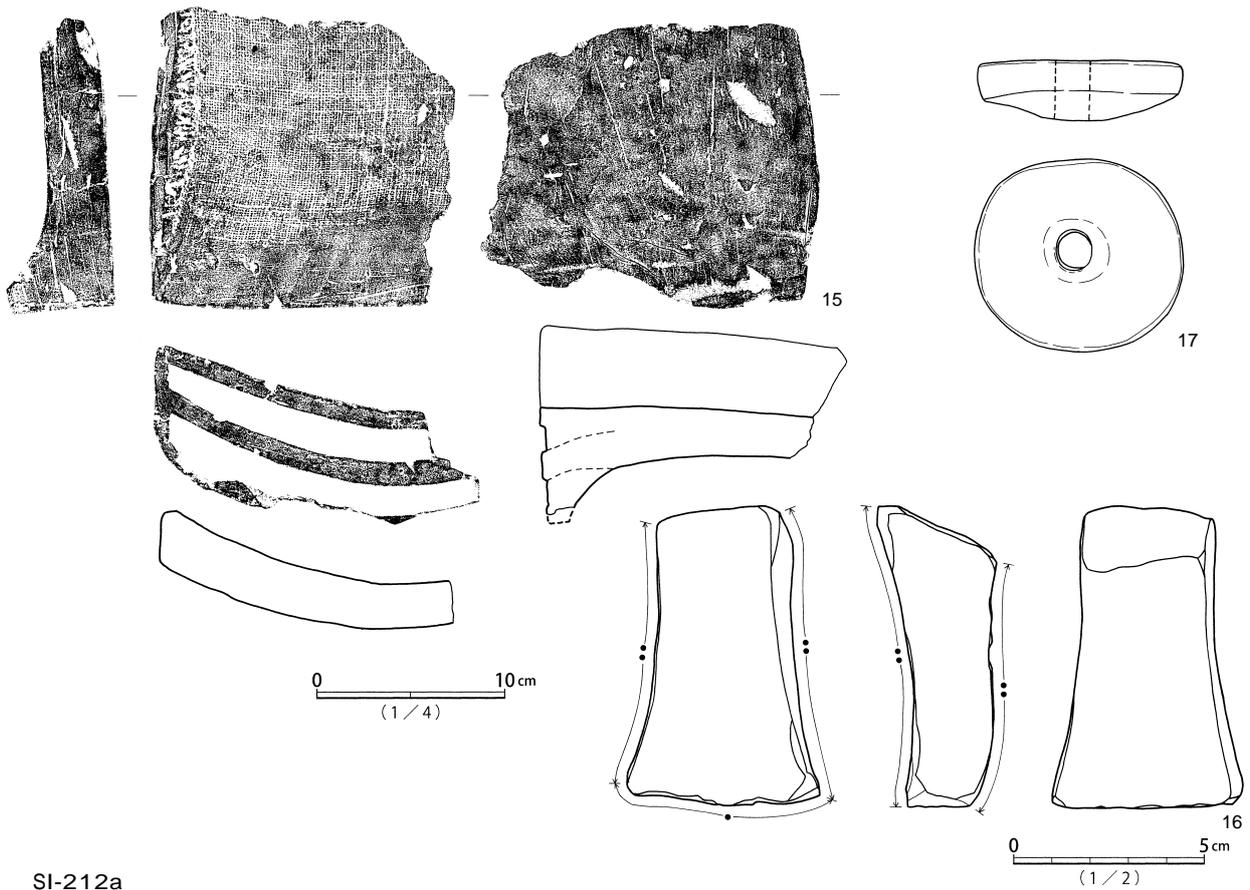


Fig.333 SI-211・212出土遺物実測図

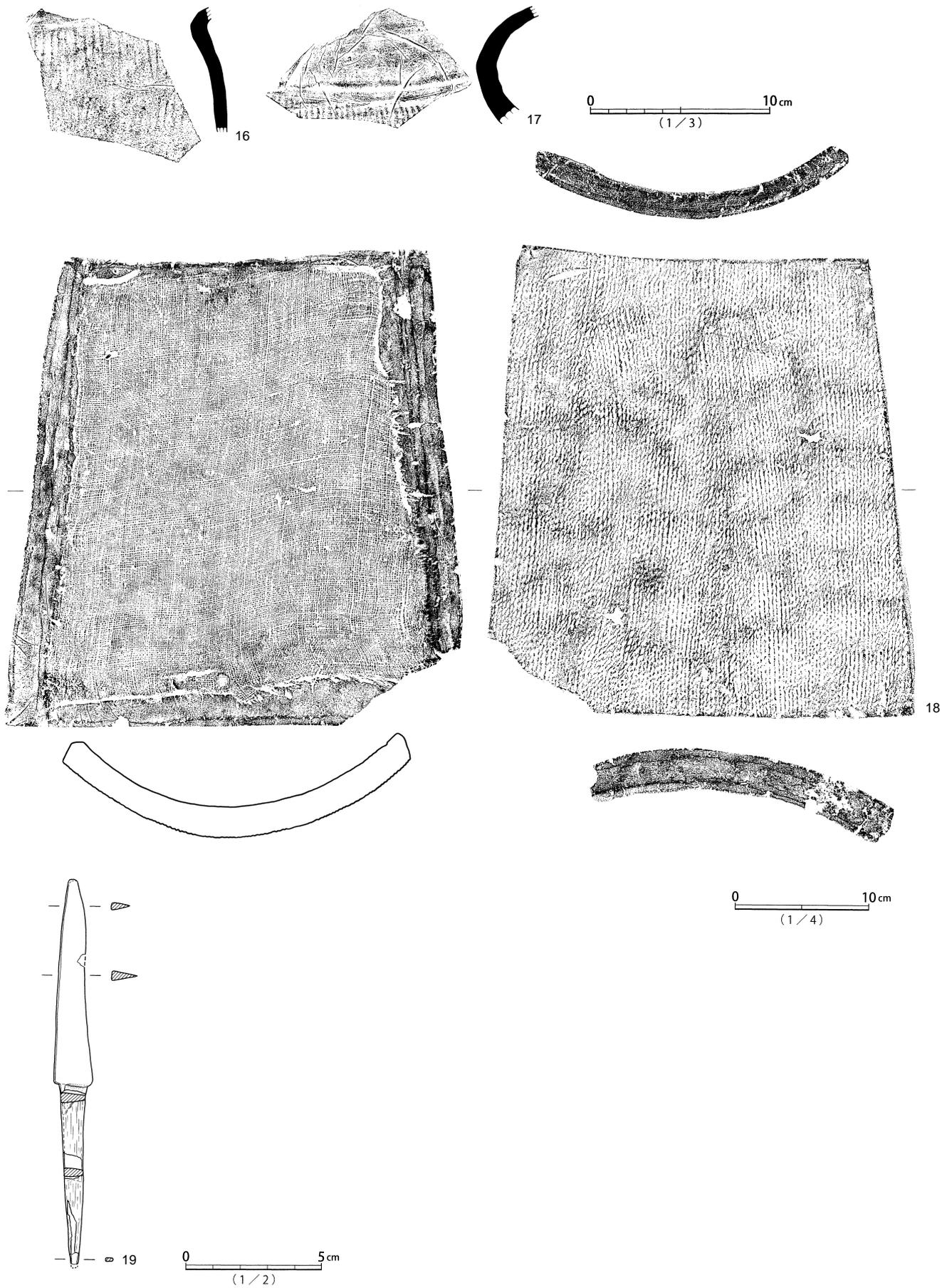


Fig.334 SI-212出土遺物実測図

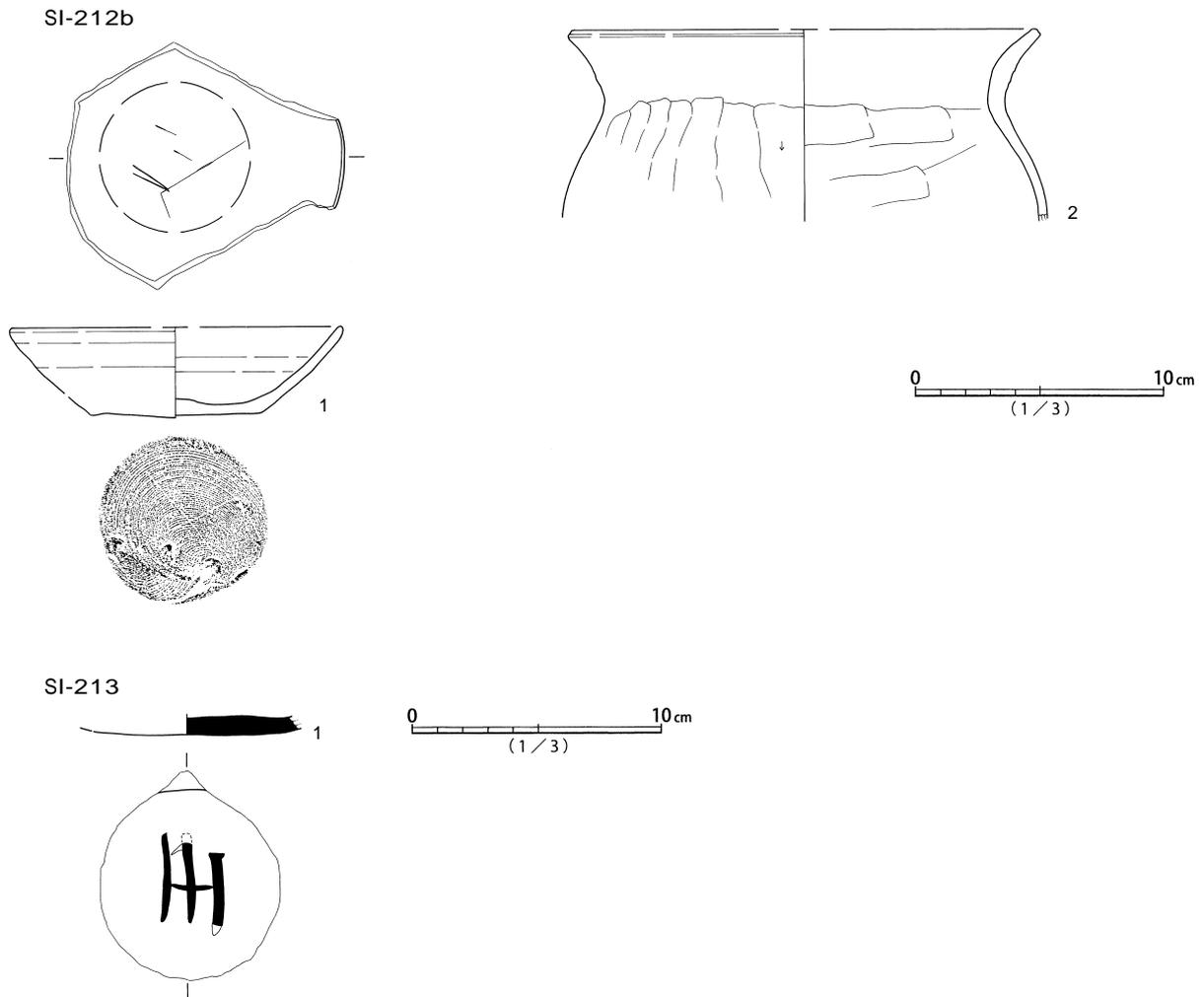


Fig.335 SI-212・213出土遺物実測図

遺構 SK-025はBY69に位置する。SI-014・SK-026と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈するとみられ、規模は0.81m × (0.74)m、遺構確認面からの深さは0.33mを測る。実測遺物は無い。

SK-026 (Fig.353)

遺構 SK-026はBY69に位置する。SI-014・SK-025と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.05m × 0.87m、遺構確認面からの深さは0.38mを測る。実測遺物は無い。

SK-027 (Fig.353)

遺構 SK-027はAX19に位置する。SI-023と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.08m × 1.05m、遺構確認面からの深さは0.38mを測る。実測遺物は無い。

SK-028 (Fig.353)

遺構 SK-028はBY34に位置する。SI-014と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.00m × 0.99m、遺構確認面からの深さは0.71mを測る。実測遺物は無い。

SK-029 (Fig.353)

遺構 SK-029はBY34に位置する。SI-014と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、

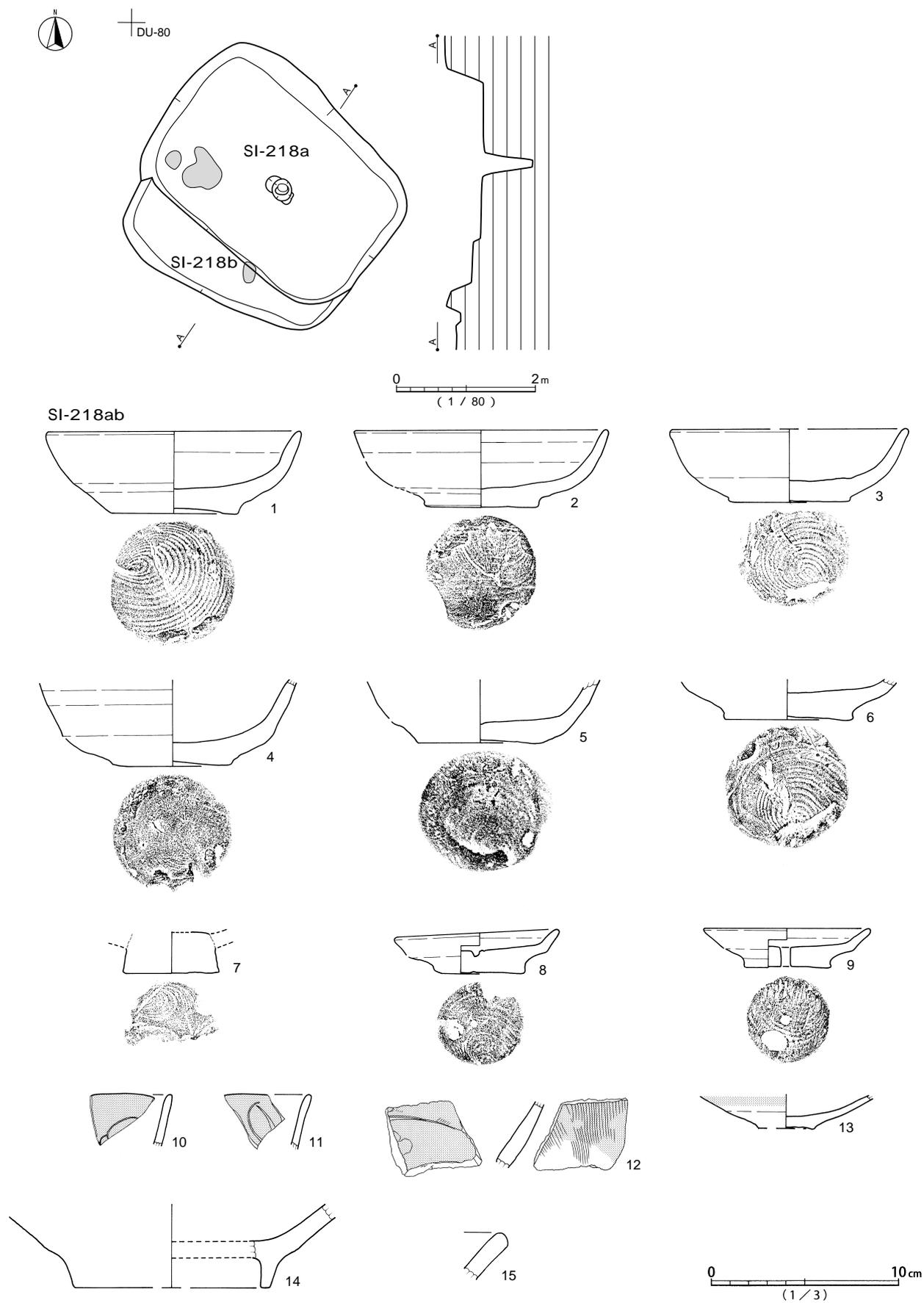


Fig.336 SI-218遺構・出土遺物実測図

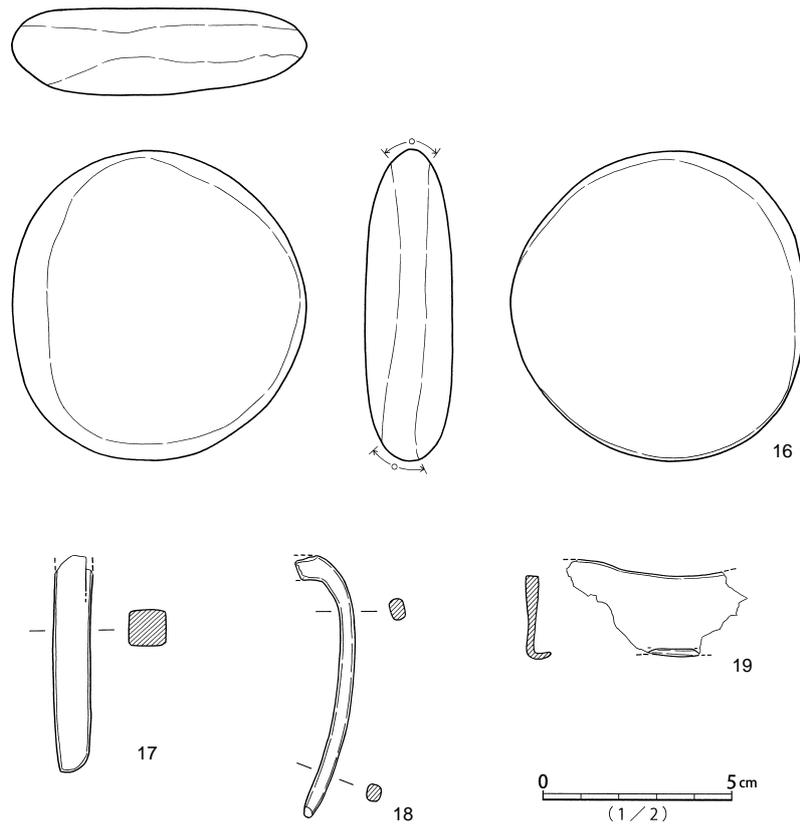


Fig.337 SI-218出土遺物実測図

規模は1.20m × 1.05m、遺構確認面からの深さは0.43mを測る。実測遺物は無い。

SK-030 (Fig.355、 PL.144)

遺構 SK-030はBY34に位置する。平面形は不整形円で、他遺構との重複はない。規模は1.83m × 1.60m、遺構確認面からの深さは0.47mを測る。実測遺物は1～3が土師器で、1は足高高台付杯、2は小形椀で内面に黒色処理を施す。3は高台付小皿である。

SK-031 (Fig.355)

遺構 SK-031はBY34に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.15m × 1.08m、遺構確認面からの深さは0.19mを測る。実測遺物は無い。

SK-032 (Fig.355)

遺構 SK-032はBY34に位置する。SI-014と重複するが新旧関係は不明。規模は1.23m × 1.21m、遺構確認面からの深さは0.44mを測る。実測遺物は無い。

SK-033 (Fig.355)

遺構 SK-033はCX60に位置する。SI-020と重複するが新旧関係は不明。規模は(1.02)m × (0.95)m、遺構確認面からの深さは0.28mを測る。実測遺物は無い。

SK-034 (Fig.355、 PL.226)

遺構 SK-034はCY54に位置する。SD-1と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.71m × 1.68m、遺構確認面からの深さは0.28mを測る。実測遺物は1・2は鉄滓である。

SK-035 (Fig.356・357、 PL.81・144)

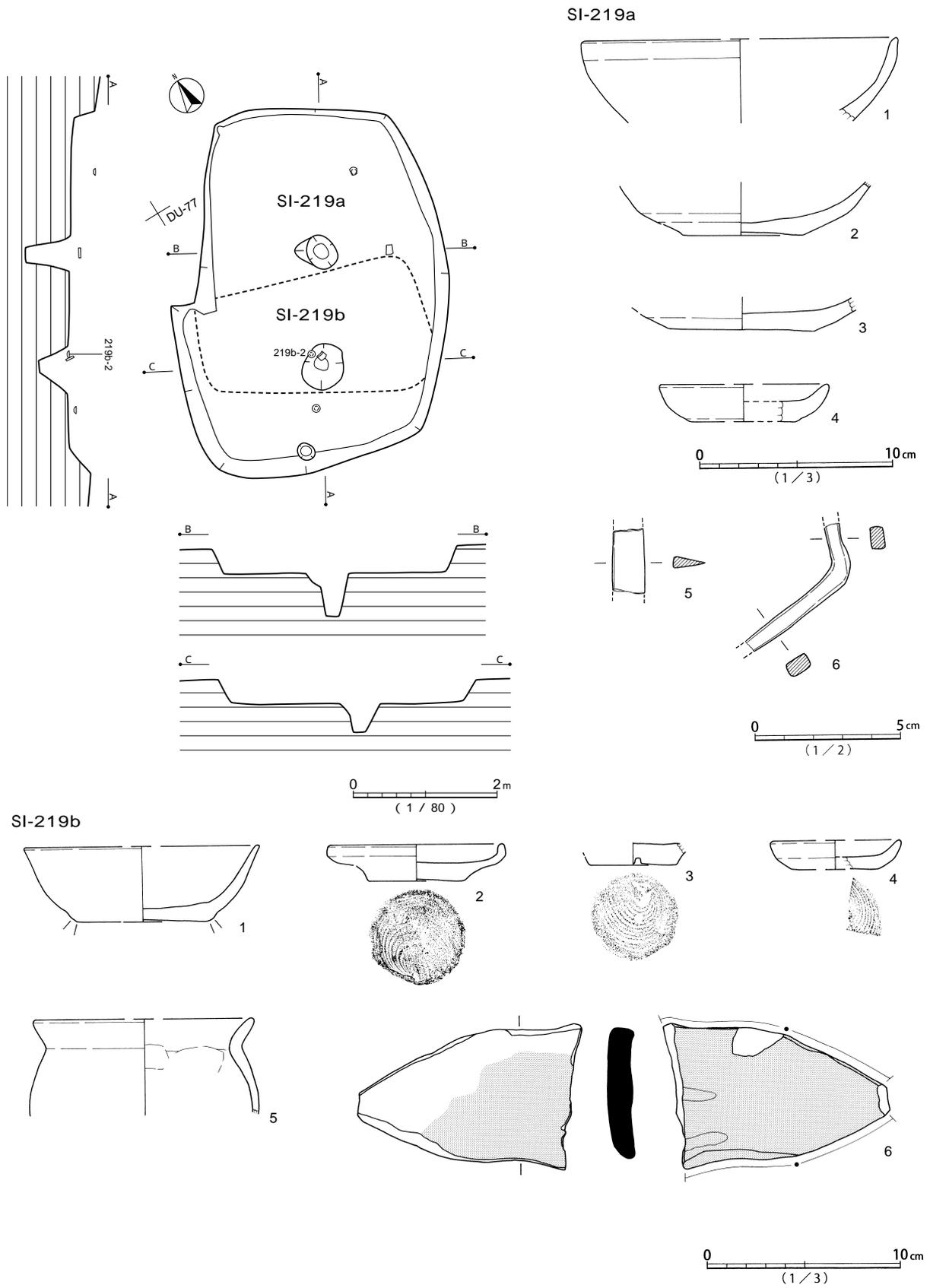


Fig.338 SI-219遺構・出土遺物実測図

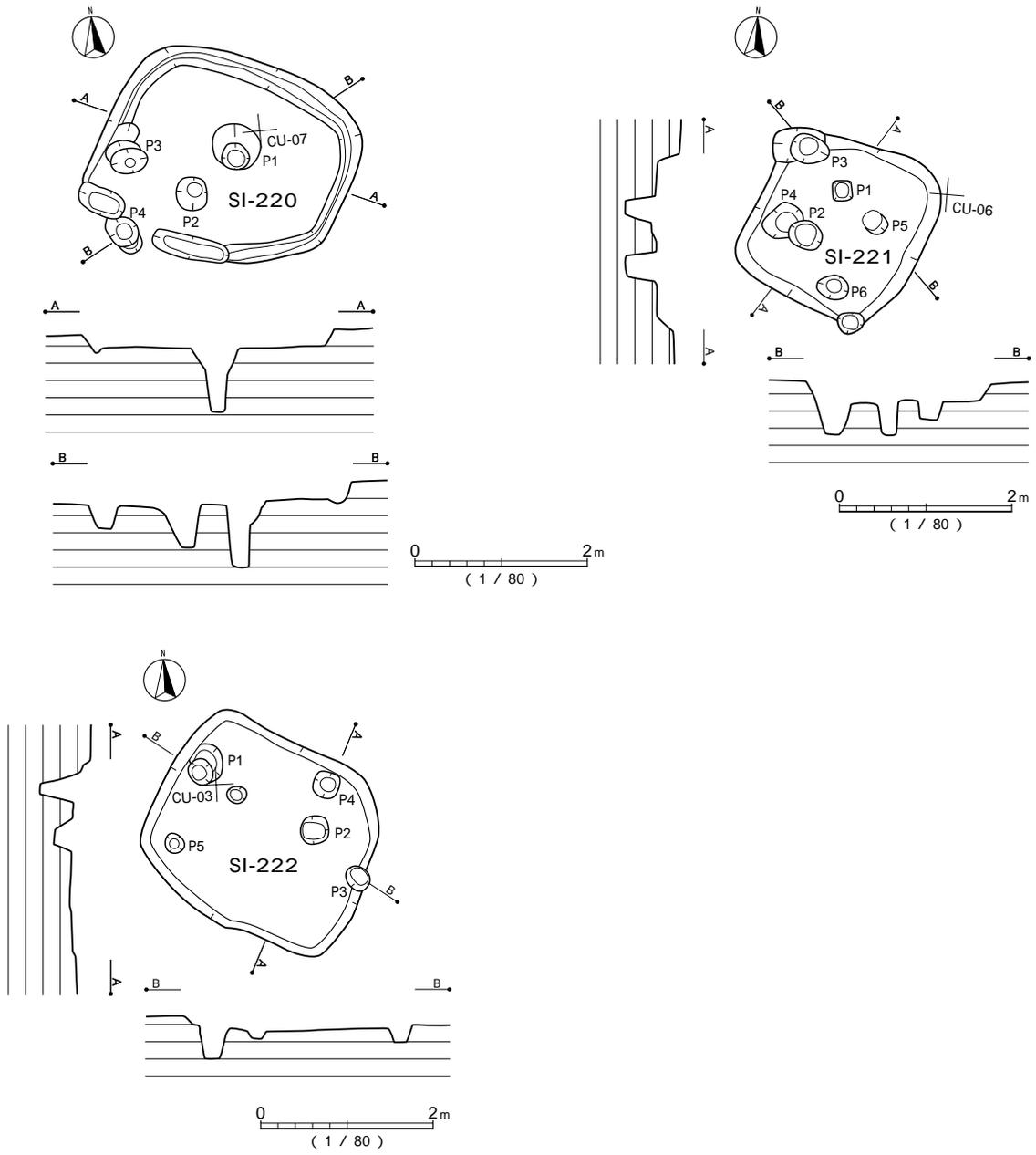


Fig.339 SI-220 ~ 222遺構実測図

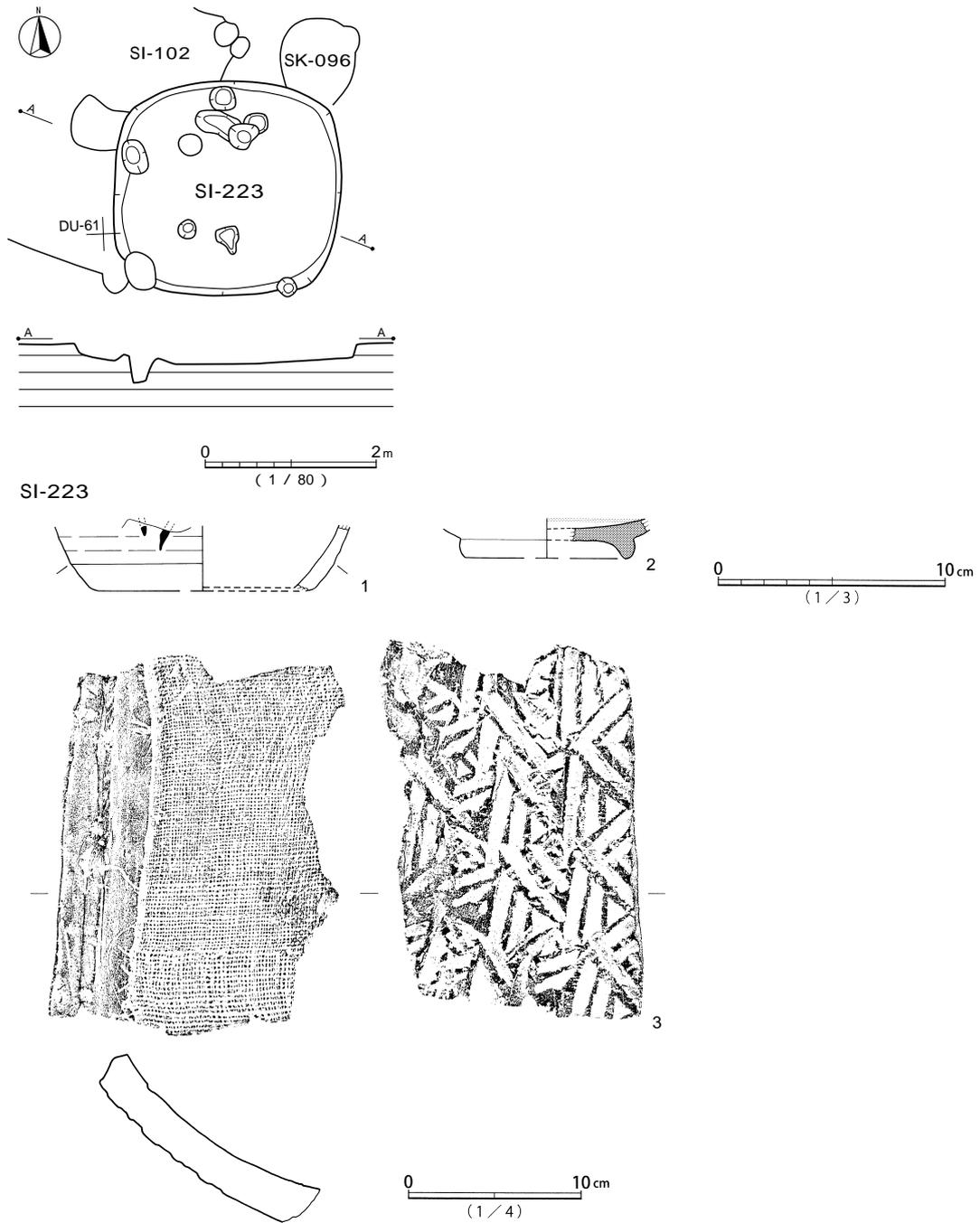


Fig.340 SI-223遺構・出土遺物実測図

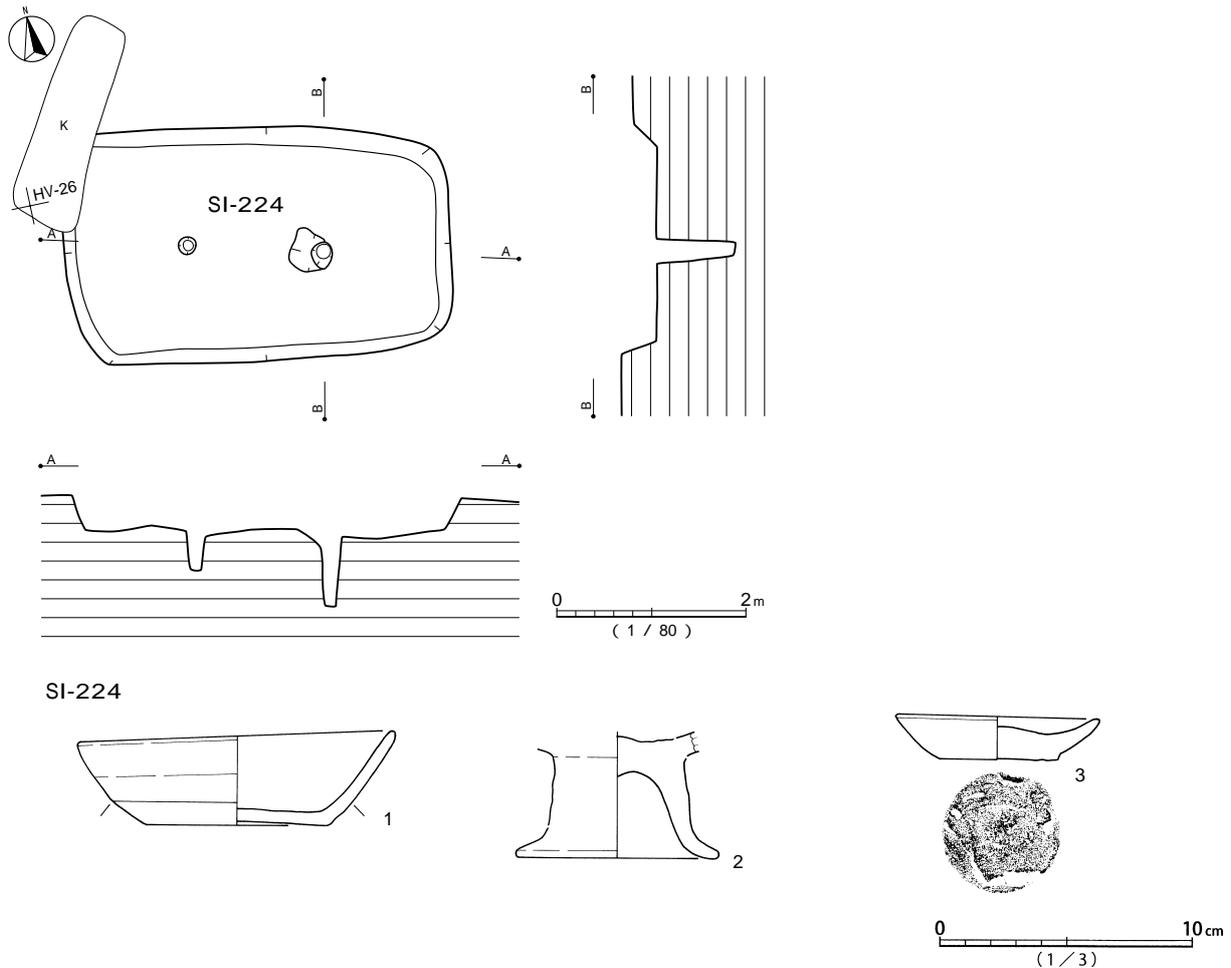


Fig.341 SI-224遺構・出土遺物実測図

遺構 SK-035はBY21に位置する。SI-026と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形で、規模は1.33m × 1.26m、遺構確認面からの深さは0.59mを測る。実測遺物は1～5が土師器で、1は杯、2は足高高台付杯、3は小形杯、4・5は小皿である。

SK-036 (Fig.356・357、PL.81・144・176・192)

遺構 SK-036はBY11に位置する。SI-026と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.33m × 1.28m、遺構確認面からの深さは0.36mを測る。実測遺物は1・2が土師器で、1は杯、2は鉢で底部外面にヘラガキで判読不明の文字もしくは記号が認められる。

SK-037 (Fig.356・357、PL.81・176)

遺構 SK-037はBY22に位置する。SI-027と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.33m × 1.30m、遺構確認面からの深さは0.58mを測る。実測遺物は1が須恵器甕である。

SK-038 (Fig.356・357、PL.81・144・145・233)

遺構 SK-038はBY23に位置する。SI-028、SK-039と重複する。新旧関係は、遺物の様相からSI-028に対し本遺構が新しい。平面形は不整円形を呈し、規模は1.72m × 1.55m、遺構確認面からの深さは1.06mを測る。実測遺物は1～4は土師器で、1は椀、2～4は小皿で、2は内面に黒色処理を施す。5は鉄製刀子である。

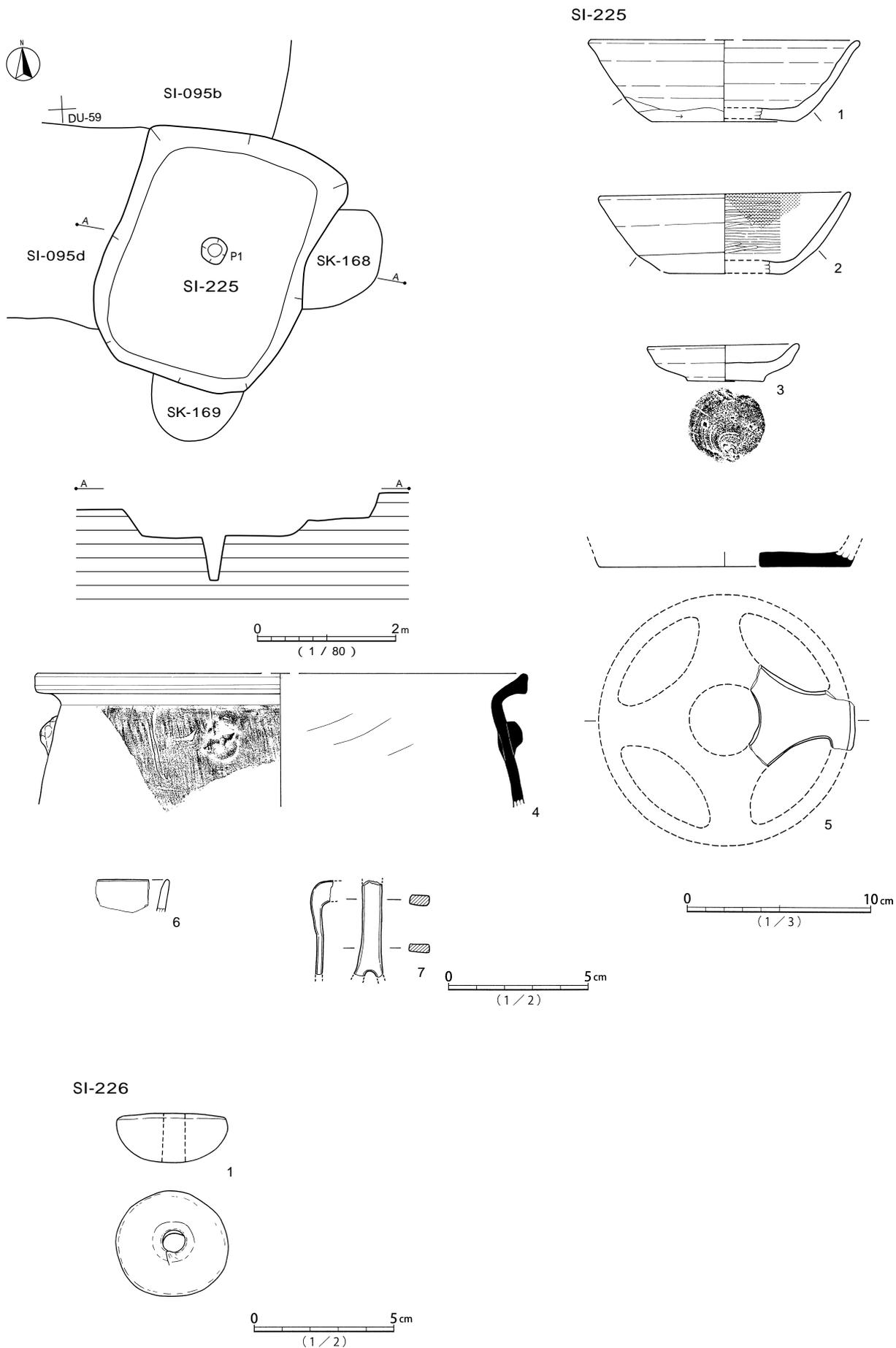


Fig.342 SI-225・226遺構・出土遺物実測図

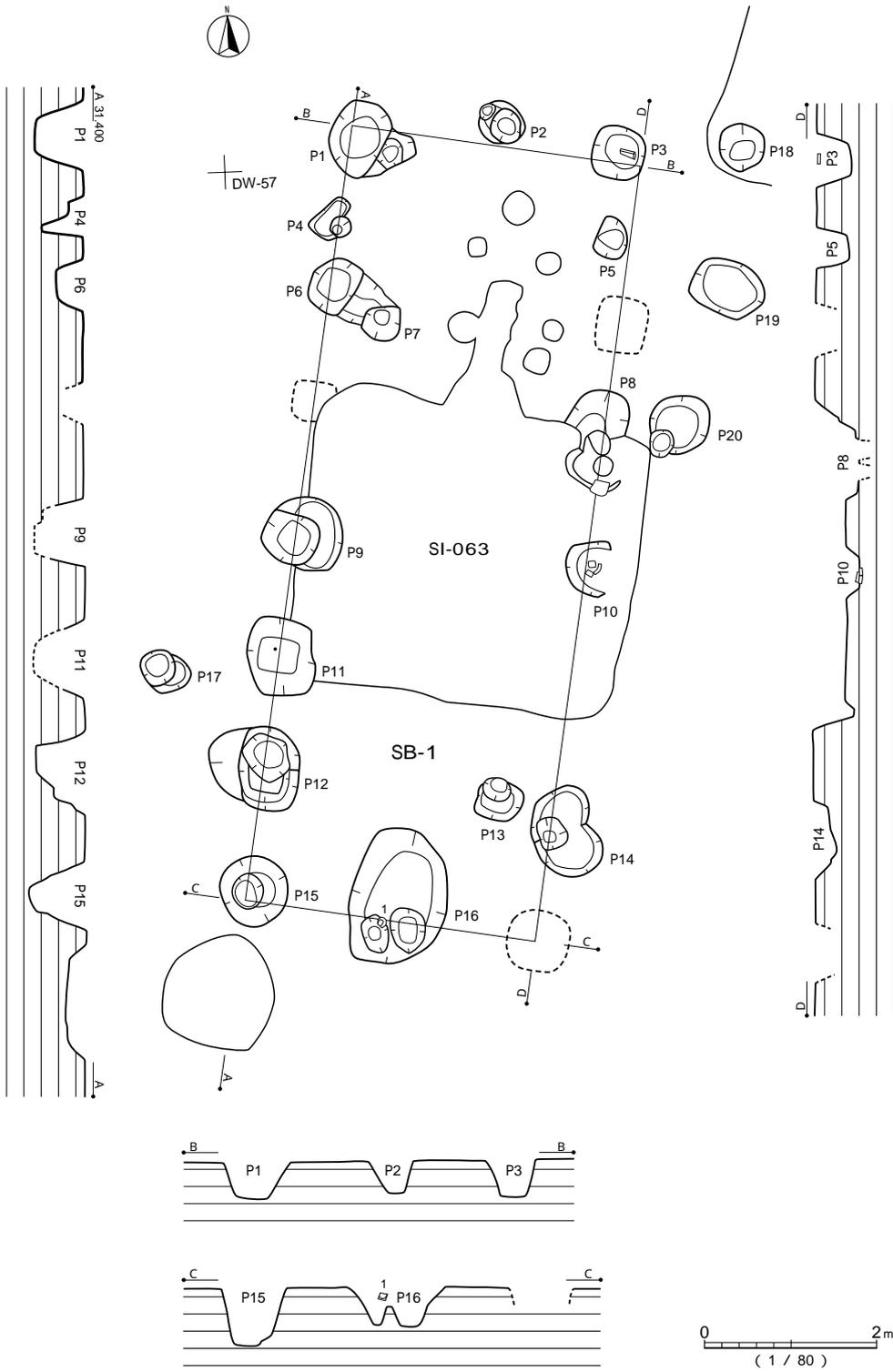


Fig.343 SB-1遺構実測図

SB-1

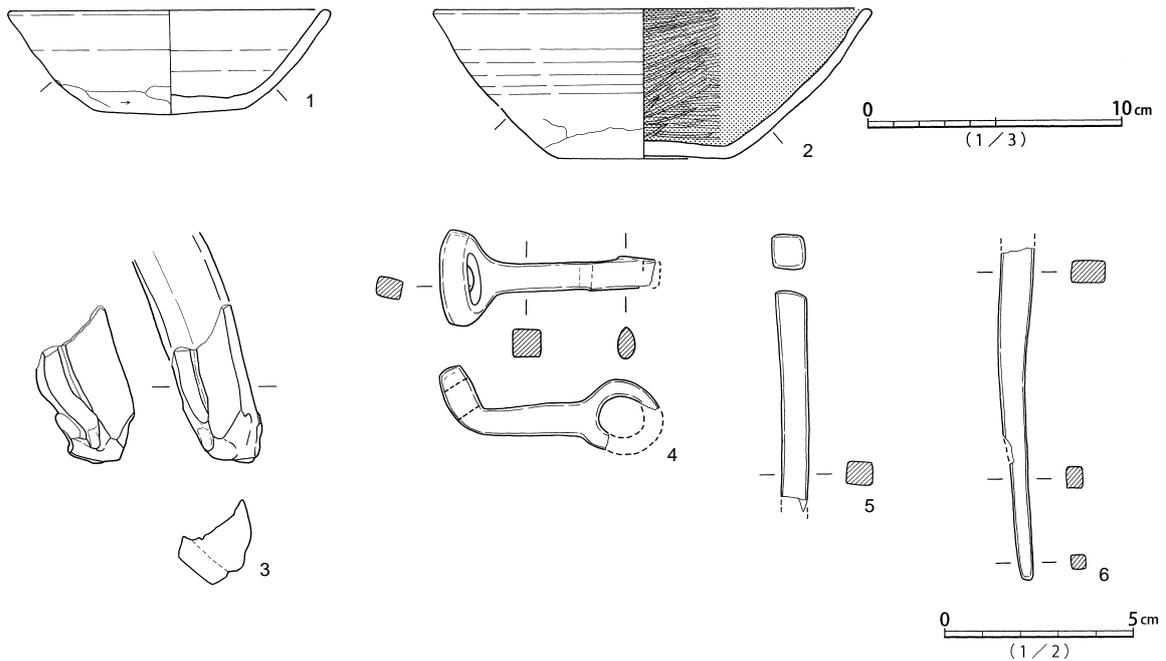


Fig.344 SB-1出土遺物実測図

SK-039 (Fig.356)

遺構 SK-039はBY23に位置する。SI-028、SK-038・040と重複する。新旧関係は不明。平面形は不整形とみられ、規模は1.48m×(0.92)m、遺構確認面からの深さは0.43mを測る。実測遺物は無い。

SK-040 (Fig.356、PL.81)

遺構 SK-040はBY23に位置する。SI-028、SK-038・039と重複する。新旧関係はSI-028に対しては本遺構が新しい。平面形は不整形を呈し、規模は1.42m×1.21m、遺構確認面からの深さは0.40mを測る。実測遺物は無い。

SK-041a・b (Fig.356・358、PL.226)

遺構 SK-041a・bはBY21に位置する。図面上ではa・bの範囲は判別しにくい。SI-027と重複するが新旧関係は不明。不明平面形は不整形を呈し、規模は041aが(1.10)m×1.00m、遺構確認面からの深さは0.24m、041bが(1.70)m×1.14、遺構確認面からの深さは0.24を測る。実測遺物は1が石器である。

SK-042a・b (Fig.356)

遺構 SK-042a・bはBX59に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は042aが(1.42)m×1.05m、遺構確認面からの深さは0.14mを測る。実測遺物は無い。042bが(1.77)m×1.40m、遺構確認面からの深さは0.14mを測る。

SK-043 (Fig.356・358、PL.81・145)

遺構 SK-043はCW01に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は(1.39)m×(1.30)m、遺構確認面からの深さは不明。実測遺物1・2が土師器で、1は椀、2は小形杯である。

SK-044 (Fig.356、PL.238)

遺構 SK-044はCW01に位置する。SI-062と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、

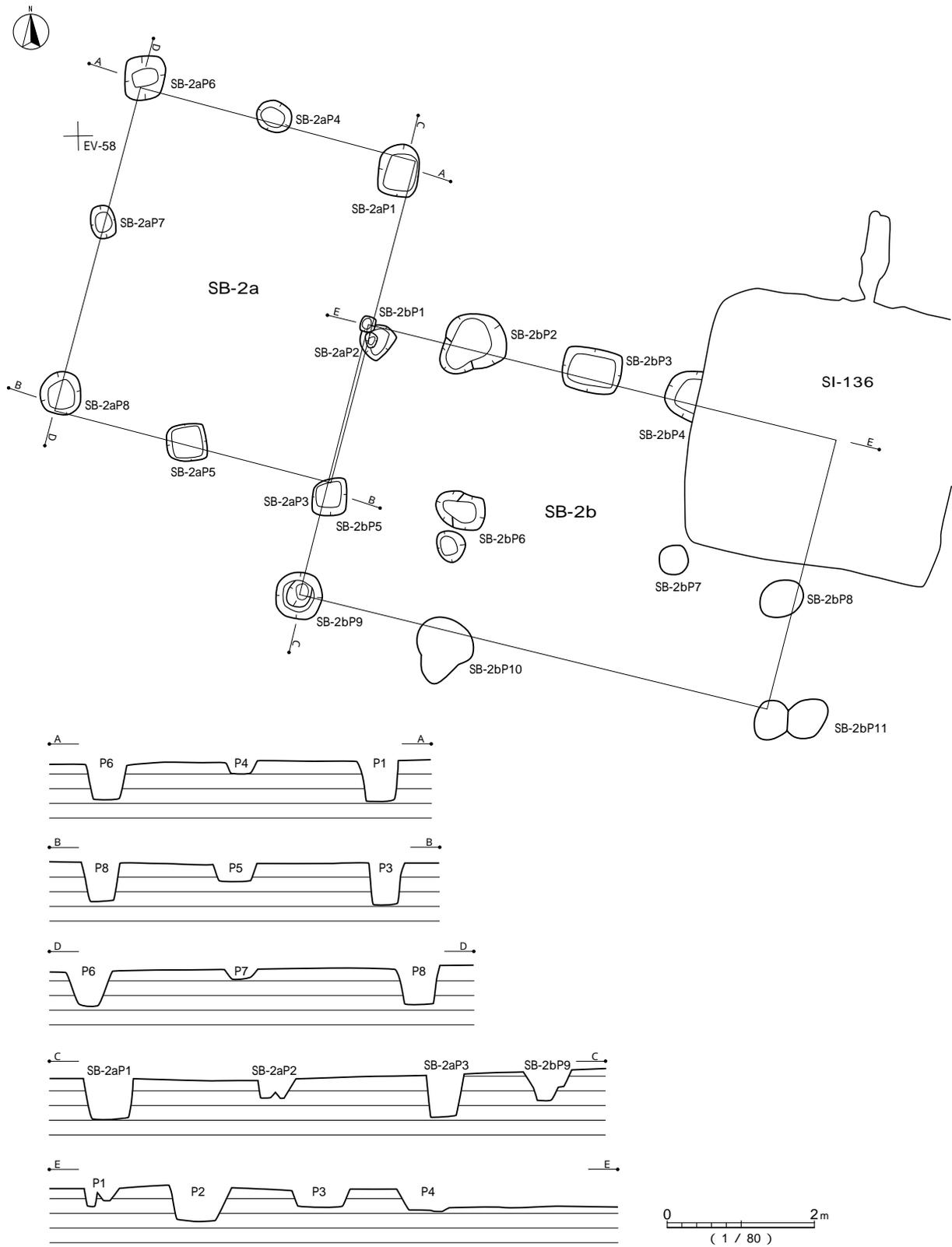


Fig.345 SB-2遺構実測図

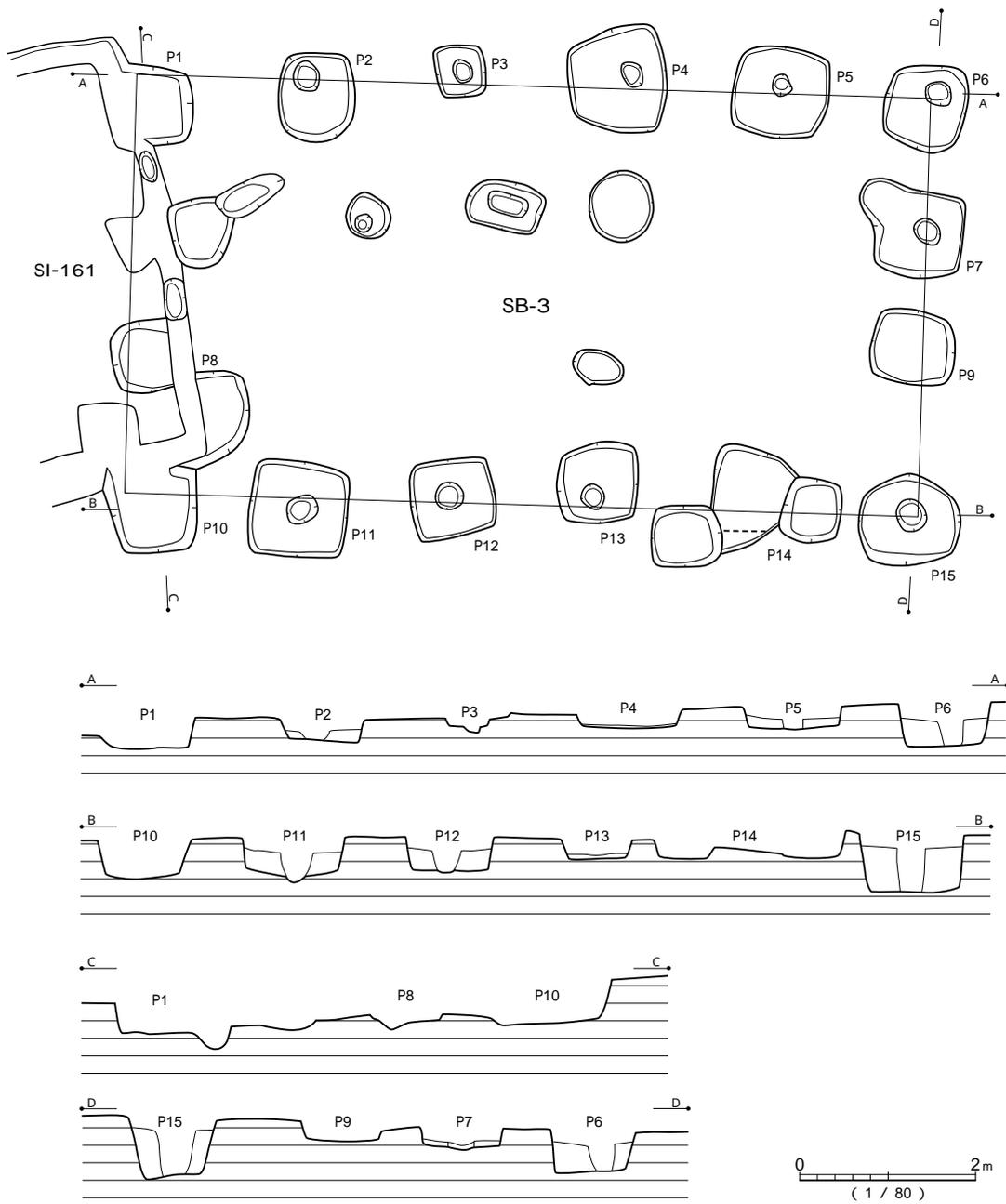


Fig.346 SB-3遺構実測図

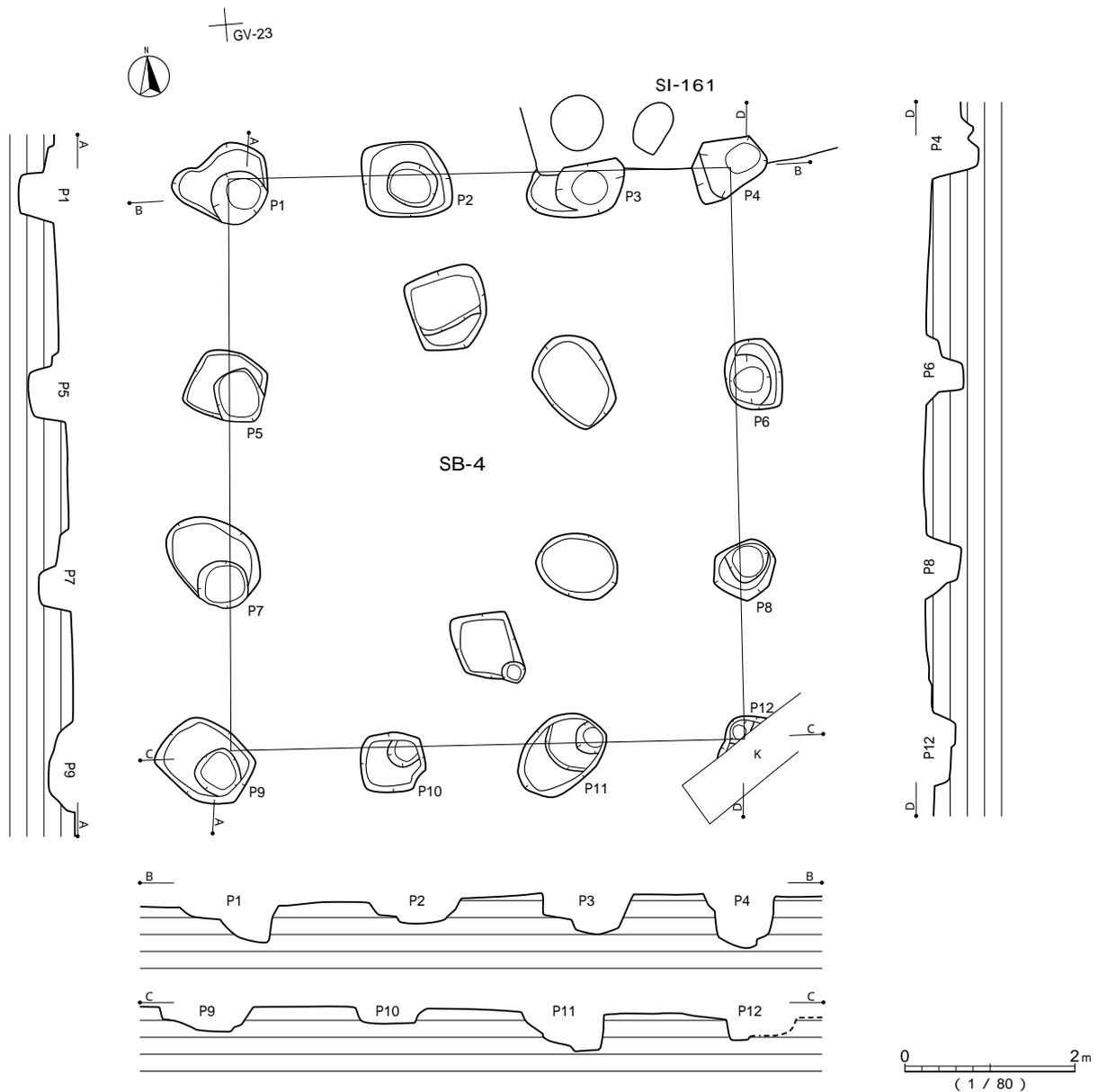


Fig.347 SB-4遺構実測図

規模は(1.93)m×(1.05)m、遺構確認面からの深さは0.16mを測る。実測遺物は無い。

SK-045 (Fig.356・358、PL.176)

遺構 SK-045はCW02に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は(1.32)m×(1.09)m、遺構確認面からの深さは不明。実測遺物は1が灰釉陶器椀である。

SK-046a・b・c (Fig.359、PL.81)

遺構 SK-046a・b・cはBX26に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模はSK-046aが2.18m×1.22m、遺構確認面からの深さは0.37m、SK-046bが1.61m×1.08m、遺構確認面からの深さは0.19m、SK-046cが(0.84)m×0.84m、遺構確認面からの深さは0.34mを測る。実測遺物は無い。

SK-047 (Fig.359、PL.82)

遺構 SK-047はBX17に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は0.78m×

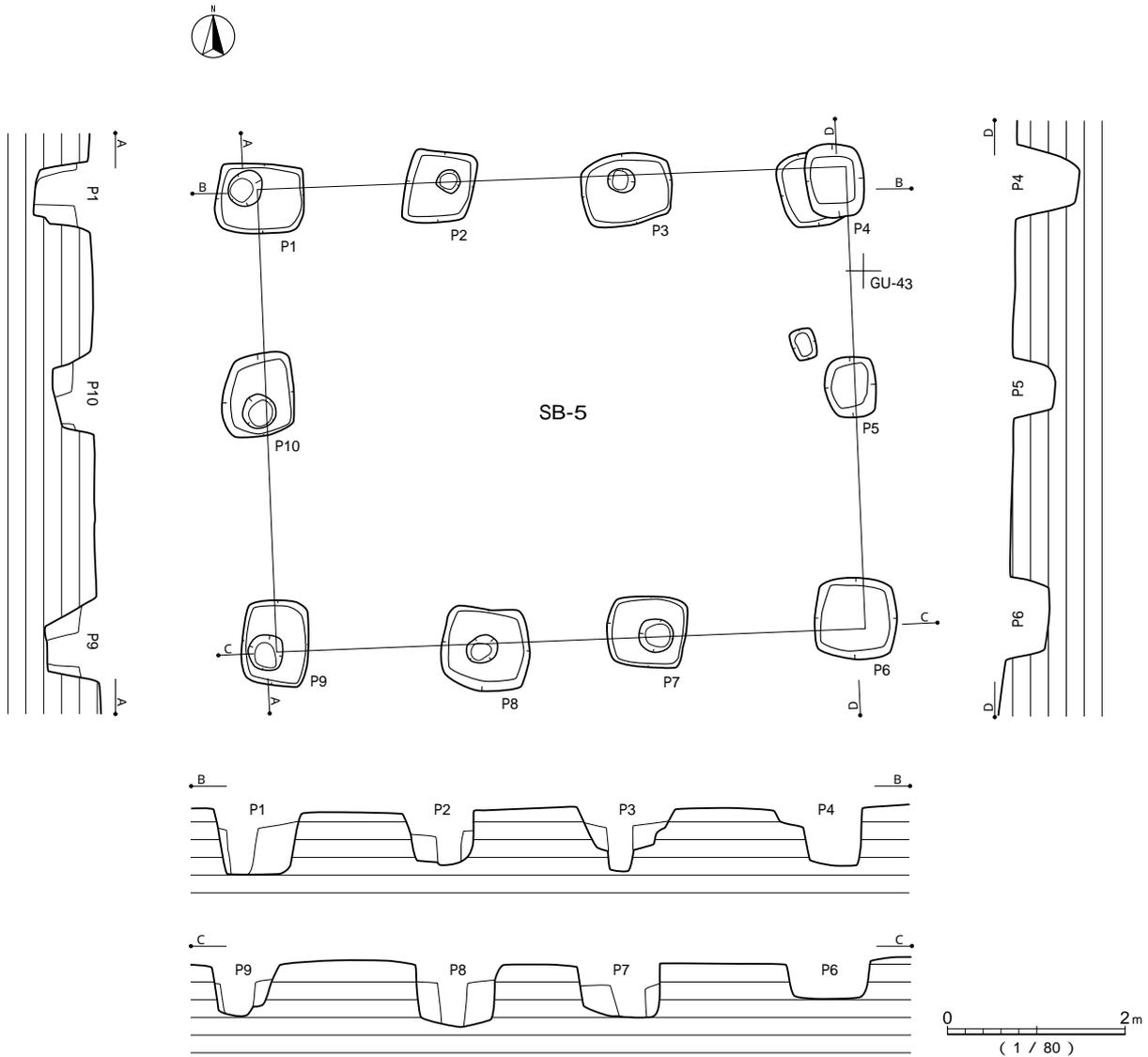


Fig.348 SB-5遺構実測図

0.77m、遺構確認面からの深さは0.12mを測る。実測遺物は無い。

SK-048 (Fig.359、 PL.82・145)

遺構 SK-048は BX37に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は1.05m × 0.94m、遺構確認面からの深さは0.27mを測る。実測遺物は1～3が土師器で、1は杯、2・3は小皿である。

SK-049 (Fig.359、 PL.82)

遺構 SK-049は BX37に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は1.30m × 1.10m、遺構確認面からの深さは0.79mを測る。実測遺物は無い。

SK-050 (Fig.359、 PL.82)

遺構 SK-050は CX37に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈しピットが多く含まれる。規模は1.15m × 0.94m、遺構確認面からの深さは0.30mを測る。実測遺物は無い。

SK-051a・b (Fig.359)

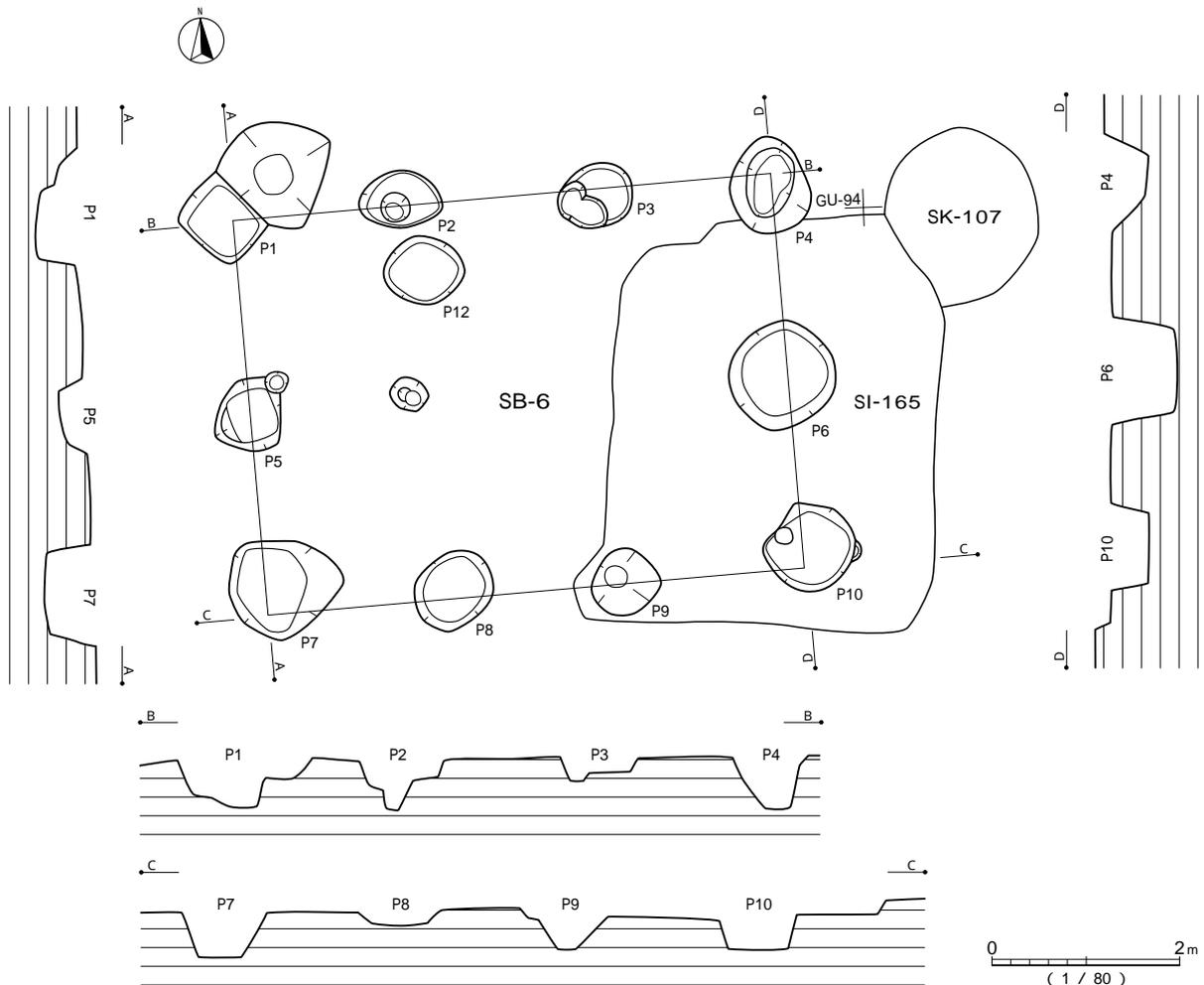


Fig.349 SB-6遺構実測図

SK-051a・bはCX37に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形で、規模はSK-051aが0.90m × 0.76m、遺構確認面からの深さは0.39m、SK-051bが1.08m × 0.95m、遺構確認面からの深さは0.26mを測る。実測遺物は無い。

SK-052 (Fig.359)

SK-052はBX73に位置する。他遺構との重複はないが攪乱を受けている。平面形は不整形とみられ、規模は(1.50)m × (1.00)m、遺構確認面からの深さは0.19mを測る。実測遺物は無い。

SK-053a・b (Fig.359、PL.82・195)

SK-053a・bはBX65に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模はSK-053aが(1.10)m × 0.93m、遺構確認面からの深さは0.03m、SK-053bが1.31m × 1.10m、遺構確認面からの深さは0.20mを測る。出土遺物は1が土製支脚である。

SK-054 (Fig.360、PL.145)

SK-054はCX91に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は0.93m × 0.87m、遺構確認面からの深さは0.26mを測る。1は足高高台付杯。

SK-055 (Fig.78・360・361、PL.82・83・145・160・226・227・189)

SK-055はCW26に位置する。SI-050のカマド煙道部と重複し、新旧関係は、出土遺物から本遺構が新

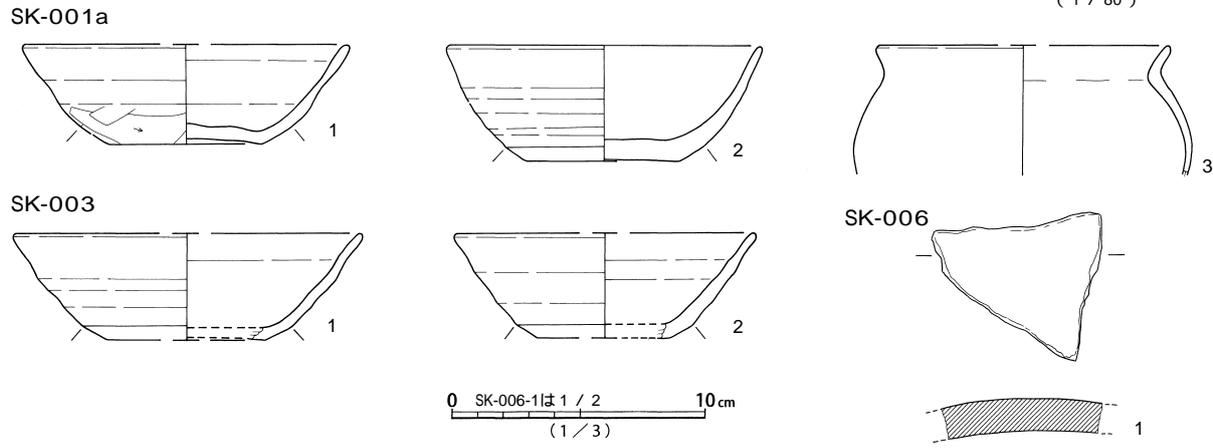
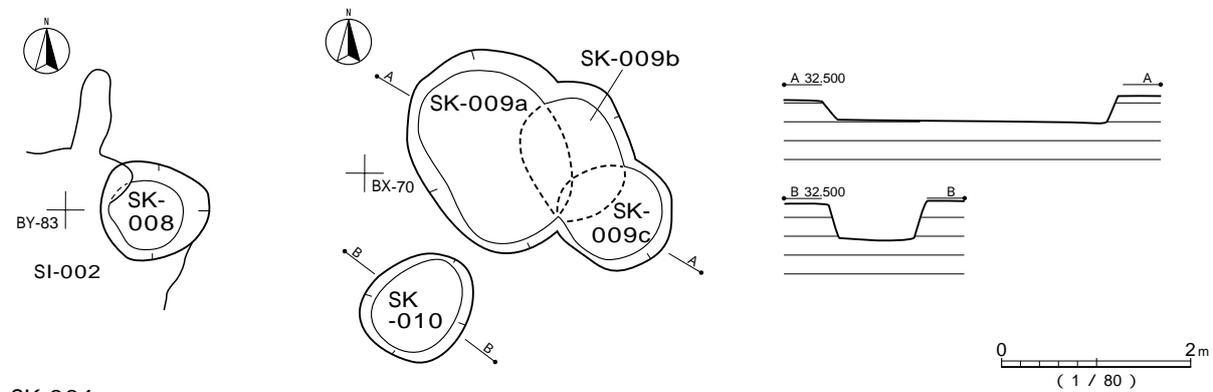
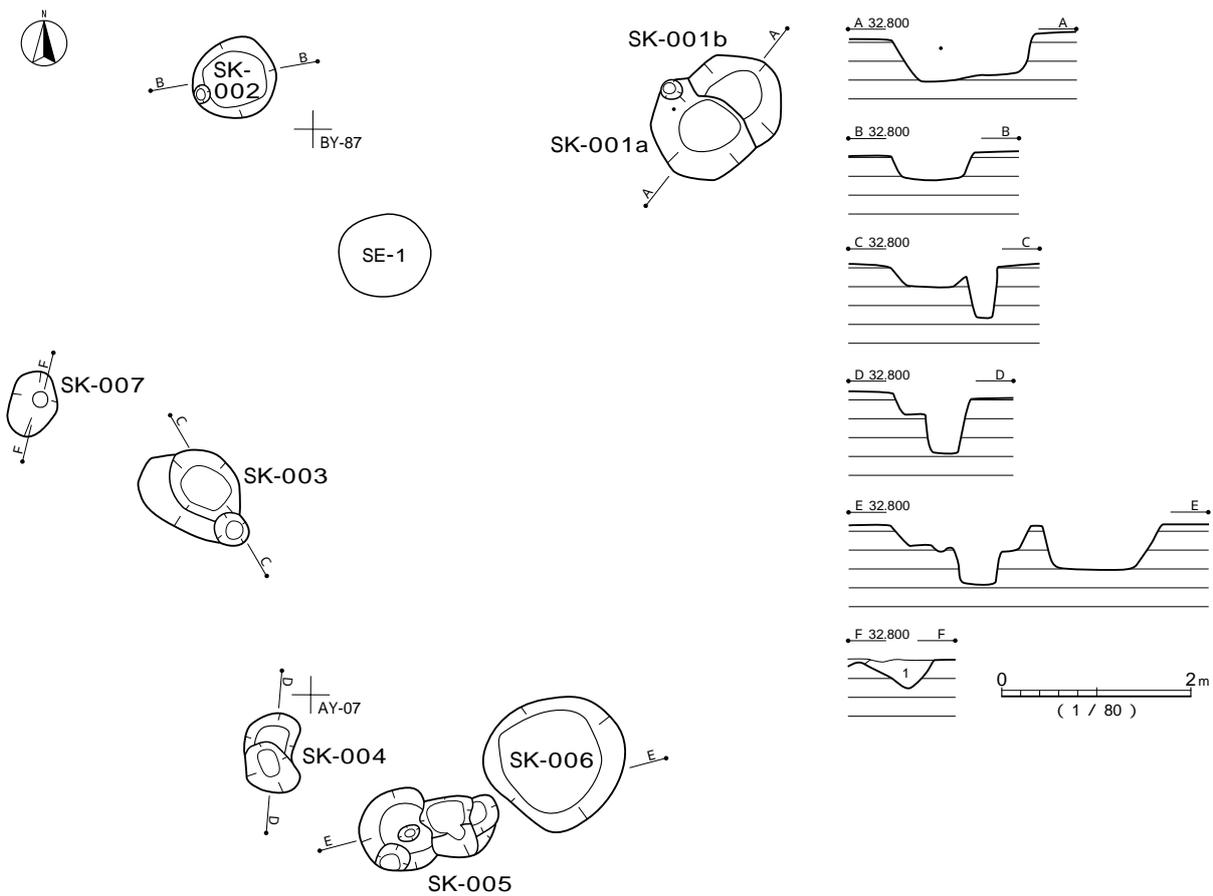


Fig.350 SK-001 ~ 010遺構・出土遺物実測図

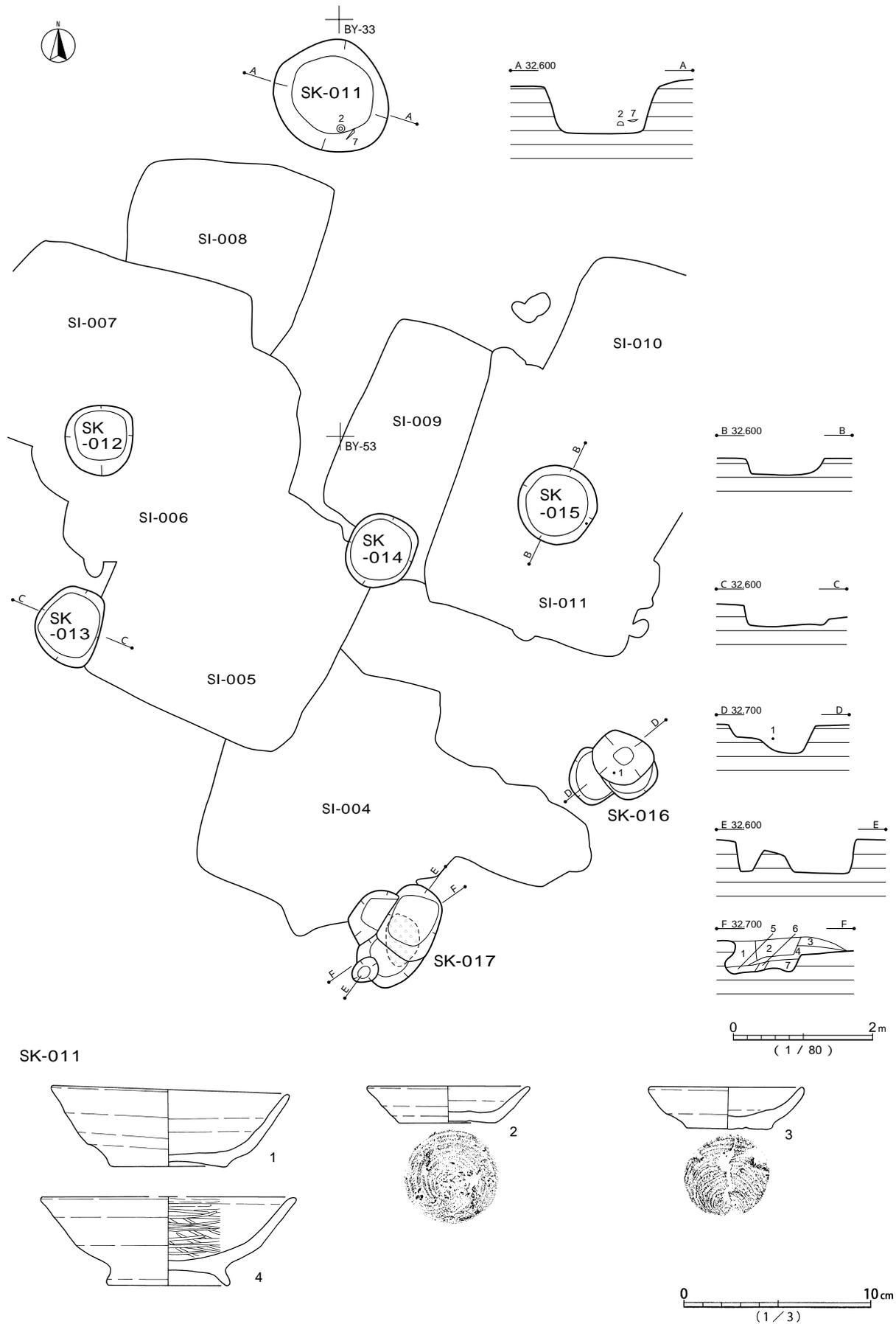


Fig.351 SK-011 ~ 017遺構・出土遺物実測図

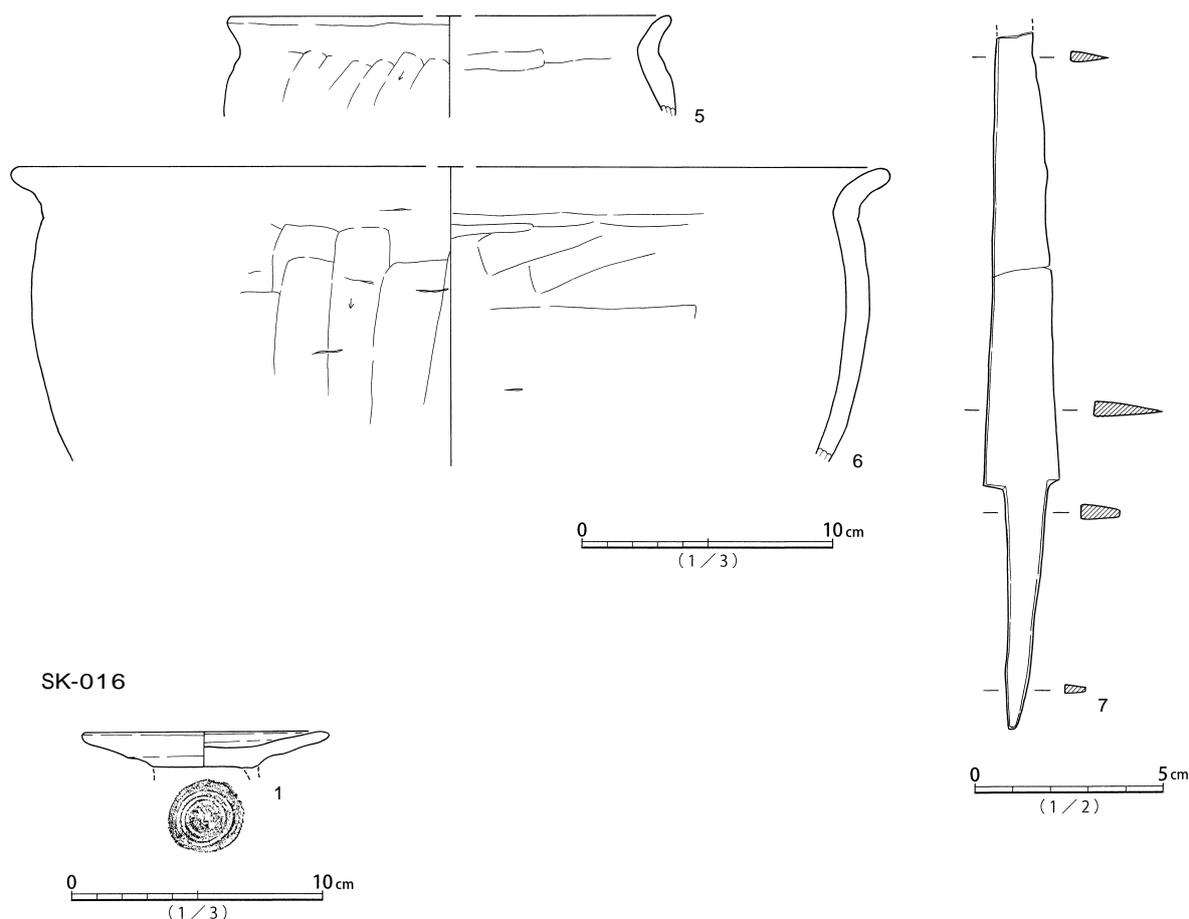


Fig.352 SK-011・016出土遺物実測図

しいとみられる。規模は0.57m × 0.53m、遺構確認面からの深さは0.48mを測る。出土遺物は1・2が土師器杯、3が灰釉陶器平瓶、4～8は磨石で他に礫が34個体出土している。

SK-056 (Fig.360)

SK-056はCW36に位置する。SI-050と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形とみられ、規模は(0.80)m × (0.77)m、遺構確認面からの深さは0.35mを測る。出土遺物は無い。

SK-057 (Fig.360)

SK-057はBZ21に位置する。SI-044カマド煙道先端部と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.28m × 1.20m、遺構確認面からの深さは0.32mを測る。出土遺物はない。

SK-058 (Fig.360)

SK-058はCW80に位置する。SS-1と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.70 m × 1.06m、遺構確認面からの深さは0.24mを測る。出土遺物は無い。

SK-059 (Fig.360)

SK-059はCW22に位置する。SI-060eと重複するが新旧関係は不明。規模は(1.23)m × 1.03m、遺構確認面からの深さは0.19mを測る。出土遺物は無い。

SK-060 (Fig.360)

SK-060はCW05に位置する。SI-061と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形とみられ、規模は(1.19)m × (1.19)m、遺構確認面からの深さは0.08mを測る。出土遺物は無い。

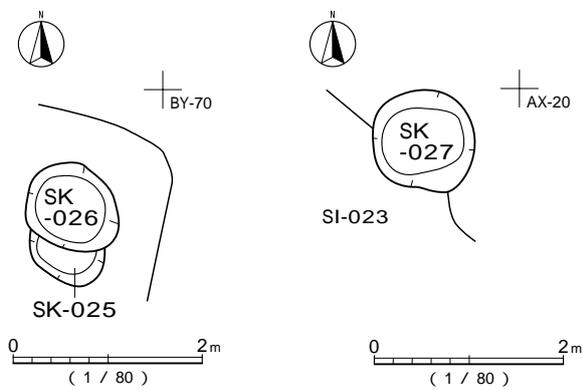
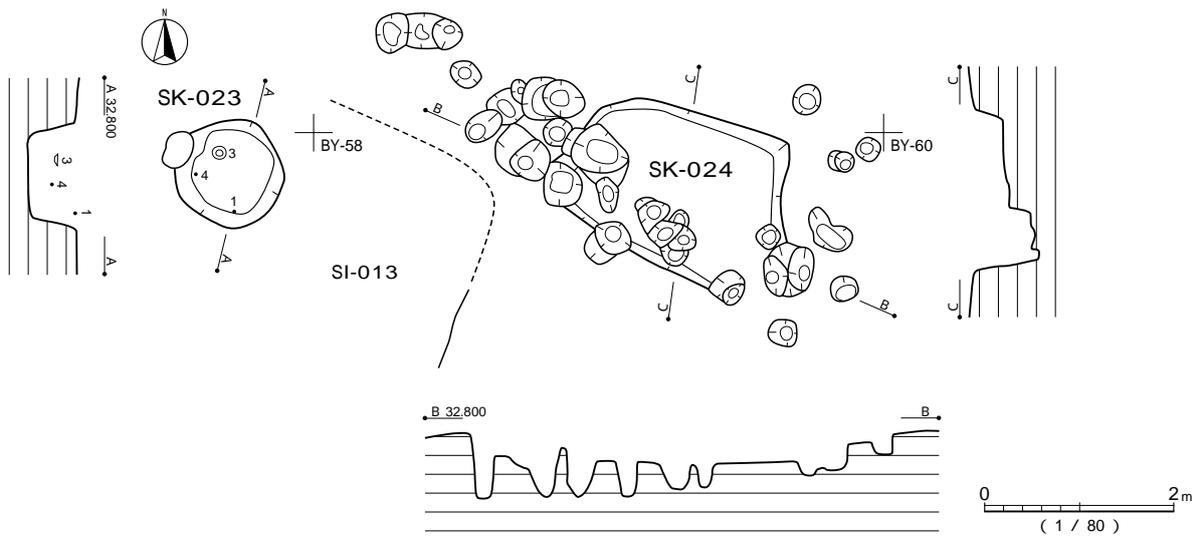
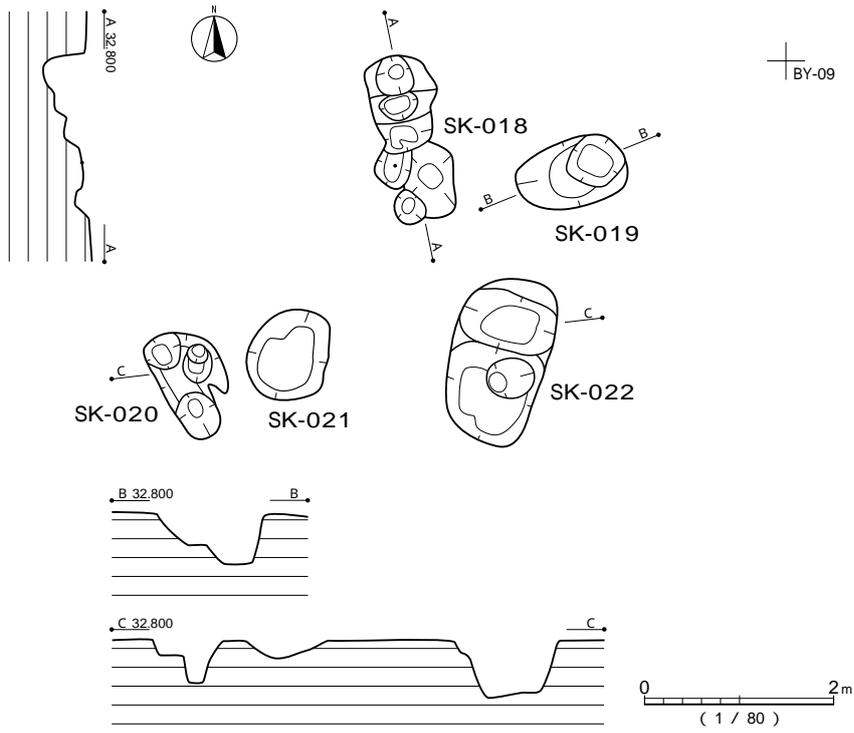


Fig.353 SK-018 ~ 027遺構実測図

SK-061a・b (Fig.360)

SK-061a・bはCW05に位置する。SI-061と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模はSK-061aが1.81m × 1.61m、SK-061bが(1.48m) × 1.21m、共に遺構確認面からの深さは不明。出土遺物は無い。

SK-062 (Fig.360)

SK-062はCW24に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は1.12m × 1.11m、遺構確認面からの深さは0.28mを測る。出土遺物は無い。

SK-063 (Fig.360)

SK-063はCW24に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は0.85m × 0.76m、遺構確認面からの深さは0.08mを測る。出土遺物は無い。

SK-064a・b・c (Fig.360)

SK-064a・b・cはCW34に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模はSK-064aが1.71m × 1.30m、遺構確認面からの深さは0.47m、SK-064bは規模が長軸0.96m、遺構確認面からの深さは不明、SK-064cは規模が0.90m × (1.00)m、遺構確認面からの深さは0.34mを測る。出土遺物は無い。

SK-065 (Fig.360)

SK-065はCW34に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形で、規模は1.01m × 0.88m、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。出土遺物は無い。

SK-066 (Fig.360・361、PL.83・145)

SK-066はCV40に位置する。他遺構との重複はない。平面形は方形を呈し、規模は1.31m × 1.45m、遺構確認面からの深さは0.30mを測る。出土遺物は1が土師器椀で内面に黒色処理を施し、覆土上層から出土している。

SK-067 (Fig.360)

SK-067はDV44に位置する。SI-071と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形呈し、規模は0.77m × 0.71m、遺構確認面からの深さは不明である。出土遺物は無い。

SK-068 (Fig.360)

SK-068はDX32に位置する。SI-066と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は0.87m × 0.81m、遺構確認面からの深さは不明。出土遺物は無い。

SK-069 (Fig.362)

SK-069はCW44に位置する。他遺構との重複はない。平面形は方形で規模は1.63m × 1.17m、遺構確認面からの深さは0.45mを測る。出土遺物は無い。

SK-070 (Fig.362、PL.83・145・176・233)

SK-070はCW54に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整楕円形を呈し、規模は1.77m × 1.15m、遺構確認面からの深さは0.49mを測る。出土遺物は1・2が土師器で、1が杯、2が小形椀で円周に黒色処理を施し、覆土上層からの出土、3が緑釉陶器椀、4が板状鉄製品である。

SK-071a・b (Fig.362・363、PL.83・145・176)

SK-071a・bはCW55に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模はSK-071aが

1.32m × 1.22m、遺構確認面からの深さは0.37mを測る。出土遺物は1・2が土師器で、1は小形杯で覆土上層からの出土、2は台付鉢、3は須恵器甕である。SK-071bは規模が(0.94)m × (0.82)m、遺構確認面からの深さは0.14mを測る。

SK-072 (Fig.362)

SK-072はCW55に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.34m × 1.19m、遺構確認面からの深さは0.40mを測る。出土遺物は図面に記載されるが、実物が確認できない。

SK-073 (Fig.362・363、PL.145)

SK-073はCW46に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.08m × 0.91m、遺構確認面からの深さは0.32mを測る。出土遺物は1が土師器杯で内面に黒色処理を施す。

SK-074 (Fig.362)

SK-074はCW56に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は0.94m × 0.80m、遺構確認面からの深さは0.24mを測る。出土遺物は図面に記載されるが、実物が確認できない。

SK-075 (Fig.362)

SK-075はCW56に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は0.75m × 0.74m、遺構確認面からの深さは0.31mを測る。出土遺物は無い。

SK-076 a(Fig.362・363、PL.83・145)・b(Fig.362)

SK-076a・bはCW65に位置する。他遺構との重複はない。SK-076aは平面形が不整形円形を呈し、規模は1.25m × 1.24m、遺構確認面からの深さは0.51mを測る。SK-076bは規模が(1.35)m × 1.27m、遺構確認面からの深さは0.26mを測る。出土遺物は1が土師器碗で内面に黒色処理を施す。SK-076a上層から出土している。

SK-077 (Fig.364)

SK-077はDW74に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形方形を呈し、規模は1.03m × 0.63m、遺構確認面からの深さは0.24mを測り、底面にピットを1箇所伴う。出土遺物は無い。

SK-078 (Fig.364、PL.84・145)

SK-078はDW83に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形でピットが集合した様相を呈する。規模は1.40m × 1.03m、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。出土遺物は1が土師器杯である。

SK-079 (Fig.364・365、PL.84・222)

SK-079はDW83に位置する。他遺構との重複はない。平面形は隅丸方形を呈し、規模は1.63m × 1.49m、遺構確認面からの深さは0.28mを測る。出土遺物は1・2が均整唐草文軒平瓦である。

SK-080 (Fig.364)

SK-080はDW94に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形で、規模は1.01m × 0.68m、遺構確認面からの深さは0.43mを測る。出土遺物は無い。

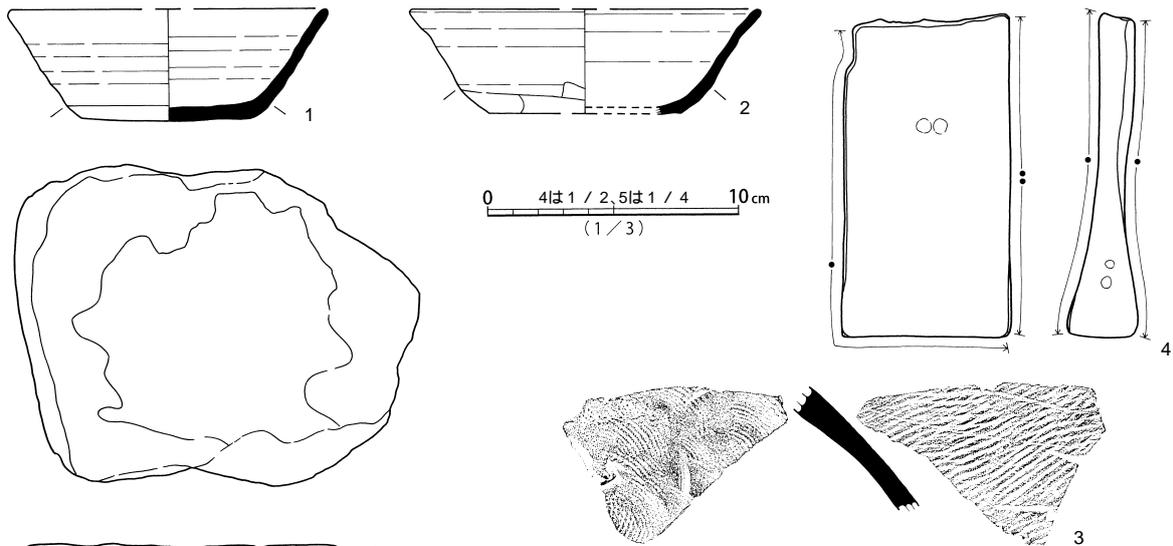
SK-081 (Fig.364・365、PL.84・145)

SK-081はDW75に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は1.95m × 1.00m、遺構確認面からの深さは0.33mを測る。出土遺物は1・2が土師器小形杯である。

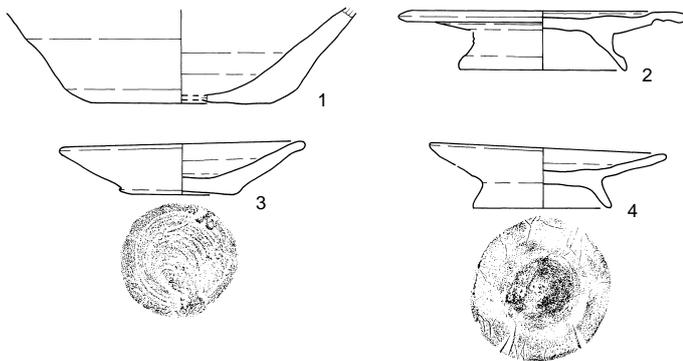
SK-082 (Fig.364)

SK-082はDW75に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は0.80m × 0.75m、

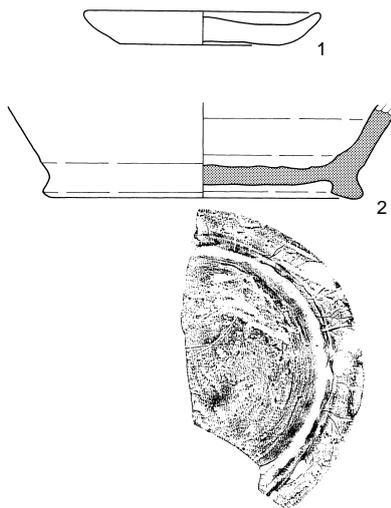
SK-018



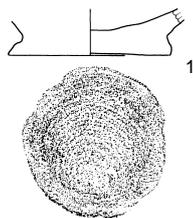
SK-023



SK-024



SK-020



0 10cm (1/3)

Fig.354 SK-018・020・023・024出土遺物実測図

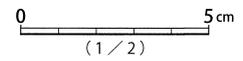
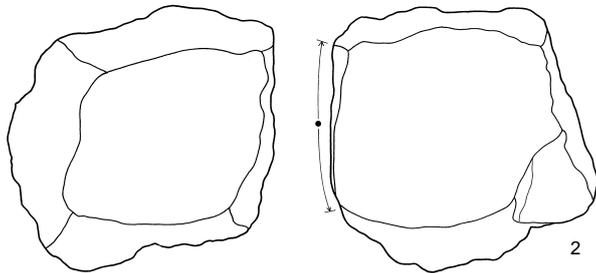
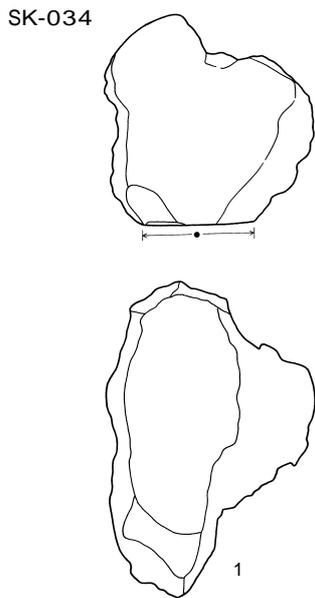
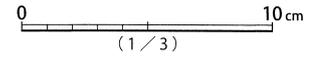
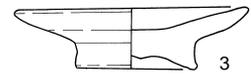
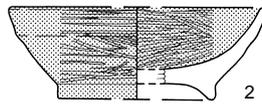
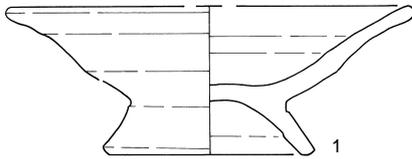
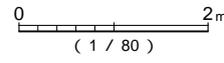
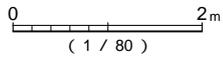
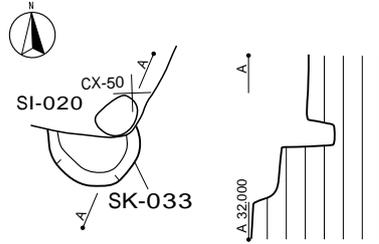
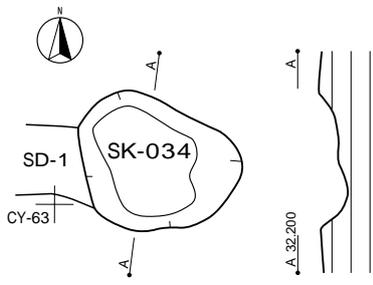
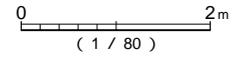
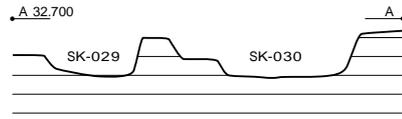
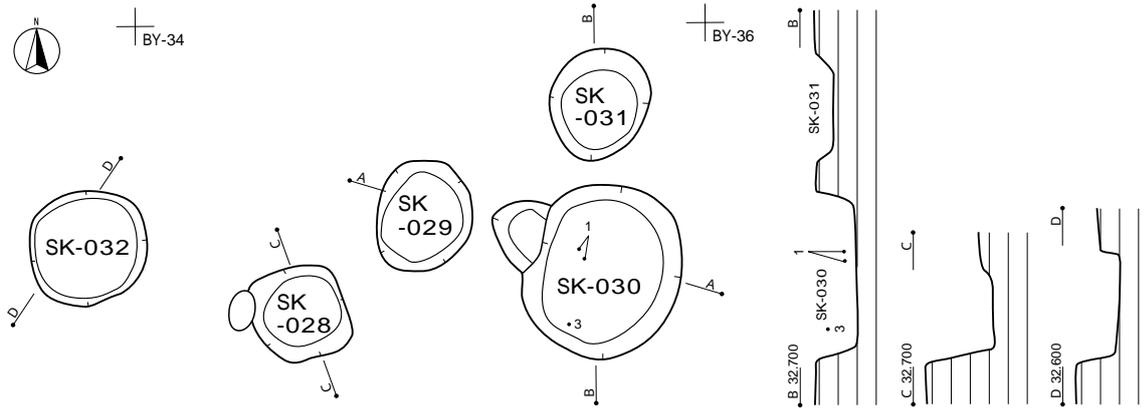


Fig.355 SK-028 ~ 034遺構・出土遺物実測図

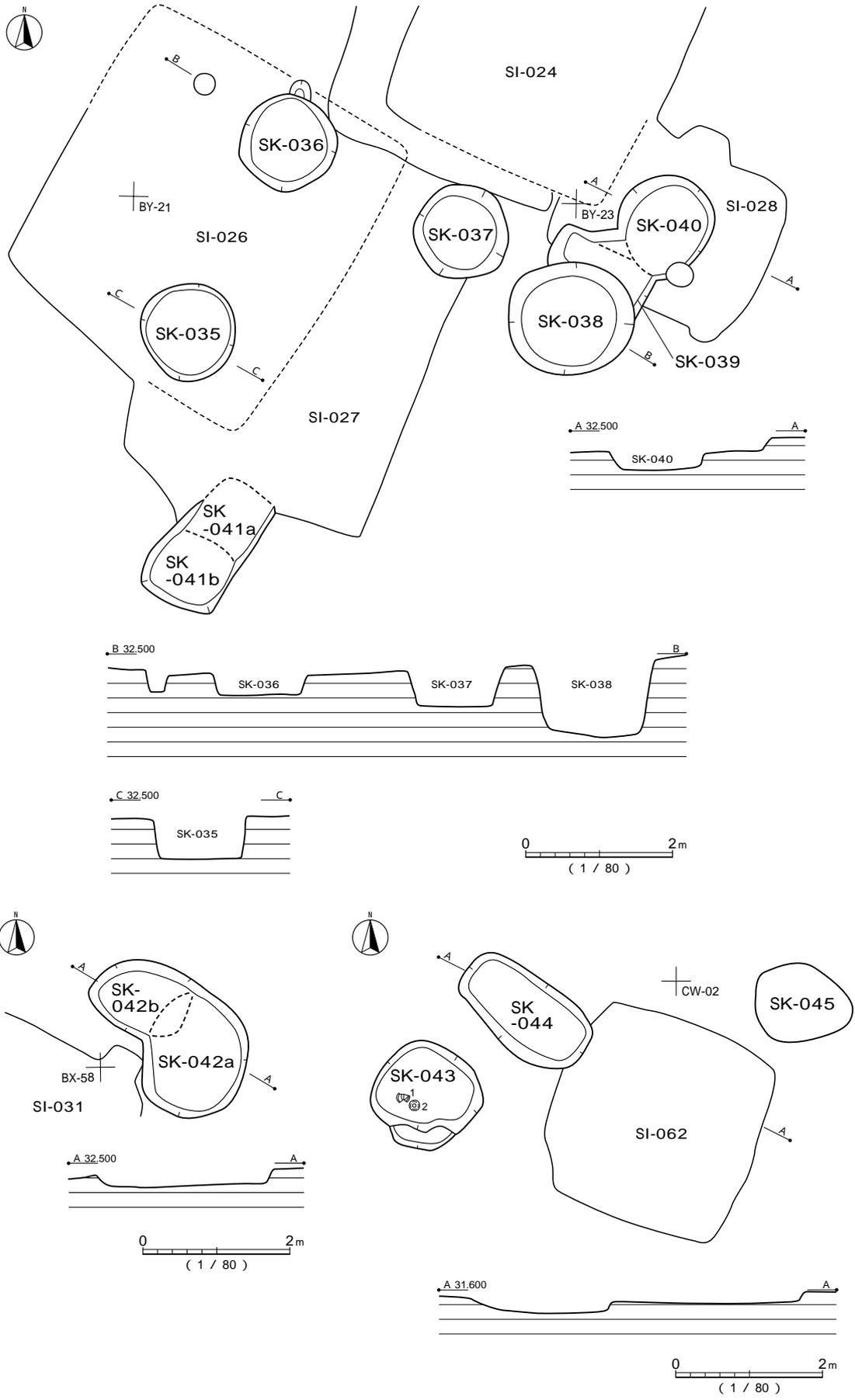


Fig.356 SK-035 ~ 045遺構実測図

遺構確認面からの深さは0.13mを測る。出土遺物は無い。

SK-083 (Fig.364・365、PL.176)

SK-083はDW94に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は1.24m × 1.17 m、遺構確認面からの深さは0.36mを測る。出土遺物は1が灰釉陶器小壺である。

SK-084 (Fig.364)

SK-084はDW94に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は0.78m × 0.74 m、遺構確認面からの深さは0.20mを測る。出土遺物は無い。

SK-085 (Fig.364)

SK-085はDW94に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は0.76m × 0.68 m、遺構確認面からの深さは0.13mを測る。出土遺物は無い。

SK-086 (Fig.364)

SK-086はDW94に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は1.23m × 1.03m、遺構確認面からの深さは0.15mを測る。出土遺物は無い。

SK-087 (Fig.364)

SK-087はDW86に位置する。他遺構との重複はないがSB-1に近接する。平面形は不整円形を呈し、規模は1.33m × 1.28m、遺構確認面からの深さは0.21mを測る。出土遺物は無い。

SK-088 (Fig.364)

SK-088はDV10に位置する。SI-076と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形とみられ、規模は(1.10)m × 1.37m、遺構確認面からの深さは0.30mを測る。出土遺物は無い。

SK-089 (Fig.364)

SK-089はEV99に位置する。他遺構との重複はないが、SI-078bに近接する。平面形は不整円形を呈し、規模は1.53m × 1.37m、遺構確認面からの深さは0.36mを測る。出土遺物は無い。

SK-090 (Fig.366)

SK-090はDV49に位置する。SI-079と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は0.72m × 0.63m、遺構確認面からの深さは0.25mを測る。出土遺物は無い。

SK-091 (Fig.366)

SK-091はDV49に位置する。SI-079と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は0.64m × (0.55)m、遺構確認面からの深さは0.29mを測る。出土遺物は無い。

SK-092 (Fig.366)

SK-092はDV49に位置する。SI-079と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は0.90m × 0.90m、遺構確認面からの深さは0.24mを測る。出土遺物は無い。

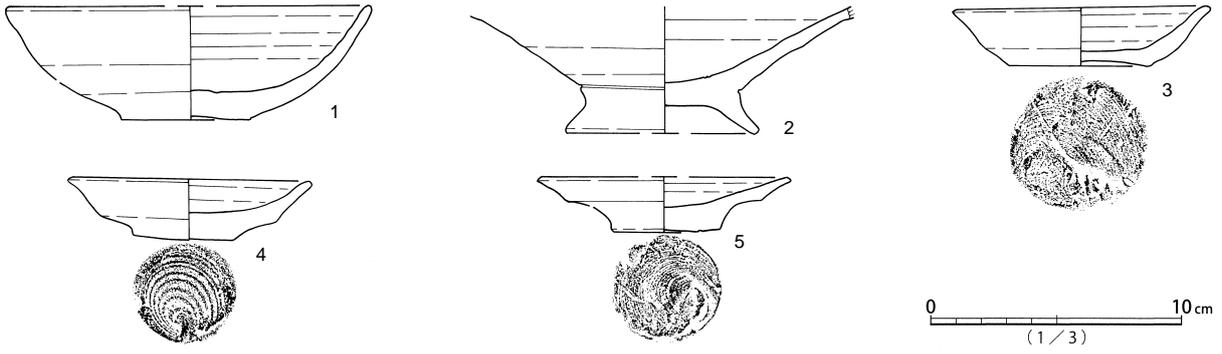
SK-093 (Fig.366)

SK-093はDV49に位置する。SI-079と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は(1.06)m × 0.95m、遺構確認面からの深さは0.24mを測る。出土遺物は無い。

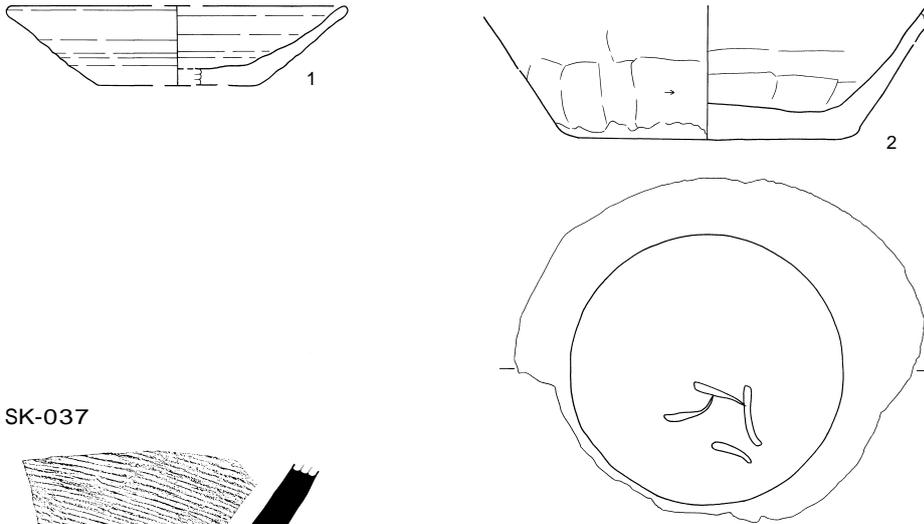
SK-094 (Fig.366)

SK-094はDU35に位置する。SI-092と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は(1.52)m × 1.33m、遺構確認面からの深さは0.09mを測る。出土遺物は無い。

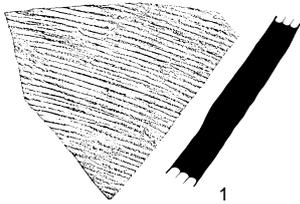
SK-035



SK-036



SK-037



SK-038

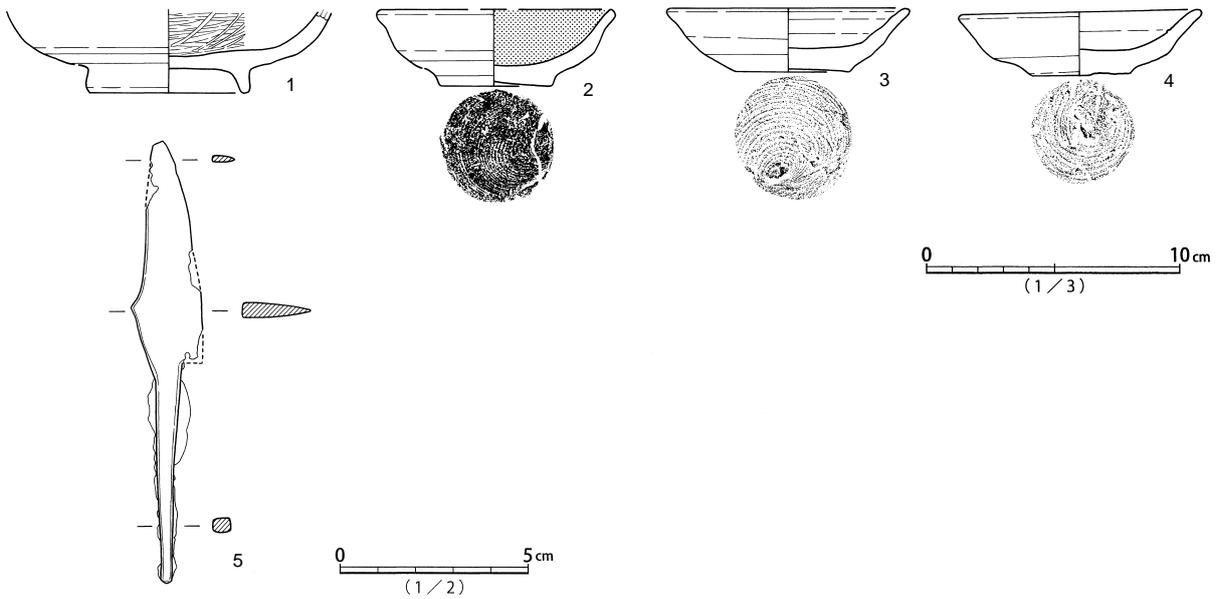


Fig.357 SK-035 ~ 038出土遺物実測図

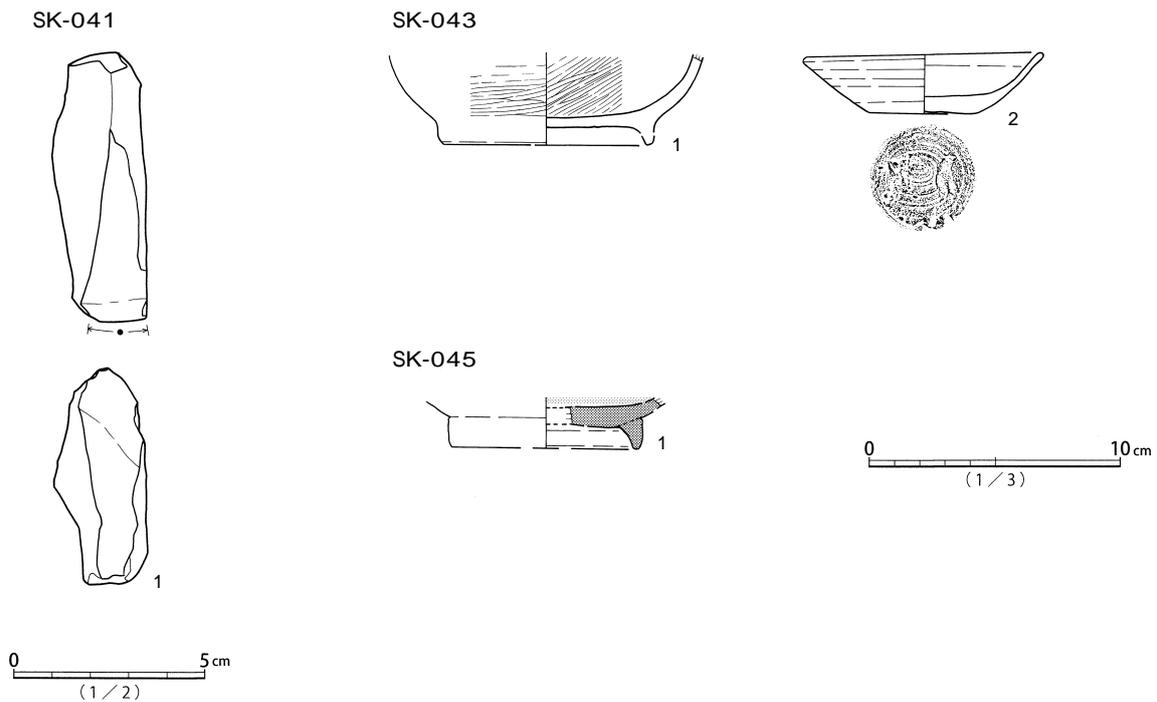


Fig.358 SK-041・043・045出土遺物実測図

SK-095 (Fig.366、PL.145)

SK-095はDU33に位置する。SI-097と重複するが新旧関係はSI-097に対して本遺構は新しいとみられる。平面形は不整形円形を呈し、規模は2.60m × 2.77m、遺構確認面からの深さは0.17mを測る。出土遺物は1が土師器杯で内面に黒色処理を施す。

SK-096 (Fig.366)

SK-096はDU62に位置する。SI-223と重複するが新旧関係は不明。規模は1.06m × 0.76m、遺構確認面からの深さは0.14mを測る。出土遺物は無い。

SK-097 (Fig.366、PL.84)

SK-097はDT70に位置する。他遺構との重複はないがSI-102に近接する。規模は2.07m × 0.97m、遺構確認面からの深さは0.58mを測る。出土遺物は無い。

SK-098 (Fig.366)

SK-098はDU35に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は0.64m × 0.58m、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。出土遺物は無い。

SK-099 (Fig.366)

SK-099はDU45に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は0.91m × 0.81m、遺構確認面からの深さは0.23mを測る。出土遺物は無い。

SK-100 (Fig.366)

SK-100はEW2に位置する。SK-102と重複するが新旧関係は不明。平面形は隅丸の長方形で、規模は5.88m × 2.22m、遺構確認面からの深さは0.27mを測る。出土遺物はSK-101と共通で取り上げられているが、遺構は重複していないので、重複しているSK-102と混同の可能性がある。1・2は土師器小皿で、3は須恵器甕である。

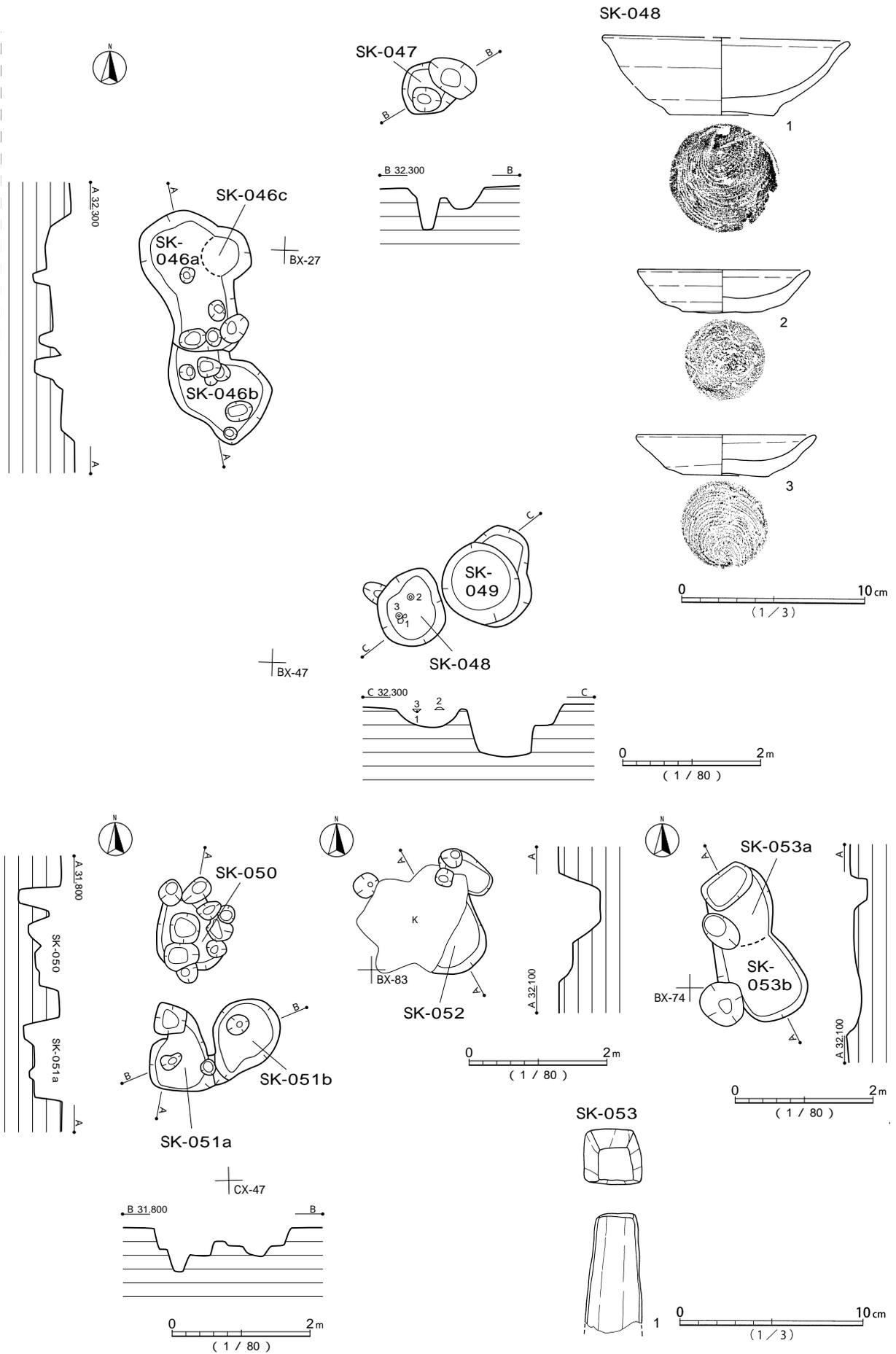


Fig.359 SK-046 ~ 053遺構・出土遺物実測図

SK-101 (Fig.366)

SK-101はEW53に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は1.49m × 1.44 m、遺構確認面からの深さは0.36mを測る。実測遺物はSK-100と共通で取り上げられているが、遺構は重複していないので、SK-102と混同している可能性がある。

SK-100・101一括 (Fig.366、PL.145・176・238)

遺物はSK-100参照。

SK-102 (Fig.366)

SK-102はEW72に位置する。SK-100と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.38m × 1.23m、遺構確認面からの深さは0.26mを測る。実測遺物は無いが、SK-100・101の遺物と混同している可能性がある。

SK-103 (Fig.367)

SK-103はEV77に位置する。SI-135と重複しているが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.47m × 1.41m、遺構確認面からの深さは0.31mを測る。実測遺物は無い。

SK-104 (Fig.367)

SK-104はEV77に位置する。SI-135と重複しているが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.46m × 1.33m、遺構確認面からの深さは0.31mを測る。実測遺物は無い。

SK-105 (Fig.367)

SK-105はEV88に位置する。SI-135カマド煙道部と重複しているとみられるが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.66m × 1.30m、遺構確認面からの深さは0.32mを測る。実測遺物は無い。

SK-106 (Fig.367)

SK-106はEV16に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整方形を呈し、規模は2.23m × 1.93 m、遺構確認面からの深さは0.11mを測る。実測遺物は無い。

SK-107 (Fig.367、PL.84)

SK-107はGU95に位置する。SI-165と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.59m × 1.68m、遺構確認面からの深さは1.00mを測る。実測遺物は無い。

SK-108 (Fig.367、PL.84・145・187・238)

SK-108はFU61に位置する。SI-171bと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈すると見られるが、攪乱を受けている。規模は(1.13)m × 1.01m、遺構確認面からの深さは不明である。実測遺物は1・2が土師器杯で、1は体部外面に墨書が認められるが、判読不明である。

SK-109 (Fig.367)

SK-109はFU42に位置する。SI-171aカマド煙道と重複するが新旧関係は遺構図から本遺構が新しいとしておく。平面形は不整円形を呈し、規模は1.11m × (1.09)m、遺構確認面からの深さは0.23mを測る。実測遺物は無い。

SK-110 (Fig.367)

SK-110はEV75に位置する。SI-137カマド煙道部と重複し、新旧関係は本遺構が新しいとみられる。平面形は不整方形を呈し、規模は1.28m × 1.10m、遺構確認面からの深さは0.33mを測る。実測遺物

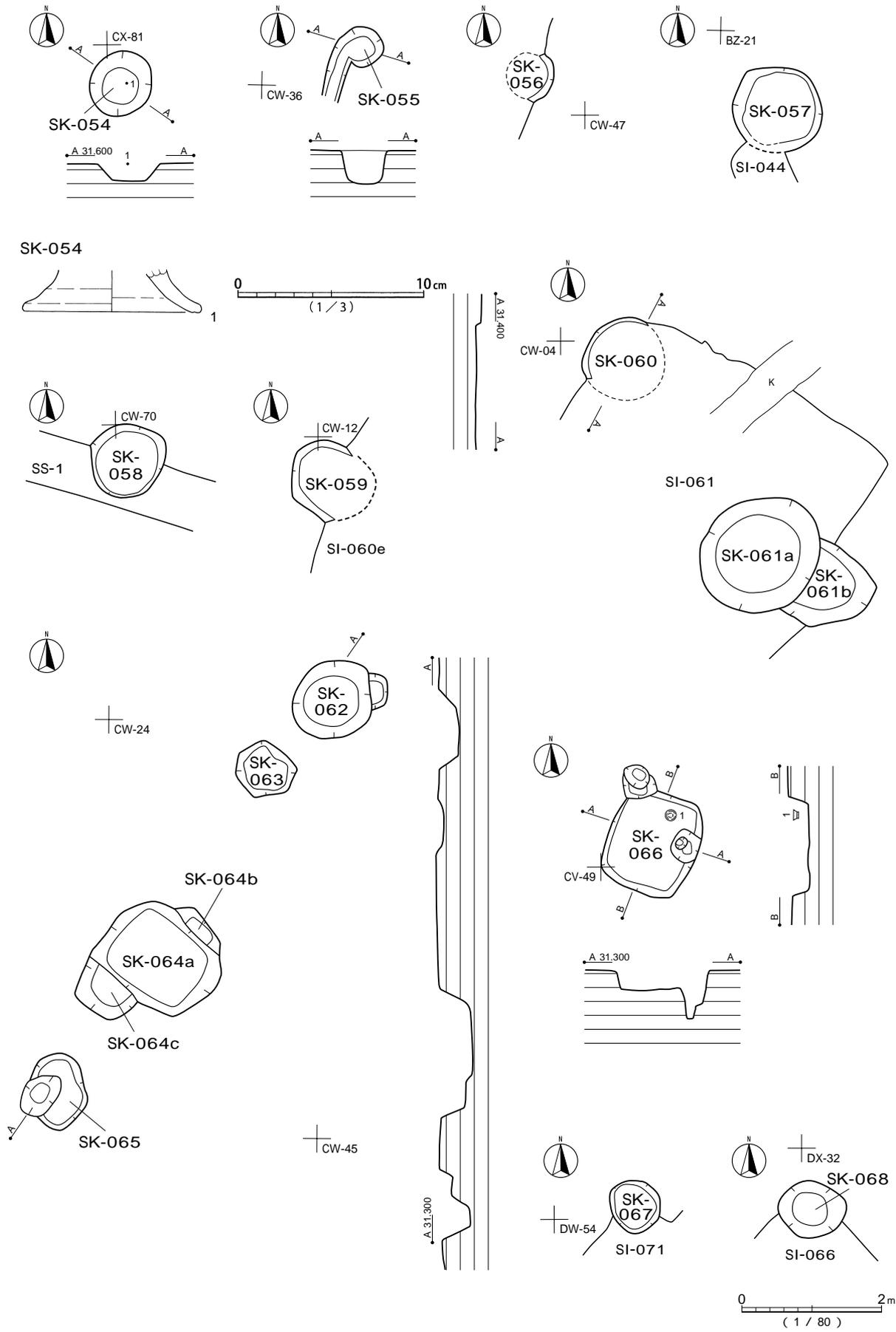


Fig.360 SK-054 ~ 068遺構・出土遺物実測図

は無い。土層は1、暗褐色土で焼土粒・粘土粒混じる 2、暗褐色土で焼土粒混じる 3、黒褐色土で焼土粒混じる 4、暗褐色土で焼土粒混じる 5、焼土である。

SK-111 (Fig.367・368、PL.84・177)

SK-111はFV52に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は0.87m × 0.93 m、遺構確認面からの深さは0.39mを測る。実測遺物は1が常滑大甕である。

SK-112 (Fig.369)

SK-112はFU94に位置する。SI-179aと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.69m × 1.31m、遺構確認面からの深さは0.66mを測る。実測遺物は無い。

SK-113 (Fig.369、PL.85)

SK-113はFU94に位置する。SI-179bと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.49m × 1.25m、遺構確認面からの深さは0.57mを測る。実測遺物は無い。

SK-114 (Fig.369)

SK-114はEU24に位置する。SI-181と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は0.76m × 0.66m、遺構確認面からの深さは不明。実測遺物は無い。

SK-115 (Fig.369・370、PL.145・146・176・227)

SK-115はEU36に位置する。他遺構との重複はないが攪乱を受けている。平面形は不整形を呈し、規模は2.55m × 1.34m、遺構確認面からの深さは0.28mを測る。実測遺物は1～6が土師器で、1は椀で、内面に黒色処理を施す。2は足高高台付杯、3～6は小皿、7は磨石である。

SK-116 (Fig.369)

SK-116はEU34に位置する。SD-5と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は2.23 m × 1.75m、遺構確認面からの深さは0.65mを測る。実測遺物は無い。

SK-117 (Fig.369、PL.85)

SK-117はEU34に位置する。SI-183カマド煙道部と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈するとみられ、規模は(2.60)m × (2.23)m、遺構確認面からの深さは0.08mを測る。実測遺物は無い。

SK-118 (Fig.369)

SK-118はEU65に位置する。SI-184・185と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈するとみられ、規模は(2.20)m × 2.08m、遺構確認面からの深さは0.08mを測る。実測遺物は無い。

SK-119 (Fig.369)

SK-119はEU60に位置する。SI-178a・bと重複し、遺構図から本遺構が新しいとしておく。平面形は不整形を呈し、規模は(1.35)m × 1.22m、遺構確認面からの深さは0.27mを測る。実測遺物は無い。

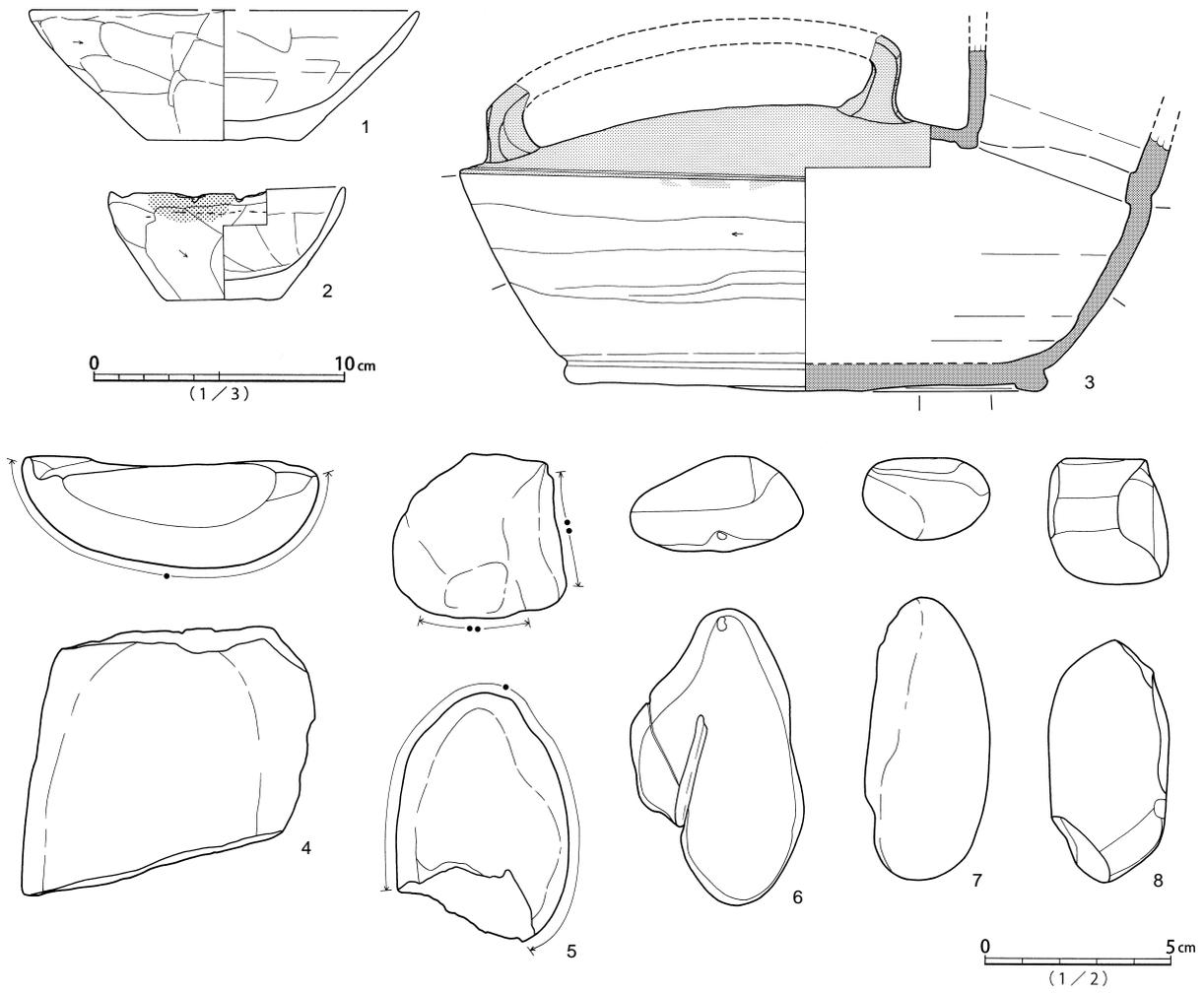
SK-120 (Fig.369)

SK-120はEU60に位置する。SI-178aと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は(0.85)m × 0.77m、遺構確認面からの深さは0.13mを測る。実測遺物は無い。

SK-121 (Fig.369)

SK-121はEU60に位置する。SI-178aと重複し、図面から本遺構が新しいとしておく。平面形は不整形を呈し、規模は(1.22)m × (1.03)m、遺構確認面からの深さは0.20mを測る。出土遺物は無い。

SK-055



SK-066

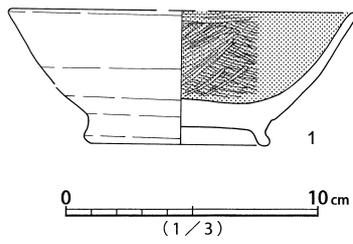


Fig.361 SK-055・066出土遺物実測図

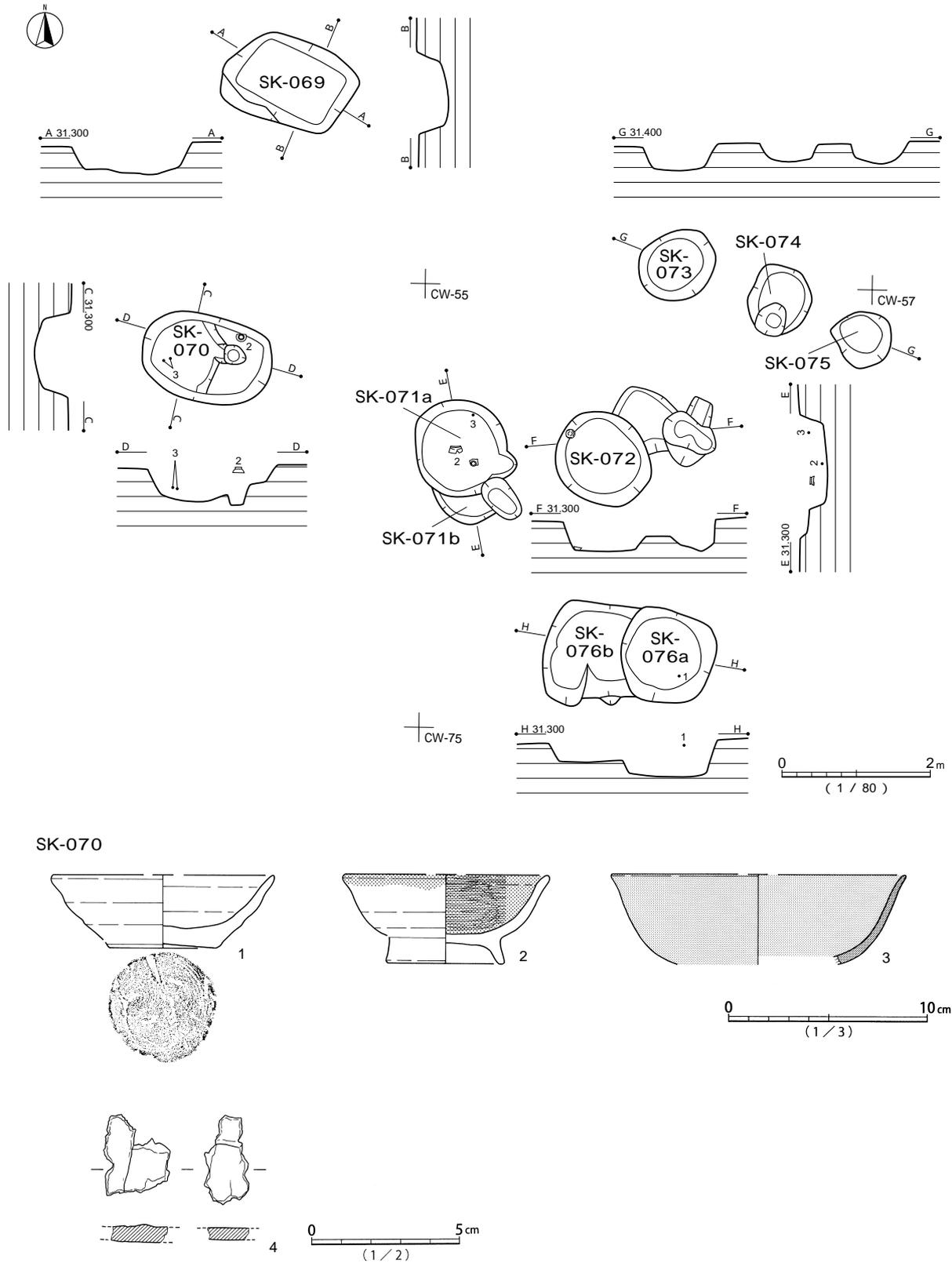
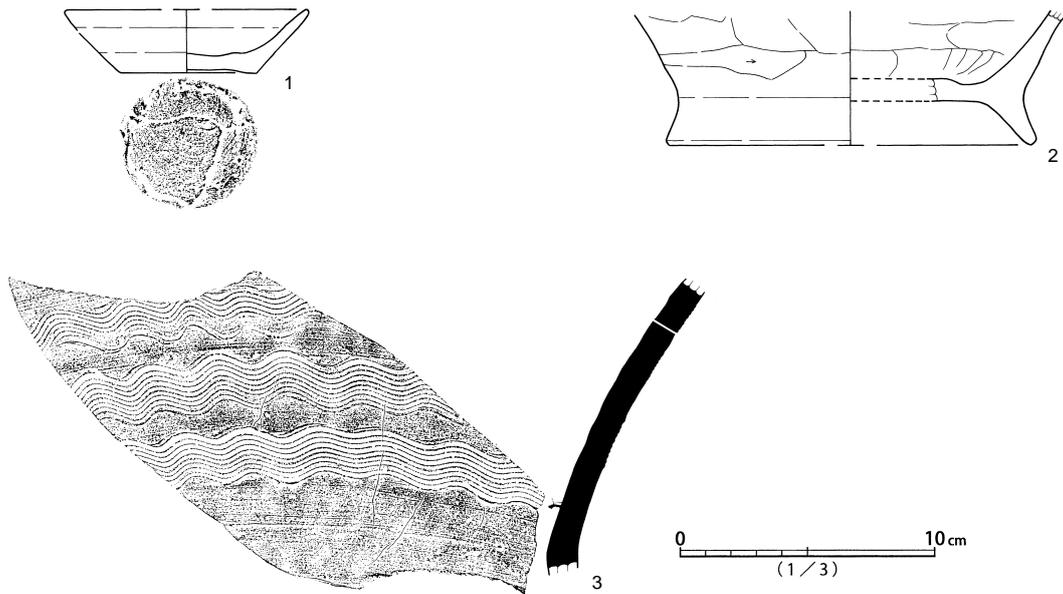
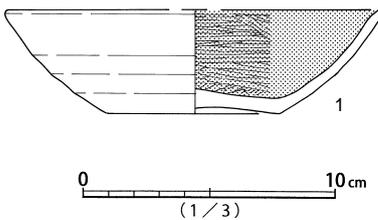


Fig.362 SK-069 ~ 076遺構・出土遺物実測図

SK-071



SK-073



SK-076a

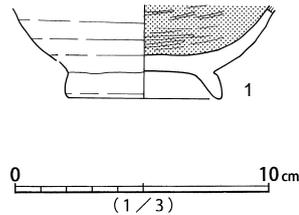


Fig.363 SK-071・073・076出土遺物実測図

SK-122 a (Fig.371、 PL.85)・b (Fig.371、 PL.85・146・176)・c (Fig.371、 PL.85・146)・d (Fig.371、 PL.85)・e (Fig.371、 PL.85)

SK-122aは EU49に位置する。SK-122bと重複する。新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.08m × 1.01m、遺構確認面からの深さは0.11mを測る。実測遺物は無い。

SK-122bは EU49に位置する。SK-122a・cと重複する。新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.33m × 1.27m、遺構確認面からの深さは0.41mを測る。実測遺物は1～3が土師器で、1・2は椀で内面に黒色処理を施し、3は小皿である。

SK-122cは EU49に位置する。SK-122b・dと重複する。新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.23m × 1.03m、遺構確認面からの深さは0.33mを測る。実測遺物は1が土師器小皿で覆土上層から出土している。

SK-122dは EU49に位置する。SK-122c・eと重複する。新旧関係は不明。平面形は不整形円形とみられ、規模は1.03m × 0.99m、遺構確認面からの深さは0.28mを測る。実測遺物は無い。

SK-122eは EU49に位置する。SK-122dと重複する。新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.17m × (1.06)m、遺構確認面からの深さは0.24mを測る。実測遺物は無い。

SK-123 (Fig.371)

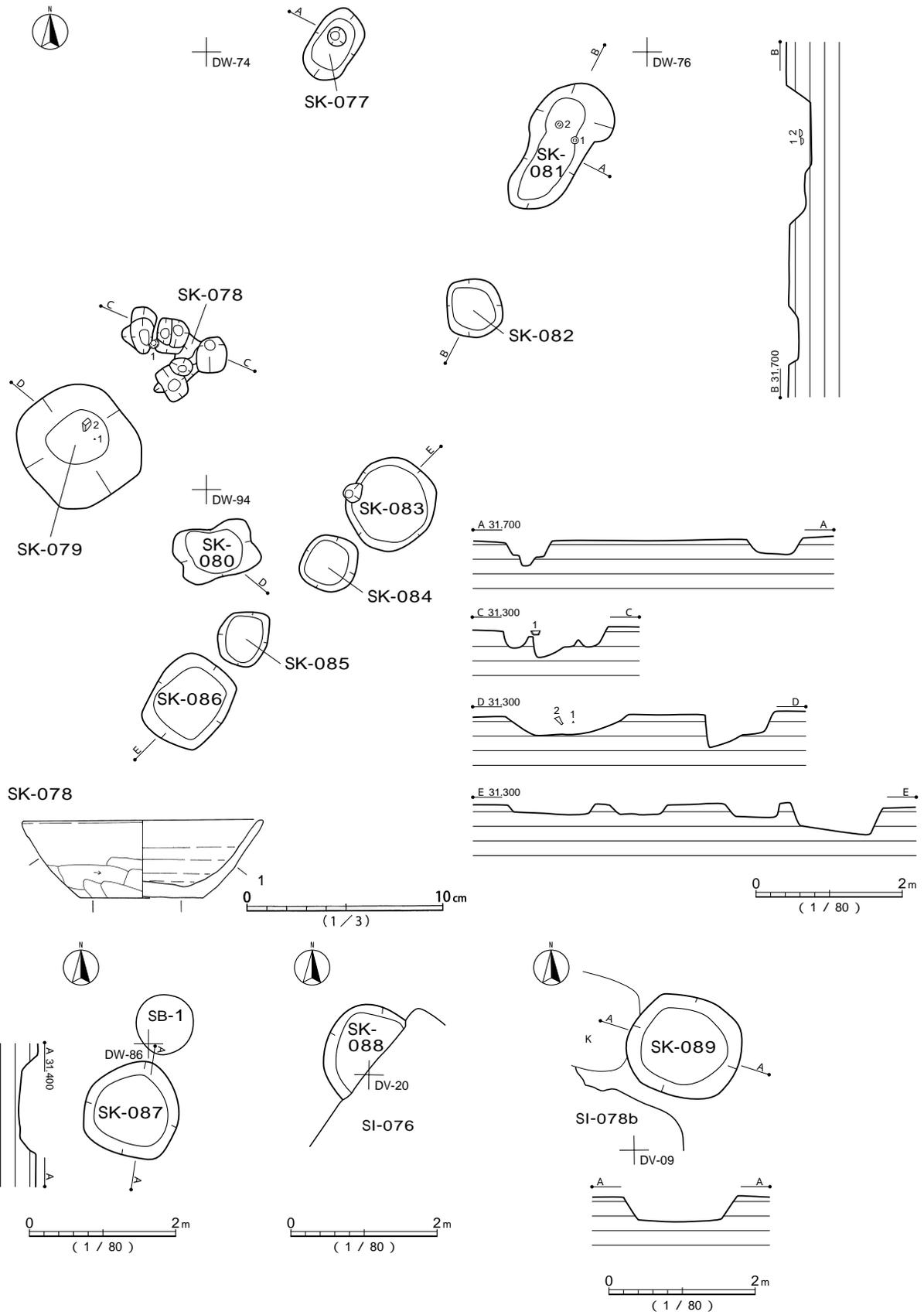


Fig.364 SK-077 ~ 089遺構・出土遺物実測図

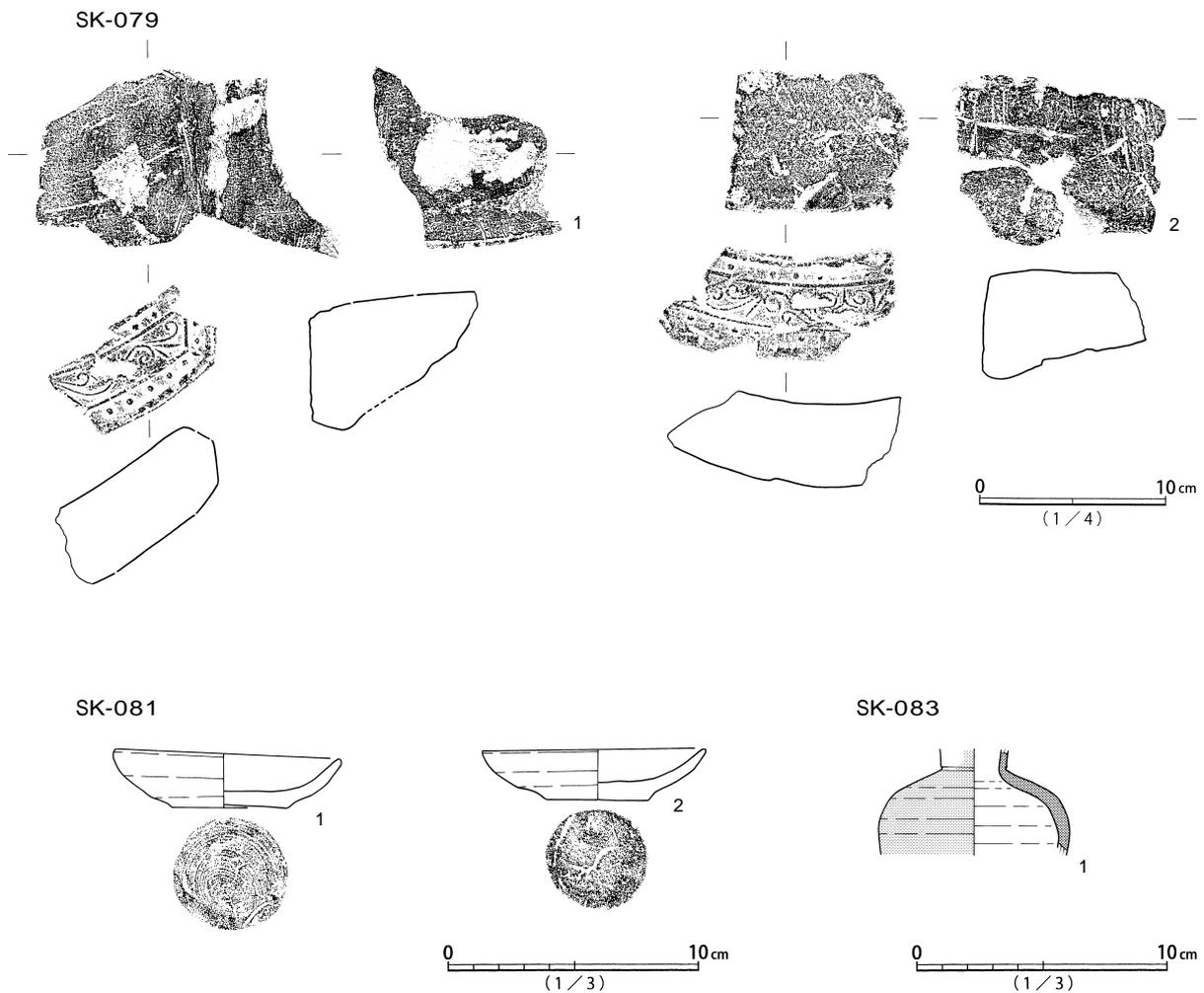


Fig.365 SK-079・081・083出土遺物実測図

SK-123はFU24に位置する。SI-168aと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.70m×1.12m、遺構確認面からの深さは0.29mを測る。実測遺物は無い。

SK-124 (Fig.371)

SK-124はFU24に位置する。SI-168aと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は2.64m×(1.28)m、遺構確認面からの深さは0.12mを測る。実測遺物は無い。

SK-125 (Fig.371)

SK-125はFU24に位置する。SI-168a・bと重複するが、新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.24m×0.76m、遺構確認面からの深さは0.37mを測る。実測遺物は無い。

SK-126 (Fig.371)

SK-126はET59に位置する。SI-182とは、溝状の掘り込みによりつながっている。平面形は不整形を呈し、規模は0.96m×0.77m、遺構確認面からの深さは0.27mを測る。実測遺物は無い。

SK-127 (Fig.371)

SK-127はET60に位置する。SI-182とは、溝状の掘り込みによりつながっている。平面形は不整形を呈し、規模は1.31m×1.09m、遺構確認面からの深さは0.26mを測る。実測遺物は無い。

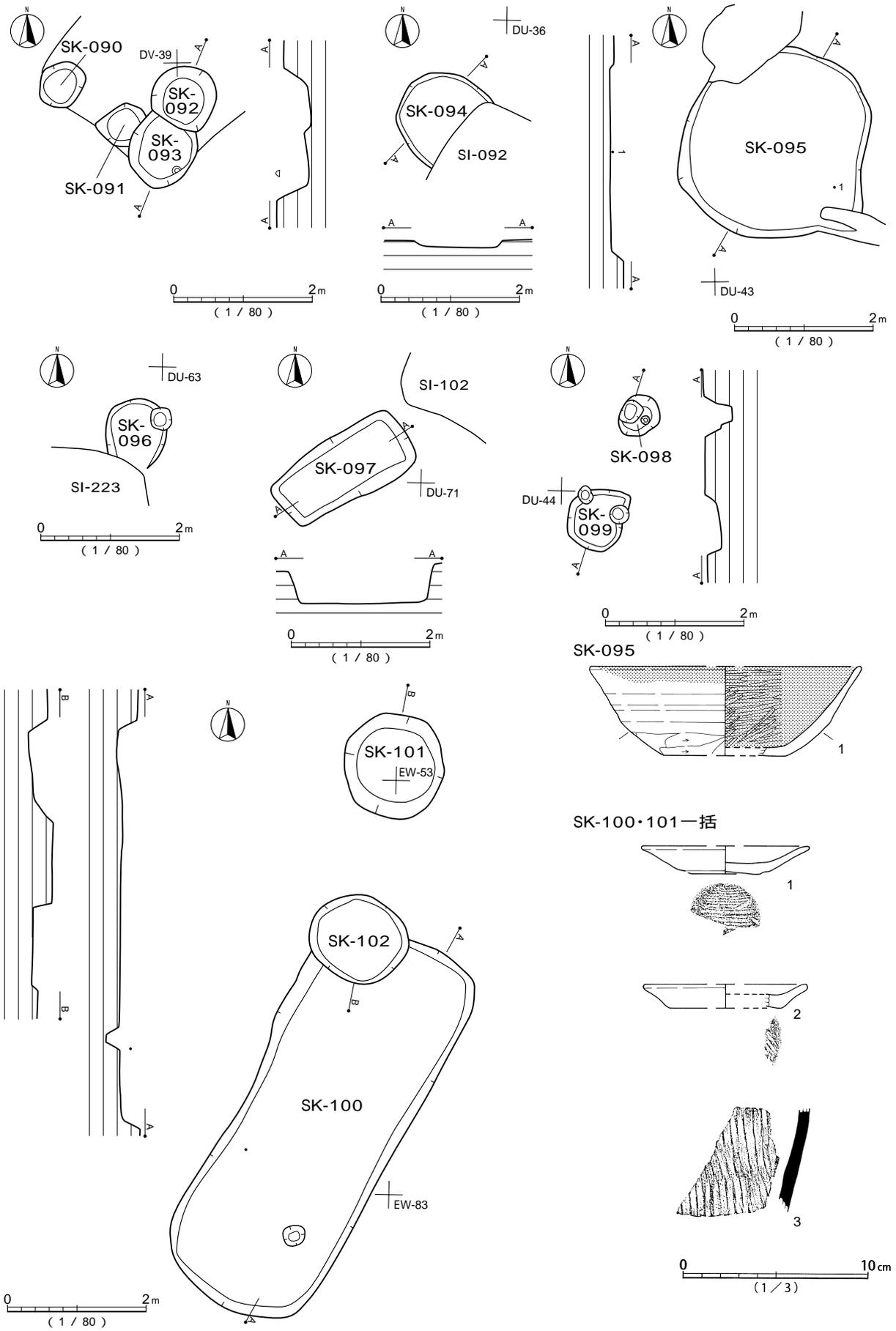


Fig.366 SK-090 ~ 102遺構・出土遺物実測図

SK-128 (Fig.372、 PL.233)

SK-128はFU17に位置する。SI-116と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.29m × 1.19m、遺構確認面からの深さは0.47mを測る。実測遺物は1が鉄製鉸具である。

SK-129 a(Fig.372・373、 PL.85・146・177・192・233・234)・b(Fig.372・373、 PL.85・146・177・234)

SK-129a・bはFU18に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模はSK-129aが1.64m × 1.37m、遺構確認面からの深さは0.71m、SK-129bは規模が1.34m × 1.30m、遺構確認面からの深さは0.59mを測る。SK-129aの実測遺物は1～12は土師器で、1・2は足高高台付杯、3～5は椀で、内面に黒色処理を施す。6・7は高台付小皿、8・10～12は小形杯、9は小皿で底部外面に線刻「×」が認められる。13は須恵器甕、14は須恵器甕の転用碗、15～21は鉄製品で、15・16は釘、17は板状鉄製品、18は紡錘車の紡輪部、20・21は紡錘車、19は不明金具である。

SK-129bの実測遺物は1～3が土師器で、1は小形杯、2は足高高台付小皿、3は白磁皿 類、4・5は鉄製釘である。

SK-129一括 (Fig.373、 PL.177)

1は白磁椀 類である。

SK-130 (Fig.372)

SK-130はFU18に位置する。SK-131aと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.03m × 1.03m、遺構確認面からの深さは0.20mを測る。実測遺物は無い。

SK-131a・b・c (Fig.372)

SK-131a・b・cはFU18に位置する。SK-130・132・133と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形呈し、規模はSK-131aが(2.10)m × (1.47)m、遺構確認面からの深さは0.07m、SK-131bは規模が(1.89)m × (1.36)m、遺構確認面からの深さは0.07m、SK-131cは規模が(1.95)m × (1.36)m、遺構確認面からの深さは0.13mを測る。実測遺物は無い。

SK-132 (Fig.372)

SK-132はFU18に位置する。SK-131cと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形呈し、規模は1.42m × 1.37m、遺構確認面からの深さは0.63mを測る。実測遺物は無い。

SK-133 (Fig.372)

SK-133はFU18に位置する。SK-131bと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.62m × 1.50m、遺構確認面からの深さは0.26mを測る。実測遺物は無い。

SK-134 (Fig.372)

SK-134はFU28に位置する。SI-186に重複する。平面形は不整円形を呈し、規模は0.90m × (0.80)m、遺構確認面からの深さは0.20mを測る。実測遺物は無い。

SK-135 (Fig.372)

SK-135はFU28に位置する。SI-186と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.48m × 0.96m、遺構確認面からの深さは0.27mを測る。実測遺物は無い。

SK-136 (Fig.372)

SK-136はFU28に位置する。SI-186と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.45m × 0.98m、遺構確認面からの深さは0.31mを測る。実測遺物は無い。

SK-137 (Fig.372・373、 PL.85・146・234)

SK-137はFU38に位置する。SI-186と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整長方形を呈し、規模は1.88m × 0.78m、遺構確認面からの深さは0.47mを測る。実測遺物は1が土師器小形椀で内面に黒色処理を施す。2・3が鉄製釘である。

SK-138 (Fig.374・375、 PL.85・146)

SK-138はFU47に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は1.33m × 1.12m、遺構確認面からの深さは0.20mを測る。実測遺物は1～5が土師器で、1は杯、2は小形杯、3～5は高台付小皿であり、3・4は底部内面に線刻「 - 」が認められる。

SK-139 (Fig.374・375、 PL.86・146・234)

SK-139はFU47に位置する。遺構番号の無い掘り込みと重複する。平面形は不整円形を呈し、規模は1.06m × 0.99m、遺構確認面からの深さは0.38mを測る。実測遺物は1が土師器小形杯、2が棒状鉄製品である。

SK-140 (Fig.374・375、 PL.86・146)

SK-140はFU47に位置する。遺構番号の無い掘り込みと重複する。平面形は不整円形を呈し、規模は1.18m × 1.03m、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。実測遺物は1・2が土師器で、1は小形杯、2は高台付小皿、3が円盤状鉄製品である。

SK-141 (Fig.374・375、 PL.86・234)

SK-141はFU57に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は1.62m × 1.62m、遺構確認面からの深さは0.56mを測る。実測遺物は1が鉄製釘である。

SK-142 (Fig.374、 PL.86)

SK-142はFU58に位置する。遺構番号の無い掘り込みと重複する。平面形は不整円形を呈し、規模は0.81m × 0.81m、遺構確認面からの深さは0.39mを測る。実測遺物は無い。

SK-143 (Fig.374・375、 PL.86・146)

SK-143はFU58に位置する。SK-145と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.45m × 1.32m、遺構確認面からの深さは0.51mを測る。実測遺物は1が土師器足高台付杯である。

SK-144 (Fig.374、 PL.86)

SK-144はFU58に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は1.39m × 1.21m、遺構確認面からの深さは0.45mを測る。実測遺物は無い。

SK-145 (Fig.374、 PL.86)

SK-145はFU58に位置する。SK-143と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は(0.94)m × 0.79m、遺構確認面からの深さは0.39mを測る。実測遺物は無い。

SK-146 (Fig.374)

SK-146はFU58に位置する。SK-147と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整方形を呈し、規模は(1.52)m × 1.03m、遺構確認面からの深さは0.11mを測る。実測遺物は無い。

SK-147 (Fig.374)

SK-147はFU58に位置する。SK-146と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整方形を呈し、規模は0.74m × 0.65m、遺構確認面からの深さは0.27mを測る。実測遺物は無い。

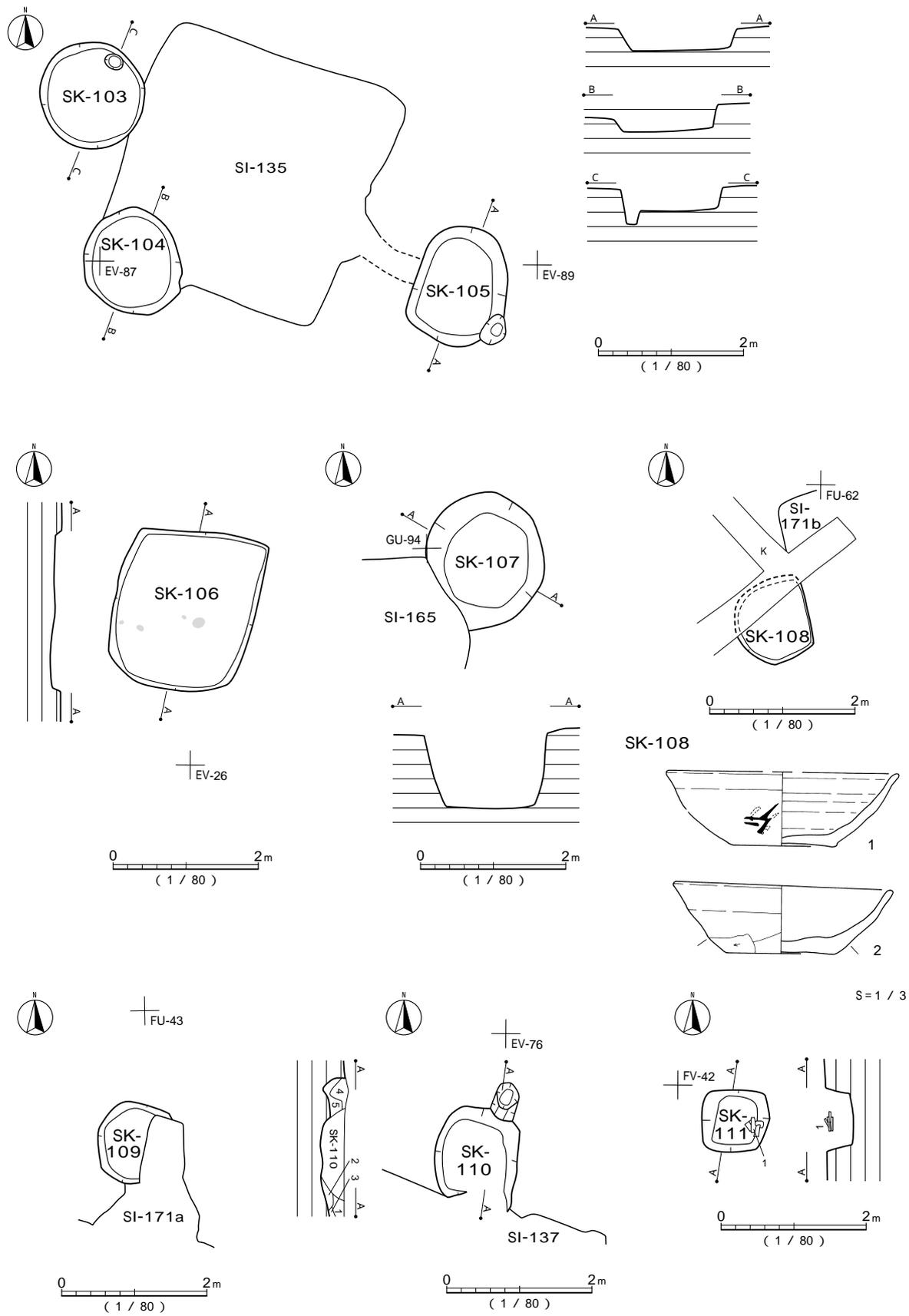


Fig.367 SK-103 ~ 111遺構・出土遺物実測図

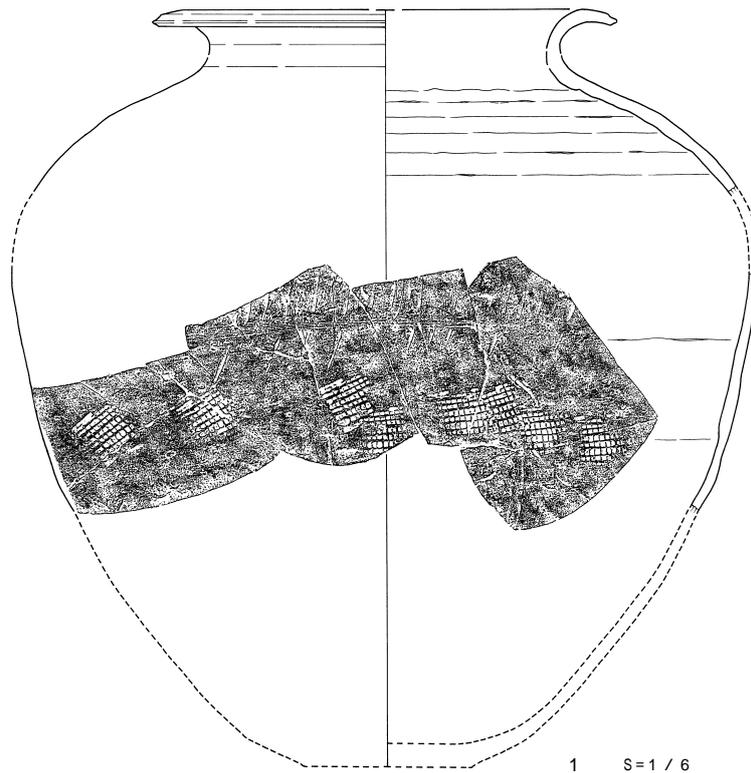


Fig.368 SK-111出土遺物実測図

SK-148 (Fig.374)

SK-148はFU58に位置する。SI-173と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.19m × 1.17m、遺構確認面からの深さは0.29mを測る。実測遺物は無い。

SK-149 (Fig.374)

SK-149はFU58に位置する。SI-173と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は0.71m × 0.71m、遺構確認面からの深さは0.26mを測る。実測遺物は無い。

SK-150 (Fig.374)

SK-150はFU57に位置する。SD-6と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈するとみられ、規模は(1.91)m × (1.20)m、遺構確認面からの深さは0.18mを測る。実測遺物は無い。

SK-151 (Fig.374、 PL.86)

SK-151はEV51に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は2.49m × 1.82m、遺構確認面からの深さは0.25mを測る。実測遺物は無い。

SK-152 (Fig.374、 PL.87)

SK-152はEV54に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形を呈し、規模は2.33m × 2.15m、遺構確認面からの深さは0.12mを測る。実測遺物は無い。

SK-153 (Fig.376、 PL.177)

SK-153はEV61に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は1.20m × 1.13m、遺構確認面からの深さは0.46mを測る。実測遺物は1が土師器小皿、2が灰釉陶器皿でK90窯式、3

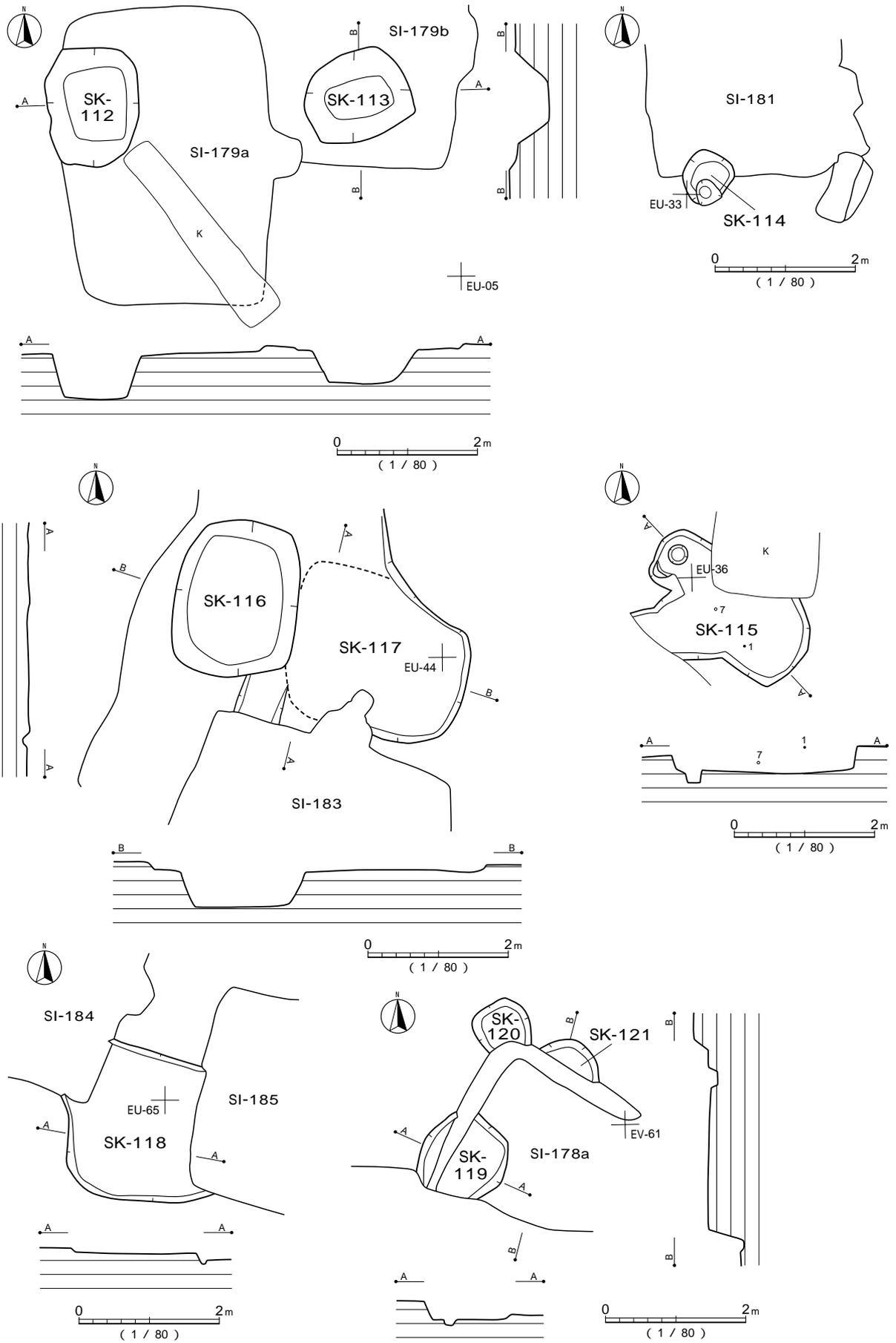


Fig.369 SK-112 ~ 121遺構実測図

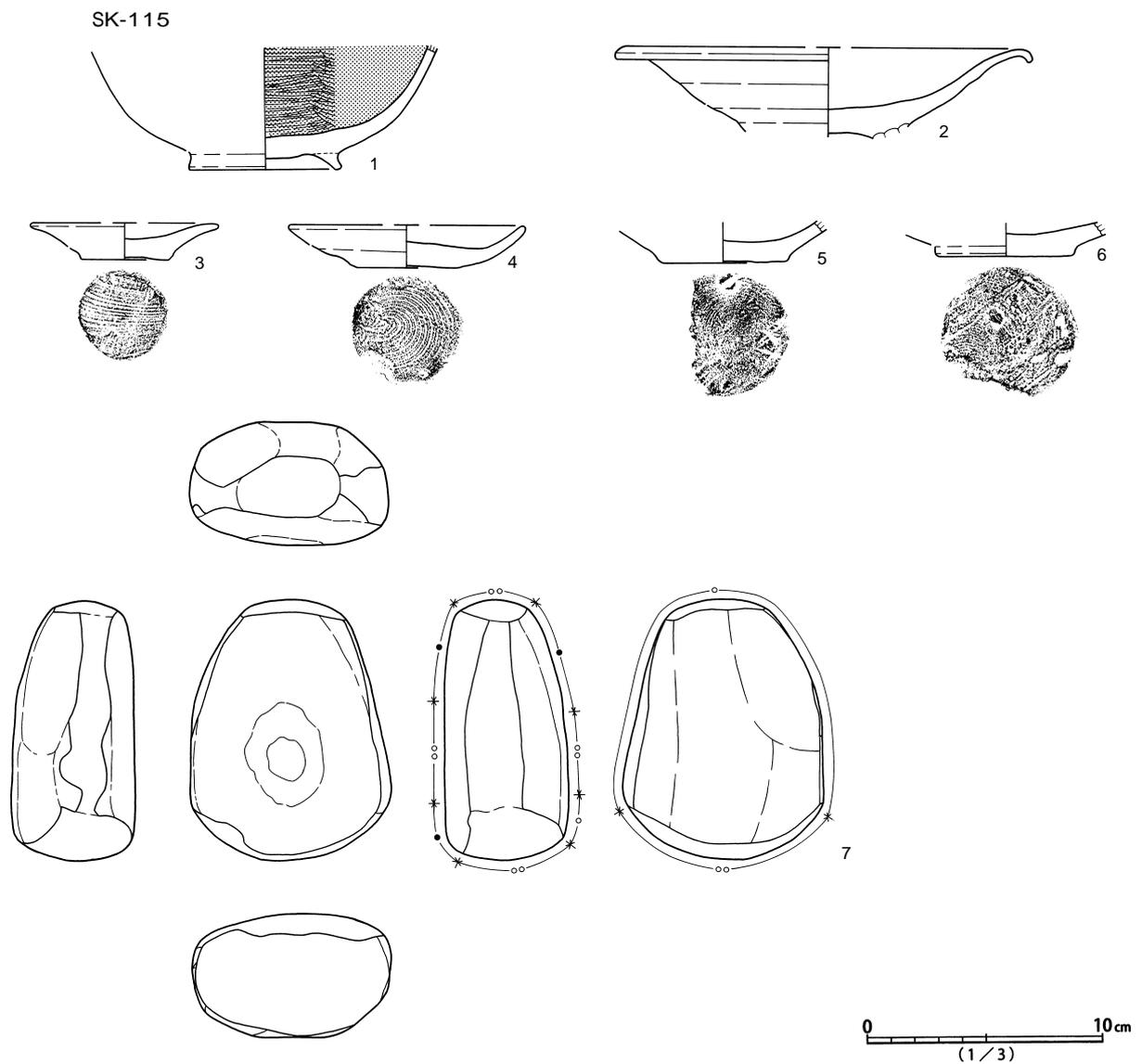


Fig.370 SK-115出土遺物実測図

が緑釉陶器段皿、4が灰釉陶器壺である。

SK-154 (Fig.376)

SK-154はEV62に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は0.67m × 0.61 m、遺構確認面からの深さは0.10mを測る。実測遺物は無い。

SK-155 (Fig.376)

SK-155はEV62に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.03m × 0.82 m、遺構確認面からの深さは0.37mを測る。実測遺物は無い。

SK-156 (Fig.376)

SK-156はEV62に位置する。SI-187a・bと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形円形を呈し、規模は0.93m × 0.86m、遺構確認面からの深さは0.37mを測る。実測遺物は無い。

SK-157 (Fig.376)

SK-157はEV72に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.12m × 1.03

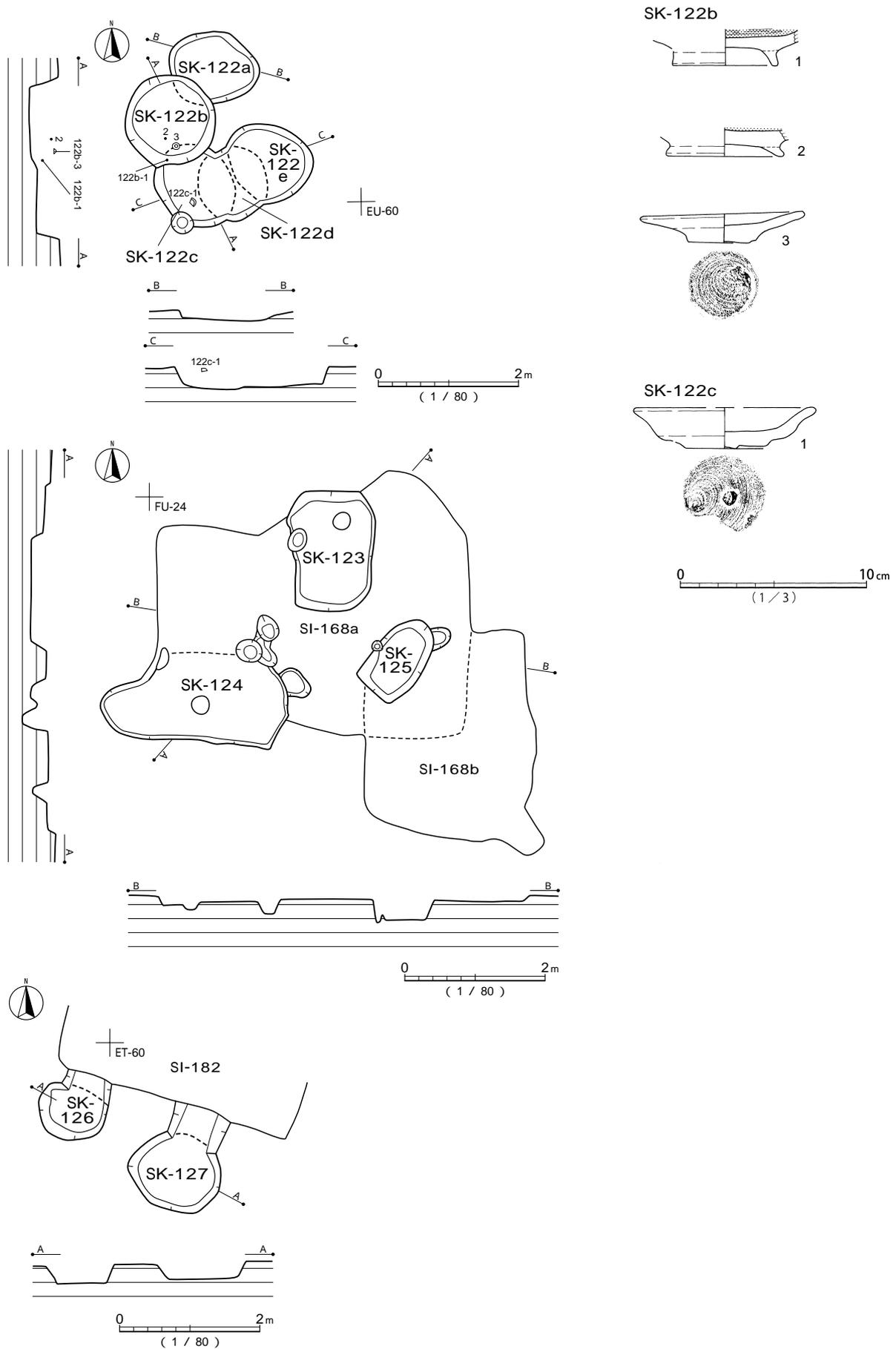


Fig.371 SK-122 ~ 127遺構・出土遺物実測図

m、遺構確認面からの深さは0.22mを測る。実測遺物は無い。

SK-158 (Fig.376)

SK-158はEV62に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は0.77m × 0.68 m、遺構確認面からの深さは0.21mを測る。実測遺物は無い。

SK-159 (Fig.376、PL.146)

SK-159はEV82に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整楕円形を呈し、規模は1.08m × 0.74 m、遺構確認面からの深さは0.18mを測る。実測遺物は1が土師器小形杯である。

SK-160 (Fig.376・377、PL.87・146・234)

SK-160はEU98に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は0.77m × 0.61m、遺構確認面からの深さは0.25mを測る。実測遺物は1が土師器小皿、2は鉄鍋で、覆土上層に伏せた状態で出土している。人骨等の出土記載は無い。

SK-161 (Fig.378、PL.87・146)

SK-161はDU94に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整方形を呈し、規模は(1.37)m × (0.87)m、遺構確認面からの深さは不明。実測遺物は1が土師器杯である。

SK-162 (Fig.378、PL.87)

SK-162はEV33に位置する。SK-182と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整形を呈し、規模は1.09 m × 1.07m、遺構確認面からの深さは0.26mを測る。実測遺物は無い。

SK-163 (Fig.378・379、PL.147・177)

SK-163はEV03に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は0.89m × 0.81 m、遺構確認面からの深さは0.27mを測る。実測遺物は1は土師器杯、2は灰釉陶器椀で053窯式、3は白磁椀、4は灰釉陶器壺である。

SK-164 (Fig.378・379、PL.87)

SK-164はGU98に位置する。SI-166a・bと重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は1.82m × 1.78m、遺構確認面からの深さは0.98mを測る。実測遺物は1が灰釉陶器皿である。

SK-165 (Fig.378・379、PL.147・177)

SK-165はFW87に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は1.66m × 1.48 m、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。実測遺物は1～3は土師器小皿、4は転用とりべとみられる。

SK-166a・b・c (Fig.378)

SK-166a・b・cはFW88に位置する。他遺構との重複はない。遺構番号ではa・b・cの区別があるが、図面上は同定できない。平面形は不整形を呈し、規模は2.60m × 1.26m、遺構確認面からの深さは0.36mを測る。

SK-166一括 (Fig.379、PL.147・177)

実測遺物は1～7が土師器で、1・2は杯、3～7は小皿である。

SK-167 (Fig.378)

SK-167はCW43に位置する。SI-059カマド煙道部と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。平面形は不整方形を呈し、規模は0.98m × (0.78)m、遺構確認面からの深さは0.20mを測る。実測遺物は無い。

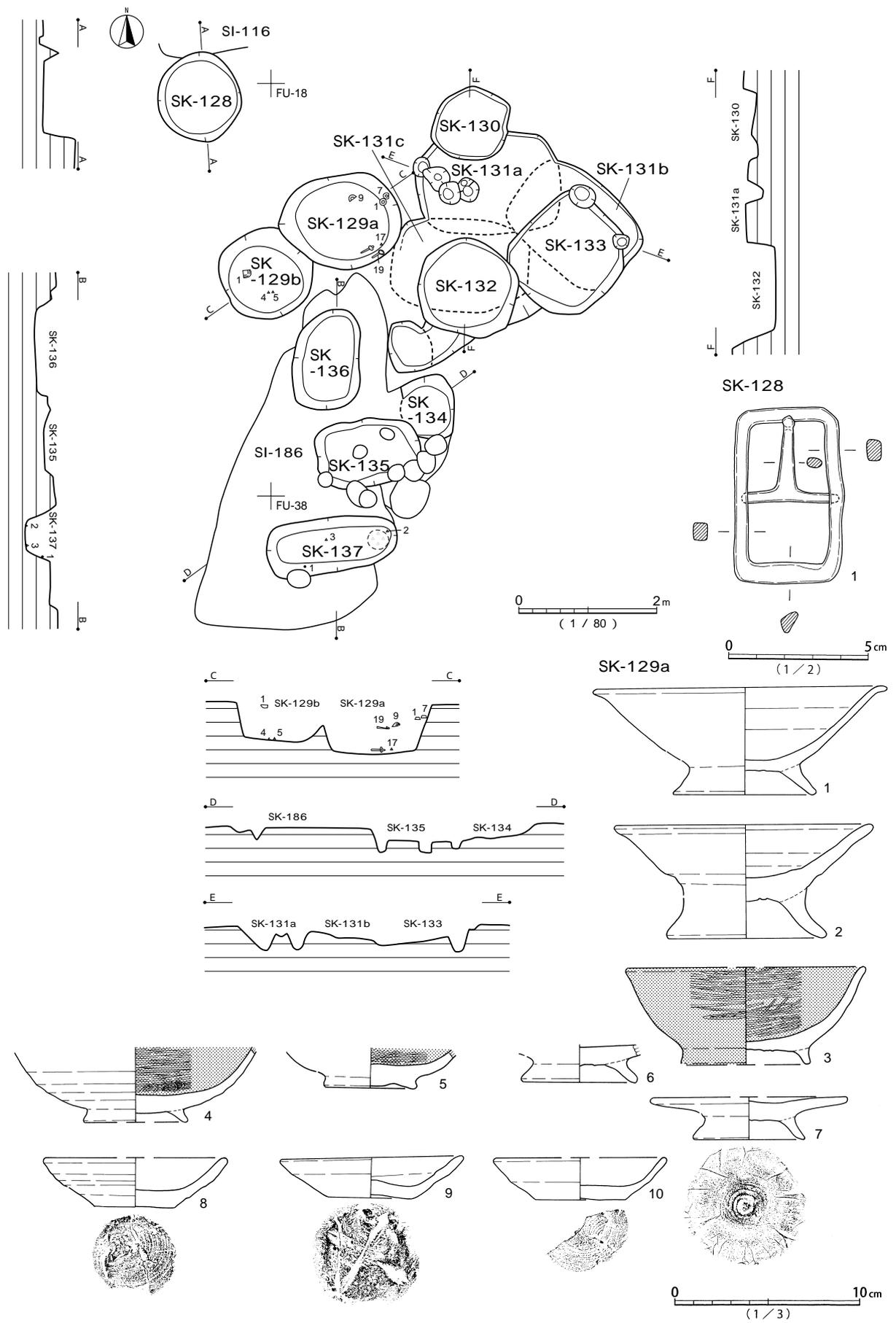


Fig.372 SK-128 ~ 137遺構・出土遺物実測図

SK-168 (Fig.378)

SK-168はDU60に位置する。SI-225と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形とみられ、規模は(1.66)m×(1.38)m、遺構確認面からの深さは0.37mを測る。実測遺物は無い。

SK-169 (Fig.378・379、PL.147)

SK-169はDU69に位置する。SI-225と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整円形を呈し、規模は(1.66)m×(1.29)m、遺構確認面からの深さは不明。実測遺物は1が土師器小皿である。

SK-170 (Fig.380、PL.87・147・177・222・234)

SK-170は、遺構図が無いのため位置不明。実測遺物は1・2が土師器杯で、3が青磁椀、4が均整唐草文軒平瓦、5・6が鉄製品で、5が刀子、6が鉄鏝である。

SK-171 (Fig.380、PL.87・147・238)

SK-171は、遺構図が無いのため位置不明。実測遺物は1・2が土師器で、1が小形椀で、内面と外面口縁部に黒色処理を施す。2が小形杯、3が灰釉陶器皿である。

SK-172 (Fig.380、PL.234)

SK-172は、遺構図が無いのため位置不明。実測遺物は1・2が鉄製品で、1が小刀、2が棒状鉄製品である。

SK-173 (Fig.380、PL.234)

SK-173はFX92に位置する。実測遺物は1が鉄製鉞である。

SK-174 (Fig.380、PL.88・177) 附章参照

SK-174は、遺構図が無いのため位置は不明。実測遺物は1・2が土師器で、1が椀で、内面に黒色処理を施す。2が小皿である。

SK-175 (Fig.381、PL.88)

SK-175はDU05に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整円形を呈し、規模は3.21m×2.90m、遺構確認面からの深さは0.32mを測る。実測遺物は無い。

SK-176 (Fig.382・383、PL.88・147・187・192)

SK-176はBV19に位置する地下式土壌である。他遺構との重複はない。平面形は不整方形を呈し、規模は2.82m×2.32m、遺構確認面からの深さは2.20mを測る。

調査時には遺構番号が無いが、遺物を実測していることから整理作業時に番号を付与している。実測遺物は1が土師器杯で体部外面及び底部内面に墨書「盈」が横位に認められる。2が土師器杯で底部外面に墨書「東」が認められる。3が土師器杯で底部外面に線刻「盈」が認められる。4～6は土師器杯、7が土師器台付甕、8が須恵器高台付杯で永田 期である。覆土中に貝層が認められるが、貝が所在せず、その内容は不明である。

SK-177 (Fig.384、PL.88・89・147・187・234)

SK-177はBY37に位置する土壌である。SI-029と重複し、本遺構が新しいとしておく。平面形は不整楕円形を呈し、規模は1.88m×1.02m、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。実測遺物は1が土師器椀で内面と外面口縁部に黒色処理を施し、体部外面に墨書「九」が正位で認められる。2～5は鉄製品で、2は釘、3・4は門金具状の金具、5は棒状鉄製品である。

SK-178 a(Fig.385、PL.89・177・192)・b(Fig.385、PL.89・177)

SK-178a・bはBX83に位置する。他遺構との重複はない。平面形はSK-178aが不整楕円形を呈し、規模は2.73m × 1.46m、遺構確認面からの深さは0.39mを測る。SK-178bが不整楕円形を呈し、規模は1.59m × 1.21m、遺構確認面からの深さは0.25mを測る。実測遺物はSK-178aでは、1が土師器杯で、底部内面に線刻「×」が認められる。SK-178bでは、1が須恵器甕である。

SK-179 (Fig.386、PL.89・177・195・234)

SK-179はCV44に位置する。いわゆる有天井土壌といわれるもので、他遺構との重複はない。平面形は不整長方形を呈し、規模は2.28m × 1.70m、遺構確認面からの深さは1.13mを測る。実測遺物は1が土師器椀で内面に黒色処理を施す。2が常滑10型式の壺、3が土製支脚、4が棒状鉄製品である。

SK-180 (Fig.387)

SK-180はDU34に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整長楕円形を呈し、底面にピットを伴う。規模は2.71m × 1.25m、遺構確認面からの深さは0.25mを測る。実測遺物は無い。

SK-181 (Fig.388、PL.89・227)

SK-181はFW54に位置する。他遺構との重複はない。平面形は不整長方形を呈し、規模は2.90m × 1.62m、遺構確認面からの深さは0.41mを測る。実測遺物は1が凹石である。

SK-182 (Fig.388)

SK-182はEV34に位置する。SK-162と重複するが新旧関係は不明。平面形は不整長方形を呈し、規模は(2.34)m × 1.39m、遺構確認面からの深さは0.25mを測る。実測遺物は無い。

SE-1 (Fig.389)

遺構 SE-1はBY87に位置する。井戸とみられるが、底部までは完掘していない。平面形は楕円形で、規模は0.96m × 0.88mを測り、深さは1.80mまでで調査を終えているため不明である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。周囲にピット等付属するとみられる遺構は認められない。

出土遺物 実測遺物は無い。

南西部ピット群 (Fig.390、PL.89・147・177・234・238)

遺構 南西部ピット群は調査区南西部辺部、CU39周辺に位置する。直径20cm～40cm、深さ9cm～39cmのピットが、緩い規則性をもって傾斜に対し並行方向(西北西から東南東方向)へ並んでいる。範囲は幅2～3m、長さ38mを測るが、北西方向にもピットが散見され、密度が低いものの、この範囲を含むと長さは50mほどになる。巨視的には2～3列を形成するとみられるが、ピット間の間隔は不規則で、列間の新旧関係も見出せない。台地平坦部から南側に広がる谷への傾斜変換点にあたり、何らかの区画を意図した柵列とみられるが、性格は不明である。

出土遺物 1は銅製の鋳造品とみられる。厚みがあり、小型のものでは無いとみられる。2・3はカワラケ、4は土師器杯、5は鉄製釘、6は瀬戸皿、7は銅銭で「通寶」とみえ、2文字が不明瞭である。僅かに確認できる残画からは、「元豊通寶」「元祐通寶」「元符通寶」「光紹通寶」のいずれかと考えられる。

SS-1 (Fig.391、PL.147・227)

遺構 SS-1はCW49に位置する。方形周溝状遺構とみられ北側でSI-051・052と重複するが、遺構による新旧関係は不明。出土遺物から本遺構が古いと判断した。規模は周溝外周上端で南北12.0m × 東西12.5m、内区は上端で10.2m × 10.2mを測る。周溝の遺構確認面からの深さは0.15m～0.35mを測る。周溝断面は台形を呈する。明確な埋葬施設は認められないが、内区南辺の中央より西よりに、SK-058

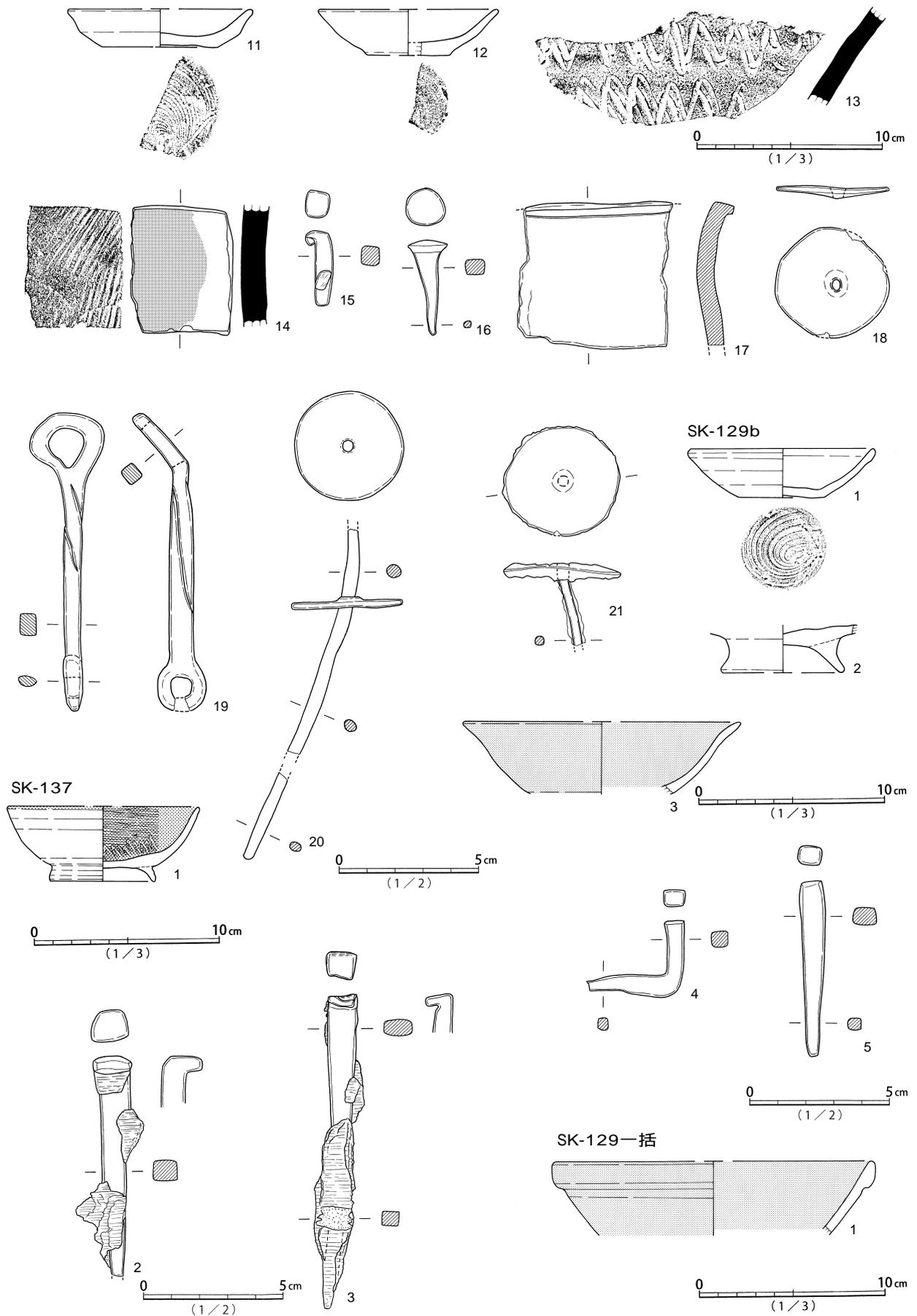


Fig.373 SK-129・137出土遺物実測図

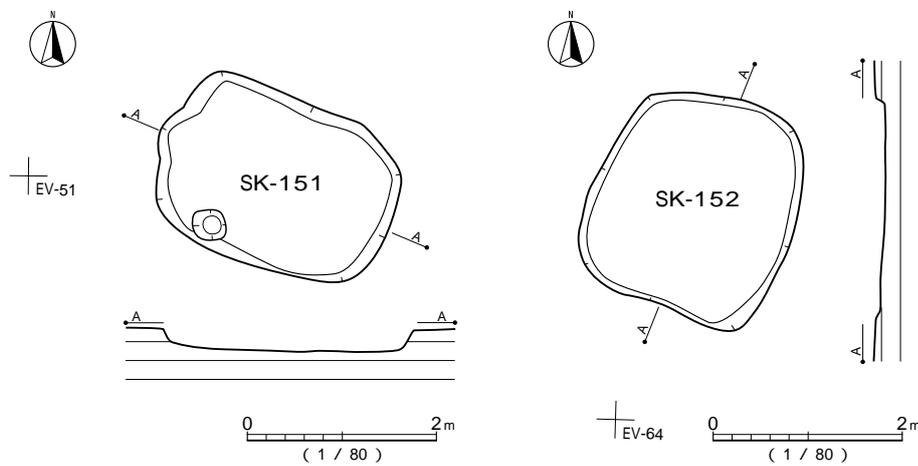
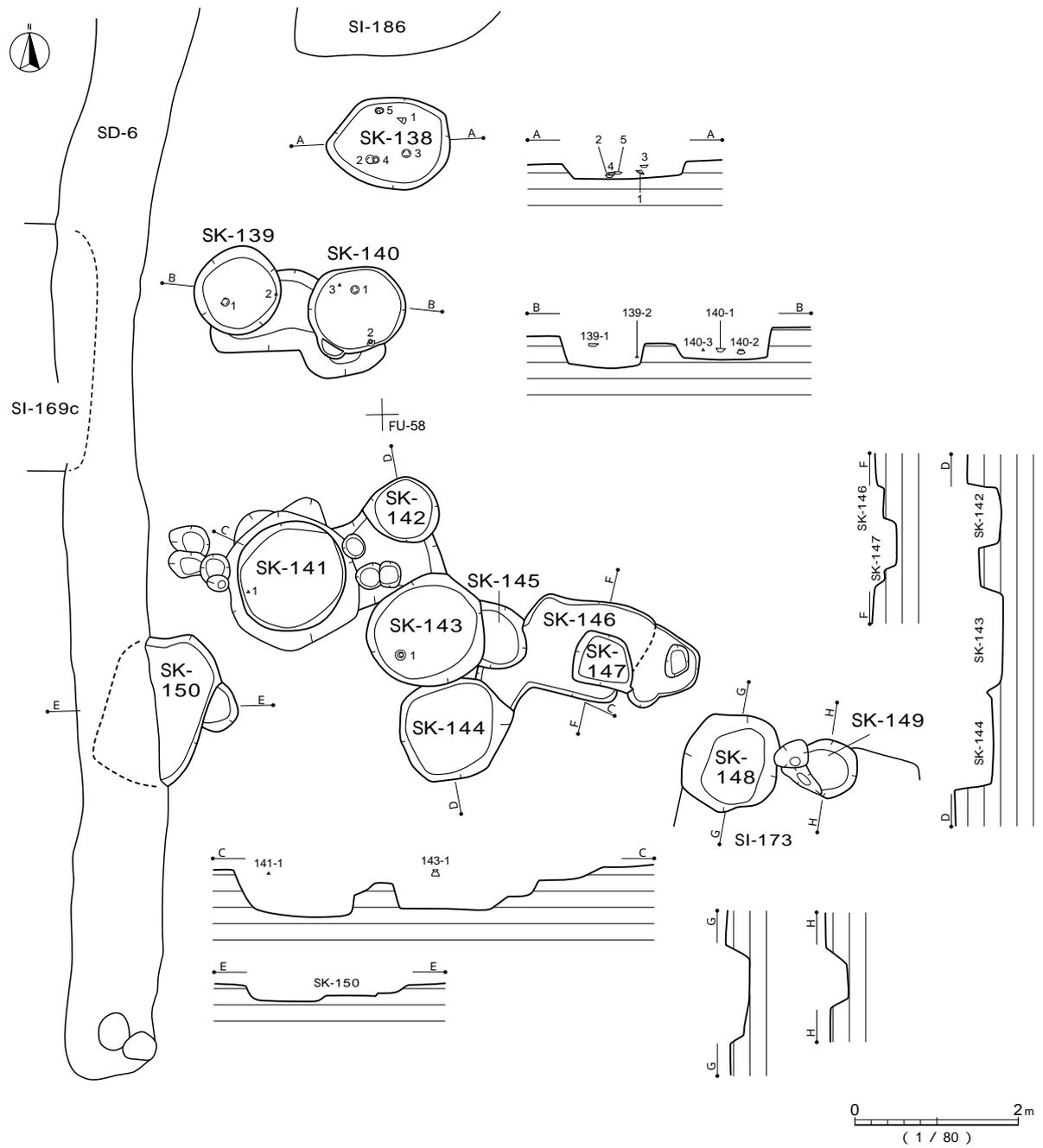


Fig.374 SK-138 ~ 152遺構実測図

が1基検出されており、これが本遺構に伴う可能性がある。

出土遺物 1が土師器杯、2～5が礫である。ほかに図面上では周溝覆土中に貝層が2ブロック記載されているが、実物が無いため詳細は不明である。

SS-2 (Fig.392、PL.177)

遺構 SS-2はDV46に位置する。形状は方形であるが、北辺が広く南辺が狭く、内区の四隅の形状も明確な角を持たない。周溝は緩やかに曲がっており、西辺では、外周が互い違いになる箇所が認められる。規模は周溝外周上端で、南北18.8m～17.2m×東西15.9m～13.5m、内区は上端で南北17.3m～16.2m×東西14.6m～12.5mを測る。周溝の深さは11cm～28cmを測る。遺構は北側でSI-079・081と、南側でSI-082と、内区中央でSI-080と重複するが、遺構による新旧関係は不明である。

出土遺物 1はカワラケである。周溝覆土からの出土であるため本遺構の時期を示すかどうか確定的ではない。

(2) 近世

SM-1 (Fig.400・401、PL.238)

遺構 SM-1はHV57に位置する。本遺構の概要は既報告(須田ほか 1975)で報告されており、これによると、名称は惣社行人塚とされ、一辺約20m、高さ約3.8mの三段築成である。また、塚の中央部付近では、柄鏡が差し立てた状態で出土し、その周囲には刳殻を収めた5個の杯が並べられたとある。更に、塚は惣社地区で古くから清兵衛塚と呼ばれ、また、享保十七年十二月の「惣社村役人野論願書(宮原榮家文書(千葉県 千葉県史料『近世編 上総国下』))」の記載「依之清兵衛と申者五十四年以前延宝年中未ノ十月湯殿山之塚ヲ築、」の内容に従えば、塚の築造年代が1678(延宝6年)になっている。現存する図面からは、遺構は中心軸で南北19.7m×東西19.3m、高さ3.55mを測り、等高線の状況から三段築成であることがわかる。塚の正面は不明である。遺物の出土状況は、柄鏡を差し立てた周辺に、伏せた状態のカワラケ5個体を十字に配置しているが、断面図には伏せたカワラケの下に正位に置かれたカワラケが認められる。このことから、カワラケは口を合わせた2個一対のカワラケ5組、計10個が配置された可能性が高い。また、他遺構の写真に塚の中央にトレンチが掘られている状況が写っており、おそらく遺物はこのトレンチから出土しているであろう。記録からは古墳の改変である可能性は認められない。

出土遺物 遺物はカワラケ10個、柄鏡1枚、寛永通宝9枚の出土が認められる。しかし、カワラケ・柄鏡の出土位置については出土状況図があるものの、遺構中央部のどのレベルかは不明である。実物も現状では確認出来ない。1～9の寛永通宝については台帳等一切の記載は無く、出土地点・状況・全体量等不明である。

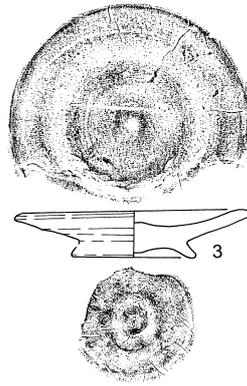
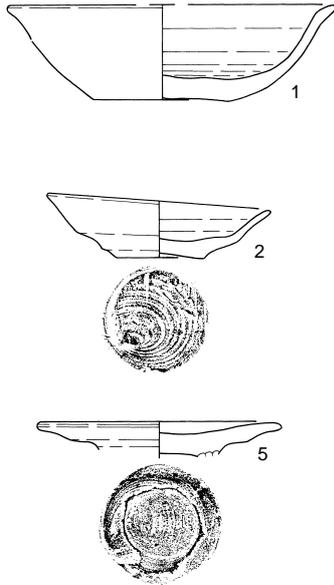
遺構外出土遺物

遺構外出土遺物については、調査段階での取り上げ状況の違いにより、3グループに区別している。グリッド単位で取り上げたもの。注記 000が付与されており、他の遺構外遺物とは区別されているもの。遺跡のどこで出土したか不明であり、全体一括とされているもの。それぞれグリッド遺物、一括(1)、一括(2)として掲載する。

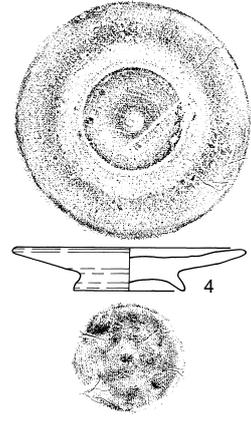
Grid. A100 (Fig.402、PL.147・177・234)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

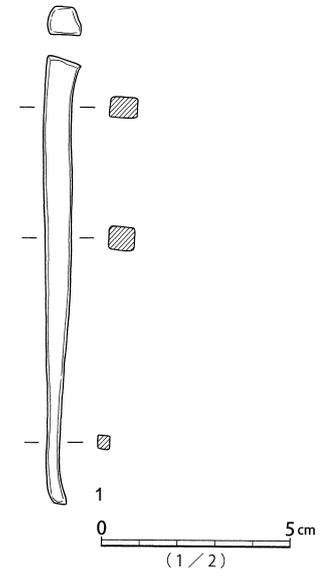
SK-138



0 10 cm
(1/3)

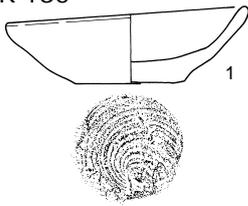


SK-141

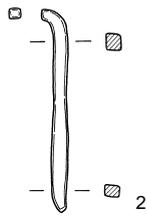


0 5 cm
(1/2)

SK-139

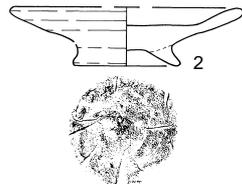
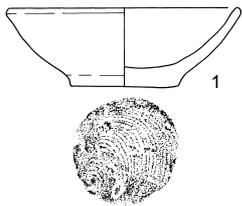


0 10 cm
(1/3)

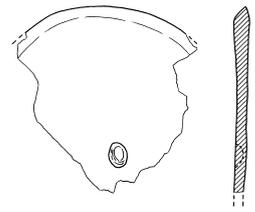


0 5 cm
(1/2)

SK-140



0 10 cm
(1/3)



0 5 cm
(1/2)

SK-143



0 10 cm
(1/3)

Fig.375 SK-138 ~ 141・143出土遺物実測図

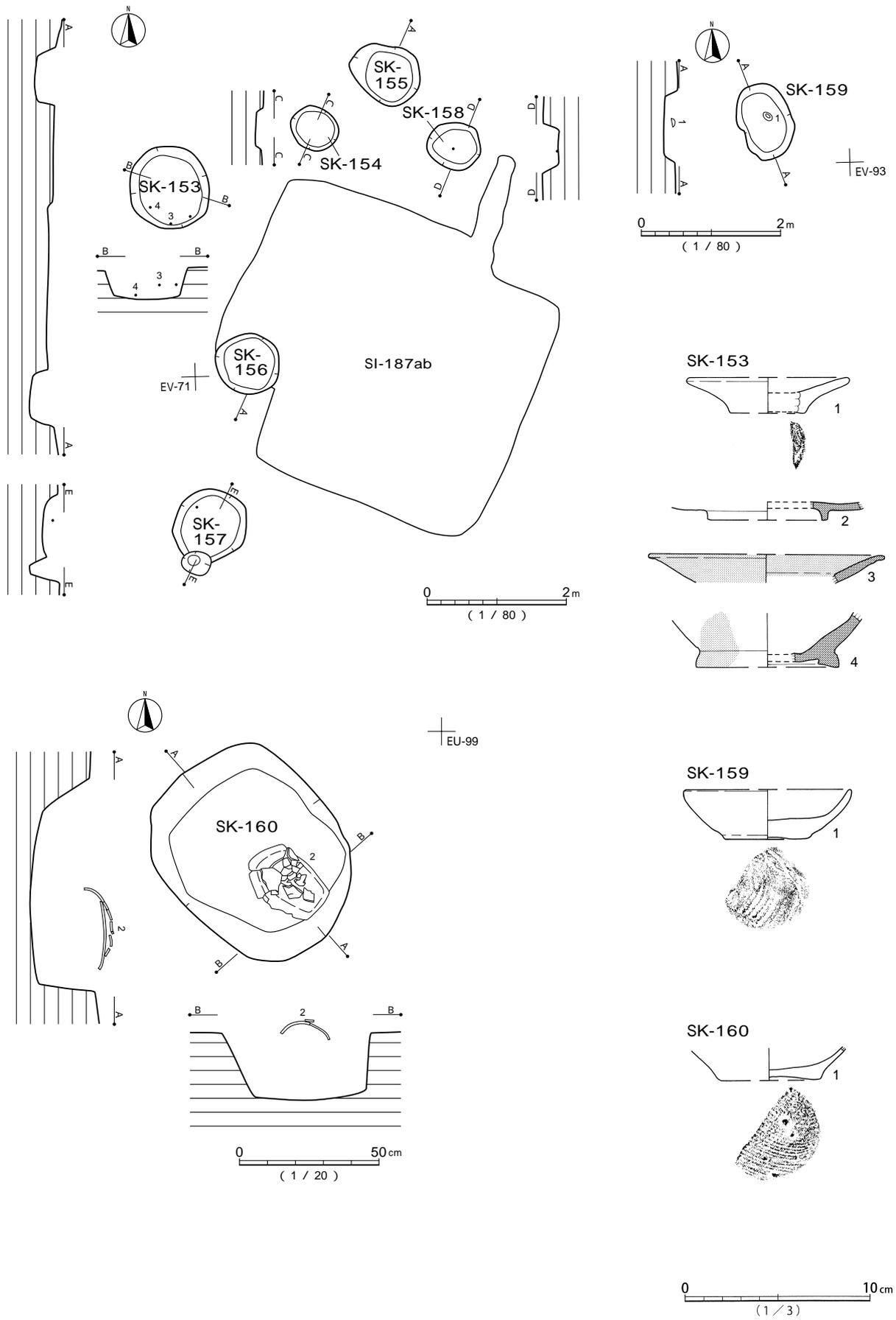


Fig.376 SK-153 ~ 160遺構・出土遺物実測図

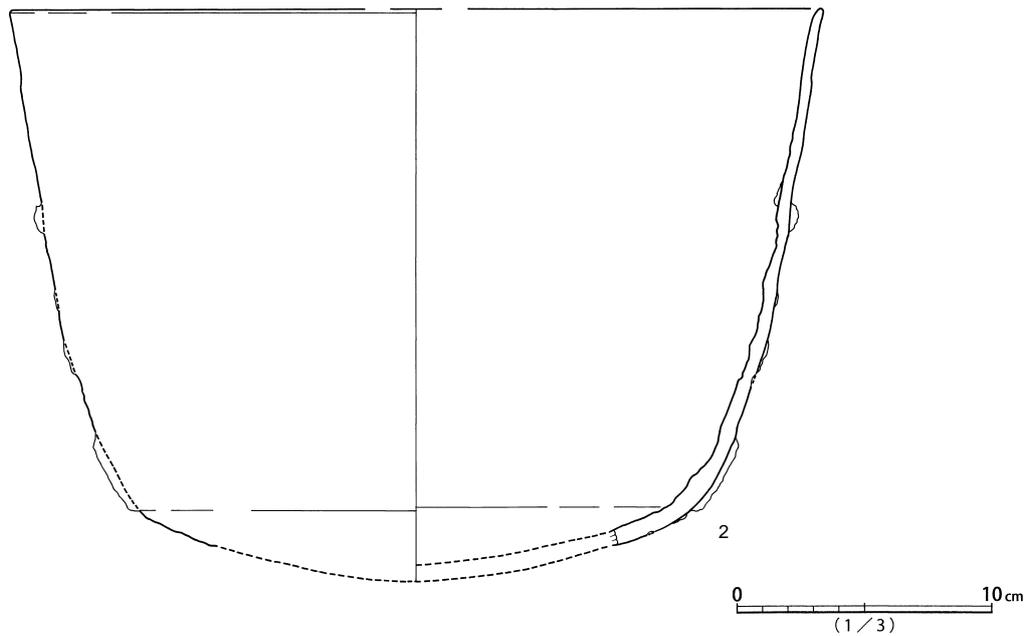


Fig.377 SK-160出土遺物実測図

出土遺物 1は土師器椀、2は土師器小皿、3はカワラケ小皿、4は白磁椀で -2類、5は土師器転用の
 るつぼかとりべで、被熱により変形し緑青が付着する、6は鉄釘である。

Grid. A200 (Fig.402、 PL.234)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は曲刃鎌、2・4は板状鉄製品、3は板状鋳造品である。

Grid. A300 (Fig.402、 PL.148・177・187)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は灰釉陶器皿で黒笹90号窯式、2は墨書「四ヵ院」が認められる土師器杯である。

Grid. A400 (Fig.402・403、 PL.148・177・187)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は墨書「埴生郡白ヵ田ヵ」が認められる土師器杯、2～5は土師器杯、6・8は土師器椀、7は
 土師器小形椀、9～22は土師器小皿である。

Grid. B100 (Fig.404～406、 PL.148・149・177・192・195・222・227・234・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器杯、2は線刻が認められる土師器杯、3は線刻が認められる土師器椀で内面に黒
 色処理を施す。4・14・17は土師器高台付皿、5・6・8・9・11・13・15は土師器小皿、7・10・12・16は土師器小
 形杯、18は灰釉陶器椀で黒笹90号窯式、19・20は緑釉陶器皿、21は渥美甕、22は土師器羽釜、23は不
 明土製品、24は軒平瓦、25は砥石、26は磨石、27は曲刃鎌、28・29は刀子形利器、30は鑿、31・33～35
 は鉄釘、32は棒状鉄製品、36は紡錘車、37は板状鉄製品、38は不明鉄製品、39は椀形滓である。

Grid. B200 (Fig.407、 PL.149・177・188・222・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

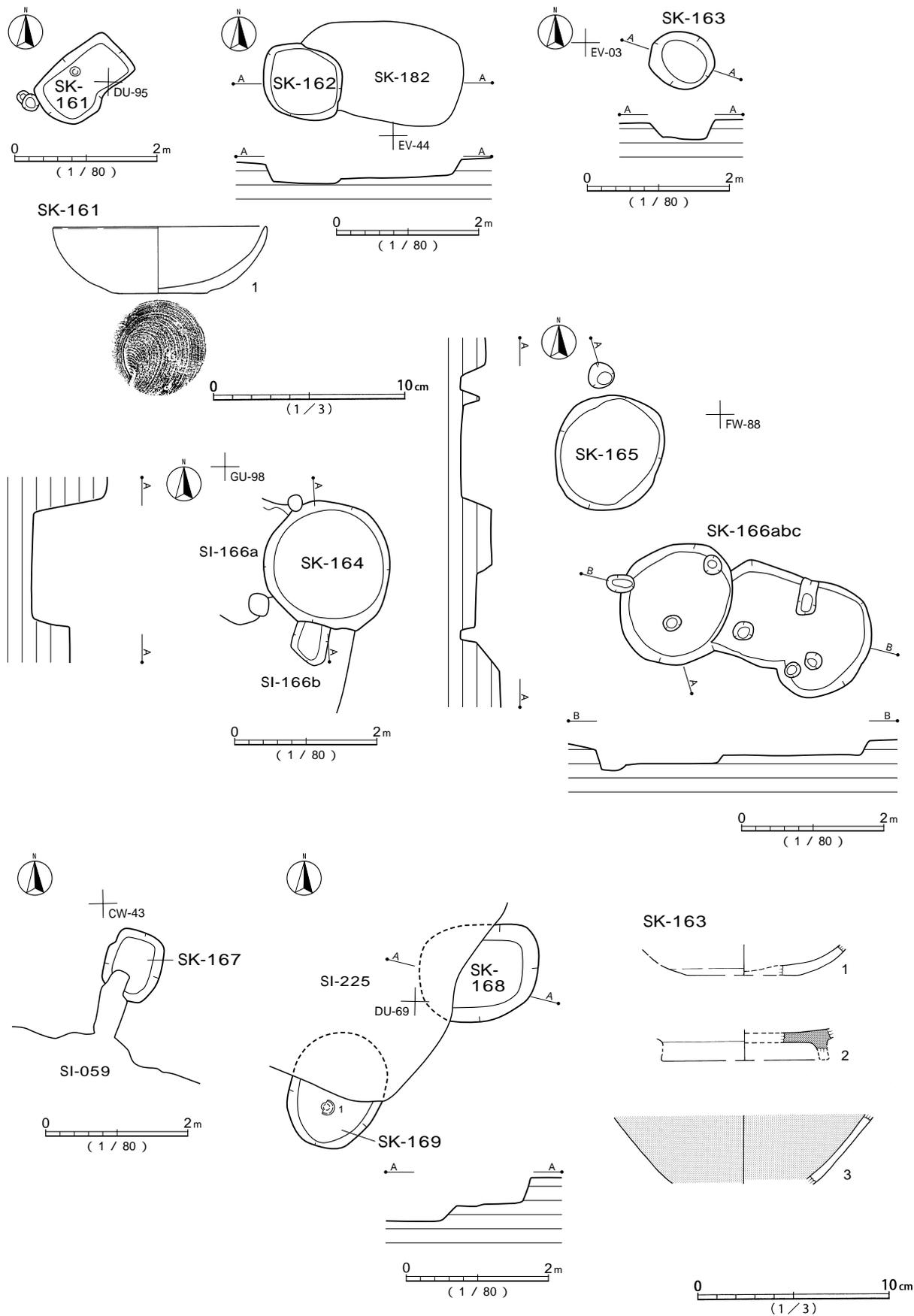
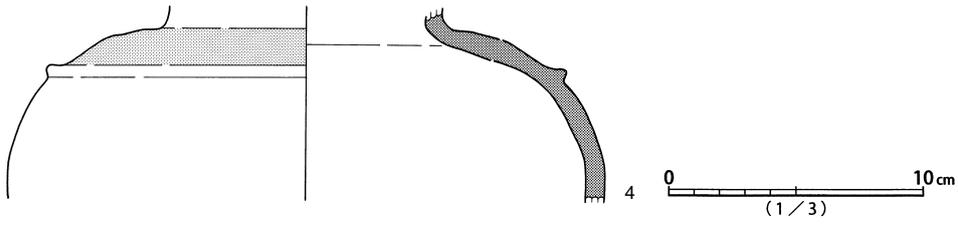


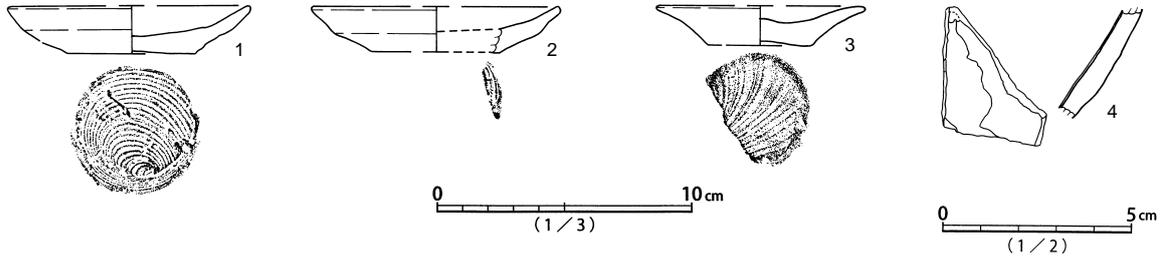
Fig.378 SK-161 ~ 169遺構・出土遺物実測図



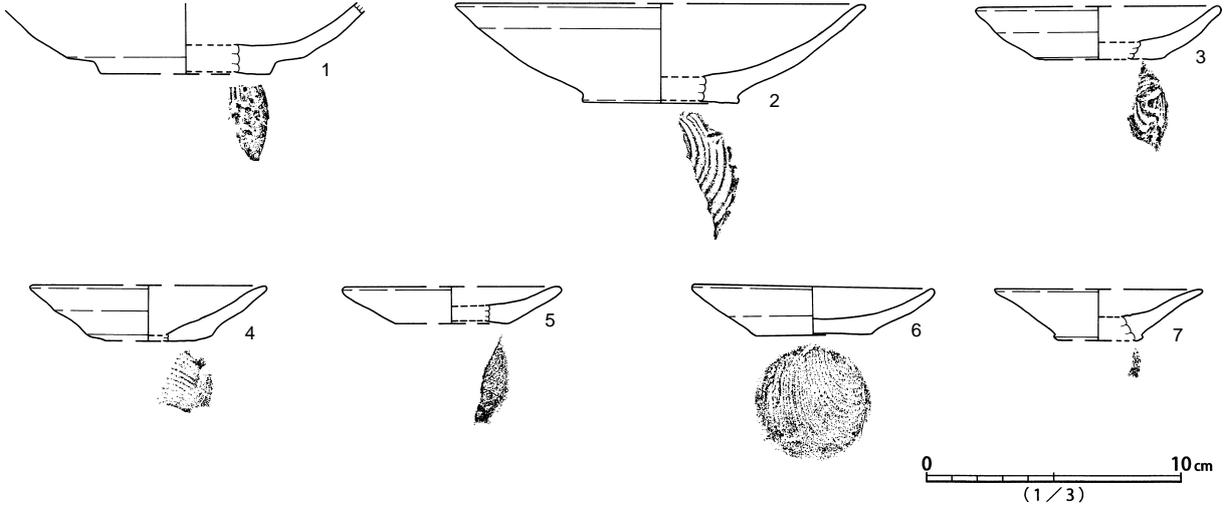
SK-164



SK-165



SK-166一括



SK-169

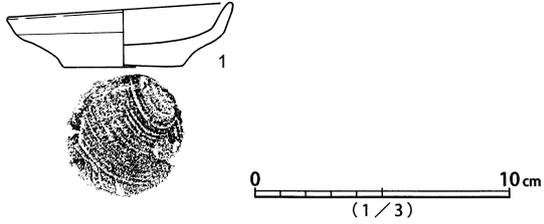
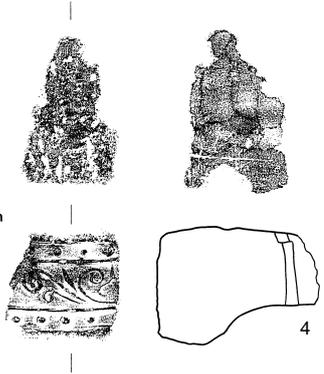
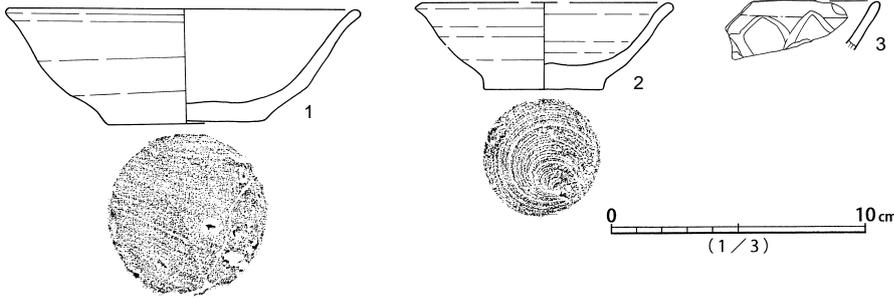
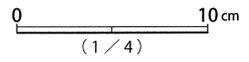
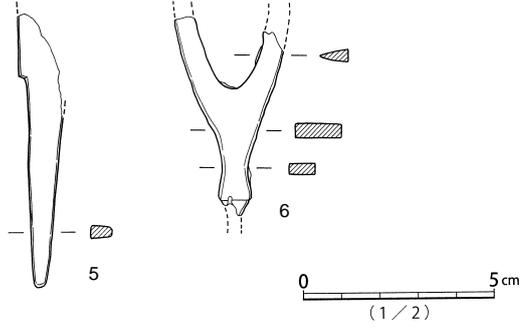
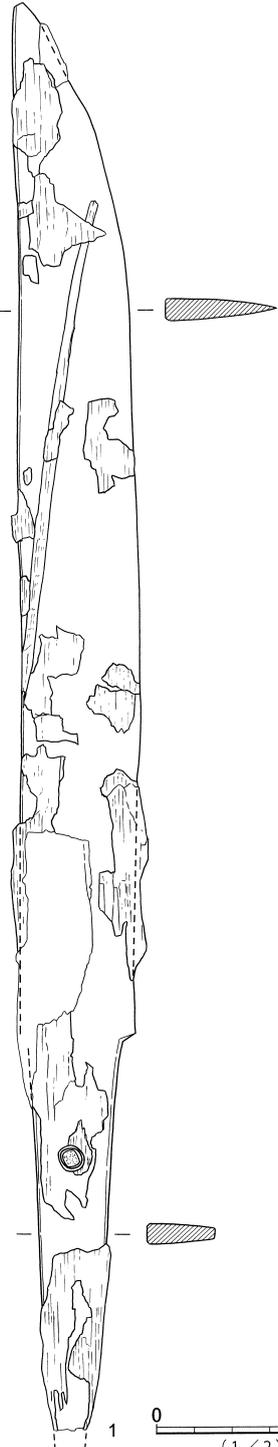


Fig.379 SK-163 ~ 166・169出土遺物実測図

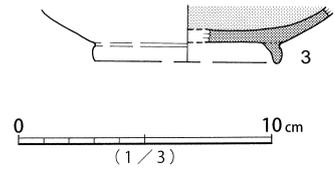
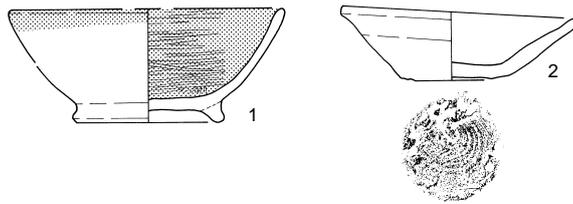
SK-170



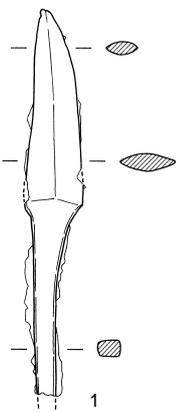
SK-172



SK-171



SK-173



SK-174

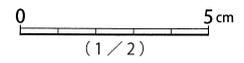
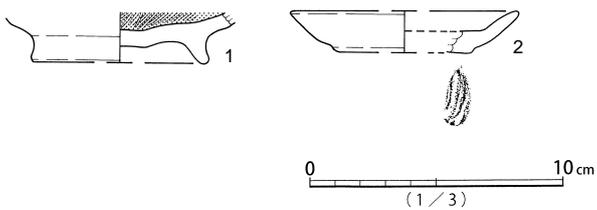


Fig.380 SK-170 ~ 174出土遺物実測図

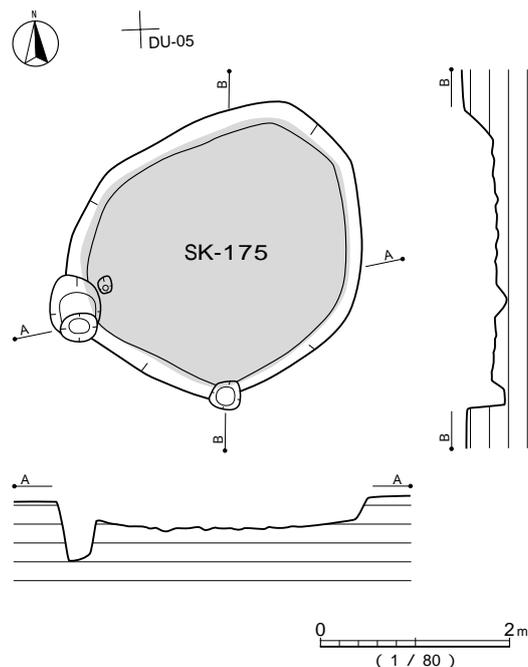


Fig.381 SK-175遺構実測図

出土遺物 1は土師器小形杯、2・3は土師器柱状高台土器、4・5・9は土師器小皿、6～8・10・11はカワラケ小皿、12は土師器高台付小皿、13は渥美壺、14・15は土師器ミニチュア土器、16は中世陶器壺、17は渥美甕、18は平瓦(縄)で、凸面に「周」の押型が認められ、19は環状金具、20は鉄釘、21は板状鉄製品、22・23は椀形滓である。

Grid. B300 (Fig.408、PL.149・178・227・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器椀で内面に黒色処理を施す。2・3は土師器小皿、4は瀬戸・美濃鉄瓶子か四目壺、5は砥石、6は金具、7は椀形滓である。

Grid. B400 (Fig.408、PL.149・178・195・222)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器柱状高台土器、2はカワラケ小皿、3は支脚、4は斜格子叩きの平瓦で、側面に木杵痕が認められる。

Grid. C100 (Fig.409・410、PL.150・178・188・222・227・235)

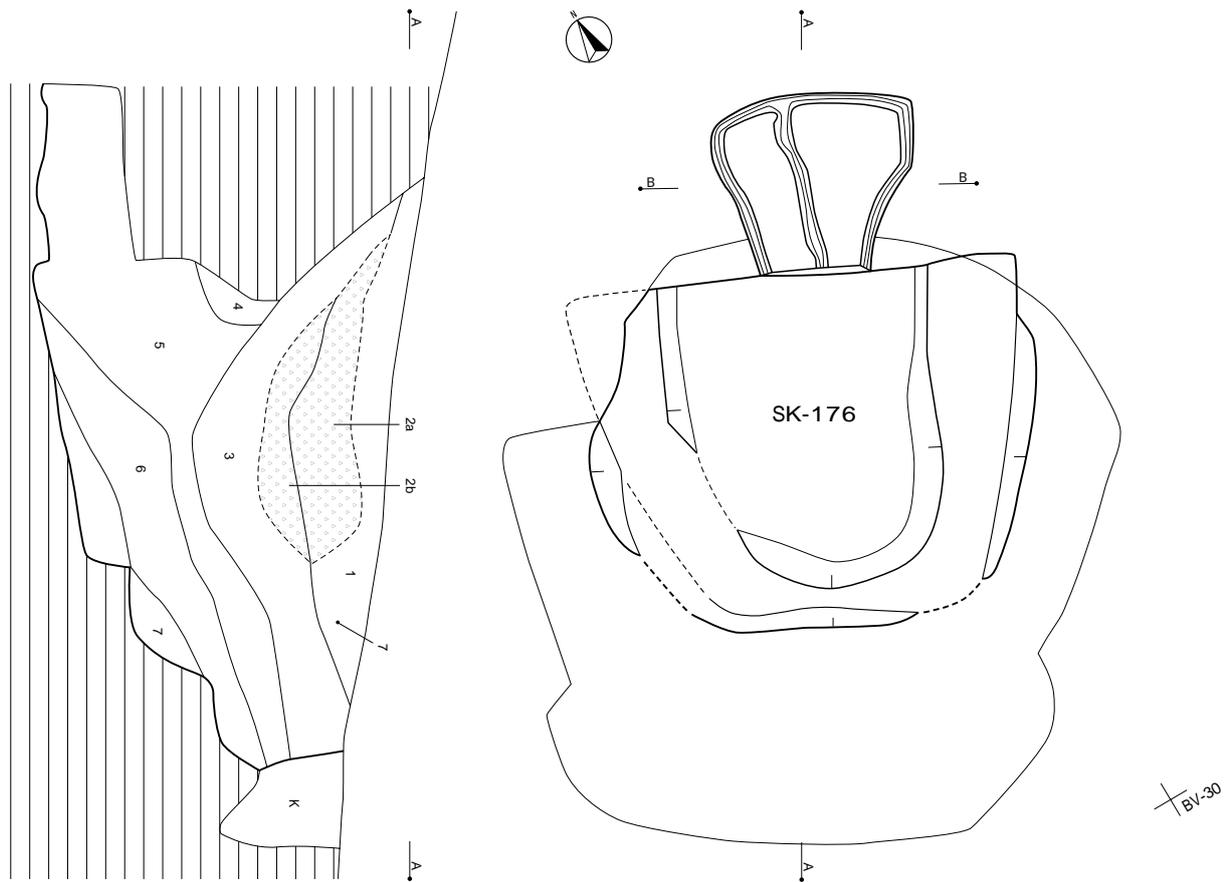
遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1・2は土師器杯、3～5は土師器足高高台付杯、6～19は土師器小皿、20～23はカワラケ小皿、24は平瓦(縄)で、凸面に「周」の押型が認められる、25は敲石、26・29は刀子、27は不明利器、28は紡錘車紡輪部である。

Grid. C200 (Fig.410・411、PL.150・178・187・195・227・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は墨書が認められる土師器杯、2・3は土師器杯、4は土師器高杯、5は土師器椀、6～9は土師器小皿、10は灰釉陶器小形瓶で黒笹90号窯式とみられる、11は緑釉陶器椀、12は不明土製品、13は



SK-176

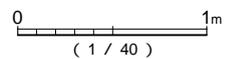
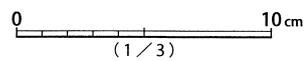
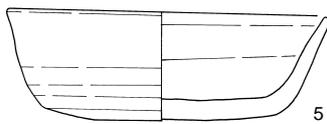
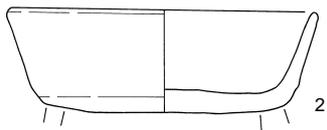
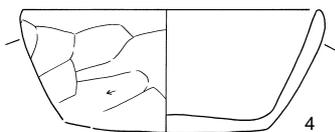
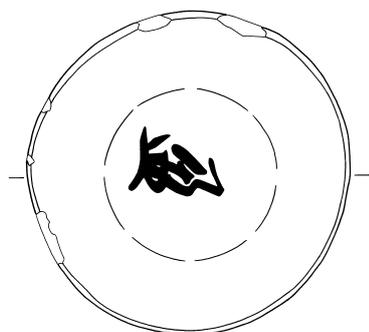


Fig.382 SK-176遺構・出土遺物実測図

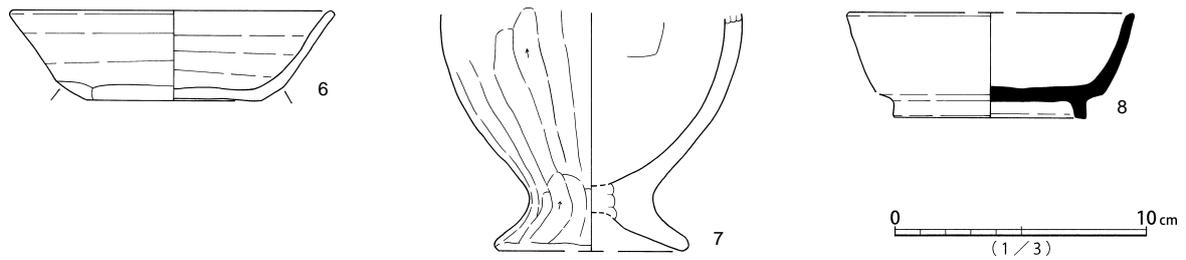


Fig.383 SK-176出土遺物実測図

足高高台付土器の転用紡錘車、14は砥石、15・18は板状鉄製品、16は門金具、17は板状铸造品、19は紡錘車軸部、20は鉄滓である。

Grid. C300 (Fig.411・412、 PL.151・178・192・193・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1・3は線刻が認められる土師器杯で、1は五芒星、3は「 × 」、2・4～11は土師器杯で、2はヘラガキ「得万」が認められ、12は土師器椀、13・14は土師器小皿、15は土師器甕、16は産地不明須恵器甕、17は灰釉陶器椀で、黒笹90号窯式の古相を示す。19は鉄鏃、20は鉄製刀子、21は鉄製紡錘車軸部である。

Grid. C400 (Fig.412、 PL.151・178・227)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1・2は土師器杯、3は土師器小皿、4は灰釉陶器瓶類転用硯、5・6は磨石である。

Grid. D100 (Fig.413、 PL.151・152・178・192・227・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は線刻で、九字切りの認められる土師器杯、2～4は土師器杯、5は土師器柱状高台土器、6は土師器椀で内面に黒色処理を施す。7～14は土師器小皿、15は永田窯 期の須恵器杯、16・17は龍泉窯青磁椀、18は瀬戸・美濃稜皿大窯不明製品、19は敲石、20は鎌、21は板状鉄製品、22は鉄製刀子、23は椀形滓である。

Grid. D200 (Fig.414・415、 PL.152・178・187・195・227・235)

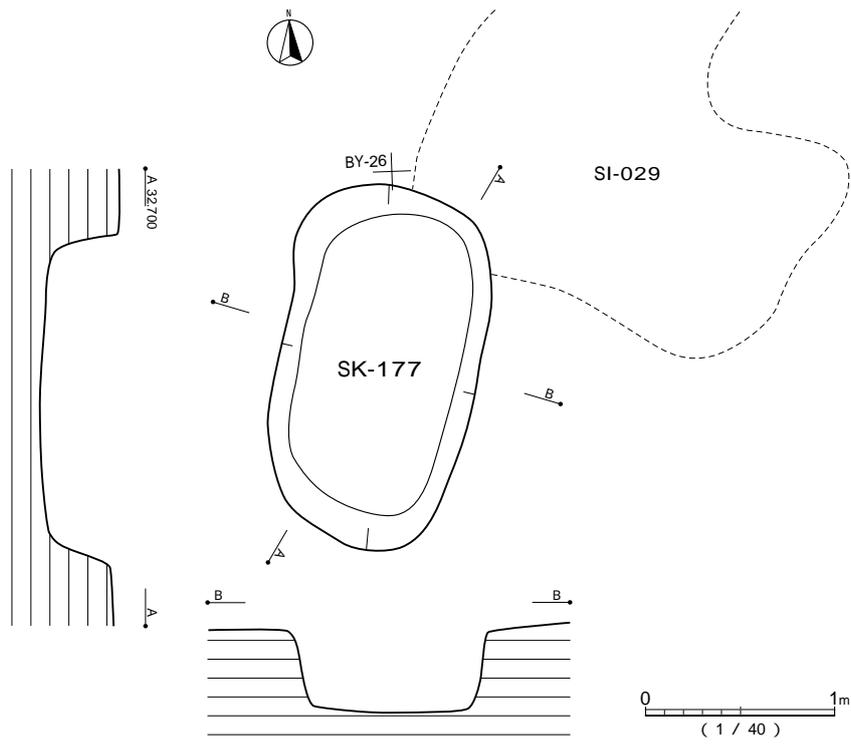
遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1・3・4は墨書の認められる土師器杯で、1は「益カ」、3は「講院」、4は判読不明、2は大形カワラケで、多文字の墨書が認められるが判読不明、5・6はカワラケで判読不明の墨書が認められ、7は土師器小形杯、8は土師器椀で内面に黒色処理を施す。9は土師器小皿、10・11はカワラケ小皿、12は千葉産須恵器甕、13は東海産とみられる須恵器壺、14は灰釉陶器椀で黒笹14号窯式、15は灰釉陶器椀で折戸53号窯式とみられるが美濃の可能性もある、16は灰釉陶器椀で折戸53号窯式とみられるが美濃の可能性もある、17は龍泉窯青磁椀、18は龍泉窯青磁酒会壺、20は二彩鉢、19は転用土製品、21は温石、22～24は磨石、25は菊花双鳥鏡片、26は鉄釘である。

Grid. D300 (Fig.415、 PL.152・178・223・227・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器柱状高台土器、2・3はカワラケ小皿、4は土師器鉢、5は常滑甕、6は常滑片口



SK-177

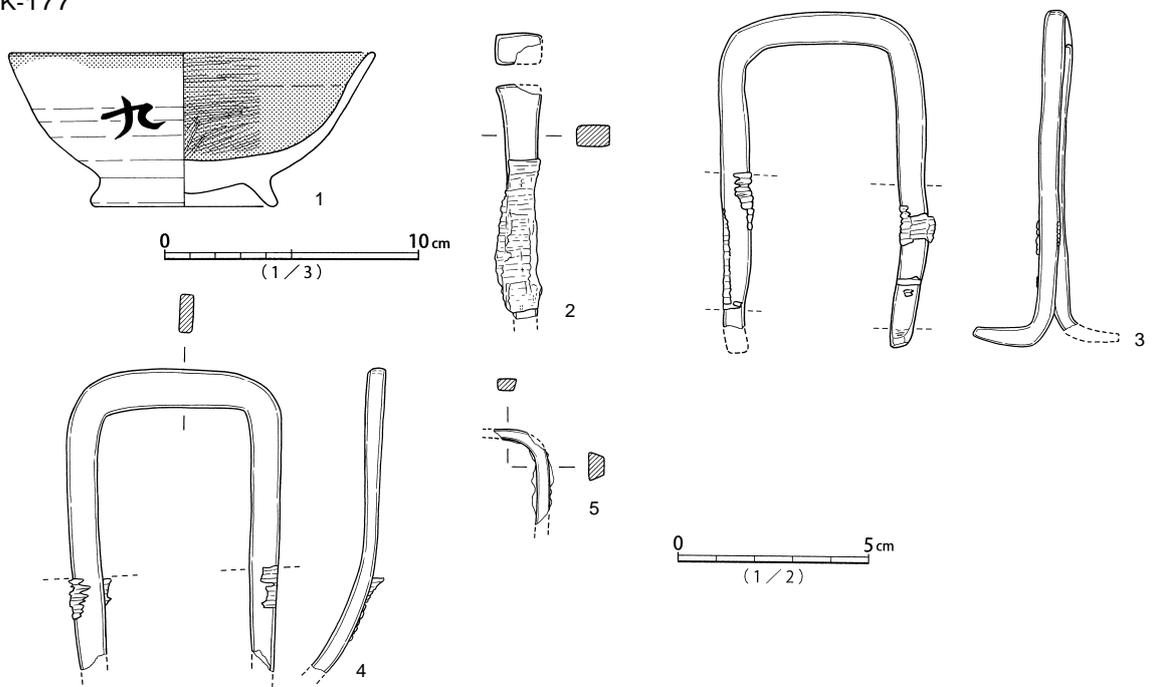


Fig.384 SK-177遺構・出土遺物実測図

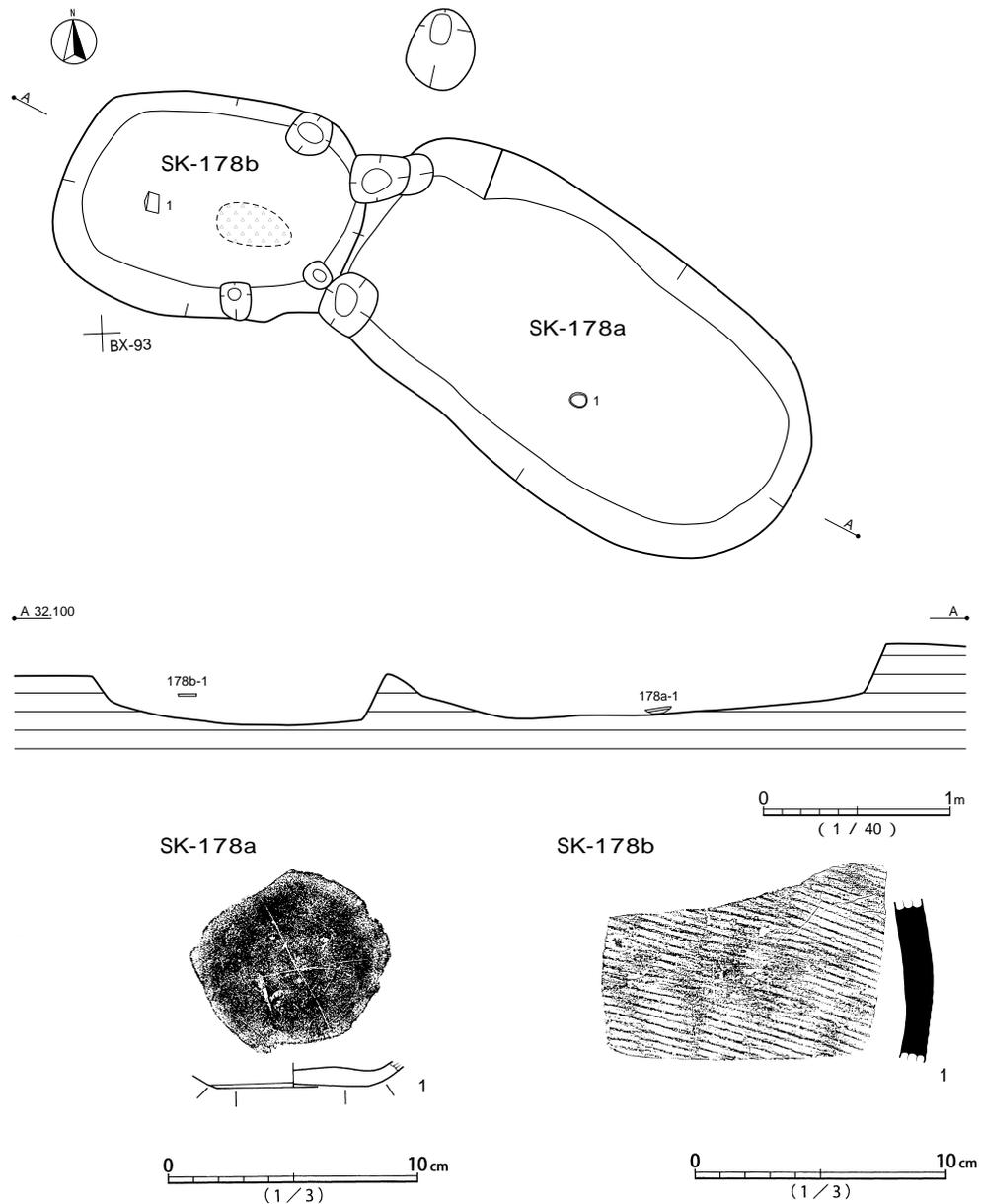


Fig.385 SK-178遺構・出土遺物実測図

鉢、7は不明土製品、8は凸面縄目叩き軒平瓦、9は金床石か、10は鉄釘である。

Grid. D400 (Fig.416、 PL.152・153・178・193・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1~3は土師器杯、4は土師器碗で内面に黒色処理を施す。5・6は土師器皿で、6はヘラガキが認められ、7は灰釉陶器碗で黒笹90号窯式古相を示す、8は曲刃鎌、9・10は鉄釘である。

Grid. D500 (Fig.416、 PL.235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は鉄製刀子である。

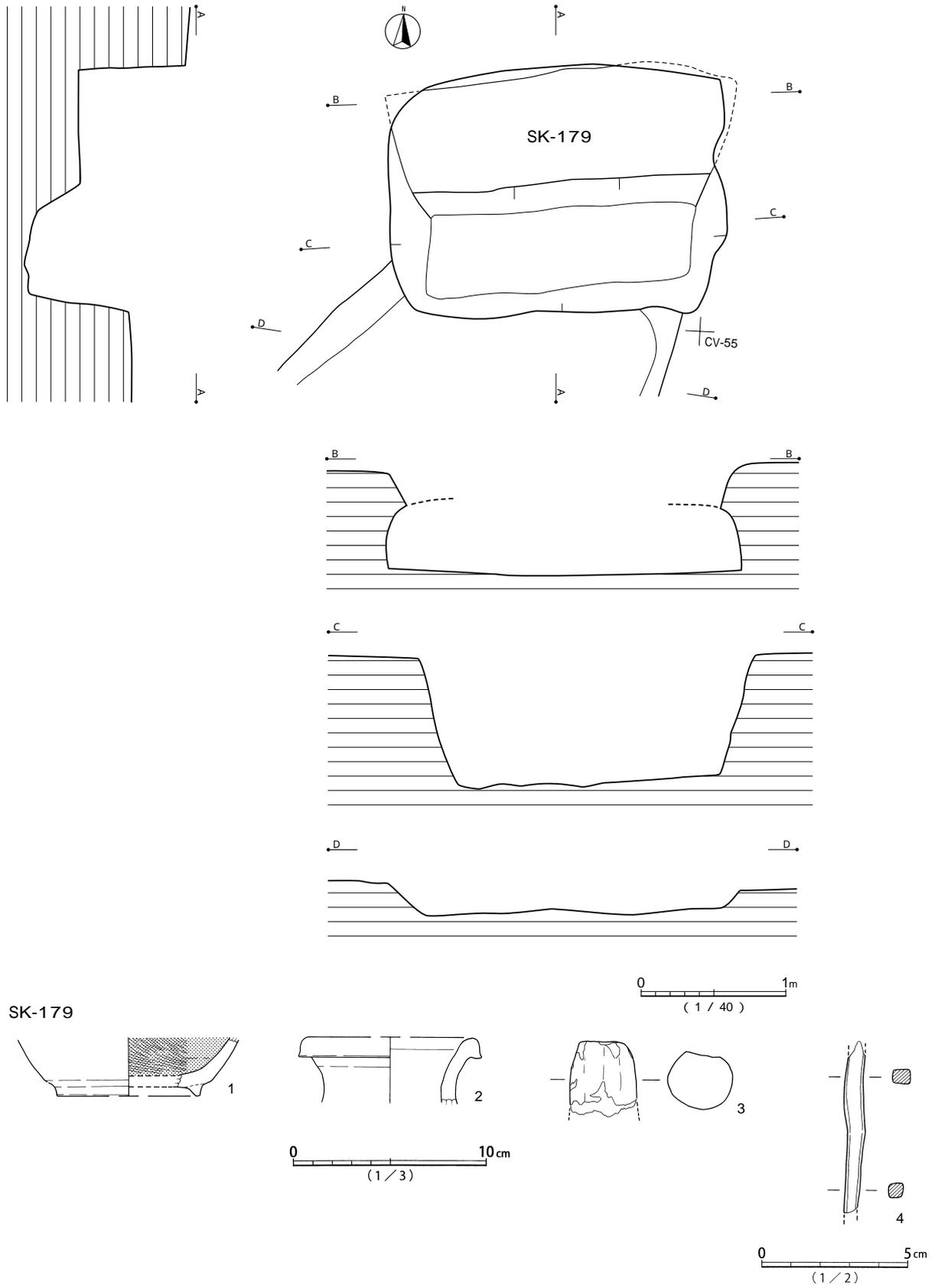


Fig.386 SK-179遺構・出土遺物実測図

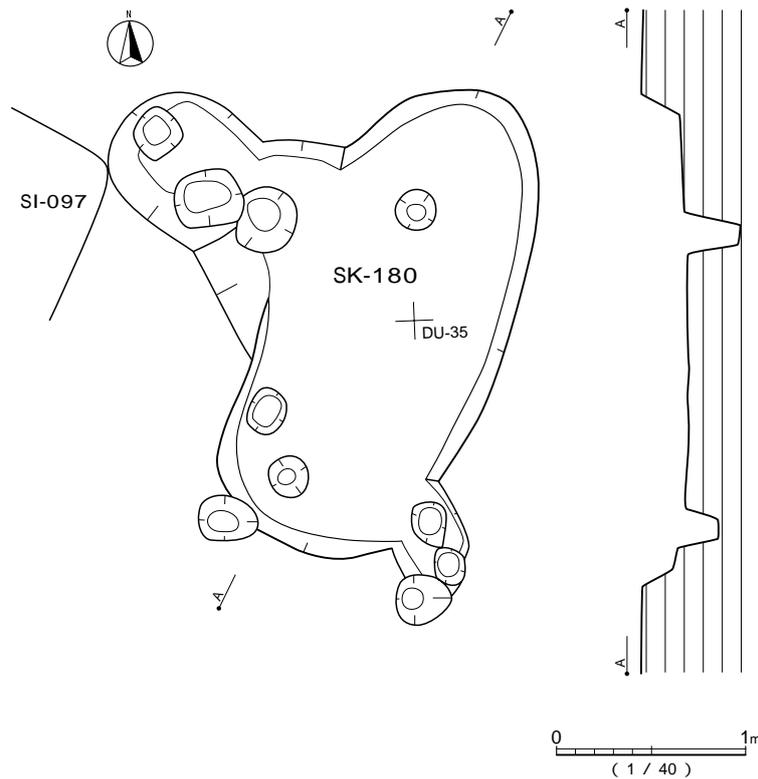


Fig.387 SK-180遺構実測図

Grid. E100 (Fig.417、 PL.153・178・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1・2はカワラケ小皿、3は 類か 1aの白磁椀、4は鉄製刀子、5は板状鉄製品である。

Grid. E200 (Fig.417・418、 PL.153・178・193・227・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器椀で内面に黒色処理を施す。2は線刻の認められる土師器小形杯、3～5は土師器杯で3は内面に黒色処理を施す。6は土師器高杯、7は土師器小形椀、8は土師器高台付皿、9は土師器甕、10は灰釉陶器椀で黒笹90号窯式、11は常滑壺、12・13は砥石、14は磨石、15は刀子、16は鉄釘である。

Grid. E300 (Fig.418、 PL.153・178・188・193・195・227・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は墨書の認められる土師器杯、2は線刻の認められる土師器杯、3は土師器杯、4は土師器足高高台付杯、5・6は土師器小皿、7・8はカワラケ小皿、9は永田窯 期の須恵器杯、10は土錘、11は砥石、12は金槌、13は板状鉄製品、14は椀形滓である。

Grid. E400 (Fig.419、 PL.153・178・188・227・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

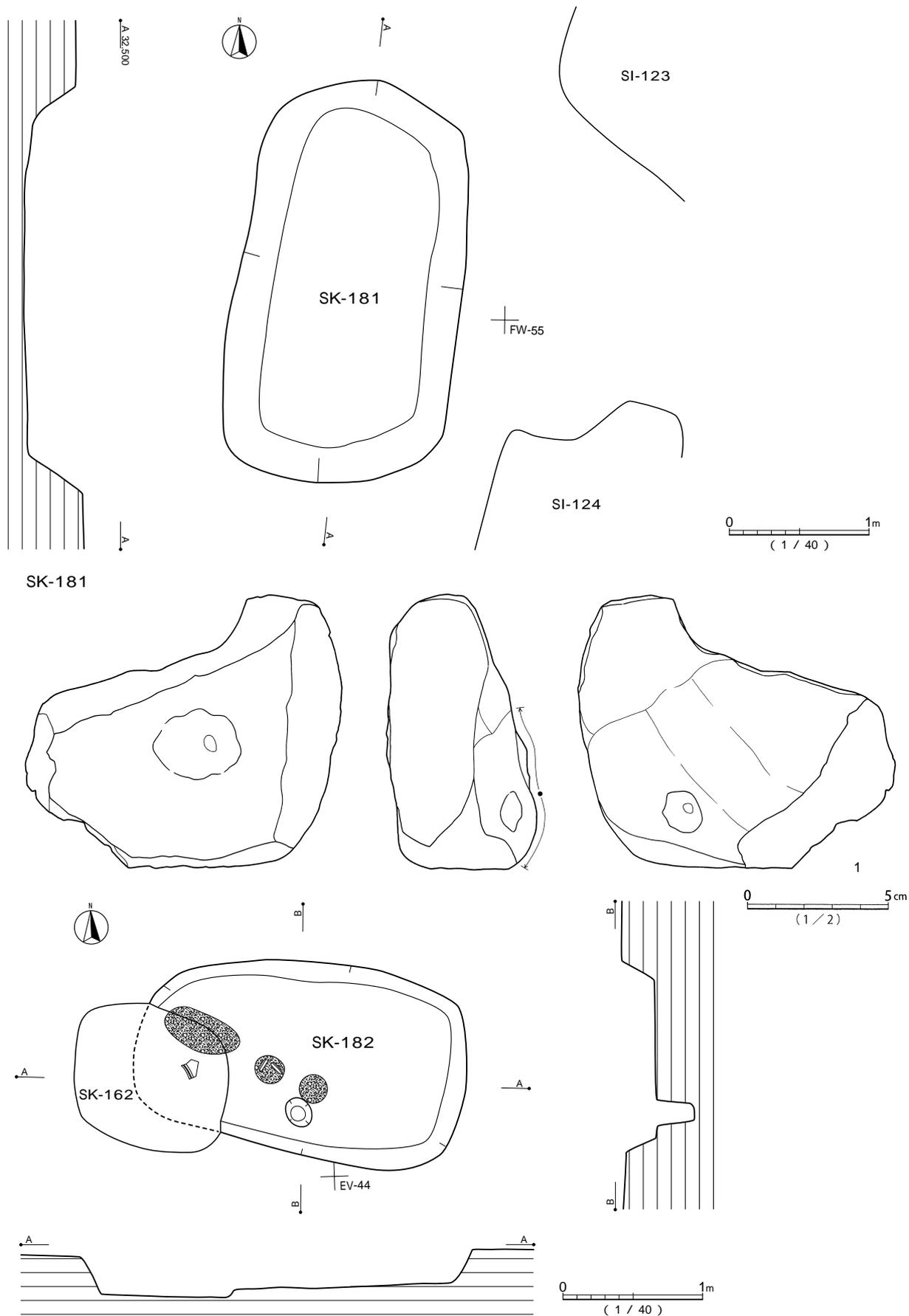


Fig.388 SK-181・182遺構・出土遺物実測図

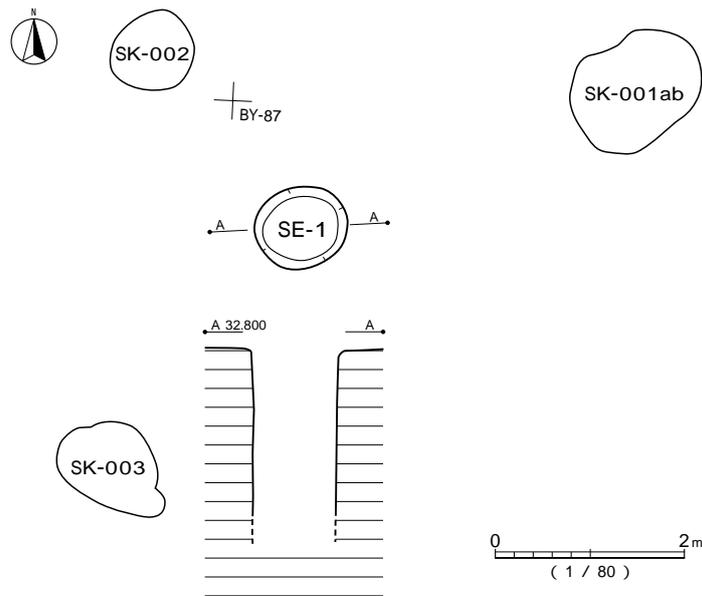


Fig.389 SE-1遺構実測図

出土遺物 1は墨書の認められる土師器杯、2は土師器杯、3が龍泉窯 -5a 類青磁碗、4は磨石、5は不明石器、6は不明鉄製品である。

Grid. E500 (Fig.419・420、 PL.153・178・188・193・223)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は墨書の認められる土師器杯、2・4は線刻が認められる土師器杯、3はヘラガキの認められる土師器杯、5は土師器杯、6は線刻が認められる丸瓦、7が羽口である。

Grid. E600 (Fig.420、 PL.178・193・227)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1はカワラケ小皿で、底部外面にヘラガキが認められる、2は磨石、3は椀形滓である。

Grid. E700 (Fig.420、 PL.153)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器杯で内面に黒色処理を施す。2・3は土師器甕である。

Grid. F100 (Fig.421、 PL.178)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は 類、11世紀後半代の白磁碗、2は華南産、 1a類で11世紀後半～12世紀の白磁碗、3は型式不明の白磁碗である。

Grid. F200 (Fig.421、 PL.154・178・235)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器碗で内面と外面口縁部に黒色処理を施す。2は土師器小皿、3は永田窯 期の須恵器杯、4は灰釉陶器碗で黒笹90号窯式、5は鉄釘である。

Grid. F300 (Fig.421・422、 PL.154・178・179・227・235)

南西部ピット群

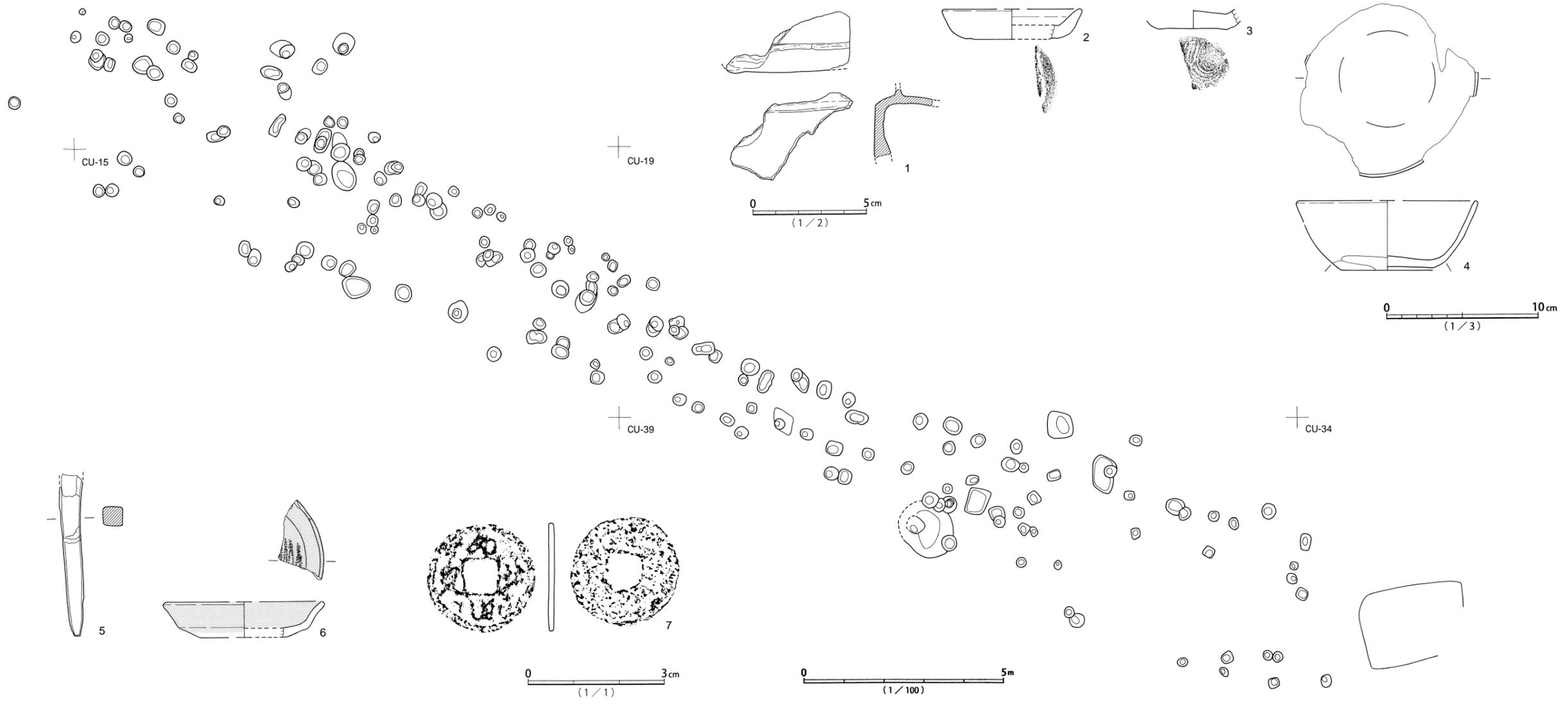
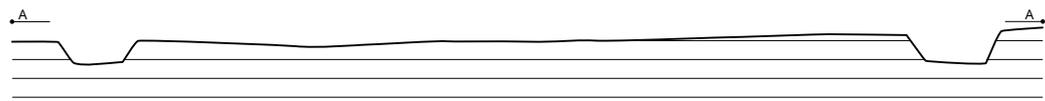
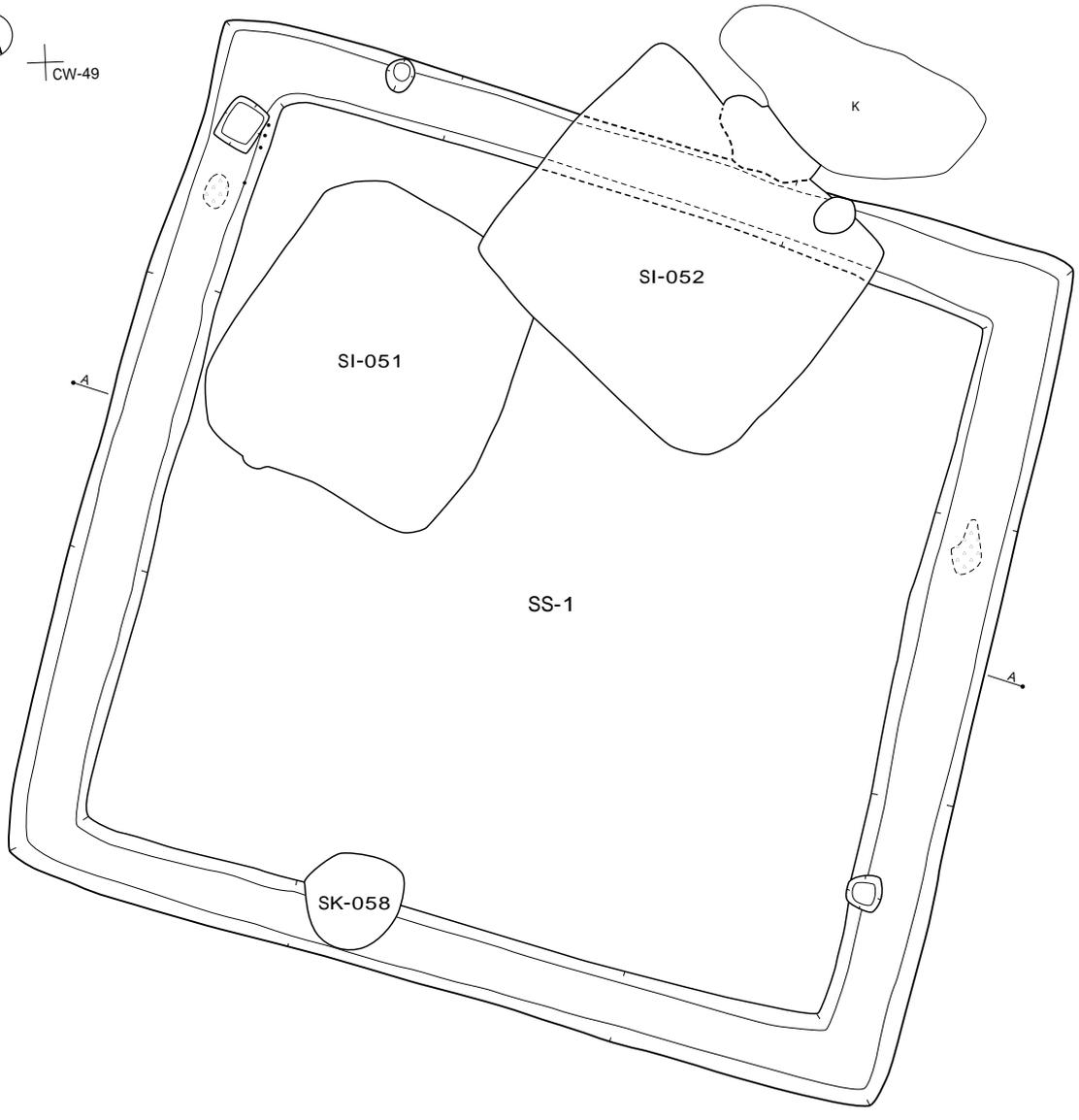


Fig.390 南西部ピット群遺構・出土遺物実測図



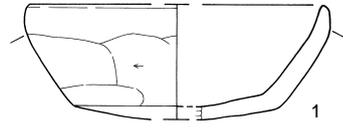
CW-49

CX-43

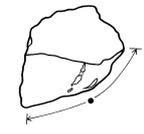
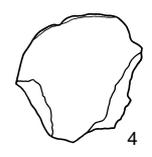
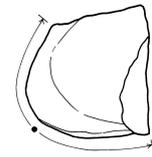
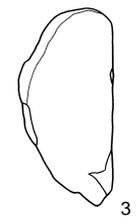
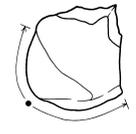
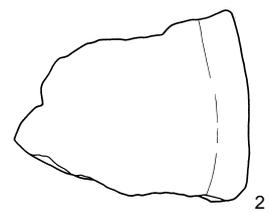
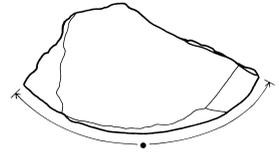


0 2m
(1 / 80)

SS-1



0 10cm
(1 / 3)



0 5cm
(1 / 2)

Fig.391 SS-1遺構・出土遺物実測図

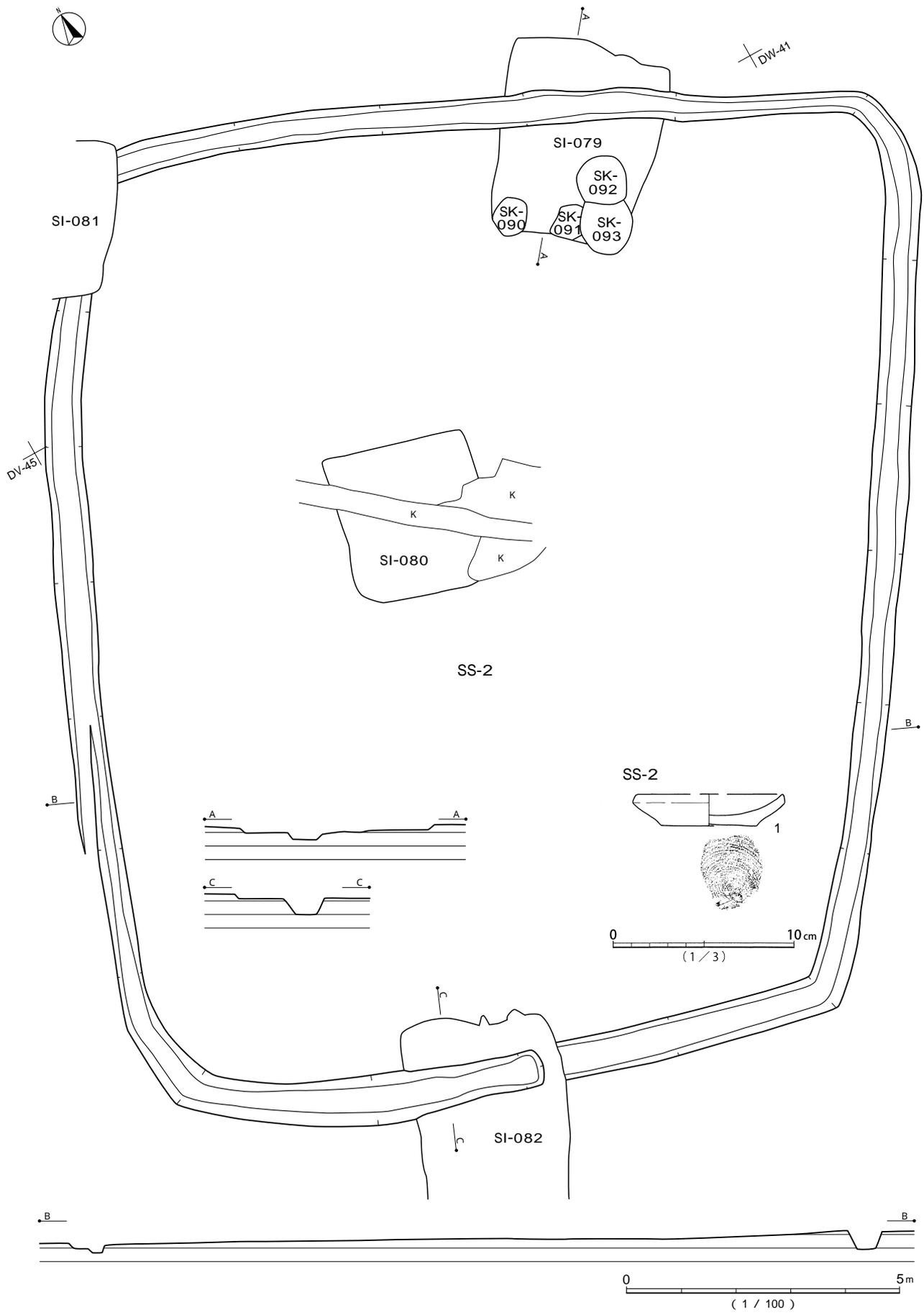


Fig.392 SS-2遺構・出土遺物実測図

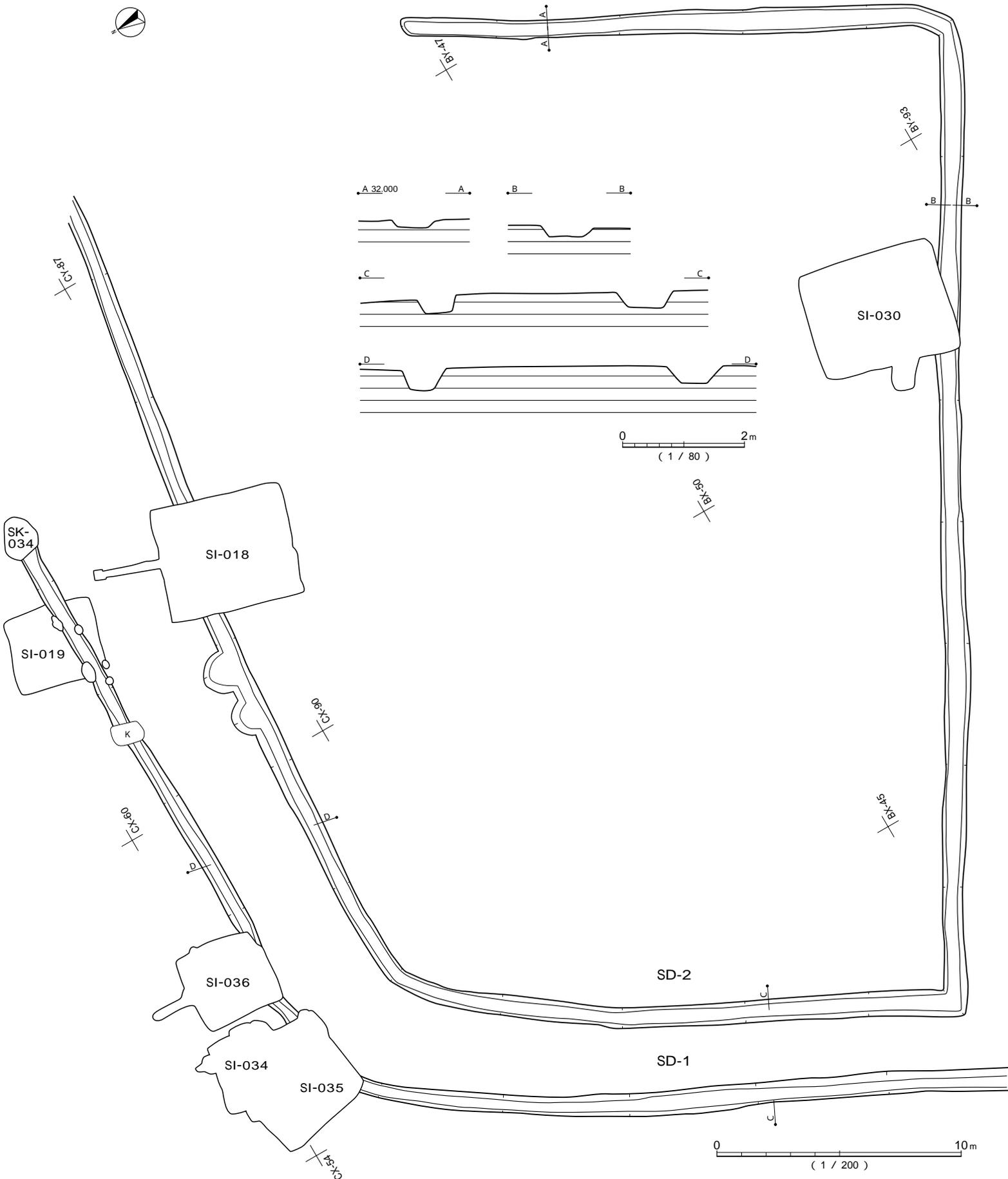
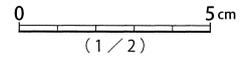
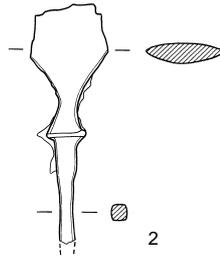
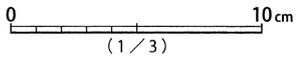
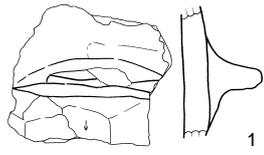


Fig.393 SD-1・2遺構実測図

SD-1



SD-2

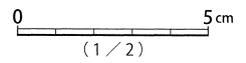
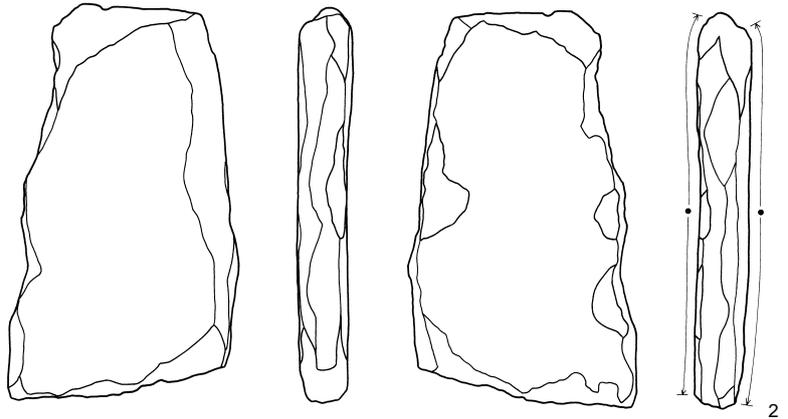
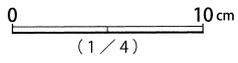
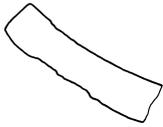
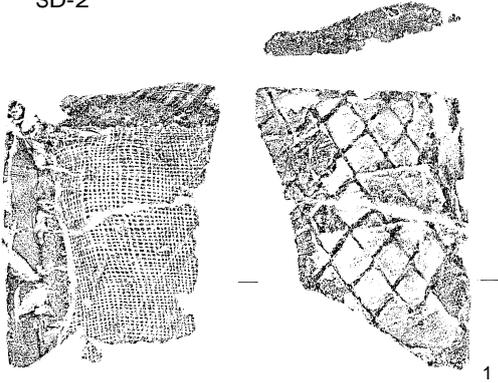


Fig.394 SD-1・2出土遺物実測図

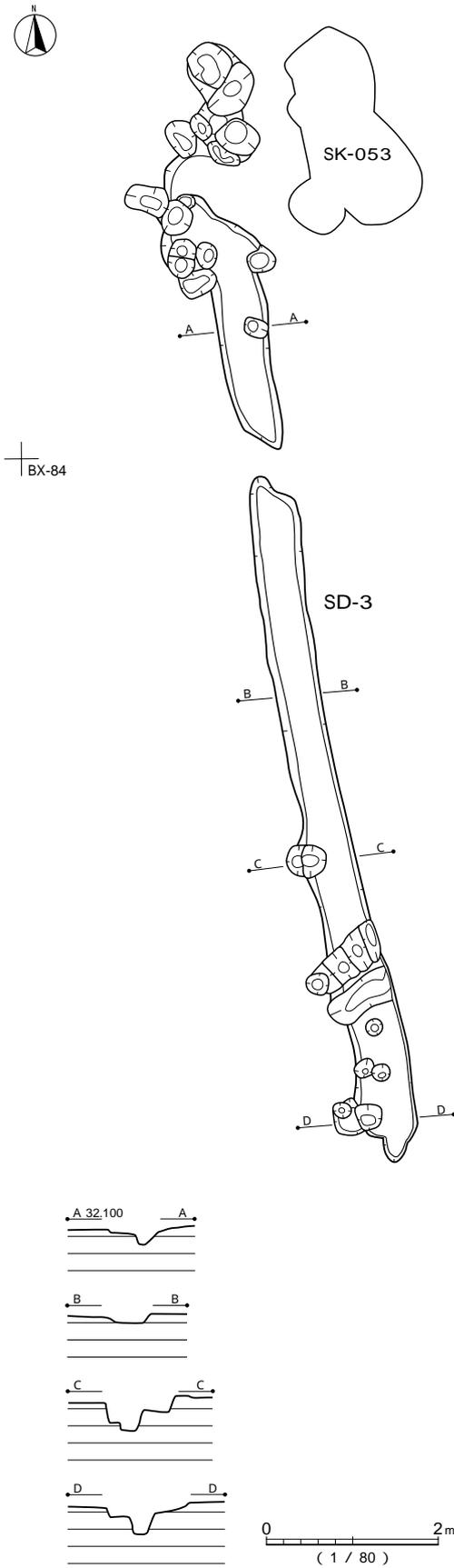


Fig.395 SD-3遺構実測図

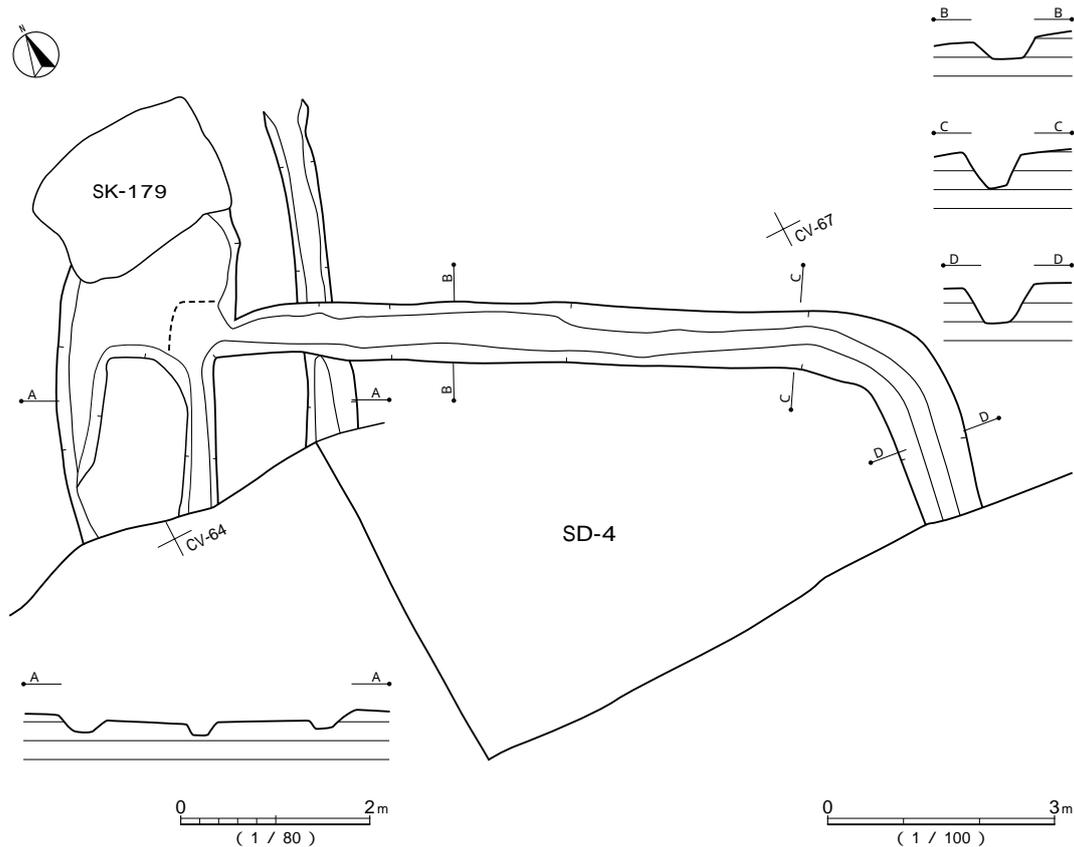


Fig.396 SD-4遺構実測図

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器大形杯、2は土師器椀、3～5は土師器小皿、6は猿投産須恵器甕、7は湖西産とみられる須恵器甕、8は武蔵産とみられる須恵器甕、9・10は渥美広口壺、11は常滑片口鉢、12・13は砥石、14は鉄釘、15は不明鉄製品である。

Grid. F400 (Fig.422・423、PL.154・179・188・223・235・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器杯、2は千葉産須恵器甕、3は土師器甕、4は9世紀代の灰釉陶器壺で、5は原始灰釉陶器平瓶、6は緑釉陶器壺類、7は平瓦(縄)で、凸面に「周」の押型が認められ、8は円盤状鉄製品、9・10は鉄釘、11は不明鉄製品、12は鉄鏝、14・15は椀形滓である。

Grid. F500 (Fig.423・424、PL.154・179・223・227・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器杯、2は土師器椀で内面に黒色処理を施す。3・4は土師器小皿、5はカワラケ小皿、6は瀬戸美濃大窯丸椀、7は矢羽根及び正格子叩きの平瓦、8は矢羽根叩きの平瓦、9・10は金床石か、11・12は鉄製刀子、13～15は鉄釘、16は椀形滓である。

Grid. F600 (Fig.424・425、PL.154・179・193・223・227・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

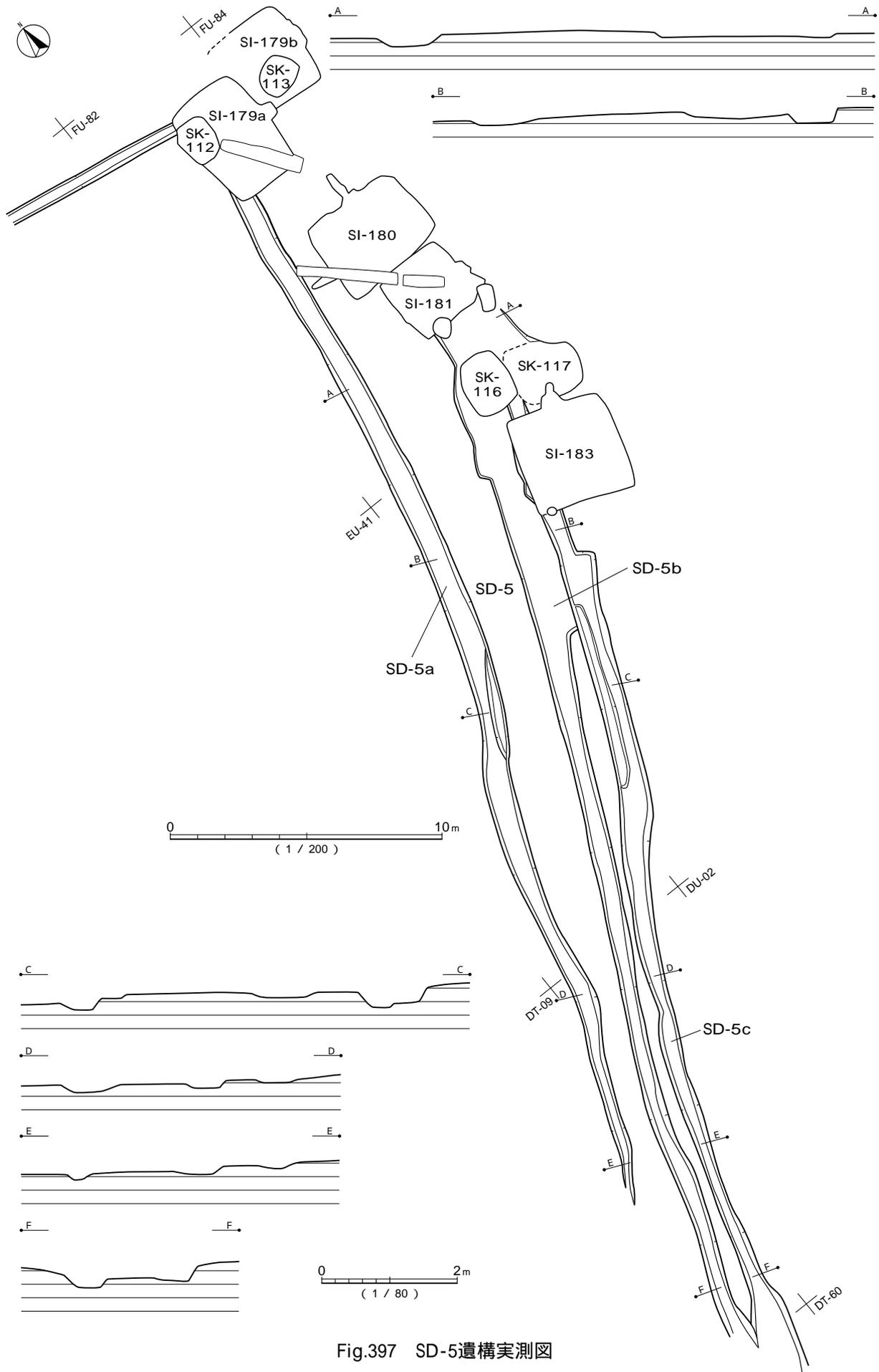


Fig.397 SD-5遺構実測図

SD-5a ~ d

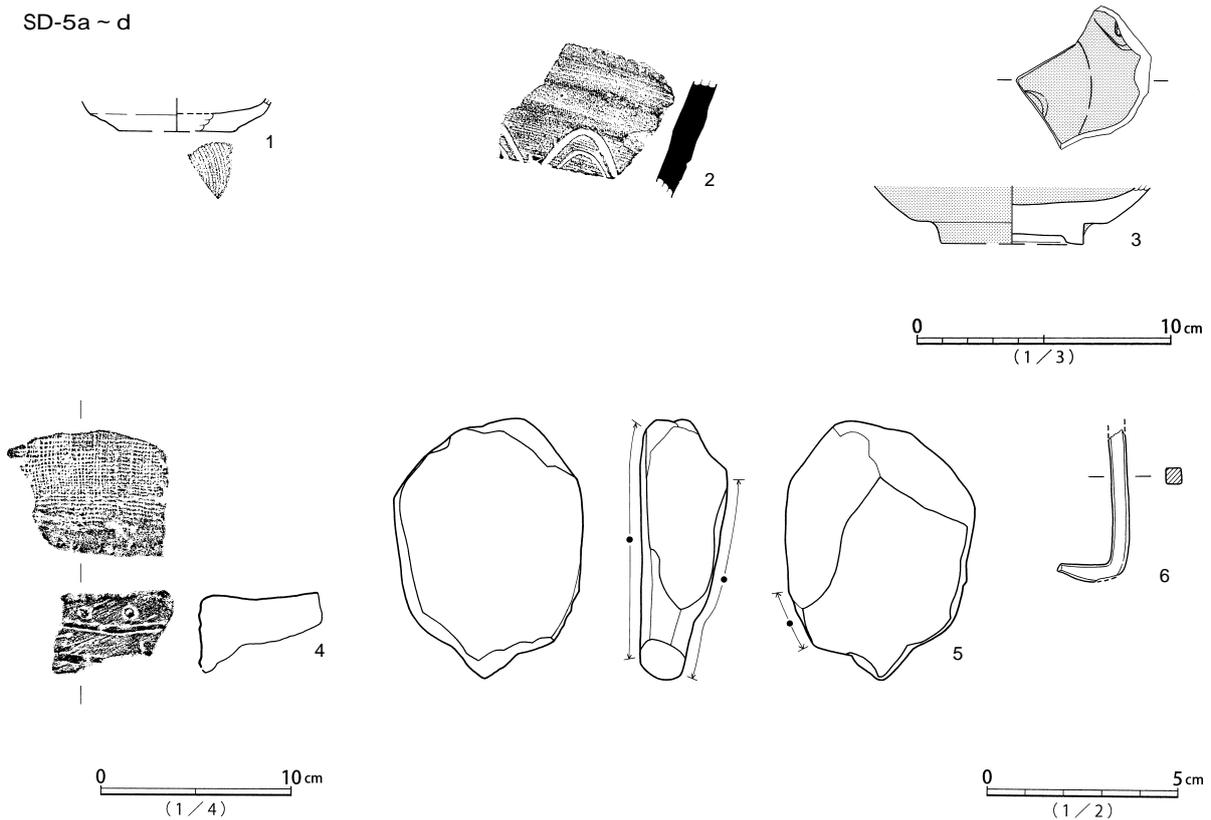


Fig.398 SD-5出土遺物実測図

出土遺物 1は線刻の認められる土師器杯、2は底部外面にヘラガキが認められる土師器杯、3~5は土師器杯、6は土師器小形椀、7~9は土師器小皿、10は土師器高台付小皿、11は永田窯 ~ 期の須恵器杯、12は10世紀代の灰釉陶器壺、13は凸面矢羽根叩きの平瓦、14は磨製石斧、15は板状鉄製品、16は鉄釘、17は不明鉄製品、18は円盤状鉄製品、19は椀形滓である。

Grid. G100 (Fig.426、 PL.179)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は常滑片口鉢、2は常滑甕である。

Grid. G200 (Fig.426、 PL.154・179)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器小皿、2は灰釉陶器皿で黒笹90号窯式、3は二彩鉢である。

Grid. G300 (Fig.426、 PL.155・179・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器椀、2は土師器小皿、3は永田窯 期の須恵器杯、4は東海産緑釉陶器椀、5は灰釉陶器椀で黒笹90号窯式、6は鉄製刀子、7は鉄製紡錘車である。

Grid. G400 (Fig.427、 PL.155・188・223・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

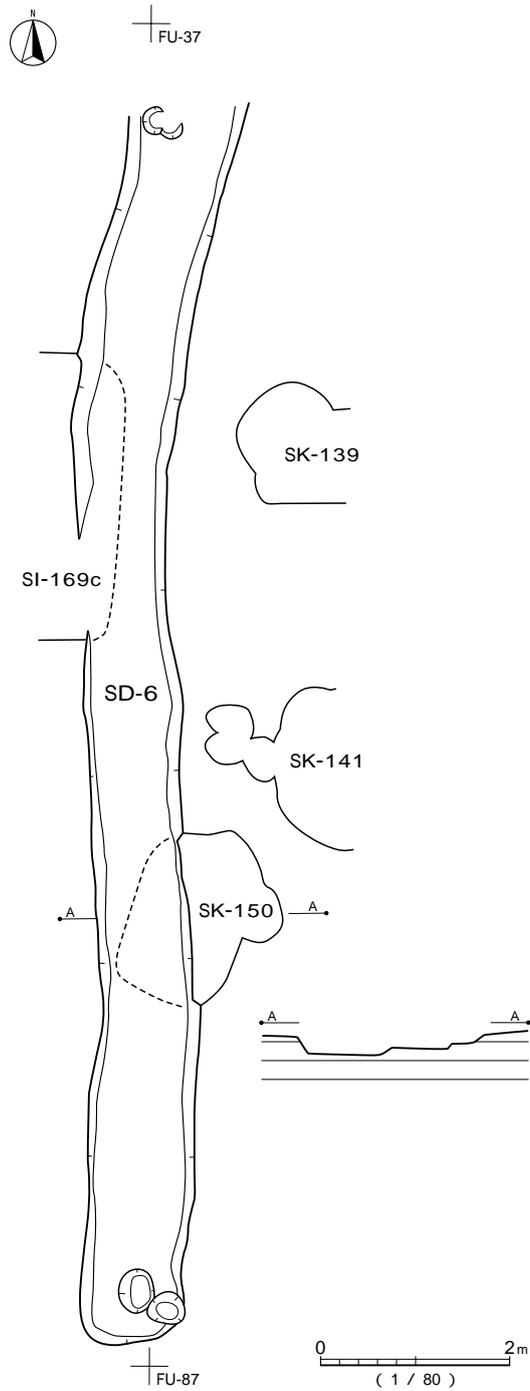


Fig.399 SD-6遺構実測図

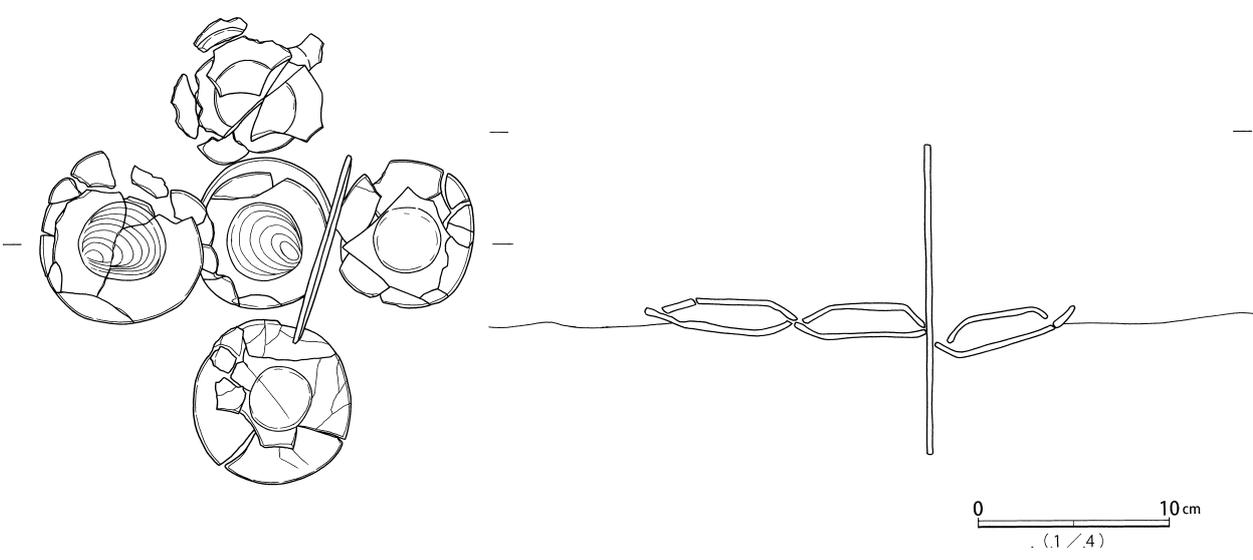


Fig.400 SM-1遺構・出土遺物実測図

SM-1

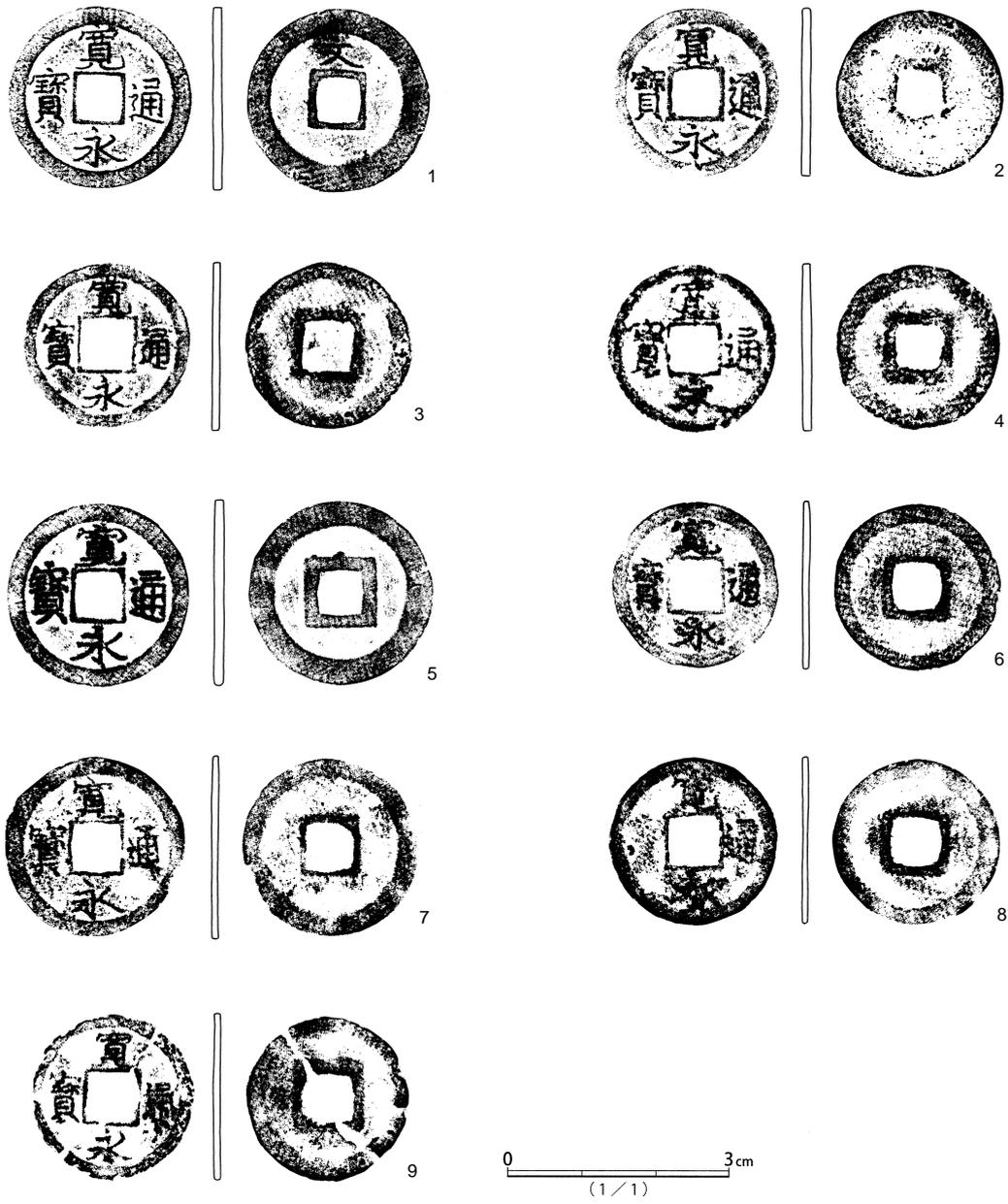
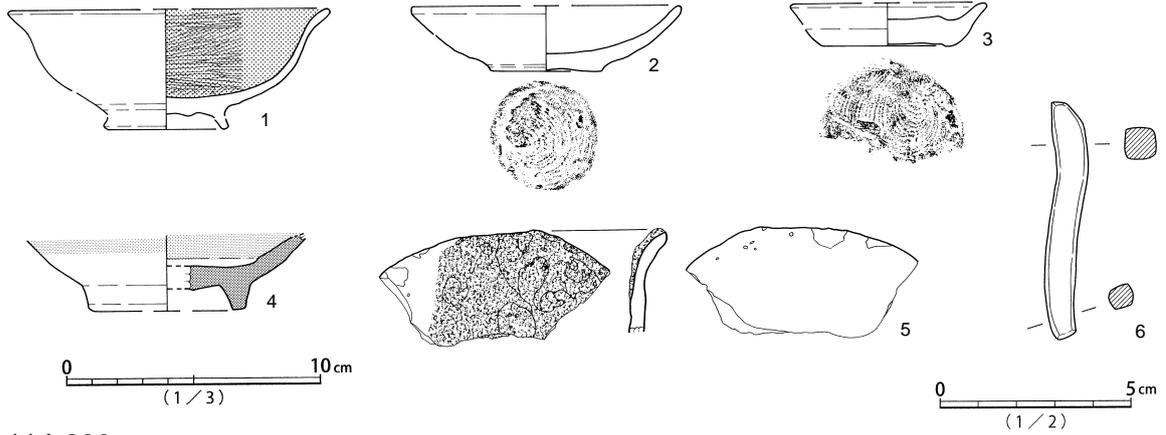
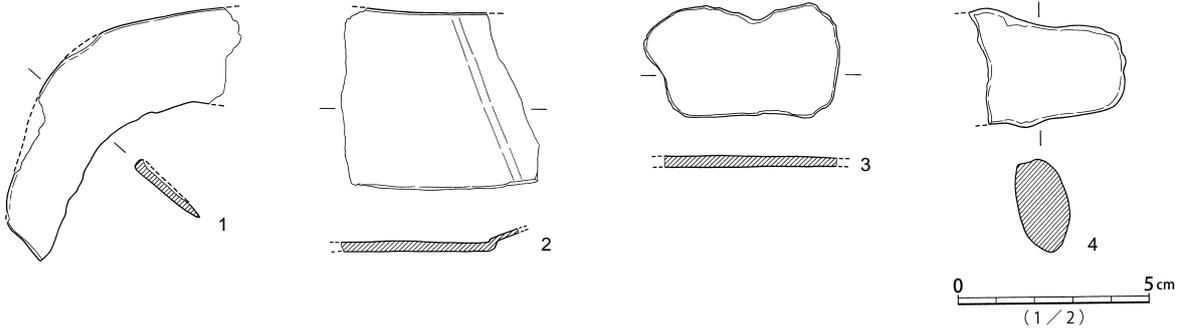


Fig.401 SM-1出土遺物実測図

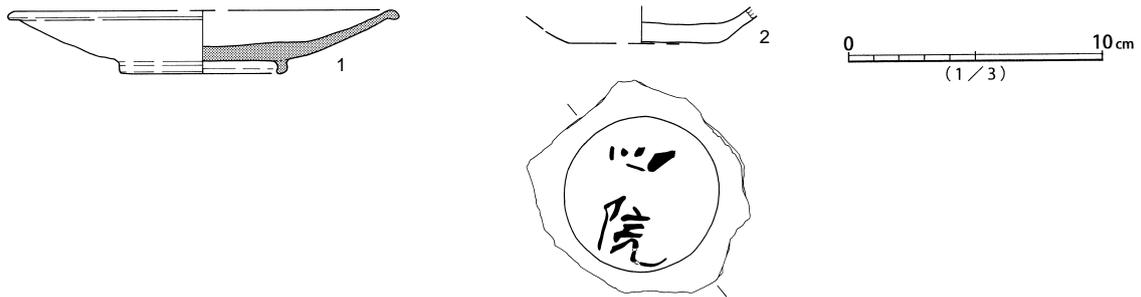
Grid A 100



Grid A 200



Grid A 300



Grid A 400

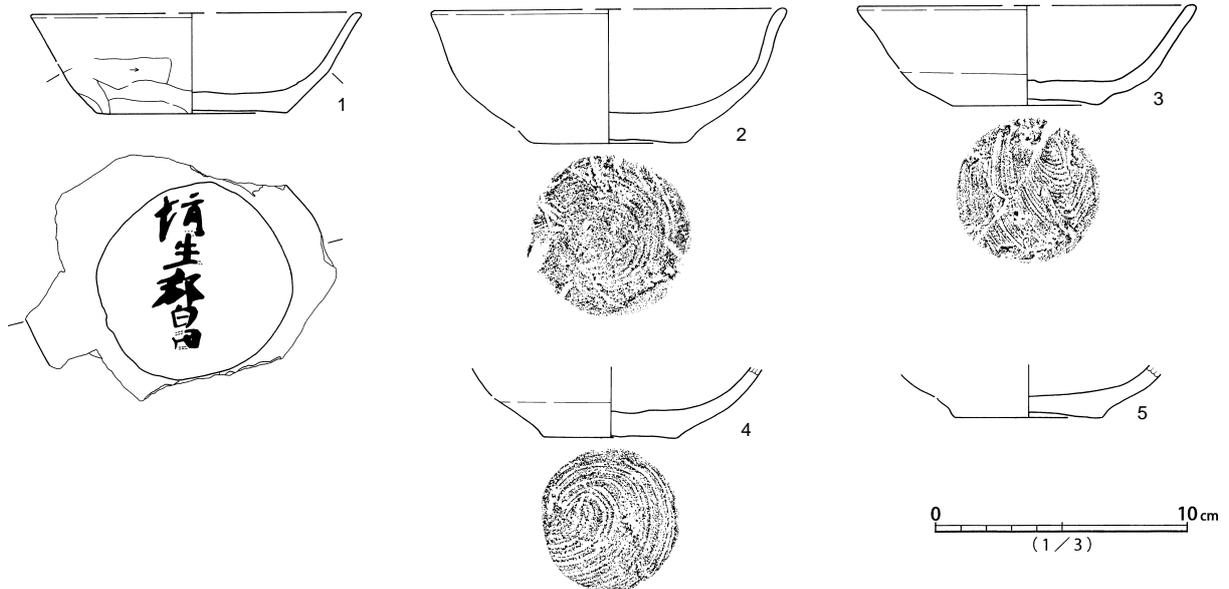


Fig.402 GridA 出土遺物実測図

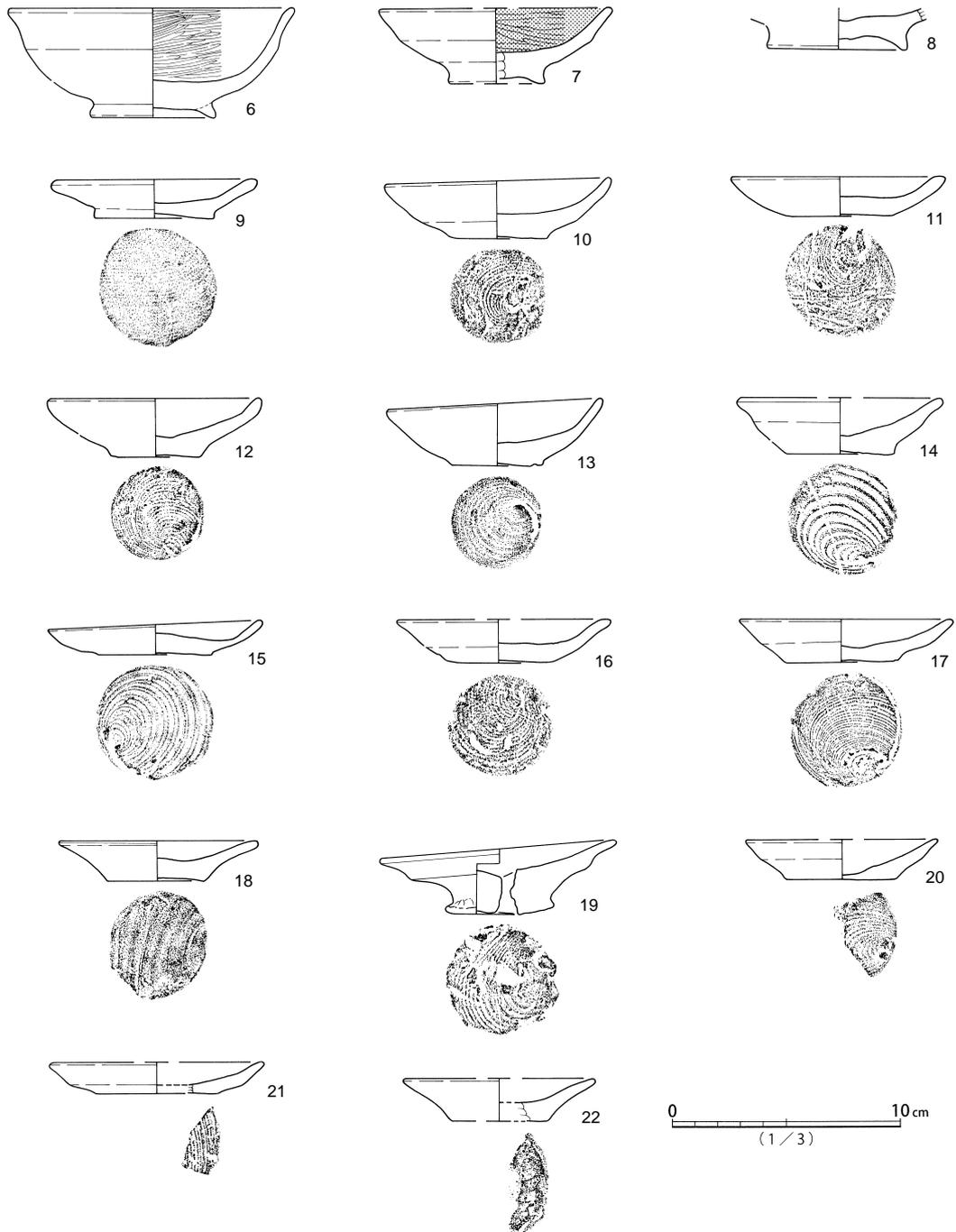


Fig.403 GridA 出土遺物実測図

Grid B 100

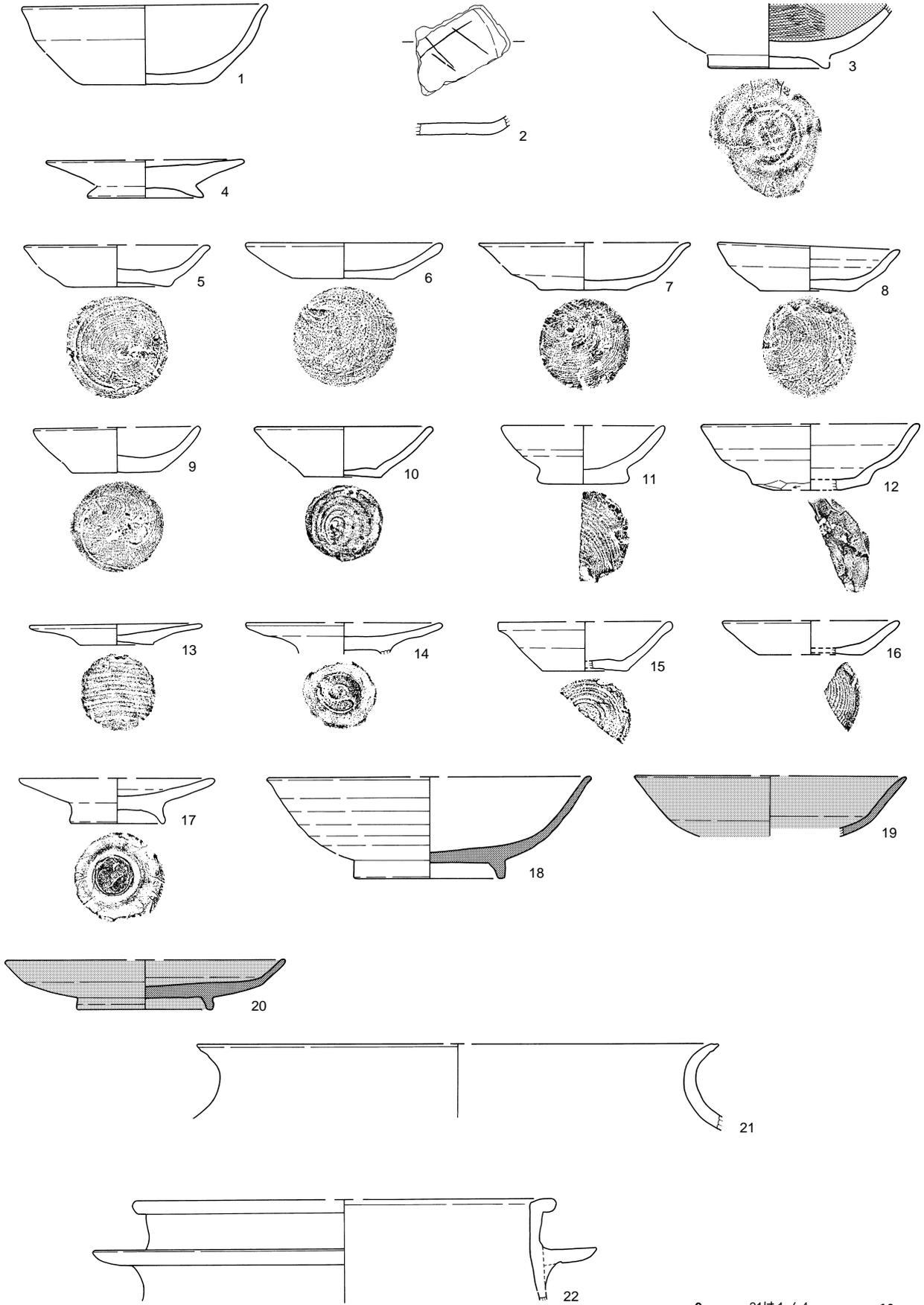


Fig.404 GridB 出土遺物実測図

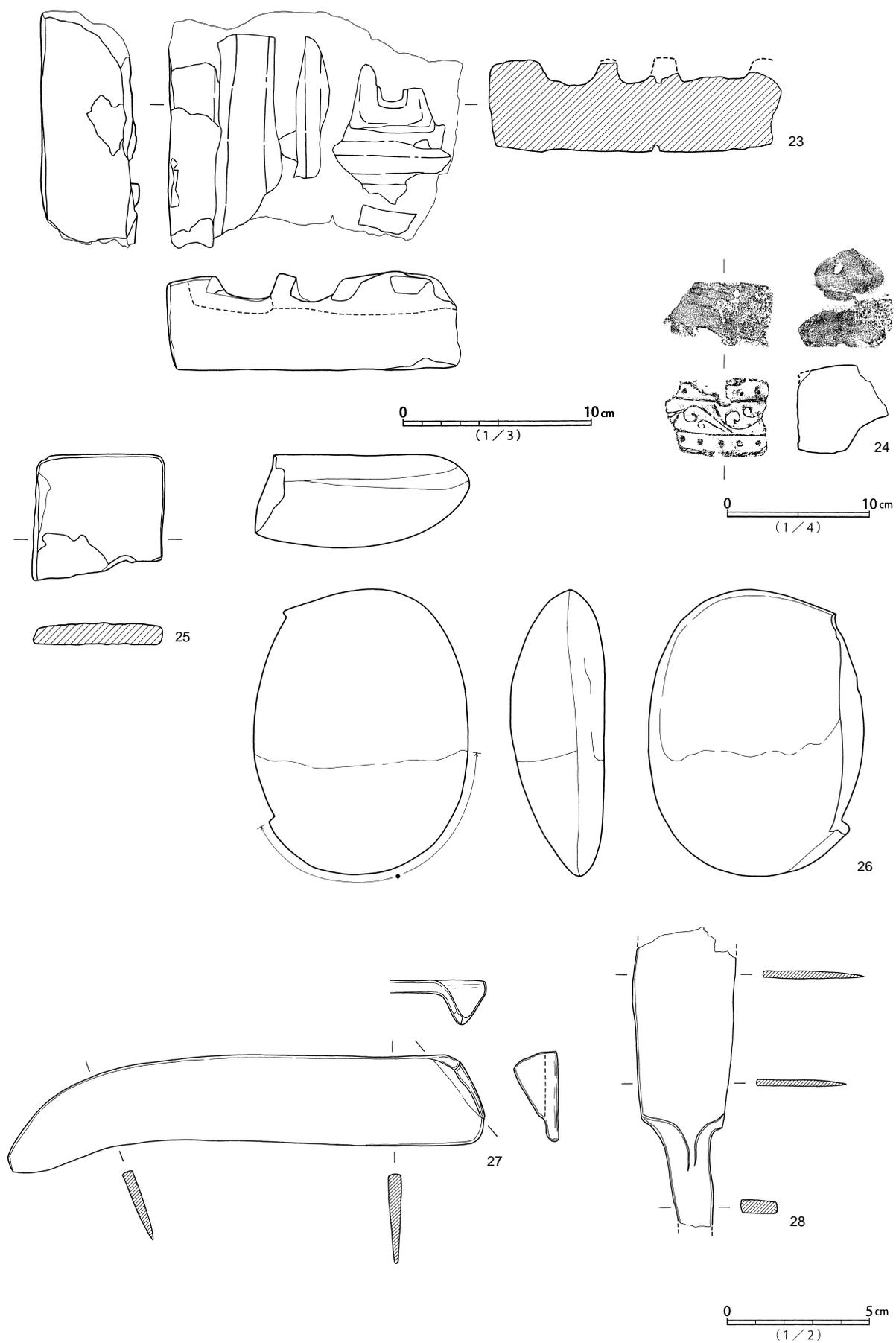


Fig.405 GridB 出土遺物実測図

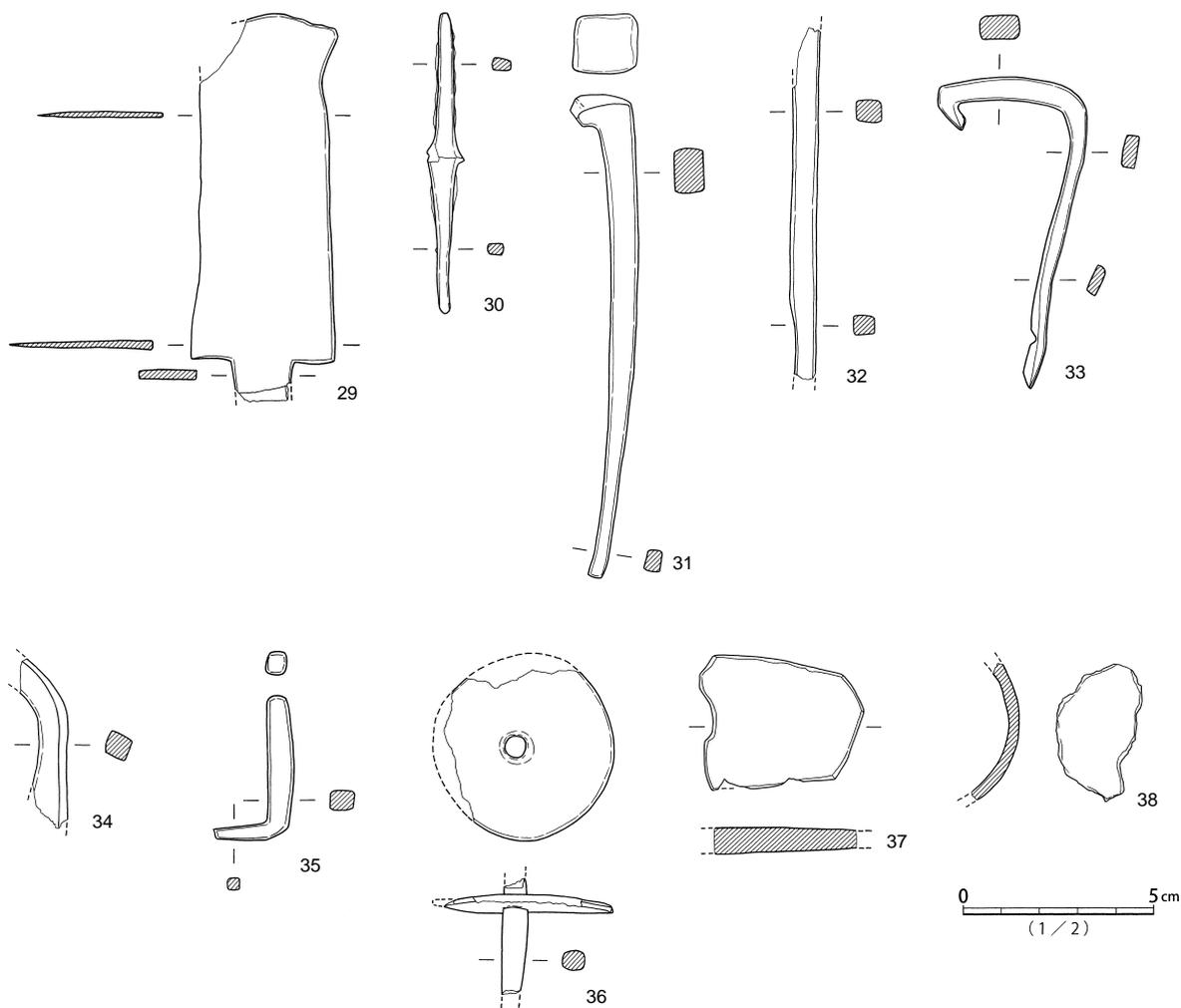


Fig.406 GridB 出土遺物実測図

出土遺物 1は土師器杯、2は凸面縄目叩きの平瓦で、凸面に「周」の押型が認められ、3は鉄釘、4・5は椀形滓である。

Grid. G500 (Fig.427、 PL.179・227・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器椀、2は龍泉窯青磁椀、3は砥石、4～6は鉄釘、7・8は鉄製鉸具である。

Grid. G600 (Fig.427・428、 PL.155・179・193・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は底部内面にヘラガキの認められる土師器杯、2～4は土師器杯、5は土師器椀で内面に黒色処理を施す。6～10は土師器小皿、11は土師器小形甕、12は須恵器甕、13は原始灰釉壺で新相を示す。14は9世紀代の灰釉陶器双耳瓶で、15・16は刀子、17は鉄釘、18は半月状鉄製品、19は板状鉄製品、20は羽口である。

Grid. H300 (Fig.429、 PL.155)

Grid B 200

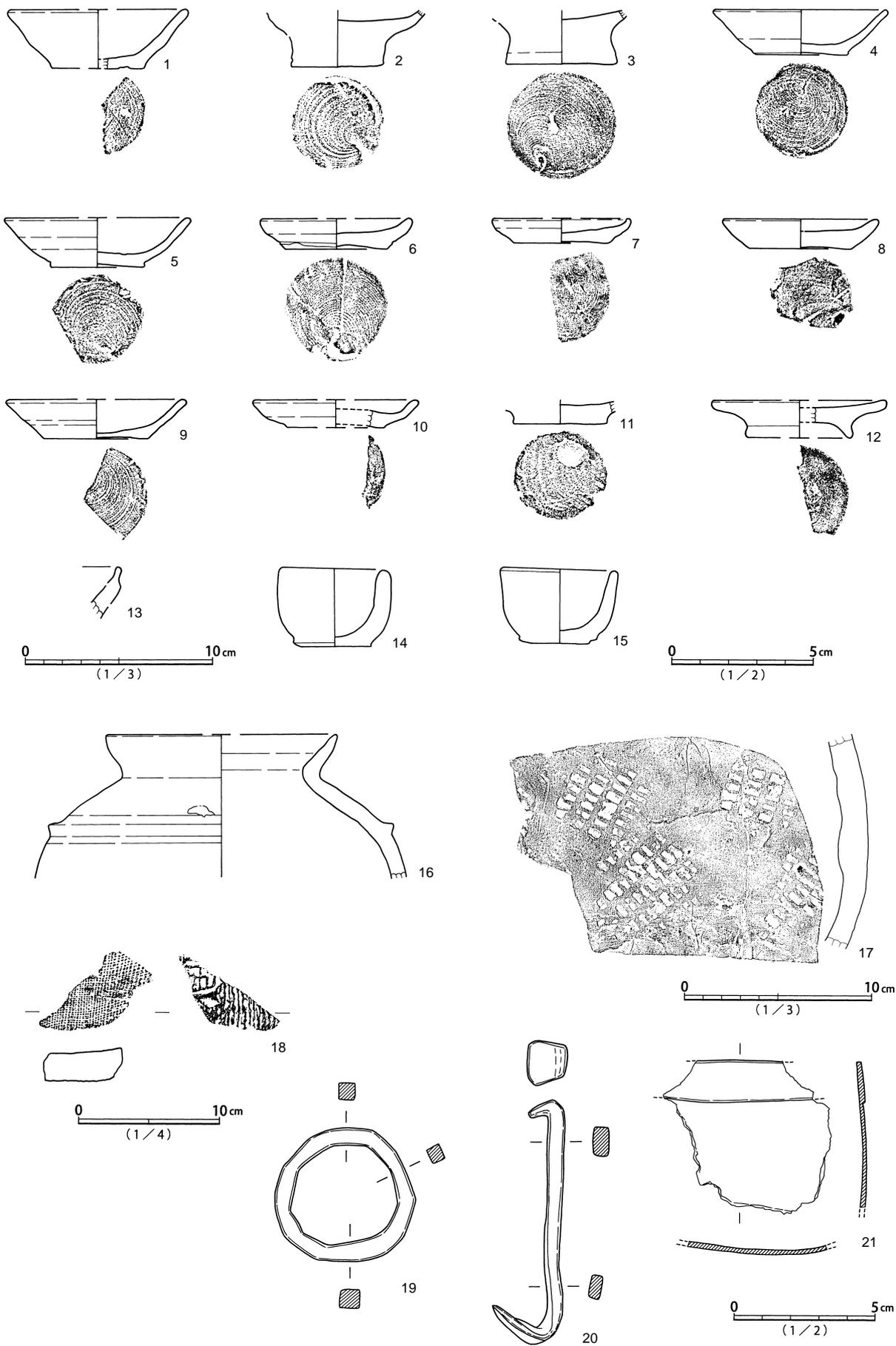
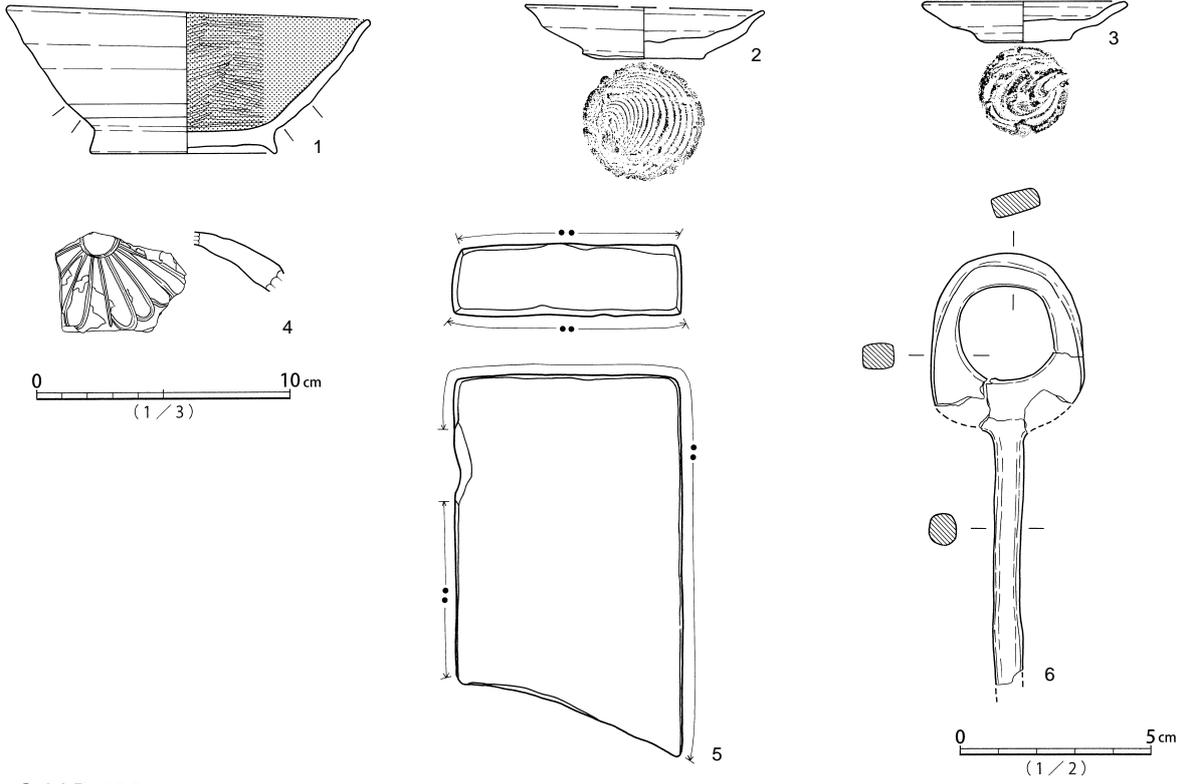


Fig.407 GridB 出土遺物実測図

Grid B 300



Grid B 400

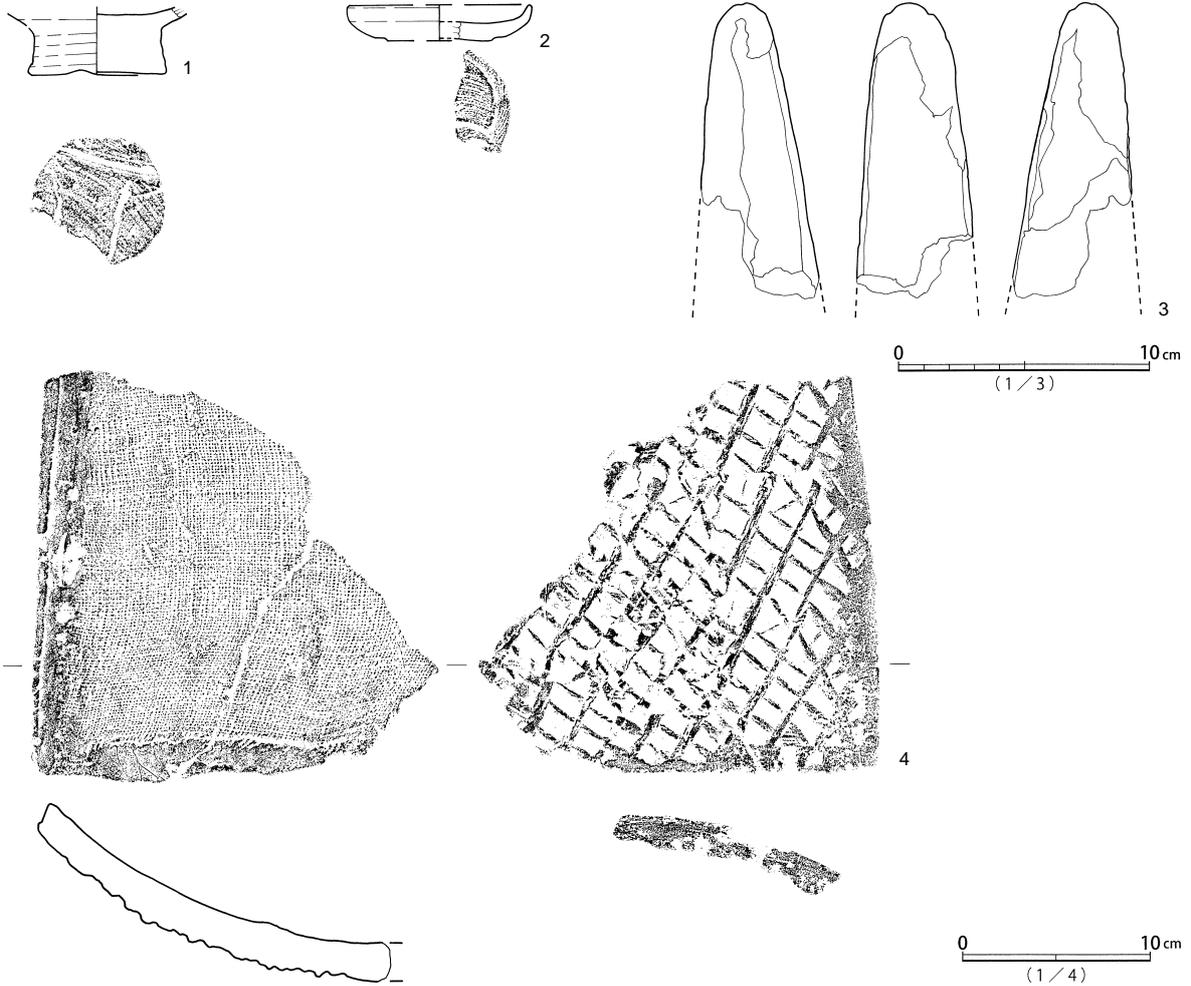


Fig.408 GridB 出土遺物実測図

Grid C 100

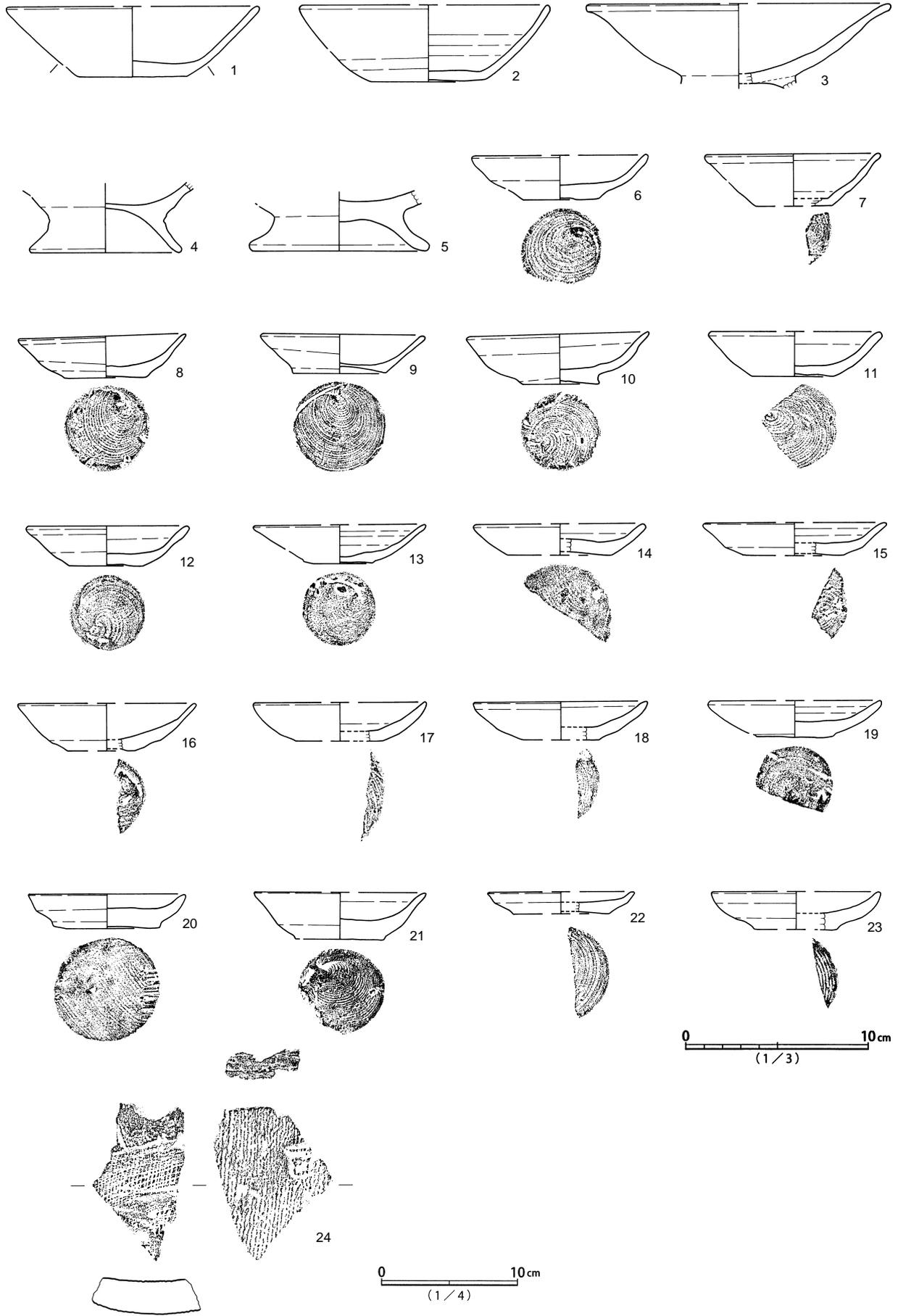
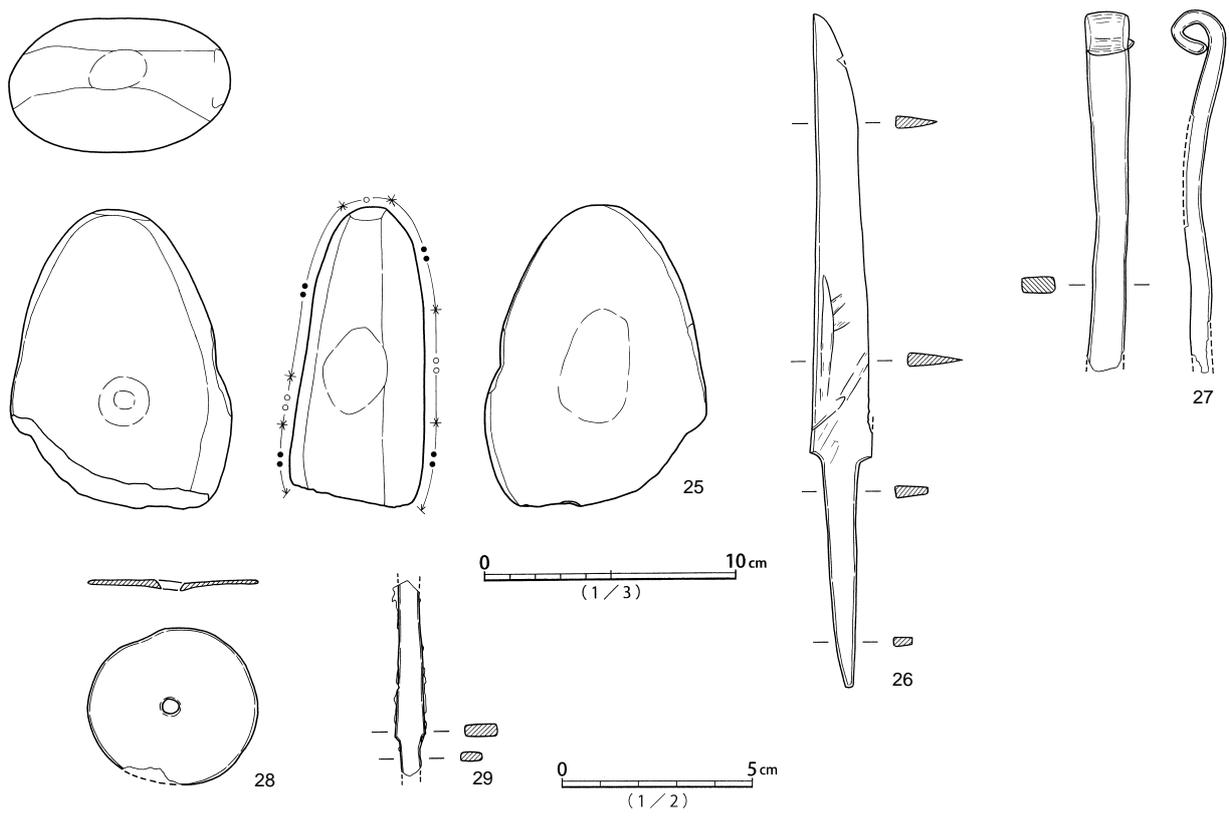


Fig.409 GridC 出土遺物実測図



Grid C 200

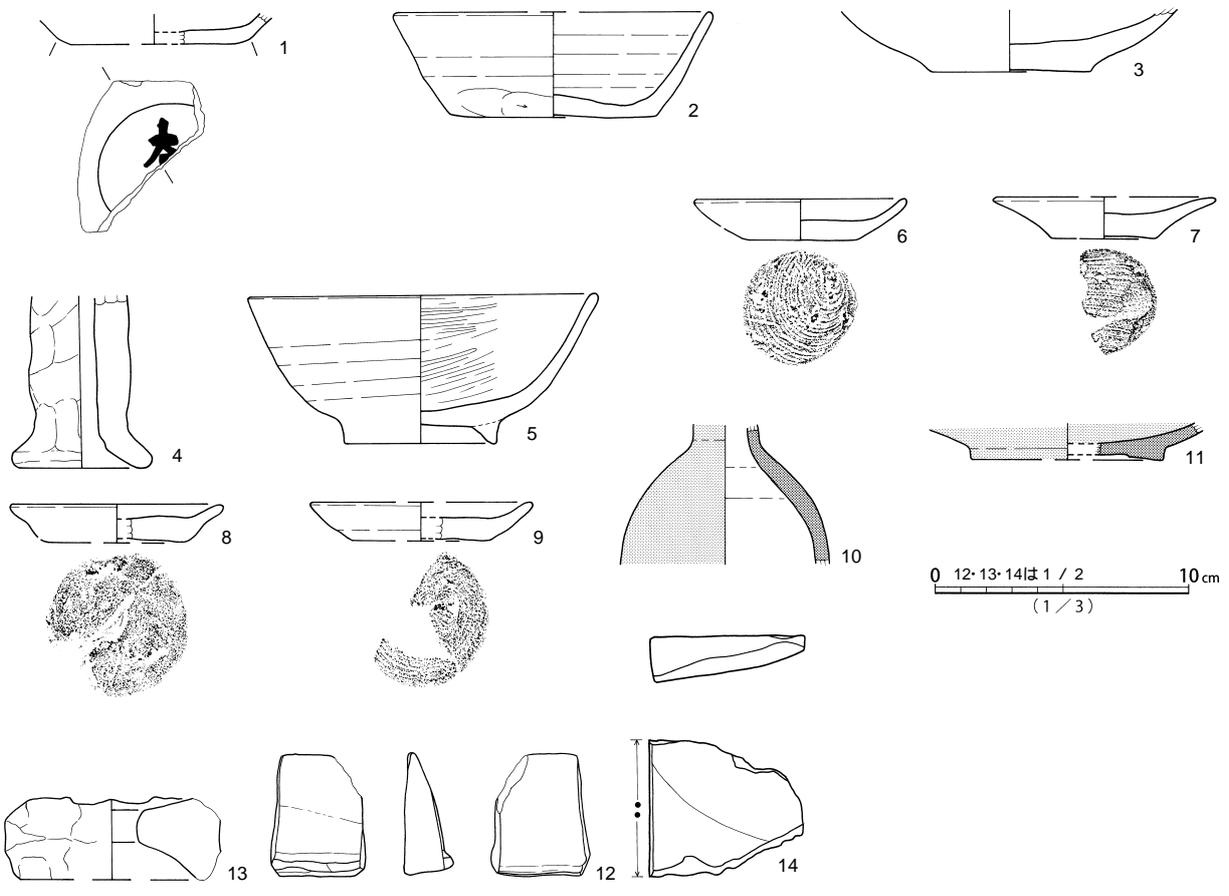
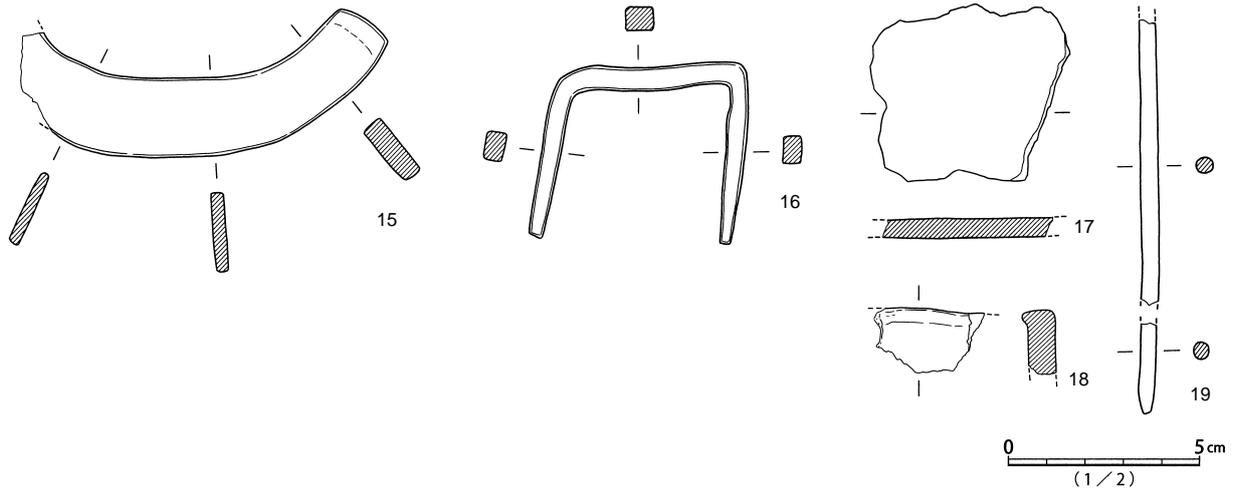


Fig.410 GridC 出土遺物実測図



Grid C 300

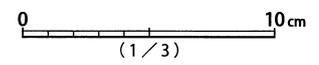
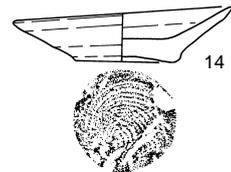
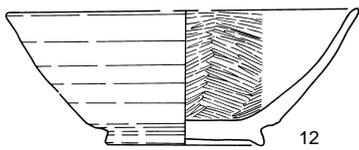
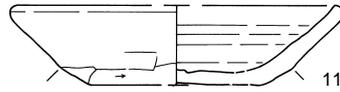
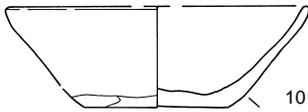
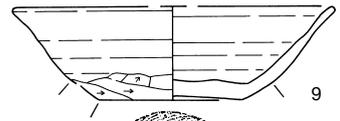
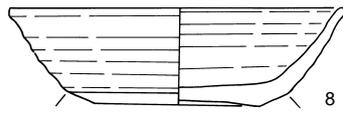
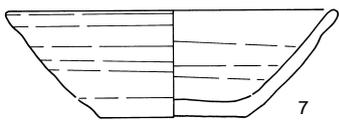
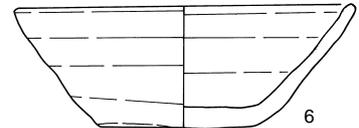
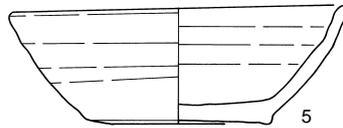
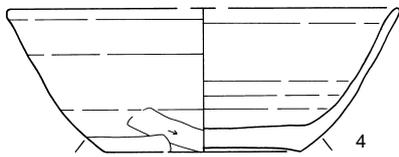
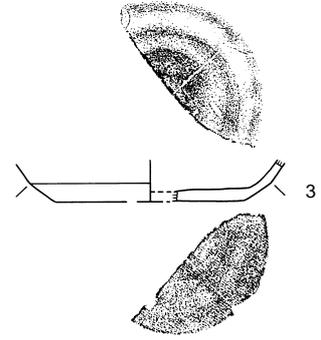
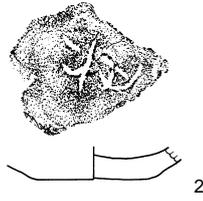
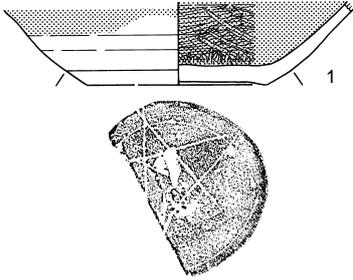
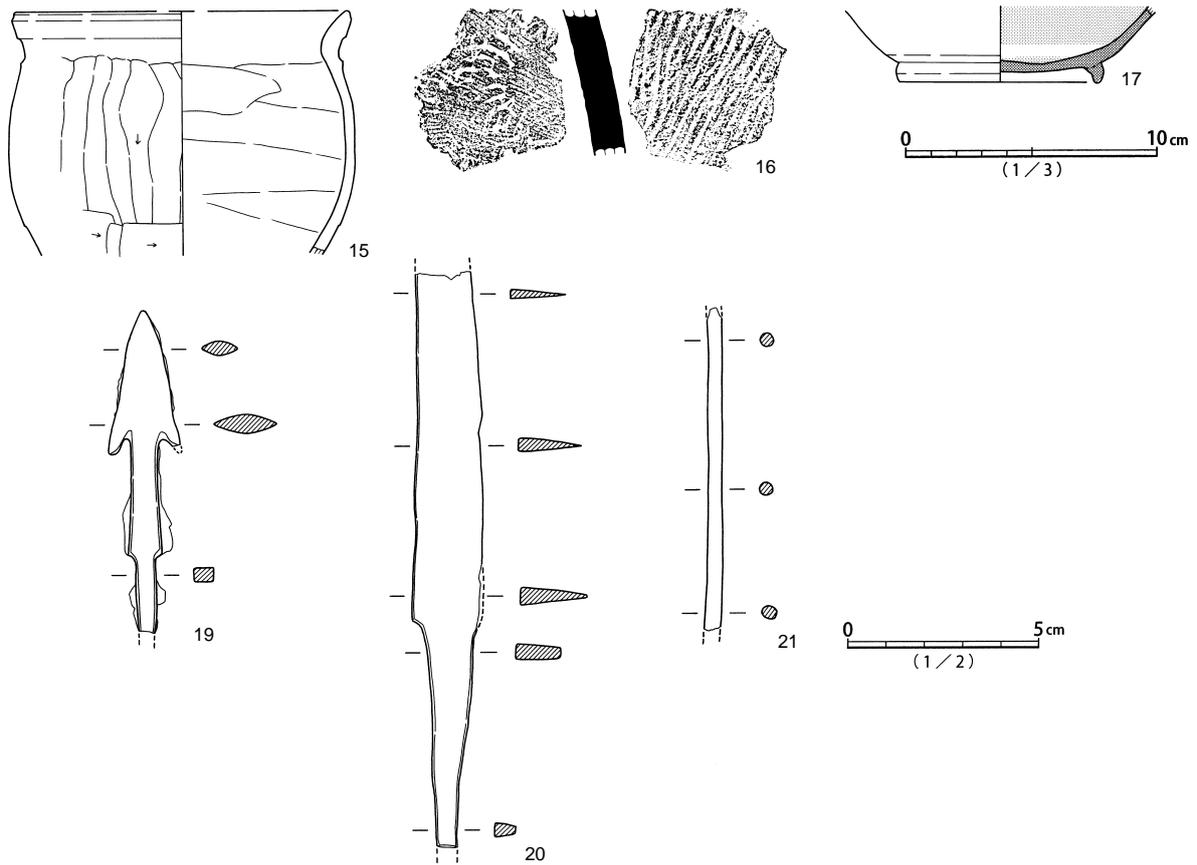


Fig.411 GridC 出土遺物実測図



Grid C 400

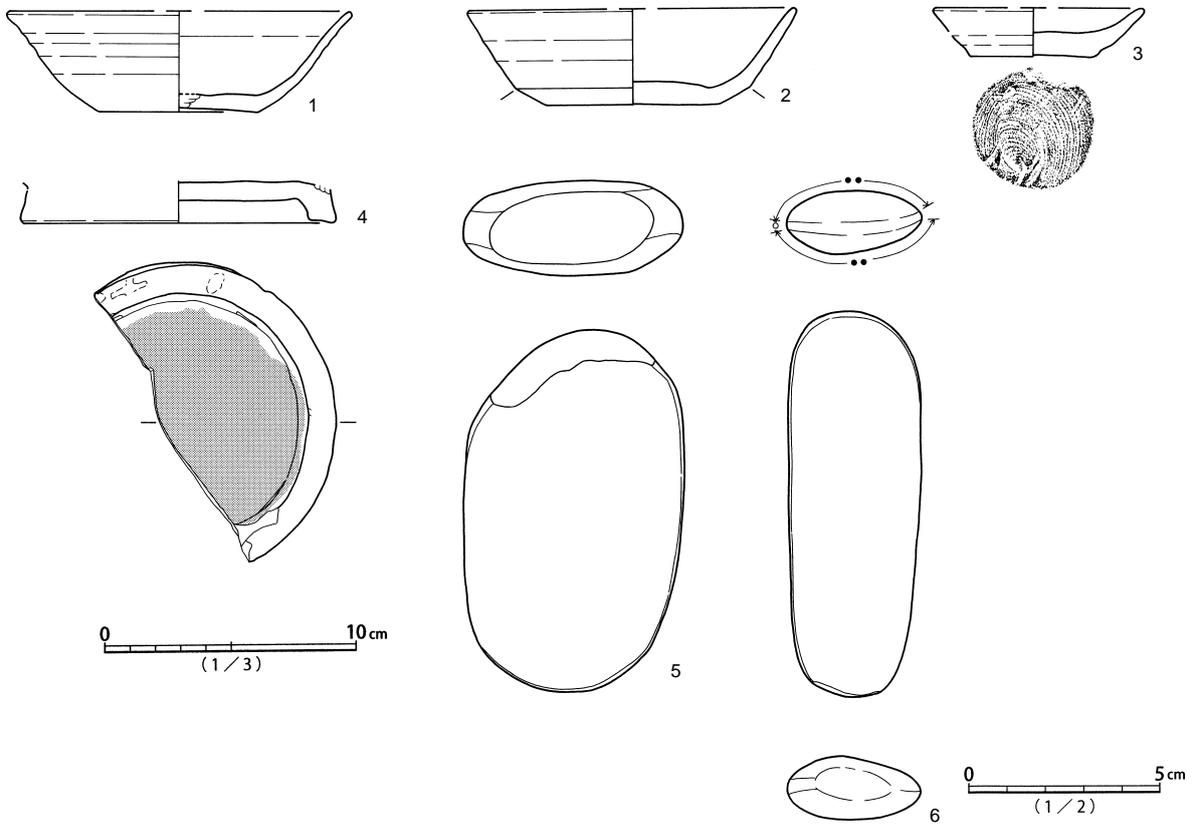


Fig.412 GridC 出土遺物実測図

Grid D 100

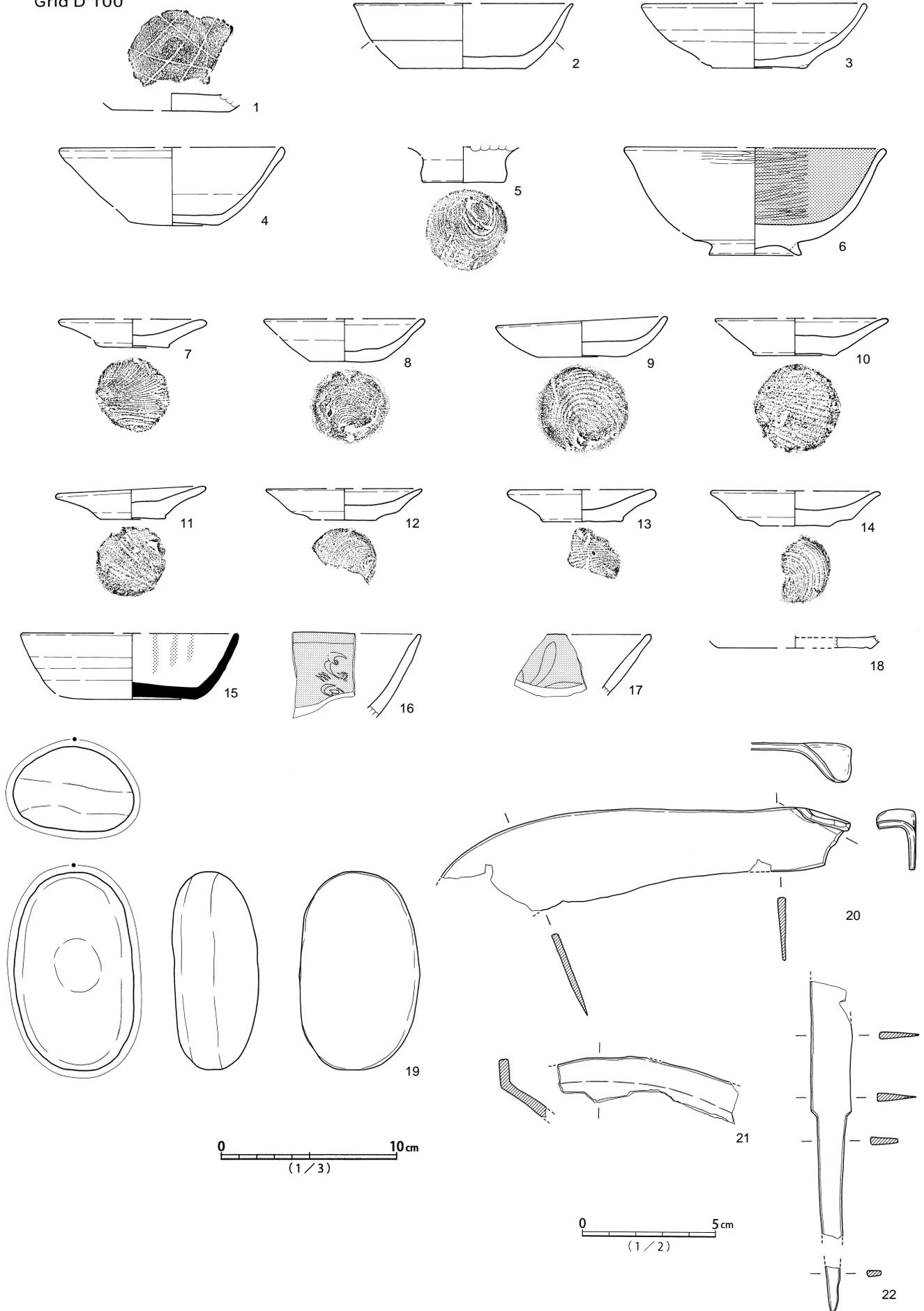


Fig.413 GridD 出土遺物実測図

Grid D 200

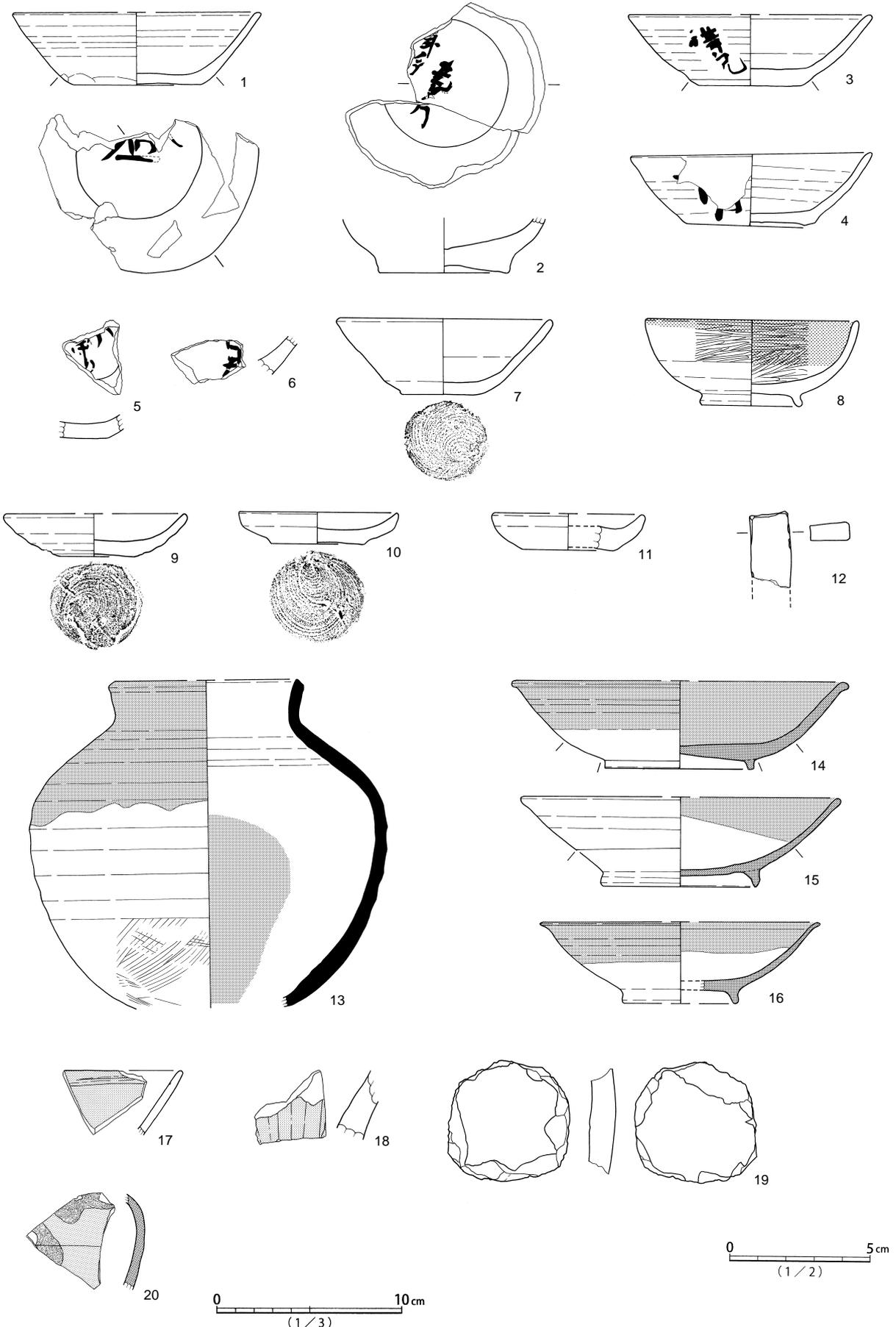
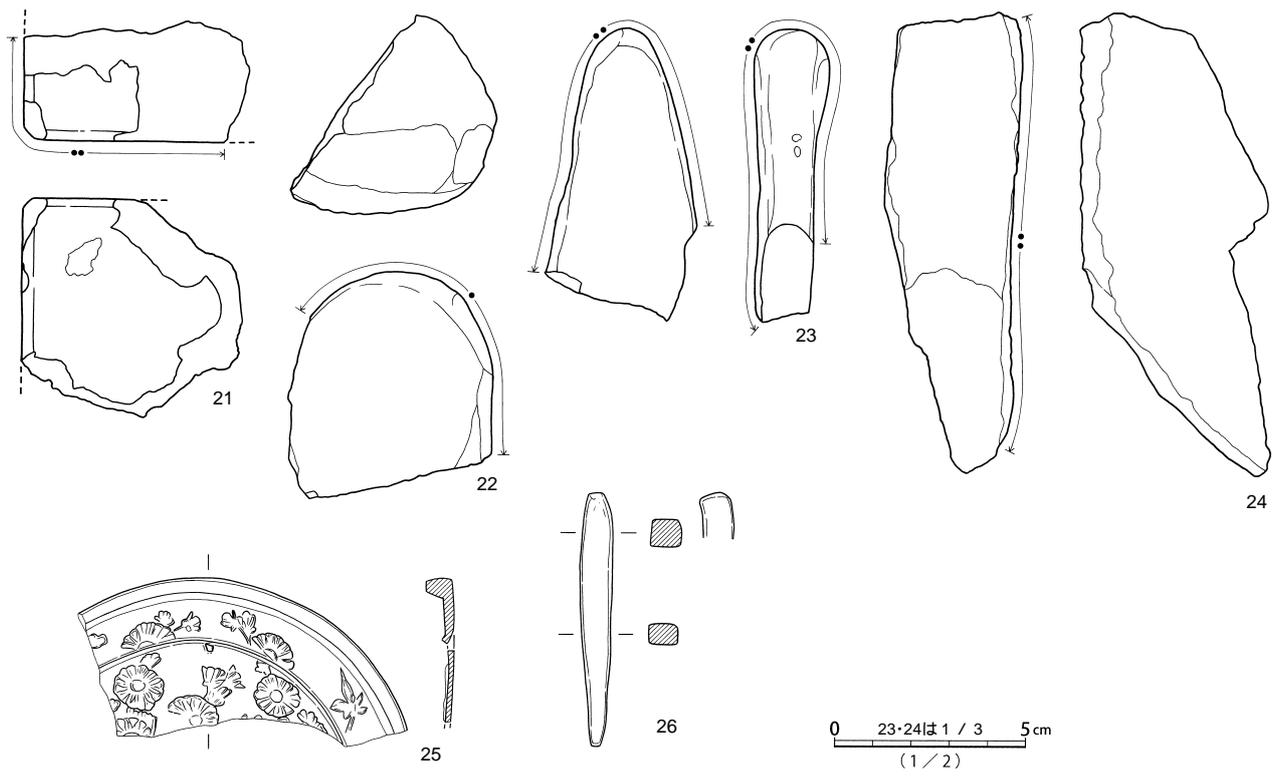


Fig.414 GridD 出土遺物実測図



Grid D 300

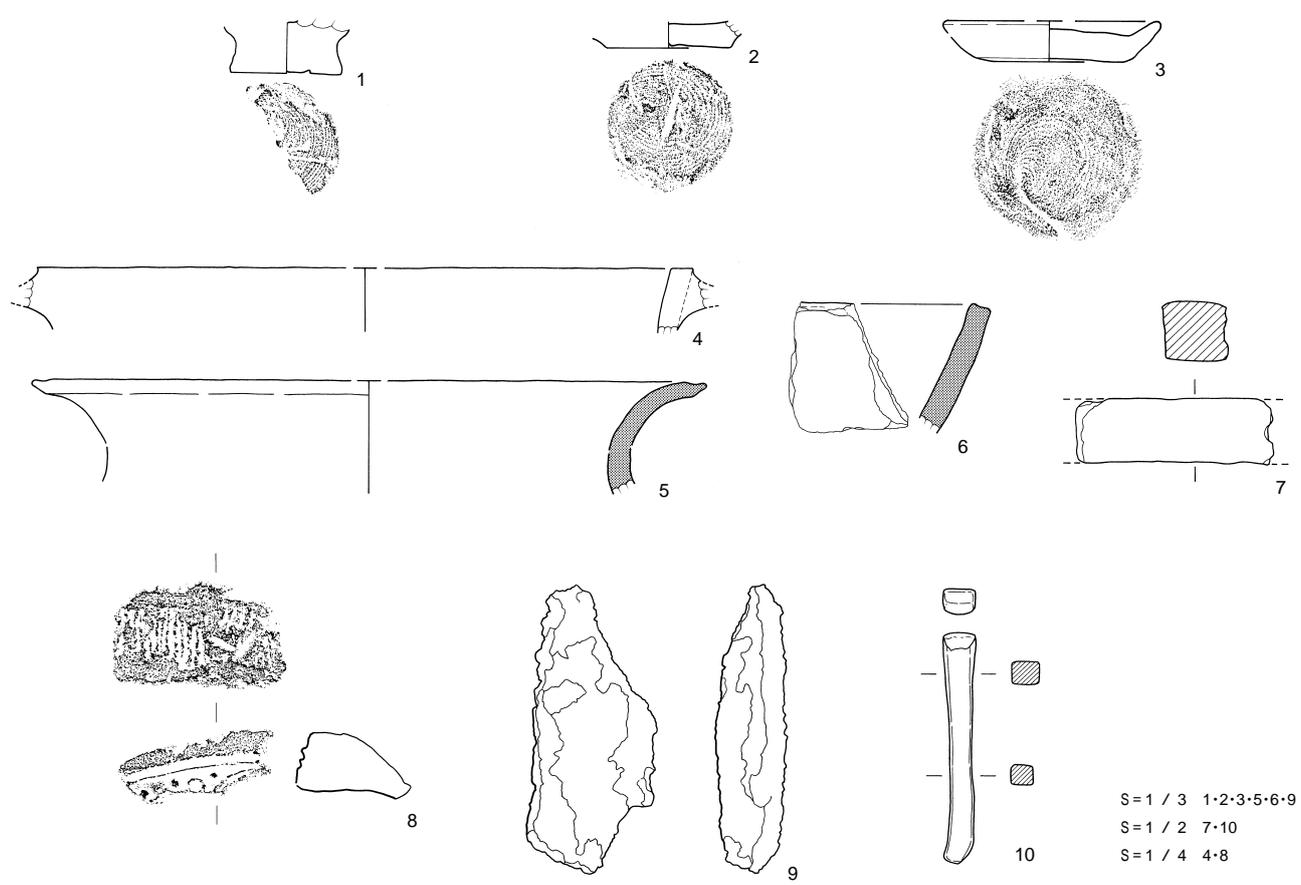
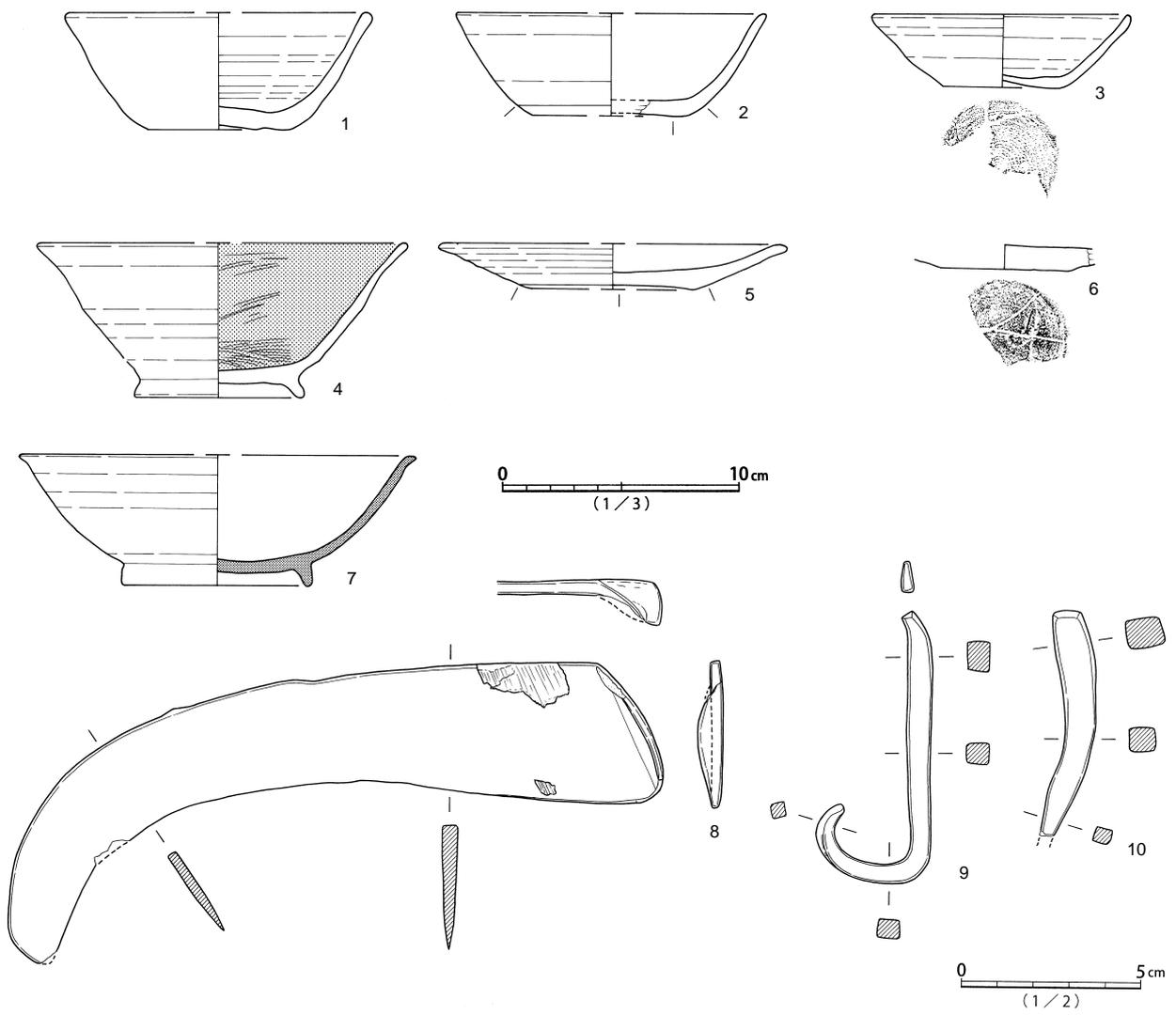


Fig.415 GridD 出土遺物実測図

Grid D 400



Grid D 500

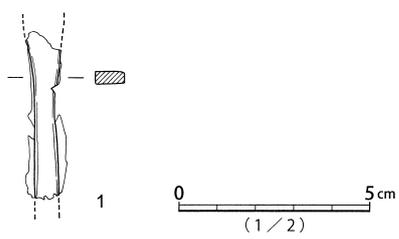
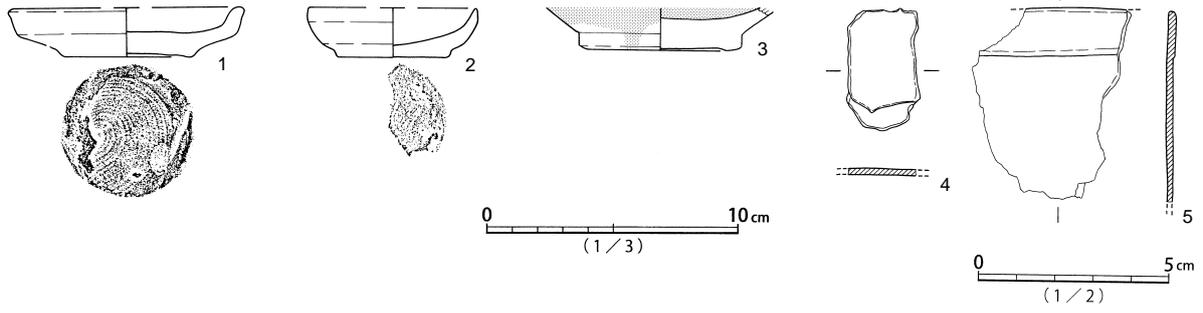


Fig.416 GridD 出土遺物実測図

Grid E 100



Grid E 200

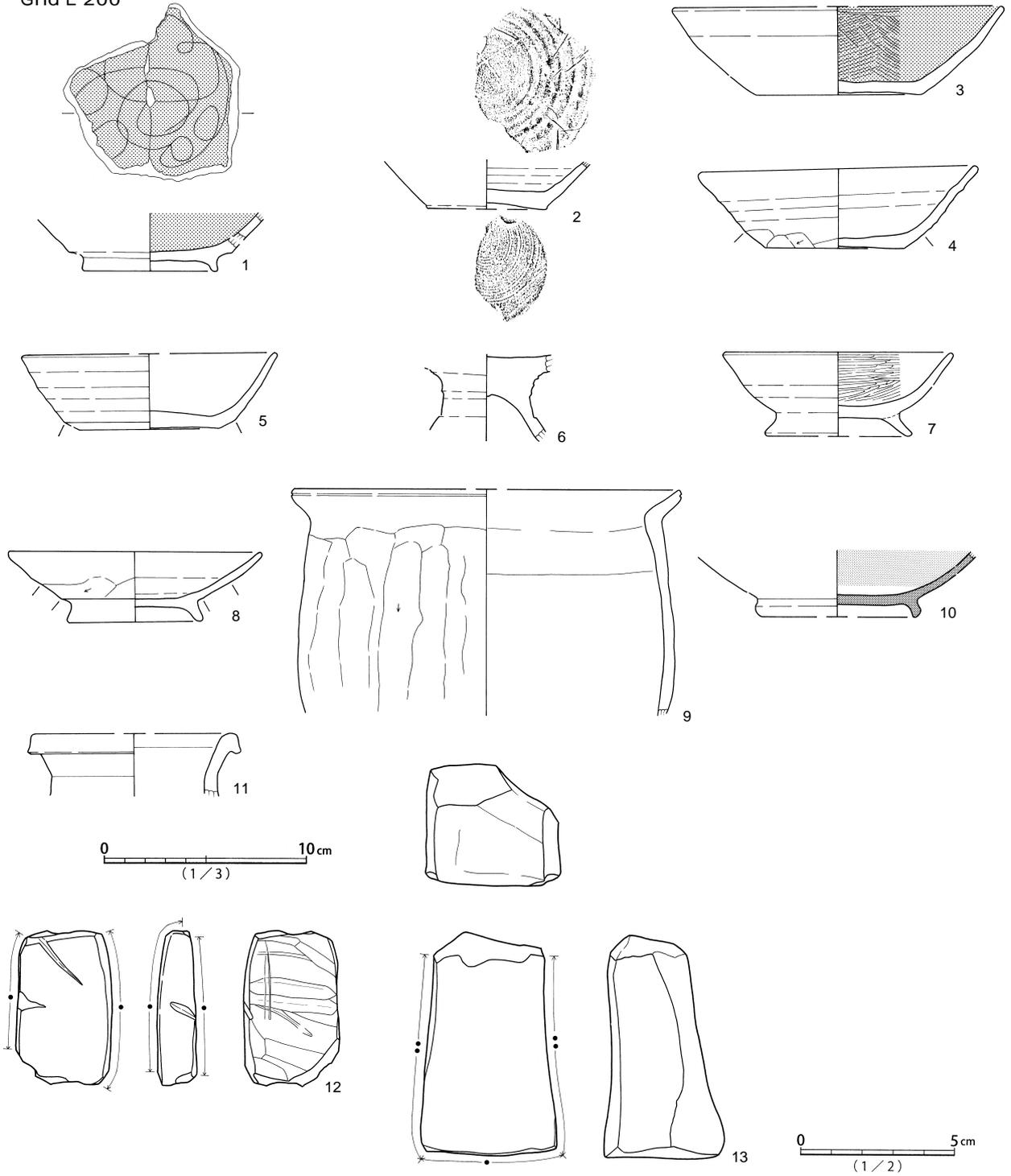
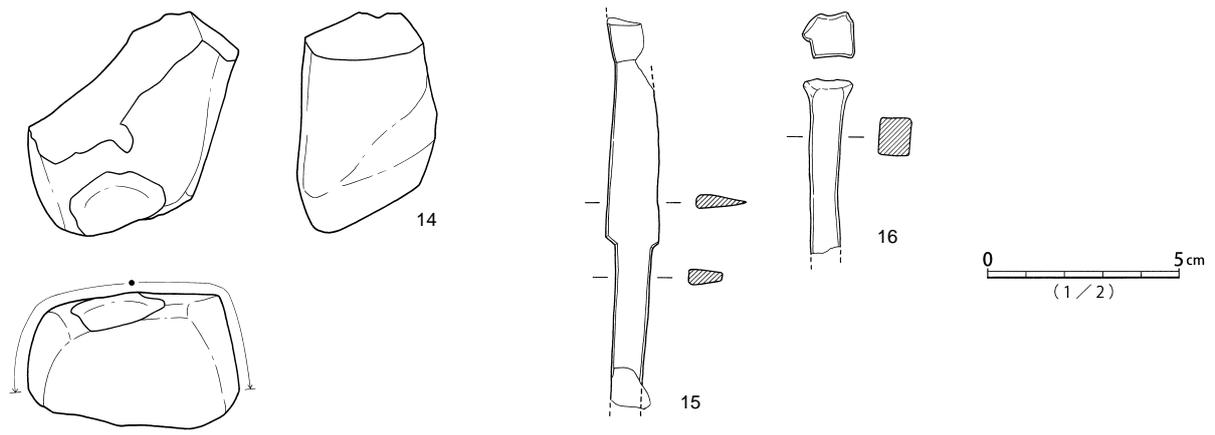


Fig.417 GridE 出土遺物実測図



Grid E 300

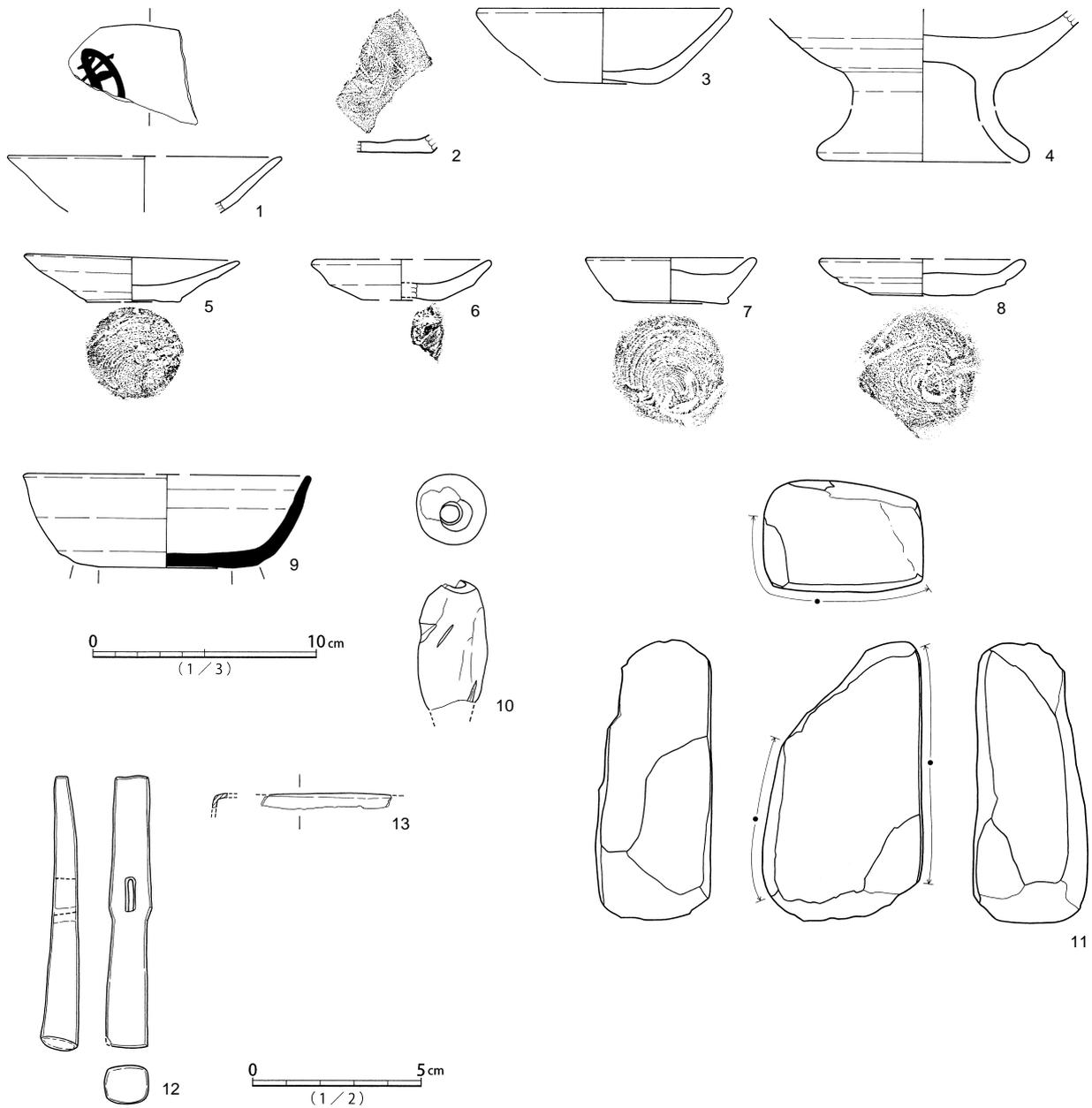
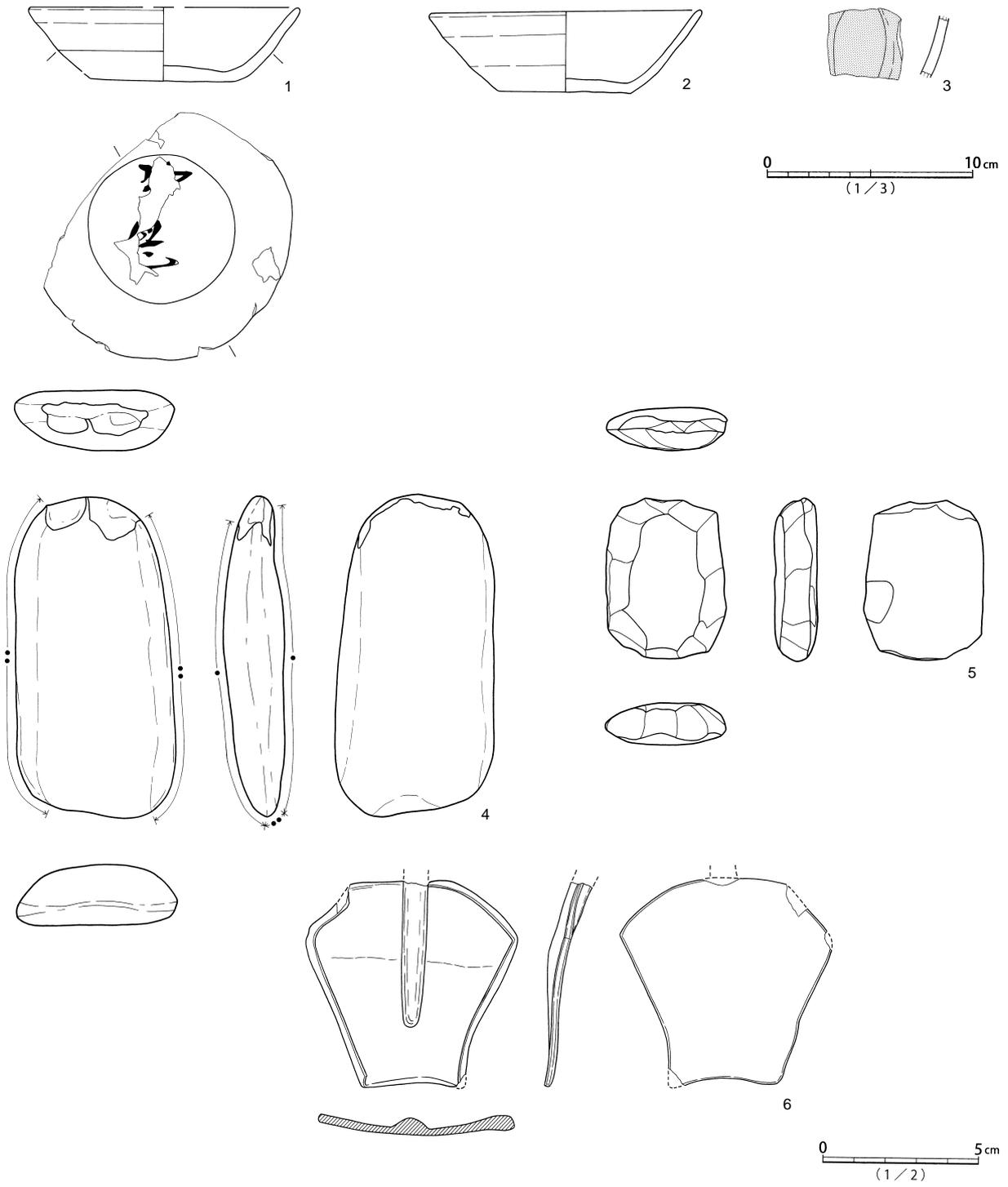


Fig.418 GridE 出土遺物実測図

Grid E 400



Grid E 500

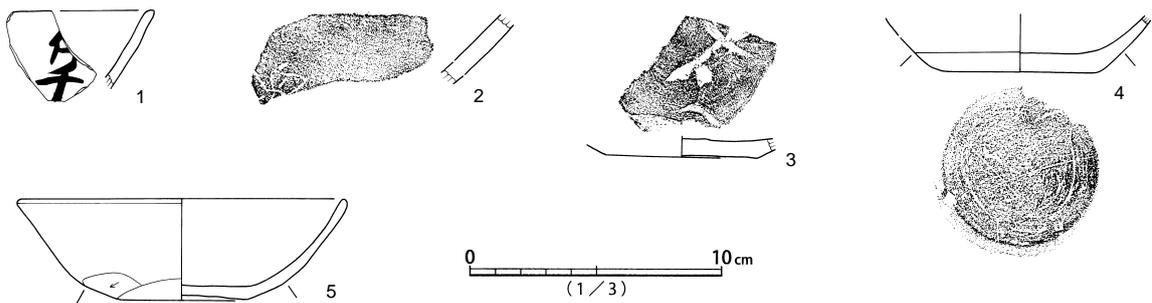
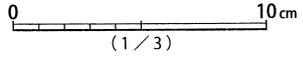
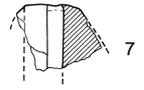
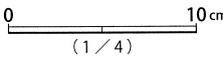
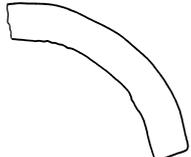
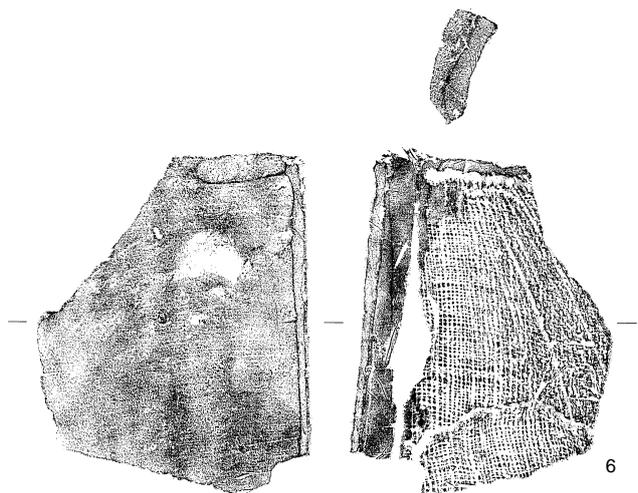
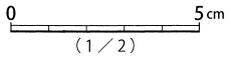
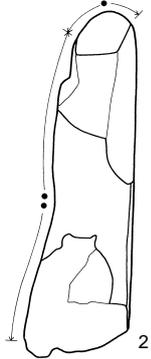
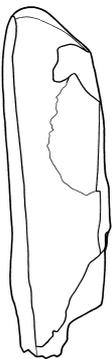
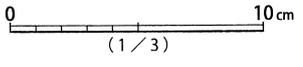
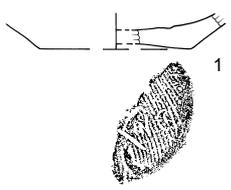


Fig.419 GridE 出土遺物実測図



Grid E 600



Grid E 700

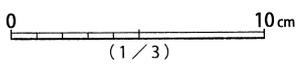
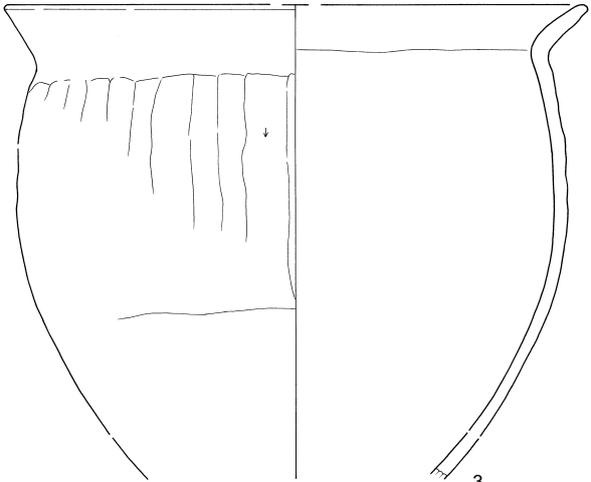
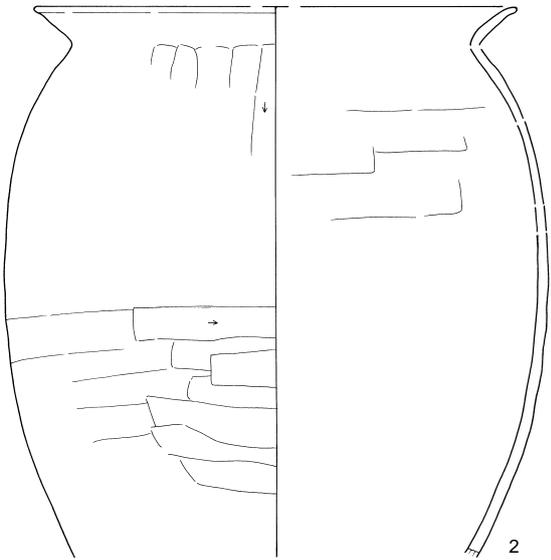
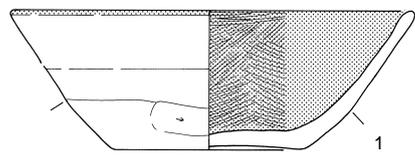
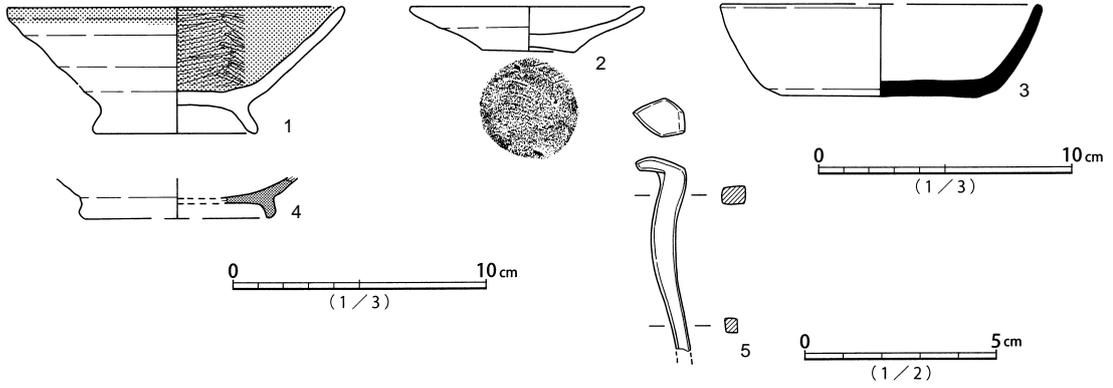


Fig.420 GridE 出土遺物実測図

Grid F 100



Grid F 200



Grid F 300

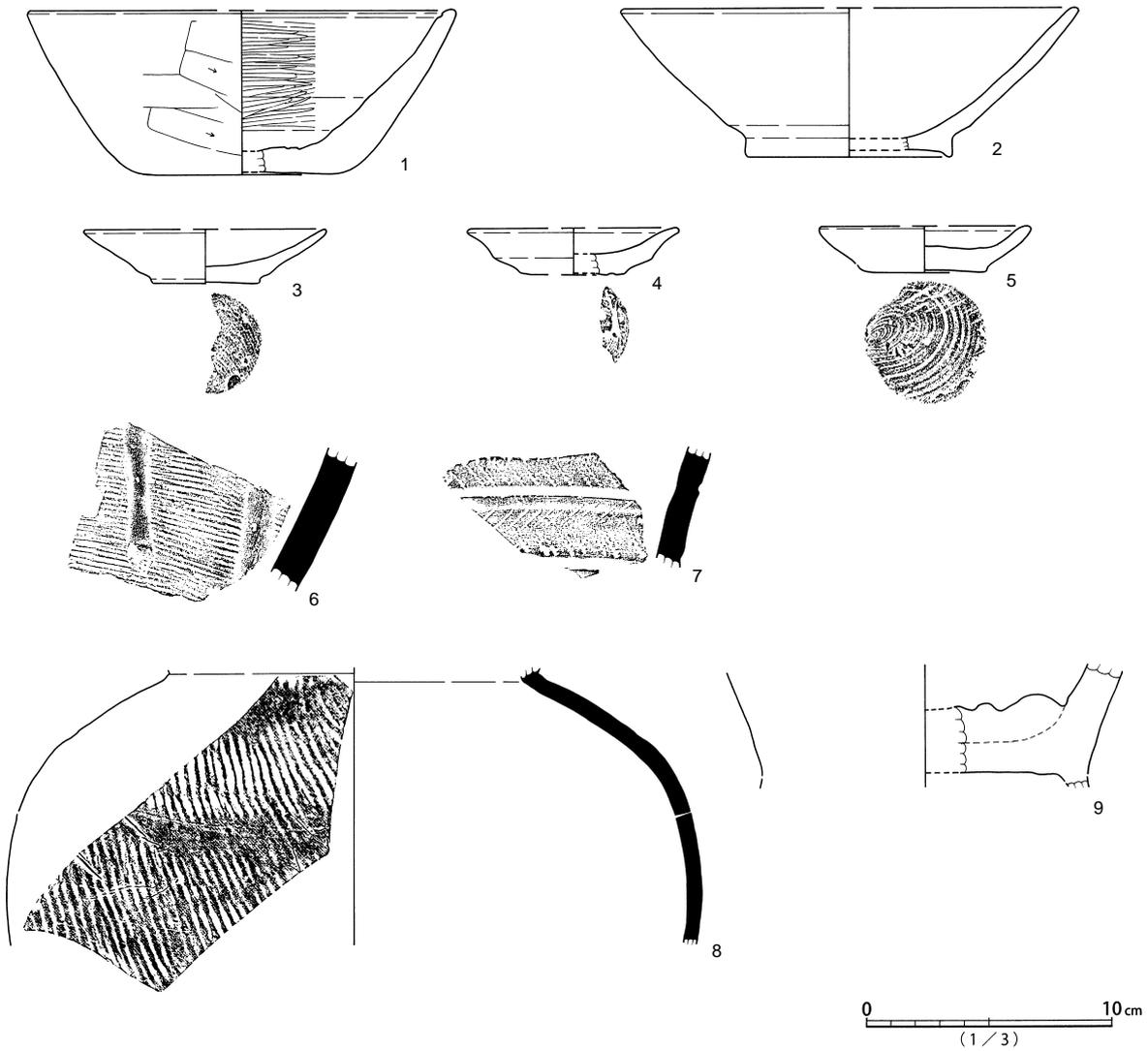


Fig.421 GridF 出土遺物実測図

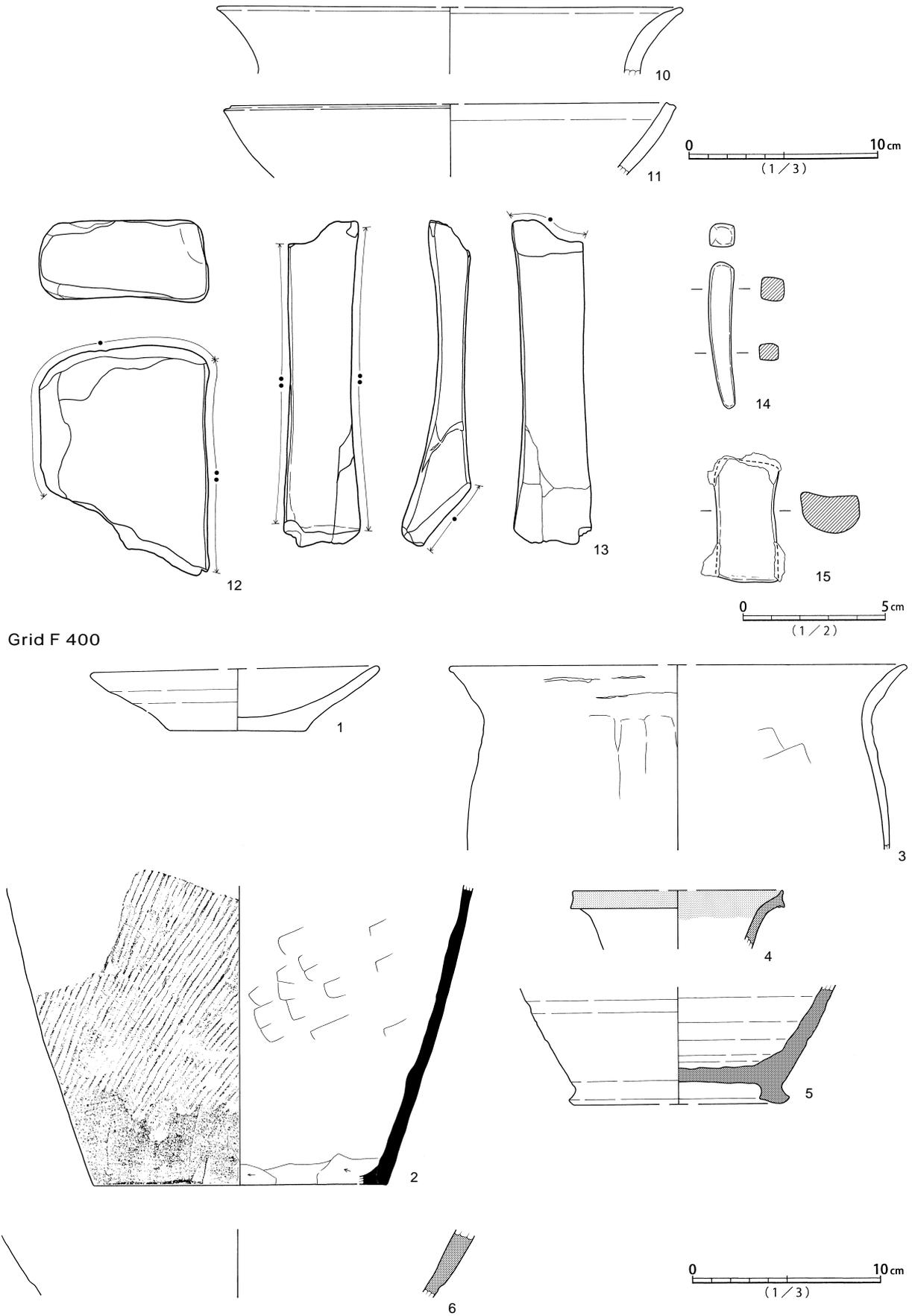
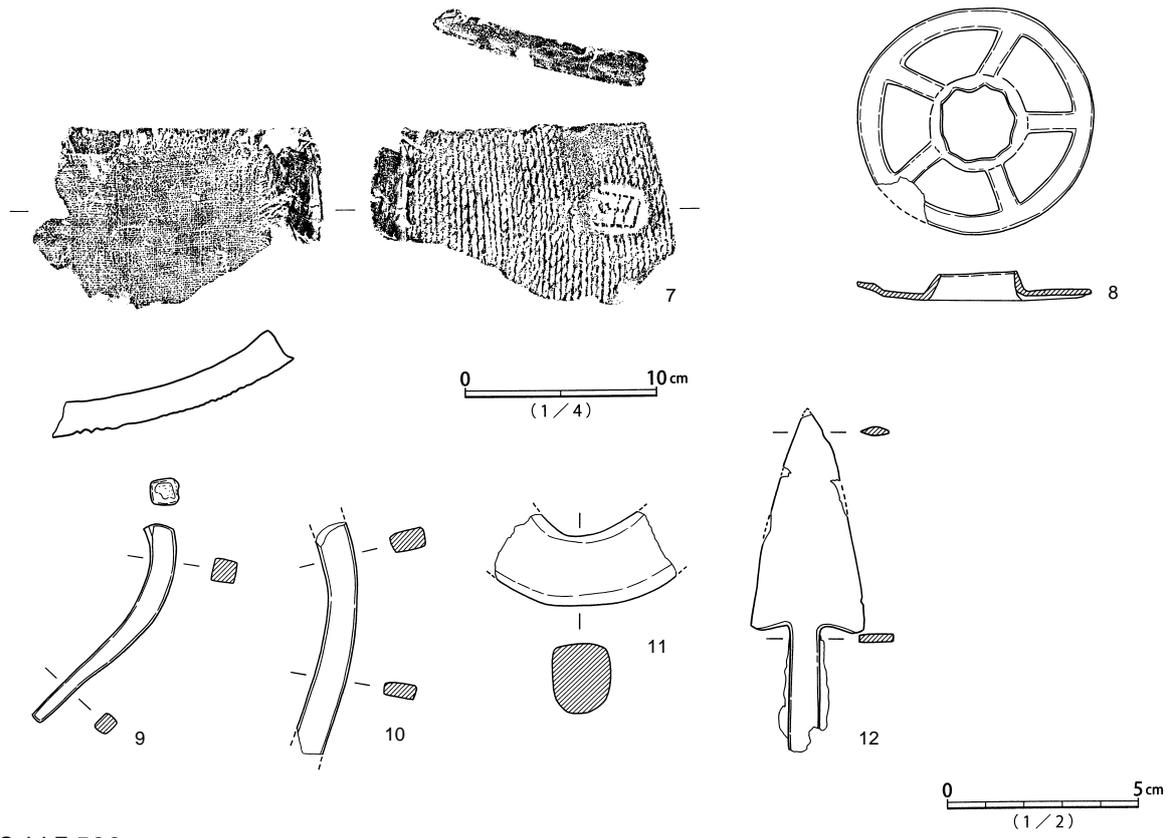


Fig.422 GridF 出土遺物実測図



Grid F 500

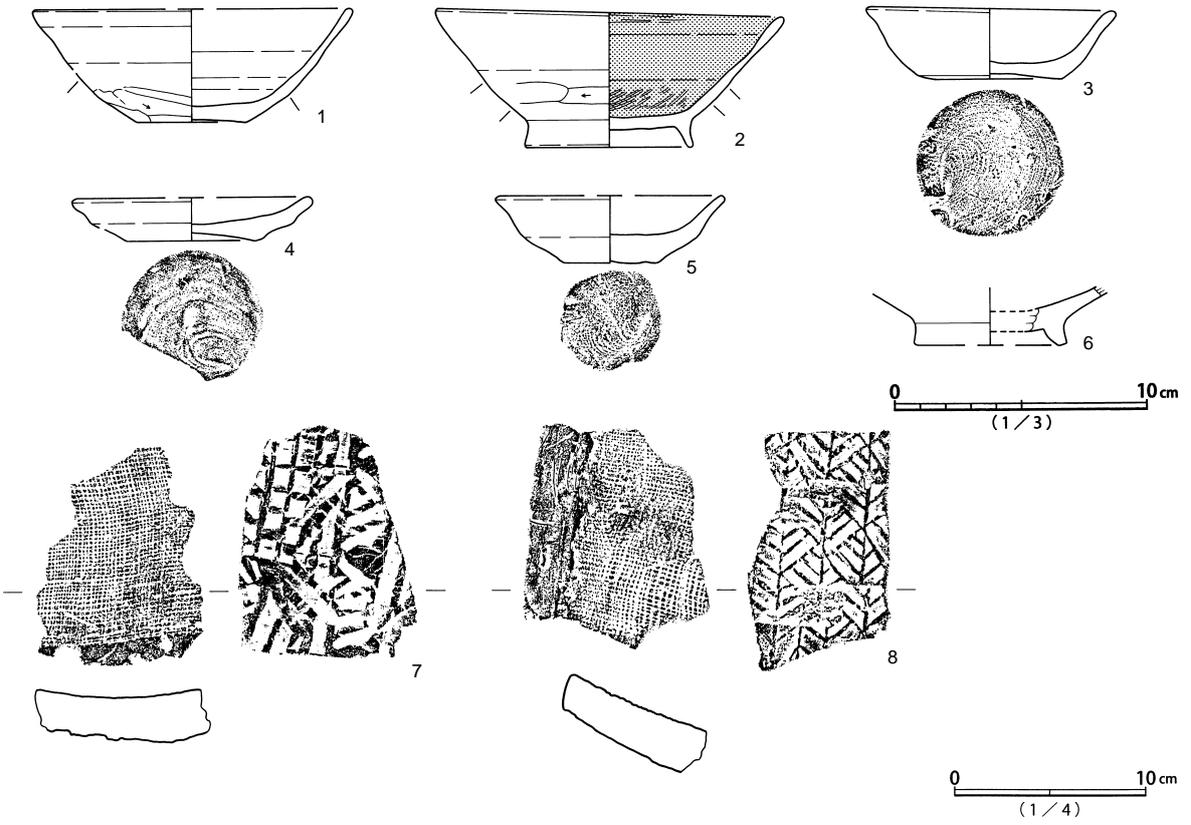


Fig.423 GridF 出土遺物実測図

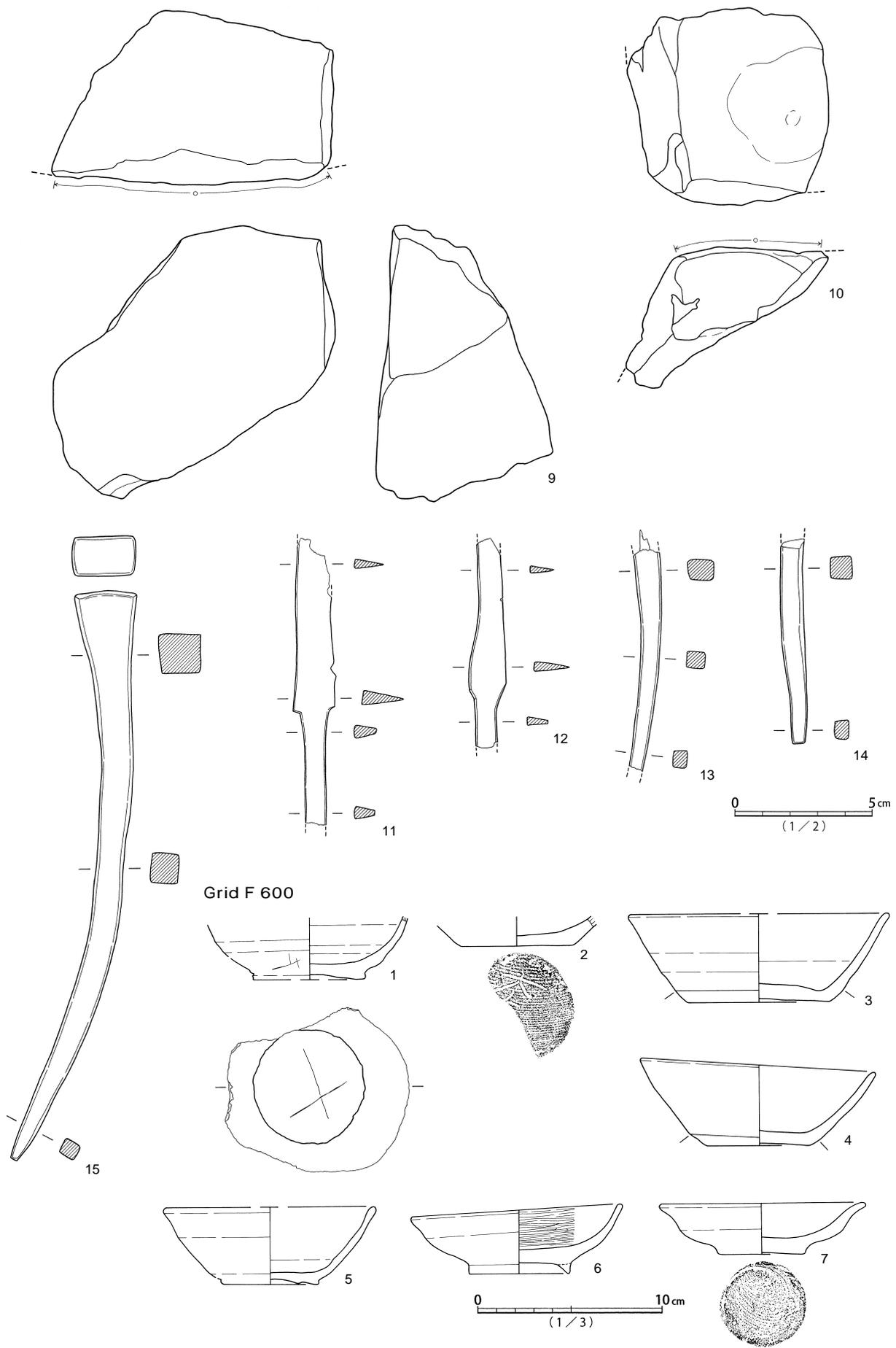


Fig.424 GridF 出土遺物実測図

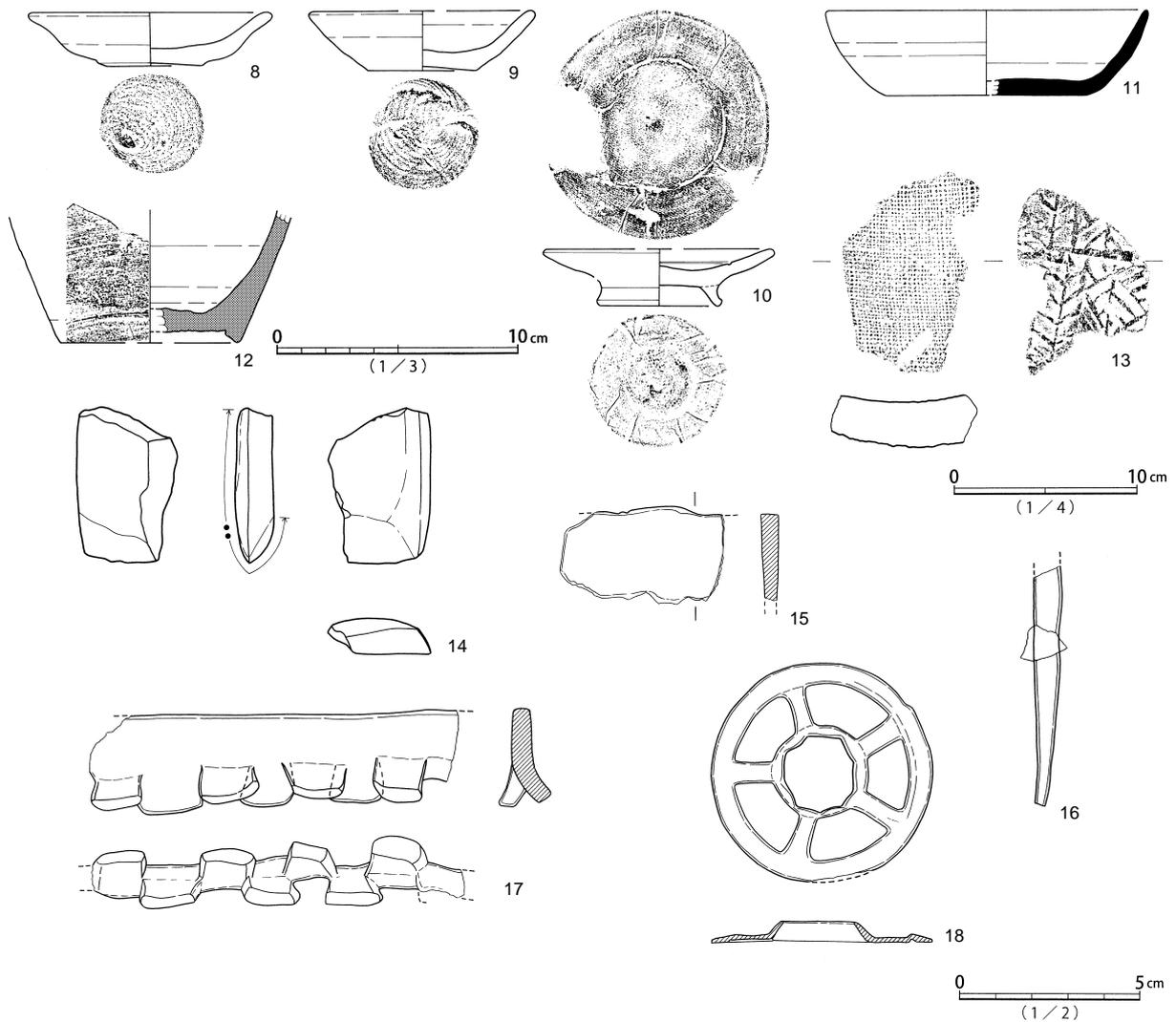


Fig.425 GridF 出土遺物実測図

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器小皿である。

Grid. H500 (Fig.429、 PL.155・179)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器杯、2は土師器小皿、3は椀形滓である。

Grid. H600 (Fig.429、 PL.155・179)

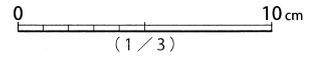
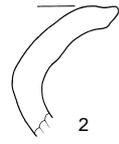
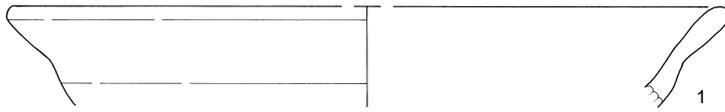
遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1・2は土師器小皿、3は灰釉陶器椀で光ヶ丘1号窯式、4は渥美甕で5型式、5は錆の付着した木質である。

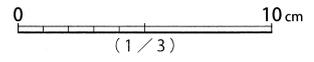
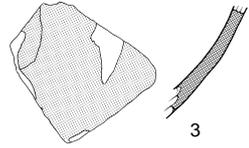
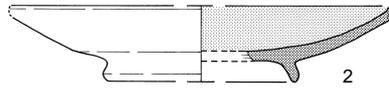
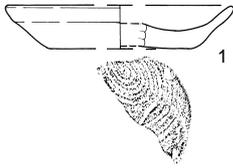
Grid. J100 (Fig.429、 PL.179・223・227)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

Grid G 100



Grid G 200



Grid G 300

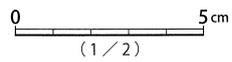
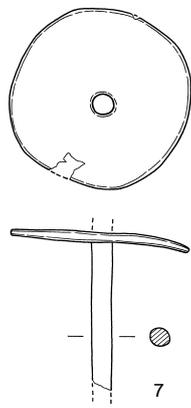
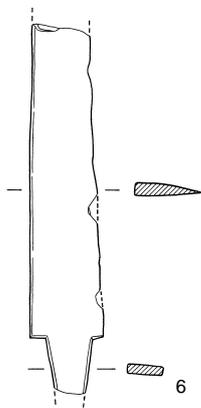
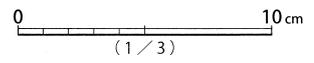
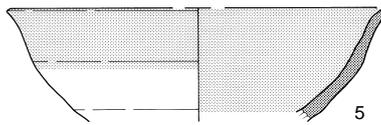
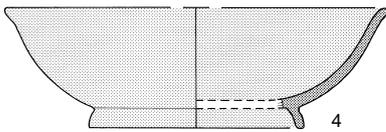
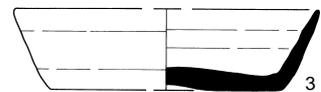
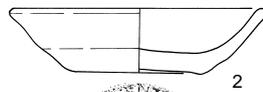
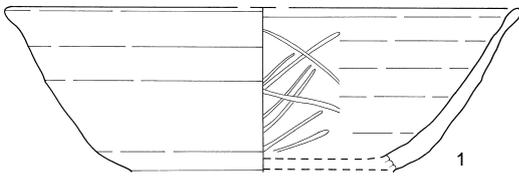


Fig.426 GridG 出土遺物実測図

出土遺物 1は灰釉陶器平瓶で黒笹90号窯式、2は凸面斜格子叩きの平瓦、3は凹石である。

Grid. K100 (Fig.430、 PL.155・179・188・193・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器杯で底部外面に墨書「寸」が認められる。2は土師器杯でヘラガキ「得万カ」が認められる。3は土師器椀で内面に黒色処理を施す。4～11は土師器小皿、12は鉄釘である。

Grid. L100 (Fig.430、 PL.236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1・2は鉄釘、3は板状鉄製品である。

Grid. M100 (Fig.431、 PL.155・179・188・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は土師器皿で底部外面に墨書「井」が認められる。2は土師器杯、3は土師器小形杯、4は龍泉窯青磁椀、5は鉄釘である。

Grid. N100 (Fig.431、 PL.179・236)

遺構外から出土した遺物は調査時のグリッド(Fig.7・8参照)で掲載した。

出土遺物 1は龍泉窯青磁椀、2は鉄釘である。

一括(1) (Fig.432～437、 PL.156・179・180・188・193・195・223・228・236・238)

遺構外から出土した遺物の内、注記番号が「000」が付与されている一群について、注記番号不明などを含む一括(2)とは別にして報告する。

出土遺物 1は土師器杯で、体部外面に墨書「智」が認められ、内面に黒色処理を施す。2・3は土師器杯で、底部外面に墨書が認められるが2は判読不明、3は「院カ」が認められる。4は土師器椀で、底部外面にヘラガキが認められ、内面に黒色処理を施す。5～17は土師器杯、18は転用紡錘車未製品、19は土師器小形椀で内面と外面口縁部に黒色処理を施す。20～22は土師器皿、23～26は土師器小皿、27は土師器うつば、28は土師器羽釜、29・30は土師器甕、31は東海産とみられる須恵器壺類で、32は龍泉窯青磁椀 -2a 類、33は白磁皿 類、34は灰釉陶器椀で黒笹90号窯式、35は東海産、9世紀～10世紀の緑釉陶器手付瓶、36は白磁椀 類、37・38は渥美広口壺で1b 型式、39は常滑2類7型式の片口鉢、40は渥美壺、41は転用紡錘車、42・43は不明土製品、44は凸面矢羽根状叩きの平瓦、45・47は凸面斜格子叩きの平瓦、46は凸面縄目叩きの平瓦で、凸面に「周」の押型が認められ、48は磨製石斧、49・50は砥石、51～58は磨石、59・60は敲石、61は鉄釘、62は飾り鋌留金具、63・65・66は不明鉄製品、64は刀子、67・68は鉄滓である。

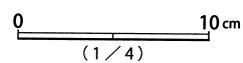
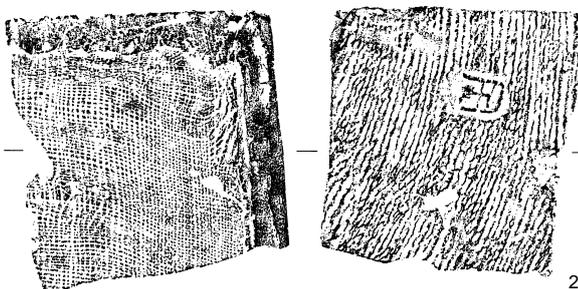
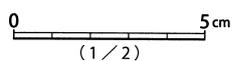
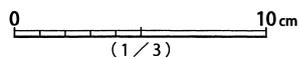
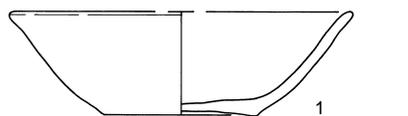
一括(2) (Fig.438～441、 PL.156・180・188・189・195・223・224・228・236・238)

遺構外から出土した遺物の内、注記の認められないものや、判読不能なものについてここで報告する。

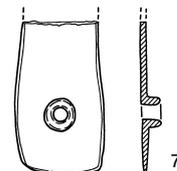
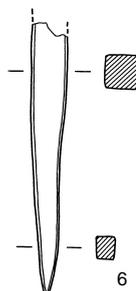
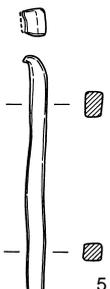
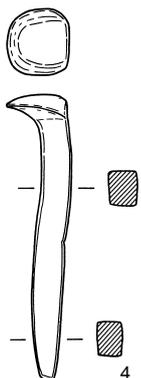
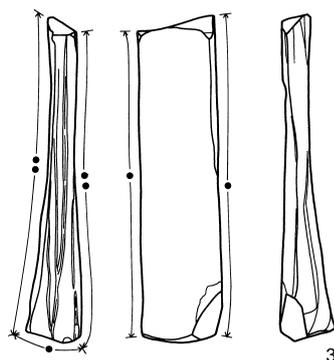
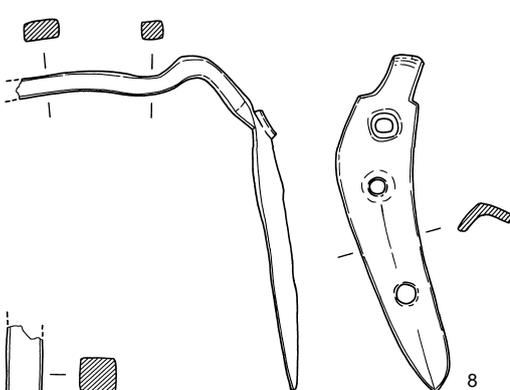
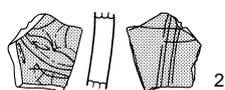
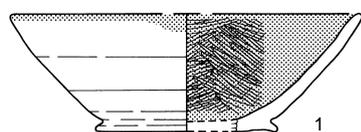
出土遺物 1は土師器杯で、底部外面に墨書が認められるが判読不明、2～5は土師器杯、6は土師器小形杯、7は土師器足高高台付杯、8は黒笹90号窯式とみられる灰釉陶器椀で、9は土師器高台付杯で内面に黒色処理を施す。10は土師器小皿、11はカワラケ小皿、12・13は土師器皿、14は土師器足高高台付皿、15は東海産緑釉陶器椀、16は灰釉陶器椀で黒笹14号窯式、17は同安窯青磁椀、18は型式不明の白磁皿、19は青磁小皿とみられるが型式は不明、20は土師器壺、21は土錘、22は支脚、23・25・28・29

は軒丸瓦、24・26・32は凸面縄目叩きの平瓦で凸面に「周」の押型が認められ、側面及び端面に木杵痕が認められる。27は重圏文軒丸瓦、30は凸面矢羽根状叩きの平瓦、31は凸面斜格子叩きの軒平瓦、33は石棒、34は砥石、35～37は鉄釘、38は棒状鉄製品、39は不明鉄製品で、40は椀形滓である。

Grid G 400



Grid G 500



Grid G 600

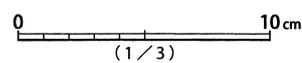
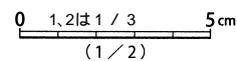
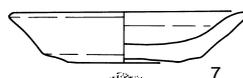
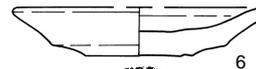
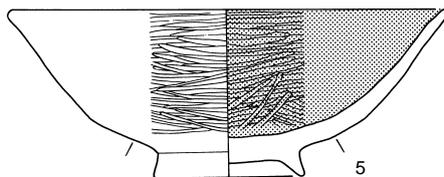
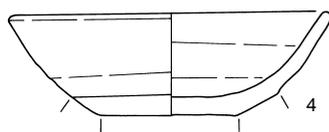
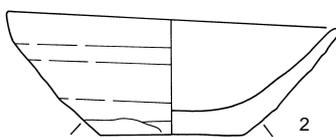


Fig.427 GridG 出土遺物実測図

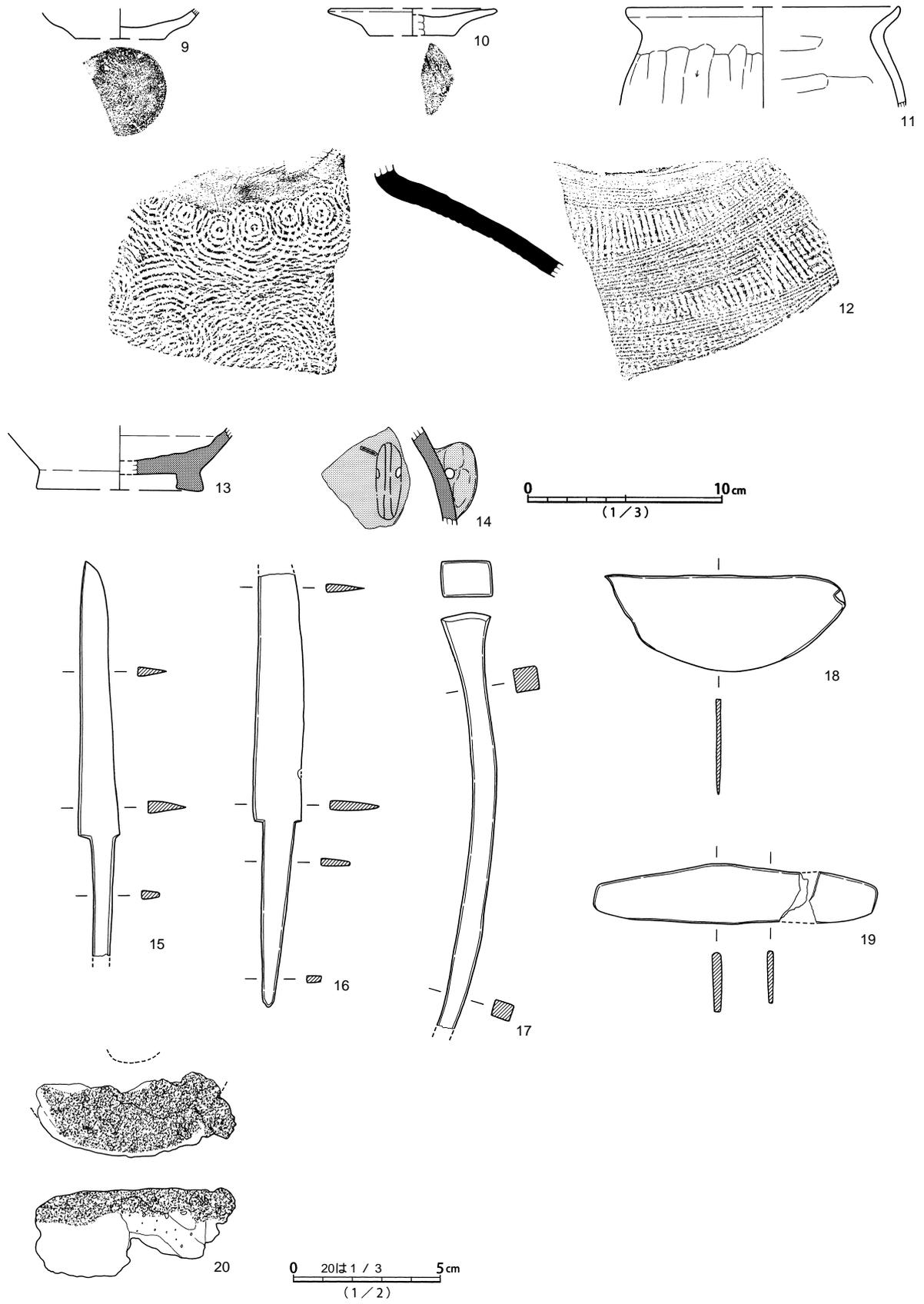
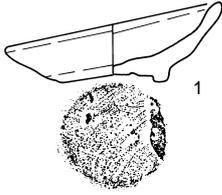
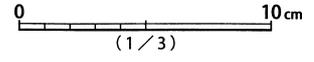
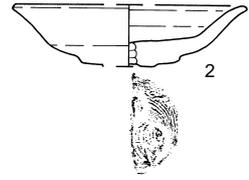
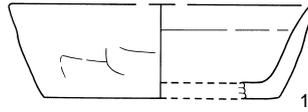


Fig.428 GridG 出土遺物実測図

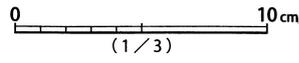
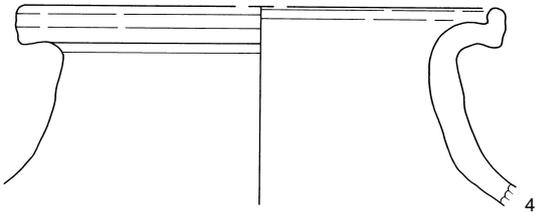
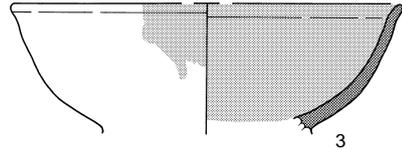
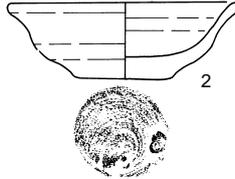
Grid H 300



Grid H 500



Grid H 600



Grid J 100

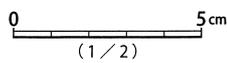
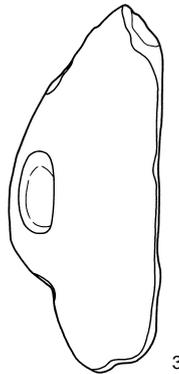
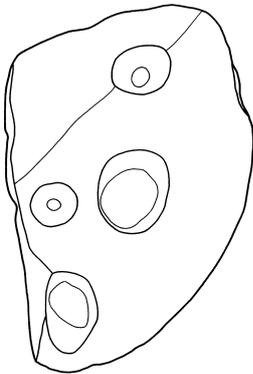
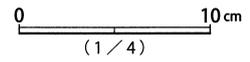
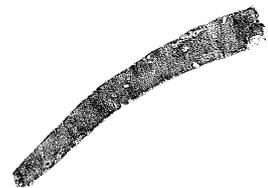
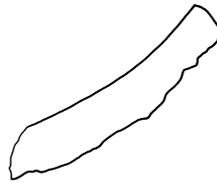
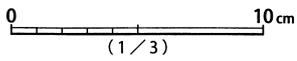
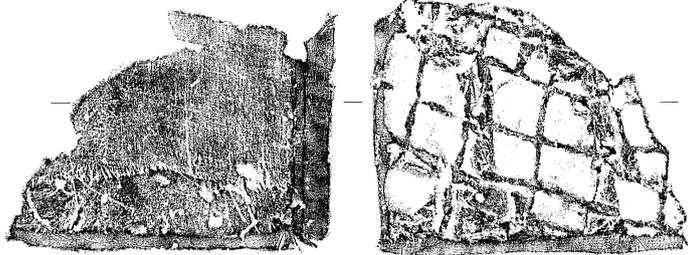
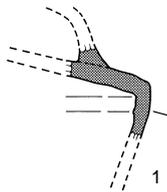
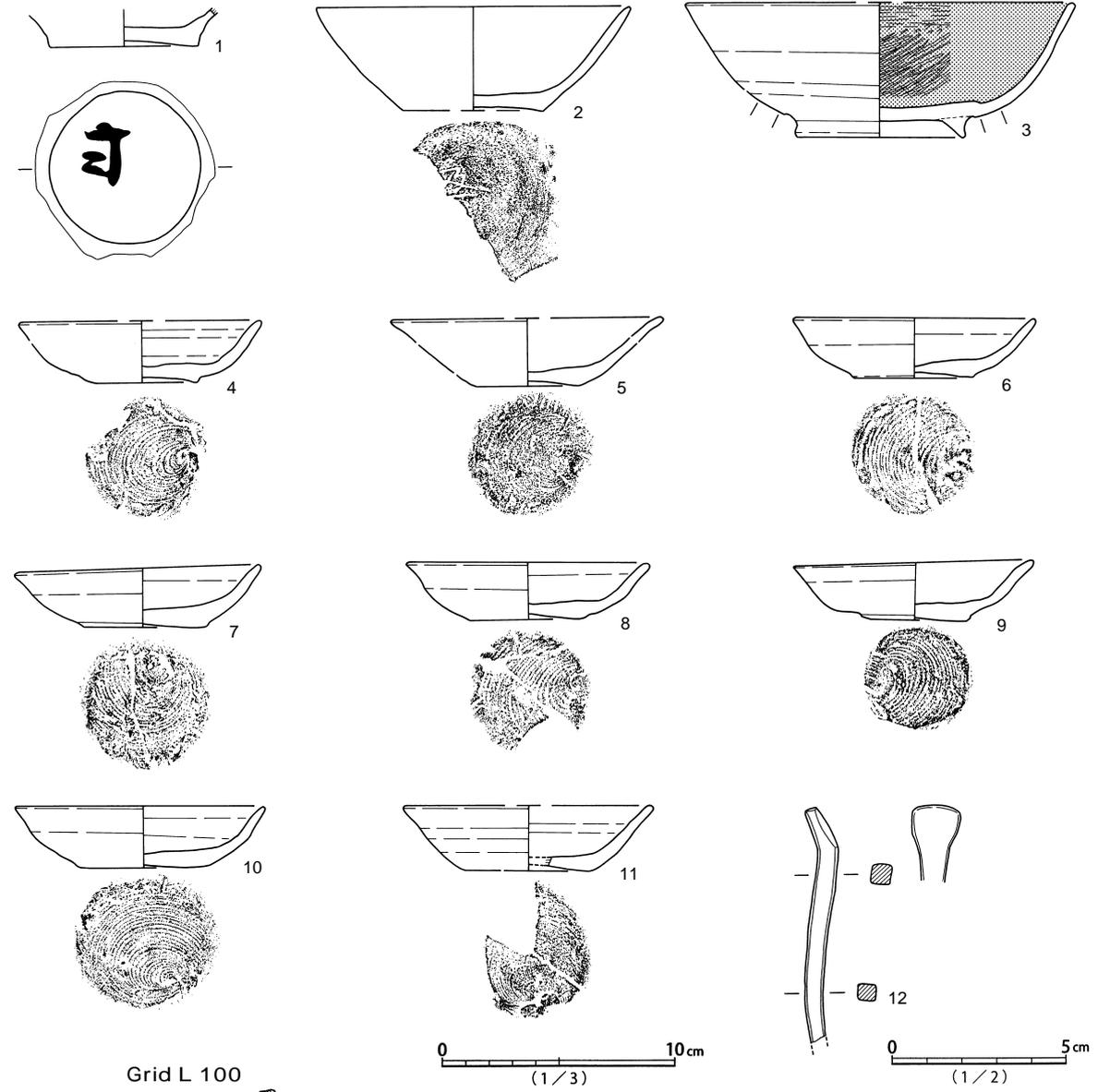


Fig.429 GridH・J 出土遺物実測図

Grid K 100



Grid L 100

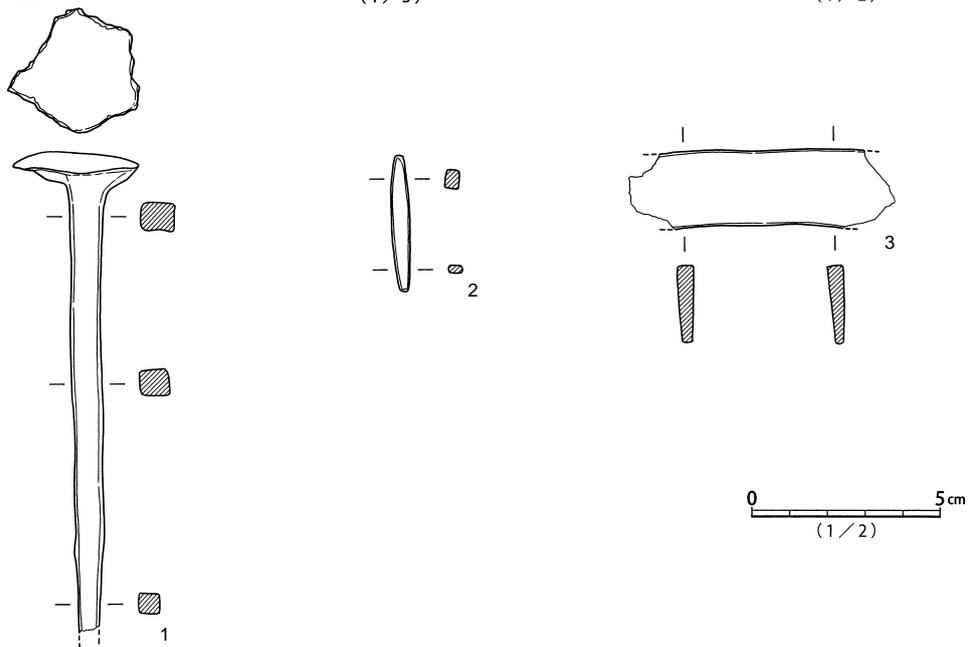
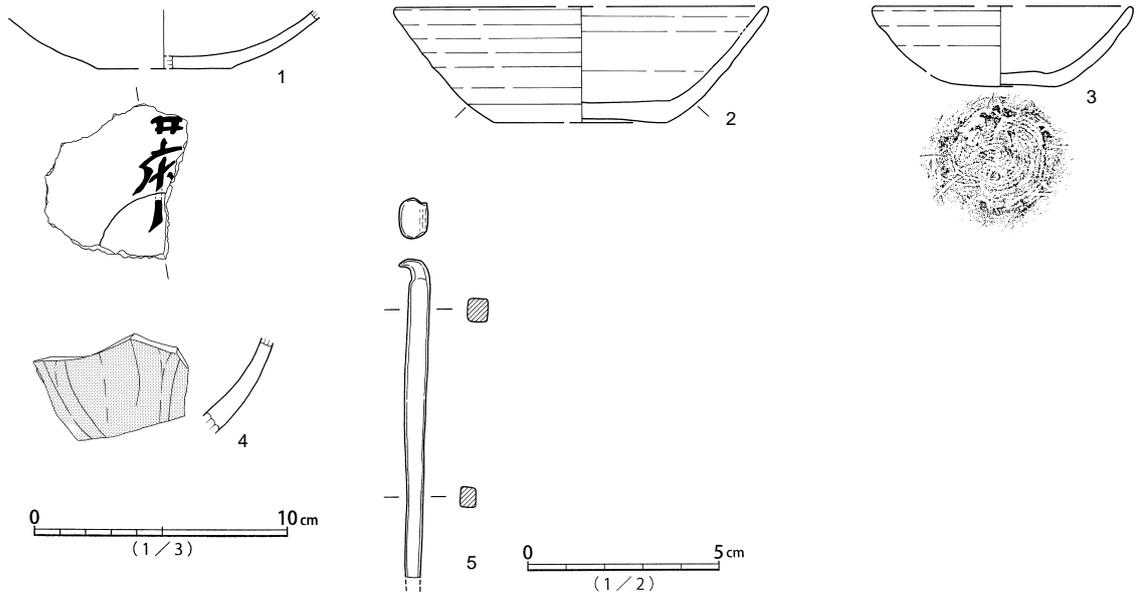


Fig.430 GridK・L 出土遺物実測図

Grid M 100



Grid N 100

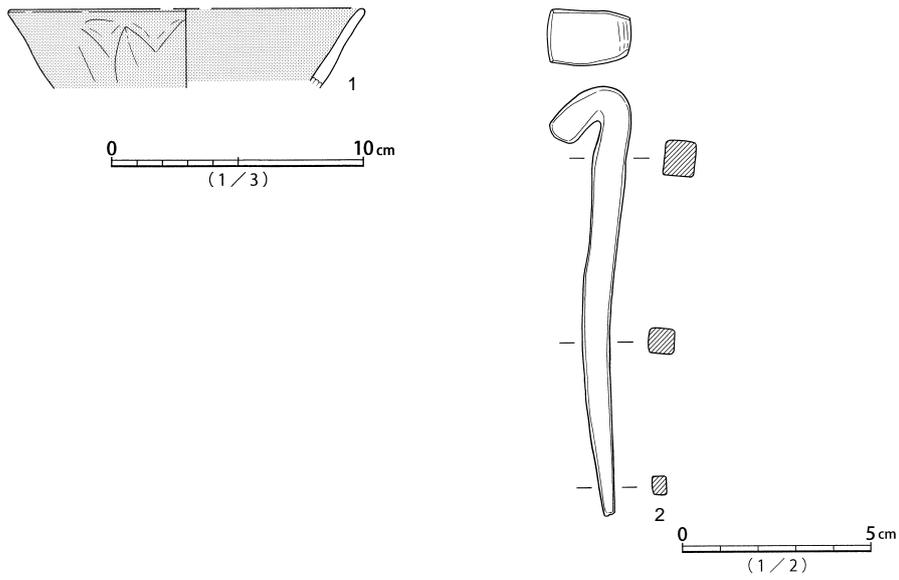


Fig.431 GridM・N 出土遺物実測図

一括(1)

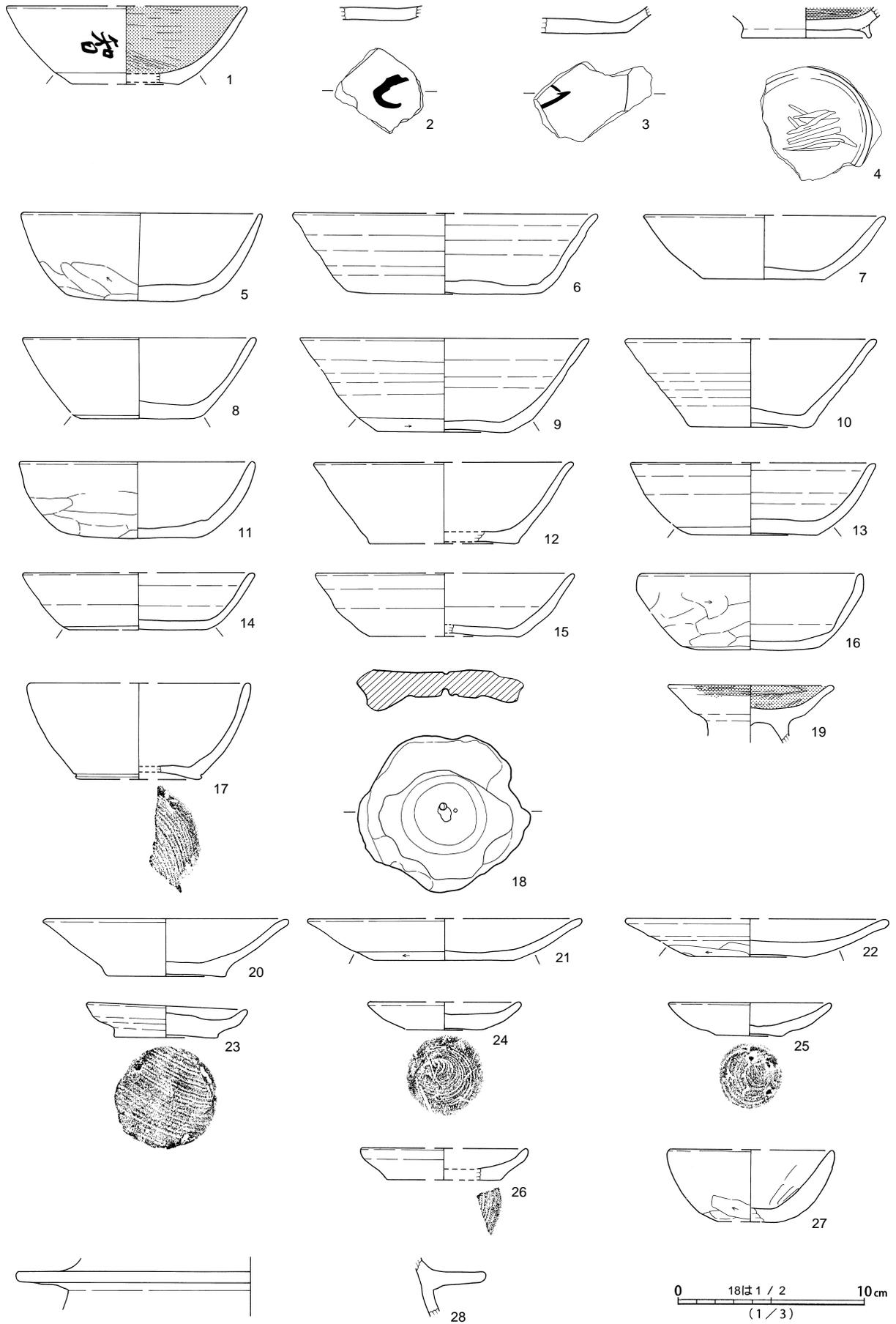


Fig.432 一括出土遺物実測図

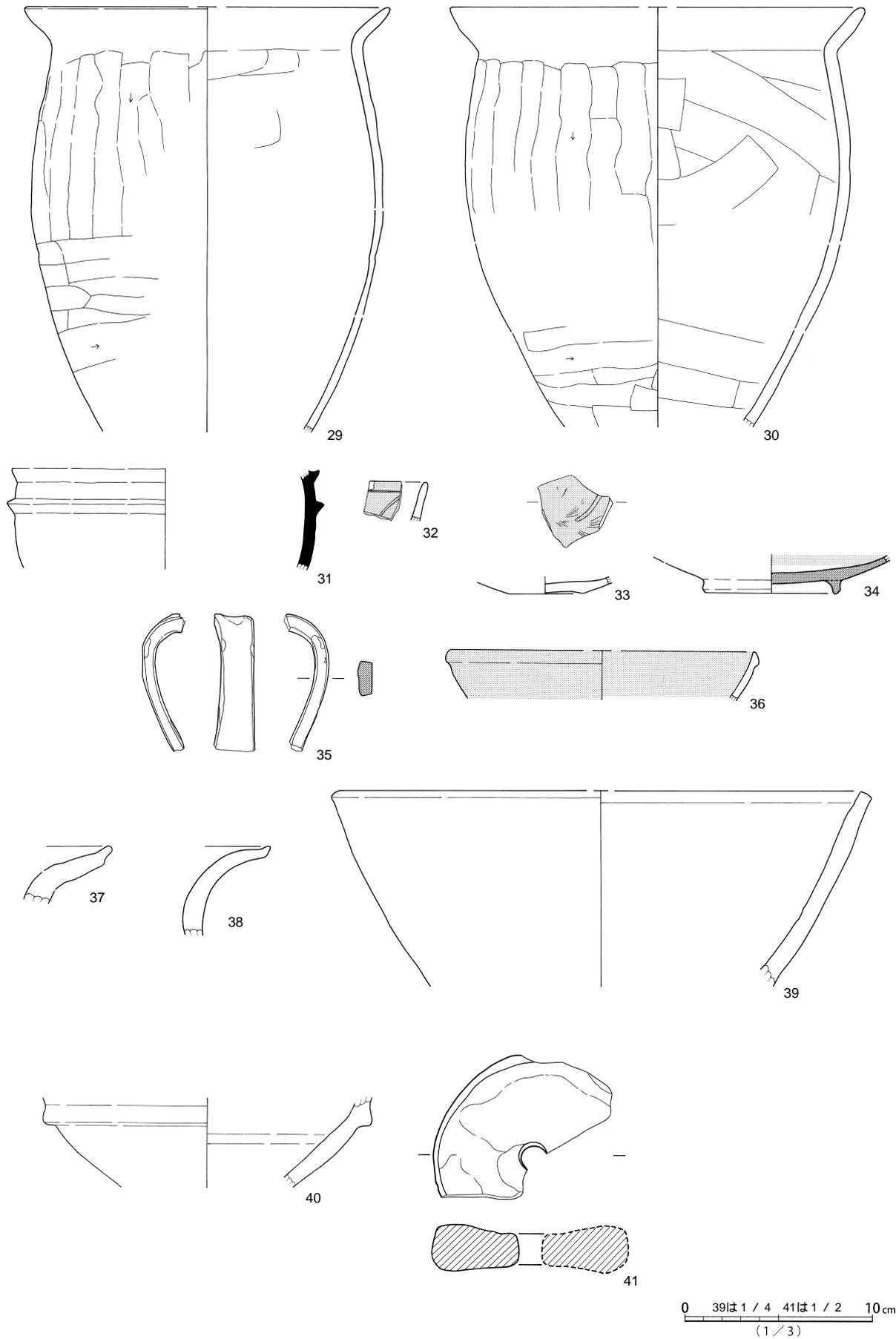


Fig.433 一括出土遺物実測図

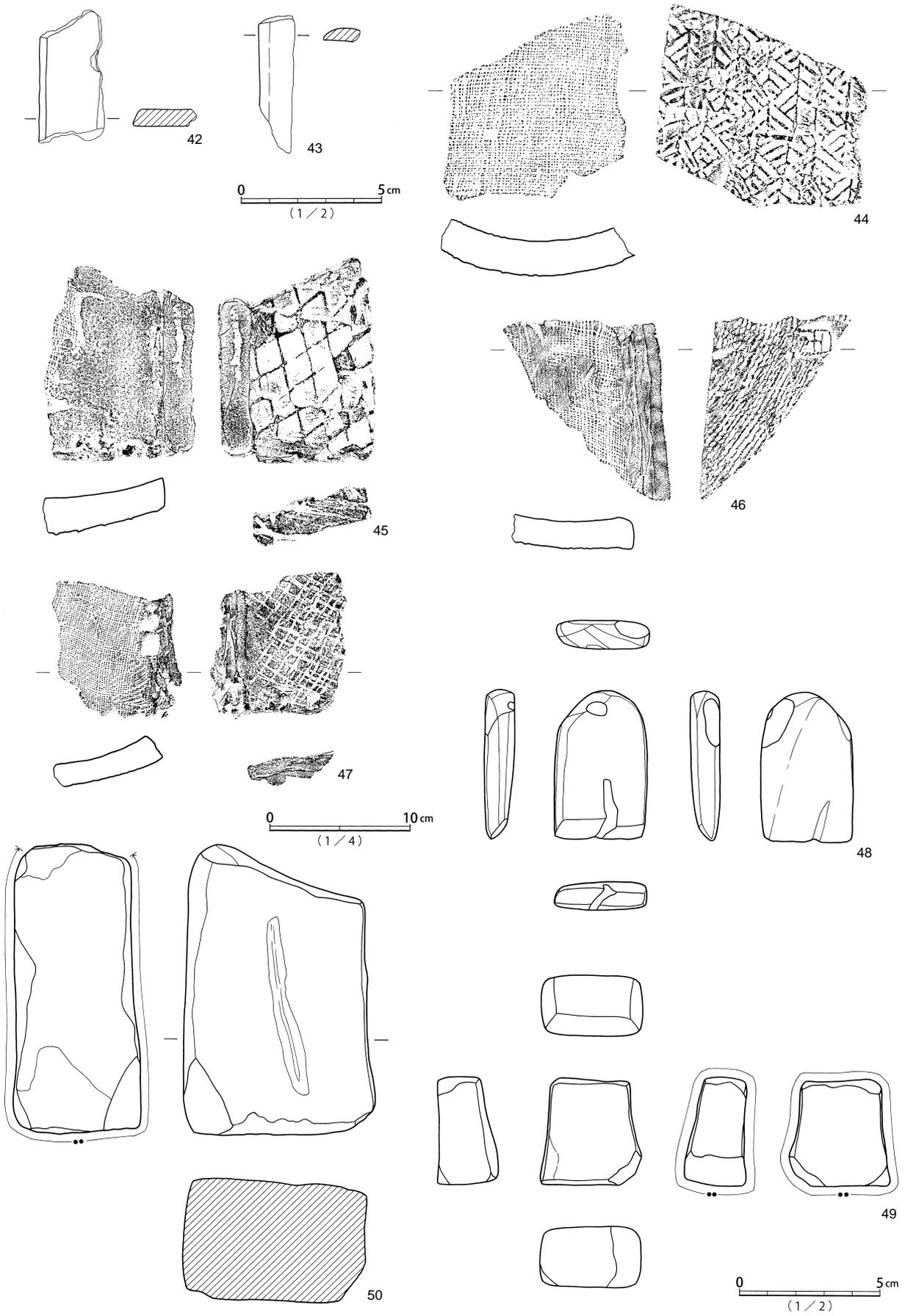
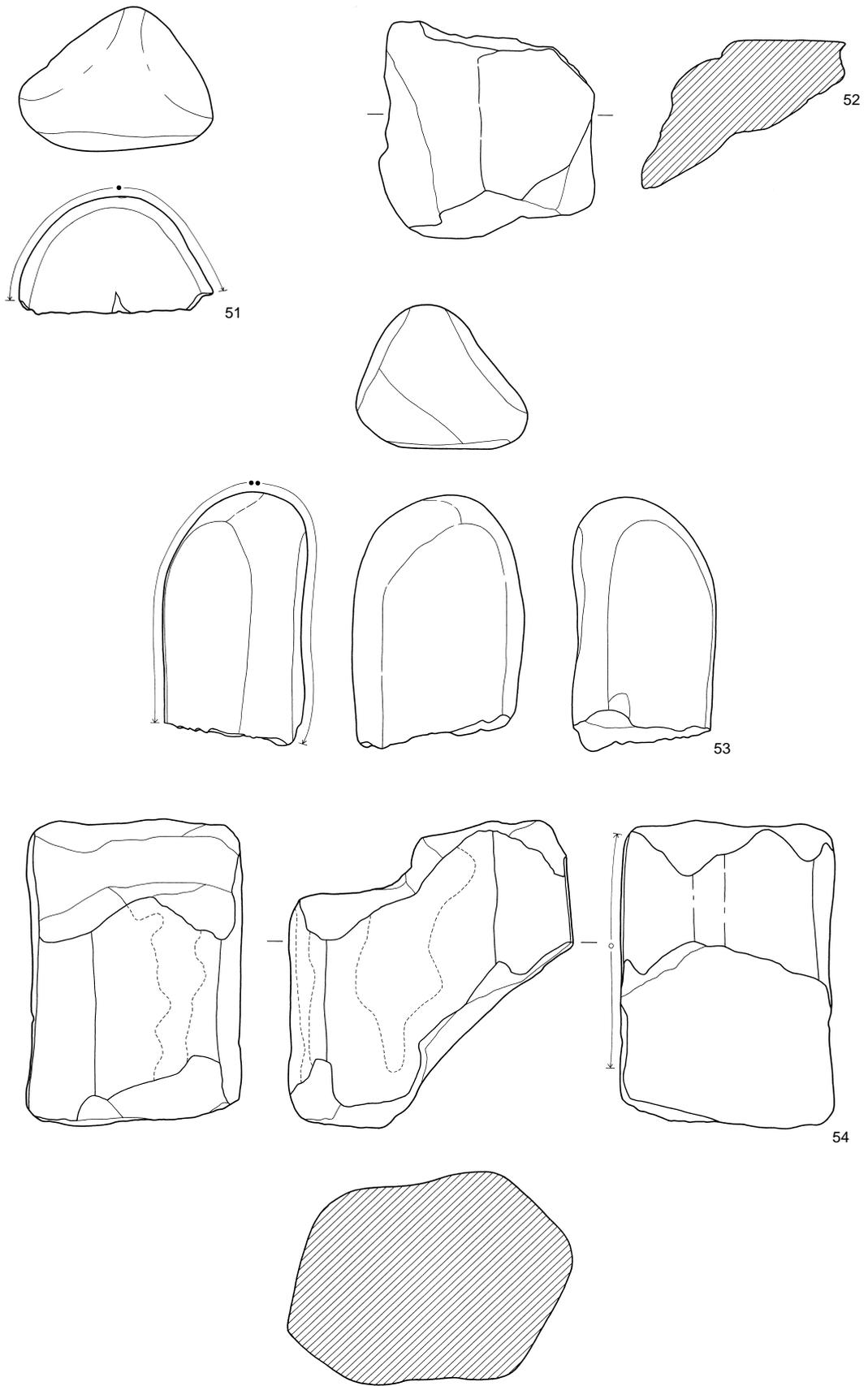


Fig.434 一括出土遺物実測図



0 5cm
(1/2)

Fig.435 一括出土遺物実測図

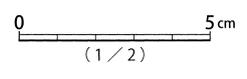
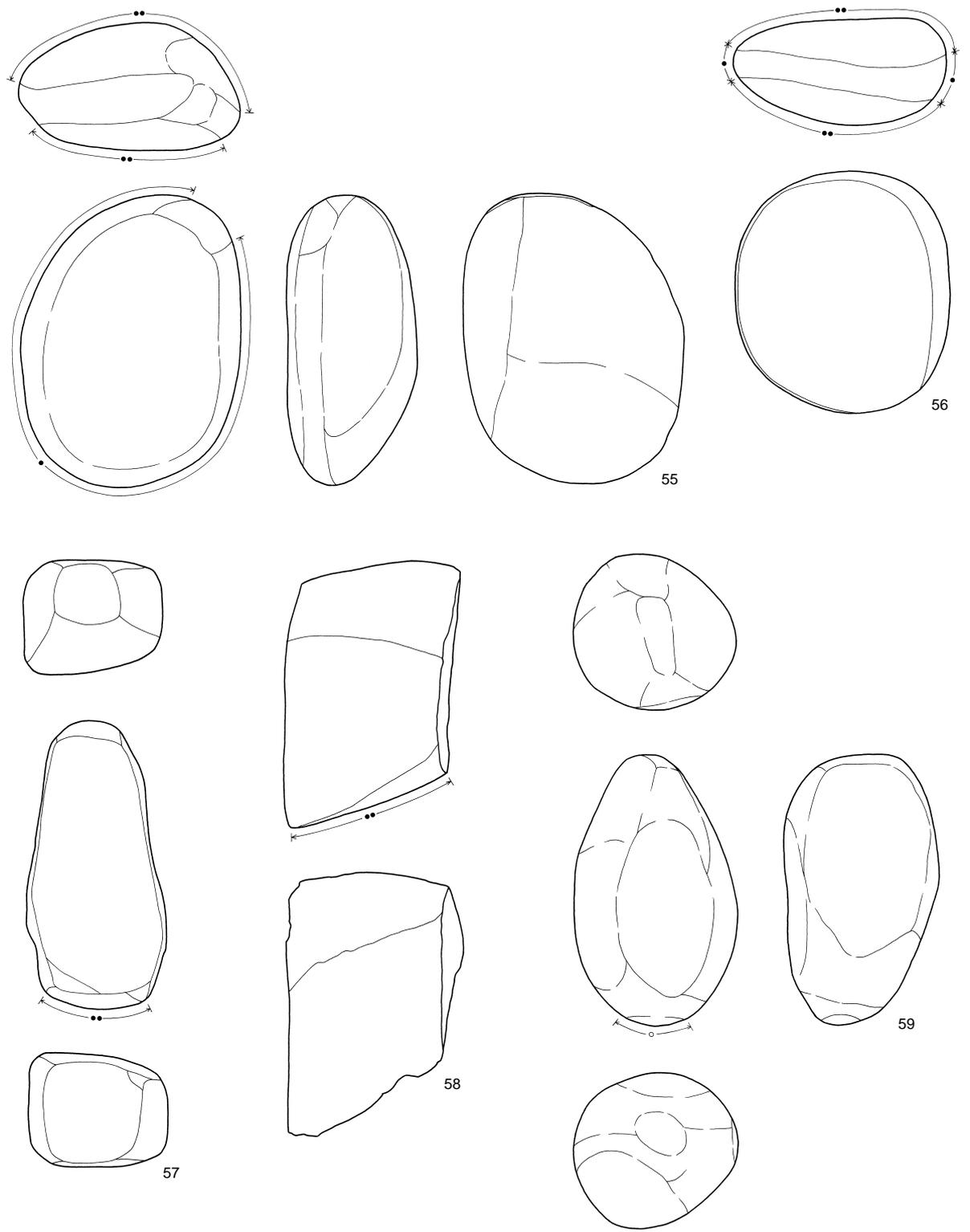


Fig.436 一括出土遺物実測図

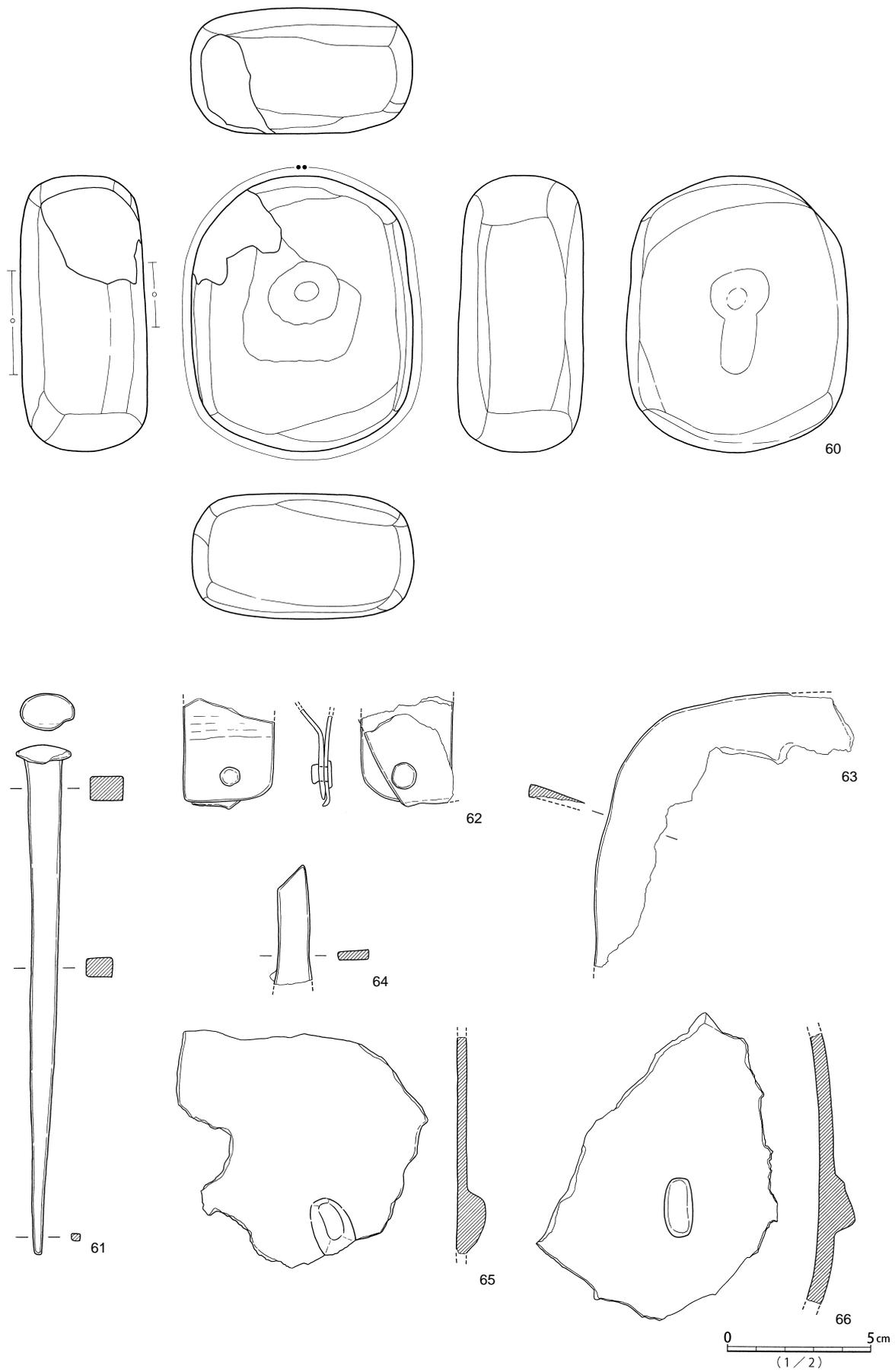


Fig.437 一括出土遺物実測図

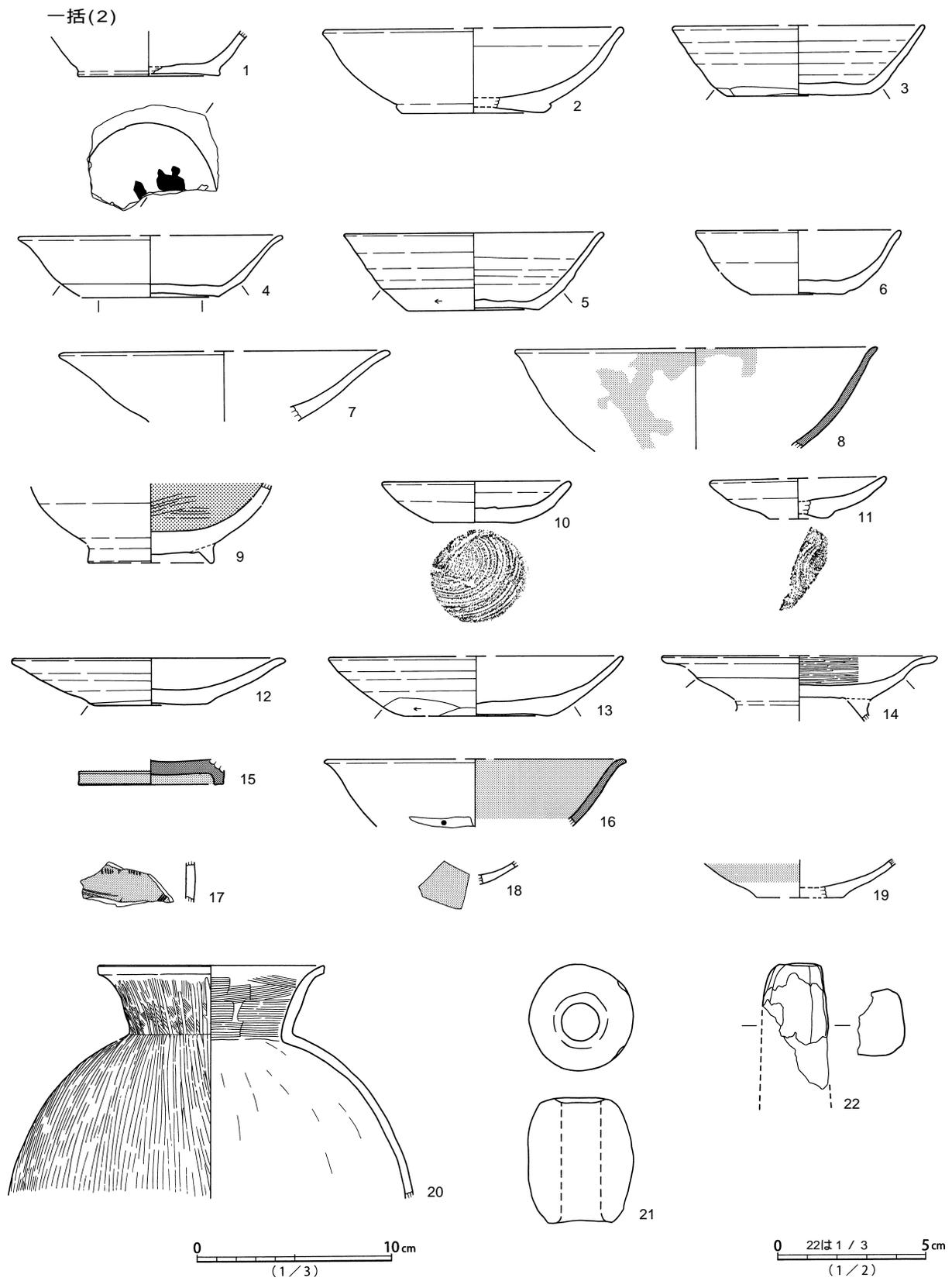


Fig.438 一括出土遺物実測図

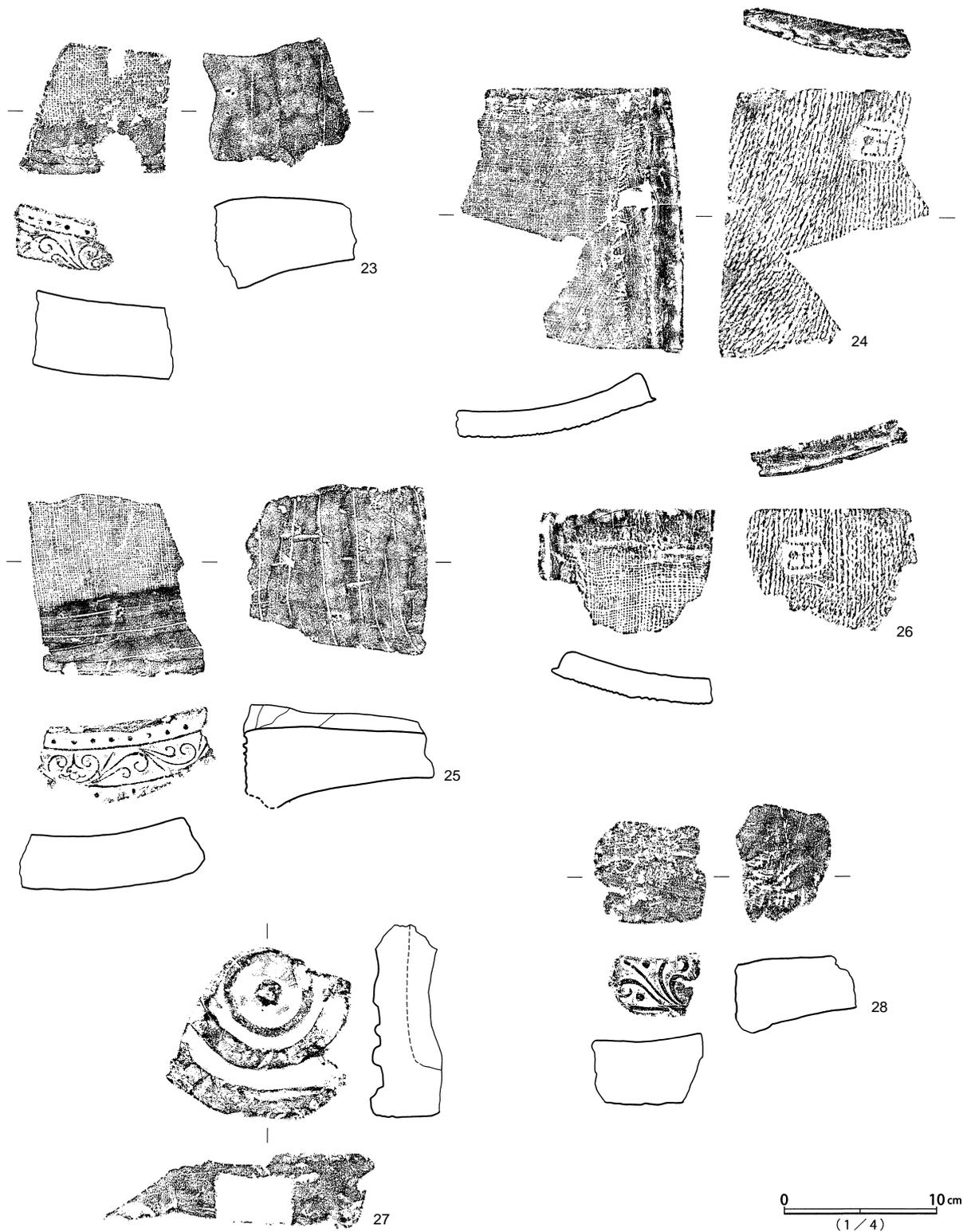


Fig.439 一括出土遺物実測図

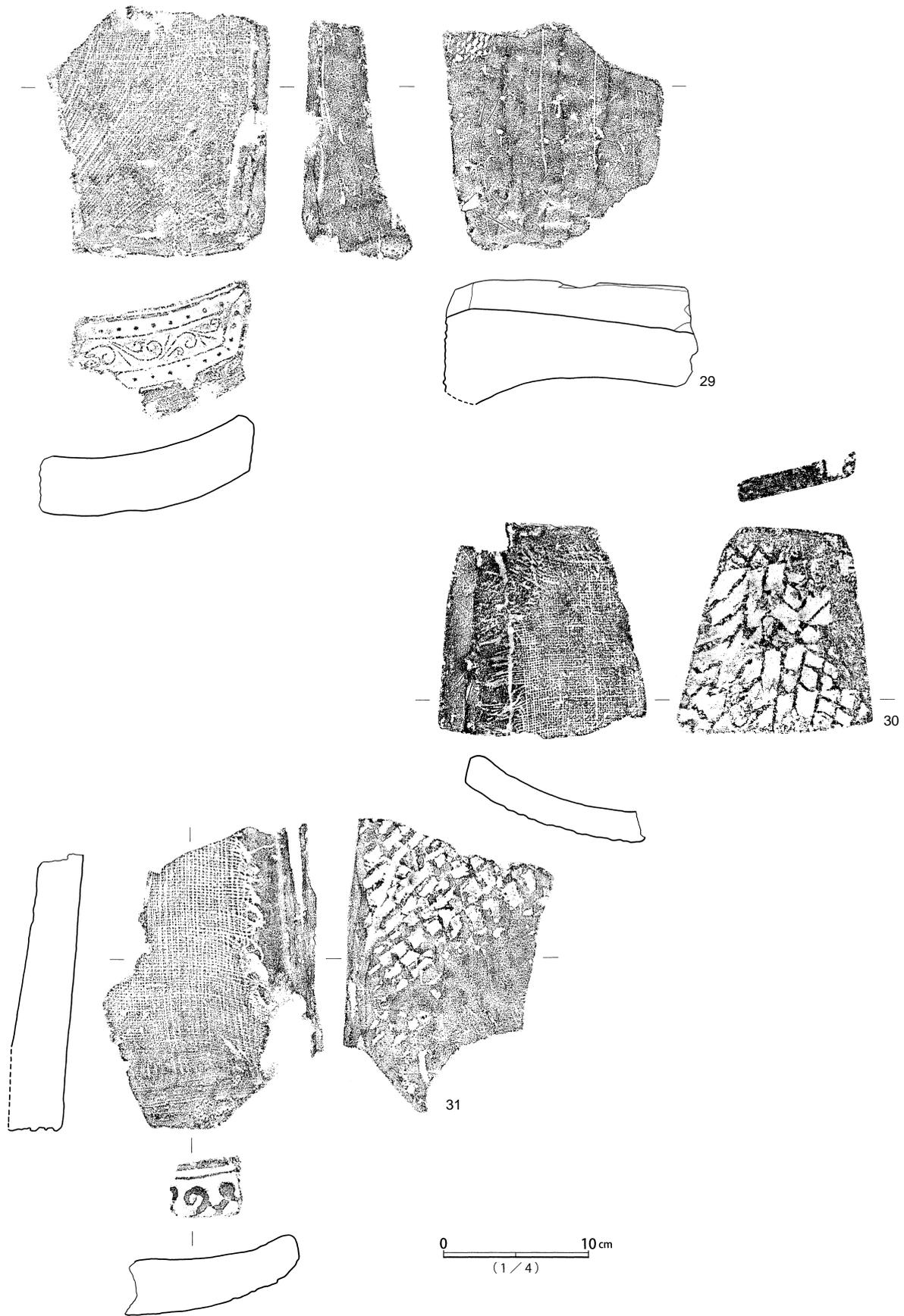


Fig.440 一括出土遺物実測図

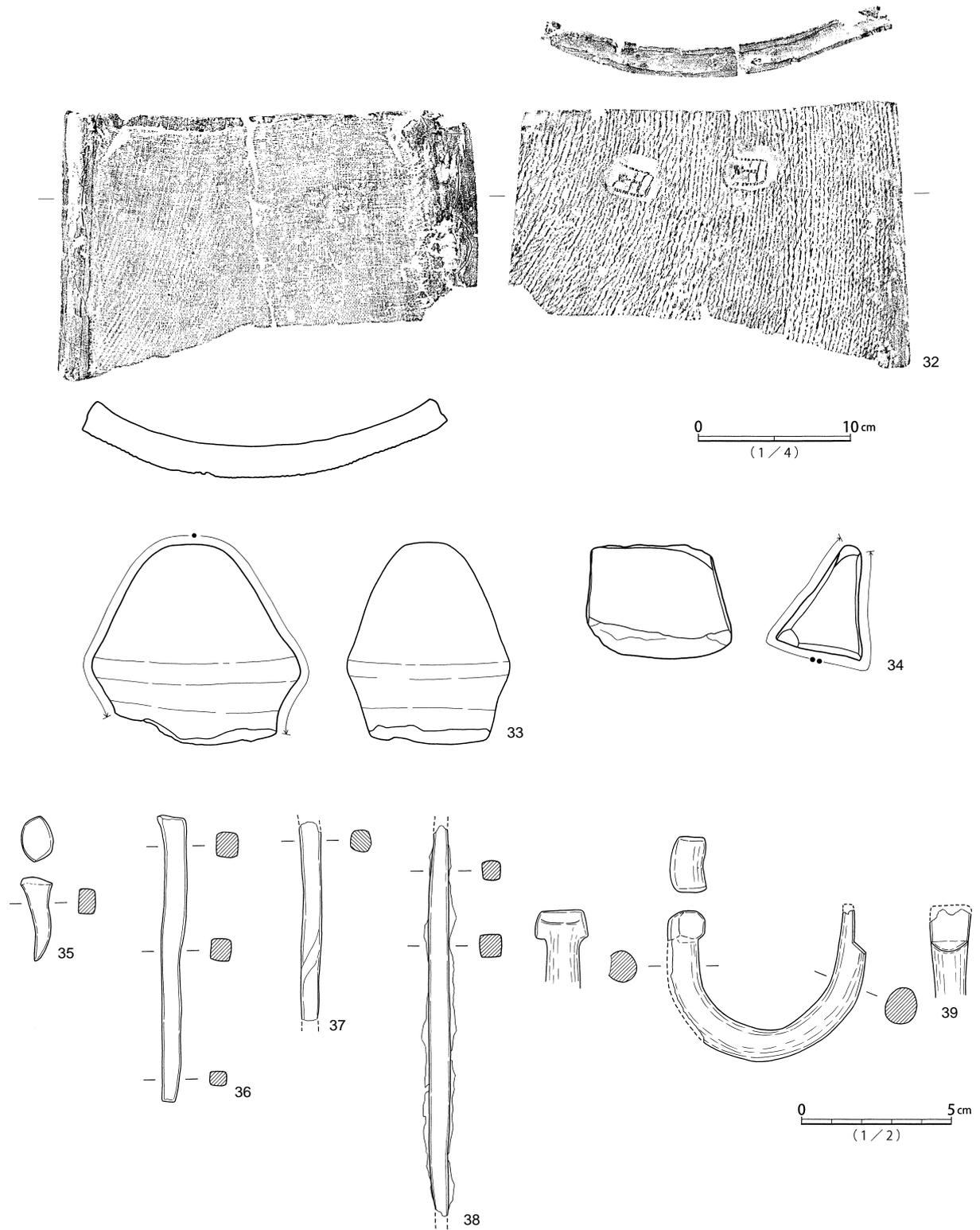


Fig.441 一括出土遺物実測図

第2節 荒久遺跡 C 地点

遺構と遺物

SI-01 (Fig.444 ~ 446、 PL.239・281・296・308・313・329・330・332)

遺構 SI-01は IT76に位置する。SB-3と重複する。平面形は3.86m × 3.86mの方形を呈する。遺構確認面における面積は14.3m²、遺構確認面から床面までは0.26mを測る。主軸方位はN-4°-E。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は先端部が失われており、断面形状は不明であるが、幅20cmを測る。燃烧部は壁ラインより内側に位置するとみられる。貯蔵穴はP5もしくはP6とみられる。支柱穴はP1～P4で、竪穴に対し規則的に配置されている。Pitの深さは、P1は38cm、P2は22cm、P3は31cm、P4は30cm、P5は21cm、P6は16cmを測る。周溝はカマドの直下で不明なほかは全周する。

出土遺物 土器3,428g 石器607g が出土している。1は土師器杯で、体部外面及び底部外面に墨書「浄」が認められる。2～5は土師器杯、6は土師器皿、7は土師器大形椀、8・9は土師器甕、10は千葉産の須恵器甕、11は須恵器甕、12は灰釉陶器甕、13は丸瓦、14は砥石、15は磨石、16・17は鉄製釘、18は不明鉄製品、19は鉄製門金具、20は鉄製燧金、21は棒状鉄製品、22は鉄滓である。

SI-02 (Fig.447 ~ 449、 PL.240・281・296・312 ~ 314・330)

遺構 SI-02は IT95に位置する。遺構の重複は無い。平面形は4.52m × 4.10mの方形を呈する。遺構確認面における面積は18.4m²、遺構確認面から床面までは0.26mを測る。主軸方位はN-6°-W。カマドは北壁に位置する。煙道部は先端部が図化されていないが、遺存範囲で幅192cmを測る。燃烧部は壁ラインより内側に位置するものとみられる。貯蔵穴は認められない。支柱穴はP1～P4で竪穴に対し規則的に配置されているほか、四隅にもPitを伴っている。Pitの深さは、P1は60cm、P2は58cm、P3は55cm、P4は46cm、P5は54cm、P6は60cm、P7は35cm、P8は74cm、P9は24cm、P10は20cm、P11は16cmを測る。周溝はカマド直下で不明なほかは、カマドのある北壁を除いて回っている。

出土遺物 土器3,074g が出土している。1～3は土師器杯、4は土師器皿、5は土師器甕、6は須恵器甕、7は凸面縄目叩きの平瓦で、凸面に押型「周」が認められる。8～10は丸瓦、11が鉄製曲刃鎌、12は棒状鉄製品、13が鉄製釘である。

SI-03 (Fig.450 ~ 454、 PL.240 ~ 242・281・296・308・312・314・315)

遺構 SI-03は DT13に位置する。SI-04・05、SK-01と重複する。遺構の重複により平面プランは判然としない。平面形は(2.22) m × (2.14) mの方形を呈する。遺構確認面における面積は(4.5) m²、遺構確認面から床面までは0.25mを測る。主軸方位はN-18°-E。床面の状況は記録が無い。カマドは北東隅に寄った北壁に位置する。煙道部は長さ116cmを測り、先端に向けて上方に傾斜し、先端部でピット状の掘り込みを伴う。燃烧部は壁ラインの内側に位置するとみられる。貯蔵穴・支柱穴は認められない。周溝は一部遺存する。

出土遺物 土器14,659g(SI-03・04で120g)が出土している。SI-04との遺物に混乱がみられる。1は土師器杯で、底部外面に墨書「益」が認められる。2は土師器杯で、底部外面に墨書「可カ」が認められる。3は土師器杯で、底部内面に線刻「」が認められる。4は土師器杯で、底部外面に墨書「益カ」部分が認められる。5～17は土師器杯、18は土師器小形杯、19は土師器高杯、20～22は土師器椀、23～26は土師器皿、27は土師器甕、29～33は土師器甕、28は土師器小形甕、34は須恵器甕、35・37・38は千葉産の須恵器甕、36は千葉産の須恵器甕で、底部外面にヘラガキ「×」が認められる。39は灰釉陶器椀、40は